近代諸家集

四

例言

一、本卷は近代諸家集（四）として、香川景樹の桂園一枝同拾遺、熊谷直好の浦の汐貝、木下幸文の亮々遺稿、清水濱臣の泊洦舍集、橘守部歌集、及び海野遊翁の柳園家集を收めました。

一、本卷は山岸徳平が擔當しました。

一、桂園一枝は文政十一年板をもととし、明治二十四年の反刻を參照しました。註釋には中川自休著於〻奴散（寫本）、鈴木忠孝の難桂園一枝を參考としました。又拾遺は嘉永二年板をとりました。註釋には小林歌城の桂園一枝拾遺評、仲田顯忠の桂園一枝拾遺再評等を參考しました。

一、浦の汐貝は弘化二年板、亮々遺稿は續歌學全書、泊洦舍集は文政十二年板、守部歌集は嘉永七年板の橘冬照編をとりました。

一、柳園家集は嘉永三年板により、註釋には柳園家集難解を參考としました。

校註 國歌大系 第十八卷 目次

柳園家集……海野遊翁……八一八

解題

目次終

解題

桂園一枝　附拾遺

香川景樹はもと因幡國鳥取の人、父は林善太兵衞と言ひ、鳥取藩の徒士であつた。景樹は明和五年(一七六八)四月十日其の二男として生まれたが、少時の事蹟は明らかにし難い。一說に、鳥取の荒井某の二男と言ふは誤である。景樹もカゲシゲなれど、人も自らもカゲキと言つた。

後には清水貞固に就いて和歌を學んだ。當時既に嶄然頭角を現はし、十五歲の時百人一首の註釋を試みて其の師貞固に示した事もある。十八歲の頃京師に出で、伊藤仁齋の門にも出入した。桂園一枝の雜上に、

むけに若き時、物ならひに都へ上らむとて、忍びに故郷を出でて、下の渡といふにかゝりけるに、雪解の水いと高く溢れて舟も渡るべければ、河の遠近に綱引き渡してそれを手ぐりもて岸に著くなりけり。

繼うき瀬渡らむ末のあやふさもかけてぞ思ふ今日の川波

とあるに據れば、春の初め雪解の水の溢れる頃、忍んで故郷を出た事か知られる。一說に、父母

の許諾を受けたと言ふは恐らく事實では無からう。それは同じく桂園一枝の雜下に見える歌、

いと若き時なりけむ、國を離れて、五條あたりの伏屋にかくれ住みて、物學びしてありけるを聞きつけて、故郷なる友の許より、さてあるべきかは、早く歸り來てなど言ひおこせける時よめる

侘びて世にふるやの軒の繩すだれ朽ちはつるまでかゝるべしやは

に據つても明らかである。又この歌によれば、忍んで故郷を出たのは青雲の志を抱いて居た爲である事も知られる。

或說に言ふ、景樹は、同藩士瀧川某の女で、松田秀明の養女たりし包子との關係が現はれたので、逸早く郷を逃れたとも言ふ。戀の歌の末なる題不知の歌の中に、

ぬれぬとは思ひし事よ人言のしげ木がもとに木がくれしより

瀧の上のしめ野に咲けるみそ萩のそのみそか事いつか忘れむ

とあるのは其れを語つて居ると。

かくて京に出た後は、當座の生計にと按摩の術を學び、晝は讀書し、夜は笛を吹いて街頭を彷徨した事もある。然し京都に居ては到底名をなすを得ないと覺悟して、飄然と難波に向つて去つた。途上、伏見の一茶亭に休んで、其處の主人に境遇を語つて痛く同情せられた。乃ち主人は京

都の建仁寺附近に一家を借りて、景樹を扶持したと傳へられて居る。

この後、鷹司家に仕へ、次いで西洞院家に仕へて、遂に香川景柄の養子となつたと言ふ。時に寛政九年(二四五七)彼が三十歳の時であつた。

景柄は梅月堂と號して和歌は二條派の宗匠であつた。その歌學は香川宣阿によつて起されて居る。宣阿は清水谷實業の門に入つて一家を起し、梅月堂を始めて稱し、頓阿に私淑し、地下の宗匠として著名であつた。其の子景新、景新の子景平、景平の子景柄と言ひ、四代よく地下の宗匠を續けた。景柄は又黄中と號し、徳大寺家に仕へて正六位上、陸奥守に任ぜられた。

景樹が黄中の養子となつたのが、恐らく三十一歳の寛政十年(二四五八)頃らしい事は、其の弟子熊谷直好の古今正義追考の初めの記述に據つて察せられる。卽ち、

おのれ、田舍に生ひ立ち、友達に進められ、僅かに歌の志ありて、初めて師を賴み聞えまゐらせしは、十六歳の時なり。師は今の家嗣ぎ給ひて間も無き程にて三十一歳にやおはしけむ。

と記して居る。これから其の才名を慕つて門下に集まる人も多かつた。加ふるに妙法院宮からは今小路行章を使者として毎月の集會に御題を賜はる樣になつた。この集會には小澤蘆菴や伴蒿蹊等の如きを始め、名士の集まる者も少なくなかつた。

其の後、彼の歌に對する思想には一變化があつた。熊谷直好の古今集正義追考序には次の如く述べて居る。

師も始めの程は異なる考も少なく、其の家に傳へ來ぬる事ども、世と等しなみのさとしなりしが、其の頃はひに彼の古學流の書ども、つぎ／＼上木もなりて、世の中、聽を改むる樣に成り行き、師も半ばはこれを信じて、己等にも言ひ示し給ふ事なりき。さて年月に志深う入り立ち給ふに及びて、やゝ其の非なる事も著しく思ひ決まりて、今のやうに教へ給へるは、四十より五十の程なりけむ。

景樹の歌論等も四十、五十の頃から鍛へられたものの樣に見える。即ち技巧を退けて自然に詠む、所謂、自然論を生じたのであつた。それに對しては世評も少なくなかつたが、養父景柄の意見とも相容れなかつた。二條派の繁雜な規定を傳承する梅月堂の風と、景樹の風の衝突する事は主義の差で當然の經程である。文化元年(二四六四)景樹は遂に離縁して香川家を去つた。

垂乳根の庭の教へに違ふとも誠に向ふ敷島の道

は當時の述懷である。この外にも、景樹が家政に餘り無頓着であつた事も離縁の遠因であらうと思はれる。

離縁と共に當然、官位を解かるべきであつたが、德大寺家の計らひにより、梅月堂の主として

別に一家を立てたものと見られて居た。これは彼が三十七歳卽ち文化元年(二四六四)頃である。

其の後彼は孤立無援、あらゆる世の誹謗と論難の間に立つて敢然と自己の歌道を大成した。新學異見や百首異見は、何れもこの頃の著述である。ついで文政元年(二四七八)二月には江戸に出た。其の目的は恐らく桂園の歌風を江戸にも盛んにしようと考へたからであらうが、然し江戸の今戸邊の旅館に逗留した頃には、反對派の迫害をも受けたらしい。同年十一月二十三日には、伊勢、尾張へと志して都を出た。中空日記は其の時のものである。

彼は元來蒲柳の質であつたが、晩年は殊に生活苦と病苦に苦しめられた。百首異見の序文には文化四年頃から「六とせ許り病にのみ煩ひ給ひて」と言ひ、またぬ青葉にも自ら「物のけめく病にかゝりて、日頃に成りけり」など見えて居る。其の間に子弟に教へ、土佐日記創見や古今集正義を著はした。殊に古今集正義には深く心を入れ、その序の註に至つては幾千度も書き改め、考へ改めた事を、直好は古今集正義序註追考に記して居る。

かくて天保十四年(二五〇三)三月二十日、

一筋に命待つ間の春の日はいよ〳〵長きものにぞありける

の辭世を殘して白玉樓中の人となつた。時に年七十六。香川家累代の墓地たる東寺町の聞名寺に

葬つた。其の時は陸奥介であつた。德大寺家の家錄には次の記載があるから序に揭げて置く。

景樹入道、前陸奥介、平景柄男

明和五年四月十日　誕生

享和三年二月二十三日　敍從六位下　三十六

同　任長門介

文化八年十二月二十一日　敍從六位上　四十四

文政二年八月十九日　敍正六位下　五十二

天保十二年六月十四日　敍從五位下　七十四

同　年十月六日　遷肥後守

同　十四年三月二十日　卒　七十六

後に吉田家から桂園靈神の號を贈られた。

景樹の歌論は、新學異見や古今集正義總論を始め、門人の集錄した、東塢亭聞書、桂園遺文、隨所師說、麓の道などによつて知る事が出來る。眞淵の擬古に反對して今の世の詞と調とを用ゐるよと主張した。即ち自然に從つて感情を思ふ儘に述べるを主眼とした。古今集正義總論に、

大和歌は、もとより性情を述ぶるの外無く、思慮に渉るべきものならねば、其の言、はかなく、其の心をさなくして、云ふべき義もなく聞くべきの理ある事無けむ。

しかも義理なきものは、實に義理なきものにあらず、性情の自然に出でて其の義精しく、其の理深くして人智の測り識るべき限りならねば、我より暫く義理なしと言ふのみ。

と述べてゐるは、彼の歌論の根柢である。又、新學異見には、和歌の生命として「調べ」の說を次の如く述べて居る。

誠實より成れる歌は、やがて天地の調べにして、空吹く風の物につきて其の聲をなすが如く、……百に千に變態を盡すと雖も、皆意ありて然するにはあらず。……彼の言の葉もかくの如し。短きは短歌となり、長きは長歌となり、見るもの聞くもののまに〱其の狀貌あらはれざる事能はず。これやがて情の備はる形なり。さる中に自ら調なりて巧めるが如く、飾れるが如く、其の奇妙たぐふべき物無きに至るは、天地の中に此の誠より貴精しき物無く、この誠より純美なければなり。

又、隨所師說に見える、信州の須坂なる丸山辰政が詠草に記した文中には、

調第一に候。調は即ち姿なり。姿はうるはしく上品なる、歌の歌たる本體に候。上品に、體あてはかに仕立候へは、云はむ心まで打匂ひことよく聞ゆるものに候。

と述べて居る。

「調べ」は即ち思想と表現の形式が、殊更に技巧を用ゐる事なしに一致することを言つた説である。其の點から古今集の歌風を庶幾して、貫之を歌聖と心醉してしまつた。

この説は擬古派の歌人に反抗したものであるが、極端に流れて全然技巧を排斥し、又言語に雅俗なしと主張したのは中庸を失つた説であつた。

要するに彼は天性の歌人である。抒情、抒景共に優れたものを殘して居るが、歌論としては拙い事は否定出來なかつた。

又彼は鎌倉の誠拙和尚に就いて禪をやつた事も注意すべき點であらう。集中雜歌上にも、

誠拙禪師の初月忌に歌よみてたむけける中に、

何ぞこのかたみ筥にも空しくてとふらふ物を殘しおきけむ

など見え、東路の記の三月四日の條には、

沼津の驛に宿る、これより鎌倉なる誠拙大徳をとぶらひ給はむ心構へして、明日は疾くよりなど言ふ程に大徳、

今日しも俄に事ありて、此の驛なる油屋何がしが家に出來ませるといふ。

などの記載がある。又刈かや集下にも誠拙の事が見える。若し景樹の歌に禪味があるとすれば、

殆んど皆誠拙大徳に負ふものであらう。

彼の弟子中の巨擘は熊谷直好で、これに次ぐものは木下幸文と桃澤夢宅とである。この外に高橋殘夢、菅沼斐雄、赤尾可官、兒山紀成、渡忠秋、穗井田忠友、八田知紀、柳原安子等がある。又、山本清樹は桂園一枝の序を記した人で、龜園と號し、桂門の最も早い頃の弟子であつた。

彼の集は、其の序文に「心地俄に賴もしげなく、みづからも今はと思ひ取り給へる時」に、門人が日頃の詠の散佚を慮つて集めたものである。其の名も藻屑か朽葉かが似あはしいとあつたのを、山本清樹が桂園一枝と名づけて、文政十一年(二四八八)に世に出したものである。

拾遺は、本集の世に出た後、更に側に在つた門人等が書き留めたものの中、僅かに二卷許りを後集の如くにして置いた。景樹の歿後も師の心を計りかねて、嘉永二年(二五〇九)まで七年の間は草稿の儘であつた。それを同年の秋に、その子景恆にも計り、又洩れたものをも更に加へて二卷とし、拾遺としたのである。

次に其の歌に就いて見よう。

一般に雄渾莊嚴なものは無いが、優麗雅馴な詠の多い事は其の歌論から見ても當然であらう。

山もとに立てる煙も青柳の靡く方にと靡く春かな

賤の男がかへす垣根の小山田にまけるが如く散る櫻かな

大堰川早瀬を下す筏士も長閑に見ゆる花の影かな

大空の緑に靡く白雲のまがはぬ夏になりにけるかな

村山の高嶺々々を傳へ來て富士の裾野にかゝる白雲

これらは敍景の中に見えた秀逸の一部である。敍情の秀歌にも物に寄せたものが多く、自ら景情相融合したものが少なくない。

大堰川かへらぬ水に影見えて今年も咲ける山櫻かな

歸るべき限りも知らぬ武藏野の旅寢露けく秋の初風

子は無くてあるが易しと思ひけり有りての後に無きが悲しさ

笑ふにも涙こぼるゝ世の中に泣きつゝ笑める人もありけり

然し景樹が才氣の縱橫な性質は、俳諧などの樣な技巧も現はれ、又古今集の調子の明らかなものも見えて居る。

限りあれば覺めなむとする明方の夢の末吹く荻の上風

うまや路の鈴の傳へて聞きしより振りすて難くなる思ひかな

氷とく池の朝風吹くなべに春とや波の花も咲くらむ

梅が香の匂はざりせばぬば玉の闇の春をば誰か知らまし

又餘りに自然に詠むを主張した弊として、單調で詩味索然たるものも少なくない。

我が庵は餘りに山の奥なれば鳥の聲さへ珍らしきかな

如何にせむ荻のうは風吹きよせて夕まぐれにもなりにけるかな

五月をや待ちかね山の杜鵑今宵一聲鳴きて出づなり

朝な〳〵起き出でて見れど葛城の嶺にも未だ降らぬ雪かな

要するに景樹の歌は、叙景の中に寧ろ勝れたものを多く見る。

見渡せば神も鳴門の夕立に雲立ちめぐる淡路島山

行く水の末はさやかに現はれて河上暗き月の影かな

増鏡みぬめの浦の沖津洲に舟人騒ぐ月や出づらむ

山の端に棚引き沉む白雲の上より出づる秋の夜の月

但し末を「かな」又は「けるかな」に止めたものが多いので、

けるかなと詠まれけるかなけるかなにあらぬけるかなも詠まれけるかな

との譏もあつた。村田春海は筆のさがに、「彼の朝臣は今の俳諧者流に異なる事なし。」とも言つたのは、才氣に任せて卑近なものや戯れのものを詠んだからであらう。涅槃會の題で、

　世の中の花の遊びにくたびれて一ね入りせる君が手枕

などをはじめ、

　花に散りて春もかへるの力無き聲のみ殘る夕暮かな

　引き入るゝ忍び車のうし三つに轟く胸をやるかた無き

　卷向の檜原が奥の稻妻はすり出す火の心地こそすれ

これ等は寧ろ才氣によつて誤られたとも言ふべきであらう。

景樹には取るべき長歌は殆んど無い。桂園一枝に見えては居るが、彼は本來長歌を好まず、從つて又多く詠まなかつた。これは眞淵や守部と異なつた點である。隨所師說に載せた「神方竹子が詠草にての條に、長歌に關する次の記事が見える。

　長歌添削は昔より致し不申候。さるは直さざるに非ず、直されぬ物故也。さて長歌は只今の世に詠む事、甚だかたき業にて候。先づ大段長歌は奈良より以往よろしく、短歌は奈良より以後よろしき也。よりて短歌は古今を學びて足りぬべし。さらば長歌は萬葉を學びて足りぬべきかと言は

んに、萬葉は時代遠きが故に、自然、調と詞の中に用捨無くば叶ふべからぬ謂はれありて、短歌を古今に學ぶが如くは、打ちまかせ難き所あり云々。

されば古今までにて、其の後の長歌は凡調にして、歌仙の作なりと言ふとも取るに足らざるべし云々。愚老など生若き時、專ら古文をたとびて萬葉ぶりを詠み侍りしに、長歌がちに物して往々舊友の許にも送りたる少なからず候へども、眞の萬葉ぶりにて、人笑へなるものに候。其の内を撰びて取捨致し、一二章一枚に加へ候へども、御覽の如く、それ猶とゝのへりともなく、口ふさげなるしれ事に候。

又長歌は感淺きことと、短歌にくらべては萬々に候。さるべき謂はれは、大やう知れたる事か。されば、しか詠み難き上、感淺き長歌詠まんより、口にあひたる短歌をと思ひ取り、たま〳〵は人の望みに二綴り候事も有之候へども、先づは止めに御座候。

されど己こそ淺き心にかくは思ひ取り候へ、明敏なる人は又格別に候へば、一概に申し難き事、是又勿論也

長歌に關する彼の思想は略これに盡きる。長歌を作らぬと等しく彼は又文章も特に作らなかつた。隨聞隨見に載せた「信濃人丸山閑が詠草和文の奥に」には、

文章はいはゆる義理の分るゝを本とし侍れば誰が聞きても少しも聞きまどはぬが上手なり。

と述べて居るが、長歌と等しくこれを棄てた事も序に記しておく。

最後に景樹の執名等を記して見る。東塢塾は、岡崎の宿で東山の麓なる神樂岡にあつた。

　　吳竹の絶えま／＼に野べ見えて常面白き岡崎の宿

はこれであつた。又、臨淵社は京都市内の出張所で鴨川の西岸に在つたので、萬水樓、一月樓、小春亭、觀音亭などの異名もあつた。

浦の汐貝

直好は景樹の高足である。熊谷直貞の後で、周防國岩國に住み、岩國侯に仕へて居た。父を直昌と言ひ武田流の軍學に詳しかつた。直好は天明二年(二四四二)二月八日を以て岩國の横山に生まれ、幼名を八十八と言ひ、後は助左衞門と改めた。

少年時代から和歌を好み、同郷の人吉田嘉太郎に就いて歌文を學んだ。

　　夜なれど土の白きは白雪のほどろ／＼に降ればなりけり

は初めて雪の題で詠んだものであると言ふ。十六歳の時、景樹に就いて添削を請つたが、その才を愛して詠草の奥に景樹は次の一首を書いて返した。

　　實にならぬ秋を思へば小山田のいね離きまで嬉しかりけり

ついで十九歳の時に京都へ出て、約一年許り、直接、景樹の教を受けた事は、既に桂園一枝の條に掲げた如く、古今集正義序註追考に見えて居る。其の後も屢おとづれ、又、相國寺に誠拙禪師を訪うて參禪し、香一居士の號を授かつた。誠拙禪師は伊豫の人で周楞と名づけ、又無用道人と言つた。鎌倉圓覺寺に居つたが禪風を改革し、京都では相國寺の僧堂を建立した事もある。和歌は景樹の門人であるが、禪を景樹にも教へた事は既に述べた。

文政八年(二四八五)九月、事によつて岩國を逃れて京都に住まうとしたが果さず、大阪に下つて江戸堀に住んだ。其の家は或諸侯の船屋形であつたと言ふ。輕舟亭と號したのもこれから起つて居る。後に高麗橋の西に住み長春亭とも言つた。其の後三年を經て、天王寺邊なる百濟野附近の家隆塚に居を營み、管絃の道にもいそしんで大曲を傳へられた。浦の汐貝拾遺なる文詞の條に「琵琶の大曲受け傳へ侍りて」と題して次の文を載せて居る。

いとか弱き身の、老い行くまゝに、人に交はる事の物うければ、樂器を友とするに如かじと思ひ取りて、眼の曇あたらむ限り、獨り物して樂しむ程に、なほ世の限り遠からぬにや、竹の葉風のかれ〲〵にのみなり行けば、いとに引きかへて花園三位の君の御教を受け奉るに、こたび蘇合香の事まで授かり奉りて、何くれとの給ひ聞かせ給ふを、かたじけなみ、喜び侍りて、

我が爲はこれぞ誠のいく藥遠き境に何か求めむ

歌集の中には春歌に「正月二十八日、菅原の大曲傳へ給ふべき事によりて、花園三位の君の田中の御殿にまからむとするに、あしたの程、雪いたく降り出でたれど云々」と題した當日の一首も載つて居る。

ついで七十六歳の頃、人々の進めによつて再びもとの市中に戻り、北濱の家に住んで、八十一歳の秋、文久二年（一八六二）八月八日に歿した。大阪なる小橋の西念寺に葬つてある。生來茶を好んで一日も廢さなかつた。人としては魁偉で武技もよくした。又法曹至要抄を精覽して法曹類書を作り、梁塵後鈔其の他の著作をも殘して居る。紀行文には船路の日記、船路のゆきき、嚴島日記などがある。

集は直好の門人なる三井宗之の編である。直好が若かつた時からの反故や、人々の聞き傳へ書き留めたものを拾ひ集めて浦の汐貝と題した。

この後に又大阪の門人達が後集を編して浦の汐貝拾遺と題し、香川景恒の序を請うて安政三年に世に出して居る。

彼の歌風は殆んど景樹を其の儘繼承したものである。景樹の死後、其の子景周（即ち後に景恒

と改めた）から「教の事どもたゞねられたる序に」と題して、

しき島の言の葉山の杜鵑異なる事もあらばこそあらめ

と答へて居る。これを見ても桂園一門には重んぜられた事が自ら明らかである。從つて景樹風の清新な敍景はあつても平淡優麗と稱すべきものである。景樹の隨所師說（又は詠草奧書とも言ふ）に載つて居る「信濃國、内山眞弓への文中に」の條には、

隨分田舍漢の目を驚かさぬ樣に御詠出、修行の最第一に候。あて氣があるや否、歌はそれきりに御座候、却て田舍も不レ受樣に成行き候事、宗匠たる人の通病に候、幸文を始めさがり候事、皆此の習弊也。直好が獨歩は、只このあて氣なきが故のみ云々。

と直好のなだらかに詠む事を推奬して居る。然しこのなだらかの中に、門外からは平弱の謗を受ける點が存在するのである。

又直好の歌論は、古今正義序追考や古今正義總論補註に見える如く、標榜するものは景樹と等しく古今調である。これが直好の歌論の據つて來る處で、景樹をよく繼承した點であらう。即ち古今正義總論補註に次の說を述べて居る。

紀記萬葉の中に、古今より勝れたる歌ありなどの論は今更言ふにも及ばぬなり。只古來よりの歌をおしならし

て、古今時代花實備はりて前後に秀でたるを言ふ。

それは師の本文、新學異見などに言はれたるが如し。

と。又、「歌は詠む事の難きに非ず、知る事の難きなり。これを知る時は、よく詠むことも難からじ」と言ふに對しては、

何によりて知る事の難きぞ。おのれが狭き心より、名利人我の相を離れて自然にまかせ果つる事の難きなり。

何によりてよく詠む事の難からぬぞ。思慮に渉らず自然にまかすれば易し。其の自然より成れる歌は、天地感通の歌なれば、これを皆くよく詠みたりとす。

と。作歌の自然論を稱して居る點は景樹を能く繼承したものと言ふべきである。

次に彼の歌の實際に就いて見よう。

うち羣れて摘まむと思ひし春日野の若菜も見えず雪は降りつゝ

立つと見し春は跡なくなりにけり山にも野にも雪の降れれば

春立てど花とも見えず足引の山白妙に殘る白雪

駒なべて今こそ行かめ古里は梅の使の春風ぞ吹く

梅の花匂はぬ里の鶯はおのれ鳴きてや春を知るらむ

花の上におほふ許りの袖もがな春の山べに嵐もぞ吹く

これらは古今調を摸倣した點もあつて、古今集の中に在つても區別し難いと思ふ。この調が直好には極めて多い。

春雨の雲はれかたになりぬらし松の音高く風立ちにけり

照る月の影の匂ひと思ひしは夜の間散り敷く櫻なりけり

春雨の雲間はれ行く有明にしだり柳の露ぞこぼるゝ

池水に見えてのみ降る春雨は音聞くよりも寂しかりけり

蛙鳴く細谷川も見えぬまで咲きなびきたる山吹の花

これらは優麗とも稱すべきものであるが、活氣に乏しく纖弱なのは惜しむべきであらう。桂園一派の詠には絶えて壯大、雄渾なものを見ないのは、聊か不滿を感ぜしめられる所以である。

世の中に苦しきものは人知れぬ心のうちの思ひなりけり

寂しさは思ひの外に無かりけり峯の松風谷の下水

吹く風に棚引き消えし浮雲のあとなきものは思ひなりけり

浮草をうきたる物と思ひしに止まる物は無き世なりけり

かけまくもあやに貴きすめろぎの大御國内に住むぞ嬉しき

これらは敍情的のものである。直好の風格は、右の一斑を以てほゞ全豹を知ることが出來ようと思ふ。

長歌も見えるが、これも亦師匠景樹の如きものである。

亮々遺稿

幸文はタカフミと讀むを正しとするが、世にはサチフミとも呼んで居る。直好と並んで景樹門下の巨頭であつた。

幸文は、備中國淺口郡長尾村の人。父を木下八郎右衛門義錦と言ひ、安永八年（二四三九）に生まれた。通稱は民藏と言ひ、又、多見藏と記した事もある。蓋し初めは義壽と名のり、後には義方、義質（ヨシナホ）等と改めて、遂に幸文としたのである。

文化の初年に京都に出で、二月ごろ岡崎に移り住んだ時は、其の家を朝三亭と號し、文政二年（二四七九）四月大阪に出た時は、前栽に竹を植ゑて亮々舍（サヤ〱ノヤ）と稱した。一生の大半は京都に暮したが、文政四年（二四八一）十一月大阪に歿した。年四十三。

彼は初め澄月に就き、後には慈延に從つて和歌を學んだ。澄月、慈延は、小澤蘆菴、伴蒿蹊と共に當時和歌の四天王と稱せられて居た人々である。然るに香川景樹を知るに及び其の風に心服して、文化の初年頃、赤尾可官の紹介によつて遂に景樹の門に入つた。其の頃の事情は慈延が小野泉藏（亮々草紙に見える櫟翁即ち小野猶吉の弟で、幸文と同郷の人である。）に送つた書や、幸文の書狀に據つて大體は窺はれる。

木下も此の節は、上岡崎へ移り居り候。切支丹（景樹のことを言つて居る）之宅近く候故、邪路に落入り候はんと氣の毒に御座候。甚心高く候故、中々諫も入れ難く相見え候――云々。

二月望（文化元年である）　　大愚（慈延である）

小野泉藏様

又、入門に關する件は、

先日は始めて罷越し……さて其の程お願申候、拙者入門之事、歸後早々御書翰持參候上、願入候處無滯御聞濟被下、大慶不斜仕合奉存候云々。

三月十三日（文化元年である）　　木下民藏

赤尾左京様

赤尾可官が桃澤夢宅に送つた書には、

殊に備中、木下義質主、去る三月十一日、改めて御入門御座候事、於小子も大慶至極奉存候。右之儀、定而御傳聞も有之哉と奉存候得共、喜悦の餘り申上候。此比は岡崎村に其阿大德と同居にて日々歌合等御座候て御話之御様子、及承、浦山敷事どもに御座候。云々。

六月朔日(文化元年である)　　赤尾左京可官

桃澤夢宅様

景樹が夢宅に送つた書には、

木下も鄰邊へ引移り被申、其の外三五輩、勢州、備前邊よりも歌修行に被來候人御座候て、木下へ相賴、寄宿にて、一統拔羣の出精に御座候……世中貴翁を魁として、防州の熊谷、木下氏、此の三人ならでは親友と賴み候仁、無之様に存候。貴翁へは去年寛々拜話仕且木下へも、去冬以來、晝夜出會仕、又熊谷氏上京に候へば、是も、得寛話可申候。さ候へば今は此世に思ひ殘し候事は無之様に存候云々。

四月十八日(文化元年である)　　香川長門介

桃澤夢宅様

この書狀で景樹が幸文等に對する考は推察せられる。

夢宅は信濃伊那郡の人で、澄月の門に入り、後には師の號垂雲軒を繼承した。始めは景樹と交はり、後には景樹の說に服して弟子の禮を取つたと言ふ。夢宅歌集も存在する。

夢宅は垂雲軒を其の後更にその門人なる信濃の人、諏方多内義明に讓り渡した。義明は後に斧木と言つた。亮々遺稿の夏部に、「丸田町なる某が家の撫子を斧木と見に行きて詠める」と題した一首は義明と行つたのである。

かくて幸文は全く景樹の風に化して行くのを見て、慈延等の心は穩かでなかつた。當時の慈延の書に、

景樹、夢宅が歌など評するに足らず候へども、餘りにあきれはてたる歌故……さても〳〵淺間しく候。近來木下もその風に傾き候。氣の毒千萬なる事に候云々。

十月十五日(文化元年である)　　慈　延

小　野　泉　藏　様

文化元年は景樹三十七歲、幸文二十六歲の時である。

幸文は始め景樹を「實に大天狗に御座候。」など言つて居たが遂にその門人となつてしまつた。

其の歌風に就いては直好の條に景樹の言葉をあげたが、一面には景樹の長所を十分に發揮した

ものである。景樹は「門中に直好こそ實に恐ろしき才子なり。」と推服して居るが、然し歌は直好よりも一層鮮麗な感がある。又亮々草紙は其の學識を示すものである。恐らく景樹門下の歌學者として又歌人として推奬すべき人であらう。

彼は又誠拙和尚に參禪して[illegible]居士と言つた。景樹の在鷗居士、直好の香一居士と共に、誠拙の弟子として、和歌に禪味を帶びたものがあれば何れも誠拙の影響である。

次に彼の歌論としては、社友に送りし書簡によつて其の骨子を窺ふ事が出來る。

言ひもて行けば、只、人の心を種としてとある貫之の詞に事盡きたり。……もとより歌は狂言綺語に及ぶものも多けれど、そは歌の上の一つにて、打ちまかせて歌を狂言綺語とは言ふべからず。

又、「岡山なる智榮尼の百首の詠草筆加へて返すとて其のしりへに書いつけやりたる詞」に、

月に向ひ花に向へる間、たゞ一言の言ふべきものなき境に至りて、其の月より、花より、おのづから我知らず言ひ出でらるゝこそは、かの古今集の、人の心を種としてなれりと言ふ言の葉にて、天地のあらむ限り汲み、如何に掬みても盡くまじき、ととしへの物にては侍れ。

と見えて居る。景樹の自然論と相通ずるものなる事は否定し難い當然の事であらう。

集は淺野讓が編んで千種有功の序を掲げて居る。春、夏、秋、冬、戀、雜の次に、書簡之部、

組題百首、貧窮百首、長歌部を掲げて居る。貧窮百首は山上憶良の貧窮問答に摸して、文化四年(一四六七)の歳晩から翌年正月三日の夜までに詠んだ事を、その百首の後に記して居る。文化五年(一四六八)は彼の三十歳の時である。

次に彼の和歌を見よう。其の歌論は景樹を繼承して居るが、萬葉調の少なくない事は注目すべきである。直好の詠に比して生氣の動くを感ずる原因は此處にあらうと思ふ。

夜なれば人も見に來ぬ我が宿の櫻が上に月照り渡る

夕立は今降り來らし卷向の檜原が上に雲さはふなり

淀河を夜舟に乘りて我が來れば螢火見ゆるひらかたの里

夕されば田鶴がね高し大伴の三津の浦風寒く吹くらし

初時雨過ぎにけらしも三輪山の杉の青葉の濡れたる見れば

わぎも子が玉手をまかず敷妙の木枕まきてぬる夜ぞ多き

鞆の浦のありそ漕ぎ出でて見渡せば雲居隱れに伊豫の島見ゆ

萬葉集の影響は作歌の上に爭ふ事が出來ない。從つて古今集風を庶幾しても、寧ろ新古今集風の清新な詠を多くしたのは又自然の勢ひであらう。その洗練せられたものを擧げて見れば、

摘みすてゝ歸らむとする春の野の菫の花に夕日さすなり

遠く行く人を送りて休らへば堤の柳うち霞みつゝ

春雨の名殘濡れる松原の奥に聞ゆる雉子の聲かな

時雨れつる茅原かや原露見えて夕日寒けき岡越の道

春の色草にのみぞ殘りける片山畑の麥の中道

雪とのみ花は散りつゝ山里の庭おぼろなる春の夜の月

素材の範圍に關しても廣くなつて居る。これ亦その詠に清新さを加へる一因であらう。

五月雨の雫に濡れて我が來れば栗の花散る山かげの道

いづくぞや鳴く山鳩の聲はして夜はまだ深し有明の月

村雀聲靜まりて暮れはつる竹の林に嵐立つなり

こゝかしこ岸根のいばら花咲きて夏になりぬる川添の路

霜冴ゆる山田の原の稻葉の上に凍れる冬の夜の月

釣絲に吹く川風を忘れては魚の引くかと思ひけるかな

何れも有聲の畫である。藝術的價値からすれば、寧ろ直好の上にあるかも知れない。此の方面に

彼の秀歌が多い。又敍情的の詠として次の樣なものは興味がある。

かたつぶり汝だに家はもたりけりいつまで旅にふる身なるらむ

惑はずば誠の道は知らじかし愚かなるこそ嬉しかりけれ

世の中は苦しと思へば苦しきにいでや樂しと思ひ暮さむ

つらしとも憂しとも人を思はめや我が心さへ賴まれぬ世に

面白く野邊に遊べる駒見ればほだしはおのが心なりけり

彼の人生觀なども推察出來る樣に思はれる。最後に貧窮百首の中から數首擧げて見る。

かに角に疎くぞ人の成りにける貧しき許り悲しきはなし

如何にして吾はあるぞと故鄕に思ひ出づらむ母し悲しも

人の言ふ富は思はず世の中にいとかく許りやつれずもがな

唐衣妻だに有らばかかる時語りあひても慰めてまし

天地にあふる許りの黄金もが世の人皆を飽き足らはさむ

今はとて垢つき衣脫がめども改め著べき新衣無し

憂き事も嬉しき事も知らざらむあはれ此の世に富み足れる人

兎に角に言の葉繁し世の中は只口なしの消ならなむ

貧窮と人情の浮薄を詠んで人の心臓を刺すものがある。若し富み足つて憂き事も嬉しい事も無ければ、其の吟膓も亦空虚であつたかも知れない。

泊酒舍集

濱臣は江戸の人、安永五年（二四三六）に生まれた。通稱は玄長と言ひ、家は世々町醫者であつた。濱臣亦其の業を嗣ぎ、上野不忍池畔に住んで泊酒舍（サヽナミノヤ）と號した。不忍池畔に住んだ故に、杜甫の詩の陶泉泊泊の字面を取つたとも言ふ。琴後集卷十には、

上野の岡の麓に池あり。この池の西なる方を茅の町とぞ言ひける。こゝに葦原刈りそげてつい建てたる伏屋あり。そは只に其の池に臨みたれば名をさゝなみのやとなむ言ふなる。

の記事もある。又、月齋とも言つた。

少年の頃から和歌を好み、二十歳の頃、村田春海に師事した。春海は國學を眞淵に、儒學を皆川淇園に學んで和漢の學に精通し、兼ねて歌文に秀で、博覽洽聞を以て遂に一家をなした人である。

濱臣は温厚な人で門人を教へるに懇切であつたから、名聲は一世に高く、其の門に出入する者は頗る多かつた。のみならず、關宿侯や林田侯にも優遇せられて居た。集の序は林田侯即ち源政醇が記して居る。其の中に、春海翁歿後の事を述べて、

翁(春海翁)なくなりて後は、世の中の古ごと學びするともがら、多くこのうしにつき從ひぬ。

と言つて居るのを見ても、世に重きをなした事が知られる。文化七年(二四七〇)八月十七日に歿した。年四十九。

其の間に、後進の爲に縣門遺稿を刊行し、又、古葉菅根集、中葉菅根集、近葉菅根集、清石問答、答問雜考等を著はし、唐物語、月詣集、唐子道之記等の標註を出して、大いに世を益した。この他著述としては、杉田日記、泊洦筆話、語林類葉等少なくない。天若し年を假したならば斯道に益する事は極めて多かつたであらう。前田夏蔭や松平定信などは濱臣の門人である。

濱臣の歌風は春海等の江戸派を繼承したものであるから、古今集調に新古今集の調を加味した樣な上品なものである。優雅典麗と評すべきであらう。

集は濱臣の歿後六年を經て、文政十二年(二四八九)、其の子光房が、關宿及び林田兩侯の序文を得て八卷にしたものである。

次に其の歌を觀察しよう。其の庶幾した古今集等を粉本とした跡の明らかな物が少なくない。

今日も亦馬に鞍置きて山里の使を待つと春日暮しつ

物思ひなしと言ひてし昔より花見てうさや忘れなれけむ

みさむらひみ笠と申す程も無く夕立はれぬ宮城野の原

妹とわれ寢ての朝けの雪ならば如何にそとものをかしからまし

花や雲雲や花とも見え分かず霞みて明くる三吉野の山

これらに據つて其の歌風も自ら領解せられると思ふ。集中の秀逸として、濱臣の特色を發揮する代表的のものは次の樣な歌である。

雨はるゝ夕の園の梅が枝に月待つ程の露ぞ匂へる

梅の花散りかふ庭に露ふけて芝生に香る春の夜の月

櫻咲く片山畑の暮に一聲鳴きてたつ雉子かな

小山田にすだく蛙の聲の中に小雨降り來ぬ春の夕暮

露繁き小野の篠原秋ふけて淺茅に慣るゝ蟲の聲かな

釣の絲に吹く夕風の末見えて入日寂しき秋の河づら

薄霧の立てるあなたに日は落ちて里とひ佗ぶる野路の旅人

梅が枝に降る春雨は音せねど散る露香る宵の曙

猶、雜の歌には林田侯や松平定信其の他と交渉の歌も少なくない。

橘守部家集

守部は伊勢國朝明郡小向村の豪士、飯田長十郎元親の子である。母は桑名の莊屋楢氏の出であつた。後に橘を姓としたのはこれに據つて居る。

飯田氏は南朝の忠臣たる北畠准后の後で、父元親は谷川士清に學んだ事もあつたが、後には産を傾け、守部は一時大阪の知音に寄寓した事もある。寛政八年(二四五八)十月父は歿したが、其の翌年十月、彼が十七歳の時に江戸に出て芝の新錢座に一家を構へて居た。

其の頃は生活にも餘裕があつたので、四書、五經等の自習を試みた事もある。然し眞に學者としての生涯に入つたのは二十二歳の頃であつた。當時の事情は、其の女濱子に口授した「橘の昔語」に次の如く記して居る。

いざ是より身をこらして、憂き瀬をしのぐ下馴ししがてら、世々の軍書、諸家の系譜、宇治大納言物語、今昔、

十訓抄、著聞集等の雜書どもを悉く讀み見むと思ひ立てる比なり云々。

當時は可なり刻苦勉強したのであらうが、學問の傳統は明らかなるを得ない。葛飾の葛西健藏と言ふ儒者の許へも通つて居た。葛西氏は見る所があつて將來の後援をしようと言つたが、守部は受諾しなかつた。其の後、文化六年(二四六九)八月、二十九歳の時武藏の幸手に移住して、居る事二十年、その間に妻を迎へ、長男冬照、長女濱子を儲け、且學者としての蘊蓄をも養つた。伊勢物語箋、長歌撰格、文章撰格、神風問答等は何れも其の頃の著述である。

幸手から再び江戸に移つて來たのは文政十一年(二四八八)で、彼が四十八歳頃である。始めは深川に居り、幾ばくも無く淺草寺境内の辨天山に居を定め、池庵とも號した。蓋しその居が池に臨んで居たからである。山彦冊子、神樂催馬樂入綺等の名著を出し、學者としての名聲はこれから以後大いに揚つたと言つてもよい。

名聲の嘖々たると同時に、肥前平戸の松浦侯に聘せられて、向柳原の松浦邸内なる樂歳園の記を奉つた。晩年には稜威道別や八十言別等の名著があり、殊に稜威道別は伊勢の神官荒木田久守に據つて天覽に供せられた。

皇朝廷より、おのれが日本紀のときことを召しけるに、かしこみ〳〵奉るとてそへける歌

六十まで君の爲にといたつきし心や雲の上に告げけむ

神の世に近かりぬべき雲居までまたすも嬉し家のひめこと

はその時の心を詠んだものである。

同じ頃、難古事記傳、神代直語、舊事記直語等何れも彼の國體觀、神道觀を示すべき名著は成つた。其の後更に淺草の藏前なる桐畠に轉任して生樂園(いくくわうゑん)とも號し、萬葉集檜嬬手、同別記等を著はしたが、肺を病んで箱根に保養した。不在中、家は本所の法恩寺橋に移つて居たので、それからは椎本とも號した。

しかし病氣は其の後も亦起つて、遂に嘉永二年(二五〇九)五月二十四日に歿した。享年六十九歳。向島の長命寺に葬つた。

守部の學風は其の父に負ふ所を見逃す事が出來ない。橘の昔語には次の樣な記事がある。

亡父、今はの時に告げ給はく……憂きにはくづほれず必ず學問はせよ。其の學問は又必ず〳〵皇朝の古を學ぶべし、

今、松坂に本居宣長といふありて、其の名は高けれど、只おのが學びを賴みて神典の解くべき矩を知らず。これ春滿以下眞淵が弊風を今一きは、きすくに補ひたるのみなり。久老も力足らはず。吾が師谷川氏も學びの筋

立たず。

かかれば汝は彼等が學風に獨り離れて、もとの眞を見出すべし。我が家に古き神祕の口訣ありつれど、近き比となりて失せて見えず。その神祕はしか〳〵なる極のものなり。僅かの缺本にて、事足る許りはあらざりけれど、いましが才にては遂に悟り得る事あらん。子を見る事親に若かず。生ひ立ちよりその兆見えき。極めて志を果すべし。……漢意にな惑ひ入りそ、と宣ひける、この御遺訓を堅く守りてありければ云々。

卽ち研究の間にも自ら燃える樣な學究的氣概と卓見の存する點は、據つて來る處の遠い事を知るに足るであらう。

なほ彼と清水濱臣との關係を說くものがある。濱臣は彼よりも五歲の年長で早くから名を成して居た。恐らく守部は濱臣を先輩として尊敬した事であらう。守部の集なる穿履集には、「文化の九とせ四月の十日許りに、淸水濱臣が我がり訪ひ來て暫しありけるに云々。」など記した長歌が見えて居る。其の後、兩人の間に不和を生じた事も、「おのれ幸手に住みける頃、淸水濱臣いと心きたなき事のありけるに詠みて遣はしける歌」として、

……誰が矢とも　知らぬ人には　己が射し　矢ぞと誇りて　名を記す　類多きは　惜しむにも　足らはずあれども　吾が作る　あら木の弓を　人知れず　削りかへては　しがものと

なせるや何ぞ　この絃の　無くてありせば　強ゆみも　引きなむものを　あなきたな　かかるわざして　鳴り筈の　時に鳴るとも　鳴り鏑　世には鳴るとも　恥かしき　わざならずやは………

などあるを見れば、濱臣の說には守部の說を取り用ゐた點がある事も知られる。更に、

此の後、濱臣、たび〳〵訪ひ來てひたぶるに宥めければ、「手束弓つらをたてどもうさゆづるかけて絕間をさらばつぎてむ」とは言ひつれど、猶やう〳〵うとくなりにけり。

と記して居る。

然るに當世妙々奇話には、「濱臣嘲二守部一」の一節を載せて居ると言ふ。これは、守部の山彥冊子が濱臣の說を剽竊したと說いたものであるが、事の眞僞は明らかで無い。守部の卓識からすれば、穿履集の記載が眞であるかも知れぬ。兎もあれ濱臣の死を悼む長歌、

世の中は　かくしあるらし　人皆の　あやにく惜しむ　良き色は　移ろひ易し　良き花は　盛り少なし　良き人は　命短し　眞清水の　清水のなせは　云々

等によれば、守部の感情は和順になつた事が知られよう。

濱臣の外には餘り多くの交友を持つて居なかつた。穿履集に見えるものは、安田躬弦や中島廣

足、青木永章等に過ぎない。

守部の歌論として見るべきものには萬葉集緊要がある。この書は初め萬葉集摘翠抄と稱して、一句切、二句切、四句切等による格調と時代の關係を論じたもので、見るべきものである。其の後、短歌撰格、長歌撰格を著はして短歌の格調論を續けて居る。格調論と連關して和歌は長歌を以て本體とすべきを説き、徒らに長い詞書を用ゐる樣な短歌をあきたらなく思つて居た。又、歌は調を調へ、言葉には修飾を添へて謠ひ詠むものと言ふ一種の修辭論を主張した。

要するに彼は作歌の爲には古歌を見る事を勸めて居る。即ち萬葉集や三代集の高い調子を目標として中古以後の今めかしい作意に據れば、聽く人を感動せしめると言つた。萬葉調の多いのもその説によつて自ら領解出來よう。

家集は、其の子冬照が守部の七年祭に備へる目的で、急に集めて梓行したと跋文に明記せられて居る。

次に實例を掲げて見よう。

たゝな付く青垣山は霞みあひて内つ御國の春ぞゆたけき

鹿島潟朱の玉垣明けそめて高天原に霞棚引く

霰うつ霰松原おぼろ夜の月面白し霰松原

菫咲く紫野行きしめ野行き遊べど飽かぬ春の色かな

二人行けど行き過ぎ難きみ山路を一人越ゆれば棹鹿の鳴く

鳰鳥の葛飾早稲の中分けて穂波に浮ぶ利根の川舟

萬葉集の言葉を其の儘用ゐたので、言葉に蒼古の感はあるが、思想は素朴と言ふべきものではない。かかるものの外、大體は古今集若しくは新古今集に至る調子が最も多い。

嵐山櫻吹き卷く夕暮に風より霞む春の夜の月

有明の月は傾く高嶺より色あらはるゝ山櫻かな

置けば散り散れば靡きて朝じめり露の動かす山吹の花

夕立は早霽れにけり久方の照る日の影に雨を殘して

釣殿の下行く水に飛ぶ螢を簾にほのめく影の涼しさ

下つ毛や二荒嶺おろしさ夜更けて月影凄き那須の篠原

これらは清鮮優婉なものである。神典研究者としての特色を示す歌としては、

水はなす漂ひし世と思ふまで天地こめてたつ狹霧かな

神の代にもえてのぼりし葦かびの残る根ざしや角ぐみぬらむ

橘の小門のあはぎが波間よりあれし神世の月の影かも

住の江の波間の月に底つゝを神も昔を思ひ出づらむ

の如きものがある。この外に思想の舊套を脱しない様な詠として、

五月雨に難波の葦は水越えて入江の小舟障るともなし

咲く程は雪かと見ても卯の花の散るは消え行く心地こそすれ

櫻花散るを見しより嵐山つらき處と思ひけるかな

の如き類もあるが、客觀的敍景の歌として、新古今集頃の風調の秀逸が極めて多い。長歌の多い點も一つの特徴であり、又その歌論から來る當然の歸結である。

柳園家集

遊翁は名は幸典、通稱は源五兵衞と言つた。一に柳園とも言ふのは、庭に古柳のあるに據ると言ふ。小澤蘆菴の風を慕つて其の門人前場默軒に入門した。後、薙髪して遊翁と言つた。

嬉しきは我が身なりけり月花にあそぶ翁と世には言はれて

は其の折の詠である。嘉永元年（二五〇八）十一月十一日に歿した。年六十。

人となりは名利に超越し、世に迎合する事は無かつた。嘗て或人が翁を訪うた。弟子は狹い室に居こぼれて居た。其の時ある諸侯が立ち寄られたが、居合はせた者を退かせる事もなく、同じ席に招き入れて平然と談話して居たと言ふ。

又、平生用ゐて居た机は少年時代からの物で、兩脚は缺損して居る儘遂に改めもしなかつた。其の平生及び性格の一斑はこれで明らかに知られる。

彼は單に歌人であつたのみならず語法に關する造詣も深かつた。卽ち天言活用圖、天言活用圖之阿良籠之、五十音口訣の如き著述をも殘して居る。本居宣長の學風をも慕つて皇國の學にも熱心であつたが、晩年は歌詠を專らにした。

其の歌風は蘆菴を慕つて居た。蘆菴は「たゞこと歌」を主張し、平言を以て自然の感情を吐露する事を說いて居た。この說は景樹にも影響して居るが、遊翁亦この見地から常に「歌は調の整ひをもて旨とすべし。調べ整はぬは歌にあらず。漢詩に韻字平仄てふものあるも調べを整へむ爲なり。」と述べて居た。この調は言葉の連絡上の響きである點に於て景樹の調べと同一ではない。景樹の「調」は思想内容と表現形式との調和を說き、遊翁は漢詩の平仄の如く、表現形式を完成

する爲には中世排せられた詞を用ゐる事を主張したのである。然しこれらの點を觀察すれば自ら共通な點も存する故に、其の和歌も亦宣長、景樹と同ずるものである。遊翁は又實景の外に、たゞこと歌の辨や現存歌選の如き著述がある。

尙、彼の歌論に關して重複する恐もあるが、伊達秀賢の論じたものがあるから序にあげて見よう。秀賢は遊翁より十歳許り若かつたが、親しい友であつた。今その論の中から遊翁の論だけを掲げる。

歌は調第一のものにして、調べ惡しければ如何許り目出たく言ひ續け巧なる實意ありとも、歌とは言ふにあらず。さて其の調べを知るに、詠んじみるこそあれ。そはおのれ、年頃古歌を詠んじ試み、中に就いて其とぬしの歌に心をつけつゝ、終に古今の調べのたへなるすがたをよく思ひ得たり。さればその考へ得たる詠んじざまも、今人の歌を詠ひ見る時には、善き惡しも紛ひ思はざる、速に知らるゝなり。

これ等は景樹の歌論と共通な點である。更に又曰く、

其の詞の續け柄によりて、自ら聲の開合上り下りあるを、その開合上り下りに隨ひて、次の句の出でよきと出でにくきと言ふ事ありて、何となき詞も上より言ひ下しの響き合にて、耳にさはりて穩ならぬ。

この說は、集の序文に見えるものと殆んど等しいが、多少主觀的な論に終つた傾きがある。

集は遊翁の自選の歌二卷を其の歿後門人等の上梓したものである。旋頭歌、今様及び長歌の多い點は注目すべきである。

次に其の歌を掲げて見よう。

軒ばより落つる雫の絶えせぬは降る沫雪やあはと消ゆらむ

梅の花香るとなしに香るかな吹くとはなしに風や吹くらむ

いつ見ても見ても飽かぬは梅の花年に色香や添ひに添ふらむ

打ちむれて花に遊びし山路とも若菜にわかぬ頃は來にけり

君が代を永井の浦の友千鳥ともに千代とや鳴きかはすらむ

この類の如く言葉の調べに關するものに、一特色を認める事が出來る。又下句の末を「なりけり」若しくはこれに類する語で止めたものの多い事も、作者の個人的慣習と認められる。

菅の根の永き春日をはる日とも思はで見るは櫻なりけり

吹く風に亂るゝ花を見る時は心も身には添はぬなりけり

遊翁の本領を示すものは凡そ左の如き歌である。

春雨の名殘の露に尾羽濡れて柳が枝に鶯の啼く

朝霞はるゝを見れば川添ひの柳が枝に春風ぞ吹く
　夕鳥歸る翅やしめるらむ小雨そほ降る春の山畑
　岩躑躅匂ふ山路を今朝來れは谷に響きて雉子啼くなり
　水鷄啼く聲ぞほのかに聞ゆなるたそがれ時の雨のはれ間に
　夕立の空さりげなく雨はれて外山の松に夕日さすなり
　柴人や眞柴樵りさし急ぐらむ山路かきくれ霙降り來ぬ

これらは敍景の詠であるが、濱臣のに比しては稍素朴な感じがする。若し繪畫に譬へるならば、濱臣のは畫家の畫であり遊翁のは文人の畫の如き印象を感受する。それは遊翁の生活が如實に詠まれた事にも一部分關係するであらう。

　花咲かばひさご携へ不忍の池の上野に飲みて遊ばむ
　杜鵑啼きつと人の言ふなれど老の耳には及ばざりけり

但しその生活は木下幸文が貧窮百首を詠んだ如き辛酸を嘗めた事はなかつた。矢張り「月花にあそぶ翁」である。其の爲か感懷を世に訴へる樣な詠は少ない。

　巡り來る月日はもとの月日にて人は昔となるが悲しき

君に今日手向くべしとは思ひきや橘が露に袖を濡らして

などは抒情の歌として見るべきものである。

旋頭歌は數多い點もあるが、巧妙に詠んで居る。

月夜よし夜よしと言ひて庭の卯の花　暮れはてば人にや見せむ庭の卯の花

さらでだに夕涼しき庭の泉に　いつしかと月こそ宿れ庭の泉に

山の端に今こそ月の影はほのめけ　今か我が軒ばの松の木の間洩り來む

村時雨はれ間を松の陰や頼まむ　見るがうちに山路の末は日影さし來ぬ

長歌の中には「淸水濱臣の十七回忌に秋懷といふ心を詠める」なども見えて居る。長歌に對しては景樹などと自ら異なる思想を有して居た事が知られる。

解　題　終

桂園一枝

香川景樹

〇松原なる川岸　京都木屋町樵木町、鴨淵社、觀音亭、一月樓、萬水樓などいふ。

〇崑崙　支那に在る山の名。

吾が師桂園大人、月ごろ病に煩ひ給ひけるが、夏もやゝ更けて岡邊の夕日限なき暑さの堪へがたきを厭ひ、涼しかるべき陰をとて、此の松原なる川岸に隠れ住みて、世の人をさへ避けおはしけるほど、七月の末よりこゝ地俄に頼もしげなく、自身も今はと思ひとり給へるを見驚きて、おのれいへらく、著はし給へらむ書どものうへはしばらくおく、年來よみやり給ひし若干の言の葉、千歳の後おのづから散り失せむだにをしみても悲しむべきに侍るを、其もひとつに燒き棄てむなど獨言ち給へる眞實のことともえ覺え侍らず、從ふ輩實に崑崙の千顆の玉とも仰ぎいたゞきまつるは、吾が佛たときのみに侍らんやは。せめて然有べきばかりをだに撰り置かせ給はばなど、やう〱に申し解き侍りし口より、頓て讀み聞え參らせて爪じるしつけもて來る程に、僅か百が一つにとゞまれり。それ書き淸めたるを見給ひて、又みづから筆とりて、こは〱と書き捨てたまふまに〱、遂に片光も遺るまじう見おそりて、やをら引きとりかいをさめ侍りし。さて是れが外題いかゞ標し置き侍らむと申すに、あにこと〲しう、たゞ藻屑とか朽葉とか似あはしう書きすつ

べしと宣へるにしたがひて、おのれ竊かに桂園一枝と號け侍るも、すべてをこなるわざなり。かくするを同志の友がき遠近聞き及びて、われも〳〵と見まく希へるに、こと〴〵書きあたへむいと煩はしく、假に梓にやどして千に餘れるこそ友の望みをたらしむといへども、なほ一時とりあへぬすさびに侍り。後えりくはへ給はむには、改めものし侍るべきものなり。文政十一年かんな月の末、賀茂の川邊なる觀音亭にして、源元餘沙門玄如等に謀りて平清樹これをしるしぬ。

源　斐　雄　書之

〔源斐雄　菅沼斐雄、景樹門下の高足。〕

桂園一枝雪

春歌

御讓位あらむとする年の春家の會始に松迎春新といふことをよめる

今年よりあらたまるべき聲すなり大内山のみねの松かぜ

春風春水一時來

冰とく池の朝かぜ吹くなべにはるとや浪の花もさくらむ

春水澄

雫にも濁らぬ春になりにけり結ぶにあまる山の井の水

瀧音知春

千早振神の宮瀧音すみてよし野の奥も春や知るらむ

初春見鶴

ねのひすとわが打羣れてこしものを小松が原はたづぞしめたる

朝ごほりとけたる澤に啼くたづのこゑ大空に霞む春かな

妙法院の宮の御會始に東風暖入簾といふことをよませ給ふによめる

○吹くなべに　吹くにつれて。

○ねのひ　子の日の遊び。

○妙法院　京都下京區妙法院側町にある延暦寺の別院、皇族門跡である。

玉すだれゆらぐ春風吹きにけり外山の雪もけふぞ解くらむ

雪消山色靜

けふ見れば比良の遠山雪きえて霞のおくになりにけるかな

子日

千世はみなかはらざらめど小松原心の曳くをひかむとぞ思ふ

君をいはふ千世のねのひの例には引き洩らされし松なかりけり

社頭子日

神山は松のふた葉も引くものを葵のみとも思ひけるかな

子日若菜

ひきそへし松のちとせあり七種(なゝくさ)のわかなの數はたらずともよし

子日に賀しける人の家にてよめる

この宿は千世もあかねば松がねのいはほながらに引き移してな

ある年の春ねのひにもまからでこもりをり

雪ふかき北白河のこまつ原たがひく袖に春を知るらむ

霞

朝がすみたな引きこめつ巻向(まきむく)の檜原がおくも春や立つらむ

○七種　芹、薺、御行、繁蔞、佛座、菘、蘿蔔の七種の菜の稱。

かづらきの山のすがたに打靡きたてりともなき春霞かな

霞遠峯

大比叡やをひえのおくのさゞなみの比良の高根ぞ霞みそめたる

霞添山氣色

いそのかみふるの遠山ふるとしのものとも見えず霞たなびく

○いそのかみ　ふるの枕詞。

野外朝霞

鶯のこゑする野邊にたつものは我とあしたの霞なりけり

海上霞

明けてこそ見むと思ひし箱崎の浪間にかすむ松のむら立

鶯

うぐひすのなく初こゑのうれしさに獨りおきつる朝ぼらけかな

わぎもこがねくたれ髮をあさな〳〵とくも來て鳴く鶯の聲

○とく　解くと疾くとを掛けていふ。

待鶯

ふしなれし去年のねぐらの呉竹はよも鶯の忘れざるらむ

鶯馴

我が園に來てなかぬ日は鶯のあれども聲をきかぬ日はなし

雨中鶯

鶯のなきくらす日の春雨はつれ〴〵ならぬものにざりける

野外鶯

野はやがてかきほなれども朝な〳〵立ちいでてきく鶯のこゑ

水邊鶯

河上の淺篠原の葉ごもりに啼くうぐひすや氷とくらむ

曉鶯

夜をこめて鳴く鶯はわが宿の竹のねぐらや臥し憂かりけむ

毎朝聞鶯

朝な〳〵同じ所に聞ゆれどあらたまり行く鶯の聲

夕鶯

うぐひすのなく山かげぞ暮れわたる霞む所や堺なるらむ

關路聞鶯

ふたゝびはこえじと思ふ陸奥のいはでの關に鶯の啼く

山家鶯

柴の戸の春のさびしさ鶯のこゑより外の山びこもなし

○かきほ　垣といふに同じ。

○いはでの關　陸中國膽澤郡に在り。

〇佛光寺　京都市下京區高倉通り新開町にあり。眞宗佛光寺派の本山。

〇紅のにふの山田　にふに匂ふと丹生の地名とを掛ける。

花間鶯

をしみても鳴くとはすれど鶯のこゑのひまより散るさくらかな

名所鶯

根芹つみ誰かきくらむ白鳥のとばたの原の鶯のこゑ

若菜

かすが野に若菜をつめば我ながら昔の人のこゝちこそすれ

踏み分けて人の摘むらむけふなこそわかなも雪の下に待ちけれ

とし／＼にわかなといひて摘みしかど積ればこれも老の數なり

佛光寺御門主の御會始に若菜知時といふ事をよませたまふに

けしきをもしたに知りぬる春日野の若菜は春の妻にやあるらむ

水邊若菜

河岸にもゆるわかなは青柳の影のみどりとひとつなりけり

田若菜

をとめらが袖こそ匂へ紅のにふの山田に根芹摘むとて

小山田の根芹つむこそ賤の女がうきにおりたつ初めなりけれ

春雪

○としのうち　古今集の初に「年の内に春は來にけり……」とある。年の内はふる年の内をいふ。

春がすみたな引きそめし高砂の松のうは葉にあわ雪ぞふる

山ざとの梅のほつえにふる雪のたまらぬ春になりにけるかな

殘雪

かげろふのもゆる春日に殘りけりきえぬばかりの峯の白雪

足曳の山すがのねにむすぼほれ解けがてにする去年の雪かな

餘寒

梅がえに春と鳴きつる鶯のゆくへも知らず雪はふりつゝ

梅

片岡のうめのさかりになりしよりあしたの原は匂ひなりけり

たが宿の梅のたち枝にふれつらむ今朝ふく風ぞ香に匂ひける

梅度年香

としのうちに咲きつる梅の初花もけさより匂ふ心地こそすれ

毎年愛梅

岡の邊に家居せしより梅のはな折りてかざさぬ春なかりけり

月前梅

闇よりもあやなきものは梅の花見る〳〵月にまがふなりけり

○ぬば玉の　闇の枕詞。

○すがのねの　長き、亂る、根などいふ語の枕詞。

清月上梅花

いかなればにほへる梅の花の上にいでたる月のかすまざるらむ

暗夜梅

めにみえぬ梅の匂ひは春の夜の闇こそいとゞさやけかりけれ

梅が香の匂はさりせばぬば玉の闇の春をば誰か知らまし

山家梅花

あらしのみ吹きとわびつる山里は梅の匂ひになりにけるかな

雪と見て人や來さらむ山さとの垣ねの梅は今さかりなり

梅香留袖

こゝろのみゆきて折りつる梅の花あやしく袖の匂ひけるかな

柳

うちはへし柳の絲はすがのねのながき春日にあはせてぞよる

柳露

青柳の絲吹きみだすはる風のたえまを露は結ぶなりけり

うちなびく柳の絲のながければむすびあまりて露や落つらむ

夕　柳

けふもまた暮き〳〵てながき日の夕にかゝる青柳のいと

故郷柳

かへりきゝしとけども解けずなりにけり結び置きつる青柳の絲

水郷柳

みしま江のたまえの里の河柳色こそまされのぼりくだりに

遠村柳

山もとにたてる煙も青柳のなびくかたにと靡く春かな

春草漸

道の邊に駒のふみしくからなつな下にや春を萌えわたるらむ

早蕨

かすが野の若芝の初わらびたがゆかりより萌えいでにけむ

早蕨未遍

みよし野のみすゞがしたは風さえてまだ萌え出でず春のさわらび

春月

春の夜をおぼろ月よといふことは霞のたてる名にこそありけれ

ながめてもおもはぬ誰か春の夜の霞を月にゆるし初めけむ

○みしま江のたまえの里　攝津國三島郡三島江。たまえは之れの美稱。

○みすゞ　みは接頭語、すゞは竹の一種で小さきもの。シノ。サヽ。

○いなさ細江　引佐細江。遠江國濱名湖の一支灣引佐峠の東南に横たはる。
○たくなは　栲繩、長きといふ語の枕詞。

春月朧

おほつかなおほろ〳〵と吾妹子が墻ねも見えぬ春の夜の月

春曉月

鶯のあかつきおきのはつ聲にいまはとしらむ春の夜の月

春夕月

あまりにも春の日影のながければ暮るゝもまたで月は出にけり

山家春月

世の中の春にはもれし山ざとの月の光も霞むころかな

柴の戸に鳴きくらしたる鶯の花のねぐらも月やさすらむ

題しらず

旅にして誰にかたらむ遠つあふみいなさ細江の春の明ほの

伊勢の海の千尋たくなはながき日も暮れてぞかへる蜑の釣舟

歸鴈

はる〳〵と霞める空をうち棄れてきのふも今日も歸るかりがね

花をこそまち渡りつれ鴈がねのかへる空にもなりにけるかな

草枕たびを常なるかりすらも歸る空には音をぞ啼きける

深夜歸鴈

春の夜の朧月夜にねざめしてたへずや鴈の思ひたつらむ

歸鴈　少

花によりたゞ〳〵殘るかりがねも今はとこそはおもひ立つらめ

旅にありける年の春鴈のこゑを聞きてよめる

なきかはし歸るをきけばかりがねの數につらなる心地こそすれ

すゞな咲きたる野に畑うつ賤のうちさしてあがる雲雀をあふぎ見たる所のかた

おもしろくさへづる春の夕雲雀身をば心にまかせはてつゝ

題しらず

雲雀あがる野邊にきゞすも聲たてつ子ゆゑになかぬものなかりけり

世の中へよぶ人おほし呼子鳥なくなる山はのどけきものを

前の右のおほいまうち君ひむがし山の花御覽じけるついでわが岡崎にたち入らせ給ひし父の日のつどひに山家春といふことをよめる

山ざとは春そうれしき百式（もゝしき）の大宮人の音づれにけり

○なきかはしたるの歌　鴈の聲を聞きて歸心起るをいへり。

○身をば心にまかせ　思ふがまゝにさへづり舞ふこと。

〇ことしもやの歌　花故に心の焦がるゝさまをいふ。

〇青根が嶺　吉野山の東嶺。

〇見るべきものを　花の咲くのが霞のたなびく時で無かつたら、さやかに見られるのに。

ことしもやまた中空にあくがれむ咲けりとみゆる山櫻かな

大空のよそに思ひししら雲にこのごろまがふ山ざくらかな

みよし野の青根が嶺のしらくもはまがひもあへぬ櫻なりけり

林中櫻

常みればくぬぎ交りの柞原(はゝそはら)春はさくらのはやしなりけり

田家櫻

しづの男がかへす墻(かき)ねの小山田にまけるがごとく散る櫻かな

山花未開

うちはへて霞みわたれる昨日けふさかぬもをしき山櫻かな

尋山花

たづねばやみ山櫻はとしどしのわれを待ちても咲かむとすらむ

尋花處不定

おほかたの花のさかりを心あてにそこともいはず出でしけふかな

霞隔花

さやかにも見るべきものを春霞たなびくときに花のさくらむ

花似雲

風ふけばみだるゝまでを山ざくらなにぞは雲にまがひそめけむ

曙山花

ほの〴〵とたな曳きあくる雲のうへにあらはれ初むる山櫻かな

遠村花

うちわたす遠山もとの垣ねまでおりゐる雲はさくらなりけり

故郷花

ともに見しひとも今はなし故郷の花のさかりに誰をさそはむ

故園花自發

いにしへは大宮人にまたれても咲きけむものか志賀の花園

關花

あふ坂の關の杉むらしげけれど木の間よりちる山ざくらかな

社頭花

ちらずとも幣（ぬさ）ならましを神垣のみむろの花に山風ぞふく

河上花

大堰河かへらぬ水に影見えてことしもさける山ざくらかな

花交松

○いにしへは大宮人に　萬葉集巻一に「さゝなみの志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ち兼ねつ」

○花ちれば　散りて後人の薄情を知る。

のどかなる嵐の山を見わたせば花こそ松のさかりなりけれ

花有開落

とふ人もなき山かげの櫻花ひとり咲きてやひとり散るらむ

落　花

みな人の心にあかぬさくら花ちるよりこそはうらみ初めつれ

夕　落　花

梢ふく風もゆふべはのどかにてかぞふるばかり散るさくらかな

落花浮水

終にかくさそふは水のこゝろとも知らでや花のうつりそめけむ

池上落花

池水の底にうつろふ影のうへにちりてかさなる山ざくらかな

花落客稀

花ちればふたゝびとはぬよの人を心ありとも思ひけるかな

暮春落花

限りあればとまらぬ春のおほ空にゆくへは見えてちる櫻かな

萎花蝶飛去

このさとは花散りたりと飛ぶ蝶のいそぐかたにも風や吹くらむ

殘花少

ひとさかりありての後の世の中に殘るは花もすくなかりけり

人の賀に花有喜色といふことを

たれもみなうれしき色は見ゆれどもゑみほころべる花ざくらかな

志賀山越

逢坂のゆきかひまれになりぬらむ志賀山ざくら花さきにけり

江山春興多

おほゐ河入江の松に降る雪は嵐の山のさくらなりけり

あらし山の花見にまかりけるときよめる

龜山はあらしのさくらいくそたびはきて散る世の春をみつらむ

大堰河早瀨をくだす筏士(いかだし)ものどかに見ゆる花のかげかな

舟にやどりて

おほゐ河ちる花までは見せぬこそ朧月夜のなさけなりけれ

また雨のふりける日に

あらし山落つるも花のしづくにて雨さへをしきこゝちこそすれ

〇遠山人の洞のうち　仙人の住む處。

〇ありともなしに　有るが如く無きが如くぼんやりと。

清水寺の夜の花見にまかりてよめる

いにしへの花のかげさへ見ゆるかな車やどりの春の夜の月

照る月の影にてみれば山ざくら枝うごくなりいまか散るらむ

遲日

つたへきく遠山人の洞のうちもかくこそあるらしけふの日ながさ

おほぞらのおなじ所にかすみつゝゆくとも見えぬ春の日の影

題しらず

空にのみあくがれ果ててかげろふのありともなしにくらす春かな

燕來

かたらはむ友にもあらぬつばめすら遠く來たるはうれしかりけり

苗代

をやまだのなはしろ水は底すみて引くしめ繩のかげもみえつゝ

雨後苗代

はるさめの日ごろふりつるをやまだの苗代水はけふも濁れり

款冬

山しろの井手の玉水くみにけり影まで見つる山吹のはな

○かへる　歸ると蛙とを掛ける。

岩がねに浪をよきても咲きにけりよし野の瀧の山ぶきの花

河款冬

筏おろす清瀧河のたきつ瀬に散りてながるゝ山吹のはな

雨夜思藤花

よもすがら松のしづくのひまもなしうつりやすらむ藤浪の花

暮春

花は散りて春もかへるのちからなき聲のみ殘る夕まぐれかな

賀茂川のほとりにすみけるころ河暮春といふこゝろをよめる

とし〴〵に流るゝ春を河なみのかへる〳〵と思ひけるかな

夏歌

題しらず

梢みな青葉の陰になりぬれど花の盛りをいはぬ日ぞなき

卯花

わか宿の墻ねに咲ける卯の花は鄰に知らぬ月夜なりけり

卯花似雪

山ざとの夏のしるしのうの花をあやなく雪にまがへつるかな

夕對卯花

白妙のうの花がきの夕づく夜さすとはなしに物ぞかなしき

卯花隱路

うの花の露ふむ小野の山陰は浪にぬれ行くこゝ地こそすれ

山家卯花

郭公なくといふなる山ざとのかきねもたわにさける卯のはな

葵

神山のみあれの後のあふひ草いつを待つとて二葉なるらむ

葵露

あふひ草日影になびく心とも知らでや露の置きかへるらむ

郭公

ほとゝぎすしのぶが原に鳴く聲をねらひがりする人やきくらむ

心から深山いでてもほとゝぎすよをうの花のかげになくらむ

粟田山松の葉埋むしら雲のはれぬ朝けになくほとゝぎす

尋郭公

○みあれ　賀茂社にて四月中酉日に行ふ祭、又葵祭とも北祭ともいふ。

○よをうの花　うに憂と卯の花とを掛けてゐる。

ほとゝぎす山のおくまで尋ねきてなかぬ年かと思ひけるかな

待郭公

ほとゝぎす姿は見えぬものゆゑに閨の板戸をあけてまつかな

八重むぐら雲路にまでや障るらむ訪ひがてにするほとゝぎすかな

與女待郭公

妹とわがふたり聞かむの一聲をねたくも惜しむほとゝぎすかな

遠聞郭公

郭公鳴くなる空の遠ければなほしのび音のこゝ地こそすれ

月前郭公

さやかなる月ゆゑだにも寐られぬを山郭公啼く夜なりけり

郭公たゞ一聲の名殘ゆゑ明方までの月を見しかな

雨後郭公

夕ぐれの雨のはれまを足曳の山ほとゝぎす鳴きてすぐなる

郭公一聲

時鳥老のねぶりのうれしきは只一聲に覺むるなりけり

五月をやまちかね山のほとゝぎすこよひ一聲鳴きていづなり

○八重むぐら　八重むぐらが雲路まで邪魔をするのだらう、我が宿に郭公の來ないのは。

○亂れそめけむ　山にのみ鳴くと思ひし郭公をかくも遍く聞くことの出來るのは郭公の心の亂れに依ることであらう。

○打ちぬるひまに　關守の寐た暇に。

郭公遍

あし引の山ほとゝぎす山にのみ鳴きし心や亂れそめけむ

野郭公

ほとゝぎすなくねほのかに聞ゆなり遠里小野の松の村立

關郭公

關守の打ちぬるひまに通ふらむしのび音に鳴くほとゝぎすかな

社頭郭公

あし引の山田の原のほとゝぎすまつ初こゑは神ぞ聞くらむ

郭公稀

初聲を一聲啼きていにしより山ほとゝぎすことづてもせぬ

郭公歸山

時鳥かへる山には聲もなし世にふるほどや鳴きわたりけむ

菖蒲

あやめ草かりにのみくる人なれば池の心や淺しとおもはむ

刈りふけば軒ばにあまるあやめ草根のみ長しと思ひけるかな

澤菖蒲

住の江の淺さはぬまのあやめ草松とかはせる根ざしなるらむ

盧橘薫袖

たちばなのなつかしき香に匂ふ夜はわが袖ならぬこゝ地こそすれ

匂ひをばいかにせよとか橘のはな散る袖に風のふくらむ

五月雨

降りそむる今日だに人のとひ來なむ久しかるべきさみだれの雨

すむ人の袖もひとつに朽ちにけり草の庵のさみだれのころ

五月雨欲晴

五月雨の雲間に見ゆる夏山はやがても空のみどりなりけり

五月雨晴

みよし野の瀧津河内はさみだれの晴れて後こそ音まさりけれ

夏雲

大空のみどりに靡く白雲のまがはぬ夏になりにけるかな

夏山

降る雪にうづもれながらさみだれの雲間をいづるこしの高山

水無月の空にかさなる白雲の上に奇（くす）しき峯はふじのね

○たちばなの　古今集に「五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

○降りそむる　五月雨の降りしきらぬうちに誰か訪ひ來よかし。

夏衣

なれがたく夏の衣やおもふらむ人のこゝろはうらもこそあれ

水鷄

卯の花の墻ね見えゆく曙にそこごとも知らず水鷄(くひな)なくなり

夏月

とけてねぬ子もち烏の一聲にやがて明け行く月のかげかな

樹陰夏月

夏深み木がくれおほき山さとの月の光はふけてなりけり

なかなかにならの若葉の廣ければかへるひまより月ぞ見えける

題不知

大空に月は照りながら夏の夜はゆくみちくらし物陰にして

夏むしのけちなむとする燈の影だにまたであくる夜半かな

夏草

蓬生の庭の夏くさおり立ちて拂ひしまでぞ人もとひけむ

風前夏草

風ふけば秋にかたよる聲すなり夏野のすゝき穂にもいづべく

○夏衣　人の心には表裏あれど夏の衣に裏なきを見て歌ふ。

○けちなむ　消えん。

河岸のねしろ高がや風ふけば波さへよせて涼しきものを

夏草露

陰ふかき蓬が末をふく風にけさもこぼるゝ五月雨の露

蜻蛉(かげろふ)のとぶひの野邊の夏草もわくればしたに露こぼれけり

江戸にありける時野夏草といふ事を

むさし野は青人草も夏深し今さく御代の花のかげ見む

題しらず

はる風に角ぐみそめし津の國の難波のあしは今ぞかるらむ

鵜川

夜河すとたく篝火は後のよの影みなそこに移るなりけり

名所鵜川

さつきやみくらはし河にはなつ鵜も心と身をば沈めざりけり

悲しくもうぶねさすなり長柄川ながらへはてぬこの世と思ふに

螢

陽炎(かげろふ)のもゆる夏野の澤水に夜たつ影は螢なりけり

夏來ても人はすさめぬわが門の板井の水にほたる飛ぶなり

○ねしろ高がや　根白高萱河水などにて洗はれて根の白　出でたるをいふ。

○むさし野は　野草等の語を假りて今繁昌せる江戸を歌へるもの。

○心と身をば沈めざりけり　好んで身を水中に沈めるのではなかつた。

雨中螢

こも枕高瀨のよどにふる雨のかずより繁くとぶ螢かな

深夜螢

小夜更けてもゆる螢の影見れば今はと聲もたてつべきかな

澗底螢

ふるあめにともしは消えて箱根山もゆるは谷のほたるなりけり

螢照水草

夏川のみくまがくれのみだれ藻による咲く花はほたるなりけり

風わたる水のおもだか影見えて山さはがくれ飛ぶほたるかな

海邊見螢

蘆間とぶほたるの影のなかりせばよる滿つ汐をいかで知らまし

蚊遣火

いをやすく寢むためこそはおく蚊火の煙(けぶり)に夜たゞ打ちむせびつゝ

奧山のむろの妻木をたきたてゝかやりせぬ夜もなきすまひかな

夕立

をとつひも昨日も降りしゆふ立はけふもふるべし雨つゝみせむ

○風わたる　螢の光によりて水中の風に搖ぐ澤瀉の影がチラホラする光景。

○いをやすく寢む　やすく寢むといふに同じ。

○雨つゝみせむ　雨籠をしよう。

ゆふ立は愛宕の峯にかゝりけり清瀧河ぞいまにごるらむ

夕立早過

あまりにもゆふだつ雲の早ければ雨のあとだに残らざりけり

湊夕立

茜さす日はてりながら白背の湊にかゝるゆふだちのあめ

夏浦夕

うら風は夕涼しくなりにけり海人の黒かみいまか干すらむ

扇

草も木も知らぬあひだの秋風はあふぎの陰にやどりてぞ吹く

閨中扇

今はとて打ちおくねやの扇かなぬるまや秋の心なるらむ

扇罷風生竹

ならしつるあふぎの風と思はましおくれて竹のそよがざりせば

避暑

うつせみの此の世ばかりのあつさだにのがれかねても歎く頃かな

泉

○今はとて打おく　さめてをれば三伏の熱さ、眠れば秋の涼しさある心を詠む。

○からでも結ぶ　思はず江上に假寢せるをいふ。刈りもせずして菰枕を結んだよ。

○すゞみてを來む　をは感動詞、みてまあ來よう。

心してくむべきものを山水のふたゝびすまずなりにけるかな

山かげの淺茅がはらのさゞれ水わくとも見えずながれけるかな

泉爲夏栖

なつくれば世の中せばくなりはてて清水の外にすみ所なし

曉風如秋

水無月のあかつきおきに吹きにけりまだ立ちあへぬ秋のはつ風

納　涼

鳴くせみの聲の時雨はふらねども衣手寒き松風ぞふく

やまかげの岩井の清水くみ／＼て照る日戀しくなりにけるかな

江上納涼

よる浪の玉江の月のすゞしさにからでも結ぶ菰（こも）まくらかな

河邊納涼

川上のたゞすの森の陰もよしすゞみてを來（こ）む夜の更けぬまに

松高風有一聲秋

わが宿の松なかかりせば大空の風をあきとも誰かさだめむ

夏神祇

さらでしも神の心は涼しきに浪のうへなる川やしろかな

六月祓

夏川の淵は瀬になる恨みをもけふのはらへに誰か殘さむ

いすゞ河すゞしき音になりぬなり日もゆふしでにかゝる白浪

秋歌

初秋風

今よりのあきのはつ風心あらばもの思ふ袖はよきて吹かなむ

初秋露

片岡のあしたの原に秋たちて亂るゝものとなれる露かな

玉ざゝの葉分の風におどろけばことしも秋の露ぞこぼるゝ

秋來水邊

みよし野のみくまが菅のしたにのみ吹きける秋の風たちぬなり

題不知

旅人のもてるくしげの箱根山明方寒し秋やたつらむ

かへるべきかぎりも知らぬむさし野の旅ね驚く秋の初風

○けふのはらへに　色々の恨みも一切今日の祓ではらつてしまつた

○日もゆふしでに　ゆふは夕と木綿四手と兩方掛けてゐる。

○旅人のもてるくしげの　以上、箱の緣語なり。

○夢もあらじ　夢を結ぶ間も無き束の間の逢ふ瀬を邪魔する秋の初風よ。

○みるめは海人の心ありけり　海松布には海人の心がこもつてゐる

○たなばたに心をかして　たなばた姫が一日千秋の思ひで待つ心を推量して。

七夕

雲がくれ逢ふとはすれど棚機の度かさなれば名は立ちぬめり

棚ばたの雲の衣は夢もあらじ吹きなかへしそ秋のはつ風

小車の牛のあゆみの一年はめぐるおそしといかに待ちけむ

七夕雨

晴れながらふりくる雨はたなばたの逢ふ夜うれしき涙なるらむ

七夕船

はるかなる年のわたりも限りあれば漕ぎよせけりな天の河舟

七夕後朝

一とせをまたむわかれに衰へて花のかづらもしぼむ今朝かな

海邊七夕

たなばたの手向草とは刈らねどもみるめは海人の心ありけり

霧中七夕

ましらなく山下水にかげ見れば星合の空も袖ぬらしけり

憶牛女述懐

たなばたにこゝろをかして願はくはわが一とせも長しと思はむ

曉荻風

かぎりあれば覺めなむとする明方の夢のすゑふく荻のうは風

外に出でてすみける年の秋よめる

この秋はふるさと人の音信に吹くとのみ聞く風のうは荻

萩

さをしかの妻とふ野邊の秋はぎは下葉よりこそ色づきにけれ

ひとよにやたなばたつめの織りつらむけさしも萩の錦なるかな

高臺寺の萩見にまかりて

ふるでらの高きうてなの唐錦たち殘しけむ秋萩の花

○たち殘しけむ秋萩の花　此の園に美しく咲ける萩の花はあのうてなに飾られたる唐錦の裁ち殘されたのであらう。

薄

紅の淺葉の野邊のしのすゝきほに出でたれどいまだ亂れず

古郷の野中の道にやすらへば風にひれふる篠のをすゝき

薄隨風

秋かぜに薄の絲をよらせつゝたが縫ひ出でし草のたもとぞ

ひとかたになびきそろひて花薄風ふく時ぞみだれざりける

行路薄

旅人の袖とひとつになりにけり末の原野のしののをすゝき

薄似袖

おしなべて知るも知らぬも招くこそ尾花が袖の心なりけれ

刈萱

かくばかりなぞや心はみだるらむ野邊のかるかやかりそめの世に

刈萱亂風

秋かぜのふかぬさきだにあるものをけさ刈萱のしどろなるかな

庭栽野花

いろ〳〵の花のかぎりをうつし植ゑてあれぬ庭をも野とぞなしつる

槿

露にだにうちとけやすきあさがほの花のひもふく秋の初風

槿花未開

葉がくれをまだ明けぬ夜と思ふらむ咲かむともせぬ朝顏の花

露

秋風にそよぐもののゆゑ小篠原一夜もおちず露の置くらむ

かぜのまもみだるゝ秋のしら露を結べるものと思ひけるかな

○野邊のかるかやかりそめの　かるかやは「みだる」にかけ、かりそめは刈りにかけた。

○花のひも　朝顏のつる。うちとけやすきにかけていふ。

○露も心をおかぬ　我が庭の荒れたるにより露も遠慮なく置いてゐる。

草も木もぬるゝ夕の露見れば人は物をも思はざりけり

露　朧

さを鹿にしがらみかくる秋萩も露をばえこそとゞめざりけれ

庭　露

眞砂にもおくらむ露を打ちなびき一むらみする庭のを薄

荒庭露滋

あさぢふの野邊とひとつになりしより露も心をおかぬ宿かな

枕邊露

秋の夜のながき夢路のしをりには結ぶ枕も露けかりけり

蟲

鳴く蟲の聲ふりたつる秋の野を寂しかるべく思ひけるかな

われはかりうき夕かと思ひしを暮れてぞ蟲も鳴きはじめける

聞　蟲

更けぬればかたぶく月とわれならで聞く人もなき蟲の聲かな

枕上聞蟲

むしのねの近き夜半かな枕とて草は結ばぬ旅ねなれども

閑庭蟲

蟋蟀（きりぎりす）むかし契りし誰なればきては枕のもとになくらむ

叢蟲

八重葎しげきが下の露けきをひるだにわぶる蟲のこゑかな

さやまだの穂屋のすゝきの一むらにあつめても聞く蟲の聲かな

みさをにも螢のもえし草むらに堪へずや秋のむしは鳴くらむ

松蟲

秋の夜を千年とたのむ松むしの聲霜にこそうら枯れにけれ

鈴蟲

ひまもなき時雨のあめに鈴蟲のふりならされてよわる聲かな

秋田風

おりたちて昨日かつみし芹川の竹田の原に秋風ぞふく

故郷秋風

身にぞしむ鶉（うづら）なくまで住みすてし誰がふるさとの野べの秋風

題しらず

關越えて行く陸奥はいかならむわがしら河も秋風ぞふく

○みさをにも　心を變へずに。

○うら枯れにけれ　霜が來ては松蟲の聲もなんとなく衰へてしまつた。

秋夕

さもこそは物の悲しき秋ならめ夕日にさへもぬるゝ袖かな

いかにせむ荻のうは風吹きよせて夕まぐれにもなりにけるかな

關屋秋夕

旅人の涙ばかりはとゞまらぬ關のわらやの秋のゆふぐれ

故鄉秋夕

いかならむわがまだすみし昔だに悲しかりつる秋の夕ぐれ

田家秋夕

山しろの鳥羽田の里のゆふぐれを見ぬ人しもや秋は悲しき

駒迎

逢坂の山の雫にぬれつらむふしてぞ見ゆる駒のくろ髪

雨中駒迎

雨ふりてくらき夜半だにあるものをけふ引く駒は甲斐の黑駒

稻妻

ふし見山まつの木の間の稻妻に鳥羽田の面の露を見るかな

秋雨

○いかならむ　昔物思ひなく住んでゐた時でも秋の夕暮となれば悲しくなるのであつたのに、況して今遊子となつて故鄉を訪ひし身には秋の夕暮はいかに。

○鳥羽田の里　鳥羽田の里の夕暮を見ずして秋の悲しさを言ふ勿れか。

○駒迎　昔八月駒ひきの時諸國より牽き來る駒を近江國逢坂關まで出迎つたこと。

○ほにいづ　よく目につくこゝろ。

わが宿の露ほにいでてむらさめの降る日さむくもなれる秋かな

山路秋雨

雨にとくなりぬるものをすゞか山霧のふるのと思ひけるかな

秋時雨

長月の有明の月の限もなく照る夜と思へばしぐれふるなり

月

大かたはうときものなる大空もすむ月ゆゑは睦まじきかな

闇もなく常にかくてる月ならば夜をぬる人はあらじとぞ思ふ

雲間待月

すむ月も今か見ゆらむ大空にまつ雲間こそあらはれにけれ

愁人對月

思ひあれば哀れとあふぐ大空に月もひとりぞながめがほなる

對月待客

來む人は何にか今夜さはるらむ月にくもまのあらばこそあらめ

深夜月

物おもふとねられぬ閨の窗を明けてこよひも見つる有明の月

○今こそあれ　今獨り月を見るに當り嘗て共に見し昔をしのびて言へるもの。

閑夜月

ながむれば夜たゞこゝろもすむ月に音せぬ松の風ぞ吹きける

曉出月

さしのぼる月の光と思ひしはやがても空のあくるなりけり

獨見月

われひとり月にむかふと思ひけりこよひの影を誰か見ざらむ

今こそあれ獨りのみにもあらざりし昔の秋を月やとふらむ

月前風

更くる夜の月は雲居にしづまりて袖にのみふく秋の風かな

雲收月明

山の端に棚引きしづむ白雲の上よりいづる秋の夜の月

山月明

殘りなくあらはれにけり山松の葉ごしに見えし秋の夜の月

山月聞鐘

高砂のをのへの月や更けぬらむ澄みわたりぬる鐘のおとかな

峯月照松

○いたづらに思ひし　何の風情もなしと思ひし峯の松も。

○臥待の月　寢待の月ともいふ陰暦十九日の夜の月。

○のぼる露　露のむすぶこと。

いたづらに思ひし峯のひとつ松今宵月こそ澄みのぼりけれ

月前松

松陰に立ちかくれても見つるかなあまりに月の隈しなければ

松間月

洩らすべき松の木の間の心とも知らでや月のかくれ初めけむ

松月夜深

さをしかの妻よぶ山の松の葉もあらはれ初むる有明の月

月夜聽松風

澄む月の更けゆくまゝに聞えけり吹きもおろさぬ峯の松風

竹間月

くれ竹の一夜〳〵におくれ來て葉ごしになりぬ臥待の月

月前竹露

吳竹のふしもあらはにてる月の影におくれてのぼる露かな

月照流水

行く水の末はさやかにあらはれて河かみくらき月のかげかな

八月十四日の夜月いとさやかなりけるに

此のうへの明日の光ぞ待たれけるみちぬは人の願ひなりけり

十五夜月

たぐひなくすめる月かなうべしこそ今夜と人も待ちわたりつれ

十五夜月明

今夜とていつもかくやはてる月の光や今年あらたまるらむ

雨降りける年

立ちいでてむかふかひこそなかりけれ雲の最中の秋の夜の月

故郷月

波の上をあれぬ所とやどるらむ大津の宮のあきの夜の月

月前思故郷

いづくにか今は住むらむと故郷の月もや我をおもひ出づらむ

水郷月

橘の小島が崎に月すめばやそ宇治人ぞいねがてにする

田家月

さをしかの聲ばかりこそ聞えけれひたうちわすれ月や見るらむ

岡月

○うべしこそ　十五夜の月こいうて人の待つのも尤もである。

○雨降りける年　名月の夜に雨の降りし意。

○橘の小島が崎　宇治橋の南橋姫社の近く。
○やそ宇治人　多くの宇治人。
○ひたうちわすれ　誰も皆何事も忘れて。

〔〕かひの山なしの岡　何の効もない甲斐の山梨の岡は。

〔〕九月十三日　陰曆九月十三日は後の名月、「後の月」ともいふ。

こゝにしてみれども月はかくれけり何ぞとかひの山なしの岡

關路月

浪のうへの月をきよみが關にきてわれこそ今夜守り明かしけれ

浦月

月は今うしろの山に出でぬらむあらはれ初むる須磨のうら浪

九月十三日あきの國へかへる人をおくりて

雲のなみたたずもあらなむ長月の月見て夜船こぐ人の爲

病にわづらひける年の十三夜に

あらざらむ後と思ひし長月のこよひの月も此の世にてみし

月前萩

置く露にかねてうつろふ秋萩の下葉までこそ月は問ひけれ

月前菊

はつ霜はまだ置きなれぬ宵々の月に移ろふしらぎくの花

月前蟲

照る月の光はうとき蓬生の庭にみちたるむしの聲かな

月前船

○秋のよながき　よは夜と節とを掛ける。

○鷲の山　靈鷲山。釋迦の說法せし山。

ますかゞみみぬめの浦の沖津洲に舟人さわぐ月や出づらむ

月前笛

聲のうちに月もすみ行く笛竹は秋のよながきふしやきりけむ

寄月釋教

眞をばまだあらはさで光のみはなてる鷲の山の端の月

三熊野のかたに

みくま野の浦漕ぐ舟のほの〴〵と見えわたるまで澄める月かな

月の前に鴈鳴きたるかた

打ちかはす鴈の羽かぜに雲消えて照りこそまされ秋の夜の月

鴈

中々にかはらぬものはかりがねの空に定めし契りなりけり

秋風のふかばと誰に契りけむさそはれわたる初鴈の聲

風前鴈

山かぜをつばさにうけて飛ぶ鴈は思はぬかたによると鳴くらし

夕鴈

山の端のとよはた雲にうちなびき夕日の上をわたるかりがね

○しげ山も端山の歌　新古今集に「筑波山端山繁山繁けれど思ひいるには障らざりけり」といへるに語をとれど趣を異にす。○行く水のくもで　蜘蛛の足の如く八方へ流るゝ水。

山家雁

やまざとの墻(かき)ねの眞萩色づきてかりがね鳴きつ秋たけぬらし

旅泊雁

かり／＼と何ぞはよたゞ名のりその浮寐悲しきゆらの湊に

遠山霧

しげ山も端やまもわかぬ霧の上にほの／＼見ゆる筑波山かな

橋上霧

行く水のくもでにかくる八橋を霧はひとつにたちわたりけり

林間霧

朝霧のうき田の稲はかりつらむ色づき初むる大あらきの杜

關路曉霧

相坂の關の杉むら霧こめて白みかねたる有明の月

河霧

河かぜに吹きながさるゝ朝霧のいかなるせにか消えむとすらむ

遠村霧

山崎をわが立ち來れば朝ぎりの絶間に見ゆる櫻井の里

○秋さり衣　秋になりて著る。

○ねられねば　妹こひしきまゝに只さへ眠られぬのに衣擣つ音まで加はつて來て益ねられない。

擣衣

やまがつが秋さり衣よひ〳〵にうつ聲たかくなりまさるかな

曉擣衣

小夜更けて音こそかはれ唐衣巻きかへしても打ちすさむらむ

有明の月より聲ぞひゞくなるねざめて誰か衣うつらむ

山家擣衣

わが山にまた誰すみて唐衣うつなる音のことし聞ゆる

海邊擣衣

かへり來ぬ夜船待ちこひ三保の浦の沖津の蜑や衣打つらむ

旅宿擣衣

ねられねば妹こひしきを唐衣うつなる里に何やどりけむ

鴫

宇多の野に鴫が羽かく音高しわな張る人の聲もこそすれ

澤畔鴫

明けぬとて鴫はたてども大澤の蘆間の月は影もさわがす

伏す鴫の羽かきはらふひまもなく澤邊の夜露いかにしげけむ

○この殿の高きにのぼり　九月九日に高き處に登り茱萸を頭に挿んで遊べば惡氣を避け初寒を防ぐといふ。

○かれぬ友　離れない友。

○いかに契りを　菊花の露はつもれば若くなると聞いたが自分が相變らず老いてゐるのはいかに間違へたのだらう。

故鄕野分

古鄕のしののあら垣野分して葎（むぐら）のとぢめ綻（ほころ）びにけり

宮の御會に重陽宴といふ事を

この殿の高きにのぼり酌む酒はやがて山路の菊の上の露

菊露

白ぎくの花の盛りになりにけりおくらむ露の千代の數見む

菊花久

露霜の色ぞまことにうつるらむいよ〳〵しろし白菊の花

菊閑中友

霜をへて匂ふしら菊これのみぞかれぬ友なる蓬生の宿

菊制頽齡

舟よせて老いぬ藥をえたるかな龜の尾山のしら菊の花

老對菊

つもりてはわかゆときくの花の露いかに契りをかけたがへけむ

菊映水

いづくより駒うちいれむさほ川のさゞれにうつる白菊の花

題しらず

吹く風の身にしむ色に出でにけり草木も秋や悲しかるらむ

尋紅葉

きのふけふ飛鳥の里もしぐるらむ眞弓の岡は色づきにけり

紅葉淺

山めぐるしぐれの雲にあひにけり染めたる陰や有ると問はまし

はつ時雨ふりしばかりの跡みえて梢のみこそ色づきにけれ

みな散りし後にそめむともみぢ葉の淺きは深きこゝろなりけり

松間紅葉

山松の木のまに見ゆる年々の紅葉も色はかはらざりけり

松ばかりたてりと見えし大原のをしほの山も色づきにけり

あるゆふべ内の御局わたりより紅葉のいとめでたきを白かねのかめにさしこめて給ひたる

雲居よりさして來にけるもみぢ葉の色は夕日のこゝちこそすれ

とりもあへずいたゞく枝のもみぢ葉をやがてかざすと人や見るらむ

もみぢ葉の色ばかりこそゆるされめ雲のうへまでゆく心かな

○色ばかりこそゆるされめ　朝廷の服制にて、五位以上は緋、三位以上は紫、紅葉の色を許されることはやがて昇殿を許されることと同じといふ意。

題しらず

鵙のなく夕日の岡の秋はぎは末葉までこそ色づきにけれ

時のまにくるゝを見れば朝がほの花に日影もおくれざりけり

暮秋

何ならぬ限りも物はかなしきにあはれなりける秋の暮かな

暮秋霜

ことわりに過ぎても寒し長月の有明の月に霜や置くらむ

○何ならぬ限り「心なき身にも哀は知られけり」と趣を同じうす。

桂園一枝　月

冬歌

時雨

神無月朝の雲のさだめなき誰が契りより時雨れそめけむ

大空は吹きのみ拂ふ山風にくもりかねても降るしぐれかな

君の一周忌に時雨といふことを

冬立ちてけふみか月のありてなき影もかきくらし降る時雨かな

世の中を浮きたる雲と見し日より袖はしぐれぬ時なかりけり

風前時雨

浮雲は影もとゞめぬ大空の風に殘りて降るしぐれかな

山時雨

うき雲のあはたの奥やしぐるらむ音羽の山ぞ見えずなり行く

關路時雨

すゞか山雲も關路にかゝりけりしぐれぬさきにいかで越えまし

○浮きたる雲と見る　おぼつかない不安な氣がする。

○越えまし　ましに願望の意がある。

○穴師河　播磨國宍粟郡にあり。

川時雨

貴船川岩こすなみの早き瀬に立ちかへりても降るしぐれかな

里時雨

けふも又しぐれの雨にぬらしけり木曾の麻ぎぬさらしなの里

河上落葉

穴師河かれたる水の音きけば木の葉のなみの騷ぐなりけり

山河の岸をひたりて行く水にぬるでのもみぢ散らぬ日ぞなき

閑居落葉

おのづからふむ人もなき我が門の桐の落葉の露のさやけさ

殘菊

菊の花あまり久しくなりぬれば霜さへにこそ置きわすれけれ

寒叢見殘菊

ふるさとの蓬がはらの冬枯にあらはれそめし白ぎくの花

殘菊馴雪

きのふまで老いせぬ色に見しものを雪をいたゞく白菊の花

題不知

○つらゝ　水、氷柱

○たゞにやは　唯寒いとはいはれまい。

○あぢむら　あぢ鴨の羣。

夜をさむみねざめ〳〵て明方の霜とともにも結ぶ夢かな

神無月音せぬものに驚くはきのふの氷けふのはつゆき

氷

ことさらにけさより寒し神無月こほりぞ冬のはじめなりける

氷閉細流

岩間ゆく水のこゝろのせばければつらゝに思ひむすぼほれつゝ

冬月

つく〴〵と今年もながめ果てにけり哀れとおもへ冬の夜の月

寒月

てる月の影の散り来る心地してよるゆく袖にたまる雪かな

寒月照梅花

たゞにやは寒しといはむ冬ながら梅さく庭にてれる月夜を

寒夜千鳥

神山の夜半の木がらし音さえてみたらし川に鵆（ちどり）なくなり

題しらず

あし引の山邊さわたるあぢむらのはやくも冬の日は暮れぬめり

水鳥

かるの池にすむ水鳥の浮きながらうきたる世をば知らずやあるらむ

水鳥は沖にさわげど廣澤の汀(みぎは)までこそ波はよせけれ

小夜ふけて蘆の葉わたる山おろしにおきたつ鴨の聲ぞ聞ゆる

朝看水鳥

こやの池をむれて朝たつ水鳥にしばしはくもる猪名(ゐな)の松原

寒夜水鳥

あらし吹くさやまが池になく鴨の夢もこほりや結びはてけむ

江鴨

あし鴨はけさつくま江のみをつくし今年も冬のしるしなりけり

鴛

冬の池に眠れる鴛のひとつがひいかに解けたる心なるらむ

網代

たなかみの山の木がらしさえ暮れぬ網代の篝いまかたくらむ

風さゆるあじろの牀に今宵もや待つらむひをの如何によるらむ

霙

○けさつくま江　つくは著くとつくま江とを掛ける。

○ひを　氷魚、白魚に似て小さき魚。

しぐるゝはみぞれなるらし此の夕松の葉しろくなりにけるかな

霰

おどろかす槇の板屋の玉あられ寂しくもあらぬわがねざめかな

軒たかくふるやあられの打ちつけにかはらも玉の聲たてつなり

深夜霰

いかばかり驚けとてかぬる人の夢をまちてもふる霰かな

行路霰

玉ぼこの道行く人のうちかづく袖にひとむら降るあられかな

雪

さをしかの啼きてかれにし朝より雪のみつもるしがらきの里

おともなき山路はたれかふみわけむ思ひたえよとつもる雪かな

蝶のとび花のちるにもまがひけり雪の心は春にやあるらむ

待雪

朝な〳〵おきいでて見れどかづらきの峯にもいまだふらぬ雪かな

初雪

巻き上ぐるしのの簾のさら〳〵に思ひもかけぬ今朝のはつゆき

○思ひたえよと　訪ふ人は無いとあきらめよと。

○あたら初雪　美しい初雪が惜しいことには夜降る。

○ふりはへて　わざ〳〵。

草も木もあやめわかれぬ黒玉のよるしもあたら初雪ぞふる

雪中厭人

朝夕にまてば來ぬ人中々に雪にやあとをつけむとすらむ

ふりはへて誰はとふともわが宿の雪にはいまだ跡なしといへ

雪似花

梅の花ちるにまがひてふる時は雪さへにほふ心地こそすれ

山雪

かきくらし降るおほ空にちかければ山には雪ぞまづ積りける

遠山雪

みやこより雲居に見ゆるかづらきの高根さやかにつもる雪かな

河雪

夜も寒し瀨の音もたかしみよし野の大河の邊に雪ぞふるらし

山家雪

白雪の積るにつけて山ざとはふかくなりゆく年をしるかな

松雪深

はらへばやかへりてゆきの積るらむさらばとよわる軒の松風

○うつは　うつろ。洞穴。

○うらかへすの歌　山家集冬の部に「裏返す小忌の衣と見ゆるかな竹の裏葉に降れる白雪」

旅山雪深

おきそ山おほ雪ふれりあら熊のこもるうつほに宿やからまし

賀茂の臨時の祭久しく絶えたるをことし再興有りけるに其の日しも雪の降りければ彼の西行のうらかへすをみの衣とよめりし事をはるかに思ひいでて

いにしへの竹のうら葉に降りし雪ふたゝびかへる世にこそありけれ

鷹狩

眞白斑の鷹引きすゑてものゝふの狩にと出づる冬は來にけり

野に山に悲しき鳥の聲すなり狩人いまや鷹放ちけむ

雨中鷹狩

すらせたる初かり衣の遠山もしぐれの雨に色づきにけり

炭竈

ひえの根に初雪ふれり今よりや小野の炭がまたき増るらむ

閑居埋火

底ぬるき火桶ばかりを友としてくらす老ともなりにけるかな

爐邊閑談

うづみ火のにほふあたりは長閑にて昔がたりも春めきにけり

題しらず

うづみ火の外に心はなけれどもむかへば見ゆるしら鳥の山

神樂

はふり子がとる榊葉に月よみのみかげも白し更けぬ此の夜は

五節舞姫

天津袖かへしたまひし大君のをとめの姿いまも見えつゝ

雲のうへは雪をめぐらす冬ながらそのふる袖は花の香ぞする

豐明節會

とよ年の豐のあかりの舞の袖おもへば民をなづるなりけり

題しらず

かねの音は聞えずながら百式の新なめ祭夜は更けぬめり

宮人の日影のかづら長き夜も明けぬと見ゆる雲の上かな

歳暮

あら玉のとしの内にも鶯のはつねばかりの春は來にけり

いたづらに明かし暮して人なみの年の暮とも思ひけるかな

○はふり子　神主。
○月よみのみかげ　月光。
○大君のをとめ　五節の舞姫。
○あら玉のとしの内にも　あら玉は枕詞、また年は改まらないが。

年の緒もかざりなればやしら玉のあられみだれて物ぞ悲しき

雪中歳暮

しら雪の降る大空をながめつゝかくてことしも暮れなむが憂さ

明日からはふるとも春のものなればことしの雪の積るなりけり

歳暮近

限りあればわが世も近くなるものを年のみはてと思ひけるかな

都歳暮

もゝしきの大宮人もいとまなき年のをはりになりにけるかな

山家歳暮

鶯の聲より外に山ざとはいそぐ物なき年のくれかな

老後歳暮

なれ／＼て年の暮とも驚かぬ老のはてこそあはれなりけれ

事につき時にふれたる

しの簾おろしこめたる心をもうごかしそめつ春のはつ風

都人とひもやくると松の戸をあけたるのみぞ宿の春なる

音たてゝ冰ながるゝ山水に耳もしたがふ春は來にけり

○もゝしきの大宮人　新古今集巻二「もゝしきの大宮人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ」の歌をふまへて「いとまなき」に意をつよめうたうたもの。

○しの簾　篠簾。

けさも猶まがきの竹に霰ふりさら〳〵春の心地こそせね

限りなくまたせ〳〵てあら玉の今年ぞふれる去年の初雪

青柳の絲の絶間にみゆるかなまだ解けやらぬ大比叡の雪

山里のしのの籬のしのゝめにひま見えそめて梅が香ぞする

都人いでてこぬまに山里の梅のさかりはうつろひにけり

門さして人にはなしと答へけりいかゞはすべきうぐひすの聲

鶯の木づたふ枝は見えねども聲ぞ聞ゆる夜はあけぬらし

晝よりは大かたくもるこのごろの朝ごとに鳴くうぐひすの聲

しづかなる月にとむかふ明ぼのの心も知らぬもゝちどりかな

あけわたる外山のみねの横雲に引きかさねたる朝霞かな

かすみつゝくるとおもひし春の日は朧月夜になりにけるかな

とはざらばなにの言づてさらでだに物なつかしき朧月夜を

ゆけど〳〵限りなきまで面白し小松がはらの朧月夜は

妹と出でて若菜摘みにし岡崎のかきね戀しき春雨ぞふる

今朝みればいつか來にけむわがかどの苗代小田につばめとぶなり

わが岡にけふも來てつむ少女子がその名だにこそ聞かまほしけれ

〇去年の初雪　舊年の内に雪が降らなかつたので春降つた雪が又去年の初雪であるといふ意。

〇妹と出で　此の歌では今出たのでなく其の當時を回顧したのである。

○こがひの宮　蠶飼の室。

人しれず花とふたりの春なるを待たせてもさく山ざくらかな
春の夜はまだくろ谷のかねの音をおきいでて花のもとに聞くかな
昨日けふ花のもとにてくらすこそわが世の春の日數なりけれ
をとめ子がこがひの宮にちる花はまゆを出でたる蝶かとぞ見る
野の宮の樫の下道けふくれば古葉とともに散るさくらかな
只ためめ横川のおくに咲く花も散りて後こそ浮び出づなれ
世の中はかくぞ悲しき山ざくら散りしかげにはよる人もなし
ゐひふしてわれとも知らぬ手枕に夢のこてふとちる櫻かな
家にありて見るだにあるをなつかしき妹が峠の山吹のはな
山吹の花ぞひとむらながれける筏のさをや岸にふれけむ
わが門の前の柵はしとりはなて折る人おほし山吹の花
春の日の長くもかけて見つるかなわか轉寐の夢のうきはし
春の野のうかれ心ははてもなしとまれといひし蝶はとまりぬ
てふよく花といふ花のさくかぎり汝がいたらざる所なきかな
さと中の垣ねまでをぞすさみける野邊のあそびに暮しあまりて
ちゝこ草はゝ子ぐさおふる野邊に來てむかし戀しく思ひけるかな

○こきたれて　垂れ下りてに同じ

鶯の啼きてとゞむる聲をさへ物ともきかで春はゆくらむ
今よりははとり少女ら新桑のうら葉とるべき夏は來にけり
しらかしの瑞枝動かす朝かぜにきのふの春の夢はさめにき
けふ見れば花の匂ひもなかりけるわか葉にかゝる峯のしら雲
いつよりか夏の境に入間川さし來るしほのおとのすゞしさ
若葉のみ茂りそひけりうぐひすの鳴きつる竹はいづれなるらむ
夜半の風麥の穗だちに音信れて螢とぶべく野はなりにけり
わがまどのうちをば照らすかひなしと光けちてもゆく螢かな
夜をてらす光しなくば中々に螢も籠にはこもらざらまし
郭公しば〳〵鳴きしあけがたの山かきくもり小さめふり來ぬ
ほとゝぎす古き軒端を過ぎがてにむかししのぶの音をのみぞ鳴く
採りはてぬ澤田のさなへはる〳〵とすゑこそ見ゆれ水の白浪
さみだれの雲吹きすさぶ朝かぜに桑の實落つる小野原のさと
刈りあげし畑のおほ麥こきたれて降る五月雨にほしやわぶらむ
五月雨に賀茂の川橋引きつらむたえてみやこの音信もなし
大橋の上わたり行くかち人のたゞよふ夏になりにけるかな

水鳥の鴨の河原の大すゞみこよひよりとや月もてるらむ

夏の夜の月のかげなる桐の葉を落ちたるのかと思ひけるかな

尾羽ふれてあきつとぶなる草川のみぎはに咲くか大和なでしこ

根をたえてさゞれの上に咲きにけり雨にながれし河原なでしこ

かたぶきてたてるを見れば人しれず物をや思ふ姫ゆりの花

池水の蓮のまき葉けさみれば花とともにも開けつるかな

朝ふめど露もしめらぬ水無月の野づらに咲ける月草のはな

なびくだに涼しきものを夏河の玉藻を見れば花咲きにけり

見わたせば神も鳴門の夕立に雲たちめぐる淡路島山

布引の瀧のしら浪峯こえて生田に落つるゆふだちの雨

近わたりゆふ立しけむこの夕雲吹く風のたゞならぬかな

山風に吹きたてらるゝならの葉のかへれば霽るゝゆふだちの雨

わが宿にせき入れておとすやり水の流れにまくらすべき頃かな

朝づく日いまだ匂はぬ山の端のまつの葉わたる秋のはつかぜ

あらはれて世にたてる名も知らねばや猶忍びける秋の初風

なにとなく袖ぞ露けきいつのまにことしも秋のゆふべなるらむ

○あきつ　蜻蛉、とんぼ。

○水無月　陰暦六月。

○神も鳴門の夕立に　鳴門の邊に雷鳴夕立ありて。

○いまだ匂はぬ　朝日の光いまだ輝かぬをいふ。

○心なき人　西行の歌に「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」とある。

○うき雲を命とたのむ　果敢ないの形容。

○木の間かぞふる　どこかに光の洩れる所はなきかとかぞふる。

心なき人は心やなからましあきの夕のなからましかば

秋かぜにまねくを見ればはなすゝき誰か袖よりもなつかしきかな

いはねども露わすられずしのゝめの籬に咲きし朝がほのはな

いづる日の影にたゞよふうき雲を命とたのむあさがほのはな

ゆふ日さすあさぢが原に亂れけりうすくれなゐの秋のかげろふ

敷妙の夜牀のしたのきりぎりすわがさゝめ言人にかたるな

とにかくに露けき秋のさがならば野をわけ〳〵てぬるゝまされり

さと人はいはほきり落す白河のおくに聞ゆるさをしかの聲

おぼつかな塵ばかりなる浮雲にかくれ果てたる三日月の影

人しれずわがすみそむる白河のながれを月はたづね來にけり

栗田山松のしげみをもりかねて木の間かぞふる月のかげかな

殘りなく松のすがたは顯はれていまだはなれぬ山の端の月

照る月は高くはなれてあらしのみをり〳〵松にさはる夜半かな

しぐるゝは音ばかりなる松の葉に心と月のかくれけるかな

かへるべく夜は更けたれど鴨河のせの音は淸し月はさやけし

家路までおくらむ月の影ながらわかれてかへる心地こそすれ

身は老いぬ松も木だかくなりにけりかはらぬ物は秋の夜の月

月てればつらく椿その葉さへみなしらたまと見ゆるよはかな

なかくに鴨の河霧たちみちて京しら河へだてざりけり

菊のはなこぼるゝけさの露見れば千代もはかなき心地こそすれ

よひくの空に消え行く長月の有明の影や霜と落つらむ

朝づく日匂へる空の月見れば消えたる影もある世なりけり

こともなき野邊をいでても見つるかな鵙が鳴く音のあわたゞしさに

山ざとの軒の松かぜ木がらしに吹きあらためてふゆは來にけり

よもすがら木の葉をさそふ音たてて夢も殘さぬこがらしの風

今はとてしぐるゝ冬のはじめこそものの哀れのなはりなりけれ

朝づく日さしも定めぬ大ひえのきらゝの坂に時雨ふる見ゆ

山ざとの冬の庭こそ寂しけれ木の葉みだれてしぐれ降りつゝ

月さゆる落葉がうへにおく霜を影のうづむとおもひけるかな

冬の夜の長き限りをあかつきの霜にこたふる鐘の音かな

くれ竹のしげみがうへに音たててちるや霰の數ぞすくなき

山陰の塵なき庭に散り初めて數さへ見ゆる今朝の初雪

○大ひえのきらゝ坂　大比叡の雲母坂。

○花なき里　花やかなる里。

○氣賀の關　遠江國引佐郡に在り
以下八首東海道中の詠。

大宮の上にかゝれる衣笠の山白妙に雪ふりにけり

けさ見れば汀のこほりうづもれて雪の中ゆく白河の水

かくれがの雪はゆきとぞ積りける花なる里は花とみゆらむ

人とはぬ宿はけさこそ嬉しけれ塵も跡なき雪のうへかな

春をまつこゝろもなしと雪のうちに老木の梅は隱れてや咲く

山里は松に積りしはつ雪の消えぬまゝにて暮るゝとしかな

なにごとも此のころにはとおもひつる三十（みそぢ）の年の果てぞ悲しき

家ごとになやらふ聲ぞ聞ゆなるいづくに鬼はすだくなるらむ

ことなくて氣賀の關だにゆるせしを何を見附の里といふらむ

ましらなく杉のむら立下に見て幾重のぼりぬすせの大坂

おもひやれ天の中河なかばきてたゆたふ旅の心ぼそさを

沖津より夕越えくれば山松の梢にかゝる富士のしら雪

今宵もやまろねの紐（ひも）をゆひの濱打ちとけがたき浪の音かな

ふじのねを木の間〱にかへり見て松のかげふむ浮島が原

箱根山夕ゐる雲にやどからむふもとは遠し關はとざしぬ

むさし野のはての玉山たま〱に向ふたかねのめづらしきかな

津の國にありと聞きつる芥川（あくたがは）まことは淸き流れなりけり

夕づく日今はとしづむ浪の上にあらはれ初むる淡路しま山

鷗（かもめ）とぶちぬわにたてる濱市の聲うら浪にかよひけるかな

よろぼへる門にたちても綠子の父は母はとまちかねのさと

明石がた松の木陰に道はあれど磯づたひして若め拾はむ

鴨河に浮ぶあひるの朝な／＼たらずなりゆく數ぞ悲しき

梟（ふくろふ）の聲をしるべに歸るかなゆふべをぐらき岡崎の里

山に來て避けむと思ひし世の中のうきはさながら身は老いにけり

淺ければ住むかひもなし山なれど世にあるよりはさすが增れり

門といふしるしばかりの二もとの杉の柱もかたぶきにけり

わが門の垣ねの溝は淺けれど山水なれば濁らざりけり

くむたびに見るわが影のさわぐかな心もさぞな山の井の水

露見えて草の庵に降る雨はよるきくよりも寂しかりけり

松の葉の雫落つらし柴の戸にをり／＼あらき雨の音かな

夕まぐれ嵐に落つる松の葉を雨のあたるとおもひけるかな

ゆふべ／＼外山のあらし聞きなれてこればかりには物も思はず

雲をのみ凌ぐと思ひし松が枝は地につくまでなりにけるかな
生ひしげる窗のくれ竹ふしても見おきても見れどあかぬ色かな
笑ふにも涙こぼるゝ世の中に泣きつゝゑめる人もありけり
子を思ふ道はいかなるみちなれば知るよりやがてふみ迷ふらむ
子はなくてあるがやすしと思ひけりありての後になきが悲しさ

○ありての後になきが悲しさ　亡兒の追憶斷腸の想。

杣川におろす筏のいかにしてかばかり道はくだりはてけむ
敷島の歌のあらす田荒れにけりあらすきかへせ歌の荒樔田
けものすら物はいふときくことのはの道のまことは誰か知るらむ
もろこしの虎ふす野邊に吹く風のめにみぬ所おそろしの世や
狩人の射る矢にむかふいかり猪のかへり見られぬ戀の道かな
かくこそあれ身をから猫の妻どひにさわぐこゝろの戀の姿は
空に散る鳥の一羽の輕き身をおき所なくおもひけるかな

○空に散る鳥の一羽の　輕きの縁語。

樫の實のひとつふたつの願ひさへなることかたき我が世なにせむ
石をのみ玉といだきて歎くかな玉はたまともあらはるゝ世に

○石をのみ玉と　此の歌自分の菲才をかこつなり。

戀歌

初戀

世の中のひと花ごろもいつのまに身にしむまでは思ひそめけむ

けふ放つとや出の鷹のくるしくもはじめてこゐにかゝりけるかな

忍戀

かくばかりくるしきものをうつせみの人めを何に忍びそめけむ

しのぶとはすれどもすれどかり衣こゝろにもとるわが涙かな

聞戀

たまたまの便りにきくのしら露もつもれば袖のふちとこそなれ

聞きしより心あてなる面影のいやはかなしな夢にさへ見ゆ

傳聞戀

驛路(うまやぢ)の鈴のつたへて聞きしよりふりすてがたくなる思ひかな

見戀

しかの海人もからぬさきやはしをれつる見るこそ戀の始めなりけれ

玉だれのをすのすきまに見ずもあらずたゞ俤(おもかげ)のこゝちこそすれ

契戀

おろかにも思ふらめども今更にまことのほかはなにを契らむ

○世の中のひと花ごろも　單純な心であつた人もいつの間にやら

○とや出の鷹　夏の末羽毛の換期で脱け落ちたる鷹をいふ。

○こゐ　木居。鷹の木に止まり居ること。

○こゝろにもとる　思ひ通りにならない。

○たまたまの便り　積り積りて深き淵となるをいふ。

○見るこそ戀の　みるに海松と見ることを掛けてゐる。

途中契戀

さればなど思ひもぞよる玉鉾の道にあひつと人にかたるな

さきの世の身を知る雨の笠やどりひと木の陰のちぎりのみかは

憑媒戀

まかせたる苗代水はよどむともわれとはひかじ君がまに〳〵

宮の御會に僞りのゆふべといふ心をよませ給ふによめる

こむといふを待たじといひし此の暮のわが僞りもあらはれにけり

待戀

こぬ人をまつに今宵もいさよひて更けぬとしろき山の端のつき

深夜待戀

曉の鳥の八聲をつくしても猶こぬものに定めかねつゝ

月は入りて夜はまだ深き四阿屋（あづまや）のまやの妻戸をさしぞ煩（わづら）ふ

連夜待戀

おもひきや立ちまちゐまち待ちかさね獨り寐まちの月を見むとは

契待戀

月よりも後とは契りおかざりき先づいでてこむ時はたがひぬ

○ひと木の陰のちぎり　佛教にて、「一樹の下に宿り一河の流を汲む、一夜同宿、一日の夫妻是れ先世の結緣。

○四阿屋のまや　寢殿造りにて對の屋をいふ。

○立ちまちゐまち、ねまちの月　陰暦十七日十八日十九日の夜の月

遣車待戀

今夜だになほつれなくばむな車おしかへしてもやらむとぞ思ふ

逢戀

とけぬればかくも解けぬるした紐の年月何にむすぼほれけむ

敷たへの枕のもとにたちはあれどとき心なし妹と寢たれば

忍逢戀

雪をれの聲さへたてぬなよ竹はよにふしたりと知る人もなし

適逢戀

あへばかくあはねば絶えて山彦の音信だにもせぬやたれなり

とし月をまちかね山のかげにこそうべたまさかの池はありけれ

夢中逢戀

はかなくも夢に契りし後の世は覺めたる今の現なりけり

忍ぶれど衣かさぬと見し夢のうらさへえこそあはせざりけれ

夢なるかわが手枕に我がふれて人のと思ひし閨のくろかみ

來不留

しばしだに影もとゞめぬ稻妻のよひ〳〵何におどろかすらむ

○むな車　空車。

○敷たへの歟　出で立つべきなれど妹さねたれば急ぐ心なき意。

○たなうらのかへる間　手を飜す間即ち一瞬間。

○夢にも夢の見ゆや　上の夢は後朝に見んとする夢、下のは昨夜逢ひしを夢と觀じたるもの。

別戀

いかでかくあふは夢なる心地してつらき別れのうつゝなるらむ

とまれとやけさの朝かぜさらでだに別れがたみの袖に吹くらむ

別後會難期

別れかねとるたなうらのかへる間もたのまれぬ世を待ち渡れとや

月前歸戀

人しれぬ袖のわかれをおくりけり心あり明の月のかげかな

後朝戀

いつかひむ涙をさへにとりかへてきたる形見のきぬ〴〵の袖

今朝のまの夢にも夢の見ゆやとてかさねし袖をかへしてぞぬる

歎名戀

立ちそめて世にうづもれぬうき名こそ苔のしたまで悲しかりけれ

無名立戀

世の中にたつ名思へばうたゝねの夢に逢ひしやまことなりけむ

顯戀

我が戀は木がくれづたひ行く月の知らぬひまより顯はれにけり

○ひをむし　朝に生れ夕に死ぬる蟲。かげろふ、あさがほの類。

○ありしにもあらず　相手の態度をいふ。

切戀

來てもみよ戀ひ衰へてひをむしの日をへて世にはあらむさまかは

疎戀

ひたすらに人めをよくと思ひしはまことにうとき心なりけり

變戀

ありしにもあらずいかにの疑ひにかつ我からやよわりそめけむ

忘戀

わすれ貝いかなるかたに拾ひけむそのかたし貝いかで拾はむ

恨

人をのみつれなきものと恨みけりあまりに身をも忘れたるかな

神崎や磯間の波のうち出でしうらみぞ戀のかぎりなりける

恨戀絶

なか〱にたえば絶えねと思ひしはうらみし時の心なりけり

絶戀

いかにせむさもくることの繁かりし中より絶えししづのをだ卷

冬くさの枯れにしものと思ふらむさてこそ下にもゆる思ひを

○杣人の　ひの序詞　ひに檜と日とをかねていふ。

○身をはなれざりけり　深く印象づけられたるをいふ。

○思はなむの歌　命短し戀せよの意。

題しらず

東路のさやの中山さやかにもみぬ人いかで戀しかるらむ

年月をふるの神がきなにしかもつらき心を祈りそめけむ

獨りしておもへばこそはくるしきを物をやとだにとふ人もがな

あはばよし逢はずばさてとあめつちの神にまかせむ戀ならめやも

津の國の深江のますげいちじろくねに亂れてもこふと知らずや

たけくまのはなわにだにも立てりせばまつかとのみはいはれなましを

杣人の筏につくりさしおろすひのくれゆけば戀しきものを

すびきする梓の弓のうらはずの音のみたかきこひのくるしさ

花がたみつくる狹山(さやま)の青つゞら手に手をこそは組ままほしけれ

やがて身をはなれざりけり黑髮のすゑふむばかりありし面影

このころは夢もうつゝもひとつにて明けぬくれぬと面影に立つ

哀れとも消えての後はいふらめどけぶりの爲はかひやなからむ

若草を駒にふませて垣間見(かいまみ)しをとめも今は老いやしぬらむ

思はなむあたら一時新草のうらわかみこそ人もいふなれ

三千年に花さく桃のひとたびもなるとし聞かばうれしからまし

つはくらめかよふ澤邊のおもだかの思ひあがりし人ぞ戀しき

紅のすゑつむ里のほとゝぎす思ひいでてはなかぬ日もなし

くれなゐの色にみえなば同じことといざ打ちいでむわがこゝろから

夕されぼちどり鳴きたちしかま川汐のみちくる戀もするかな

思

限りあればふじの煙もたたぬ世にいつまでもゆる思ひなるらむ

打ちもいでじつらきにつかば胸の火のいかばかりかはもえ增るべき

曉片思

おもはぬを思ひねにして見る夢はあやなと鳥のおどろかすらむ

隱戀

さもこそは厭ふあまりのわざならめかくれ所のねたくもあるかな

舊戀

呉竹のもとのふしのみ戀しくておのが世々とぞねは泣かれける

閑戀

わが涙枕に落つるおとならでねざめの戀はとふ人もなし

旅戀

○おもはぬを　相手の我を思はぬ

世の常の草のまくらの旅にのみやつれたりとや人はみるらむ

陸奥の忍ぶのさとのかやむしろ寐もせぬ夢に人は見えつゝ

春忍戀

音たてぬ戀の涙にそふものはつれ〴〵と降る春の夜の雨

夏見戀

人しれぬわが垣間見もわか竹のしげみにさはる夏は來にけり

秋増戀

いかにせむ戀の盛りの秋にあひてまた咲きかへる物おもひの花

冬厭戀

すきまあれば二人ふすまも寒き夜をいかにねよとか隔てそめけむ

題しらず

雨ふれば底にしづめる浮ぬなはうきなまつまの戀もするかな

ふたつなき命をかくる僞りもなきよならばうたがはれつゝ

うたがひの心のひまぞなかりけるわが身ひとつの數ならぬより

後の世によも人ごとはしげからじ絶ゆとなわびそしばしまて君

ぬれむとは思ひしことよ人言のしげきが下に木がくれしより

()ぬなは　蓴菜。

()後の世にの歌　暫しの別れをわぶるなよやがて後の世にて心ゆく許り合はれるものをの意。

津の國のながらへてとも契りしは絶ゆるはしにてありけるものを

袖のうへに人の涙のこぼるゝはわがなくよりも悲しかりけり

あやめ草引くや五月のたまさかに來ては鳴きけるほとゝぎすかな

瀧の上のしめ野に咲けるみそ萩のそのみそかごといつか忘れむ

曉のをしの一聲鳴きわかれかへるたもとに霜ぞこぼれる

あづまにありける年の秋たよりにつけて人のもとへつかはしける

ゆふ暮の露も結べる玉章をなきてつたへよ天津かりがね

返し　よみ人しらず

露よりも雨としぐれてふるさとの涙は悲しかりと啼きつる

○みそ萩の云々　上三句みそかごとの緣語。

○涙は悲しかり　悲しいと鳴とにかけていふ。

桂園一枝 花

雜歌上

朝

思ふ事ねざめの空につきぬらむあした空しきわが心かな

題しらず

燈のかげはそむけて寐たれどもさやかにのみぞ夢は見えける

かぎりなく悲しきものは燈の消えての後の寐覺なりけり

つく〴〵ともの思ふ老の曉にねざめおくれし鳥の聲かな

海

海ばらの沖の高くも見ゆるかないくへ積りし水にかあるらむ

磯浪

いそ崎の松の幾世の馴れぬらむさてしもあらき浪の音かな

題しらず

玉くしげふたみの浦は明けにけり打ちいづる波の數みゆるまで

○朝の歌　すが〳〵しき無心の朝の心地を歌ふ。

○玉くしげ　ふたの枕詞。

○まゆ引きたるや　眉墨を引いたのか。

○松浦ぶねいたてになりぬ　松浦舟がいつさんに走り出した。

○朝妻の船　近江國朝妻といふ所の宿船、遊女をのせて客を誘ふ。

海邊眺望

あし屋がたみる拾ふ子にこと問はむまゆ引きたるや紀路の遠山

古渡雲

夕されば水底すみて澤田川雲の影のみ立ちわたる見ゆ

船

松浦ぶねいたてになりぬ大島のせとの高汐いまか落つらむ

汐時の風の心をとる楫にはやくもあたる浪の音かな

舟行夜已深

堀江川あかつき汐やさし來らむ棹の音ふかくなりまさるかな

湖上舟

俤はたが朝妻の舟屋かたむかしのうかぶ波のうへかな

男をんな舟にのりてあそぶ

わがせこが棹とる池の島めぐりぬらす雫もうれしかりけり

峯

大空のてる日の影もおよばねば解けたる世なきふじの雪かな

池

しながどり猪名山まつにこち吹けば遙かにさわぐこやの池水

田

賤の男がうつや荒田のあらためて作るにはあらずかへす道なり

市

朝な〳〵出づる明日香の市人はきのふを今日にかふるなりけり

杣

さゞなみの大津の宮のあれしより榮ゆるものはみをの杣山

閑居

いかばかり深き心のおくなれば山かげよりも靜けかるらむ

閑居夢

空蟬の世に木がくれてすむ宿の心に夢はならはざりけり

わが山陰をはなれてしばらく觀鷺亭に移りすみける比よめる

山よりも深き心のありがほに市の中にもかくれけるかな

山家

山深くながめ〳〵て雲水のゆくへあだなる世とは知りにき

何ゆゑに山には住むと人とはばこたへむまでの心ともがな

○空蟬の云々　身は閑居すれど夢はなほ塵の世をたどる心。

題しらず

中々にのがれもはてずすむ山のふかき心を知る人ぞなき

山家嵐

くるゝより松に吹きたつわか山のあらしの末をたれかきくらむ

山家水

うき世をばすみはなれても山の井のみづから濁る心をぞ知る

山家秋

山賤となりにける身のこゝろありてなぞ秋風にもの思ふらむ

山家鳥

わが庵はあまりに山の奥なれば鳥の聲さへめづらしきかな

山家人稀

我が宿の墻(かき)ねがくれのつゞらをりくる人あらば待つ人にせむ

たま〳〵は人も明けつる奥山の杉のとぼそは苔むしにけり

山家客來

わびぬればことづてだにもうれしきに山松の戸を君ぞ明けたる

物の音のたえず聞ゆるをききて

○とぼそ　戸、扉。

山ざとをさびしきものと思ひしは君が世知らぬ心なりけり

古　松

すみよしの岸の姫松なみよせずなりにしのちも幾世經ぬらむ

松色映水

大堰河ふちの緑やうつるらむ深くも見ゆる松の色かな

人の賀に松添榮色といふこゝろを

榮えゆく君が宿にし植ゑざらば松もなべてのみどりならまし

對松爭齡

子の日する千世のためしに君は松まつは君をや引かむとすらむ

三寶院の御別業省耕亭の十二景の和歌おほせによりて奉りける中に彈琴邱松といふありこはそのかみ重衡の中將をうしなひ參らせし最期のとき琴ひき給ひしところなりといひつたふるを

松風も夕にせまる聲すなり玉の緒よりやしらべそめけむ

伊勢なる本居宣長都にありけるほど嵯峨山松といふ事をよませけるによりて遣はしける

さが山の松も君にしとはれずば誰にかたらむ千世のふること

○山ざとを云々　山里も思つたほど寂しいものでない。

○榮えゆく云々　松も君が宿に植ゑてあるので特に色が濃い。

○三寶院　山城國宇治郡醍醐村に在る名刹。

○さが山の松も云々　その人に非ざればその道を語らずの意。

○申のさがり　午後四時すぎ。

播磨の別府なる手枕の松のかたに

萬代は夢なりけりと手枕の松も老いてや思ひ知るらむ

東六條の東殿なる涉成園の十三勝の和歌よみてたてまつりしその中に五
松嶋といへるを

五本のいつさだめたる陰なれば千世さへ松のかはらざるらむ

河原のおとゞの姫君うまれさせ給ひて御行始に神樂岡なる春日の御祖の
大神にまうでさせ給ひけるついでわが東塢亭に御こし入らせ給ひけるが
いたくむづからせ給へるによみてたてまつる

松のうへにはじめてすだつひな鶴の千世の聲こそ高く聞ゆれ

鶴

かぞへても知るらむものか齢たづの久しと思ふや千歳なるらむ

あしたづのふめる眞砂の跡をみて千代といふもじは造り初めけむ

鶴ひなをつれたる

千世のうへに千世をゆづるの聲すなり子を思ふ心限りなきかな

鶏

けふもはや申のさがりになりぬらむとぐらにのぼる庭鳥の聲

〇きゆる心は心ありけり　灯の消えたるは月をさやかに見せん心であつた。即ち心なきわざではない。

ともすればふせ籠にこもる鷄のせばくも世をば思ひけるかな
大空に飛び立ちかねて打羽ぶきかけろと鳴くがあはれなりけり

はなち鳥

つゞら籠を明けてやりつる放ちどりわがのがれしと思はざらなむ

窗燈

打ちなびく窗のともし火くれ竹の音せぬ風をいかに知るらむ
月見むと明けたるまどの燈のきゆる心はこゝろありけり

雨中燈

夜とともに物思ふ閨のともし火はしめるを雨にならはざりけり

題不知

燈のかげにて見ると思ふ間に文のうへしろく夜は明けにけり

旅行

草枕たびの空こそ悲しけれ野にも山にも知る人はなし

旅曉

つれもなき草の枕にねざめしていく有明の月を見つらむ

旅朝

たゞよへる朝の雲はふる里へかへりし夢のゆくへなりけり

旅宿松風

岩がねのなれぬ枕もあるものをいたはり知らぬ峯の松風

月前旅情

とけて寢ぬわが俤の見えななむ都の方のありあけの月

むげに若き時物ならひに都へのぼらむとて忍びに故郷を出て下の渡といふにかゝりけるに雪解の水いと高くあふれて舟もくつがへるべければ河の遠近に綱ひき渡してそれを手ぐりもて岸につくなりけり

いくうきせ渡らむ末のあやふさもかけてぞ思ふけふの川波

猶ゆきゆきていと心細きに友のもとへかいつけやる

かくばかり戀しきものか相思ふ中は離れてしるべかりけり

題しらず

月をまつ旅寢の牀のさゝの葉に嵐吹くなりさらしなの里

駿河守昌敷が越の國へ旅立ちける餞しける時によめる

たはやすくやがてといへど白山のゆきてはかへる程もこそふれ

兒山紀成が未だ公にもつかうまつらざりしそのかみしばらく都に遊びて

○いつ馴れにけむ　いつの間にかかく親しくなつたの意。

○又あはざらむ云々　命長くば又逢ふだらう短くば逢はないかもしれない。

○いよの松山云々　君が故郷はその名の如く君を待つてゐるだらう

伊勢の故郷へかへりける時蹴上の里まで送りてよめる

夏山の下はふつゞら別るゝがくるしきまではいつ馴れにけむ

垂雲軒夢宅が信濃なる伊奈の故郷へかへるを送りて

玉の緒は長くみじかき世なりけり又あはざらむまたや逢ふらむ

師走の末つかた越後國寺泊なる圓雅法師都をたちて近江國までくだりて
故郷へ歸らむは年こえむもはかり難しといふに

同じくはみやこへかへれ歸山雲には道もあらじとぞ思ふ

池田基永妻の桂舟とともにしばらく故郷へかへるべき事いできぬとて暇
申しに來たるときによめる

君がゆくいよの松山年ふともいよ〳〵またむ伊豫の松山

内山眉生萩原貞起わが塾を出でて信濃國へ歸りけるがふたゝびのぼり來
て學ばむ事をのみ云ふに

信濃路の木曾のかけはしかけたれどあやふき物は契りなりけり

述懐

かくばかり愁へなき世を歡びのあるべきものと思ひけるかな

いづくかは思ひの家にあらざらむよそめ樂しき世にこそありけれ

○ぬる宵々ぞ云々　さめてしまへば跡もなき宵ははかないものである。

○わかきは夢の心　若い頃は誠に夢そのものである。

夜述懐

明けぬればかならず覺むるものにしてぬる宵々ぞはかなかりける

獨述懐

はかなくて木にも草にもいはれぬは心の庭の思ひなりけり

懐舊

めのまへにむかし〳〵となりゆきて今なき世こそ悲しかりけれ

懐舊涙

憂きをへてよりける年の緒をよわみ亂るゝ玉は涙なりけり

寄夢懐舊

老いぬればいとゞむかしの見ゆるかなわかきは夢の心なりけり

往事渺茫都似夢

思ひ出づる事も殘らず夢なれば覺めしともなき我がねざめかな

無常

あら磯の岩うつ波による貝の殼はしばしもとまりけるかな

無きを夢有るをうつゝとおもひけり猶世の中をよの中にして

寄風無常

○消ゆらむも云々　何れは皆跡もなくなる露を秋風は之れを散らすのになぜ前後が有るのか。

○松山に浪こえざらば　古今集二十に「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ」さあるより松山に浪こすとは人心のあられもなくなりて變るをいふ。

○拙庵ぜじ　拙庵禪師。

消ゆらむもとまるも露のしばらくを何秋風のさそひ分くらむ

寄雲無常

行きめぐるうき世の雲のむら時雨終にはぬれぬ人なかりけり

題しらず

まづゆくをしたひ〳〵てつひに皆とまらぬ世こそ悲しかりけれ

崇德天皇の六百回御忌に

松山に浪こえざらば濱ちどりかへりて跡はのこらざらまし

八條相國六百五十回の御わざおこなはせ給ふに秋夢といふことを給はてよみて奉りける

遠ければ昔にいたる夢もなしさばかりながき秋の夜なれど

五月三日なりけむ新皇嘉門院御はうぶりの夜明けて雨いみじう降りければよめる

久かたの雲のうへなる涙こそさみだれ初むるはじめなりけれ

拙庵ぜじに人しれず契りおける事ありて年ごろへたる後世になき便りの聞えければ驚きてよめる

よしやわれ聞きえたりとも山彦のむなしき聲を誰にこたへむ

小澤蘆庵身まかりし時よみてつかはしける

親しきはなきがあまたになりぬれどなしとは君を思ひけるかな

女の思ひにこもりける頃武者小路左中将の君より竹といふ酒にそへておくり給へりし

数ならぬいさゝむら竹うきふしの世をなぐさむるつまとだになれ

御返し

なぐさめて君よりくれの竹なればまづ涙には染めじとぞおもふ

をさなき子をうしなひけるとき

おひしきてとりかへすべき物ならばよもつひら坂道はなくとも

同じ頃白朮の花を人のおくりたるに

世の中をうけらの花の開かずてしほむとならば咲かずやはあらぬ

誠拙ぜじの初月忌に歌あまたよみて手向けける中に

何ぞ此のかたみがほにも空しくてとまらぬものを残しおきけむ

或人いま〳〵となりておのれに歌ひとつと乞ひおこしたるによりてつかはしけるこの歌を額にあてながらやがてむなしくなりけるとなむ

長月の末の露とはおもへどもそのおき所花のうへなり

○よもつひら坂　黄泉比良坂。黄泉國と顯國との境、古事記上巻に見ゆ。

○世の中を云々　此の世に生をうけても成人せずに亡くなるならば一そう生まれないがよいではないか。

○ぜじ　禪師。

昌敷が病せまりて後加級の宣下からぶりし事を其の子さがみの守嘉之が
もとより申しおこしたりけるときよめる
見えずなる影ぞかなしき位山のぼると聞くはうれしけれども
大路にすてたる子
落ちたるも拾はぬ御世を命にて捨てにし親の心なるらむ
何がしのぜじより狗子の圖に賛乞ひたる
ゐのころは何の心もなかりけり何の心かありとたづねむ
猩々の舞圖
よく謳ひよくまふみれば思ふ事よになきのみや人に似ざらむ
猿藤のかづらをよぢたる
引きとめてとまる春とやおもふらむげに人よりはおろかなりけり
琵琶ほふし
おのが見ぬ花ほとゝぎす月雪を四つの緒にこそ引きうつしけれ
越後獅子
み越路は雪深みぐさ花に來てたはるゝさまのあはれなるかな
尉と姥のかた

○落ちたるも拾はぬ　政令のよく行はるゝをいふ。
○命にて　たよりとして。
○み越路は雪深みぐさ　深み草は牡丹の古名、獅子の舞ふを牡丹の花にたとへていふ。

相生の松におく霜神さびて千世のすがたとあらはれにけり

白藏主(はくざうす)杖をつらにつきてたてる

歸らむや今はいかにせむ此の間に枕もすべく夜は更けにけり

末廣といへる猿樂の圖

たのしさをわれもうたはむ春日山(かすがやま)笠とさしたる天の下陰

同じく靱猿

やといひしあら木の眞弓引きはなれ今はうつほのうつゝなきさま

同じく千鳥

濱千鳥おのがちりぢり啼きすてて跡こそみえね沖津しら浪

遊女の物おもひたる

おしなべて誠なしといふ濡衣の袖ばかりだにほす人もがな

若きをとめの泥孩兒をいだきて雪の中をあゆむ圖

かさならぬ年のうちよりわかくさの妻めくものは心なりけり

秋の野はらに女の髑髏を見て處女のにげさる圖

かへりみよこれも昔ははな薄まねきし袖の名殘なりけり

竹に雀のやどり鳴きたる

○白藏主　能狂言「こんくわい」の中に或獵師の伯父なる由に記せる僧、古狐これに化け獵師を說得して殺生を思ひとまらせんとする趣に作つた。
○末廣　狂言の曲名靱猿千鳥も同じく狂言の曲名
○泥孩兒　土人形。

品よくもとまりけるかななよ竹のよにうたふなる一ふしやこれ

蝶ふたつ空にとぶ圖

花のうへに君が放ちし蝶もなほ天にあらばと契りおきけむ

安倍仲麿を明州の海邊にて餞したる

よる行けど月の光し淸ければあらはれわたる唐にしきかな

濱主が和風長壽樂まふ圖

八百日（やほか）行く其の濱主の老の浪わかきにかへす舞のそでかな

陵王まふ圖

四方のうみさわぎし浪は立ちかへりをさまる時の聲となりにき

紀氏

打ちわたす紀の遠山のなかりせば明石のうらもむなしからまし

芳野川の岸にたちて款冬見給へる圖

ながれてはいとゞ影こそ匂ひけれ紀の河上のやま吹のはな

渡邊の綱その姨（をば）と物がたらふ圖

謀るには手もなきものと思ふらむとりかへされぬ報いある世を

西行上人猫の香爐もて坐したる

○よにうたふ　竹に雀と世に唄ふ

○よる行けど云々　史記に「富貴にして故鄕に歸らずんば繡をきて夜行くが如し誰か之を知る者ぞ。」とあるが仲麿は異鄕に在つても名を表はしたといふ意。

○濱主　有名な平安朝人、舞樂に巧みなる人。春鶯囀を作る。

○和風長壽　唐舞春鶯囀の異稱。

○八百日行く　濱の枕詞、萬葉集四に「八百日行く濱の砂も……」

○陵王　蘭陵王の舞。

○紀氏の歌　貫之よく人丸の跡をつける功をほめ稱へたのである。

○その姨　實は鬼。綱にとられた手を取り返さんとするを詠じたもの。

中々に心もとめぬ容だきのかをりや富士の煙なるらむ

芭蕉翁

ふりにける池の心は知らねども今も聞ゆる水の音かな

うつぼの俊蔭の巻なる北山ごもりの圖

久かたの月のかつらの木の實もやとりもて來らむそふ光かな

常磐御前子どもをつれてふゞきにあへる

かきくらす雪に伏見の吳竹の下折りたるやみさをなるらむ

湯谷ふみ見たる

故郷の花のたよりはかけたれどかへりわづらふ春のかりがね

王昭君

四つの緒の半ばの月もかきくらし涙しぐるゝ道のそらかな

李夫人

中々に終のけぶりのまゝならば二たび世にはこがれざらまし

李夫人去漢皇情

あくがるゝ心のうちのけぶりにもまづ俤は立ちかへりけむ

老萊子

○北山ごもり　宇津保物語俊蔭の巻、俊蔭の女一子を連れて北山のうつほにこもる。一子木實など求めて母を養ふ。

○湯谷　謡曲熊野。

○王昭君　漢元帝の宮女匈奴に嫁せしめらる。四の緒、半の月、皆琵琶に在る。

○李夫人　漢武帝の愛妃で夫人の死後、方士、反魂香を焚きて夫人の魂を呼び返し武帝にあはせる話白氏文集にある。

○老萊子　周の人歳七十の頃童子の姿となりて戯れ親をして己れの年を忘れしめんとしたと。

子のために親のをさなくなれるすら悲しきものを悲しからずや

韓信が市人の股くゞる圖

かり初の市の妻屋のしのぶ草うるたねなりと知る人ぞなき

東方朔みつの桃をぬすみたる圖

萬代は袂につゝみえたれども隱れぬものは憂名なりけり

關雲長

桃園に契り一たび結ぶ身の落ちぬその名は萬代までに

王質

斧の柄はくたしてかへる山路にも知る人えたり白菊の花

虎溪の三笑

もろこしの芳野の夢の浮橋か現ともなくかけはなれけむ

李白が醉ひさまたれし圖

みな底に沈める月の影見れば猶大空のものにざりける

三寶院の御門主より許由が瓢（ふくべ）を梢にかけてかへりみたるかたをよませ給ふに

ぬらさじとくれしこれすら煩はし受けらるべしやあめのしたゝり

○東方朔　漢武故事に東郡短人を獻ず帝東方朔を呼ぶ朔至る短人朔を指し帝に謂うて曰く西王母桃を種う三千年に一たび花を開き三千年に一たび子を結ぶ此の兒不良なり已に三たび之を偸みしと。

○關雲長　關羽をいふ劉備張飛と兄弟の契りを結ぶ後人その義勇を慕ひて關帝廟を立てて祀る。

○王質　述異記に「晋王質伐レ木至二信安郡石室山一。見二數童子圍一レ碁…局未レ終斧柯爛盡。既歸無二時人一。」

○虎溪の三笑　慧遠法師が道を談じて道途の遠きを忘れし故事を畫きたる圖。

○李白が醉　杜甫の飲中八仙歌中「李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。」

○許由が瓢　逸士傳に許由箕山に隱る杯なし手にて水を飲む人一瓢を遺る以て飲むを得飲み了りて木に挂く風吹きて聲あり煩はしとて之を去りぬと。

また蘇武が鴈の足に文ゆひつくる

そらごとを只かりがねの玉章も君がまことゝなりにけるかな

また淵明が琴ひく

世の中にあはぬ調べ（しら）はさもあらばあれ心にかよふ峯のまつかぜ

面壁の達磨

あまりにも背き（そむ）〱て世の中の月と花とに又むかひけり

布袋の後むきたる

なしといひ有りとうたひて世の中のむくかたにのみやる心かな

ゆく〱かへり見したる

宵のまに入りぬる影をかへり見て待つほど遠し有明の山

月を指さしたる

明けゆかむその曉を待ちわびて月のみやこをさす人やたれ

賓頭盧

身をつみて佛のこゝろ知られけりなづるはさこそ嬉しかるらむ

寒山拾得

あひにあひし一つ心にくらぶれば似たるばかりの秋の夜の月

○淵明　陶淵明無絃琴をひく故事

○さもあらばあれ　琴の調が世の中のものに合はうと合ふまいとかまはない。

○寒山拾得　天台山國清寺の豐干禪師の弟子二人の名。文珠菩薩普賢菩薩の化身であるといふ。

○丹霞佛像をやく　支那の丹霞禪師洛東慧林寺に到り壇上の木佛をやいて暖をとる。住持驚きて叱す。師曰く「やいて舍利をとる。」住持曰く「木佛舍利なし」師曰く「然らば拜するに足らず」と住持唖然たりといふ話畫家の好題目である。

○もたひ　甕、酒を入るゝかめ。

○鳥の聲　笙を鳥に比べていふ。

○足柄山　新羅三郎義光笙の祕曲を豐原時秋に傳へたといふ傳說。

丹霞佛像をやく

御佛も炎(ほのほ)を出でよこの世からうしの車の我みちびかむ

親子蝦をすくひてくふ

雪にだにくるふ跡なしおり立ちてすくふも空の霧か霞か

野寺僧歸

あたご山樒(しきみ)がはらにくらしけむさが野を分くる墨染の袖

野寺隱喬木

中々に立ちかくしたる一むらの松ぞ野寺のしるべなりける

臺頭有酒

いざくまむそのかのもたひもて來なむ臺(うてな)の上に月はのぼりぬ

雜歌下

正月一日おきの守豐はらの文秋來りて笙(しやう)吹きなどしあそびけるによめる

ためしなく治まれる世をくれ竹のみをはむ鳥の聲にたつらむ

いかにして吹きつたへけむ古(いにしへ)の足柄山のみねのまつかぜ

むつき三日なりけむ雪いたら降りけるあした清岡しきぶの大輔の君に從

ひて比えの麓なる詩仙堂をとぶらふ柴の戸推し明けけるほどに初音たか
く聞えたるはかの鶯宿梅のあたりにやなどのたまふによみ侍りける

梅の花さかばといひし我よりもさきにとひける鶯のこゑ

をりたる梅を

あはれにも咲きこそ匂へ梅の花折られたりとも知らずやあるらむ

登壽院法印了敬がもとより若菜一籠いとをかしげなるをおくりたるこは
やん事なき御わたりに堺なる或人の昔よりたてまつりなれたるを此の春
おなじかたにしつらひておこせたるとかいつの比より奉り初めしそも今
は知られずと聞きてよみて遣はしける

摘みそめしはじめなければ行末も遠里小野のわか菜なるらむ

せんず萬歳

石(いそ)の上(かみ)ふるき鼓はこけむしぬされどもひゞく萬代の聲

三毬(さぎ)打(ちやう)

くれ竹のさはるふしなき世なりけり煙に聲はたてずともよし

二月のはじめ八坂にて京を見やりてよめる

織りかけし都のにしき青柳のたての絲のみ見えわたるかな

○せんず萬歳　千秋萬歳、萬歳に同じ。

○都の錦　素性法師の歌に「見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける」

稲荷詣

いなり坂杉の青葉をかざすこそまだ花さかぬしるしなりけれ

涅槃會

世の中の花の遊びにくたびれて一ねいりせる君が手枕

西行上人の影供に春月言志と云ふ事を

後の世のねがひもさぞなみちぬらむ花にかくれし望月の影

春釋教

春されば雪のみやまに啼く鳥の聲も長閑になりやしぬらむ

或人の追善の題に幻世春來夢

かの國の花にやどりて思ふらむこの世はてふの春の夜の夢

うかりし事ありて籠りをりける春、墨南亭白休が庭の花やゝ盛りなりとていつの日かならずなどいひ契りたるに其の日しもひねもす雨降りければよみておこしたる

花のうへに雨のふりこぬ里あらばところかへても君をまたまし

かへし

わがとはばいづくのさとかふらざらむ涙の雨と知らぬ君かな

（一）後の世のねがひ　西行の歌に、「願はくは花の下にて我死なむその如月の望月の頃」

世継直員が家に藤の宴したりける日えまからでよみてつかはしける

わがやどにものうけにふる春雨はねたくも花のしづくなるらし

四月七日なりけむ年ごろわが塾にありける篠澤隆壽粟津の松原にしてお
のがほい遂げたりし時その事とり〴〵に傳へていまだ都にさだかならざ
りければやん事なきわたりよりも其の虚實いかに〳〵とたづねとはせ給
ふことしば〳〵なりければよみ侍りける

ほとゝぎす時まちいでて名のりつる聲雲居まで聞えけるかな

くらべ馬を

神山のやまびことよむ聲すなり宮人今や駒くらぶらし

馬くらべ追ひすがひてぞ過ぎにける月日の逝くも斯くこそありけれ

糺のすゞみにまかりけるに思ふことありて

人の世は浪のうきもに咲くはなのたゞよふほどぞ盛りなりける

六月の末やみおとろへて夜たゞねられぬに

燈にきえをあらそふ夏蟲の影ともわれはなりにけるかな

みな月の有明づくよつく〴〵とおもへばをしき此の世なりけり

初秋薄

○篠澤隆壽　粟津の松原に於て仇討の本望を遂げその噂高かりし事具備の日記に詳し。

○糺のすゞみ　糺の森は下賀茂神社の境内をいふ。

○袂せばくもたちし　たちに袂を裁つと秋の立つとを掛ける。

露おかばいかにせむとの花すゝき袂せばくもたちし秋かな

月の前に月草たてるかた

よひ／＼に月をうつしの色ならば心やそめむ秋のかたみに

東のかたに遊びける頃鴈來といふ事を

はる／＼とかけて來にける初鴈の翅のふみを知る人もなし

心地たのみなくおぼえける頃松蟲の鳴くを聞きて

聲をのみ友と聞きつるまつむしの身の行方にもたぐふ秋かな

葉月のはじめなりけむむすめ孝子を伯耆守寛幹がもとにつかはしたりける歡びをとて人々つどひて其の夜もすがら舞ひかなでなどうちさわぎける中にひとりひそかにうたへる

うれしさをつゝみかねたる袂より悲しき露のなどこぼるらむ

はつき十六日の夜なりけむ賴襄が三本木の水樓につどひてかたらひ更してよめる

すむ月に水のこゝろも通ふらしたかくなりゆく波の音かな

白雲にわが山陰はうづもれぬかへるさ送れ秋の夜の月

白河の紅葉をしみにまかりし時

いなごとぶ淺茅が下を行く水の音おもしろしこゝに暮さむ

青葉にてうつらぬ枝や中々に松のしづくの染めしなるらむ

三條前の内のおほいまうちきみ右大將におはしける時紅葉の大枝に眞鴨一つがひつけてこの御歌をさへくはへくだされし御かへし

染め殘す枝かとみれば水鳥の鴨のあを羽のまじるなりけり

題不知

北山のくらまおろしの吹くからに曇らぬさともかつしぐれつゝ

十月の末母君の四十九日に五戒のうた手向け奉りける中に不飮酒戒のこころを

雫だにまづ心せよさかづきのうかぶ流れも淵とやはならぬ

不偸盗戒

色をたゞうばひて咲ける卯の花も世に白浪の名こそたちけれ

一月横にすみけるときに

めづらしくふれる河原の初雪をいつもさらせる布かとぞみし

ひむがしやまを望みて

晴れなむとする山の端のしら雪はかすめる花の心地こそすれ

○五戒　佛教にいふ殺生偸盗邪淫妄語飮酒の五つの戒。

○白浪　盗人の異名。

○くたし　腐し。

雪のふりけるあした廬庵がもとへ事のついでに咲きあへぬ梅の枝をつかはすとて

花とのみけさ降る雪のあざむきてまだしき梅を折らせつるかな

その使其の梅もてゆくをわすれたりければかれよりかへし

梅が枝を今たゞぬるに見えざるは折りても雪や降りかくしけむ

やごとなき御わたりより五色の和歌を四季雜にわかちてよみて奉るべうおほせられしに

青

わが袖のみどりなさへにひくものは小松が原の霞なりけり

黄

口なしの花こきくたしふる雨に園生のうめも色づきにけり

赤

うら枯れの淺茅がうへを吹きわたり夕日になびく秋の風かな

白

初雪にふれる高ねに殘らずはけさも見ざらむ有明の月

黑

くろ木たて鵜羽(うのは)ふきけむ古も子を思ふやみはかはらざりけり

神祇

神はなほ神代ながらの天の戸をおし開きてぞみそなはすらむ

世の中の人のすなほになりしより神もあらぶるわざなかりけり

おろかにも御代のたかにといのるかなもとより神の願ひなりけり

三輪

松ばかりたてる山邊を吹く風のめにこそ見えね神はますらむ

題しらず

神垣のみたらし河の白浪のさゞれにかゝる音のさやけさ

寄神祝

すべらぎはあまつ神なり秋つしま動くべき世のあらむと思ふな

天地のいつれの神か受けざらむ御代やすかれと祈るねがひを

寄日祝

岩戸あけて天照らす日の本つ世をあふがぬ國のあらばこそあらめ

寄月祝

大君の萬代までのかざしにと月の桂のかげはさすらむ

○くろ木たて云々　豐玉姫命、鵜葺草葺不合命を生みませる故事に依る。

○三輪　三輪神社古來神殿を設けず拜殿より直ちに山を拜する樣になつてゐる。

〇みかは　溝。

〇平安　延暦十三年（一四五四）車駕新京平安に遷る。

寄水祝

おほ空をめぐるみかはの水なれば月日のかげもよどむべらなり

寄都祝

長岡の名をさへこゝにうつしけむ千年になりぬ今の都は

萬世も平安とさだめ置きつらむこの都こそ大宮どころ

寄松祝

程しあれば岩ねの松も生ひかはり君が八千世にあはむとすらむ

高砂の松はあらしも聞えけり君が千とせの陰ぞ長閑けき

題しらず

陸奥の末にありといふ松山のまつほど遠し君が千とせは

寄竹祝

くれたけの深きみどりにおく霜のさやかにみゆる君が千世かな

寄花祝

百敷の大内山のさくら花今こそ御代はさかりなりけれ

寄道祝

奥えぞの果てまで靡く君が代に開けぬ道はあらじとぞ思ふ

雜體

長歌

江戸にありけるころ四月なかば原庭なる葵園につどひて歌よみける日しも終日あめふりければいへる

春雨に　おくれし雨か　五月雨に　さきだつ雨か　春雨に　おくれし雨ぞ　しかれこそ　鶯鳴けれ　五月雨に　さきだつ雨に　あらねばそ　初時鳥　忍音もせぬ

猪名の里なる壽性尼より淡海の濱づとなりとて螢あまたうすもの籠に入れて贈りける時よみてつかはしける

潮みてば　玉藻とうかび　汐干れば　眞砂にたちて　時つかぜ　吹きのよにまに　沖津浪　立ちのさわぎに　なづさはり　拾へるならぬ　大君の　膳所の濱の　磯のうへに　こゞしみ立てる　石山の　石の中にし　籠りけむ　その璞を　伊加賀崎　いかゞ打出て　夜光る　貴の眞玉と　綿津見の　海人のしわざに　成り得けらしも

つどへたる八十の螢は七車てらす玉にもしかざらめやは

○しかれこそ　それ故に。

○なづさはり　馴れて。

○七車てらす玉　車七乘も一時に照らす程の名玉。

○一葉をうけて　一葉の舟に乘りて。
○こちく　胡竹、笛。

蘇子が後の赤壁のあそびのかたに

かんなづき　しぐるゝ時の　天雲の　いかに晴れてか　山高く　月澄みのぼり　水落ちて　岩ねあらはれ　寒き江に　一葉をうけて　酌む酒の　たゆたふ影に　三年經し　きのふぞうつる　其の秋の　こちくの調べ　其の節を　訴ふる如き　木枯の　聲吹きすさむ　大虚に　棄れたるならぬ　蘆鶴の　近く飛びわたり　更くる夜を　啼く聲長し　浦浪の上

いかにかも鶴の毛衣かへしけむ昔の夢の今も見えつゝ

旋頭歌

五月の末なりけむ津の國なる伊丹の里に有りていたき病にかゝりていと心ぼそくおぼえける時駿河守しげのぶ都よりくだり來て聞きもあへず何はおきてなどいへるをいとかたじけなみ侍りてよめる

あらはれて　見ゆる夏野の　一もとすゝき　大方は　穗に出づるとき　ほにや出づらむ

木槿の花を見て

いけ垣の　小杉が中の　槿の花　是れのみを　むかしはいひし　朝がほの花

大嘗會行はれける其の夜ことにのどかなりければよみ侍りける

大君の　大なめ祭　きこしめす夜と　霜雪は　憚る空に　月そ照りたる

至日に著袴いはひける人のもとにて

垂乳根の　末のたかにと　たたせる袴　日も長く　ならむ始めの　今日きそめけむ

信濃國松本なる小林篤邦くすしの業まなびをへて故郷へかへらむとする馬のはなむけにおのれひざらして白菊と名づけし硯を贈りけるによみてくはへたる

露ながら　枯るゝ世しらぬ　しら菊の花　これもその　老いずしな濃の　家づとにせよ

誹諧歌

社頭の春といふことをよめる

石の上ふるのやしろに引くしめのまた新しき春は來にけり

いへの會始に家梅始開といふこゝろを

道もなきわが庵なれど鶯のふみひらきたる梅のはつ花

御忌の頃京を思ひやりて

吉水の大鐘の聲ひゞくなり山のこゝろもうごくばかりに

○至日　冬至の日。

○した濃　死なぬを掛けて壽ぐ。

○ふるのやしろ　ふるとあたらしきとを對照させる。

題しらず

氷とけし池のおもてに小車のあや織りみだり春雨ぞふる

きゞすなく山路のくれにほろ〳〵と降り出でにける春の雨かな

賤がうつあら田の原をたつ見れば鴈をもすきてかへすなりけり

とりとめしおのが心のあら駒も春の野原に放れけるはや

花みむとけふうちむれてのる駒も大ぞらの青はるの日のかげ

菜の花に蝶もたはれてねぶるらむ猫間の里の春の夕ぐれ

紙屋川おぼろ月夜のうすずみにすきかへしたる浪の色かな

世の中はおほろ月夜をかざしにて花のすがたになりにけるかな

山ざとに水こひどりの鳴く聲もさびしからぬは苗代のころ

すみれにはまけて見ゆれどすまひ草とりすてがたき花の色かな

花ちりて春より夏にとぶ蝶の羽袖も白し木がくれの里

みこし路の雪にさらしの夏衣かへたるけさは袂さむしも

うの花のかきねにほりし竹の子は雪の中のをえたるなりけり

道の邊にとりてすてたる若苗のあまり豐けき世にこそ有りけれ

さよ更けてながるゝ星の影のうちに聲せで飛ぶは螢なりけり

○小車のあや　雨滴が池の面に作るあやの形容。

○日のかげ　かげに影と鹿毛とを掛ける。

○雪の中のを　卯の花を雪に比べていへるなり。

○蓮葉の云々　上野の不忍の池に來る人は誰も蓮の葉の上にある思ひがするであらう。

○くつてとのみ　時鳥の異名をくつて鳥といふからいふ。

○すゞろくの　ふりの緣語。

落したる誰が種ならむ山ざとの垣ねがくれのなでしこの花

蓮葉のうへ野をたれか忍ばずのいける世ながら樂しからずや

行きなづむ駒のわたりの夕がほの花のあるじよやどりかせ山

山賤もうまきひる寢の時ならし瓜はむからす追ふ人もなし

閨の戸をたゝく水鷄人まねのたはわざにくし夏のよな〳〵

五月雨にぬれ〳〵きけばほとゝぎす我も鳴きつる心地こそすれ

ほとゝぎす汝も矢橋の市に出でてくつてとのみも鳴きわたるかな

すゞろくの市場はいかにさわげとかふりこぼしける夕立の雨

夕立のそらふみさきし鳴神のなごりともなき月のかげかな

涼みにと誰をさそはむ獨りだにみるほどもなき夏の夜の月

照る月に夏をわすれし木の間よりおどろかしける蟬のひと聲

いたづらにことしもなかばめぐる輪のぬけむかたなき身の齡かな

江戸にありけるとしあまた鳴きつるせみの聲あるあしたふつに聞えずなりければよめる

この世をばつく〳〵うしと鳴きすてて又いかさまに身をばかへけむ

歌むすびしけるとき草花早といふ事を

○くちさが野　くちさが（口善惡）なきと嵯峨野とをかけていふ。

○をみなへし　遍昭の歌に「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな」

○たな引きされし　たな引いてゐる[illegible]切れ[illegible]は雁の[illegible]搔き切つたのだらう。

○わたくし雨　不意に降る村雨、箱根地方の方言。

世の中はくちさが野なるをみなへし秋にあへりと人に知らるな

　　蘭の枝を

ふぢばかまをりめみだれて見ゆるかな誰心なく手をばふれけむ

　　題しらず

さしこめてまだ夜を殘す柴の戸をおそしとひらく朝がほの花

姑（しうとめ）につまれしよめ菜あはれその時過ぎてこそ花咲きにけれ

花見ればとびたつ小野のいなごまろ人の子にこそかはらざりけれ

はたおりめ梢かりこむ木ばさみの音に終日（ひねもす）まじりてぞ鳴く

あながましかまのしりへのきり／＼すよなべのつゞりさせと鳴くなり

故郷にたま／＼來つる我を見てこぼれかゝれる庭のしらつゆ

山の端に出でくる月の影見ればわれさへ今ぞあらはれにける

大空はおほかた雲にやどられて所せげなる月のかげかな

飛びこゆる雁のつばさやかけつらむたな引きされしみねの横雲

秋かぜのしらべて拂ふ松の葉の落ちたる見れば琴柱（ことぢ）なりけり

箱根山關もる人も朝ぎりのわたくし雨にあざむかれつゝ

誰とたがうちかはすらむ夜もすがら砧（きぬた）の聲のかたおろしなる

○みわたの魚　流れの曲れる處に居る魚。
○散りそめてこそ咲き初め　雪が散る（降る）からこそ梢に花が咲く
○思ふとは云々　思つてもかひが無いと思ふのは誰かを思つてゐるのかしら。
○うたて　いけないことには。
○よき人を云々　萬葉集に「よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見つ」

闇ながらはれたる空のむら時雨ほしの降るかと疑はれつゝ

夜もすがら玉の聲ともさゆるかな月吹きすさむ木がらしのかぜ

たゝきつる冰の下にくだけけむわれても見ゆる月の影かな

朝ごほりとくるを待ちてうごくかな老はみわたの魚ならねども

冬がれの梢の雪のはつ花はちりそめてこそ咲き初めにけれ

一月樓にありし時雪を

鴨河にさらし／＼て青柳のいとさへしろくなりにけるかな

題しらず

くれ竹の鄰へかへる聲すなり日かげに雪やとけわたるらむ

琴ならぬ桐の火桶は聲もなし吹きだにおこせ夜半の松風

徒らにふりゆく人を行く年はかへりてなしきものと見るらむ

わが齢むかしの數にかへらめや此のいり豆に花はさくとも

思ふとはおもふ人にも知られじとおもふは誰を思ふなるらむ

はやくより心あへりと思ひしはうたてすなはち戀にざりける

よき人をよしのよく見し夕よりよし野の花の面かげにたつ

山の端にくるれば見ゆる三日月のあなしら／＼し人のいつはり

（）思ふ事あり云々　蟻、穴、崩れる、堤等の縁語を以て思ふ事有り、あな憂、人目包み、くづれる、などを表はす。

○ねぬなは　蓴菜、ぬる〱はその形容にして寢る〱をかける。
○こがひ　蠶飼ひ。
○しね　布帛の織り餘りの絲をしね絲といふ。死ねを掛ける。
○いれぬとも　入れて居っても。

久かたの天の岩戸のかくれてもほそめに見まくほしき君かな
我が戀はいのる神さへ聞き馴れて久しきものとすてておくらむ
春がすみ絶間になびく青柳のめより色にはあらはれにけり
むつ言を霞やたちて聞きつらむ野にも山にもかくれなき戀
思ふ事ありのあなうとなげくまにくづれにけりな人めつゝみは
あふことのかたき中にはくすの木の枕も石となりぬべらなり
あらかねの心も戀にわきかへりあつき涙とこぼれけるかな
小貝もゐる濱つゞら籠にゐる砂の下にはら〱音(ね)はなかれつゝ
わぎも子がむねに結べるまへ帶のとけずも物を思ひ顏なる
花つむと折りかへしたる振袖にたまるは人の心なりけり
打ちとけて人とぬる〱ねぬなはのねたしや世をば知らず顏なり
なやにゐてこがひする子のつま選(えら)み田もやりあぜもやるといふものを
をとめらが未きりはたり織るはたのしねとやせめてつれなかるらむ
おほかみの子はふところにいれぬとも思ひかけじといひし人妻
ふきたてて君がこちくの笛の音に枕の塵ぞたゞよびにける
越えがたき忍びがへしのうらくぎのうちうらみても立ちかへれとや

○生田河　昔菟原と血沼といふ二壯夫一處女を競ひ、生田川に鳥を射て勝敗を決する話大和物語に在り。

○蓮葉の露　遍昭の歌に「蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」

○いかるか　斑鳩に怒るかな掛ける。

生田河鳥だに射ても見すべきを今は弓引くたぢからもなし

いなといひてせにかはりしも早河のすみはてじとは思ひつる事

こむ世まであさむかれても蓮葉の露を玉とは何たのみけむ

妻木賣るかたに

めせやめせゆふげの妻木はやくめせかへるさ遠し大原の里

題しらず

三島江に生ふる眞菅を鳰どりはかさにもぬはでかづくなるかな

心には何をいかるか知らねども囀る聲のおもしろげなる

ゑのころははやもあるじを見しりけり呼べば尾ふりの嬉し顔なる

猫の子はねずみとるまでなりにけり何にくらせし月日なるらむ

人疎む門には市もなさざりき世をあきものといつなりにけむ

世の中をいかに杉戸のふし多みあなともあなと歎くころかな

わづらはしいざ世の中にかくれ笠きつゝやへなむ雨ふらずとも

かけすてし鏡の面に影ふれてたそやと我をおどろかれぬる

いとわかき時なりけむ國をはなれて五條あたりのふせやにかくれすみて物まなびしてありけるを聞きつけて故郷なる友のもとよりさてあるべき

かははやく帰りきてなどいひこしける時によめる

わびて世にふるやの軒の縄すだれくちはつるまでかゝるべしやは

題不知

大堰河となる瀬の上にあらはれて泥にはひかぬ龜の尾の山

高宮の松原ごしに見わたせばすきびたひなる冠(かうぶり)のやま

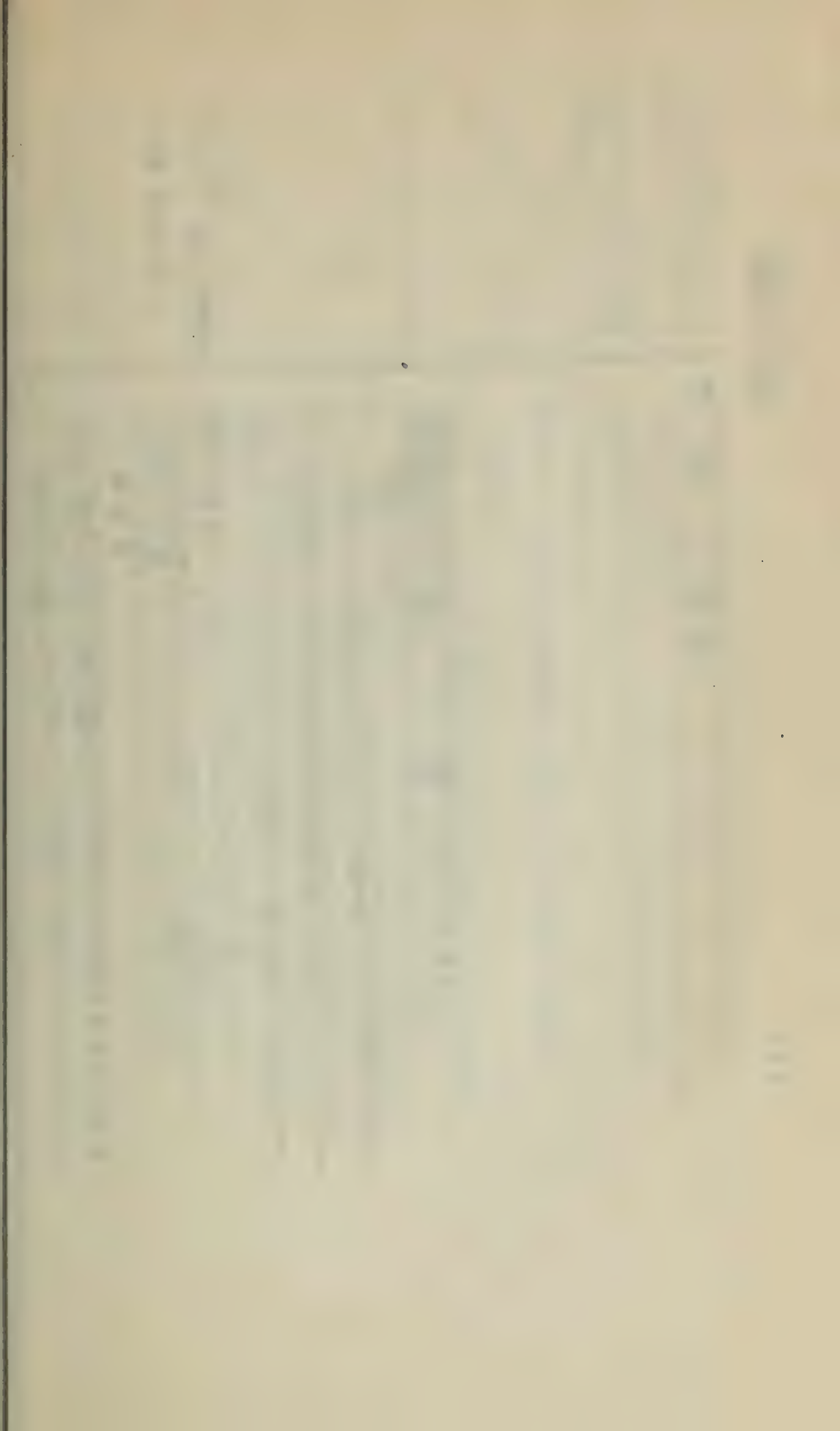
月と日をふたみになして玉くしげ明け行く浦の名にこそありけれ

津の國鮎川なる厭求法師存世の時鳥の聲を聞きて悟道のことありけりとて今年その百回忌の追善にからすといふ題を出してある人歌すゝめけるによりてつかはしける

鮎川(あゆかは)のゐぐひの鴉(からす)うにもあらず無(む)にもあらずと鳴きやしつらむ

桂園一枝 終

○となる瀬　此の處に瀧あり。

○すきびたひ　透額、甲に月形のすかしある冠。

○白雪なほ低し　師を高く仰ぐに比較していふ。

○覺束なみ　世に洩れはせぬかと氣遣ふ。

○例のみ心　猥りに發表したくないといふ師の御心。

○神宣を蒙らせ　景樹の歿後吉田家より桂園靈神の號を贈られ次いで靈社に進められたるをいふ。

○光を和らげ塵を同じうし　和光同塵、才能をかくして塵の世にまじり居ること。

桂園一枝拾遺序

嚮に桂園一枝世にあらはれし頃、師の大人悔い歎きてのたまへらく、今十年ばかりの齡をえてよみ試みたらましかばと。其の十年に五年六年をさへ加へ給ひしみ齡のほど、あはれ眞の限りをつくし給ひし言の葉や、寛平延喜の上にいで、陽春白雪なほ低しと仰ぎて、常に侍ふ輩いかでうかゞひもらさじとて、年月にかいとめて若干の冊子となし侍りしを、事のついで師の見給ひて、猥りに世に洩れぬべう覺束なみ給ひけむ、大かたは捨てやり給ひて、やゝ二巻ばかり後集のやうにものし給ふといへども、まだおほやけにせむのみ心しらひにはあらざりけらし。さて身罷り給ひし後は、二なき形見とえまくほりする友どち、はた世に廣くとり傳へまほしうながせるも多かめるを、たゞおこたりにかこちて今年七とせの秋までねんじ侍りしは、例のみ心をはかりかねてなりけり。抑いにし年の春かしこき神宣を蒙らせ給ひて、桂園靈神としもいつき奉れるあまりに、今はかの光を和げ、塵を同じうしたまはむ

するより、おほらかにもみそなはしめ許し給はざらむやとて、師の嗣なる景恒うしに申しとき侍るに、げにやかねてよりさこそあらまほしう思ひとりしを、いでしからむには、さきの集に洩らせるも殘り惜しからずしもあらねば、そも其の二卷の中に加へてむやときこゆるに、早くよりのをも聊かひろひ添へて、假に桂園一枝拾遺と外題して、平忠兄、源貞、法橋如一等に謀りて、古昔庵好齋が書き淸めしをやがて梓にのぼせ侍りし。斯くておのが願ひをかなへしむるものから、猶おふけなきわざなるをいかゞはせむ。希くは靈神のみたまちはひて、この眞精しきしらべの千歳の後に傳はれらば、誰かは歌の歌たるさまをもしらざらめやは。あなかしこ。

嘉永二年七月八日

平　忠　秋　謹誌

○きこゆ　言ふの敬語。

○梓にのぼす　出版す。

○みたまちはひ　御魂が幸を與へて。

桂園一枝拾遺

春　歌

雪中立春

生駒山雪げのくもはまよへども春とさだめてたつ霞かな

大嘗會おこなはれけるまたの年の春松含春色といふことをよめる

大君の御代のはじめの春なれば松さへ色ぞあらたまりける

春風春水一時來

春きぬと氷をたゝく山風にうちいでて浪のこたへけるかな

春生人意中

のどかなる人の心をしるべにて春もや空にたちかへるらむ

初春鶯

あけぬからなく鶯はあら玉の年よりさきにたちかへりけむ

雪の中になきし鶯うちとけて花にさへづる春は來にけり

初春海

○雪げ　雪の降りさうな雲合。
○春とさだめて　春と思ひ定めて

あら玉の年の初風ふきしよりわが春なりとにほふうめかな

早春河

水上の高嶺よりたつ春ならし雪げみなぎる富士かはのなみ

早春水

いつのまに雪も氷もとけぬらむ緑になりぬしらかはの水

子日

年々にひくてあまたの小松原千代は盡きせぬものにざりける

○千代は盡きせぬ　その一本々々に千代をこめたる松は、引く人がいくら多くても盡きぬといふことゝ、千代のよはひの盡きぬといふこととをかけてゐる。

社頭子日

みづ垣の久しきかげに引きうゑて小松ながらも神さびにけり

名所子日

かぎりなき玉の緒山の小松原ひくてもたゆき千代の陰かな

子日興

姫小松ひくや子の日のをぐるまに若菜をさへもつみてけるかな

寄子日祝

初春のはつ子の今日になりぬなりいざ松うゑて千代の影みむ

霞

○立たば立たむ　春立たば霞も立たんと。

○我にはうとく　松に霞かゝりてさやかに見えぬから。

○連峯朝霞　連峯に霞のかゝる時は山の尾かくれて峯の離れ〴〵になるを歌ひたるなり。

契りけむ立たば立たむと大空の春におくれぬ朝がすみかな

霞添春光

野も山も霞こめたる大空にあらはれわたる春のいろかな

松上霞

山のはの松は霞にたちなれて我にはうとくなりにけるかな

二木とも松はわかれず武隈（たけくま）のはなわにたてる朝がすみかな

霞中閑居

春霞たたばとまちし人はこで野山さへにぞ遠ざかりける

濱霞

眞熊野のうらの濱ゆふうら若みまだ一重なる春がすみかな

島霞

たえ〴〵に沖こぐ舟の苫が島おほふは春の霞なりけり

連峯朝霞

奥深くかさなる峯は中々にかすむあしたぞ立ちわかれける

霞隔山

富士の山はるは霞にうづもれて煙もゆきも下にきゆらむ

霞隔浦

あさなぎに網引やすらむ菅浦のかすみをつたふ蜑のよび聲

霞隔村

けぶりさへ遠き霞になりにけり何かはちかの鹽がまのうら

夕霞ふかくたてりのむら鳥さわぐあたりや梢なるらむ

鶯

いかばかりのどけかればか鶯のなく一聲に春のたつらむ

朝鶯

かぎりなき春のねぶりも覺めにけりおしたのどけき鶯のこゑ

野外朝鶯

朝戸出の袂はいまだ寒けれど野はうち霞みうぐひすぞなく

柳上鶯

鶯のなきて木傳ふ枝見ればはや青柳になりにけるかな

閑中鶯

くれ竹のよにかくれたる宿なれば鶯ならでとふ人もなし

幽居鶯

○ちかの鹽がま　ちかは近に此の名を掛けてゐる。

○くれ竹のよ　竹のよと世とを掛ける。

○打ち拂ふ袖云々　袖に降りかゝる雪の暇間なし。

○ゆたかにも　澤水の多きと袖のゆたかなるとにかけた。

あるかひはあらぬ今年も鶯のはつ音は聞きつ山かげにして

妙法院の宮の御會始に鶯有歡聲といふことをよませ給ふによめる

み園生の花に木づたふうれしさをつゝみかねたる鶯のこゑ

鶯聲誘引花下來

鶯の聲のかをると思ひしは花のこかげに來つるなりけり

雪中若菜

打拂ふ袖の雪まもなかりけりさえ野の若菜いかで摘まし

水邊若菜

根芹つむ春の澤水ゆたかにもたちける袖をぬらしつるかな

紀川つまれぬ水のふか芹もその根は清しかみやうくらむ

田若菜

大あらきの浮田の根芹つむなべに森の木の芽も春やしるらむ

獨摘若菜

人よりもまづ打出でて春日野の飛火(とぶひ)の野もり若菜つむ見ゆ

春雪散風

春くればとても積らぬ雪と見て空にや風のふきみだすらむ

山残雪

霞むべき春の雲居にあらはれていよ〳〵白し比良の遠やま

松残雪

山里は松の白雪下解けて落つるしづくに春をしるかな

巖残雪

山かげに殘るみ雪のつれなきは下のいはほの心なりけり

樹陰殘雪

梅の花さける垣根のしらゆきはまがはむとてや消え殘るらむ

殘雪半藏梅

梅の花殘れる雪のひまごとに咲きいでて匂ふ春はきにけり

家梅始開

わがをかの梅の林ぞにほひけるいく初花かひらきそめけむ

雨中梅

梅壺のうちにたまれる匂ひこそ雲居のあめのしづくなりけれ

窗梅

夕月の影はすくなき窗の中にみちても梅の香こそにほへれ

暗夜梅

梅の花やみにも見ゆと思ひしは木のまの星の影にぞありける

深夜梅

おやなくもふかしつるかな梅の花それとも見えぬ朧月夜を

女の家に男きたり前に梅花あり

さく梅は色もにほひもなかりけり淺くも君によそへつるかな

折梅

梅の花袖のおよばむかぎりあれば思はぬ枝を折りてけるかな

野亭梅

故郷の春日の里に狩にいにて野邊にまづさく梅の花見む

紅梅遲

まがへとや我がまつ梅は紅のいろとも知らで雪のふるらむ

さくことをいそがぬ梅は紅の深くもふくむ心ありけり

河柳

川岸にその根はたえぬ青柳のかげうき草にまがひけるかな

垂柳臨水

○さく梅は云々　女のつれなさを諷した。

○思はぬ枝を云々　思ふ枝は手及ばねば思はぬ枝を折つた云々。

○故鄕の春日の里　伊勢物語の初めに似てゐる。

青柳のたてる石川かたふちにうごくや影のみどりなるらむ

柳經年

年をへて人はおいぬる故郷のやなぎの眉ぞ淺みどりなる

早蕨

賤の男がやくと燒きつる片岡の初わらびこそ萌えいでにけれ

世は捨ててこれのみとりし古の人なつかしき春のさわらび

○古の人　伯夷叔齊周の粟を食むを屑しとせず首陽山に隠れて蕨を採つた故事。

春月

春の夜の月には物を思ふかなたが涙より霞みそめけむ

春月朧

宵々のおぼろ月夜をかごとにて老のなみだをかすめけるかな

○老の涙　月も朧ではあらうが老の涙のためにかすむのである。

春月朧々

中々に雲はたえまも待たれけり霞みはてたる春の夜のつき

霞隔春月

かすむ夜も心づくしの光かなかならず月は木のまならねど

遠山春月

さきいでむ遠山ざくら遠からぬかげこそ匂へ春のよの月

○かゝげ見し　白樂天の詩に「香爐峯の雪簾をかゝげて看る。」と。

○すみわびて今年は　立ち出でむの意。木の芽はるのはるは張ると春とを掛ける。

○去年の吹雪　落花に吹雪を想ひ出すであらう。

幽栖春月

我ならぬ月もこの世やいとふらむ霞の奥にかくれてぞすむ

草庵春雨

かゝげ見しをすの外山も雪きえて雨のどかなる庵のうちかな

山家春雨

すみわびて今年はと思ふ山里の垣根の木の芽はるさめぞ降る

關路歸鴈

とびこえて浪路にきえし鴈がねのあとをや守る須磨の關守

海上歸鴈

折しもあれもろこし舟につらなりて松浦の沖を歸る鴈がね

去鴈遙

大空のみどりをわけて歸るなり蘆間にみえし春の鴈がね

江邊春駒

三島江のたま江の蘆の若葉にはうべこそ駒も繫がれにけれ

野外雉

櫻ちる片野の御野になくきゞす去年の吹雪や思ひいづらむ

山櫻遲

朝な〳〵心に匂ふ面影のさかりひさしき山ざくらかな

山花未開

ちることを何かいひけむやま櫻さくも心にまかせざりけり

初　花

うらやまし共におい きと思へども花は今年も初花にして

依花客來

人めさへ見る日あまたになりにけり片山林はなさきしより

風靜花盛

ちるべくもあらぬ限りは春風のふくものどけき山ざくらかな

月前花

なか〳〵に霞まざりせばてる月の光に花やまがひはてなむ

てりもせぬ朧月夜のをぐら山されどもあかず花陰にして

花下逢人

花にこそ契りおきつれ嵐山去年の人にもあひにけるかな

古寺花

○ちるべくもあらぬ　花を散らさぬ程の春風。

○されどもあかず　なほ月に興あるをいふ。

○花にこそ契りおきつれ　下に人には格別契りもせざりしにといふ心もち。

○古寺花　世捨人の悟を想ひやつた歌。

世をすてて高野の奥にすむ人はちるものにして花や見るらむ

海邊花

肥の海の松浦の櫻さきにけりもろこし舟も見やはとがめぬ

花時無外人

玉ぼこの道ゆき人のことぐさも咲きちる花の外なかりけり

山家花

山里の花の盛りはかはらねど年々ひとは來ずなりにけり

嶺花

葛城の高嶺の花にくやしきは久米路の橋のたえしなりけり

題しらず

何ぞかくさけばとくちる花を植ゑてのどけき春に物思ふらむ

東山の花見にまかりて

家にありて暮しわびつる日數さへ今さらをしき花のかげかな

さくら花ま葛が原にちる見れば春さへ風のうらめしきかな

智恩院の花見にまかりける時

大ぞらのいろの淺葱にさく花を霞の袖のうらかとぞ見し

○家にありて云々　今まで屢花見に来ざりしを悔む心。
○春さへ風の　花を散らす故春ではあるけれど風がうらめしくなる

○積れば浪と　上に何故などの語を置きて見るとよい。

○玉の緒とけて　春の野の陽炎を人魂のあくがるゝと見なした。

花浪

ちる花は山のしづくにあらなくに積れば浪と立ちさわぐらむ

尋殘花

のどかなる春の日影のおそ櫻のこらむ山をけふもたづねむ

時鳥なくべき山のけしきかな遲くも花をたづね來にけり

殘花少

殘りなきわが世の春にくらぶれば散りたる花は少なかりけり

野遊絲

みな人の春の野原にあくがるゝ玉の緒とけて遊ぶ絲ゆふ

遲日

ゆけど〳〵猶山のはの遠ければ空にやすらふ夕づく日かな

瀧下款冬

蛙なくきさの山川おとすみて山ぶき咲けりたぎつ瀨ごとに

款冬露繁

山吹の八重はむぐらにならふらむいつ我が袖の露になれけむ

谿中款冬

〇こきたれて　垂れ下りて。

〇浮寢　船中にねること。

あしがらの八重山吹の花を折りて都戀しきかざしにぞさす

款冬散

風ふけば井手のしがらみ浪こえていとゞうつろふ山吹の花

雨中藤

こきたれて雨はふれどもゆく春はかへる色なき藤波のはな

春鳥

山がらのつゝく岡べのうつぼ木の枝も一枝春めきにけり

をとめらがなつみの川にうく鴨のはがひも春の緣なりけり

春蟲

大空にたはるゝ蝶の一つがひ目にもとまらずなりにけるかな

旅泊春暮

春もはや一夜のつまとなりにけり室の泊にこぎやわかれむ

みなと川浮寢に春やくれぬらむ生田のもりの花も殘らず

春盡鳥聲中

鶯のこゑせぬ里はなきものをいづくを春のくれてゆくらむ

夏歌

題しらず

あかざりし花の名殘もとりそへて木陰戀しき夏はきにけり

夏ごろも袖ふきかへす朝かぜにいまだ昨日の花の香ぞする

首夏待郭公

藤波は葉がくれにこそ啼きけれ山時鳥しらずかもあらむ

更衣

花ぞめの袖の別れのをしければぬぎしもいまだかへぬけさかな

何とわく匂ひならねどとりいでて去年なつかしき夏ごろもかな

題しらず

いつよりも今年は長き春なりとゆたみすぎたる遲さくらかな

卯花

夏の夜の霜には月もまがひけり雪とぞ見ゆる庭の卯の花

鄰卯花

ほとゝぎすまたるゝ頃は卯の花の鄰にあるもたよりなりけり

○あかざりし　未だ興も十分盡きなかつた。

○何とわく云々　何々とはつきり解つた匂ひではないが。

薄暮卯花

卯の花の光ばかりになりにけり垣ねくれゆく玉川のさと

卯花似月

夕まぐれ手折りて見れば卯の花のつきは袖にも宿りけるかな

卯月家の神まつる

卯の花をしらゆふ花ととりしでていざ庭中のかみまつりせむ

神まつり

たが里も卯の花垣のしらゆふに神まつるべき時やしるらむ

新竹

雨はればぬきてと思ひしかひもなくこは皆竹に成りてけるかな

雨中新竹

露だにもいまだならはぬ今年生ひのま垣の竹に五月雨ぞふる

稍々笋成竹

いつのまにうきふし繁くなりぬらむ竹のこのよはかくこそ有りけれ

尋郭公

ほとゝぎす何處(いづく)の雲に忍ぶらむ山には聲もきこえざりけり

○とりしでて　たれさがらせて。

○雨はれば云々　竹の子の生長速かなるをよんだ。

○いつのまに云々　竹にかこちて人の世を言ふ。

○しめのうち野　しめ繩をはりて限れる野。神より見れば大空もしめのうち野に同じその意。

○人よりもおくれて云々　郭公の客の來る前に鳴きしをいふ。

待郭公

郭公きかむとおもふに夏の夜はまぎるゝ鳥の多くもあるかな

終夜待郭公

まつほどにはや夜はあけて時鳥なかぬこゑにも驚かれけり

　聖廟法樂の歌よみける中に郭公といふことを

大空もしめのうち野の時鳥こゝろのまゝに神はきくらむ

待客聞郭公

人よりもおくれてとはば郭公ともにきくべき初音なりしを

遠郭公

時鳥もらすばかりのなさけにて遠き初音はきくかひもなし

おいぬれば耳なし山の時鳥とほきは聲のとほきのみかは

憎郭公

ほとゝぎす立ちくゞれとや山里の卯の花がきはまばらなるらむ

聞郭公

あふ坂のせきの杉むらすぎかねて夜半にも名のる時鳥かな

鵑入夜琴

○緒なき琴　無絃琴。陶淵明がこれを弾じたといふ。

○ながこふらくは　汝が戀ふるは誰が世ならむといひて我も昔を偲ぶ意をふくむ。

○五月いつか　いつかに何時かと五日を掛ける。

時鳥なきたゆむ夜の手すさびに緒なき琴をば調べそめけむ

杜鵑聲似哭

郭公ひとむらさめのふり出でてなく涙さへ見ゆるそらかな

郭公遍

郭公なるればなれてきかぬ夜を數ふるまでになりにけるかな

まつ人も今はなきまで足引の山ほとゝぎす里なれにけり

郭公歸山

郭公ことしもやがて歸るなり猶みやまべやすみよかるらむ

郭公增述懷

なくからに悲しくもあるか時鳥ながこふらくは誰が世なるらむ

採早苗

暮るゝまで田子の諸聲きこゆなりけふ植ゑはつるさ苗なるらむ

曳菖蒲

時にあひてひかるゝ沼の菖蒲草五月いつかと待ちわたりけむ

沼菖蒲

淺香山かげさへ見えぬ五月雨に沼のあやめはひく人もなし

○外ににほはむ袖しなければ　共に見る人もなくたゞ獨りあるをいふ。

○ともしさし侘びて　ともしは照射にて狩せんとするをいふ。一三五頁照射の頭註參照。

○瑞垣は云々　みづに水の意の通ずる樣になつたのをいふ。

閑庭盧橘

たちばなも我を哀れと思ふらむ外ににほはむ袖しなければ

盧橘子低

あらぬみになれるを見れば橘の昨日の花もむかしなりけり

五月雨

桐の花おつる五月の雨ごもり一葉ちるだにさびしきものを

山五月雨

ますらをは端山のともしさし侘びて幾夜くゆらむ五月雨の頃

河五月雨

日かずのみふる五月雨の湊川とらぬ眞楫もくちやしぬらむ

瑞垣は波のひたせる名なりけりみたらし川のさみだれの頃

渓五月雨

なく鳥も空にきこえず谷川の音のみまさる五月雨のころ

五月雨晴

五月雨はけふぞまことに晴れぬらむ雲の八重山あらはれにけり

月前水鷄

○水鷄の聲もいは叩く　水の岩うつ音にことよせて水鷄も岩叩く様な聲して鳴くといふ意。

○夏の夜を云々　短しと惜しまれる月の却つて人の世の短きを惜しむであらうと思ふ。

すむ月の氷をたゝくこゝちして山澤水にくひな鳴くなり

水邊水鷄

山かげのいづみの水にことよせて水鷄の聲もいは叩きけり

竹間夏月

山風のふきなびけたる呉竹のかへればくもる夏の夜のつき

河夏月

篝火はしらぬ川瀬にたきすてて鵜飼がともも月や見るらむ

沙月忘夏

くれにけり月すみ吉の濱にいでて夏忘れ貝いざや拾はむ

短夜月

夏の夜を短きものと惜しめども月も人の世をさぞ思ふらむ

夏月如秋

桐の葉のかへる隙もる月みればちりたる秋の心地こそすれ

夏草

高島のかち野の原の夏草は人のたけにもたち及びけり

野外夏草

○てらす日に云々　草も萎え風も止みたる夏の濕氣の景。

○六月のかはら云々　暑さのきびしきさまを詠じたもの。

○庭のをしへなければ　庭の敎は家庭の敎訓、こゝは園に手入れせざればの意。

夏さればあらはるゝ名に埋もれて野となり果つる深草の里

てらす日にしなえうらぶれ篠薄風さへほにもいでぬ野邊かな

水邊夏草

湊江のよどの若ごも刈らぬまにひきても汐のほしてけるかな

題しらず

六月のかはら撫子うちよする浪のつゆさへ乾くころかな

瞿麥勝衆花

櫻のみわがしきしまの花といふ人にや見せむ大和なでしこ

閑庭瞿麥

撫子も心のまゝにさきにけり蓬が庭のをしへなければ

鵜川

さきた川浪さへもゆる篝火はこの世に見るもおそろしきかな

雨後鵜川

雨はやみ雲まだはれぬ夕やみの空まちいでてさす鵜舟かな

鵜船廻島

たちばなの小島の崎やめぐるらむ空に匂へる篝火の影

○照射　ともし、昔獵人が夏の頃火串に松を燃やして鹿を寄せこれを射たこと。

○なほねをたえて　浮藻の根を絕えてとぶと螢の音を絕えてとぶとを掛けたもの。

原照射

鹿まつとゐなのふし原ふしもあへず弓末ほの〴〵夜は明けにけり

亂れても鹿おふさまをもろこしの原のともしに思ひやるかな

水邊螢

岩浪の音せぬかたにちる玉は風にくだくる螢なりけり

山川の浪のうき藻やくちぬらむなほねをたえてとぶ螢かな

河づらの螢のかげにあらはれて末葉もしろし根白たかがや

螢知夜

こもり江のみづから移る影をみて螢も浪のよるやしるらむ

河邊螢

ゆふべ〱何をほたるのおもひ川影になるまで燃えわたるらむ

螢近飛

上野や伊香保のぬまに旅寢してほたるを袖の物とこそみれ

橋上螢

柴人のふみあらしたる山川の朽木のはしに螢とぶなり

叢螢

思ひおくたが草のはら朽ちてだにきえぬ螢のもえわたるらむ

螢火透簾

玉だれのをすの隙よりそれと見て卷かむとすればゆく螢かな

疎屋夕顏

いにしへのひさごかけけむすまひさへ思ひやらるゝ夕顏の花

蓮露

かたぶけばこぼるゝ露を蓮葉のおきためたりと思ひけるかな

氷室

松が崎氷室の口やあけぬらむおろすあらしの寒くもあるかな

宇多山の松の下根にむすびおく氷はときも知らぬなりけり

夕立

夕立の雨の八重雲たちまちに降るしばらくは夏なかりけり

夕立早過

ならの葉に一むらかゝる夕立のすくなき雨は露におとれり

遠夕立

はるかにもなる神山の夕立のあめを見せたる賀茂の河みづ

○思ひおく云々　螢につけて亡魂を想うて詠じたのである。

○をす　小簾。

○はるかにもなる神山の歌　河水の增したるによりて遠き夕立を知る意。

扇

端居してならす扇の風にこそまづ荻の葉はそよぎそめけれ

かげ深き山にすむ身も世の中のあふぎの風をたのむころかな

閒中扇

ゆふべ〱扇のかぜにはらふかな誰をばまたぬ夜牀なれども

避暑

むすぶ手にさへぎる水の白波の聲の外にはふく風もなし

泉忘夏

うちつけに氷をむすぶ心地してあまりつめたき山の井の水

山泉忘夏

おく山の岩間の水の白玉は夏をはなれて落つるなりけり

松下流水

松ふるく水あたらしき山陰は夏こそ來べきところなりけれ

水邊納涼

此のさとの板井の清水くむ人のかずにも夏はいりにけるかな

風わたる賀茂の河原の柳かげうちなびきてもすゞむ頃かな

○かげ深き云々、閑居してもなほ世を思ふ情。

○うちつけに　ちかくに。

船納涼

松かけにとまらぬ船もなかりけりあらしや夏の湊なるらむ

松下納涼

かぎりなき大海原の波の音を松にこめてもきく夜なりけり

樹下納涼

ならかしの廣葉が上に音はして袖にはあたる風ぞすくなき

四條の大すゞみにまかりて水風涼といふことを

水鳥のかもの川風ふきにけりいくらの袖か涼しかるらむ

晩涼

けふもまた鳴き暮したる蟬の羽のうすき日かけに山風ぞふく

夏山の楢の葉わたるゆふかぜに袂までこそひるがへりけれ

ゆふべ〳〵すゞむ川戸の水底に秋まつ星のかげも見えつゝ

夏述懐

ともすれば燃え立つかびの下にのみくゆり難きは此の世なりけり

夏天象

山の端にすばるかゞやく六月の此の夜はいたく更けにけらしな

○かぎりなきの歌　松風の音をきいて大海原の波の音を想ひやらるる。

○秋まつ星　秋は七夕をさす。

○すばる　七曜の星。昴。

秋歌

六月立秋

六月のてる日のうちにたつ秋は風の音にもしられざりけり

立秋風

荻の葉の音そよさらに聞ゆなりたてるやこよひ秋の初風

初秋露

人しれずこぼるゝ袖の露見れば老こそ秋の初めなりけれ

眞萩さく岡邊の露に朝な〳〵もすそぬらさむ秋はきにけり

早秋朝山

すゞしくもけさぞ聞ゆる蜩のはやまが峯にあきやたつらむ

湖早秋

玉手まきねての朝髮垂姫の浦かぜさむし秋たつらしも

七夕

棚機も鳥の教へしあとふみて渡りそめけむかさゝぎの橋

年あらむ秋も願ひの絲の上にわさ穗のかづらかけて手向けむ

○垂姫の浦　越中、萬葉十八「垂姫の浦を漕ぎつゝ今日の日は樂しく遊べ言ひつぎにせむ」

○鳥の教へしあと　書紀一書に諾冉二神男女交合の道を鶺鴒に習ふとある。

○かさゝぎの橋　淮南子に「七月七日の夜烏鵲塡河成橋以度織女。」とある。

○わさ穗　早稻穗。

七夕月

久方の天のかはらにてる月のわれてあふ夜や今宵なるらむ

七夕雲

一年もたえまおかねば久かたのくもの通ひ路ふみなれにけり

七夕水

織女のふかきちぎりやうつるらむ影みる水の底ひなきかな

七夕草

棚機にこよひ逢ふてふ彦星も心わくべきをみなへしかな

七夕橋

棚ばたのあかぬ別れを天の川なきてやわたす鵲のはし

庚申七夕

たなばたのねぬ夜かなしき秋風にぬらしそふらむ天の羽衣

荻風

いかにうき荻と風とは契りにて吹けば悲しきものとなりけむ

月前荻

荻の葉に秋のゆふ風たちぬめり今夜も夢やおどろかすらむ

○一年もたえまおかず　毎年通へるをいふ。

○庚申七夕　庚申の夜三猿の象を祀り其の夜を守りて寢ざる習ひがある、七夕の夜庚申にあたれる故此の歌をよんだ。

○閑庭荻　訪ふ人も無き庭にあつて昔のことを思へる歌。

○行路萩露　萩の露を小男鹿の涙と見たのである。

○てる月のかゞみ　月光を鏡と見たてた。

ほにいでぬ荻の末葉もほの〴〵とあらはれ初むる山の端の月

雨中荻

ふりくらす雨の雫のさびしさを吹きだにみだせ荻の上かぜ

閑庭荻

とはれつる昔の秋のいつまでか驚かれけむ荻のうは風

各行見萩

萩が花さきちるかげに都人おくれさきだちつたふ野邊かな

行路萩露

小男鹿の涙ぞ袖にこぼれける朝たつ野邊の萩の上のつゆ

故郷萩

高圓の尾上のみやのはぎが花にほふらむとも忍ばむやたれ

故郷薄

故郷のすゝき一むら今さらに誰を招けとかりのこしけむ

月前女郎花

てる月のかゞみに寫る影みれば色さへ白き女郎花かな

曉露

白妙のゆふつけ鳥のなくなべに露おきわたす小野のしの原

風前露

故里のもとあらのこ萩ひとりすらこぼるゝ露をふく嵐かな

蟲聲非一

よるなれば花の千種はみえねども色々になく蟲のこゑかな

月前蟲

月てれる淺茅が上にかげみえて翅(はね)きる蟲の聲さやかなり

深夜蟲聲

更けぬれば草葉にあまる露もあれど野は蟲のねに埋もれにけり

蟲怨

波こゆるたが秋風をうらむらむ尾花がすゑの松むしのこゑ

海邊秋風

白妙に浪こそかへれわたつみの袖のうら風秋やたつらむ

秋夕雨

大かたの人の涙やふりくらむゆふべかなしき秋のむらさめ

秋夕雲

○白妙の　ゆふ（木綿）の枕詞。ゆふつけ鳥は鷄。

○袖のうら　歌枕、羽前國最上河口の海濱。

○秋夕雲　景情相交へて詠じたる歌。

○駒迎　古昔八月に諸國より獻上の馬を逢坂關まで出迎へしこと。
○望月の駒　信濃の國望月の御牧の駒。

つく／＼とながめいり日の影落ちて色なき雲に秋風ぞふく

橋上秋夕

秋風のさむきゆふべに津の國のさひえの橋をわたりけるかな

山家秋夕

なか／＼に世の中よりもうかりけり山のいほりの秋の夕ぐれ

たちいでて誰に語らむ日ぐらしのなく山陰の心ぼそさを

水邊秋夕

鴫のゐる澤邊の水はすみにけり草かげみゆる秋のゆふぐれ

秋夕傷心

秋風にみだるゝ袖のゆふつゆは心をしぼる雫なりけり

駒迎

秋の夜はふりはへてだに望月の駒ほしかりし逢坂のやま

初鹿

さを鹿の初聲たかし去年よりも今年は妻やつれなかるらむ

夜鹿

さを鹿の妻とふための秋ならしつれなきまでに永き夜半かな

遠鹿

ほのかにも聞えぬまでになりにけり嵐のあとのさを鹿の聲

田家聞鹿

賤がもる籠の小田に聞ゆなり暮るゝ高ねのさを鹿のこゑ

稲妻

はかなくも消えば共にと稲妻のうきたる雲に宿りそめけむ

○稲妻の歌　浮雲に閃ける稲妻を見て言ふ。

巻向の檜原がおくの稲妻はすりいだす火のこゝちこそすれ

秋日村雨

山がつがけふも日和と干す稲に朝露ばかりそゝぐあめかな

月

限りなくすめる月にはいにしへの人の影さへ見えわたるかな

大空のすめるが上にすむ月の光ぞ秋のひかりなりける

逐夜月明

明日の夜は又あすの夜やまたるらむ昨日にまさる月の影かな

對月待客

わが心幾たびゆきてさそふとも知らで今夜の月やみるらむ

もろ共に今宵はみむと契りしをなか〳〵月に忘れはてけむ

山月

近江のや鏡の山はてる月をかけたる秋の名にこそありけれ

月出山

山の端のくるゝもまたで出づるこそみちたる月の心なりけれ

月浮流水

底すみて流るゝ水のなかりせばうき世に月は宿らざらまし

林間月

しはせ山杉の林はしげけれど見るひまえたり有明の月

樹陰月

ゆくまゝに見えずなりぬる月影は木隠れたりと我をうらみむ

竹間月

ふしてこそ見るべかりけれ呉竹の下てりわたる十六夜の月

湖月

はる〳〵と志賀の辛崎あらはれて鏡の山をいづる月かげ

關守のとゞめざりせばいかで見む箱根のうみの秋の夜の月

○月出レ山の歌　形の圓き月はその心も圓しと推せるもの。

○箱根のうみ　蘆の湖。

〇淨侶翫月の歌　西行の歌に「捨てゝいにし憂世に月のすまであれなきらば心の猶がさゝましとあるに同じ心持。

湖上月明

月すめば比良のたかねに雪ふりて眞野の入江に氷をぞしく

河上月

筑摩川秋ゆく水の清ければそこまですめる月のかげかな

山館見月

山深み月もよな／＼すみわびて我がさびしさを思ひしるらむ

雲間待月

いかにせむ雲の衣のうらにありてまだあらはれぬ月の白玉

淨侶翫月

一つだに物はなしといふ心にも今宵の月はとまらざらめや

晴夜月

てる月のよそにも雲はなかりけり徒らにふく夜半のやまかぜ

野月

大空の雲は千里の外にきえてひとり月こそすみわたりけれ

古寺月

ねられずや月にうかれてとぶ鴫の羽音たかし猪名のふし原

○つきいでにける　月と撞きとを掛ける。

○黒珠の　黒と雪とを對照せる技巧。

○立待月の歌　松も立てるといひて己も立てるを示す。

なには寺はるかに影ぞふけにける月を西には願はぬものを

時しもあれ檜原がうへに有明のつきいでにける鐘のおとかな

故郷月

歸りきて又すむ人もなき宿をいつまで月のもらむとすらむ

海邊明月

大崎の夕しほ曇りかつ晴れてみちたる月に浦かぜぞふく

濱月似雪

黒珠のくろとの濱にてる月のなぞ雪とまで見えわたるらむ

十五夜翫月

あけぬとも月をば入れじ玉櫛笥二夜とだにも逢はばこそあらめ

三五月正圓

塵ばかり雲のかけたるきずもなし今宵とみがく月のしら玉

不知夜月

玉だれのをすにも半ばかゝりけり光いさよふやまの端の月

立待月

足引の山のあなたにてる月をおそしと松もたてるかげ見ゆ

居待月

とく今宵はきはいでなむ玉笹の上にゐてまつ露もこそあれ

月前管絃

心さへしらべ合はせてちゞの秋たのしむ聲ぞ空にきこゆる

月前雲

てる月の光のうちになりにけりさはると見えし空の浮雲

月前鐘

くれわたる入相の鐘の音羽山月みよとてや驚かすらむ

月前思故人

終夜おもひやるこそ悲しけれいかなる世にて月を見るらむ

月前旅情

今すめる月や都の空ならむ思ふ人みな見えわたるかな

釣夫棹月

釣の絲も月にをさめてゆく舟はさす棹さへや忘れはてけむ

曉月

秋の夜のながき心をたのみつゝ明くるもしらぬ月のかげかな

○月前雲の歌　光明無礙の心。

○月前旅情　白樂天も亦詠じて、「三五夜中新月色。二千里外故人心。」と云つた。

○おぼつかなの歌　李白、酒を把つて月に問うて曰く「古人今人若二流水一。共看明月皆如レ此。」の趣。

社頭暁月

夜は今かあけの玉垣ほの〴〵と木の間にしらむありあけの月

深山暁月

ねがふことあり明の月を高野山今宵も槙の葉ごしにぞまつ

我ぞみる山よりおくの山の端にひとりいでたる有明の月

九月十三夜

おぼつかなたが世の後の月ならむ見ぬ秋までぞ戀しかりける

雲月遞微明

浮雲のうすき所になりぬらむ面影ばかりにほふ月かな

憐月

なぞやかく世にも心のあり顔に月をあはれと思ひそめけむ

寄月祝

治まれる御世のためしにひきて見む手にはとられぬ弓張の月

雁

世の中はたちはなれたる大宰の雁もなくなりうき秋にして

このゆふべ都にきくも秋はなほ秋なりけりとかりや鳴くらむ

暮天雁

雲路にも夕は露やむすぶらむ翅(つばさ)はらひてかり鳴きわたる

雁行寫水

雁がねは大空ゆけど木幡がはかげはこの瀬を渡るなりけり

海邊雁

松浦ぶねからろ押しきる大とものみつの湊に雁なきわたる

湖上雁

あま人も今や衣をうちいでの濱風さむみ雁ぞなくなる

關秋雁

狩人のとなみの關もあるものをやすくもきぬる秋の雁がね

江流宿霧中

霧の中に夜はこもり江の澪標(みをつくし)見ゆるや明くるしるしなるらむ

擣衣寒

中々にわが爲ならばから衣さむき夜風にうちやたゆまむ

山家擣衣

旅にぬるひとの夜寒を身にしめてたれふる里に衣うつらむ

○となみの關　越中國礪波の關、となみへ鳥網いを掛けていふ。

○中々にの歌　自分の衣をうつのでなく思ふ人の衣をうつのだらうと思ふのである。

○たれふる里　垂れ經ると誰れ故里とをかけていふ。

山風のさむきも心から衣妹こひしらにうたぬ夜そなき

鶉

まのの浦の入江ふきこす濱かぜに床さへあれて鶉なくなり

菊初開

淵とのみたまらむ菊のはつ花にけさおく露や千世のみなかみ

菊花第一

花といふ花の末にはさきぬれど上に匂はむ花なかりけり

對菊待月

色にのみ月をまたせて菊の花にほひわたれる夕まぐれかな

月下菊

折ることを月もをしとや思ふらむ光にかくす白ぎくのはな

翫菊花

あかずとて折りてかざさば菊の花千世を願ふに成りぬべきかな

終日愛菊

菊見むとまがきがもとにたてりけり南の山も暮れわたるまで

菊花臨水

○菊花第一の歌　開花の時期は末なれど匂は第一なるをいふ。

○月下菊　月の菊を庇ひて人に折らせじとする心を詠ず。

○菊見むとまがきがもとに云々　陶淵明の飲酒の詩中「采菊東籬下。悠然見南山」とあり。

天のがは渚の岡のしらぎくを星のうつると思ひけるかな

故鄕菊

千世をへて歸りきにけむ故鄕のむかしにも似ぬ白菊のはな

菊の一枝

仙人のかざしすてたる菊の花こぼるゝ千代は誰かひろはむ

菊篤重陽日雨開

九月（ながつき）のけふしも雨にぬれにけり折りてやほさむ白菊のはな

秋菊有佳色

美色（よきいろ）はうつり易しといふものを菊の千種（ちぐさ）の千歳なるらむ

菊制頽齡

菊の花人のよはひの早河に千代のしがらみかけてけるかな

紅葉淺

鴫のなく末の原野を見わたせば一むらばやし薄紅葉せり

山松のふかき綠をにほひにてあらはれそむるうす紅葉かな

朝ぎりは晴れての後も佐保山の柞（ははそ）のいろはうすくもあるかな

霧添紅葉

朝な〳〵たちならびたる秋ぎりに山の錦はまかせてぞ見る

紅葉待霜

つひにきておかぬは霜の心ぞとしたに紅葉や思ひそめけむ

杜紅葉

紅葉する立田のもりの風まつり神はうけても見えにけるかな

紅葉勝錦

けふ見れば紅葉の錦ほしてけりしぐれ〳〵し天の香具山

紅葉如錦

山見ればきのふもけふも唐錦いくむら時雨おりいだすらむ

瀧紅葉

山風もいまだ誘はぬもみぢ葉をかげにておとす瀧の白浪

名所紅葉

松の色も紅葉のためと立田姫心ありてや染めのこしけむ

いにしへの賤機山をけふ見れば錦のみこそおりいでにけれ

紅葉盛

いつのまにめぐりはてけむ村時雨染め残したる山の端もなし

○神はうけても見え　神のうけたるにより風もなく秋豐饒なり。

○けふ見れば　しぐれの後晴れて紅葉の映えたる景。

○かげにておとす　影にうつしておとす意。

○松の色も　紅葉の色をよく表はさむため松をそめ殘すといつた。

行路紅葉

鵙のなく道のゆくてのはじ紅葉驚くばかり染めてけるかな

紅葉寫水

もみぢ葉の影ばかりなる柵にしばしいさよふ水の秋かな

紅葉浮水

大炊川舟とながるゝもみぢ葉のとまる湊やゐぜきなるらむ

九月つごもりに女車紅葉の散る中を過ぎたり

もみぢ葉のちるにとまらぬ小車はくれゆく秋の妻にかあるらむ

秋動物

わがすゑし小鷹ぞおどる足びきの山田のひたに驚かされて

秋人事

足曳の山田の原の遠ければ刈りて運ぶにけふも暮れぬる

秋色

松さへや秋の心はかはるらむうつらぬ色もさびしかりけり

秋衣

わがせこにぬひてきせむと唐衣ときしけふしも夜寒なるかな

○山田のひた　山田の引板、鳴子。

○をしね　晩稻。

○しぐればの歌　空には時雨、我が眼には父を思ふ涙。

秋祝

八束穂のをしね刈りあげて諷ふらむ案山子の弓も治まれる世を

冬歌

時雨

野邊見れば草葉みながら色づきぬつゆばかりこそしぐれそめしか

山風にしぐれのこりし浮雲のしばしとふるも頼みなの世や

父君の一周忌に時雨といふことを

うきながら年の一年めぐりきて今年もこその時雨ふるなり

しぐればしぐるゝものと神無月まねび顔にもふる涙かな

時雨向夜

折しもあれしぐれて歸る浮雲のかきくらしたる山の端の月

大空はさながらくれて夕時雨ふる音ばかり殘りけるかな

夕閑時雨

夕ぐれは雲の色だにかなしきに音さへたてて降るしぐれかな

樵路時雨

山人のゆふべの道やたどるらむかへる〳〵もふる時雨かな

杜間時雨

柏の實のおつる音だに悲しきにしぐれぬ間なき久我の杜かな

野時雨

片野ゆく人ぞぬれたる冬がれの荻葉わたりや打ちしぐれけむ

里時雨

炭竈の煙や雲となりぬらむしぐるゝ日のみおほはらの里

岡時雨

雲間よりさすや夕日の岡のべの松の葉見えてふる時雨かな

寐覺時雨

さめて思ふ夢も昔のさ夜時雨おとのみ聞てぬれし袖かは

落葉

山里のおちばの庭ぞさだめなき掃くもみだすも木枯の風

落葉如雨

ちる花は雪にまがひしさが山のさくらの落葉雨とこそふれ

岡落葉

○おほはらの里　おほに日の多しさ大原とを掛ける。

○紅のなみだの歌　愁人落葉に對する哀。

今はとて梢はなるゝもみぢ葉の聲もかなしき神なづきかな

關落葉

不破の關ちる木の葉もて山かぜのふきかへにける板びさしかな

紅葉散

紅のなみだに似てもちるものは物思ふやどの木の葉なりけり

池上殘菊

池のおもに見し有明の影ならでつれなく殘る白ぎくのはな

霜

ぬば玉の闇の空よりおく霜の色いかなればさやけかるらむ

朝野霜

冬のたつあしたの原の下草にかるゝ契りを結ぶしもかな

枯野眺望

つくばねの綠ばかりぞ殘りける冬かれはてし武藏野のはら

夕木枯

おぼつかな木の間に見ゆる三日月もちるばかりなる木枯の風

寒草纔殘

〇昔のまゝ　まゝに眞間の郷をかけていふ。

〇氷のうら　氷の占。

きりぎりす啼きからしたる冬草の下根ばかりに殘る色かな

野寒草

あはれなる末の原野の神無月かれたる草にしぐれふりつゝ

葛飾の昔のまゝの女郎花そのかげさへも枯れし野べかな

谷寒草

松の葉の霜ふきおとす木枯に色こそなけれ谷の下草

氷始結

月かげも殘らぬ水の朝ごほり何をたよりにむすびそめけむ

氷知冬

朝手洗ふ瓶の氷のうらにこそまさしく冬はあらはれにけれ

薄氷

人のゆく道はききつや狐すらうすき氷は渡らざりけり

水氷無音

ゆく水のさゝやく音も耳敏川（みゝとかは）きこえぬまでに氷りけるかな

池水初氷

けさよりぞ結びそめたる池水にうちいでむ波の花の下紐

）みを　水脈、海や河の中にて一條の深みの船路となる所。

（一）玉島やこの河上に　萬葉集五に「玉島のこの川上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき」

瀧冰

おちたぎりみだるゝみをの一筋は冰もえこそ結ばざりけれ

冰閉瀧水

朝冰とづる冬よりおとなしの瀧はなにこそ流れそめけれ

冰の上に紅葉のちりたる

もみぢ葉をおれる冰の薄ものはみだりに波もたゝまざりけり

冬月

くまもなき月を誰かは見ざらむをあたら光の寒くもあるかな

水郷冬月

玉島やこの河上に家もあるを冰にやどる冬の夜の月

社頭冬月

かへす手に霜は拂へど山あゐの袖なほしろし冬の夜の月

寒夜衾

かさぬれど獨りふすまは下さえてねられぬうへに霰ふるなり

椎柴嵐

山かげにかれぬ時雨の音ながら嵐にかわく庭のしひしば

薄暮千鳥

たちのぼる佐保の川霧はれずのみ此の日くれぬと千鳥なくなり

遠近千鳥

あふみのやこの濱千鳥さそふらむ友よぶ聲の沖にきこゆる

湖千鳥

諏訪の海の氷の上をゆきかへり浪をたづぬる千鳥鳴くなり

水鳥

山河のみをさかのぼる蘆鴨のむねやすからぬ世にもふるかな

雪中水鳥

大澤の汀のまつの雪をれに聲うち添へてかもぞなくなる

水鳥馴船

水鳥もふねさす池のおもなれて同じあしまをゆき歸るらむ

葦間水鳥

山川のあしまをくゞる蘆鴨の尾ぶり寒げに見ゆるけさかな

一鳥過寒水

寒き夜をひとりは寐じととぶ鳥の行くへもこほるとこの山川

○水鳥の歌　水鳥を見て世の苦を思ふ。

○網代　川瀨に數多の竹木を編み列ねて魚を捕ふるもの、宇治川にて冬日氷魚を捕るのが名高い。
○ひを　氷魚、琵琶湖宇治川に産す、形白魚に似て小さきもの。

○たゞお　直道、徑路。

○初とがり　初鳥狩。

蘆間鴛

霜おかぬ蘆の葉がくれともねして明けゆく空を鴛のなくらむ

網代

くれぬより河風寒み網代守(あじろもり)おのがかゞりのひをや待つらむ

朝網代

網代人朝こぎ歸る舟の中にたまれる雪はひをにぞありける

閑庭霰

かくれがの苔の上には心して靜かにもちる玉あられかな

霰殘夢

わが通ふ夢のたゞおを妨けてひとりもはしる玉霰かな

竹間霰

聲もなくべき年のくれ竹にあられのみこそおとづれにけれ

窗霰

あられふる學びの窗のくれ竹になげうつ玉のこゑもきくかな

狩場霰

初とがりまだ据ゑなれぬはし鷹の翅をかけて降るあられかな

時しもあれ雪をくゝみていかり猪のたける狩場に霰ふるなり

待初雪

今夜こそつもらむ峯の初雪をいはぬいろなる夕暮のくも

山寒雲

白雪の積らむけさの山の端はまづ雲にこそうづもれにけれ

河雪

こえかねし浪かとみえて大堰川るせきもたわに積る雪かな

濱雪

海人のみやけさ打出の濱千鳥あらぬ跡こそ雪にみえけれ

海邊雲

煙のみうづみ残して鹽かまのうらさびしくもつもる雪かな

常磐木雪

玉つばき二たび三たび花さきて雪にぞかげはあらたまりける

はつせ山櫻か枝はまばらにて檜原ぞ雪はさかりなりける

晴雪落長松

松が枝の下をれたりと思ひしは碎けて雪のおつるなりけり

○玉つはきの歌　降りかゝれる雪を花と見たのである。

（）野守の鏡　野の水、童蒙抄に昔雄略天皇の御狩場にて鷹のそれて知れざりしに野守が野の水にうつれる影によりてその所在を申し上げしといふことあり。新古今集に「はし鷹の野守の鏡得てしがな思ひ思はず外ながら見む」

（）たなつ物　稻穀類。

晩頭鷹狩

是れやこの野守の鏡はし鷹の影さやかにも見ゆる月かな

神樂

大君のふきなしたまふ笛竹のあなかしこしと神もきくらむ

題しらず

老いぬれば友なし千鳥あはれまた子を思ふ闇の空になくなり

年々にあはれと年も見てゆかむ齢のほかに積るおもひを

冬朝

初雪はよるもぞふると起きいでて山の高ねをあさな〳〵みる

冬望

霜深き冬の野邊こそ寂しけれあさる小鳥も友なしにして

冬瀬

ころも手の田上川のかみつ瀬に網代うち渡す音のさやけさ

冬里

たなつ物かりて收むるくらかきの里はふゆさへ賑ひにけり

冬祝言

音羽山きみが御幸のあととめておつる木の葉も千代の數なり

歳暮

したへばぞ我が身に年の積るらむ思ひすててや春をまたまし

海邊歳暮

こよろぎのいそぎなれたる蜑の子はたつ年浪も知らずやあるらむ

家々歳暮

松たてて迎へぬ門もなかりけりたが里よりと春やまどはむ

事につき時にふれたる

立ちかへり神代の春の朝づく日のぼるやあめのいはくらの山

正月たつけふにしあれや祝ひじま小松がうれにたづさはになく

けふはとて春まちえたる山里の玉の簾は垂氷なりけり

とけてだに鯨さやれるえぞの海の氷れる冬を思ひこそやれ

やま水も氷とく／＼おちくめり岩間をわたる春のあらしに

ふる雪もともに亂れて鶯のきたるかひなき梅のはながさ

忍ぶ山しのび／＼にさつ人のとなみはるさめ今日も降りつゝ

○こよろぎのいそ　磯と急ぎとを掛ける。

○さつ人　獵人。

○となみはる　鳥網張る、はるに春をかけていふ。

○柳櫻にこきまぜて　古今集に、「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」

○つてやらむ　話してやらう。

○のりの輪のみ　乘りと法とをかけて法輪寺といふ。

う〻たねに打ちながむれば廬垣のしだり柳に月はかゝりぬ

おしなべて梅の盛りになりにけり夜ふく風もなつかしきまで

歸るにはまだ日も高し稻荷山ふしみの梅の盛りみてこむ

みやこ人柳櫻にこきまぜて袖のにしきもかなる春かな

あくがれて心も花にのる駒の道さまたげにもゆる若草

故里へかく玉章をつてやらむ折しもあれやかへるかりがね

うらみてもたが引きやりし玉章ぞはなれ〳〵てかへる鴈がね

花にあかで塒にかへる鶯は日とく暮れぬとねをやなくらむ

花かげに遊ぶを見れば乘りすてし駒も家路や忘れはてけむ

青海のうつまさ寺にきて見れば身もなげつべき花の陰かな

大井川鮎とるわざをけふ見れば流るゝ花をすくふなりけり

蝴蝶だにいまだねぶれる朝かげの花を起き出でゝ獨りこそみれ

菫つみ一夜しねずば朝づく日にほへる野邊の花も見ましや

大井川入江のりこむいかだしの棹のうへこす花のしら波

ひきたがへ花見車にのりの輪のみ寺の春ぞにぎはひにける

ともすれば霞のかげに隱れけり二人ならびの岡のべの松

見ても猶みまほり川の反橋花にかけたる名にこそありけれ
あらたへの藤江の海人のいへ櫻みえこそわたれ夕和にして
白雲にたちまがへるは白雲のたちまがひたる山ざくらかも
愛知がたわかめかり上げほし崎の干潟も見えず霞むけふかな
東路のはなのさかりに忍ぶかな都の吉田岡崎の里
吹きおろし吹き卷く風にしのすだれ花と共にもみだれけるかな
花みむとうゑし山吹一重とも八重にもいまだいはぬ色なり
我妹子がひたひ髪ゆふ元結のこむらさきなる藤浪のはな
あら玉の年の一とせくるゝより惜しきは春の日數なりけり
なら山の兒手柏に風ふれてうらおもしろき夏はきにけり
なつかしき若葉のかげになりにけり昨日か吹きし木枯の杜
月かげににほひとらるゝ卯の花はくるゝまでこそおのが色なれ
音羽山たづねくらしてほとゝぎす聲こそなけれ逢坂のせき
時鳥檜原がうへにふるあめも音たかやまに今ぞなくなる
郭公まださとなれぬゆふやみに忍びもあへすとぶほたるかな
くれにけりさ苗とる賤がをがさ原夕日の影もさゝずなるまで

（一）都の吉田岡崎の里　景樹の住んだ十首、旅に出ての作んだのである。

（一）ならら山の兒手柏　萬葉集十六奈良山の兒手柏の兩面にかにもかくにも侫人の友」を下に擧げられて趣を異にして絶妙である。

○うゑみてにけむ　植ゑ終つたのであらう。

○故里のよもぎ　五月五日、一般に家の軒に菖蒲・蓬とを葺く。

○梢より梢にうつる　月行の速きを言ふ。

○わきいかづち　別雷神で賀茂上社の祭神。

家にしてけふはうたへる聲すなり門田のさ苗うゑみてにけむ

故里のよもぎは軒におよびけり菖蒲ばかりをふきや添へまし

遙かにものりあまされてぶちごまの埒の外にもいばえけるかな

たが宿の昔をかけて橘の遠くもこゝに匂ひきつらむ

もとよりの壁はくづれて葎のみ八重とぢはつる五月雨の頃

五月雨のあめにや星のおちつらむ石ばかりにもなれる道かな

ねられねば舟ばた叩き諷ふ夜をなくひなも聲をあはせ顔なる

五月雨のふる日寂しきうたゝねを叩き起すは水鷄なりけり

あけやすき空だにあるを梢より梢にうつる夏の夜のつき

しきしまの大和撫子人の世にまきし種にはあらじとぞ思ふ

なきくらす蟬の涙やおちぬらむ露こそみゆれ杜の下草

山賤が蚊遣にたつるおがくづのこまかにものをくゆる頃かな

あけゆかば春らむと冰室守おのがまろねもとけぬ夜半かな

村雲をわきいかづちの名もしるく神垣ひかり夕立ぞふる

山おろしに霰たばしる心地して夏とも知らぬ瀧のしらたま

誰とぬる中とはなしに夏衣ひとへばかりも厭ふころかな

蟬の羽にたらの葉おほひ吹く風の亂れて共におつる聲かな

うてば火のいづる叢の何處よりわけばか水の涼しかるらむ

秋風のしのび／＼にかよへばや松のした葉ぞ紅葉ぢそめける

涼しきを雨のなごりと思ひしはやがてもあきの始めなりけり

たむくべき梶の一葉ぞちりにける星の林も秋やたつらむ

富士がねに初雪ふれり庵原のきよみが崎に秋やたつらむ

棚機のつまとぬる夜を獨りすむ月人をとこねたしとおもはむ

古里の昔がたりにあらなくに涙こぼるゝ荻のうはかぜ

藤ばかま下のくゝりと見ゆるかなうら紫のりんだうのはな

いづれかはおのが主とまどふらむ中垣にさく朝顏の花

門田早稻ほにいでたるをゆふべ／＼のほる露かと思ひけるかな

武藏野をわがわけくればにげ水のゆくへまどはす蟲の聲々

こと更にてる三日月は三栗の中なる秋のかたわれにして

足引の山田のはらにひくひたの影さへ月にみゆる夜半かな

こよひこそ月もますみの鏡山むかはぬ人はあらじとぞ思ふ

曇りてははるゝ月夜ゐしの簾まきみおろしみふかしつるかな

○たむくべき梶の一葉　七夕祭に梶の葉を手向ける習あり。

○ねたし　寢たしと妬しとをかけた。

○りんだう　龍膽。

○にげ水　晩春より夏にかけて武藏野に生ひ茂れる若草の葉末が遠くよりは水の流るゝが如く見え近づけば見えなくなるをいふ。

○庭たゝきの歌　枯草にかゝれる一面の霜を庭たゝきの拂へるを見ていふ。

赤裳ひきたでりと見ゆる玉だれの内おらばにも出づる月かな

隅田川つきも都の名にしおはばこよひ戀しき影やとはまし

筥根山たかねの松のひま見ればあけかゝりたる有明の月

さらぬだに峯の松垣荒れ果ててすまれぬものを冬はきにけり

庭たゝき垣ねの霜を拂はずば枯れたるくさの色もみましや

神無月このは落ちたる朝戸出に夜半の寐覺のかずを見るかな

おくて田のさはだを刈るとけさ見れば穗浪かたがけ薄冰せり

山おろしの風に一むらちる霰かやが軒端のたますだれなり

むら千鳥よする浪にやならひけむ立つ時聲のきこえけるかな

受けがたき伊吹おろしに朝妻の片山がくれ千鳥なくなり

しら河の木の草河ふゆがれてほそきながれに千鳥なくなり

木がらしに下紅葉さへちりはてていとゞ常なる松の色かな

いかにねむ麻手小衾うちかづくあふちの風も寒きこの夜を

園の上の松の上葉におく霜をかづくふすまの下にしるかな

てる月の中なる里のつめた川冰れる夜半の名にこそ有りけれ

一むらの冰魚かと見えて網代木の浪にいさよふ月の影かな

遠方のたかねの雪はいづる日の光につもるこゝちこそすれ

炭がまも埋火にして池田人けぶりのおくにこもる冬かな

梅がえの花と一つに見ゆれども寒きや月の光なるらむ

終夜あし火たく屋にねたれどもうら風さむし雪のふれれば

今は世にあるにもあらぬ老が身は捨てゝ年だに積らざらなむ

玉の緒のたえぬばかりの思出にまたるゝ春は哀れなりけり

夜のうちにつくりし雪のけづり花三世の佛はいかゞ見るらむ

夕されば物思ひましらなく聲のみたびもまたでぬるゝ袖かな

くひなだに音づれかねし我が山の松のとぼそを叩くおとあり

新しくかけたる松の丸木橋もとより苔はつけるなりけり

たらちねに似たりときけば増鏡わが影さへもなつかしきかな

墨染の夕の山をながむれば松のたてるも寂しかりけり

いかなれば杣木きるてふ山人のをのにありながら音無の瀧

岩がねを洗ふと思ひし荒磯の浪はもくづをかくるなりけり

おぼつかな昨日もけふも白雪の跡なき跡をふむ山路かな

ぬれ／＼てゆくらむ物と誰かけふ雨ふる里に思ひ出づらむ

○玉の緒の歌　かひ無き身に得たる、春を哀む心。

○けづり花　造花。

○三世の佛　三世にわたる佛。

○物思ひましら　「見ずきかず云はざる猿の三つよりも」の歌を心において詠んだ歌で、思ひましらに思ひはましの意をふくめてあるらしい。

○跡なき跡をふむ山路　山路深く越え行くをいへるなり。

すみだ川夕しほ今やさしくらむもとの洲崎にかへる白なみ

ながめやる心は知るや武藏野の尾花がすゑの三日月のかげ

のどかにも鷗とならぶ海士小舟心なきこそ心ありけれ

山路だにさびしきものを啼く鳥の聲さへききもしらぬ國かな

白浪の上を走らす石つぶて沈まぬ程の世にこそありけれ

菜摘にと人はくれども山里のことなし草はしらぬなりけり

吳竹のたえま〳〵に野邊見えてつねおもしろき岡崎のやど

あしけくもよけくもしらぬ我が山に何のさがぞも狐しばなく

池水の底にしづめる石がめはかたしともせぬ萬世ならむ

いくら人わたし〳〵ても山城のよどの舟長しかはおいけむ

住の江の岸の松風ふきけらし淺香のうらに玉藻なみよる

淺澤のぬまのま菰の鬘をとりてこつま少女は眉つくりせり

四長鳥ゐな野の原の玉ざゝに霰ふるまで旅寢してけり

水鳥にならぶうきねを思ふには舟こそ人のつばさなりけれ

大海の舟ばたまきてねたれども猶みる夢は妹が手まくら

うちはへてくるしき世をば中々にかけはなれたる蜑の釣繩

○白浪の上を走らす云々　人の生涯の一瞬なるを形容せるなり。
○ことなし草　しのぶ草ともいふ。ことなしの山里の單調なるをも含めていふ。

○四長鳥　かいつぶりの異名、此の處にては「ゐな」の枕詞。

○何ごとももと糺なるの歌　歌道の復興を糺の神賀茂神社に祈つたもの。

○忍戀　おさ〳〵せる心もちを歌うた。

○ほにいでて　思ひを外にあらはして。

大原やみ幸のあとの柴ぐるまめぐればうつるあはれ世の中

何ごとももと糺なる神ならば昔にかへせしきしまの道

ひきとめよ遠き千里もはなれ駒獨りかけらばかひなからまし

あくがるゝむねの煙を蚊遣にて閨へもいらずあかす頃かな

おく山の石つみ車ちからにも及ばぬ戀のみちぞくるしき

あら玉の年のくれにも人こふる心の鬼はやらひかねつゝ

白髭の神もあはれとおもふらむ老いにけるまでこふる心を

燒太刀のつばの市路にたつ民も打ちやはらげる世にこそありけれ

戀歌

初戀

大方のよその情をみし日よりこひしき人になりにけるかな

忍戀

ともすれば露のみだれむ戀ゆゑにすゝきのほにもおく心かな

忍待戀

さを鹿の立野の原のしの薄ほにいでて人をいつか待たまし

忍久戀

埋木のうつぼにおふる忍草しられぬ中に年はへにけり

聞聲戀

玉だれのをすのめさへに繋ければ聲より外にもる影もなし

見戀

すめ神の大御社のおほみぬさみぬさき何に戀しかりけむ

見書慰戀

かきなすは筆の心としりながら慰むことぞかつははかなき

深夜待戀

閨の戸は人ゆゑあけて山の端にかくるゝ月の影をこそまて

遣車待戀

いかにせむかへりくるまは遲しとて妹がり駒もやられざりけり

祈戀

祈るかひあらむあらじは知らねども世に神ならで誰を頼まむ

思不言戀

わたつみの底に涌きいづるいよの湯のいはぬ戀をば汲む人もなし

○忍ぶ山の歌　白雲の外にも忍ぶ道あれかしと希へるもの。

○白雲のよその歌　伊駒山にいつてその邊をいふ。共に父つれなき様をもなぞらへた。

○から山のからき　落葉したる山の枯木。

忍尋緣戀

忍ぶ山こえむしるべを白雲のよその上にもまがへてぞとふ

忍通書戀

覺束な雲居がくれなゆく鴈のそのおほひ羽にかけし玉つさ

寄山戀

白雲のよそに聳ゆる伊駒山つれなき君があたりなるらむ

寄雲戀

風にやみやがて跡なき峯の雲なびきしまでのちぎりなりけり

寄關戀

いかにせむ越ゆればそふと恃めけり妹がまがきの刈萱の關

寄岡戀

かの岡の松に夕日は隱ろひぬ今やとまたす駒にくさかへ

寄藻戀

潮みつる眞砂が上にみだれ藻のまた引くかたに靡きけるかな

寄木戀

から山のからきが中にさく花を求むるよりもかたき君かな

打ちとけてねもみしものを濱松の久しき世よりしらぬ顔なる

寄木厭戀

題しらず

三吉野の吉野の山にゐる雲の花にまがひし人ぞこひしき

花鳥の色音を何に洩らしけむ物のあはれも知らぬあたりに

わが戀は玉くしげなるます鏡みえも見えずも君がまに〳〵

阿波の海のなるともきかぬ人故に何あだ波のたち騒ぐらむ

我が戀の數をつくさば大島のなるとの浪もたえずぞあらまし

山おろし日も夕かげにふく時ぞしみ〴〵人は戀しかりける

山賤が脊面の岡の畑に生ふるからなたてでもやまむとやする

契りつる花のたよりも過ぎにけり誰にかうつる心なるらむ

年月もまてば待ちしを逢ひ見ての後はたいかにかくは戀ふらむ

ひきいるゝ忍び車のうしみつに轟くむねをやるかたぞなき

うつせみの人め人言しげきまをしばしといひし中絶えにけり

逢ふことは是れを限りといひはてし後こそ戀のはじめなりけれ

君をのみ思ひの草をまくらにて尾花がもとに旅寢してけり

○山賤が云々　噂ばかりでなく誠に戀人の心を得んと望むのである

○年月もまては云々　逢ひ見ての後はこれまで待つた程此の後は待ち得がたくなつた。

○うつせみの歌　人目しげきによりしばし別れたが永の別れとなつた。

百重山へだつ都もみゆるかなこひの上こす峯なかりけり

敷妙のそでもかさねぬから衣つまとは何におもひそめけむ

立名戀

山の端にたなびく雲のいちじろくたつ名ばかりにきえや渡らむ

世の中にしられむとのみ思ひつる名は戀にこそ顯はれにけれ

惜名戀

かばかりの情にかへて惜しむかな何ばかりなる我が名なるらむ

顯戀

夢がたりだにせぬものを何にかも思ひ合はせて世にはしりけむ

疎戀

久方の天のよそづらよそにてもかけて戀ひむは契りならずや

恨戀

幾度かいひ返されて葛の葉の重なるものは恨みなりけり

別不知戀

いかにせむ煙にだにもかへらぬは此の世ながらの姿なりけり

寄琴戀

○世の中に云々　功名成らず先ず浮名の立ちたるをいふ。

○久方の云々　つれなくさるゝもなほ戀ふる樣子。

○いかにせむの歌　此の世ながらの下に「別れて知らず顏にをる」などの語を入れて解すればよい。

君こねはとらぬを琴に積る塵かき拂ふにも音はなかれけり

寄鏡戀

共にみし其の俤はますかゞみ手には取れども手にはとられず

時々驚戀

たえし世は久しきものを鳥の聲かぜの音にも驚かれつゝ

戀車

一夜だに君がゆるさば小車の榻(しぢ)のまろねもうれしからまし

戀島

松前のしまのみ崎に刈りてほす世に廣きめをいかに忍ばむ

雜歌

御即位のあした慶雲のたてるを見てよめる

朝雲のかぎりも見えぬ大空に天つ日かげや今のぼるらむ

題しらず

君が世はえぞが千島による浪の音もきこえずなりにけるかな

富士

○御即位　仁孝天皇の御即位、文化十四年。

駿河なる不二の遠山はてもなく見ゆる雲居にみえわたるかな

風の上にたつ塵よりや積りけむ空にはなれし不二の高嶺は

不二のねに打向ひてはいはき山心なき人あらじとぞ思ふ

あふぎみる雲居に白き富士のねの雪をときはの三保の松原

空の海雲の波間にはちす葉のひるがへりたるふじの芝やま

海上眺望

はる〲と神代をかけて見渡せば雲居につゞく天の橋立

扁舟歸棹

夕なぎに明日もひよりと定めけむ沖にいでたる海人の釣舟

蘆の屋もおなじ一葉の上なれどかへるやなみの心なるらむ

山家

さびしさを常なる山は中々に秋ともしらぬ松風ぞふく

のどかなる大方の世をしらずして山にすめばと思ひけるかな

世の中のなげきは我もこりはてついざ山賤とあひずまひせむ

山家瀧

靜かにと思ひいりにしおく山のみねまでひゞく瀧のおとかな

○雪をときはの　ときはに永久なることと常緑なる意とを兼ねさせた。

○世の中の歌　なげきに木を掛け懲りに樵りを掛ける。

山家眺望

限りなき海も脊がひに見ゆるかな深きは山の心なりけり

山家竹

山賤は軒端にしげる篠竹を小田のかゞしの矢にやはぐらむ

故郷風

ふる里のたまきの宮はあれにけり檜原の風の音ばかりして

故郷橋

古里にとし經てくれば板橋の心さへこそあやぶまれけれ

山寺鐘

つく〴〵と眺むる山の尾上よりくれぬと鐘の聲ひゞくなり

三月十四日立坊の供御中山頭中將の君奉行にまゐり給ひていたゞき給へるを其の内四品ばかり大御器ながらおくり下し給へるを畏くも頂きて

花さそふ大内山のおろしをほうけたる袖につゆさへぞちる

薄暮松

よさの海の湊にいりしかひもなく松の葉見えぬ夕まぐれかな

社頭杉

○おろし　颪と下賜とを掛ける、露には有難涙を含める。

○ことむけし　服從せぬ者どもを平定せしこと。

○たかねの月の影　高き君が御惠みをなぞらへる。

ことむけしこれやしるしの鉾杉も神さびたりな白鳥のみや

竹不改色

呉竹は千世のもと末みどりにて枝さへ葉さへ變らざりけり

從五位下宣下蒙りし時よめる

けふぞしるふして仰げば位山いよ〳〵たかき君がめぐみを

大納言の君より拜敍を祝ひ給ひ下されてかず〳〵御たまものの上に

近き世に例まれなる惠みうけてさかえそふらむ老のゆくする

とよみ加へたまはりたるいとかたじけなみ奉りて

齡のみ世にまれなりと思ひしはこのみ惠をしらぬなりけり

位山たかねの月の影なくばしげき麓をいかでわけまし

三位中將の君よりも

めぐみしる大内山の松の上にふたゝび千世の色やみすらむ

と祝ひたまひ下されたるに

一度の千世をば君にゆづりおきて惠みをまつの陰にかくれむ

題しらず

袖の上におちたる見れば雲居とぶたつのくはえし稻葉なりけり

三條の君より實反公の御集をたまはりて此の中より御撰の上にしるしれ

かるべき御歌えらびてよとありければ撰みて奉るにかいそへたる

藻くづだにまじらばこそは撰びても清き渚のたまはひろはめ

富小路左兵衛佐の君より山吹に御歌そへて賜はりける御かへし

山吹の花にむすべる言の葉の露はこがねの玉にぞありける

元　服

紫のはつもとゆひにかくるかな北の藤なみさかえゆく世を

比叡の麓なる渡邊某が八十賀に

百とせの高ねにのぼれ比叡の山はたちばかりは今ぞ重ねむ

加藤氏の母の七十賀に寄松祝といふことを

千代ふべき君がかざしの松の上に加はる藤の花かづらかな

大和守久敬が七十賀に

かきあはせ調べあはせてうたふらむ君が手馴の大和ことのは

八田知紀が母の七十賀に寄葵祝といふことをよみて遣はしける

たらちねのみ親のもりの葵草かくらむ千代は祈る子のため

人の七十賀よめる中に

○藻くづだに　藻くづでも混つてゐるならえらびもしようが皆美しき玉なれば何れを擇び何れを捨てよう。

○祈る子のため　此處に賀の歌を書くのも母の長壽を祈る子の爲めであるの意。

なゝそぢの心の駒にまかせつゝ千年の坂も乘りやこゆらむ

七世へし其の則とほき斧柯（をののえ）のすゑながしめにきみぞ見るらむ

或人の四十二の除厄を賀して

のぼるべき千年の坂もしら雲のよそぢの上に見えわたるかな

和泉なる里井の家に七人の子ありてあるはその家に富みあるは外に榮えたるを賀してよみてつかはしける

仰ぎても老やたのしむ七つ子のさやにそれ〴〵治まれる世を

おなじ國人の七十賀に

七曲の玉の緒ながく見ゆるかな千とせ萬世ありとほすらむ

夜過關屋

木幡山ふけたる月に關守のゆづるつまびく音きこゆなり

旅

いにしへの草の枕はしらねども旅はねざめぞ露けかりける

あし引の山こえ根こえ越え來れど旅はうきやといふ人もなし

旅宿曉

曉と夜はなりぬれど鳥のねも聞えぬ山にたびねしてけり

○ありとほす　蟻通すと有り通すとを掛ける。玉に絲を蟻の通す話は枕の草子にある。

○曉と夜はなり　夜の明けるをいふ。

他鄕淚

我が袖に知らぬ露こそこぼれけれ草木が上はかはらぬものを

遣唐使餞別

浪速潟みなつくしまでやらませば同じ別れもなぐさめてまし

藤山秀雄霜月ばかり君の御使にて江戸に赴きける馬のはなむけしけるついでに詠める

思ふなよ別れむほどは遠けれどかぎりは見えじ武藏野の原

磯野直章が信濃國へかへりける餞しける夜

立ちかへり又音づれよむら時雨いくたび袖はぬらすともよし

題しらず

住の江のきしかたばかり戀しきに昔に似たる浪もかへらず

遠からぬさかひなれども二度はあひかたし貝いかで拾はむ

寄道述懷

言の葉の道の奥なる淺香やま影だにみずてやみぬべきかな

寄鳥述懷

鳰鳥のいきながらへて後にこそ沈まぬ身とも世には知られめ

○知らぬ露　わけもなく出る淚をいふ。

○かぎりは見えじ武藏野の原　使命の重きをいふ。

○遠からぬの歌　近き處なれど二度と來られさうもないどうかしてかたし貝を拾ひたい。

おふけなや程は雲居の夕雲雀思ひあがりて音をのみぞなく

心せむ鷺のあさりの下にごり世の渡らひもかくこそあるらし

寄馬述懐

老いにけりつひに心のおそ駒は鞭うたれつるかひもなくして

行路述懐

ふみなれし山の岡邊の道に生ふるあなづるにこそつまづきにけれ

夢

あらましの事皆夢にみゆるかなぬるまばかりや我が世なるらむ

世路如夢

定めなき世の中よしや夢ならば憂き事のみは見えずもあらなむ

題しらず

ながむれば涙ぞおつる花やうき月やつらきと人のとふまで

夏無常

ちりぬとも惜しみけるかな蓮葉の下に結べるみをしらずして

仙院崩御をかしこみ奉りて

限りありておりゐの雲居に二度はいかなる空にうつりましけむ

○鷺のあさり　心劣れる者に世の亂さるゝをなげく心。

○あなづる　蔓に侮るをかける。

○おりゐ　天皇位をゆづり給ひて上皇として居給ふこと。

千代とのみよばひしものを蘆鶴の聲くらゐには至らざりしか

諒闇の頃の正月一日芝山宮内大輔の君より梅花ふゝみがちなる三枝ばかりによみそへてたまひたる

春もけふたち枝の梅の初花を君がかざしにたをりてぞやる

御かへし

世の中のなみだに花もたぐふらむかざせば袖にこぼれけるかな

龜山院の御陵のあたりにて

手向にと草のたもとやきりつらむ幣とみだるゝ花すゝきかな

宜阿翁の百回忌に人々に歌すゝめける時懷舊の心をよめる

百歳をふる里にけふかへりきて昔しのぶの露はらふらむ

蘆間鶴

打ちはぶく鶴の上毛もまじるらむ蘆がはなちる住の江のうら

龜

浮木のみ何かはいはむ萬世の春にあへるも契りならずや

龍

天雲のよそにきかめや世の中にたつといふ名もかくこそあるらし

○ふゝみ　含み、つぼみ。

○宜阿翁　香川家の祖梅月堂。

○浮木のみ云々　盲龜浮木の喩、盲の龜が浮木を得て其の孔に入る事、轉じてはいとあひ難き幸福にあふことに喩ふ。

鯉

朝づく日のぼるな淵の上にみてこひのむ心ありげなるかな

山陰はつかふる道も遠しかつ家もわろくなれりよき所をなど人のすゝめける頃放鳥といふことをよめる

心から身は大ぞらにはなち鳥くみ緒しでたる籠も何かせむ

山田清安が通天橋の紅葉に男山といへる酒をそへておくりけるに

今は世に見るかげもなき男山くみてむかしの色にいでなむ

奈良なる人のもとより鈴蟲を籠にいれて贈りけるを道の程にもやつれずふりいでたるを聞きて

この中にありとも知らで春日野の野守とわれをみてや鳴くらむ

小澤蘆庵がもとへよみて遣はしける

身はつかる道はた遠しいかにして山のあなたの花は見るべき

かへし　蘆庵

年をへし我だにいまだ見ぬ花をいととく君は折りてけるかな

本居宣長と東山の吉水のほとりにて物語しけるついでに都の別れ難きことなどいへるに

○こひのむ心　請ひ祈る心、鯉をかける。

○くみ緒しでたる　組緒を垂れて飾れること。

○通天橋　紅葉の名所。

○この中　籠の中。

○身はつかる云々　歌道に對する苦心を述べたもの。

たゞ一め見えぬる我はいかならむ古郷さへに忘るてふ君

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宣長

故鄕は思はずとてもたまさかに逢ひ見し君をいつか忘れむ

赤尾可官がもとより大きやかなる紅葉の枝にがるかやもてつゝみたる小

鳥をそへて詠みておこせたる

村鳥のおちばにまがふ冬山を一人みつるが惜しきなりけり

かへし

其のとりの翅えにけりいざ我もとびたちぬべし君があたりに

修學院の外つ宮の岡紅葉あり時雨ふる

君がため早くそめむと大比叡の雲のとなりにふる時雨かな

花の上に月いでたるかた

大空のかすみの奥にすむ月のとほきも花のにほひなりけり

鍾馗のかた

我はこれ南の山のやま人ぞきみが命はかけじくづれじ

鉢たゝき

口あらばたゝけやまをせ木枯のふくべも獨りこゑたてつなり

（）鍾馗　事物紀原に、「玄宗皇帝夢に一小鬼を見る、上問ふ誰ぞと、鬼曰く、臣は終南の進士鍾馗なり擧に落第せるにより自ら死せるを厚く葬られし御禮に、誓って天下の妖魔を拂ひます。」と、帝さめて疾癒ゆ、卽ち夢の圖をゑがかしな

○かへすまの歌　男の樣を舞へど舞子は女であるからなまめかしさの見ゆるをいふ。

壽老人ねぶれる圖

蘆たづのかへる雲居の遠ければまつ程千代の夢やみるらむ

懸想文賣のかた

是れを見よ花なき里にすまばこそ翅にかけむふみもたのまめ

花使のかた

初鴈もねたしと思はむ八千草にかけし雲居のけふの玉づさ

梶葉に鞠

久かたの天つ星合の手向にはこの夕まりの上やなからむ

職人盡の白拍子くせまひの圖

かへすまはますらを花の袖なれどなまめき馴れしくせは見えけり

山水のかた

いざや今おき浪白しこぎいでて出でたる山のつきのかげみむ

しこ女

むなしきは水の心の深き江に何ぞはうつる影をたのまむ

月下にをとこ女をどるかた

月にねぬやもめ烏やうかれ鳥うたへ諷はむ明けぬともよし

狸腹鼓うつかた

ふけぬるか時の鼓はうちやみてあらぬ音こそ野邊に聞ゆれ

紅葉狩といへる舞の圖

限りあればゑひをすゝめしもみぢ葉のほのぼも消えし秋の霜かな

うつぼ猿のかた

かくもよくつよき心をとる弓のかへりて末に諷ふらむまで

關に蜻蛉をり

ゐては立ちたちてはゐてふ草の上に羽もやすめぬ秋のかげろふ

撰蟲

百敷の大宮びとのえらびにはもれじと蟲もねをやなくらむ

翁稻をおひて田づらをゆく童あとに從へり其の童鮎子を草にさしてうち見もてゆく圖

老人のやしなひ草にとりそへむ年ある秋の小田のいろくづ

篠栗のえだ

山づとに言傳さへもそひてけり初紅葉がり思ひたちてむ

釣瓶に雀をり

汲みすてし人影もせぬ古里の板井のみづに秋風ぞふく

白牡丹のかた

深見草とふるまことの花の色をうかべる雲と誰かまがへむ

窓に夕顔の咲きかゝれるかた

いと白し脊面のまどのたそがれに人かあらぬか花の夕がほ

龜ふたつ行くかた

外になしいざ萬代はよろづ代の友とや龜の誘ひゆくらむ

布袋空をうち見たる

あまりにも其の曉は遠ければまづこのくれのつきや待たまし

操綿婆の圖

花ならぬ翁草にやきせわたのつゆ色もなきすさびなりけり

土佐日記なる宇多の松原のかた

敷島の宇多の松原つばらにも殘れば殘る千代のあとかな

海原の巖に鶺鴒をり

浪間よりとびわたりきて敎へけむ神代の尾振今も見えつゝ

天臺の石橋にて獅子の子を試みるかた

○深見草　牡丹の古名。
○うかべる雲　不義の富貴を喩へていふ。
○神代の尾振　神代紀に諾册二尊鶺鴒より男女の交りの道をまなべる話がある。

ふきおろす谷ふかみ草ひるがへりのぼるも風の力なりけり

衣通姫

ことのはの玉の光も唐衣てりこそとほれよろづ世までに

小侍從

世の中にありわづらひし昔にもまさりてつらき鳥のこゑかな

靜女

松の上にまふとはすれど鶴が岡雲居戀しき音をやなくらむ

李夫人

はかなさをせめて思へばありし世も煙のうちの姿なりけり

季札

つるぎ太刀心にかねてかけたれば其のなき影はとくやうけけむ

陸羽

いかにして木の芽はる〴〵雁がねの羽風高くも薫りきにけむ

古昔の遊女

雲の上にまがへる松の位山まことならぬも懐かしきかな

瓢

○ことのはの云々　衣通姫の歌にすぐれたるこゝとその體の艶く美しさとを合はせよむ。
○小侍從　近衞皇后多子に仕ふ。皇后或時待宵と後朝と何れか苦しきと問はせ給ひしに、對へて曰く「待宵にふけ行く鐘の聲きけばあかぬ別れの鷄は物かは」と。世呼んで待宵の小侍從といふ。

○季札　周の人延陵に封ぜらる魯に使する時徐國をすぐ徐君季札の劍を見て之れを欲す季札その意を知れども敢て與へず使命を果して還るに及び徐君死せりときき劍をその墓にかけて歸る。
○陸羽　唐代の隱士、茶を嗜み茶經を著はした。

○はたのひろもの　大小の魚を古く、鰭の廣物鰭の狭物といふ。

○みなかみ　水上に皆神をかける

行末はともなれかくもなり瓢かけて思はぬ世こそかろけれ

忍草

おく山の槙の朽木のしのぶ草もとのはなりと思ひけるかな

井

さよふけておのづからなる車井のこゑ物凄きこのねざめかな

朝市

朝づく日出でぬ先にとひんがしの市に商ふはたのひろもの

瀧尾社

落ちたぎる瀧のをにこそ亂れけれこはみなかみのなせる白玉

神祇

かづらきや長尾の松の限りなき世々のみしめは神ぞひくらむ

しげりゆくきのみ社は言の葉の花さへみさへ守りますらむ

寄道神祇

闇ならでたど／＼しきは日に見えぬ神をしるべの敷島の道

幸逢太平代

うらやすき御代にはおひぬいざや子ら硯の海の玉拾はなむ

寄海祝

よせくめりもろこし舟の貢物かずをつくしの海もとゞろに

寄弓祝

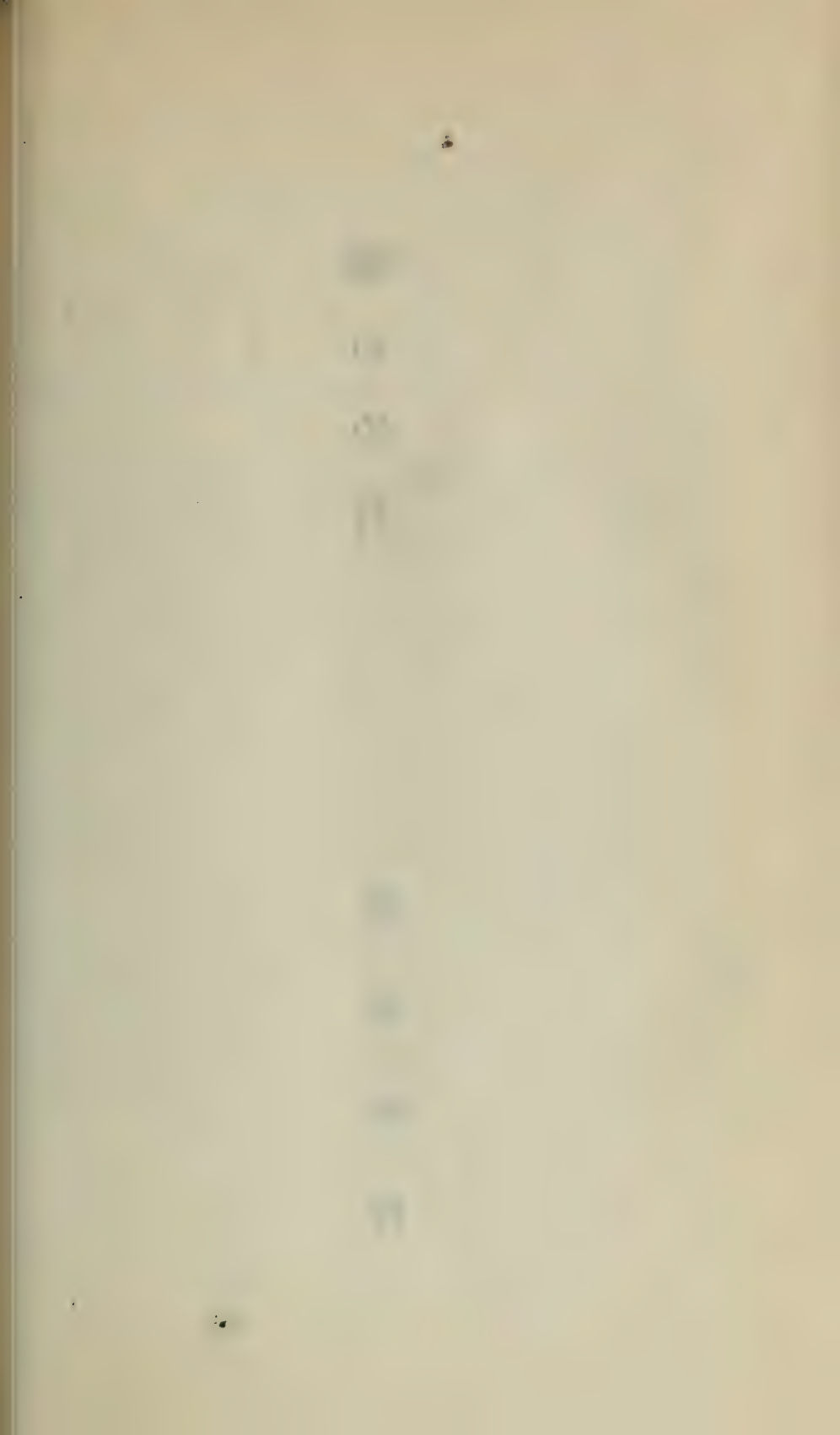
はふり子がとるや眞弓のふして祈り起ちてうたふも君が世の爲

嘉永三年庚戌春發行

桂園一枝拾遺 終

浦の汐貝

熊谷直好

○東塢の大人　直好の師景樹をいふ。

浦のしほ貝序

我が師つねにいへらく、歌は師にうけ習ひもて達る道にしもあらず、折にふれ物につけて、心の動くまに〳〵いひ出されたるはかな言なれば、殊更にかいとめなどもせぬこそよけれ、とく忘れむもまた惡しからずと。されば偶かたり聞え給へるをも、我ら拙き耳に聞きひがめいひ違へて、大かた失はれ行きなむあたらわざかなと歎かひをり侍りしに、ある日ゆくりなくめして數多の冊子とうで給ひ、こはおのれ若かりしよりの歌を故東塢の大人しるしつけおき給ひて、かのみもとにありし反古なり、今は我がものから、なき形見とも見まほしきに、かいぬきて得させよとのたまふをいと嬉しみ、携へ歸りて寫しいづるついでに、竊かに一部かきとりおき侍りしが、猶歌數少なければあかぬ心地せられて、人々の聞きつたへ書きとめたるをもをちこち拾ひ集め、かりに浦のしほ貝と題して師の前にさし出し侍りしかば、一わたり見給ひて、よしともあしとも聞え給はで打ちおき給へるを、おなじ渚にあさりせ

む友どちにも見せまほしくて、かくははかりものし侍りぬ。

弘化二年九月

三井宗之謹識

浦のしほ貝

熊谷直好

春歌

年内立春

そめあへぬ柳の絲やなびくらむ年の内なる春のはつかぜ

立春天

はなをのみいそぐを人の心とて年のうちより春はきにけり

所々立春

大ぞらは梅うぐひすの外なれば音も香もなき春やたつらむ

今上御卽位ましましける年元日立春なりければ

春たつと峯のまつ原霞むより垣ねの水をながれそめけり

元日

大君のしろしめす世の始めとてとしもたゞしき春やたつらむ

○大作の　みつの枕詞。
○みつ　御津の沼、攝津に在り。
○ひたき鳴く　ひたきは小鳥の名

あけをまつ窗のともし火花さきてまづ我が宿の春はきにけり
足曳のやましづかなるあかつきに星の光やあらたまるらむ
わか水をくむ車井の音すなり今こそ春もめぐりきぬらし
夢だにも結ばぬ程のうたゝねにこぞは今年となりにけるかな
あらたまの年のはじめの若水は老の影見る鏡なりけり

年の始めの長歌

若水と　いひてはくめど　若水と　聞きては飲めど　汲むごとに　若えはまさず　飲む毎に　老いこそはまされ　年のわか水

二日立春なりける年魚市を思ひて

大作のみつのあびきの初いちこ春さへけさは立ちにけるかな

正月始めのほど

ひたき鳴く片山さとの小柴がき年は越ゆれど春としもなし

春到氷釋

あつ氷とくるばかりはなけれども砕け易きに春をしるかな

東風吹春氷

はる風にいはまの氷とけぬらしほそ谷川ぞ春まさりゆく

○人にひかるゝ　人に心のひきつけらるゝ。

春風にあはばとけむと神代よりちぎりむすびし冰なるらむ

春到管絃中

あらたまる絲と竹とのしらべより霞たなびき春風ぞふく

初春見鶴

よろづ代の春やたつらむ朝日影にほへる空に鶴ぞなくなる

瀧音知春

鶯の春とはかねて思ひしに瀧のおとこそまづ聞えけれ

心静酌春酒

ひとりして我がくむ酒に限りなき春のこゝろはこもりけるかな

都早春

おほ君の都のそらにたつ春のあまる光や四方にみつらむ

早春松

限りなき千世のはじめの春なれば松の色にぞあらはれにける

子日

わが心子の日の松にあらねども人にひかるゝ事のみぞ多き

兼待子日

かすみたつ春日の野べの小松原みつゝや人の子の日まつらむ

霞中子日

春がすみたなびきのこす松もなし何處の野べに我子の日せむ

餘寒

はるながらなほ山風の寒ければ花ぞかへりて雪と見えける

餘寒冰

うちとけし瀧の白浪たちかへりもとの岩間に冰る春かな

池餘寒

鶯ははるとなけども松かはの池のさゞ波こほるころかな

霞

うちとけし春の心に似ぬものは隔ててたてる霞なりけり

河口のみをのしるしにともす火の光も見えず霞む夜半かな

朝霞

ちはやぶる神の鉾松そびえてもけさはかゝれる春霞かな

夕霞

けふもまたゆふべになりて淡路島まつほのうらに霞たなびく

○松かはの池　磐城國相馬郡にある景勝の地。

山霞

花になる春の心を見はしとや山は霞にたちかくるらむ

嶺上霞

はる霞まつかゝれとや音羽山せきのこなたに峯はなしけむ

海上霞

霜しろきあしの枯葉はそれながらけさは霞める波の上かな

わたの原そこともしらず霞むなりあとなき波に春やたつらむ

海邊霞

大島のせとのたか波をさまりてかすむ春べとなりにけるかな

湖上朝霞

志賀の浦のみぎはの氷うちとけて霞も波も今朝よりぞたつ

故郷霞

いそのかみふるき都ははる霞たなびく時も寂しかりけり

水郷霞

水けぶる伏見のさとの春がすみ人しれずこそ立ち渡りけれ

野外朝霞

○いそのかみ　ふるの枕詞。

〇いにしへもまだ遠からぬ　此の古戦場も回顧すればさほど遠き昔でもないのに、早くものどかな春景色となつた。

みやこ人けさはまだこぬ白川の田なかの野べに霞たなびく

をち方の野べの若草もえぬらしけさは霞ぞあさ緑なる

關霞

いにしへもまだ遠からぬ關が原世はのどかにもたつ霞かな

關路晩霞

春がすみたなびきくれぬ足柄の關の八重山たれか越ゆらむ

霞隔遠樹

まつ原の遠き千とせをしめたれば春の霞ぞはてなかりける

波の上に浮ひてみえし松原も霞のそこになりにけるかな

彼岸の中日天王寺の西門にて

み佛のみねの絲ゆふ見ゆるかな西に入日のかげのうちより

うちわたす海の限りはとほけれどたなびきあまる春がすみかな

鶯

山ざとは年のうちより聞きなれて鳴くともいはぬ鶯のこゑ

わが宿の何を花とてうぐひすの昨日もけふも聲たえずなく

都びと今やきくらむ山ざとに初音はつげし春のうぐひす

鶯のなくあさ聲にあくがれてけふも野べにと行くこゝろかな
くれ竹の伏見の里を朝ゆけばをちこちになく鶯のこゑ
朝日さすならびの岡の松の上になきかはしたる鶯のこゑ

鶯

すがのねのながき春日の暮るゝまで我が宿になく鶯のこゑ
かすみたつ永き春日もくれ竹にねぐらはしめて鶯ぞなく

曉鶯聲幽

かすむらむ程もしられて鶯のあかつきつぐる聲ほのかなり

霞中鶯

梅の花みえしところかあけわたる霞のそこの鶯の聲
鶯のこゑのにほひぞあまりける霞がくれに花やさくらむ
はるがすみたなびきこめて鶯の聲もほのかに聞えけるかな

鶯出谷

鶯のなきて出でつるあしたより谷のしたみづ岩たゝくなり

竹裏鶯

○すがのねの　長き、亂る、など の枕詞。

色みれはいつともわかぬくれ竹に春のはじめを鶯ぞなく
いろかへぬ竹をばおきて鶯のあだなる花に移る頃かな

松間鶯

おぼろ夜の月ものこりて山まつの木のまもりくる鶯のこゑ

山家鶯

人とはぬ片山ざとのおもひでに春はまづ聞くうぐひすの聲

關路鶯

くる春はあふさか山をこえけらし關のこなたに鶯ぞなく
逢坂のこせきは人のまれなれば松の下枝にうぐひすぞ鳴く

野外鶯

またわたる花の盛りや見えつらむ春の暮野のうぐひすのこゑ

水邊鶯

いはにさく波の花をも慕ひきて清たきがはに鶯ぞなく

竊中聞鶯

鶯のなくこゑきけばふる里をいでにし春にまたなりにけり

栽梅待鶯

うぐひすは今や來なかむ梅の花植うるすなはち春風ぞふく

梅の花やどにほりうゑて匂はさば鶯などか來鳴かざるべき

鶯千春友

ちとせまで君がきくべき鶯のはるの初音はふりせざりけり

鶯有歡聲

ひかりなき片山里の鶯も君がちとせの春をつぐなり

白花居士東福寺の結冬つとめ終りて國に下るとて立ちよりて物語するに

いでてきてなく鶯のこゑすなり雪のみやまに冬ごもりして

春歸軒といふ寺にて春を迎へて

何ごとも世には異なる山寺の春をばいかにうぐひすの鳴く

二月ばかり京にありて鶯をきく

都にてなくうぐひすの聲きけば我がふるさとは春なかりけり

六日子日なりける年

むつきたつ六日につむる七草はあすの七日の若菜なりけり

若菜

若菜つむけふとしなれば春日野の雪まをわけてゆく心かな

○鶯千春友　鶯は千春の友。

○ふりせざり　古くならない。

○結冬　十月十五日より冬期の安居（アンゴ）を行ふ佛事。

○むつきたつ　睦月立つ。

亂れ蘆のくち葉が下をかきわけて難波をとめは礒菜つみけり

七日人のおくりたる若菜に鴫交れり

もゝ羽がきかきかぞふれば七草も同じ澤べの得物なりけり

雪中若菜

七草の若菜つみにとけふこずば雪まの春をいかでしらまし

水邊若菜

すみよしの淺澤沼はちかけれど若菜もつまで年ぞへにける

春の野に若菜つまむと來て見れば淺澤沼はいまだ冰れり

ふりつみし雪のしら川たづねきて汀のわかな誰かつむらむ

宇治人のおくりたる芹をまた人に遣はすとて

時ならぬ山ほとゝぎす初音せり花たちばなの小島よりえつ

田邊若菜

野べ見ればまだ雲ふかしわが宿の門田の若菜けふはつみてむ

人の家をかりて移りける春

いでてつむ宿の主人はかはれども生ふる若菜は緑なりけり

人々と共に野に遊びて

○初音せり　せりに芹を掛ける。

○いでてつむ宿の主人　自分をさしていふ。

思ふどち皆老いぬれど野べにきてこゝろは春の若菜をぞつむ

早春雪

うちむれてつまむと思ひし春日野の若菜も見えず雪はふりつゝ

正月に雪いたくふりける年

花とのみつねに見ゆる白雪のはるの梢にかゝりけるかな

立つと見し春は跡なくなりにけり山にも野にも雪のふれれば

春雪

花とのみふりくる雪はきさらぎの梅の匂ひをからむとやする

あし引の山にも野にも雪ふりて春めきがたき春にもあるかな

うつせみの定めなきよの春なれば霞める山に雪もふりつゝ

日ごとに雪ふりける春

うめの花友まつ雪と見えぬらむ二月かけてふらぬ日ぞなき

人の許より蒜に歌そへて贈りたるかへし

如月もまだあさつきにふる雪の色の根白ににほひぬるかな

殘雪

つれなくも消えざりけりな若草のもゆるが上に殘るしら雪

○うめの花云々　梅の花の雪を友として呼ぶといへるなり。

○あさつき　あさに如月の淺きをかける。

山殘雪

春たてど花とも見えず足引の山しろたへにのこる白雪

さゞ波の比良の遠山ゆきながら霞がくれになりにけるかな

遠山殘雪

日かげにはとくるともなき比良の峯の雪も霞に消えにけるかな

杜殘雪

布引の瀧のこほりやいかならむ生田のもりに雪ぞ殘れる

正月二十八日琵琶の大曲つたへ給ふべきことによりて花園三位の君の田中の御殿に參らむとするにあしたの程雪いたく降り出でたれど辛うじて下賀茂のあたりまで行きて河原にさしかゝるにとく里人のふみわけたる跡ありて中々まよふかたなく御殿に到りつきて

ひとすぢに思ひきぬればふり積る雪の中にも道はありけり

其の夜は御殿にあかして二十九日空なごりなく晴れたるに比叡のふもとまで行く事ありて

まだきえぬ雪の上からふく風もみに寒からずなりにけるかな

梅

○こたね　樹種。

めづらしと誰か見ざらむ一年の花のはじめの梅のはつ花

さく梅のにほひも雪に交りけりなべてや花の盛りとおもはむ

春かぜは吹けどふかねど山里の垣ねは梅のにほひなりけり

かをとめて来る人もなし山里のかきねのうめは盛りなれども

紅梅

うめの花八千のこたねの外なればから紅に匂ひてぞさく

夕梅

木づたひし鳥はねぐらに歸れども暮るゝもしらず梅の花みる

夜梅

ぬば玉のやみのうちなる梅の花めに見ぬあやは匂ひなりけり

にほふ香のなかりましかば梅の花よるは心にかゝらざらまし

野梅

野なれどもぬしありげなる梅の花手折りやせまし見てや行くべき

行路梅

をる人はをりもかざせど玉鉾の道のゆくてにさける梅かな

鄰家梅

わが宿に霜のうかは雪をれておもはぬ花のさかりをぞ見る

梅始開

さればこそ梅のはつ花さきにけり啼くと思ひし鶯のこゑ

家梅始開

梅の花さくかけ見よと我がやどの池のこほりも今日やとくらむ

折梅花

うめの花人のためには折りしかど歸るまばかり我やかささむ

梅移水

いつくまでにほひゆくらむ梅の花かけ見し水に今はちりつゝ

梅歴年香

ふる年の雪の内よりさきそめて春まちえたる宿の梅かな

梅風

ふく風のみな梅か香になりぬれば巾々春のしるべともなし

梅薫風

駒たべて今こそゆかめふる里の梅のつかひの春風ぞふく

春風は梅のにほひになりはてて松ふく音ものどけたりけり

〔梅歴年香〕梅、歴年に香しきよな。

を歌ひて「花ぞ昔の香に匂ひける」さ。

○むすびみ解きみ　結んだり解いたり。

かた岡のおしたの原のはな風にむかし戀しき梅が香ぞする

夜風告梅

昨日まですきまの風と厭ひしに今宵嬉しき梅が香ぞする

梅花誰家

なつかしと常に見いれし宿(一)中に梅の花さへ咲きにけるかな

ある所にて

雨ちかみ霞しきたる夕暮にうめの匂ひぞいやまさりける

伏見山なる梅を見けるに

やま道は春かぜさむし梅のはな散れば誠のゆきもまじりて

柳

わが門のしだり柳のかた絲をむすびみ解きみ春かぜぞふく

賀茂川のほとりに住みける頃

鶯のつぐるもまたで川づらのしだりやなぎは春めきにけり

友なる延清が許より年の暮毎にいと長やかなる柳を贈り侍りしを正月たつあしたの初花といけおきてめではやし侍りしに一とせ百済野の片ほとりに引きこもりて世にも交らずなり果て侍る物からさすがに年の暮のい

となみにつけて思ひ出でずしもあらねばいひ遣はしける

うちはへて長き契りとおもひしに今年やたえむ青柳のいと

それより二十年あまり柳をおくることとたえず

彌生ばかり畫工一鳳と共に朝とく伏見をゆくに澤めく處あり一柳あり昔さへ横ぎりていはむ方なくおもしろかりしを歸りて僕へこいひやりける

忘れずやまた忘れずよ二人してこゝろにとめし青柳のいと

朝柳

あをやぎのめにあまりたる朝露をおのが涙と鶯のなく

門柳春久

我がかどの柳のいとを繰りかへし今年も春になりにけるかな

河柳

綱手ひく淀の川舟こと問はむそめかけたりや青柳のいと

遠郷柳

うちわたすむかひの里の青柳のめにつく春になりにけるかな

行路柳

道のべのしだり柳のあさみどり見すてて過ぐる人なかりけり

○綱手ひく　引舟の綱を引く、菅朝も歌ひて「淀の小舟の綱手かなしも」と。

○うちわたす云々　上の句は下の句のめにつくの序。

○おいその森　近江にあり昔より歌によまる。

○かきねゆく水の心　忍び〱に行くをたとへる。

○草のはつかにもえ初め　心の中に情いそこれらをたとへる。

はる風に結ばれながら睦くめいただ別れ路のあなやさしのいと

水邊柳

おりたちて水はむすべど青柳の影なる絲は手にもかゝらず

水邊古柳

我がやどの池のみぎはのふる柳あはれ春をばわすれざりけり

早蕨

やきすてし枯野の原のさわらびはふたゝびもゆる物とこそ見れ

人の許に土筆をおくるとて

霞たつ野べのけしきも見ゆるまで摘みつくしたる初草ぞこれ

若草

やがて今おいその森の若草のわかきほどこそ人もつむなれ

ものへ行く道にて

かきねゆく水の心になりにけり草のはつかにもえ初めしより

春草短

若くさのもゆるを見ればば山里の垣根ぞ春のはじめなりける

野春草

つむべくも緑になりぬ春日野の野もりもしらぬ雪の下くさ

野を廣みちくさ百草おふれどもたゞ七草を人はつみけり

春日望山

あさゆふにうちは向へど稲荷山みつともいはず霞たなびく

福島に居ける頃宇治なる定安が許に文遣はすに

わが宿にいざ櫻ばし梅田橋かけても來ませ野田のふぢなみ

春天象

大空に絲さへ遊ぶ春の日をとぢ籠りては誰かすごさむ

春人事

さくら花ちれるを見てや足引の山田の賤は種おろすらむ

春里

梅の花にほはぬ里のうぐひすはおのれ鳴きてや春をしるらむ

くれ竹のふし見のさとは鶯のなくにつけてや人もとふらむ

春野

はるかにもあがる雲雀の聲聞きて野べの景色を空に知るかな

春風

○春日野の野もり　古今集に「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ」と。

○大空に絲さへ遊ぶ　陽炎もえたつをいふ。

○人だのめなる　人に頼もしく思はせてさもあらぬこと、人をたらす様な。

春雨の雲はれがたになりぬらし松の音高く風たちにけり

尋　花

よし野山人だのめなる白雲にたなびかれてもゆくこゝろかな

曉尋花

いつしかと思ひし花の陰にきて明くるをさへに待ちわたるかな

獨待花

ひとりのみ心ちらさでまつ花はさかむ盛りもひさしからなむ

望山待花

霞たつ春の遠山はるかにも待ちこそわたれ花のさかりを

山花未開

いととくもちり果てけりと思ひしはまだ咲きあへぬ山べなりけり

初　花

霞たちかへる鴈がねなくなべに初花さけりみよしののやま

彌生なかばの頃嵐山にまかり侍るにいつより長閑にて花の盛りもはへまさりて覺ゆるに加へて大内立坊の御沙汰あらせらるゝ事さへ畏らも思ひはかり奉りやられ侍りて

九重のくもの上にてさく花も今日よりとこそ開きわたりけれ

見花

よの人に見のこされじと山櫻おくれさきだち花のさくらむ

静見花

昔人のかへるをまちて櫻花月のかげにといでてきにけり

遙見山花

老いぬれば目さへかすみて山櫻いとゞ色こそわかれざりけれ

船中見花

音にきく若木の櫻見てゆかむいそ近く漕げ須磨のうらふね

庭なる櫻ちりける頃

老いぬれば心に花にならねども身をうぐひすとなかぬ日はなし

いたづらに盛りすぎたる身をもちて今年も花にちりや残らむ

花盛開

そことなくふきくる風も匂ふまで花の盛りになりにけるかな

み吉野の花のさかりを見渡せば青根が峯も名のみなりけり

花有遅速

(一)昔人のかへる云々　櫻花を月の影に見んとの意。

(一)若木の櫻　須磨寺本堂前の櫻、源氏物語須磨の卷に見えてゐる。

(一)身をうぐひす　身を憂きかけてゐる。

(一)うつゝにて見るもの歌　現にてもはかなき櫻が更にはかない夢の中にも咲いた。

消えて又つもれる雪はよしの山おくれ先だつ櫻なりけり

わが宿の二木のさくら遲くとく咲きちるからに春ぞ久しき

花の盛りを夢に見て後に

うつゝにて見るもあだなる櫻花夢のうちにも咲きにけるかな

庭花久芳

風だにも音せぬやどと思ひしに花のさかりは久しかりけり

花の頃井上某と長柄なる鶴満寺に遊ぶ

春の日のながらの里に遊べどもあかぬは今日の心なりけり

花下送日

あくがれて遊ぶ所はかはれどもけふも暮しつ花陰にして

花慰老

つとめても花になさむと思ふまで春の心のおいにけるかな

日枝の山なる音羽の瀧の花を見て

さく花に鶯なけどおく山の春はこの世のものとしもなき

さく花も瀧もましろにあらはれてくれゆく山の奥ぞ寂しき

東山なる東漸寺にて

春たにも猶ひと訪はぬ山ざとは花の雪にもあとなかりけり

花の頃嵐山にまかりて

花になる心の色はうすけれどさが野の春はよそにこそ見ね

花盡行自遲

おもほえず日は傾きぬさくら花いそぐ道には咲かずともよし

月入花灘暗

ゆふぐれの花の梢は波に似てこぎかくれゆく三日月の舟

折花

たまほこの道ゆき人のたをりくる花や見にゆく梢なるらむ

ならばやと思ひよりつる櫻ばな下枝はなほも高くぞありける

夕花

夕日かげ入りはててこそ足引のとほき櫻に見えわたりけれ

岡花

垣ねより見こしの岡の櫻ばな隔てぬ宿にまづにほひけり

みやこ人大内山の花にゑひてならびの岡にうたふこゑする

岸花

○花になる心の色は云々　春の若やぐ心は衰へたれど花を見れば又心ときめくをいふ。

○月入花灘暗　月入りて花の灘暗しと讀む、花の灘は花の流るゝ瀬をいふ。

○岸花の歌　櫻花を白波とまがへてうたふ。

おともせで岩こす浪はやま川のきしねにさける櫻なりけり

人もなき所に花のおくれたるを見て

ちりのこる花はあれども見る人の春の心ぞ移ろひにける

絲櫻のふりたる

老木ともなりにけるかな絲櫻くる人いかにあらたまりけむ

又ある所にて

人しれぬ岩ねのいけに影見えて山下ざくら今さかりなり

おもふことなくて花みる春もがないける此の世の思出にせむ

森櫻

我がかどの森の木の葉のしげければ木末の花はちりてこそ見れ

森の宮といふ所に櫻多くうゑられける年

ことしより櫻をもりの宮なれば神の心よ花にゆゐすな

櫻

櫻花さてもや人にあかれぬと心みがてら散らずもあらなむ

水邊花

ながれてはゆくへ定めぬ山水のこゝろも知らでちる櫻かな

○絲櫻くる人　くるに絲を繰ると花見に來ることをかける。

○櫻をもりの宮　櫻を守りする森の宮とかける。

○櫻花さてもやの歌　試みに、人にあきられるまで咲いてゐて見よかしの意。

瀧邊花

岩まよりおちくる瀧は早けれどのどかにもちる山ざくらかな

松間花

しら鷺のむれゐる松と思ひしは花をうけたる木末なりけり

雨中花

花の雲おほふとばかり思ひしにやがてぞ雨も降り出でにける

山中花

やま里は花の心も安からむ散るも散らぬもいふ人ぞなき

山中夕花

みし人はくれぬ先にといに果てて小鳥さへづる山さくらかな

野宿花

くさまくら花の陰にて結べとや宿かすが野のうぐひすの聲

花交松

住吉の松の木のまにさく花は昔にかへる浪かとぞ見る

ちりやすきうす花櫻いかなれば松のときはに枝かはすらむ

霞中花

○住吉の松の木云々　住吉の昔は濱にて波打ちよせたれはかへる浪といふ。

とゝのはぬ梢をば見えぬ習ひとやかすみ隠れて花のさくらむ

風前花

たわむまで風はふけども山櫻ちらぬぞ花のさかりなりける

遲櫻

さきそめし程に似たれど山櫻おくれし花は色なかりけり

長崎なる諏訪社奉納　社頭櫻花

から人も神のみまへの花を見てわが日の本の春やしるらむ

落花

ふく風もいたらぬ谷のさくら花おのが盛りをつくしてぞちる

櫻ばな雨にまじりてちる時はみぞれふりしく心地こそすれ

ふる雪もちりくる花も亂れつゝたがひにまがふ庭の面かな

夕落花

櫻花ちりのまがひに暮れにけり今宵はいかに夢もまどはむ

落花滿庭

花はみな垣ねばかりに吹きためてよそに散らすな春の山風

てる月のかげのにほひと思ひしは夜のま散り敷く櫻なりけり

○櫻花ちりのまがひ　落花のうすぐもりが夕暮にまがふといふ意。

落花隨風

やま櫻かぜのまに〳〵ちる時は又ひと盛りめづらしきかな

落花如雪

さくら花日がさの上にちりかゝる音さへ雪にまがひけるかな

京の花見にのぼらむとする頃人のえさせたる櫻の枝のたけに餘れるを瓶にさし置きたるがいたづらにちりはてむもをしまれて又人にゆづりなどすとて

我が宿に花のなきこそ嬉しけれ折りたる枝もほだしならずや

腰蓑といふ椿は筑前の太守の難波の館にありて類なき花なりある人のおくりたるを瓶にさし入れて置きたりしを又ある人見て大根にさしこみ土に埋みおけばよく生ひつくものなりと敎ふるにさこそせめといふ我が齢いかにぞたとひ根をはり生ひ立つとも二年三年の程に咲くべきかは今日えたらましかば一日見はやしてたりぬべしふくめる一枝は明日こそと思ふだにいとはかなからずやはさはさて植ゑば植ゑねとて

かけりても我たま椿かへり見むぬしなき宿にさくと思ふな

ある人牡丹をうゑよとてえさせたるに

○ふくめる一枝は明日こそ云々　蕾の一枝は明日咲かんと思ふさへはかなき世ではないか。

○かけりても云々　玉椿見むと我が魂は天翔りても來よう。

今さらに身には願ひはなけれども植ゑてや待たむ花の上の富

春雨

つれ〴〵とふる春雨のうたゝねにくるを明くると思ひけるかな

朧なるかげも見ましを打ちはへて月のさかりに春さめぞふる

はる雨はあすもふりなむ今日のごと思ふともどち物語せむ

春雨のあとは嵐になりにけりぬれて匂ひし花やちるらむ

曉春雨

はるさめの雲間はれゆく有明にしだり柳のつゆぞこぼるゝ

夕春雨

何をして今日は暮さむ菅の根の長きがうへに春雨ぞふる

閑居春雨

あしびきの山のいほりの春雨にふりはへてくる人ぞ嬉しき

閑中春雨

池水に見えてのみふる春雨は音きくよりも寂しかりけり

山家春雨

はる雨のふるき友どち語らへど暮れむともせぬ今日の日長さ

○ふりはへて　わざ〳〵訪ふ。春雨の降るにかけていふ。

春さめのふる山里のゆふぐれは思ふ友こそ戀しかりけれ

かねてわが思ひしよりも寂しきは入りぬる山の春雨のころ

田家春

はる霞たちかへらずばいその上布留の山田はあれや果てまし

春がすみ山田河原にたちそめて氷を水にまづかへしけり

種ひたす田中の井戸に影見えて水のそこにもなく雲雀かな

故郷春

うづらのみふすと思ひし故郷も春はひばりの牀とこそなれ

野徑雉

長き日を暮して歸る住吉の遠さと小野にきゞすなくなり

岡雉子

しなてるや片岡山になくきゞすかた戀ならしなれも妻なし

春駒

あしたかの山邊にたてる春駒は千里のほかも思ふなるべし

人ならばあげやまくらむいな髮の日をさすまでになりし若駒

夕雲雀

○春さめのふる山里　春雨の降ると故山里とをかけた。

○しなてるや　片の枕詞。

野はくれて芝生も見えず成りにけりいつまで揚る雲雀なるらむ

野雲雀

空になるうかれ心にはてもなき野邊の雲雀は落つる時あり

野徑雲雀

雲雀あがる夕日の空を見るほどに野邊ゆく道は暮れ果てにけり

田蛙

鷺の木づたひ散らす花をうけて小田の蛙のおのがとぞなく

江上春曙

かすみしく堀江の浪はくらけれど碇とるなりあけのそほ舟

名所春曙

もゝの花見えこそ渡れ夢人のふしみの里の春のあけぼの

あけぬとて霞の袖やおほふらむねくたれ髮のかづらきの山

あさひ山高ねほのかに明けそめて霞にしづむ宇治の川なみ

朧月

光なきおぼろ月夜をあはれとてねもせぬ袖にうめが香ぞする

さく花の色さやかにも見るべきに春しも月の朧なるらむ

○あけのそほ舟　そほといふ赤色の土をぬりたる舟、あけに曙て朱さをかける。

ひさかたの月の光を秋にしておぼろ夜櫻見るよしもがな

むら雲のたえま〱になる時もなほおぼろなる春の夜の月

春月幽

いづる峯入る山の端はたがはねど覺束なしやおぼろ夜の月

夜舟伏見にはてて京にゆく西の方を望みて

大原やをしほの山は雪ながら霞みてのこるありあけの月

春月曉靜

よもすがら霞み〱て山のはの明くるもしらぬ月のかけかな

○春月曉靜　朧月遲々として明くるも知らざりしを詠ず。

二月の頃いたく曇れる夜

さもこそは朧づく夜のそらならめ心あてなる雲間だになし

遠山春月

はる霞たなびきくれし山のはにある三日月の影のかなしさ

江春月

蘆の葉は霜がれながら春の夜の月ぞ霞める難波江のうら

河上春月

冰だにいまだひらけぬ櫻川つきの影こそまづ匂ひけれ

〇かげもなき朧月夜云々　見る人の河を渡るなり。

かげもなき朧月夜にわたれどもそこさへ見ゆる白河のみづ

故郷春月

ふる里はしのぶ昔もはるけきに月のかげさへおぼろなるかな

ふるさとの朧月夜をきて見れば昔のかげの霞むなりけり

旅宿春月

月のかげくさの枕にかすむ夜はみゆるゆめさへ朧なりけり

歸雁

あしびきの山田もいまだかへさぬに思ひ立ちぬる春の雁かな

かりがねの歸るを送り蘆たづはおなじ雲居に今ぞなくなる

ことづてむ雁の使はかへれども常世の國にしる人はなし

春ながら霞まぬ月は秋に似てくるかとまがふ歸るかりがね

歸雁遙

あさなく〳〵近き蘆べに見し雁の雲居はるかに聲ぞきこゆる

歸雁連

かりがねはおなじ蘆べにあさりして空ゆく程も離れざりけり

夜歸雁

○とても霞める　いかにしても霞める雲路と思つてか。

おもしろき朧月夜のかげを見て峯にと鴈の思ひたつらむ

春くればとても霞める雲路とや夜ともいはず鴈のゆくらむ

呼子鳥

いつよりか霞みがくれて呼子鳥人にしられぬ春をへぬらむ

燕

人だにも忘れはてたる我が宿にかへるつばめのあはれなるかな

燕來

つばくらめ今朝より軒に聲すなりこぞの古巣やかけ直すらむ

簾外燕

つばくらめ去年の巣立も歸り來て軒の簾のひまもとむなり

苗代

賤の男がきのふせき入れし小山田の苗代水に散るさくらかな

雨後苗代

春雨のふりて晴れぬる苗代に蛙の聲もうるほひにけり

桃

思ふこと色にいでても咲きにけりものこそいはね姫もゝの花

○もゝの花匂へる色の云々　夕日のひかり桃の花に映えたる景。

○三千年にあまれる桃　西王母の桃を思へるもの。

○桃の花みなかみ遠き云々　武陵桃源の趣ありといへるなり。

○曲水宴　もと支那の風俗、三月上巳の日詩人など杯を流れに泛べて飲み且詩をつくりて遊ぶ。

○千代ともささじ　君が齢を祝ふ詞としては千代では足らざるをいふ。

夕桃

永き日のほどもしられて桃の花けさ見しよりは咲き増りけり

もゝの花にほへる色のなかりせばけふの夕日を何に留めむ

桃谷のあたりの桃を見て

み渡せばめも及ばぬは三千年にあまれる桃のさかりなりけり

桃花流水依然在

桃の花みなかみ遠きもろこしの昔のかげもにほふ今日かな

曲水宴

から人の浮べそめたる杯のながれを汲みて遊ぶ今日かな

かぎりなき流れにまかす杯の千代ともささじ君がよはひは

江亭春望

住の江のうらの磯家に歸りきぬかすみて見えし海人の釣舟

菫菜

はるがすみ棚びきつれて摘むものは春日の野べの菫なりけり

野菫菜

ふる里はあさぢが原となりはてて生ふる菫をつむ人もなし

のべみればうす紫にさく花を誰かすみれと名づけそめけむ

摘菫菜

賤の男がかへし殘せる白鳥の鳥羽田の菫今さかりなり

思ふどち菫つみにはまたも來むしばしかへすな春のを山田

少女子がつみそろへたる菫草さらにもさける花かとぞ見る

晴天絲遊

たが心まづうちとけて大空にあそぶ絲とはあくがれにけむ

杜若

さきにけり池の岩ねの杜若こきむらさきの波と見るまで

三月つごもりの日杜若見にゆきて

池見ればいまだ盛りのかきつばた越えてや春のいなむとすらむ

かけ見れば底にもさきて杜若はなの數こそかぎり知られね

蹴鞠

秋ならぬきり島山の岩つゝじもみぢ葉よりも照りまさりけり

春山嵐

花の上におほふばかりの袖もがな春のやまべに嵐もぞふく

〇晴天絲遊　景樹の歌に趣が似てゐる。桂園一枝拾遺(一二六頁)參照。

○扉藤　扉にはひかゝれる藤。

○垂姫の浦　越中にあり、萬葉十八に家持の歌へるものが多い。

○日數も末の松　日數の末と松の梢の末とをかける。

○賜紫　紫衣は法衣の最上で、幕府時代は勅賜にて幕府より下した。

藤

ふぢ波は春さきいでて時鳥まつにもかゝる花にぞありける

ときはなる松にかゝれるかひもなく移りにけりな藤浪の花

扉藤

おのづから藤の編戸となりしより開くを花にまかせてぞ見る

水邊藤

藤の花さきぬるときは水底にうつる松さへめづらしきかな

浦邊藤

かすみたつ長き春日にうちなびき藤の花さく垂姫(たるひめ)の浦

松間藤

くれてゆく日數も末の松のはにこえてぞかゝる藤なみの花

嵐山を思ひて

嵐やま若葉がくれにさく藤のかげ水底にいまか見ゆらむ

野田なる春日の社の藤見に行く石碑ありて野田の玉川のあととす

たま川の野田の絲藤ちりにけり貫きとむる春しなければ

ある僧賜紫の願ひによりて彌生の頃京に上りけるに遣はしける

ふぢ浪の花いろ衣かけたればまつもかひある君がたびかな

藤花隨風

ふくたびに靡き／＼てふぢの花つひには風のものとなりぬる

橋下藤花

山がはの橋の上より見くだせば岩根のふぢは今さかりなり

蒲江にゆく道にて

むれてゆく野川のそこのかへる子を雲の影かと思ひけるかな

款冬

ものいはぬ色のかひこそなかりけれ垣間見えける山吹の花

これをだに春のかたみと足曳の山吹の花折れぞおりつゝ

君またで八重も一重もちりにけり見せましものを山吹の花

款冬盛

なく蛙こゑのしげくも聞ゆなり八重山吹の影や見ゆらむ

河款冬

かはづなく細谷川も見えぬまで咲きなびきたる山ぶきの花

岸款冬

〇花をり〳〵　花を折る意と、折節とをかける。

〇あか井　佛に供ふる水を汲む井

吉野川岸ねの水はふかけれど底まで見ゆる山ぶきのはな

里款冬

ふるさとの垣の山吹さくころは花をり〳〵に人もとひけり

雨中款冬

ものおもふ妹が姿に似たるかな雨にふしたる山吹の花

夢の中につゞけたる歌

世のなかの塵にけがれぬ山寺のあか井のもとの山吹のはな

暮春

くれてゆく方もしられぬ春なれば亂れてのみぞ花は散りける

暮春鳥

ちる花も春もとまらぬ世の中をかねてしりてや鴈はいにけむ

春盡鳥聲中

今さらに春をときはと願ふらむ松に歸りてうぐひすの鳴く

夏歌

更衣

物事になるればをしき心かなつゞりの袖もかへうかりけり

ぬぎかへば移ろひ易き心ぞと花のたもとや我をうらみむ

今はたゞ花の衣をぬぎかへて別れし春のなごり忘れむ

朝更衣

あさ風のさむしといひて花染のはるの衣はしたにこそ著め

羇中更衣

月も日も旅のそらには忘られて衣がへさへときなかりけり

首夏朝

卯の花のさくつきたちのあしたには賤が垣ねもなつかしきかな

首夏雲

いぶき山つねもかゝれる白雲の重なる夏になりにけるかな

首夏藤

藤の花かなたこなたにかけじとや春におくれて咲き始めけむ

岡新樹

初音とくなくと思ひし時鳥をかの木末も繁りあひにけり

新樹風

○つきたち　ついたち、月の朔。

○藤の花かなたこなた云々　春と夏と兩方にかゝらぬ様夏に咲く。

○はづかしの森の下風　恥かしさうに通ふ森の下風は誰を忍ぶのか山城國羽束師森をかけた。

○をぎそ山　信濃國西筑摩郡木祖村字小木曾。

なつ山の若葉が上に風ふきてうらなつかしき頃にもあるかな

音もせで若葉ぞ靡くはづかしのもりの下風たれしのぶらむ

綠樹連村晴

夏はみなをぐらの里となりにけり梅津桂も若葉のみして

卯月の頃雨すこしふる日

風ふけば楓のわか葉ひるがへり心に物の思はるゝころ

尋餘花

たづねこむ人をだにまて遲櫻とても春にはおくれたりけり

殘花在何

なつ山のしげみが下に葉隱れてありとも見えぬ遲櫻かな

谷餘花

鶯のかへるふる巢のしをりとや谷のさくらは咲き殘るらむ

松陰餘花

松かげに花ものこりてをぎそ山夏さへさむきうぐひすの聲

殘鶯

なつやまの松のこずゑの鶯はたかきにすぎてきく人もなし

卯花

おく山のしげみがもとの卯の花は垣ねにさける色にまされり

色わけてさやけかりけり山里のたはしろ垣にさけるうの花

沖つ鳥うといふ花のいかなれば鷺の色にもあやまたるらむ

降る雪の色にまがへる卯の花はちるをも消ゆといふべかりけり

路卯花

うの花のかきねもしらぬ都人さつきをやみの物といふらむ

卯花隱路

戀しとておとおふ人もなつ山になにうの花の道うづむらむ

薄暮卯花

しろたへの色の限りを見よとてや卯の花がきはくれわたるらむ

合歡木を見て

なつの日の長き盛りのねぶの花ゆめかとばかりにほふ色かな

葵

葵草かざしそめけむそのかみはそのかみ山の神ぞしるらむ

吾妹子にしのびあふひの花なれば葉隱れてこそ咲き初めにけれ

○たはしろ垣　鳥おどしの筒を設ける爲苗代田に結ひめぐらした粗い垣。
○沖つ鳥うといふ花　うに鵜と卯とをかけていふ、鵜は色が黑い。

夏草

あふぐまでなれる夏野のなつ草は雲まに見えし緑ならむや

ふむをだに厭ひしものを野邊の草いりたちがたく成りにけるかな

夏草露

野邊みればさばかり茂き夏草にあしたの露はおき餘りけり

森夏草

山城のときはの森のした草も更にしけりて夏は來にけり

徑夏草

なつ草は繁らば茂れよの中にもとより跡はとめじとぞ思ふ

○なつ草は云々 此の世に濁りなき心中を詠じたもの。

水邊夏草

せりつみし淺澤水は夏草のしげみが下になりにけるかな

行路夏草

此のごろはおのれと結ぶなつ草にあとこそなけれ岩代のをか

なつ草のふかき所にきて見ればはや蟲のねも茂り合ひにけり

○蟲の音も茂り 蟲の音のしげくなつたことゝ、夏草の茂りまされるにもかけた。

行路夏衣

たかしまのかち野の原の朝露にぬれてすゞしきなつ衣かな

○めゆひ　目結、しぼり染をいふ。

○ぬなは賣る　蓴菜を賣るのである。

○たち花の小島が崎　山城國宇治橋の南、古今集「今もかも咲き匂ふらむ橘の小島が崎の山吹の花」

○衣手の森　山城の國、續拾遺「…夕日も薄き衣手の森」

○いはほさへ打ては云々　其處に悲憤の思あるを感ぜしめる。白峯の陵は崇徳上皇の御陵。

めゆひうるなるみの里に成りにけりたちきてゆかむ夏の衣に

　屋上に涼臺を構へて人々あつまりけるに臺頭有酒といふことを

よもすがら露にうてなの初まとゐのむ杯にほしのかげ見ゆ

　郭公

時鳥まてど來なかず松が枝にかゝれる藤は葉になりにけり

ほとゝぎす初音はいまだきかねどもぬなは賣るなり藤浪の里

ふぢの花さけるを見れば郭公まつにこゝろもかゝる頃かな

ほとゝぎすなきし處やたち花の小島が崎の名殘なるらむ

我が宿の花たちばなやにほふらむ過ぎがてにのみなく霍公鳥

衣手の森の若葉にあめふればやま時鳥をりかへしなく

あしびきの山時鳥ながこゑはふる聲ながら珍らしきかな

　人の許に遣はす文をあづかり傳ふる人の許にたび重なりぬればいひやりける

春あきはかりのたよりも頼みてむわがふみつてよやま時鳥

　讃岐國にゆく人に

いはほさへ打てば聲ある白峯の山ほとゝぎす思ひこそやれ

○まちかね山　攝津國。

待時鳥

時鳥この木ずゑにとおもふよりかけ立ち去らで待ち渡るかな

かくばかりまつになかずば杉にだになけや五月のやま時鳥

伊丹のあたりものせしのち壽性知晴といふ尼たちよりあはざりつる事と悔いて歌あまたかい入れて文おこせたるかへり言に

時鳥まちかね山のまちかねて歸りしのちに聲ぞきこゆる

未聞時鳥

郭公おほかる山と聞きしかどわが越ゆる日は鳴かずぞありける

初郭公

わがためはけふを初音ぞ時鳥なきふるしけむ程はしらねど

卯月の頃宇治人の文のかへり言の奥に

茶つみうた歌ひさしてや宇治山のやまほとゝぎすはつね聞くらむ

尋時鳥

郭公なくとは人のつげずとも八重山こえば聞かざらめやは

首夏郭公

いつまでか花のなごりにあくがれむ山時鳥初音きかずば

森郭公

しらなみの浮寐のゆめの時鳥けさは生田のもりになくらむ

里郭公

故郷はにはの木末の高ければ山ほとゝぎす宿りてぞ鳴く

山家郭公

ほとゝぎすなく山里に來て見れば若葉の外の色なかりけり

人傳郭公

はるかなる生駒のやまの時鳥人つてならで聞くよしもなし

遠時鳥

はるかにも山時鳥きこゆなりたが爲もらす初音なるらむ

夢中郭公

こよひはと思ひし夜半の時鳥ゆめの中にも聞きぞもらさぬ

郭公驚夢

時鳥このあかつきのひと聲に殘れる夢はあらじとぞ思ふ

郭公稀

時鳥あまたはなかぬ里なれど今年はことに稀にぞありける

○殘れる夢はあらじ　郭公の一聲に夢のすべてを忘れたの意。

○ふりいでにけり　聲をふりたてて鳴き出した。

やまとほき里にしあれば郭公きく年さへぞすくなかりける

水無月の末郭公をききて

まち〳〵て聞きつるよりも郭公おくれしこゑの珍らしきかな

雨中郭公

よもすがら槇のいたやに雨ふればなく郭公こゑも聞えず

雨後郭公

このほどの雨にかはりて時鳥はるゝ空よりふりいでにけり

郭公頻

なきにけり又なきにけり時鳥こよひいく聲なきあかすらむ

なつ山の青葉が中に時鳥なくねもしげくなりにけるかな

住吉にて子規のなきけるが年へて後又詣でけるにその木の枝猶ありければ

ほとゝぎす昔のこゑは聞えねどありし木末はかはらざりけり

蟬の姿を見て

秋たたばいかにせむとか蟬の羽の衣はうすく造りそめけむ

雨後蟬

むらさめの晴るゝやがてに醉すなり乾きやすきは蟬の羽衣

衣ほす蟬ぞなきたつ五月雨もはれむとすらし天のかぐやま

瀧邊蟬

たきの絲くり返してもなく蟬はおのが衣を織るとなるべし

晚夏蟬

なつもはや木のまつ山なく蟬のこゑも亂れて聞えけるかな

朝とく蟬をききて

杉の葉に朝ぎりたちて日ぐらしの聲いさぎよき朝ぼらけかな

から衣ぬぎていでたるうつ蟬のよは心から涼しかりけり

菖蒲

年ごとに人はひけどもあやめ草たゆる事なし長き根なれば

五月雨のくもの絶間の月かげに軒のあやめの露も見えけり

曳菖蒲

なには江のまこも交りの菖蒲草かを尋ねてや人のひくらむ

あやめ草ひけば限りもなきものをたれか淺香の沼といふらむ

刈菖蒲

家ごとに菖蒲をかりの世なりとてやま時鳥あともとゞめず

夏月

さらでだに明くる程なき夏の夜をふけてもいづる月の影かな

短夜月

夏の夜のあくるもまたで入る月はいかに短き心なるらむ

浦夏月

櫻麻のをふのうらなし葉を茂みもるかげうとき夏の夜の月

江夏月

さみだれの雲間をもりてつぶら江の菖蒲が淵にやどる月かげ

たが爲になれる今宵の涼しさぞ月はいり江の松のしたかぜ

湖夏月

露ふかき朝妻舟にかげとめて明けこそわたれ夏の夜のつき

夏月透竹

かはぞひの篠のしの竹しのびにもいでくる月の影の涼しさ

ある夜

我が宿の椎の葉しのぎもる月に光あらそひとぶ螢かな

○櫻麻の　をふの枕詞。サクラヲの、サクラアサの、二樣の讀み方がある。
○をふ　麻生、麻の生えたる地。萬葉集十一「櫻麻の苧生の下草露しあれば明かしていませ母は知るとも」
○うらなし　浦梨、志摩國苧生浦の名産たりし梨。
○朝妻舟　近江國坂田郡朝妻といふ所の宿船。

早苗

けさ植ゑし山田の水やすみぬらむ蛙の聲ぞきこえそめたる

さ苗とる山田はそこと見えねどもをごしに歌ふ聲ぞ聞ゆる

五月の末鳩野某が野田の庵に人々と共に田植見にゆく夕さり雨ふりいでて遠近のけしきいふばかりなし杯あまたたびめぐりて醉のすさみにいひ出でたる歌

打ちわたす　小田のさ苗を　みさかなに　今日よりとりて　かきくらし　ふる五月雨を　大みきに　すゝめたまへば　天地の　外にも遊ぶ　心地して　山時鳥　かへらぬに　しかじとのみぞ　鳴き渡りける

朝早苗

おきあまるさ苗の露に裾ぬれて朝かけすゞし小田の細みち

早苗多

五月雨の晴間にいでて見渡せば野田の山田もうゑ果てにけり

丹波幸敎が許に一本植ゑたりける竹に水そゝぎていと涼しげなるに新竹といふ事を人々いへるついでに

千代の露まづ一夜こそ結びけれきのふ植ゑたる宿のくれ竹

(一)をごしに歌ふ　山の峯を越して向ふに歌ふ。

(二)山時鳥かへらぬにしかじ　時鳥は不如歸と鳴くのであるが此處の興あれにかへらぬにしかじと鳴くよと戯れたのである。

(一)竹のよすがら　よすがらは終宵。竹の節(よ)にもかけてゐる。
(一)竹亭陰合偏宜夏　竹亭陰に合ふ偏に夏に宜しと讀む。
(一)葉分　ハワケ。風月などの葉の間を分けること。

若竹

若竹のすなほならぬはなかりけりいつより節の狂ひ初めけむ

夏のあしたに

わか竹の葉末の露を見ざりせばあしたの牀は起きうからまし

新竹隨風

わか竹はおのが姿もなかりけり風になびかぬ時しなければ

竹風夜涼

今年生ひの竹のよすがら風ふけばさら〳〵夏の心地こそせね

竹亭陰合偏宜夏

よもすがら葉分涼しき月影にふしよく見ゆる竹の下いほ

鵜川

さよふけてほのかに見ゆる篝火は遠きあしまの鵜舟なりけり

瀬鵜河

鵜飼舟はや瀬を下るほどならし篝のかげもとまらざりけり

夜鵜河

かゞり火の影にて見ればぬば玉の夜河の鮎もたけにけるかな

名所鵜河

鵜飼舟かゞりさすらし夕づく夜小ぐらの山に影のうつれる

鵜舟廻島

浪の上は月の光になりぬらし島隠れてもさす鵜舟かな

照射

ますらをがともす火影に夏山の若葉の露は數も見えけり

狩人はつみもむくいもなつ山の木の下闇にともしのみして

嶺照射

さつ人のわざはをぐらの峯とたゞ鹿のたちどを思ひこそやれ

餘りにも後の世しらぬ業ぞかしあみだが峯に照射(ともし)すべしや

連峯照射

ますらをが八峯の照射繁けれどもれてや鹿の妻にあふらむ

蘆葭水暗

繁りあふ蘆間の水の暗き江にひるも水鶏のこゑぞ聞ゆる

夜水鶏

我がやどの垣ねの水はあさけれどよるは水鶏の聲ぞきこゆる

（照射　トモシ、昔獵人夏の頃火串に松を燃やして鹿を寄せ之を射たりしこと。

〔旅人の夢のうき橋〕夢の浮橋は夢の中の通ひ路、歌は旅にありて見し夢の水鶏の鳴く音に妨げられしを言ふ。

曉水鶏

なつの夜の明くるもまたで叩くかなこゝろ短き水鶏なりけり

わが門はたゝく水鶏に叩かせて夜は明けぬとも明けじとぞ思ふ

月前水鶏

をしほ山月かたぶけば大くらの入江のみづに水鶏なくなり

あしびきの山下水に人しれぬ月はやどりて水鶏なくなり

水鶏驚夢

旅人の夢のうき橋なか絶えてかづらき山にくひな鳴くなり

五月雨

あづまやのかやが軒端の五月雨は玉水ならで音づれもなし

さみだれに茅はら蘆はら水こえてわたし場遠し神崎のさと

五月の雨いたくふりて

浪かゝる汀の蘆と見ゆるかな底になりぬる岸のむらたけ

家ながら崩れ出でたる山瀬にぞうきたるものと世をさとるらむ

人々の身の上につけていと煩はしき事のみ起りていかに成り行くらむしらざりし頃雨ふりけるに

よの中の人の心のさみだれに何のあやめもわかぬころかな

浦五月雨

五月雨はしはつの蜑のあま籠り千尋たく繩うたぬ日ぞなき

湖五月雨

五月雨に矢橋のわたり絶えはてて旅びとおほし粟津野の原

五月の頃備前岡山なる圓務院より河水のあふれ出でたるを見て

ゆく水のそこの心はかはらねど濁ればくもる朝日川かな

同じ時波多野某よき水なりとて荷ひおこせたるに

心ざしふかき底よりくみけらしおくりし清水にごる色なし

五月雨晴

山田みな植ゑはてぬれば五月雨の空も緑になりにけるかな

盧橘

梅の花まだ忘れぬに橘のはなの香さそふ今朝のあさ風

なつかしき香こそ匂へれたが宿のはな橘のさかりなるらむ

いくたびか宿のあるじはかはるらむ年へて見ゆる軒の橘

たち花のはなの雫にぬれしかば我に過ぎたる香ぞにほひける

（しはつの蜑）しはつは攝津國住吉の磯にあらう。古今集二十にしはつ山ぶりとあり。

〇袖の上に花たちはなを云々 古今集に「さつき待つ花たちばなの香をかげば昔のひとの袖の香ぞする」

〇涼しさを人にうり うりに賣りと瓜とをかける。

心ざし世にたち花とおもひしは身の程しらぬまどひなりけり

廬橘薫袖

心ありて昔にかへす袖の上に花たち花の香はにほひつゝ

袖の上に花たちばなをかけたれば昔の人のこゝちこそすれ

夜橘

しるべなく闇き五月のやみにこそはな橘の香はまさりけれ

古宅橘

おのがみの老も忘れて橘のふりぬる宿と思ひけるかな

六月十七日安藝なる嚴島の祭をおもふ

はるかにも思ひ浮べしをがむかな神のみふねも今や渡ると

夏神祇

かむぞののみ輿洗ひと天つ水ふりそゝぎたる今日の涼しさ

夏人事

ますらをが鹿まつ山のふもと川おなじ心とさす鵜ぶねかな

涼しさを人にうりとは見つれども運ぶいそきの暑げなるかな

夏風

花によりあまりに人や厭ひけむまたるゝ風の吹かすもあるかな

夏山

あふぎみる空もみどりの夏山はいよ／＼高き心地こそすれ

わけ入れば花も多かる夏山を緑のみとも思ひけるかな

夏岡

みな月のてる日の岡の松風は旅ゆく人のいのちなりけり

夏蟲

日盛りになつ野をくれば幾たびかおどろく蛇の草がくれゆく

夏衣

かは風のふけばすゞしの夏衣みにかさねたる心地こそせね

螢

しるべなき闇の空にもあがるかなおのが光をたのむ螢は

さよ中にすだく螢のかげ見れば玉こきちらす心地こそすれ

露ふかき若葉がくれに飛びくれば螢のかげもみどりなりけり

聲たててなかぬ螢もかひぞなきもゆる思ひのかげし見ゆれば

江螢

○すゞしの夏衣　涼しと生絹とをかける。

三島江を玉江と人のいふ事は螢のすだく名にこそありけれ

瀧下螢

ほたるとぶ夏にしなれば奥山の瀧の白玉よるも見えけり

叢間螢

なつ草のしげみが下の螢火はもゆるものから涼しかりけり

窗邊螢

うれしくも螢のかげの見えしかなさし忘れたる窗のひまより

螢照水草

狐川ともす火かげと見えつるは水草(みくさ)がくれの螢なりけり

螢火亂飛秋已近

ほにいでむ秋も近しとすゝき原みだれてのみもとぶ螢かな

雨の夜螢を見て

ふりしきる雨夜の星と見えつるはぬれて飛びかふ螢なりけり

何となくおもしろかりける夜

月影のいたらぬくまに螢とび思ひ捨ててもねられざる夜や

朝とく物へゆくに螢の道に出てはひあるくを

○道の上をあるく云々　光もなく道をはふ螢を能なき己が身になぞらへて言へるもの。

○ませゆひて　ませ垣、まがきを結びて。

同じ日山に入りて

道の上をあるく螢の光なき吾が身にしあれば世をも照らさず

奥山のまさきのかつら花さきてあさおもしろき水のおとかな

ものへゆくに、

めぐりてもとはまほしきは小田越しにさける棟の花陰のやど

岡棟

うつくしき妹と竝びの岡にこそ思ひあふちの花は咲きけれ

なでしこ

ませゆひて育てあげたる撫子は人に見ゆべく花さきにけり

瞿麥露

人しれぬ思ひの露やかゝるらむ妹が垣ねのなでしこの花

里蚊遣火

あし火たくあしやの里の蚊遣火は煙の末もわかれざりけり

すがはらや荒れたる里は蚊遣火の煙さへこそすくなかりけれ

蓮

風わたる蓮のうき葉の露を見て定めなき世ぞおどろかれぬる

おそろしき劍の池の中にだに心のはちす生ふとこそきけ

はちす葉の淸き心のあまりよりこぼるゝ露も玉とこそなれ

極樂のはちすの上におく露は濁るもすむも玉とこそきけ

池上蓮

はちす葉の生ふるを見れば池水の底の心は濁らざりけり

ちりてうく蓮の花の一ひらをやがてみのりの舟とこそみれ

見池蓮

遠くのみ人に見よとや池水のおきに蓮の花はさくらむ

はるばると蓮の立葉ぞさわぐなる風わたるらしおほくらの池

夕顏

世の中をなるにまかせてすむ宿の軒端にかゝる夕がほのはな

ゆふ顏の花のさかりに又もこむこつまの里の垣根あらすな

たゞ一人涼みがてらの垣間見に見てこそかへれ夕顏の花

垣夕顏

なりいでむ其のみの程はしらねども垣根いぶせき夕顏の花

しろたへの卯の花垣のゆふ顏はふりつぐ雪のこゝちこそすれ

○みのりの舟 法の舟法の海を渡り一極樂の彼岸に達す。

冰室

畏きやわが大きみのめすといへば夏も冰のある世なりけり

あつき日をいかに隔てて松が崎雪も常磐の物となしけむ

雪だにもきえぬ冰室の山なれど春のかたみの花ぞとまらぬ

もる人もなくて年ふる冰室山されども夏はいれぬなりけり

扇

日の本の富士の高ねをうつしてやもろこしびとも扇をりけむ

閨中扇

てにならす閨の扇もいまはとてたゝめばあくる夏の夜はかな

遠夕立

涼しさはふらぬ里まであまりけり夕だつ山の峯の松かぜ

夕立晴

風はやみかたへ晴れたる夕立の雨のうちよりさす日影かな

夕立の雲はれわたる空見ればふる程よりも涼しかりけり

夕立はげしくふりて軒端より落つる水瀧なしたるを見て

はたゝ神たつのあぎとの白玉をくだくと見ゆる夕立のあめ

○はたゝ神　霹靂、烈しき雷鳴。

曇りてふらず

夕立は雲居のよそにすぎしかどなごりの風は涼しかりけり

納涼

われはかり結ぶと思ひし山水のそこに宿れる夕月のかけ

岫雲亭といへる亭池に臨めるいとよし

うちまぜしすのこの竹の隙を荒みはしる涼しき池の上かな

夏のゆふべ笛ふきたる家

ゆふべ／＼涼みがてらにふく笛の聲高殿にきこえけるかな

夏眺望

くるゝまで植ゑていにける小山田に螢のかけのうつりけるかな

久しく日てりて後一夜雨いたくふる

人よりも嬉しきいろにあらはれて雨まちえたる野邊の草かな

夏夕風

しなが鳥ゐなの河原のかは風に夕ぐれ寒きなつごろもかな

夏夜待風

風をのみ入れて寐にける閨の戸を待つ人ありと人や見るらむ

〇しなが鳥　ゐなの枕詞。

夏夜風

人しれず秋はそらにも通ふらしふけての後の風のすゞしさ

晩風涼

夕日かげ松の上葉にさしながら涼しくなりぬみつの濱風

松風如秋

ときはなる松の嵐のいかなれば秋のしらべにまづ通ふらむ

泉

いざや子ら涼みがてらにたづね見むふるき都のみゐの清水

松下泉

流れきて松の木陰になるときは水の心も涼しかるらむ

まつの葉の影さへ見ゆる住吉のお前の池はすゞしかりけり

松もまたたけなるとゝ紫藤のはなをもとの色とかは見む

晩夏雲

白雲のみねもくづれて秋風にたなびく空となりにけるかな

物へ行く道のほど

あしびきの山の下荻ほにいでてまだ来ぬあきを招きけるかな

住吉のきしうつ波にみそぎして松の千年を今日やのばへむ

みそぎして歸る袂にふきにけりよをこめてたつ秋のはつ風

晦日の日神なり雨ふりけるに

久かたの天の河原にみそぎして波たてつれやこゝに雨ふる

瀬夏祓

みそぎする川の瀬ごとにたつ波は年の半ばをいまぞ越ゆなる

ゆく川の早瀬に夏ははらへどもたつ秋遲き年にもあるかな

六月祓

水上に誰かなごしのはらへして麻のはずゑをきり流すらむ

たが爲に祈る千年のいのちぞと神のとはさばいかゞ答へむ

秋歌

立秋

ふく風のおとはの山ぞ響くなる關の此方に秋やたつらむ

秋きぬとまづしるものは涙にてふきおくれたる荻の上かぜ

○みそぎ　身に水を滌ぎて罪けがれを浄め祓ふ事、伊邪那岐神が夜見國よりかへりましてみそぎせしこと神代の卷に見ゆ。六月、十二月のつごもりに大祓といふも此のみそぎである。

○なごしのはらへ　夏越の祓。陰暦六月晦に行ふ大祓。

○忍びしのぶ　しのぶはしのぶ草。忍びしのぶと語をつゞけて、「忍び／＼」と通はせてゐる。

人しれず忍びしのぶに通ふなり闇のいたまの秋のはつ風

立秋露

つねにおくを笹が上の白露はあまるにつけて秋をしるかな

山家立秋

我のみやいとふと思ひし山里によをあき風もまづ立ちにけり

雨中立秋

みそぎ川こさめにあひぬ蟬の羽の衣ふきほせ秋のはつ風

新秋露

くれ竹のひとよばかりの秋なれど葉末に露の餘りけるかな

秋の露くさ葉の上もあるものを我が袖にのみおきまさるらむ

秋のはじめに

霞たちなびくと思ひし青柳の木末に見ゆる秋のはつかぜ

山早秋

おほ原やをしほの山を見渡せば秋にはなりぬ三日月のかげ

折にふれていひ出でたる

みそぎせしみたらし川をけさ見れば淺瀬にかゝる颷のゆふしで

露早知秋

つゆにのみ秋はしられて怠りのまなびの窗のをぎのうはかぜ

ある時つゞけたる

わび人は露も涙もかけなれてそでには秋をおどろかぬかな

秋風

秋の野の尾花がうれを吹き亂り風の目に見ゆる時は來にけり

わが爲にふくとしもなき秋風にさばかり物は思はざらなむ

秋かぜは都の空もみにぞしむ山里いかにわびしかるらむ

閑居秋風

かぜならで又とふ人もなき宿は荻のは音もまがはざりけり

荻のはの音も聞えぬ宿なれどまがはぬものは秋のはつ風

風告秋使

天飛ぶや鴈を使と人はいへどかぜこそ秋を告げて來にけれ

雨はれたる後

○つゆにのみ云々　時の移りの早くして學びの業の之れに伴はざるをいふ。

○天飛ぶや　鴈の枕詞。

（曉のねざめ云々　曉の寢覺が寒くなつた、御障子を引いてくれ、引手の山に秋の初風が吹くさ。

はつ秋の雲のころもの空色はあめにあらひし後ぞすゞしき

早涼到

曉のねざめ寒しなふすまでをひきての山の秋のはつ風

御祓せしい串もいまだこほたぬに涼しくなりぬみつの浦風

から衣ぬぎてかすべき今宵より重ぬるまでになりにけるかな

七夕

あき毎にあふ瀨かはらぬ天の川おもへばふかき契りなりけり

ひこ星の妻とひ衣ふきさらせあまの河原の秋のはつかぜ

六日空高く風の音聞えて山鳴りとよむ

あき風はふきにけらしな久方の天のかは浪たちさわぐまで

雨いさゝか降りて晴れたり

夕立の雨のなごりの天の川わたるたもとや涼しかるらむ

ひさかたの天の河風ふきおちてまづ高樓のうちぞすゞしき

七夕雲

あまの河くもの浪たつ彦星のつまむかへ舟ふなですらしも

天のがは思ひこがるゝ夕ぐもに殘る日かげもたゞならぬかな

七夕霧

ひとしれぬ契りならぬを天の川なに秋ぎりの立ちかくすらむ

七夕薄

ひさかたの天つ少女のはた薄ほにいでて招け秋たちぬめり

七夕草

ひこぼしと機織つめの中に生ふる天の河はらの撫子の花

七夕鳥

あまの川今宵ゆかむの玉章をかきつらねてぞ鳫はきにける

久方の天のかはほり騒ぐなりあせたる水にみ舟こぐらし

七夕蟲

さゝがにの夕暮かけてひく絲は星あひのそらに心あるらし

七夕絲

神代よりぬし定まれる棚機に思ひそめたる絲はたむけじ

なつひきに急ぎひきつる片絲はけふの手向にあはむ爲こそ

待七夕

あふせまつ天の河原のかは風に先づ咲きにけりけにごしの花

○なつひきに　夏に手引の絲をとること。

○けにごしの花　牽牛花、あさがほ

たなばたに心をかして人もみなけふの今宵をまちわたるかな

七夕迎夜

天の川まだくれはてぬ雲間よりあはまく星の影は見えけり

烏鵲成橋

かさゝぎの天の浮橋みえねども思ひ渡らぬ人なかりけり

野外七夕

彦ほしのぬぎて渡りしふち袴けふより野べに匂ひけるかな

海邊七夕

ためしあればこれもみ舟と天の川みぎはの蘆も折りてたむけむ

七夕後朝

けさ見ればあしたの雲と成りにけり天の河原のきぬ〴〵の果て

君が爲つばさならべし烏鵲も別れて今朝はねをやなくらむ

荻風

秋風のあはれを誰かしらざらむあなこと〴〵し庭のをぎ原

庭荻風

秋風の音せぬひまはなけれども露もむすべる庭のをぎはら

（後朝　きぬ〴〵。男女相會ひたる其の夜の翌朝。

けふもまた覺束なくぞ暮れにける荻のうは風音ばかりして

獨聞荻

かたらひし人は歸りて荻のはの音ばかりにもなりにけるかな

雨中荻

秋の風已がと思ひし荻のはにまづ音たてし今朝の雨かな

夜荻似雨

かごとにて誰をとめよと荻のはの夜深き雨に紛ひはつらむ

岡山より歸りなむとしける時に儒官尾關某送別の意とて女郎花もて來たり

女郎花おくるをうけてあすよりは去といふなる跡や習はむ

女郎花

何事もいはでの森の女郎花うべくちなしの色にこそ咲け

庭女郎花

年をへて已が垣根と女郎花にほふ心ぞあはれなりける

我がやどにうゑしかひなし女郎花かぜの心になびくと思へば

（一）女郎花おくる　おくるに贈ると送るとの二つをかける。

竹田翁始めて訪ひ來て薄をいけたるを見て市中も秋はしられて林の山人打招く薄生ひけりといふに

心なくいけておきつる花すゝき君をまねくぞ嬉しかりける

薄

たなばたに手向の山の絲すゝき心ありても靡きけるかな

薄隨風

秋風の聲は松にも聞きつべしすがたを見するはなすゝきかな

薄妨往返

心あてのみちだになくば薄原なかなかふみは迷はさらまし

おほつかな招くとならば花薄わがゆく道は隱さざらなむ

薄似袖

いそのかみふる野の薄ほにいでて昔の人の袖かへすなり

草花初開

吹く風の音にもたてぬ初秋をいろに見せたる宿のはぎかな

草花色々

つゆ霜にうつろふ秋の野べなれば花も限りをつくしてぞ咲く

（竹田翁　田能村竹田、豊後の人有名なる畫家、又詩をよくす。山陽と交り深し。天保六年卒年五十九。

○蘭　ふぢはかま。

折草花

家遠くきにけむ人や折りつらむそこにすてたる秋萩のはな

蘭

秋風にほころびはてて藤袴いまはきて見る人だにもなし

秋暁山

よをこめて越ゆる山路の藤袴ふみこむからに香こそしるけれ

秋夕浦

波あらき秋の浦こそあはれなれ夕悲しと見る人もなし

萩

秋風の身にしむばかりなりしよりこ萩が原は花さきにけり

わが宿の垣ねあれぬと思ひしに萩は花こそ咲きまさりけれ

折萩

またもこむ程をしらねば萩が花さきあへぬ枝を折りてけるかな

萩映水

光なきゆふべの月の影ながら水にうつれる秋萩のはな

萩如錦

あきはぎの錦しくらむ古里につゞりの袖をいかでかへさむ

圓曇寺の萩見に人多くゆきたるに

花にのみうつろひやすき心かな萩の下葉は見る人もなし

初鴈

野も山も秋はすみ憂きものなれやはつ鴈がねの峯になくらむ

あまつ風いたく吹くらしはつ鴈の翅のつらの亂れたる見ゆ

秋鴈

歸るとやくるとやいはむ天つ鴈こゝも常世の國とこそきけ

鴈隨風來

跡もなき雲路よりくる鴈がねは吹く風のみやしるべなるらむ

寐覺聞鴈

秋風になきつれてゆく鴈がねをひとりねさめの枕にぞきく

暮天鴈

夕暮の雲路やいかに迷ふらむ初鴈がねの亂れてぞなく

雲開鴈

聲はなほ空に聞えてみなそこの雲間をわたる鴈のひとつら

○聲はなほ云々　空ゆく鴈の水に映つゝ樣を詠じた。

○河口のみをの云々　河口を溯ぎ上る鴈をから艪押す舟に似たと思うて詠じた。

霧中鴈

秋霧と初鴈がねのいつよりか立たばなかむと契りそめけむ

野亭鴈

世の中をかりとなくねは聞きながらすみ捨て難き野邊の庵かな

河邊鴈

河口のみをのしるしや見えつらむからろ押しつれ鴈はきにけり

鴈成字

秋ぎりにきえゆく鴈は仙人（やまびと）の岩ほにかける文字かとぞ見る

夜鹿

ふけゆけば鹿の音ながらおろすなり川上とほき宇治の山風

鹿聲幽

うぢ川の瀬ぎりの浪にたぐひてもたり〳〵鹿のこゑぞ聞ゆる

鹿聲近枕

もろともに鳴きや明かさむ野べの鹿くさの枕を我もむすべり

遠聞鹿

いかばかりつれなき妻をこはた山遠く聞ゆるさをしかの聲

○名だて　評判。浮名の立つ様にすること。

○夕露の歌　秋は涙の露のみならず滿天滿地が露であるとの意。

鹿交草花

さをしかの妻の名たてにさく花の萩女郎花いづれつゆけき

山鹿

朝日山あはぬなげきの霧ふかみ明くるも知らぬさを鹿の聲

谷鹿

おもひかね妻こふ鹿やわたりけむうはにごりせる谷川の水

瀧つせの音にたぐひて聞ゆなり谷ふかく鳴くさを鹿の聲

岡鹿

たび人のゆききもたえて日の岡のくれゆく道に鹿ぞ鳴くなる

麓鹿

鹿のこゑ山の麓になりにけり今宵もいたく更けにけらしな

秋露

秋くればよながき竹の葉末にも餘るばかりの露ぞおきける

花すゝき餘りに靡きやすければ露も心やとまらざるらむ

夕露

心なきくさ葉の露もあまりけり夕は袖の上ばかりかは

苔上鋪

こゝろなきいはほのきたる苔衣それさへ秋は露けきものを

霧

さびしさを思ひこそやれ秋霧のたえ間に見ゆる峯のふる寺

朝霧

朝な／＼早瀬の上にたちかねて流れぞ下る宇治のかはぎり

河霧

をりくべて燒かむ煙の面影にきりこそかゝれうぢの柴舟

吉野川いはこす水のはやければ立ちもとまらぬ秋のうき霧

崎霧

夕されば沖の小島にたつ鳴きて洲さきの浪にきりたち渡る

暮山霧

さらぬだに秋の日影の程なきに霧たちくれぬを初瀬の山

物へ行く道にて

朝ぎりのたえま／＼に色みれば秋の花野もうつろひにけり

霧中求泊

きりたちて湊は見えずあしたづの鳴くなる方に舟は留めむ

霧中聞鶴

霧立ちてけふもくるすの野べ見ればそこともしらぬ鶴なくなり

槿

棚機のねての朝顔おもはゆみ葉隱れてこそけさは咲きけれ

風にちる露ぞはかなき朝顔の花は日陰もまちけるものを

鄰家槿花

となりにも鄰のものと思ふらむこの中垣のあさがほの花

鄰なる朝顔のはなさきにけり垣ごしならで見るよしもがな

駒迎

逢坂のすぎの下道くらけれど聲さやかなるもち月のこま

月

ふたつなく嬉しきものは白雲を月のはづるゝ景色なりけり

うすものにつゝめる玉と見ゆるかな松の葉ごしの有明の月

わが心山のあなたになりにけりかたぶく月にいざなはれつゝ

十五夜

○くるすの野　今日も來る、栗栖野をかけた。

○駒迎　古八月十五日諸國の牧より馬を獻上するを逢坂まで出で迎ふること、望月の駒は信濃國佐久郡より奉る。

〇かならずこの歌　必ず逢はうと約束した人すらそれを違へる世の習ひであるのに、遠い雲のあなたに在る月を待つ事よの意。

天の原てる月かけのいつはあれど秋の今宵にます影はなし

待月

かならずと契りし人も違ふ世に雲のあなたの月をまつかな

雲間待月

山の端に見むと思ひし月かげを雲間にだにと待ちわたるかな

出づる月を見て

山のはの松にかゝれる月かげは出づるもをしき心地こそすれ

松間月

千代へたる梢はおきて我が宿の小まつが上にいでし月かな

いかなれば松の木の間にすむ月の中空よりも照りまさるらむ

我が宿のものとも更におもはぬは松の木の間の有明の月

峯月照松

音羽山みねのまつ原たかければいでたる月ぞ離れかねたる

山のはの松はかつらにあらねども月の中にもなりにけるかな

月宿松

ふる雨ももらじと思ひし松なれど葉越しに月の影は見えけり

○神代よりとこよに云々　月は常に此の世とあの世とを往返するものと考へて。

○共に見し人はむなしき　空しきは共に見し人の已に空しきと、何物もなきを大空の形容とを兼ねたり。

山月初昇

白雲のはれとや月ものぼるらむ山の端またぬ人しなければ

月出山

望月のいこまの山にいでくれば迎へぬ人もあらじとぞ思ふ

曉出月

山のはの雲のきぬ〴〵綻びていとより細き有明の月

あけぬとて霧も收まる山の端に心ぼそくも出つる月かな

殘月掛岑

ねざめする人や見るらむ大原のをしほの峯にかゝる月かげ

竹間月

わが門の竹の林の葉ごもりに夜たまつ月のかげは見えけり

月似古

神代よりとこよに通ふ月人の老いせぬかげの久しくもあるか

獨見月

ひとり見る心やそらに通ふらむ月もこゝにと照る心地する

共に見し人はむなしき大空にかげもかはらぬ秋の夜の月

都　月

もゝしきの都の空になる時は月も心やすみまさるらむ

里までもさやけき月に九重の雲のうへこそ思ひやらるれ

庭　月

秋風のすゝき吹きしく庭の面にあけがた近き月ぞさびしき

野　月

武藏野のくさにも月はいりにけり山のはをのみ恨みつるかな

たかしまのかち野の原の草の上に月と共にも宿りつるかな

河　月

河なみに浮ぶものから久方の月の光は流れざりけり

湖　月

秋の夜の月のかゞみをいれたれば箱根の海は底も見えじり

しら浪の打出の濱を夜ゆけばみぎはに月の影ぞくだくる

園　月

露あまるそのふの竹は雨ふれどくもるともなき月のかげかな

林　月

（林の月の歌　名刹雲林院は北野にあるので此の歌がある。

みやこ人きたのの原に月を見てくもの林の名をやいとはむ

浦月

かた枝さすをふのうらなし月清みなれる數さへ見え渡るかな

水郷月

てる月のにほふ今宵は桂より梅津のさとのなつかしきかな

原上月

そのはらのとくさが露にみがかれて出でくる月の光ことなる

窗中月

見る人はかはりけりとや思ふらむ昔のまどの秋の夜の月

路頭月

影をおひかけに追はれて往き返る月の夜道ははるけくもなし

海人歡月

心なくうたふ聲さへすみにけり月になるをの沖つふなびと

樵客歸月

かへるさは月にまかせてくるゝまで薪こるなり小野のさと人

浄侶對月

（なみのうらなし　学生の浦梨。）

墨染のころもの上にやどれどもかげ白妙に見ゆる月かな

月浮河水

たてぬきにほり江の川の月みれば必ず西へゆくとしもなし

草露映月

大空の月の光に靡かれてむぐらの露も玉とこそなれ

月照草花

ありあけの月の光にあさ顔の咲かむ數さへ見えわたるかな

八月十日ばかり夜々月のいと清かりければ

老が身はねられぬまゝに起きてゐて入るまで月のかげを見るかな

宇治なる菊屋にて月待つほど

あさひ山いでくる月の影見ればくるゝも明くる心地こそすれ

天眞庵といふ處に月見に行くに

暮れぬまに出でてきつれど山の端の月には猶もおくれけるかな

まりふといふ海邊にて月を見て

こよひ此のまりふの浦の月見れば波のあげたる心地こそすれ

いと事しげかりけるころ中秋に

雲とたち嵐と走るすきまにも猶めにかゝる月の影かな

中秋海のほとりにて

もしほやく煙もしばし心せよおきの波間に月ぞほのめく

雨ふらねどくもれる夜

世の中のうきこと知らば月かげもへだつる雲や嬉しかるらむ

月前煙

鳥部野のけぶりに曇る月見れば我が身ありともなき心地する

月前霧

大ぞらの月の光を見るほどに夜深くなりぬ宇治の川ぎり

月前蛬

きり〴〵す聲もたえ〴〵聞ゆなり雲間の月の影やさすらむ

月前遍舟

難波江のあしわけ小舟こぎいでてさはる物なき月を見るかな

月前遠情

いく里の人の心にうつるらむ月の鏡のくもりなければ

擣衣

○月前煙　鳥部野は山城國愛宕郡にある王朝時代以後の埋葬葬地で又荼毘所である。そこより上る煙に月の曇るを見て身も心もなき心地のせるを歌うたのである。

○茜さす　晝の枕詞。

から衣うちつゝ居れば長月のありあけの月に松かぜぞ吹く

九重のくも居の月のさむければ都のひとも衣うつらむ

つの國のおそねの里にきて見ればかたぶく月にころも打つなり

茜さすひるはひねもすとき洗ひよるは砧にまきてうつきぬ

里擣衣

世は捨てて身をばすてずや山里になほすみぞめの衣打つらむ

鄰擣衣

秋風のよさむは隔てなかりけりとなりの宿も衣うつこゑ

松下擣衣

松風もまことに寒くなりぬれば蜑のぬれ衣ほしてこそうて

閨擣衣

から衣うてばうつなり足曳の山びこさへや夜寒なるらむ

夜々擣衣

ちかどなり同じ夜寒をうちかはす砧のおとのあはれなるかな

いくへにかうち重ぬらむ唐衣くるゝ夜ごとに聲のきこゆる

秋夕

ゆふづく日さす影ばかり長閑にてそとに寒けき岡のかや原

秋夕傷心

棚機のあふといふなる夕より萩の下葉はながめそめてき

秋夕雨

風きほふ一むらさめの曇りにてやがてもくるゝ秋の山里

秋さればすむを心のいけ水もゆふべの雨にくもるけふかな

秋蟲

秋の野にくもの絲筋なかりせばおく白露を誰かぬかまし

うつりきて秋の花野にとぶ蝶の夢の果てこそはかなかりけれ

夕蟲

足引の山したかげの淺ぢふに暮るゝもまたで蟲ぞなくなる

夜蟲

わたし守呼べど答へず長良川きしには蟲の聲ばかりして

深夜蟲

秋の夜の長き思ひもかぎりありてねむるか蟲の聲のたゆめる

蟲聲幽

○かれにける　蟲聲の枯れたるをいふ。

○すゞのしの屋　すゞも篠で、しのに同じ。

さ夜中とふけ靜まりし蟲のねの聞ゆる野べやいづこなるらむ

蟲聲非一

秋といへば同じあはれを樣々の聲にたてても蟲の鳴くらむ

蟲聲枯

かれにける尾花がもとの松蟲の招けどよべど人しとはねば

京にのぼりける夜舟にて

夢ながら蟲のね近く聞ゆなりかた野やすぐる淀の川ふね

又ある時同じ舟にて

烏羽玉のやみの夜舟の手枕にむしのね近しなぎさ漕ぐらし

故郷蟲

いにしへの人もかへらぬ古里は松蟲のねもかれ／＼にして

松蟲

秋たてば先づぞなくなる久かたのあまの河原の松むしのこゑ

たねしあれば生ふるものとて松蟲の巖の中に聲の聞ゆる

鈴蟲

かりねして誰かきくらむ露しげきすゞのしの屋の鈴蟲の聲

閑庭蟲

あるじなき宿とや蟲の思ふらむおのが儘にもすだくなるかな

枕下蛬

きり〴〵す枕の下になくときは夢のうちにも秋ぞかなしき

何となき時に

さびしくて人もかくこそ暮すらめとはずとはれぬ秋の夕暮

住吉にゆくに

若草にひばりあがりし野べゆけば薄ほに出でて百舌ぞ鳴くなる

田家秋興

植槻や田中のもりの秋まつりはつ穂のこ酒我ゑひにけり

深山秋興

岩ねふむ宇治の川かみ遠けれど紅葉見にくる人もありけり

秋眺望

あき來ぬと天の川原にさく花はかすそふ星のひかりなりけり

秋田

あし曳の山田穂にこそ出でぬらし今朝よりひたの音ぞ聞ゆる

〇ひた　引板、鳴子。

秋夢

老いぬれば夢路さへこそはかどらねさばかり長き秋の夜なれど

秋色

古里は秋のけしきになりにけり垣ねの梢庭のあさぢふ

秋鳥

あさ寒み結ぞおつらし椎がはみぎはも去らず鷺たてる見ゆ

葛風

よどがはの渚の岡の葛の葉はかへる浪とも見えわたるかな

我が宿のかきねがくれの葛の葉をたづねても吹く秋の風かな

紅葉

かざすべき籬の菊はさかねどもみなみの山は色づきにけり

むら時雨いたり至らぬ程ならし山の紅葉の薄くこく見ゆ

わが岡の紅葉の上にたちかへり今ひとしほとふる時雨かな

不知火の筑紫染川けふ見れば紅葉のちれる名にこそ有りけれ

高雄地藏院より谷を見て

くれなゐの紅葉の底にむせぶなり淸瀧川のみづのしらなみ

高尾山かへし／＼て見つれどもうらおもてなき錦なりけり

池のほとりの梢どもいろ／＼に紅葉したるが水の底にうつれるを見て

池水の底こそ秋は深からしかげは木末にまさる色かな

紅葉深

わたつみの深き心にそめいでてやがて千入の木の葉なりけり

森紅葉

見るまゝに紅葉まばらになりにけり風のたおたる衣手の森

松間紅葉

櫻ばなさきぬといひし山松のおなじ木の間にみゆるもみぢ葉

あらしほのやへの汐風染めつらむ磯山松にまじるもみぢ葉

森間紅葉

定めなき時雨の雨のふる時はときはの森も色つきにけり

池邊紅葉

もみぢ葉の陰なる池の水清み散るもちらぬも底に見えけり

池水の底にうつれるもみぢ葉は色も深くぞ見えまさりける

紅葉浮水

()千入の木の葉　幾度も染めかへしたる木の葉。

()あらしほの　荒潮の八重の汐風

しがらみに流れてかゝるもみぢ葉は錦を疊む心地こそすれ

紅葉映水

みな底に散りて沈めるもみぢ葉を猶かげなりと思ひけるかな

もみぢ葉のかげとしらずば紅に落つる水とも驚かれまし

紅葉如錦

山のみな唐錦とも見ゆるかな唐土よりやしぐれそめけむ

古寺紅葉

よの中に心はそめぬ山寺のにはの木末も紅葉しにけり

海邊紅葉

たかしきの浦の秋風吹きにけり小貝まじりの紅葉ひろはむ

蔦

頼むかひなしともいはず松が枝に今年も蔦の紅葉しにけり

紅葉の頃壽法寺にて

もみぢ葉の暮るゝ梢はさもあらばあれ唐紅にわれ醉ひにけり

夕見紅葉

今はとてたたましものをもみぢ葉の陰にさしたる夕月夜かな

○今はとてたたましものを　紅葉に夕月の照れるを見て立ち難くなる心。

秋の歌の中に

なきわたる雁の涙にぬれとほりみ笠の山もいろつきにけり

わが宿のもみぢの色は水なれや雨ふる毎にふかくなるらむ

菊

はつ霜にまがはじとてやしら菊のうす紫に移ろひぬらむ

白菊のかげをうつしてゆく水のながれの末は誰かくむらむ

菊初開

菊の花今朝よりさきて匂ふめり夜のまに千代の露や置くらむ

菊花色々

白菊に黄菊折りそへ玉簾のを瓶にさして見れど飽かぬかも

重陽愛菊

色も香も今日の一日に匂ふらむこゝのかさねの白菊のはな

九月九日海邊にて

しら波のたてるを見つゝ我が宿のきくの八重咲おもふ今日かな

波の上に常にはかなきうたかたもけふは千年の花とこそ見れ

籬菊

○重陽　九月九日をいふ。

○うたかた　水の上の泡。

（重巖細菊斑　重なる巖に細菊斑なりと讀む。）

（移座看菊叢　座を移して菊の叢を看ると讀む。）

人は皆うつろひはてし故郷のまがきに咲けるしら菊のはな

雨中菊

ふる雨のしづくにぬれて山里の菊のかきねをとふ人もがな

水邊菊

ふじ川の底にうつれる白菊はたかねの雪の影かとぞ見る

谷菊

清水くむたよりにのみぞ折られける谷の底なる白菊のはな

寄菊祝

よろづ代とねがふ心のあるなべに濡るゝうれしき菊の露かな

菊花憶昔

たれすみし宿のまがきの跡なれや一もと咲ける白菊のはな

重巖細菊斑

おく山のいはほの年はしらねどもいたゞき白し白菊の花

移座看菊叢

圓ゐする園生の菊の花むしろ千代をのべたる心地こそすれ

殘菊

霜ふりも白く見ゆれば菊の花おけど色こそかはらざりけれ
しもさへやおき忘れけむ古里のきくの盛りぞひさしかりける

九月盡

もみぢ葉を舟と浮べて飛ぶ鳥のあすか川より秋はいにけり

暮秋

山風にしぐれの雲ぞまよふなる秋と冬との中ぞらにして
もみぢ葉に心もそめぬ山がつはあきの別れもおもはざりけり
世の中を我あきはつる今日なれば心にとまる木の葉だになし
けふのみと暮れぬる秋を惜しといひて果てなき野べに我は來にけり
山寺の入相の鐘の聲の中に秋も暮れぬる今日にぞありける

山家暮秋

山里もうきはうき世に異ならでさらにかなしき秋のくれかな

冬歌

初冬

吹きおろす嵐の音のはげしきは山より冬は立つにやあるらむ

かみな月しぐれ〳〵て獨寢の衣手さむくなりまさるかな
大かたは今年もすぎぬ千早ぶる神無月にしなりぬと思へば

山居冬到

音羽山みねの松風うちしぐれ冬にはなりぬ山しなの里

木　枯

夜もすがら松の榾火をたき明かし藁ぐつうたむ冬は來にけり
ありあけの月の桂やさわぐらむ空に聲ある木がらしの風
木枯もときはの山に吹くときは千年をまつの聲とこそなれ

曉木枯

木枯はくさ木の上と思ひしに夢の末さへ殘らざりけり

深夜木枯

うらめしき物にもあるかな思ひかねゆめ待つ宵の木枯のかぜ

河崎のあたりものして

かへりさく花もありやと尋ね見む小春ののどけき櫻野のみや

時　雨

神無月けさより時雨ふるさとにまづかれたるは人目なりけり

○松の榾火　松のほだ火。

○夢の末さへ　草木のみならず夢まで木枯に吹き拂はれた。

○うらめしき物云々　木枯が夢を妨げるのを恨むのである。

あし曳の山下いほに時雨ふりひとり寐がたき時は來にけり
もみぢ葉はちりものこらで山松のそめぬ緣に時雨ふるなり

初冬時雨

我が庭のもみぢは早くちり果てゝ染むるものなくふる時雨かな

夕さり獨りをりて

何をしてひとり心をなぐさめむ時雨はさむしくる人はなし

曉がたに

あまりにも寂しき冬のねさめかな時雨さへこそ音せざりけれ

時雨雲

山たかみ常にたなびく白雲のけさはしぐれて冬は來にけり

瀧時雨

み吉野の瀧の白絲くりそへて高はたの山に時雨ふるなり

關路時雨

關山を時雨とともに越えしかばもろは袂のしづくなりけり
すゞか山坂の下まで時雨れきて立ちやすらはむ陰だにもなし

樵路時雨

しぐるゝは山路の常と思ふらむふるにも謳ふ柴人のこゑ

月前時雨

久方の月をのこして曇りけり心ありけるむらしぐれかな

あらしふく時雨の雲のたえまにも見れば靜かに月はすみけり

霜

しら菊のしろきを色のよすがにて垣根よりこそ霜は置きけれ

旅人のたもとまでこそ氷るらめ夕霜さゆる小野の篠原

霜のあしたに

あさ日さす梢の霜やとけぬらむまつの雫ぞひまなかりける

岡霜

笹の葉のしろきは霜の光にてまだ夜はふかし岡のべのみち

松上霜

住吉のまつの上葉の霜きえてみなみになりぬ今朝の汐かぜ

竹間霜

ありあけの月の光にくれ竹の葉わけの霜のいろも見えけり

田上霜

○みなみになりぬ　南風になつた

○はわけの霜　葉毎々々に置いた霜。

霜にあふひつぢを見ればたのみなし遅れて何の事かなるべき

人跡板橋霜

まづわたる人を慕ひしゑのころの跡さへ見ゆる橋の霜かな

十一月のはじめ玉造のあたりにて

解霜のいまだかわかぬ草の上にけふものどけき朝日かげかな

ふゆがれの淺澤水にあさりして影をもたゝく庭たゝきかな

寒草

大とものみつの濱をきかれしより風の音こそ高くきこゆれ

寒草少

しも雪にかれ野の薄いろもなき姿いつまで人に見ゆらむ

山寒草

いたづらに招き〳〵て山里のすゝきも今は冬がれにけり

寒松

高砂のまつやは年のさむからぬ霜と雪とにかれぬばかりを

かきよせて焚くばかりこそちりにけれ松の下葉も心ある山

朝寒松

○霜にあふひつぢ　ひつぢは刈つた後に自生する稲、まゝばえ。

○ゑのころ　いぬころ、狗子。

○大とものみつ　大ともはみつの枕詞。みつの攝津國御津濱。

あさ日さす嵐の山を見渡せば松の葉しろく霜ぞおきける

冬雲

むら時雨しぐれつくして大空の雲のゆききも鎮まりにけり

冬曉

おのれのみおくとや霜の思ふらむ大方人もねであかしけり

冬夕

山里はそゞろ寒けきゆふべかなこしばが中に火たき鳴きつゝ

冬旅

霜にふし雪におきいでて旅衣こほらぬひまもなき山路かな

冬枕

ふるさとの夢もかれ野の草枕いねこそやらねさゆる霜夜を

何ごとをつげの枕ぞさゝの葉の冱ゆる霜夜に我をねささぬ

冬鐘

獨りねのねざめ／＼にかぞへよと霜夜の鐘のさえまさるらむ

冬田

賤の男がかり残したるうるしねに白くも霜のおきにけるかな

○おのれのみおく　置くと起くとをかける。

○火たき鳴きつゝ　火たき鳥。大きさ雀にひとしくよく囀る。

○ふるさとの云々　霜の夜枯野に旅寝すれば夢も結ばれぬといふことを詠じた。

○うるしね　うるち、粳稲。

冬野

あさな／＼霜はおくらし須磨の浦の上野の淺茅色つきにけり

やがてみな緑にかへる草なれば同じ色にぞ枯れわたりける

枯野朝

梢みなちりぬる野べは朝霜のおきのこしたる草の葉もなし

ざぜん堂にまうでける時しぎ野口にて

霜ふかきしぎ野の廬の冬がれにはねかく音も聞えざりけり

あさ日影さすや岡田のうす氷おのれ碎くる音のさやけさ

麓柴

大原の山のふもとのいち柴にあないちじろし今朝の初霜

霰

山風にふき寄せられてわが宿の垣ねにたまる玉霰かな

草庵聞霰

人すまであれにし草のいほりには霰さへこそ音せざりけれ

關屋霰

常にきく波の音だにあるものを須磨のせき屋にふる霰かな

○緒絶の橋　陸前國志田郡古川町にある橋。

橋上霰

しら玉の緒絶の橋の名もしるく亂れてのみも降るあられかな

篠上霰

さゝ竹のよはさてのみもあるべきに事々しくもふる霰かな

竹上霰

竹にきて宿りし鳥やおどろかむ夜深きまどにあられふるなり

雪

北山は見ゆる高ねもなかりけりかきくらしても雪のふるらむ

住吉の松より上にあらはれて雪こそつもれ紀路のとほやま

ふり積るいづくはあれど白雪は荒れたる宿のものにぞありける

嶺上初雪

豐年(とよとし)のしるしをみつの峯ごとに降りこそつもれけさの初雪

遠山初雪

つねはたゞ連なる峯とおもひしに雪の見ゆるや奥のおく山

大和路に入りたち見ればみ吉野の山には早く雪ふりにけり

古寺初雪

○はだら　はだれ。まだら（斑）。
○明け行く六つ　午前六時。
○六つの花　雪をいふ。

鐘の音はさえにけらしなうべしこそ初雪ふれれ小初瀬の山

待雪

おのが身の上ともしらずぬばたまの黒髪山に雪をまつかな

朝雪

うみごしの武庫の遠山けさ見れば初雪ふれり峯もはだらに

淺雪

ほの〳〵と明け行く六つの花盛り草にも木にも雪のかゝりて

朝日かけさせば消えゆく初雪のあるほどなきはこの世なりけり

逐日雪深

みよし野の山の白雪あさな〳〵幾重つもりて年の暮るらむ

谷もなく峯も平らにふり積る木曾路の雪はいつか消ゆらむ

山深雪

ふかき谷淺くなるまでふる雪のいつ消ゆべくも見えぬ頃かな

雪降りたる日に

松もよし竹もまたよししら雪のふりよそひたる山里のには

遠山雪

大比えの峯よりかけてさゞ波の比良の高ねにふれる初ゆき

遠島雪

けさ見れ紀路の遠ば山雪ふりてたちこそまがへ沖つしら波

湖上雪

たつとみてよりこぬ浪はわたつみの沖つ巖の雪にぞ有りける

雪つもる比良の高ねのかげを見て朝妻舟も冬やしるらむ

孤島雪

波かゝる岩根ばかりは現はれてはなれ小島に雪は積りぬ

行路夜雪

よはふけぬ雪は積りぬ我が宿にかへるも遠しゆくもはるけし

關屋雪

逢坂の杉のしら雪なだれきて關の藁屋はかたぶきにけり

依雪待人

常にこぬ人こそ今朝はまたれけれおくがれぬべき雪の景色に

雪中竹

己のみすぐなる竹もふる雪の下にをれてや世をばしるらむ

（朝妻舟）近江國朝妻といふ所の宿船。

（世をはしるらむ）竹の節（よ）を世にかけいふる。

清晨雪擁門

雪ふりぬ門のかけがねはづしおけ明けぬよりとふ人もこそあれ

晴雪落長松

わが門の松の嵐の吹くごとにきのふの雪ぞ今日もふりける

庭雪厭人

背面(そとも)より友まちいれてこの朝け跡なき庭の雪を見るかな

ある日嵯峨にまかりて

ふる雪のかげはうつりて大井川底よりうかぶ沫かとぞ見ゆ

いたく雪ふりける朝早くすみける家の松を思ひて

枝たわにふるらむ物を古里の松のしら雪たれかはらはむ

雪朝望

難波江のあし毛も見えず伊駒山かけてふりたる今朝の雪かな

歳暮雪

はるは花秋は紅葉の色にいでて雪の白きにかへる年かな

月前雪

いづくより降りくる雪ぞ大空の月には雲もかゝらざりけり

○あし毛　唯蘆といふべきを駒というたのであし毛と言うたのである。

久方のつきの光はさしながら打ちはらふまで雪はふりつゝ

夜落葉

よもすがら木の葉かたよる音きけば忍びに風の通ふなりけり

谷落葉

冬くれば谷のした水まづかれておつる木の葉も誘はざりけり

橋落葉

もみぢ葉のちれるを見れば板橋の霜には秋の跡もありけり

河風に柳の枯葉おち髪のみだれにけりな宇治のはし姫

瀧落葉

瀧にそふ紅葉を見れば紅のなみだは山のむせぶなりけり

關路落葉

ふゆくれば人も結ばぬあふ坂のせきの清水にちる木の葉かな

落葉埋路

あきはてて我が入る道はもみぢ葉のふり隱すこそ心なりけれ

落葉滿流

山川の心あさ瀬にいかなればおつる木の葉のみなとまるらむ

〔河風に柳の枯葉云々　橋上柳の落葉を見て源氏物語にある宇治の橋姫の亂髪を聯想したもの。

木落見他山

我が宿の木末まばらになりぬれば遠山さとご露なりける

寒　蘆

風なくてそよぐと蘆の見えつるは隱れて人のかるにぞ有りける

江寒蘆

難波江の汀のあしのみだれ葉にうす雪白し夜目に見れども

千　鳥

なには江の蘆の枯葉をふく風にみだれて騒ぐむら千鳥かな

はま千鳥ともよぶ聲に驚けばまだ有明の月は夜ふかし

沖つ藻のきよる濱邊にゆきくれて千鳥と共にねをもなくかな

備後國に下りける時松永といふ處にて夜千鳥

さよ千鳥友まつ永の遠干潟いくたび鳴きてゆき歸るらむ

寒夜千鳥

賀茂川の川原の千鳥ゆきかへり鳴けどもあけぬ冬の夜長さ

曉千鳥

まつ風の寒くふく夜は住吉のおまへの濱に千どりなくなり

浪の上の月はいりぬる明方になほさやかなるむら千鳥かな

ちどりなく磯山かげは晴けれどほの〴〵見ゆる沖つ白浪

浦千鳥

藻しほやく煙の末にたちかへりまつほの浦になく千鳥かな

島千鳥

島めぐる千鳥のこゑの幾かへり浮寐の夢を驚かすらむ

湖千鳥

あふみのみ打出の濱を夜行けば波うちぎはに千鳥なくなり

湖上千鳥

さゞ波の比良山おろしふきにけり千鳥も波もたち騒ぐまで

古渡千鳥

妹が手に我が手さしかへまくらがのこがの渡に千鳥なくなり

わたりする矢橋の舟の棹の音にたび〳〵騒ぐむら千鳥かな

月前千鳥

波の上の月にかゝれる浮雲はむれて千鳥の渡るなりけり

冬月

○あふみのみ　近江の海、即ち琵琶湖。

○まくらがの　こがの枕詞。萬葉集十四「まくらがの許我の渡の柄檝の音高しもなねなへ見來」

○竹のよさむ　夜寒に竹の節(よ)をかけてゐる。

○板井　板にて圍ひたる井。

久方の月もふゆこそさびしけれひかりは霜にかれぬものから

霜夜月

たかさごの松の上葉におく霜の色さへ見ゆる月のかけかな

見冬月

わが園の竹のよさむの霜の上に見る人なしと月ぞさえたる

さくらちる朧月夜のこゝちして雪けに曇るありあけの空

寒月

ふる雪に入る山の端をかくされて空に有明の月ぞしらめる

寒山月

露になく草葉はかれて山たかみ聲する松にやどる月かな

故郷冬月

古里は板井のこほりとぢはてて月さへすまずなりにけるかな

海邊冬月

淡路島かたぶく月のかけさえて和田のみ崎に時雨ふるなり

嶺冬月

冬の來て人もすさめぬ月かけは峯の木末もさはらざりけり

池水はこほりもやらで水鳥のゆくあと見ゆる月の影かな

寒流帶月

枝かはす木々の木の葉もちりはてて細谷川に月ぞやどれる

氷

車井のおとこそ高く聞ゆなれつるべの綱もよるこほるらし

水鳥のあそぶ處は殘しおきてこほるや池の心なるらむ

我がかどの板井の水のうすごほり碎かずながら汲むよしもがな

氷始結

おきいでて手にくむ水の薄氷ありと見るまに消え果てにけり

朝戸出にむすびし水の薄ごほりむすべる程はむすびてぞしる

いし河やその片淵のあさ氷あさきかたよりむすびそめけり

池氷

池水のみぎはは氷れるよひ／＼に浮寢燧かりと鴨そなくなる

湖氷

諏訪のうみの氷の上の通ひ路はとほき人まで聞きわたりけり

筧冰

ながれくる筧の水は冰らねど餘るしづくぞつらゝゐにける

山寒歎水冰

みよし野の奥の瀧つせ冰るらし末の流れぞ水かれにける

袖冰重夜

袖の上に冰りはてたる涙かなとけぬ思ひに夜をかさねつゝ

水鳥多

水鳥の聲こそしげく聞ゆなれたれ玉さかの池といふらむ

池水鳥

山かげの宿の池水淺けれど今年もをしの歸りきにける

見水鳥

寒かりし夜半の嵐にわたりけむけさより浮ぶ池のみづとり

水鳥近馴

古寺の庭の池水むかしよりすむものにして鴛ぞ來にける

鴛

木枯はさむく吹くともをし鳥のならびの池は冰らざらなむ

蘆間鶯

なし鳥のともねする江の蘆の葉は影ばかりだに枯れ殘らなむ

田殘鴈

わが門田おくて遲しと思ひしか猶いまさらに鴈もなくなり

網代

ものゝふの宇治の川風さえ〳〵て網代木白く雪ふりにけり

網代木に流れてかゝる水の音の高くなるまで夜ぞ更けにける

宇治川の網代もる身にあらねどもひを數へてもよを渡るかな

むくいあらば其の古の網代守いまよるひをの數にいるらむ

河網代

奥山のゆきけの水やまさるらむ網代のとこにかゝるしら波

網代寒

いにしへにあらぬ網代の牀なれどよるの寒さは變らざりけり

網代雪

網代木にふりてかゝれる白雪を常にいさよふ波かとぞ見る

網代眺望

○ものゝふの　宇治の枕詞。

○網代木　冬水中に竹又は木を組みならべて網の代りとして魚を捕る、その用木。

○ひを數へても　ひをは氷魚で、日をにかけてゐる。

○むくいあらば　古の網代守が因果に依り今氷魚になつて取られたのだらう。

○あづさ弓眞弓槻弓　下のはりを言ひ出さん爲の緣語で意味はない
○もと末の聲　神樂には本歌末歌の二歌が聯ねて一雙の曲となり伶官も歌ふ本方末方の二座に分れる

網代木にいさよふ浪の音はしてあさ霧ふかし宇治のをち方

名所網代

いさよはでたつ年浪の遙かにもむかしになりぬ宇治の網代木

荒海の波のひゞきや通ふらむうらにぞ見ゆるうぢの網代木

神樂

しきしまの大和琴のね聞ゆなり神の宮人かぐらすらしも

あづさ弓眞弓槻弓はりあけて今こそうたへもと末の聲

神樂岡とりてさゝぐる榊葉にしできりかけて雪はふりつゝ

榊葉の末をり返し歌ふなり霜夜の月のあけわたるまで

鷹狩

天皇のみことなればかはし鷹のあはせぬ先に行かむとすらむ

連日鷹狩

いとまある大宮人のかり衣ゆた野のはらに日をやかさねむ

日をだにも重ねしものをかり衣かりにとのみも思ひたちけり

はしたかの進む心にまかせてもかへる日しらぬかり衣かな

夕鷹狩

霜ふかき狩場の眞柴折りたきてそれたる鷹を待ちや明かさむ

鷹狩日暮

あはせやる鷹の行方を仰ぐまに枯野の原はくれはてにけり

冬曉山

あけわたる大原山の炭竈に立つはきのふの煙なるらむ

冬海雲

こよひ又雪とふるべき雲はあれど濱べののどけき海の夕なぎ

冬鳥

冬枯に殘る木の葉と見えつるは群れても鳥のとまるなりけり

炭竈

炭がまの煙ばかりはしら雪のうづみのこせる大原のさと

すみがまの煙のみこそさびしけれ冬がれはてし大原のやま

大原の山べに今はすみがまの煙となるを待つ身なりけり

遠炭竈

淡路しま鹽とすみとの竈よりいろもかはらでたつけぶりかな

遠近炭竈

すみがまの大はら山をみわたせばたゞ一むらの煙なりけり

炭竈煙

大原のさとに炭やくけぶりこそ雪けの雲のはじめなりけれ

大原やせか井の水に影みえて煙ぞなびく峯のすみがま

爐火

すてられし閨の扇の心あらばきりの火桶をさこそ見るらめ

曉埋火

かくしつゝいつか我がよの曉にみもうづみ火の消えは果つらむ

向爐火

埋火に炭さしそへて冬の夜のあくるをまつは久しかりけり

爐火忘冬

これも又すみのえなれや埋火のあたりは冬をわすれ草なる

閑居埋火

埋火のあたりにをりて冬の夜の寒さを風の音にきくかな

霜月のはじめとく咲きたる梅を見て

梅の花あまりに早く咲きぬれば雪かとだにもまがはざりけり

（大原やせか井の水　清和井の水　古山城國乙訓郡大原の里にありたる清水、神樂歌「大原やせかゐの清水ひさごもて鳥はたゝくとも遊びてみくめ」

人の許に紅梅を折りてやるに

我が宿の梅のくれなゐ薄けれど雪にはさすが紛はざりけり

早梅

うづもれぬ匂ひばかりをたのみにて雪の内にもさける梅かな

しろたへの雪を色にてさく梅は冬をかけたる花にぞ有りける

梅の花雪におくると誰か見むふるらむ後は咲きはそむとも

舊早梅

ふる里の軒端にさける梅のはな春をしのぶの香に匂ひつゝ

歳暮梅

梅のはな咲きぬる宿は春めきて年の暮とも思はれぬかな

うめの花にほふ垣ねをたづぬればやがても春の鄰なりけり

年内早梅

あたらしき年の始めをまちかねてふる枝にさける梅のはつ花

歳中鶯

青柳の絲くりよせて年のうちを春になしたるうぐひすの聲

年のはてに

○歳中鶯　舊年の中の鶯。

○ふる雪に此の世の道　說教をきいてゐる中に歸路を雪に埋められたの意。

○江戸なる斐雄　姓菅沼、景樹の門人、桂園一枝の編者。

あまりにも遠きさかひを思ふまに我が身の年ぞ暮れ果てにける

冬夜聽法

ふる雪に此の世の道はたえにけり猶しるべせよ夜居(よゐ)の法の師

佛名

雪のごと積りし罪を雪のごとけよと佛のみ名となふなり

年のはてに

はかなくて過ぎし昔のことばかり思ひ重ぬる年のくれかな

一日づゝ暮れてきにける年なれどけふゆくものの心地こそすれ

かぞふれば我が身にとまる年月をゆく物とのみ惜しみつるかな

春めきし梅のにほひに驚きてくれゆく年やみちいそぐらむ

年のはてに歌あまたかいつけて見せたる奥に書きてかへす

ことわざのしげき頃とて言の葉の數もつもれる年のくれかな

江戸なる斐雄がもとに文やるに

春のくるたよりにつけて東なる人の上こそ聞かまほしけれ

歳暮

思ふこと違ひのみゆく世の中に今日と定めて暮るゝ年かな

歳暮思

津の國のなにはの事のしげきまに蘆の一よとなりし年かな

歳暮雪深

常磐なる松も白髪になりにけり年のくれにし雪のふれれば

しはす二十日あまり春陽軒といふ寺に籠り居りて雪ふりける日

山里のゆきのけしきを一人みてうき世の中をおもひやるかな

ふる雪はたゞ白妙につもれどもこゝろ〴〵に人は見るらむ

かねてより思ひしよりも山里の年の暮こそ靜けかりけれ

五十の年のはてに

すきまなくよると思ひし年波のけふはいそにも餘りぬるかな

戀歌

初戀

わが心まづみに添はずなる事は人に思ひのつけばなりけり

これなくば何につけてかしらせまし嬉しくもれし淚なりけり

祈戀

〔蘆の一よ〕蘆の一節で、一夜にかけてゐる。

〇いそ　五十。年波を緣語として磯にかけてゐる。

○みつの玉がき　見つと三つとをかけたる。稲荷山は三社ある故三つの山なぞともいふ。

○今來むといひし云々　素性法師の歌にも「今來むといひしはかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな」

○我をかれ野　かれに離れの意をかける。

稲荷山いなてふことは我きかじたゞとく人をみつの玉がき

いのれども驗なきこそ悲しけれ許さぬ中は神もゆるさで

祈經年戀

年毎に祈りくれども稲荷山みねばみつともいはれざりけり

未言戀

ひとりのみくるしきものは沼水のしたにこもれる思ひなりけり

いなといはば其の言の葉の葉末にて露の命はきえむとぞ思ふ

洩始戀

いくたびかうちいでかねて岩波の上にむせびし山川のみづ

待戀

人しれずまつに生ひたる忍草まつもしのぶも我が身なりけり

待久戀

今來むといひし空言たのまれて夕ゐる雲はながめなれてき

聞戀

さもこそは我をかれ野の原ならめきくさへ稀に成りにけるかな

われを君あき風ながら荻の葉に音するほどは嬉しかりけり

○戀しきはあふを云々　會へば又それだけにては飽足らぬ心をいふ

○たのめてし其の日　約せし日が明日に成つた。

○くる程遠き　來ると繰るとを掛けた。
○少彦名　大國主神と共に國土を經營し給ひし方。

傳聞戀

ゆきかへる鴈の使をたのむ身はかすみも霧もなつかしきかな

會戀

こひ／＼て人にあふ坂岩しみづ淺き心は見えじとぞおもふ

戀しきはあふを限りと思ひしに果てなきものは心なりけり

思ひいる戀路ははてもなきものをあふを限りと誰かいひけむ

初逢戀

こひ／＼てあひ染川のあやしくも渡るにひるは袂なりけり

嬉しとも思ひさだむる隙ぞなきあへる今宵の心まどひに

明日逢戀

たのめてし其の日のあすに成りぬればけふの暮るゝぞ久しかりける

稀逢戀

幾度かたえはてたりと思ふまでくる程遠きくずの葉かづら

あふことは少彦名につくられて向ふかひなき妹とせの山

和田の原八十島かくれこぐ舟のみるま少なき君にもあるかな

折々はまつもかひある君ゆゑにいろの常磐の戀もするかな

あふことはま遠にあめる荒すだれ何中々に思ひかけけむ

こひのうたの中に

ぬば玉のよるのみ見ゆる君なれば現も夢のこゝちこそすれ

麻衣をぬぎに脱ぎすてみそけども戀はみをこそ離れざりけれ

契久戀

此の世にて逢ひ見むとこそ契りしに覺束なくも年をふるかな

契顯戀

わが中は人しるべくも思はれずかけて誓ひし神やいひけむ

もらさじとむすびし水の末遂に岩もとゞろになりにけるかな

春戀

常はさも思はですぎし老が身も春はそゞろに人ぞこひしき

花ならぬ花に心をそめしより春の心ははるとしもなし

さく花とまつは君ゆゑ霞たつはるの山べはよそにこそ見れ

春夜戀

人こふる涙にかすむ月かげを春のものとも思ひけるかな

あけやすきものと思ひし春の夜も君が歸りし後のひさしき

○みそげども　禊をして後へ清めても。

○花ならぬ花　人を指す。

○春のものと思ふ　戀なりとするの意。

○くる絲の　くる絲のくるに來ると繰とをかけ、ふしを其の緣語としてゐる。

春夜增戀

いかにせむ梅の匂ひは身にしみて霞める月に面影ぞたつ

夏戀

橘のかぜのたよりをたのむかなわが思ふ人もこひやまさると

夏契戀

なつ草のしげみが下に結びおくちぎり忘るな姫百合のはな

稀戀

あはぬ夜をあふ夜の數にかへたらば恨むる程は嬉しからまし

思ひのみしげりまさりてかは竹のふしのま遠きこひもするかな

依忍稀戀

人目多みしのび〳〵にくる絲のふしのま遠になるぞ悲しき

不會戀

かくばかりなど逢ふ事のかた絲な心にふかく思ひそめけむ

はかなしやまだ見ぬ人の面影はたゞどもそれと知らぬなりけり

現にも夢にも人にあはぬ身はねても覺めてもくるしかりけり

逢ふ事はなしの花さく春の日に誰をか蜜のこゝらなくらむ

妹が島風のたよりも絶えにけり逢ふ事なきにならむとすらむ

あふ事はかた絲にして玉の緒の絶えぬさへこそ悲しかりけれ

君にあはむ事はかた野にはふ葛の思ひ返してやむ由もがな

會不逢戀

一たびのあふせくるしき長谷川（はつせがは）流れてとこそ祈りしものを

かさねてと契りしものをたゞ一夜あひみくまのの浦の濱ゆふ

隔年戀

いかにせむこぬ夜つもりの浦波の隔てしまゝにくるゝ年かな

昔見しわが面影をとゞめても思ふらむこそ悲しかりけれ

遠路へだてたる

山をこえ海を渡りてゆくものはきみを我が思ふこゝろなりけり

尋戀

今一目見まくほり江の蘆蟹の立ちはしれどもかひなかりけり

朝忍戀

曉のやみのまぎれに出でてこし跡ふりかくせけさの白雪

忍經年戀

○あひみくまのの　みくまのは熊野の美稱。あひ見にかけてゐる。

（身にそひて云々 年は老いたが
戀ふる心は衰へない。

思ふ事いはねの小松年を經てひく人もなき世をやつくさむ

忍親昵戀

なぞもかく我にひとしき人にだに戀としいへば忍ぶ習ひぞ

通書戀

人ごとのしげみが下の水草のあとはかもなき契りなりけり

久戀

この世にとたのめし事は此の世にて終にあはじの言葉なりけり

身にそひて心の老ゆるものならば戀しき事も衰へなまし

日増戀

明けぬともくるとも今は思ひあへずよる書となく戀の增れば

こと人おもふ

秋の野のしののを薄風ふけばかなたこなたになびく君かな

あひ思はぬ

忘草いまはと種をまきたればいや思草に生ひかはりけり

戀の歌に

大空のむなしき月にいかなればおもふ昔のかげの見ゆらむ

かくれづま

しろたへの衣のつまを隱すとて立居にものを思ひけるかな

今はかひなし

いかにせむあひねの濱も名のみして今はかひなき所なりけり

かたみ

みれば我が影こそうつれます鏡なにぞは妹がかたみなるらむ

歎無名戀

なき事をいはれの池に騷がれて鴨の浮寢になかぬ夜ぞなき

忘難戀

我とわが忘れぬ程ぞしられける見ると見る夢君がうへのみ

たどられしたそがれ時の面影のさやかにまではなど殘りけむ

僞戀

みになるもまづ花よりとあだなりし人の心を賴みつるかな

厭戀

打ちなびく心はあれど青柳のいとはれぬべき後をこそおもへ

顯戀

○かたみの歌　妹が形見の鏡に妹が姿うつらず我が影のうつるをなげきていふ。

○君に心をつきかけの　心をつきは心をよせしの意、月影の月にかけて下句を捲き來り、「まつ」にも戀心の待つ意を含ませてゐる。

○笹がにの絲　古今集に「わがせこがくべき宵なりさゝがにの蛛の振舞かねてしるしも」とあるより、蜘蛛の振舞せるは逢約を知つたのである。

人しれず君に心をつきかけのまつより上にあらはれにけり

別戀

はる霞たなびきとむるものならば人の心ものどけからまし

欲別戀

死にてゆく思ひはいまだしらねどもいきて別るゝ今日に增らじ

ある所にて

山のはの雲のけしきに誘はれて引き別れなむ我ぞかなしき

別れつる淚のひまにひと目みしまつ原ごしのあけがたの波

來不留戀

霞たつ春の盛りも何かせむしばしも君がのどかならねば

臨期違約戀

今宵ぞとおもひかけたる笹がにの絲もみだれて山風ぞふく

違約戀

人しれず結びかへたる入組をおなじ心に賴みつるかな

年へていふ

たらちねの母もとがめぬ綠子のむかしよりこそ君を思ひし

よひのま

我妹子とねて語らむと思ふ夜は宵のまばかり久しかりけり

心かはる

今われを思はぬ人ぞたのまるゝとても心のかはる世なれば

くれどあはず

宵々にくれどあはづの原なればあなうづらとぞねはなかれける

後朝戀

ともしびの殘るもけさは知らざりき思ひ消えたる心まどひに

露ながらかへりふしたる吳竹のおきたつべくもあらぬ今朝かな

もろ共にけなましものを朝露のけさはわが身のおき所なし

短しと思ひすぐして夏の夜のあかつき深く別れけるかな

あけぬとて我こそ人をかへしつれことわりしらぬ袖の上かな

後朝切戀

とし月にちゞの思ひはありしかど今朝の心に似るものぞなき

旅戀

心にもあらぬともねにかたしけとぬひけむ妹が衣ならめや

○あなうづら云々　粟津の草に鳴く鶉云々にて、粟津に逢はずをかけ、あなうづらに「あた憂」をかけてゐる。

○今朝の心に云々　今朝はごせつない思ひをした事がない。

○かりそめの草の云々　假初の契りを結びし地が懐かしく却って故郷が旅心地となるであらう。

くさ枕むすてすてたる旅人の露の契りぞはかなかりける

かりそめの草の枕の契りよりかへらむさとや旅ごゝちせむ

戀のうた

しらぬ人

久方の天のます人いやましにあれども君にます人はなし

なき名

聞きもせず見もせぬ人をこふ時はたが下紐の解け渡るらむ

塵だにも風の絶間はたたざりき今はなき名を何にたとへむ

空戀

駿河なる富士の煙にあらねどもたつ名むなしき戀もするかな

ある山の奥にて男女かたちは猿のやうなれどうち見合ひつゝ思ひありげなるを見て

あしびきの山の奥まで戀といふ道ひとすぢは變らざりけり

思

世の中にくるしきものは人しれぬ心のうちのおもひなりけり

恨

から衣かへすがへすぞ恨めしき夢にも人の見えぬとおもへば

寄月戀

烏羽玉のやみのまぎれにくる人の心もしらでいづる月かな

雨の夜に月まつよりもあやなきはこぬ人くやと思ふなりけり

寄曉戀

心なく空にたなびく横雲もわかるゝ名こそかなしかりけれ

寄露戀

よもすがらおきゐるものは秋の野の笹葉の露と我となりけり

うつりゆく心の花におく露は只いつはりの涙なりけり

寄露別戀

朝露にぬれて別れしから衣かわかぬほども形見とやみむ

寄風戀

いかにせむ便りと頼みし風だにも思ふかたにはふかぬ頃かな

寄煙戀

やきすてむ煙の末やむすぼれむ苦しき戀に戀ひ死なむ身は

寄鳥戀

○くやと　來るかと。

○やきすてむ煙　死して火葬にする煙。

○ことの便りもしら雲に云々　事の便りも知らぬので白雲にとぶ鳥さへもなつかしい。白雲に知らぬをかけてゐる。

○よるふる物　夜々戀人の許へ通ふ時の、駒をやるのを駒は「路といへは夜踏むもの」と思ふであらう。

鐘の音は猶宵のまといひなさむいつはりがたき鳥の聲かな

遠ければことの便りもしら雲にとぶとりだにもなつかしきかな

寄獸戀

路といへばよるふむ物を思ふらむ妹がりのみに我がのれる駒

寄蟲戀

秋山の木の葉にすがるみの蟲のこもれる戀はしる人もなし

寄木戀

いはきにも妹脊の姿あるものを心なしとて戀ひざらめやは

寄艸戀

むさし野におふる紫ねは見ねど思ひそめたる色はかはらじ

寄山吹戀

山吹のはなは八重さく君をわがおもふ心はたゞひとへのみ

やまぶきは妹が垣根に見てしより我が宿なるもなつかしきかな

寄山戀

積りては山のたぐひと見ましやは塵ばかりなる思ひならねば

寄湊戀

難波なるみつの湊のみなと入りあな騷がしのこひの心や

寄原戀

秋風にあへず色づく淺ぢはら淺かりけりな絕えしわが中

かねてよりあさぢが原と思ひせば色變るとも恨みざらまし

寄關戀

あふ坂の關のしみづは思ふことといはまにたまる淚なりけり

きみと我おとはの山は高けれどいさまだ越えぬ逢坂のせき

寄橋戀

中しばし絕えても人にあふみなる瀨田の長橋こひわたるかな

寄弓戀

ものゝふの心をこめしあづさ弓はずにたがはむ疑ひなせそ

ひかばまづ我はよりなむ梓弓末の心は知りもしらずも

寄絲戀

たちかへるもすそに針はささねども思ふ心をつけてこそやれ

僞りにまことの絲はすけがたししたはむ方もあらじと思へば

寄琴戀

○思ふこといはま　岩間と言ふことをかけてゐる。

○はずにたがはむ　武士のかたき心もて思ふるのである、約束に違ふな心疑ふな。はずは弭で約束の意にかけてゐる。

○たちかへるもすそに針　古事記中卷に、三輪神、活玉依姫に通へるを裳に絲をつけし針をさしおかれて顯はれし說話がある。

人しれず心ばかりをひく琴はしのび〳〵のねにやたつらむ

寄鏡戀

おとろへし姿を見ゆるます鏡わが戀ふらくのほどはしるらむ

寄船戀

よの中の人の心をつり舟のなほあだ波の上にこそゆけ

○あだ波　動きて定まらぬ波を人の心の定まらぬにたとへていふ。

雜歌

曉

明けぬるかまだ夜ふかきか呉竹のふし見の澤の鴫のはねがき

事毎にさのみ老いぬと思はねどねざめがちにぞ夜はなりにける

峯上曙

うちしきる麓の里の鳥がねにあけこそわたれ峯のまつばら

曉雨ふる

時もりの鼓のひゞき打ちしめりあかつき深く降れるあめかな

曉鐘

曉のかねのひゞきは聞きながらさめぬは人の心なりけり

○住の江の松にかゝれる　松に白木綿かかゝつたと思うたは船の帆影であつたの意。

曉燈

きゆるかと思へばあかる燈火の影ばかりなる我が世なりけり

松

人のごと願ふ心のなくてこそ松は久しきかげをなしけれ

峯松

あしびきの山の高ねの高ければ雲まに見ゆる松のむらだち

浦松

よせかへる荒磯浪のいつのまに生ひはじめけむ松のむら立

住の江の松にかゝれる白木綿はおきゆく船の帆影なりけり

伊丹にゆきて環春亭にやどる庭の松いとよし

古の猪名のみなとの浪の音は千年のまつに殘りけるかな

古寺松

ふる寺の瓦のまつは松の葉のくちし所に根ざしそめけり

ものゝふのうぢの古寺かたぶきて鎧かけ松くちはてにけり

軒松

かゝるらむ月の影まで思はれてこのまゆかしき軒の松かな

岩松

うごきなき巖の上に生ひにけりさらでもまつは久しきものを

竹

ふし毎にくるひてたてる呉竹もよには直(なほ)くや見え渡るらむ

さやかなる風のしらべを先づ聞きて笛にと竹を思ひそめけむ

窓竹

あり明の月の光にわかたけの緑のいろはよるも見えけり

今年生ひのみ山鶯すだちきてまなびの窓の竹になくなり

わが宿のまどの呉竹末きりてつき見る秋になりにけるかな

月かげの窗にゑがけるくれ竹はかたぶく儘に靡くなりけり

今更に世をば千代とも思はねどしげる嬉しき窗のくれ竹

砌竹

世をすつる心になればうゑおきし砌の竹もかへり見ぬかな

山館竹

たふてこそおのが直(すぐ)なる世をば經めたとひ南の山にすむとも

暮村竹

○砌竹　みぎりの竹、軒下階下などのいしだゝみの處にある竹。

○苔の衣　出家姿をいふ。

入相の鐘もきこえぬ里なれど日はくれ竹に小鳥かへりぬ

植竹

人の許より竹をおくりたるをえ植ゑざりける夜

むら雀ねぐらとるまでなりにけり一本うゑし窗のくれたけ

移し來てうゑもまだせぬくれ竹にやがても月の宿りけるかな

竹不改色

心にもうつしてしがな吳竹のそめぬみどりは變る世もなし

いたくわづらひをりてやゝ常ざまになりて十月ばかり友人集ひて冬竹といふ題を出して祝の心をいひあへるに

木枯にあらそひかちて吳竹のよにかへるこそ嬉しかりけれ

苔

千早振しづのいはやのさがりごけ神代ながらの緣なるらむ

岩上苔

足引の山のいはほのなかりせば苔の衣をたれかとりきむ

幽徑苔

いりし時ふみしまゝなる道なれば苔の緣ぞあとなかりける

橋苔

深みどり石とも木ともわかぬまで苔生ひにけり前のつちはし

波洗石苔

昔もなく汐干のなぎさ遠ざかり岩ほの苔はいまだ乾かず

蓬生

故郷のおどろまじりの蓬生になにの道てふことかあるべき

庭上鶴

はつ春の心もひろき庭にきて八千代とかへす鶴の羽ごろも

鶴馴砌

友とこそ飼ひならしつれやどの鶴今は雲居をおもはざらなむ

島鶴

淡路しませとの汐さゐ荒き日にやすくも鶴のなき渡るかな

名所鶴

渚とほき和田のみさきの波の上に羽打ちふれて鶴なきわたる

海原のとほきをおのが齢にて沖津のはまにたづぞ鳴くなる

齋開鶴

（前一歌）春、堺の浦に（白鷺の）櫻鯛捕るを詠じたもの。

はる／＼と限りもしらぬ蘆はらに千年をへたる鶴のこゑする

鶴聲近枕

あしたづの翅にのると見し夢をなきつる聲に覺しつるかな

淵龜

青淵のそこの岩ほと見ゆるかな昔はさぞなさゞれいしかめ

河邊鳥

魚ならふ鷺のぬき足かひもなし川の瀬白く影の見ゆれば

魚

ふるとしの雪の白うを櫻だひ春のさかひの海にてぞひく

山

空たかく秀でたる山の峯にこそよの浮雲はまづかゝりけれ

よるみれば山邊も海の心地していさりにまがふまどのともし火

くれかゝる冬の日あしに追はれつゝ下るは早き山路なりけり

深山雨

雨ふればくもの中なるおく山の心ぼそさを誰にかたらむ

山中瀧水

〇時しもわかぬ花 瀧のしぶきをいふ。

おく山の瀧の下なる岩ほには時しもわかぬ花ぞさきける

瀧

昔よりよりもあはせぬ清水のたきの絲すぢたえずもあるかな

世の人の心々にむすぶらむ三筋に落つるきよみづの瀧

箕面のたきを見て

すきまなく降れどたまらぬ白雪は碎けて落つる水にぞ有りける

渡舟

あきの夜の月の桂のわたし舟ひかりのさすに任せてぞゆく

古渡舟

くちはてし長良の橋にかへしより舟もふりぬる渡りなりけり

岸頭待舟

ゆきかへるわたりの舟をまつほどにまつ人多く成りにけるかな

舟浮湖水

殊更によるは水海ひろければ舟のうちこそ心ほそけれ

池塘行客

打ちむれて池のつゝみをゆく人のかげ水底にうつりけるかな

○かるかやの關　筑前國筑紫郡。

野寺僧歸

山よりもわびしかりける野寺かな伴ひかへるしば人もなし

關

あふ坂の關もとゞめぬ淸水とて昔のかげも殘らざりけり

うちなびく風を姿の秋なればえこそとゞめねかるかやの關

夜過關

てる月の影もあかまが關なればよるともいはですぐる旅人

關跡行客

關の戸は今あけぬらしほの〴〵と菅の小笠の數ぞみえゆく

遠村烟

たちわたる霞のうちに霞めるは遠山里のけぶりなりけり

住吉のおまへにいでて見わたせば勝間のさとに烟たなびく

遠村鷄

明けわたる光は遲き山もとのさとにまづなくにはとりのこゑ

寶

九重のはこにをさめて藏すとも玉は玉とぞてり通るべき

船

世の中をうみわたりける舟のはてしほ木に拾ふ人だにもなし

燈

風鈴につけたる歌

人はねて我はねぬ夜のともし火の影は心のありげなるかな

遊女

定めなき風にまかする鐘の音は入相もなくあかつきもなし

老人

高樓のつきにうたふも川たけの沈み果てたるすくせなりけり

○川竹のすくせ　遊女の生涯をいふ。

忠臣待旦

つれなくも消えぬ命にならひけむ頭の雪のときぞともなき

君がためあかつきおきの白露のしたゞる程も遲しとやまつ

備前國岡山より歸り登りける後重義が許より「天の原なりはためきし雷は今もとどろにひゞきこそすれ」といひおこせしかへりごとに

ともすれば雲開あやまつ雷のいかなる跡をのこしおきけむ

うづまさなる聖德太子大内へ入らせ給ふを拜みて

九重の雲の通ひ路千代へたるみかけを誰か仰がざるべき

寄市確

けふゆきてあすかの市に求むとも昨日の事はかひなからまし

薄暮嵐

今日もまたくる人なくて暮れにけり松の嵐のおとばかりして

あるゆふべに

遲くとく皆我がやどに聞ゆなりところ〴〵の入相のかね

閑居

庭もせに茂らばしけれ八重葎もとよりわれはまつ人もなし

社頭遇友

ひとりきて二人かざしの二葉こそ君をみあれの驗なりけれ

社頭水

たかの川きよき流れにうつりきて御影の山の名こそしるけれ

幽思不窮

春くれば空にたちまふ絲遊のあるかなきかに物をこそ思へ

何となきうた

○社頭遇友の歌　今日みあれ（賀茂の葵祭）に一人來て二葉の葵をかざしにしたのは君を見るといふ神の御驗であつた。

○たかの川　糺河原にて鴨川と合する川。

○もろこしの虎ふす谷　虎溪三笑圖の故事に據る。

さらぬたに老の寐覺の寂しきにともなふ月の遲くもあるかな

さればこそなる事かたき世なりけれ絲瓜の花も咲きてのみちる

我のみや夜はねられぬと出でみれば空ゆく月もひとり澄みけり

隱士出山

もろこしの虎ふす谷の丸木橋いづるためとやかけ殘しけむ

寶田が許より歌ありしかへりごとに「初秋のわさ田の稻葉」とのたまへるにはみあたり思ひやられ侍りていとなつかしき物から汀の蘆さはりがちにてえもとむらひ奉らぬに市路より秋のあはれはと聞え給へるにはすみなし給ふらむみ心の奥さへおしはかりしられてしたはしくもゆかしくも侍るを御かへしまゐらすとにはあらで

大方はきみが門田に宿るらむされはぞ月の影のすくなき

歸りても耕す人はいかばかりゆたかなる世の秋をしるらむ

海路

目に見えぬ風を賴みに出でにけり浮きたるものは舟路なりけり

舟中見島

風たえて舟はゆくとも思はねど近づきぬらし沖つしま見ゆ

○あゆの風　東風。

望遠帆

海原のゆふゐる雲にはれる帆は朝びらきしていでし船かも

あしわけて出でける舟の程もなく帆かげかすかに成りにけるかな

海眺望

あゆの風いたくふくらし海ばらの沖つ小島をこゆる白なみ

海路眺望

和田の原けさこぎくれば磯の上に蜑少女らが貝ひろふ見ゆ

海邊眺望

時しあれば青海原も民くさのしげきところと成りにけるかな

舞子といへる所にて

はりまなる舞子の濱のはま風にかへすや袖とみゆる白なみ

海上眺望

浪の上に見ゆる小島は高ねにて千尋の底やふもとなるらむ

眺望

山の端の入日やまねき返すらむ尾花がすゑにかげぞ殘れる

湖眺望

すはの海氷ならせしあと見ればたちもうごかぬ浪路なりけり

漁舟火

横雲のたなびき明けし浪の上にのこるもさびしあまの漁火

ある所にて

はるかなる海のはてより夜はあけてほの見えそむるいそ際の舟

磯浪

わたつみの磯うつ浪を見てもおもへ砕けてこそは玉となるもの

晴後遠水

夕立ににごり出でたるはま川のひとすぢ見ゆる海の上かな

朝漁舟

篝火は煙ばかりになりにけりあけたるおきの海士の釣舟

暮漁舟

蜑小舟かゞりさすまでなりにけり道はかどらぬ磯陰にして

夕陽映島

人もなき離れ小島の松の葉につれなくのこる夕づく日かな

島山の松の景色をあかずとや夕日のかげもさし残るらむ

鹽屋煙

いかなれば雲にまがへてやく鹽の煙はすみの色にたつらむ

鹽がまの煙常たつ濱邊には松の下枝もすゝたれにけり

江雨鷺飛

なきすみの舟瀬の濱にやく鹽のこがれてのみも立つ煙かな

かきくらし雨のふる江にとぶ鷺はおのが蓑毛や頼みなるらむ

江蘆

神の代のまゝの入江に來て見れば豐葦原の外なかりけり

海邊波近

寄せかへる波の音にはなれしかど千鳥の聲にめをさますかな

よひ／＼にくさの枕は結ばねど旅の衣は露けかりけり

引き結ぶ草の枕はかはれども同じおもひにかゝる露かな

露ふかき野邊の刈萱かりしきて宿れるそでにやどる月かな

かへらむと思ふ心のつく時ぞふるさと人はこひしかりける

旅行

草枕旅にも行くかうつせみの命は今日も頼まれぬ世に

○なきすみの舟瀬　なきすみ、舟瀬、播磨にあり。萬葉六「なきすみの舟瀬ゆ見ゆる淡路島……」

○現にて思ひし云々　夢には家に歸る故、現にて思ひしことを云うこやらうとの意。

嚴島にまうでける時

海神の浪の白ゆふかけてけり神の鳥居にみつる朝しほ

大島の瀬戸のなるとの滿つ汐にみだれて浮ぶ海士(あま)のつり舟

旅行友

草枕むすび重ねし友なればつゆも隔つる心なきかな

旅行朝山

都をば夜深く立ちて出しなの鏡のやまも見ずて來にけり

かきくらし雲こそおほへ箱根山あけばこえむと思ひしものを

旅宿夢

はるかにも日數重ねし故郷を一夜通して夢に見るかな

現にて思ひしことやいひやらむ今宵も夢の家にこそゆけ

故郷もかりねやすらむ草枕結ぶ夜ごとに夢にみえけり

原上旅宿

雨ふらば宿やからまし小笠はら立ちかくるべき陰はなくとも

樹中望

古里のやまの姿の山みればたちかへりたる心地こそすれ

〇見るど見る　見る限り。

羇中山

見ると見る山の姿も變りはてふる里遠くなりにけるかな

羇中野

はてもなき野原にこよひねつるかないづれの雲か古里の空

羇中泊

浪花いでて武庫の泊の明方にこれより遠き舟路をぞ思ふ

年へて京にかへりくる道淀のあたりにて

はからずも返り都の愛宕山みねの松むら色もかはらず

岡崎なる家にかへりて

都へとかへれば心すむ水にかげこそ見ゆれ大比叡の山

羇中送日

家にありてすぐるだにこそ惜しまるれ旅の空にてたつ日數かな

月羇中友

家にありてなれしものとは月ひとり友とぞ賴む雲な隱しそ

冬旅行

ふる里を出でにし時の旅衣重ねもあへず冬はきにけり

冬旅宿

故郷へかへる夢路も絶えにけり旅ねの牀に雪のふれれば

伏見に下る路にて

ゆくまゝにみつの峯々顯はれてはれこそ渡れ秋の村雨

八月の末大原なる寂光院に詣でて

いにしへの汀のさくら紅葉して花のかげにもまさるけふかな

同じ時夜鹿のなきけるを里人かいらうとなき侍るといふを聞きて

かへらうとなくといふなり大原の山の奥には秋もはてぬに

宇治人味卜に誘はれて黄檗山の開山忌に詣で侍りしによろづ唐めいたるもてなしのいとめづらかに覺え侍りて

故里にけふな語らば唐にしき著て歸りたるこゝちこそせめ

馬島といふところにて

赤駒に白駒まじり遊びくる島の松原おもしろきかな

舞子の濱のあたり舟より見て

旅人のゆききみ見ればおりたちて我もと思ふ松のうちかな

松本通業が和蘭陀の醫の道を學ぶとて長崎にゆくを送る長うた

〇いにしへの汀のさくら　平家物語大原御幸に後白河院の御製「池水に汀の櫻ちりしきて波の花こそさかりなりけれ」

〇馬島　周防國の東南方にある。

やまとにも　唐にもあらぬ　くすり師の　道のおくかを　求むとて　むかふ所は　いにしへの　三つの島根の　外なれど　みとせの内と　契りおく　限りたがへず　かへりこよ君

弟なる僧の高野に住山するに

道をだにふみたがへずば高野山ふかき心もなどかへざらむ

阿元法師江戸に住みけるに文の奥にかきやる

岡崎の梅の盛りの春雨にぬれて別れしことは忘れず

安藝國なる完妙法師に贈る

言の葉の道より通ふこゝろをば隔つる人もあらじとぞ思ふ

備前國なる台宗寺東塢に學びて國に歸るついでに立ちよりたるに

言の葉の道の口なる君なればかへるまにく奥はひらけむ

嘉鎮が讃岐國なる高松にゆくに

たか松の陰にやどりて時鳥まつ初聲を君や聞くらむ

橘敬施がしはすばかり江戸にゆくに

年を越え箱根を越えてゆく人は明けてとのみも待たれけるかな

ある人の許へ

○いにしへの三つの島根の外　古の三つの島根は我が國支那天竺を指したのであらう、その國外の事即ち蘭學をいふ。

○東塢　鼓樹の號。

○明けてとのみ　箱をあけることと年のあけることをかける。

死出の山へだてしよりもかなしきは中々ことの通ふなりけり

心より心に通ふしきしまの道のたゞちぞ嬉しかりける

島杏平四年ばかり播磨の方にものして歸りこぬ間に老いたる母の止まりゐたりしを假初に己が家に宿しおきけるが八月ばかり歸りきて母をゐて行くに

珍らしく君かへるでの時をえてはゝその色も嬉しかりけり

名古屋にものして歸りくるついでに津島なる友人の許にたちよりたるに其の人また名古屋に出で行きぬれば三日ばかりたゆたひぬれどあはで爰を出で立つとて

君と我ゆきたがひたる道にこそかねてあはねの森は有りけれ

山家

寂しさは思ひの外になかりけり峯の松風たにのしたみづ

おろかにも山の奥にとまどふかな心からこそうき世なりけれ

風ふけば峯のしば栗はら／＼と軒端におつるしがらきの里

山家曉

里遠き山の奥こそさびしけれねざめに鐘も聞えざりけり

○かへるで　楓の異稱、歸るをかけける。

○はゝそ　柞の古名、母をかけける。

山家煙

山里はをりたく柴の多ければほどにすぎてもたつけぶりかな

山家嵐

やまざとは松の嵐のさむければ春たちぬれどとふ人もなし

いつとなくまつの嵐も聞きなれて我山人となりはてにけり

山家水

世の中のちりも浮ばぬ山水にすます心をたれかしるらむ

谷水をかなたこなたにせきわけてほりたる井なき山の奥かな

掬(むす)びてやむすぶ心になりつらむ清水によれる山のしたいほ

あしびきの山の井の水けふくみてすむ心にもなりにけるかな

あさからぬ契りなりけり石清水我がかげならぬ影し見えねば

うき世には流れいづとも石清水我がかげみつと人に語るな

　山にねたる夜明方に月の影のさしたるいづくよりともしらず

誰見よと影はさすらむ山里のかきねばかりのありあけの月

山家鳥

世の中をうといふ鳥も奥山のまつこそ終(つひ)のやどりなりけれ

○掬びてやむすぶ心　上の掬ぶは清水を汲む、下の結ぶは庵を構へる意。

山家古松

經にけりといふ人もなき山里の松の千代こそ長閑けかりけれ

山家苔

とはるべき人もおぼえぬ山陰にまつにも似たる苔の生ふらむ

山家門

山里は垣もかこひもなかりけりいりくる方を門とさだめて

山家橋

憂世には歸る心はなけれども我が山川に橋なくはあらず

山家路

道といへば猶をこがましふみ分けて通ふばかりの山のかげなり

山家夢

夢にだに世の有樣の見えばうしうたゝねさませ峯の松風

餘りにも山靜かなる曉はこの葉の音にゆめもさめけり

山家送年

世の中の數にもれたる山里はへにける年も忘られにけり

冰室山もるとはなしに年をへてかしらの雪ぞ消えずなりぬる

(一)冰室山もる　いつとはなしに年をといて冰室山に盛る雪の消えぬ樣に頭の白髮はたえない。

山村煙細

煙だにたつとはたてじ忍ぶ山ひとすみけりと人もこそ知れ

澗戸雲鎖

晴れやらぬ雲の雫やかゝるらむこけの細みちしるたにの山

田家

夕づく日かげろひやすき山里の稻葉の色の寒げなるかな

田家鳥

あらしふく田中の森の夕烏宿りかねても騷ぐ聲する

山眺望

朝な／＼むかふ峯々すゑ遠しわがすむ山はたれか見るらむ

野眺望

古の飛火（とぶひ）の煙かげ見えて春日の野邊にたつかすみかな

武藏野のはてなく見ゆる緣こそこゝにわがつむ若菜なりけれ

船中眺望

こぎいでて舟より見れば住み馴れし家のあたりもめづらしきかな

いほり

○古の飛火の云々　飛火は古ののろしの類、歌は春日野の霞を見て古の飛火の煙を聯想したのである。

○たゞ村竹田　二六六頁に註す。

我が庵は竹のまけいほ草のかべ木の葉のとばりこけのさむしろ

四つの季おなじくいへる長歌

春霞　棚曳きそめて　鶯の　初音の野べに　櫻花　さきちりゆけば　時鳥
きなく五月の　あやめ草　葛城山は　秋風の　まづたつ峯と　もみぢ葉も
しぐれ〳〵て　白妙の　雪とふりかはり　璞の　年の終りに　なり　に
けるかな

懐舊

言にいへば貝人まねに似たれどもまことと昔は戀しかりけり

安居汐待の天神は菅公筑紫に下らせ給ふ時この所よりみ船にめされたり
とか

かへりこぬ昔がみふねを松風のむなしき聲も神さびにけり

思往事

心のみ若き昔に殘しおきて老いゆく身こそつれなかりけれ

たゞの村竹田豊後國よりのぼり來てしば〳〵浪花に遊びける終に去年の春
此處にてみまかりたるに寄月懐舊といふ事を

浪花潟なにに心をとゞめけむ影こそのこれはるの夜の月

夏懐舊

あしびきの山時鳥はるかにもきけば昔の人ぞこひしき

佐川田喜六の遠忌秋懷舊　不二山人と號す

時知らぬ富士の煙もあき風のふくにつけてや靡きはてけむ

冬懷舊

定まれる人のうへこそ悲しけれしぐるゝ空は晴れ曇る世に

鴨川の浪は氷りて夜もすがら心ばかりぞ立ちかへりける

太融寺の開扉に融公の御影神儀御拜奉る

都にて煙たえにし君なれど浪花の浦にあとぞのこれる

往事渺茫

ふく風にたなびき消えし浮雲のあとなきものは昔なりけり

夢

定めなき世の有樣を見る夢は驚きてこそ驚かれけれ

あやなくも猶忍ばるゝ名殘かな夢なりけりと思ふものから

へだてなき昔の友をしるべにて都にゆめのかよひけるかな

見るほどは夢も夢とや思ひにし現もやがてさめはつる世に

おいぬれば見ゆる夢さへ衰へてありし昔にかへる夜ぞなき

○太融寺　大阪市北區にあり。源融の創建。

○源融　河原左大臣、古今集十六に貫之しのびて「君まさで煙たえにしほがまのうら寂しくも見えわたるかな」

無常

世の中をうつす鏡かてる月はみちかけしつゝ常に常なき

時のまに咲きてちりぬる花はみれど猶まことには驚かぬかな

やんごとなき人の若くてうせ給ふをいたみて

水の上にまだあらはれぬ若蘆のよはみじかくもすぎし君かな

書籍の中よりみまかりし富足が書きさりし反古の出でけるを見て彼の人の人となりを思ひ出でて

此のごろは磨きあぐべき白玉の碎けてひさになりにけるかな

伯父なりける人の身まかりて又の月その日にあたりて墓にまうでて

面影を思ひ浮べてむかへどもあらぬ姿の君がなごりや

程もなく其の日は今日にめぐり來て其の日に似ぬは今日にぞありける

何となくいひ出でたる中に

生死(いきしに)の海のとなかに碇おろし風をやまたむたゆたひにして

親にうまごに別れける人に

藤衣かさぬる袖に秋たたば涙も露もわかれざらまし

ある人の娘のみまかりけるに

○よの中をうつす鏡　月の盈虚常なきを世の無常にたとへたもの。

○若蘆のよ　蘆の節に世をかける

○藤衣　葛布にて仕立てた喪衣。

空にのみ聞きつるものを時鳥思へば君を泣くにぞありける

宇治人定安が子みまかりけるを程へて後聞きて文のついでに

あはでのみ過ぎにし事の嬉しきは悲しき事をいはぬなりけり

光博が母六十九にて師走の末にみまかりたるに

七そぢは彼の世にこえてうどん華の稀なる花の春にあふらむ

正月二十六日敬確がみまかりたるをはまの墓におくるさせる病もなかりしを去年の師走ばかりひとやに入りたる苦しみよりいたみ出でたるなりそもさばかりの罪はなかりけむ常に物しのびあへぬ心よりとかいと悲し

おのづからたたむ煙もあるものを我がこゝろからやくぞ悲しき

同じ四日には春名を南の野に送り今日また敬確を北の墓に送る幾程なく

友人を失ふ

今よりは野邊の霞もよそならず思ふ人々たちぬと思へば

うき草

浮草をうきたる物とおもひしにとゞまる物はなき世なりけり

常東寺惠岳三回　秋露

秋萩における露こそ悲しけれ玉の行方を見るこゝちして

○七そぢは云々「七十古來稀なり」をよみ入れた。

〔或時は同じ嵯峨野〕天龍寺は山城國葛野郡嵯峨村にある。

〔鷲のお山〕釋迦如來が法華經をときたる場所。

長谷川菜が妻幼き子を失ひて「いかにせむ秋の哀れもみに添へていとゞ悲しき法の燈」といふに

いづかたを西ともわかぬ緣子をひとりやりけむおやの心よ

地　獄

心より思ひむかへの小車におのれと乘るははかなからずや

誠拙大德の七回忌相國寺鹿園院にてつとめられける日

たきものの煙は立てじ梅が香に薫れる空のけがれもぞする

大年居士といふ人みまかりたるに居士十年ばかり昔天龍寺にて大會行はれける時詣であひて物語などせしちなみあればすゝめられて思往事といふことを

或時は同じ嵯峨野に宿りけりはかなき露の世にこそありけれ

歌好みて志深かりける人のとくみまかりたるに

早く逝く君とはしらで言の葉の道に進むと思ひけるかな

釋　迦

はるかにも鷲のお山を出でてきてさが野の露にありあけの月

藤田菜公の事にかゝりて籠りゐける間にうま子のみまかりたるとて歌あ

りしに

野に山に行くだに秋は悲しきに籠りてのみやもの思ふらむ

老後無常

おそくとく先だつよりもはかなきは老いて憂世に殘るなりけり

福島にありていたく煩ひける頃近き梅田の三昧におくりくる葬の鐘の聲いとしげくきこえける夕

獨りのみ越ゆと思ひし死出の山うちむれてゆく所なりけり

賴杏坪七回　蓮

臺（うてな）とは思ひけがさじ花蓮君によそへてよそながら見む

時にふれて

おろかにも猶さりともと思ふかなながらへ來つる心ならひに

彥坂菜が父の一めぐりに冬懷舊

在りし世もなき世も今を初時雨ふりぬる事と聞くぞ悲しき

東塢大人やよひの末みまかり給ふに

君により悲しき時となりにけり今より後の花の盛りは

いつの頃にかありけむ

○賴杏坪　春水の弟山陽の叔父天保五年歿年七十九。

○在りし世もなき世も　存生中の事も歿後の事も今初時雨を初めて聞くのであるが、それは過ぎ去つた事であるといふのが悲しい。降りぬると舊りぬるとをかけてある。

○東塢大人　香川景樹。

○月にかこたむ秋　悲しみを月故にかこつ秋。
○懷舊非一　懷舊一に非ず。
○地藏會　地藏菩薩を供養する法會。
○わたり河　三途の川。
○影供　えいく、神佛故人などの肖像に供物をさゝぐること。

人しれぬ心のうちの藤衣けふをかぎりと脱ぐ時もなし

大人百日　初秋月

花とのみちりし別れをおもふまに月にかこたむ秋は來にけり

又一回り丸山の寮にて　懷舊非一

思ひ出づることはおほ娘を鹽山をしと悲しといはぬ日ぞなき

長井宅振七月二十四日毎に地藏會をつとめけるが今年もつとめてやがてに幼き女子のみまかりたりけるに

わたり河負ひもいだきも渡すらむかねて賴みし君がみほとけ

はかなしやまつる其の日は御佛にやがて今とは願はざりけむ

久しくわづらひけるころ

死出の山ゆくも歸るもはかどらぬ老の果てこそ悲しかりけれ

西行上人影供　寄花懷舊

木末より風に吹かれて散る花のみをば輕くもなせし君かな

折々思ひつゞけたる

奧山のくち木に花はさきぬとも數ならぬみを誰かたづねむ

こゝにして我が世はをへむみよし野の芳野の奧の花のした陰

音にのみ聞きてややまむ松島のをじまの磯によするしら波

かけまくも綾に畏きすめろぎの大御國内に住むぞ嬉しき

限りなく惠みのつゆの深ければかゝるとだにもおもはざりけり

身にあまる惠みの露やしら玉とあやまたれけむ始めなるらむ

海山のかさなるのみか年月にとほざかりゆく都なりけり

世の中はねても起きてもありぬべし煙はのぼり水はながれて

ともかくも心一つに定めてむうしと思へばうき世なりけり

いつのまにかゝりけりともしら雲の山の姿も見えぬばかりに

折々はたちはなれてもかへり見よ我が住む山の峯の白雲

はるばると望めば遠き海原も渡れば到るものにぞありける

世の中を思ひ定めしあしたより雲と水とにゆく心かな

　閑居友

あまりにも同じ心の友なればさし向ひたる心地こそせね

　　はじめて歌みせたる人に

言の葉の道はかたこそなかりけれ人の心のゆくにまかせて

言の葉の道の餘りに近ければかへりて遠く人ぞ惑へる

○音にのみ聞きてや云々　松島遊覽の希望を歎ふ。

○世の中を思ひ定めし云々　世の無常を知りて深い望みの起るが如きことをいうたのであらう。

ある人太刀魚をよき程に調じて直にものすべうしなして贈れるに

たち魚のまづきれ味を心みてやきけむほどを思ひこそやれ

獨述懐

流れては又浮ぶ瀬と思ふまに沈みはてぬる身こそつらけれ

思ふ事人にいはるゝ世なりせば我のみ袖はしぼらざらまし

ひねもす曇りて夕さり降り出でたる日

雨になる夕の空のうき雲は我が身にかゝることちこそすれ

述懐

花も見つ月をもめでつ世の中にあるかひなしといふは誰が言

まことには松も千年はなかりけり己が願ひは今十年のみ

歸る道絶えと絶えぬる古里にゆめのゆききぞ猶のこりける

思ふことといはではいかで山川の水の心の底も知られむ

二月ばかり江戸堀なる所に移る此の家の作りざまいと異やうなり人にきけばある諸侯の舟屋形を給はりて其のまゝたてたりとぞ庭もよき石ども疊みて櫻の老樹款冬あり梅椿は今ぞさきたる松は異木より高し

やがて今さかむ梢も見ゆるかな嬉しき春のやどりなりけり

()思ふ事人にいはるゝ、言ふに言はれぬ悩みあればこそ袖を絞ることもあるの心。

○吹管　こゝは火吹竹をいふ。

○おふけなき物　過分の物、火吹竹の出た所がやんごとなき所なるより斯くいうた。

海ならぬ松には波の音つれて舟なる家は漕ぐとしもなし

新金鑄られたる心を人のもとめにて

春風のふきあらためし黄金花御世の光やさらにそふらむ

いたく煎茶好める花月庵が吹管の箱に書きつけける歌幷詞

時をえて同じ所により竹の節ならずして吹きあはせけむ

といふ心はいとも〳〵やんごとなきあたりにて物せさせ給へる吹管を又いともやんごとなきあたりに持ち参りて花月庵の主人が御茶奉りし折に御めのとゞまりけむめしあげて見給ひしかば其のこのかみの昔のせさせ給ふなりけりやがて末なる一ふしはそこに收めとり給ひしかばとり出させて合はせ見給ふに露違はぬ同じ竹にて末なるは落葉本なるは冬夜とかいつけさせ給へるに物せさせ給へる頃ほひさへ思ひやり給へられていと殊の外に興ぜさせ給へりとなむそはもと和樂翁といひける人己に與へむといひしを我が翁のしる所なり何ぞさるおふけなき物をとて乞ひてだに見ざりしを花月庵が聞きつけて譲りえたるなりけり己もたらましかばいかでさるはえ〴〵しき折にも出で合ひ侍らむかしこらぞ受けざりし

○猶　さるの一種。性多疑ご人聲をきけば豫め木に上り聲止めば又下りかくして上下決することがない。

伏見の堤にて花火を見る

かつ消えて石ともならぬ星くだし闇のうつゝの中空にして

浮瀬に書畫の集ひありと聞きて清水の邊まで來たるに其の事やみにければ空しく歸るとて

うかぶ瀬にけふは流れて水莖の跡だに見えずなりにけるかな

ある人鳩の形したる石を鳩化石となづけて持てるに歌乞ふ

仙人やはとの杖にてうちけらしなれる姿のひつじともなき

述懷非一

八千ぐさに思ふ心はかはれども一つにおつる我が涙かな

津島千入が家の歌の會始にまかりて

もろこしに通ふ津島の浦なれどあつまる玉は大和言の葉

猷

ものごとに疑ひふかき山猶(やまざる)のわがこゝろからやすらからぬ世や

春　釋　教

かの岸に春のいたれば山吹の花こそいろと咲きみちにけれ

その事となくいひ出でたる中に

我がよはひ傾く月のながらへてありとも今は山の端のそら

世の中の人の心は沼水の底きよからぬものにぞありける

うかれめ

今宵ぬる人は誰ともまだ知らで待つ心こそあはれなりけれ

詠硯

すゞり石命ながくもとゞまりて人のかたみとなるぞ悲しき

何となく思ひつゞけたる

朝ゆふに人はくれども思ふことといはるゝ友は少なかりけり

ある古學者に乞はれて長歌

くるま井の　筒井のうちに　落ち入りて　すめる蛙も　敷島の　やまと言葉の　數とのみ　なきつゝあるを　飛ぶ鳥の　雲に羽うちて　大空の　たかきを願ひ　海原の　廣きをきはめ　春の日は　花に聲たて　秋の夜は　月に嘯る　心もて　あはれいやしと　思ひ下さむ

我が師みまかり給ふ後景周より教への事ども尋ねられたるついでに

敷島の言のは山のほとゝぎす異なる聲もあらばこそあらめ

折にふれて

○ある古學者に乞はれて　當時、盛んなる抱負をもつてゐた古學者に對する歌人の心もちが見られる

○うつたへに　ひたすらに。

○子の日　古正月子の日に野に出で小松を採りて千代を祝ふ。

我が心我が心ともおもはれずおもひの外のおもひせられて

明かしかね暮しかねたる老が世を心にとへばあかずとぞ思ふ

來れば厭ひ來ねば人こそ戀しけれ何れかおのが心なるらむ

限りなく嬉しきものはうつたへにねられぬ夜半の明くるなりけり

祝

白波にたゝふま砂は濱松のちとせの數をよするなりけり

君が世の數もよせくるわたつみの濱の眞砂は山とこそなれ

かくばかり長閑なるよの春にあひて匂ふかひある山櫻かな

憂き事に堪へぬ身をこそ捨てはてめ君を八千代と祈らざらめや

春祝

春の日を遊びくらして思ふにも長閑なる世ぞ樂しかりける

心ありてひける子の日の松なれば千代の根ざしぞ深く見えける

正月の末妻迎へたる人のもとに

子の日をばすぎて曳きける松にこそ餘れる千代の色は見えけれ

ある人七十の賀の屏風早苗うゑわたし五月雨ふる所

餘りあらむ年のしるしと小山田のあぜこすばかり梅雨ぞ降る

秋祝

松がねにたてる薄はよろづよの影にと君を招くなりけり

こへば降り願へばふきて雨風も民の心にまかす秋かな

冬祝

君が代は民のけぶりのしげければ冬籠りこそたのしかりけれ

雲のうちに冬ごもりせる民草もふしてや君が世を祈るらむ

ある人の賀　松有歡聲

君がへむ千年をまつの聲なればよそにきくさへ長閑けかりけり

大社つくり改められたる時人のもとめにて

八十むすび結びたれけむたく繩のためしを引きて今も造れり

天滿祭のさまを詠める長うた

國毎に　國つ社あり　里ごとに　里祭あれど　津の國の　なには壯士が　あらがねの　土もくぼめと　ふみとよみ　車ひきかへば　玉ぼこの　道ゆき人は　行きかねて　たちたゞよひぬ　大川に　集へる舟は　うけすゑむ　水さへなくて　たきあぐる　篝のかげに　大空の　雲もこがれぬ　抑は　いかなる神ぞ　かしこきや　我が菅原の　菅の根の　一本たちて　なる道の　なり

○八十むすび云々　上三句、大社造營の古式に則れるをいふ。

の極みと　天の下　まをし給ひて　天の原　滿ちたる光　千代までに　かゞへかゞやく　仰がざらめや

弘化二年三月八日より五月八日に至り法隆寺聖徳太子の尊像異寶等天王寺にて開扉長歌

分地利の　花も咲くといふ　池の邊の　其の大宮に　天の下　知召しけむ　天皇の　命の皇子は　補陀落の　遠き國より　あれまして　鶴の林の　くしみ玉　手握り持ちて　東に　向ひたまひし　言擧の　御名遠じろく　末の世に　榮え廣ごり　足引の　山は奥まで　鯨とる　海は果てまで　み佛の　教へ畏み　仕へきて　尊きみ寺　國もせに　あまたる中に　斑鳩の　大宮ばしら　昔より　立ちもかはらず　かぐ土の　神もうづなひ　天地と　み法隆えて　蘇迷盧の　山の高ねの　明けぬまの　光にせよと　みてづから　殘し給へる　大み影　在すが如く　まし／＼て　難波み寺は　寺といふ　寺の始めに　王の　創め給ひし　所とて　行啓たたせし　例あれば　今年彌生の　春がすみ　立田をこえて　卯の花の　咲き散るみつゝ　郭公　聞かむ時まで　諸人に　拜まれますと　行啓の　鸚鵡の車　御翳かさし　み縄ひきはへ　仕奉へくる　七の寶は　七からの　星のみはかせ　梓弓　六日のかぶら　押し

○分地利の花　地は他の誤りで、ふんだりの花、即ち芬陀利華、和名白蓮華であらう。
○天皇　用明天皇。
○補陀落の國　印度の南海岸にあり、觀音薩埵の住せるところ。
○鶴の林　釋迦涅槃に入りたる娑羅雙樹林。
○斑鳩の大宮　聖徳太子の興されし宮。
○蘇迷盧の山　須彌山に同じ。
○難波み寺　天王寺をいふ。

給ふ　御手の表題　ふみ給ふ　御足の印(しるし)　あざやかに　これに加はる　幾許(そこばく)の　金の御像　金幡　玉や鏡や　數ふれば　暇もあらず　しかはあれど　本つみ寺に　藏まれる　百が一と　きく時は　思ひもたえて　はかりやる　心もしらず　南無とのみ　口に唱へて　喜びの　涙かけまく　かしこくも　廣きみ法の　場(には)もせに　競ひつどひて　伊駒山　朝日さすより　淡路島　くれゆく限り　額づけば　時を時とて　商人は　み門〳〵に　市をなし　俳優人(わざをぎ)は　今の伎　猶いにしへの　高麗百濟　同じ袂に　かへしつゝ　たつゝしまへば　松前の　濱のひろめも　花とさき　翅とかけり　書きやりし　紙のそそけも　筑紫潟　唐舟と　浮けすゑて　己が世渡る　かたへにも　功德なつみて　み佛の　道をなすとし　きくからに　鉦も鼓も　絲竹も　妙なるこゑに　響き合ひ　賑ふ空に　とぶ鳥の　とゞめもあへず　四十日五十日　今は限りし　近ければ　思ひあらます　荒陵の　松の村立　むれたちて　まつとはすとも　年をへむ　又のみゆきは　若竹の　若き人こそ　頼む世も　猶有明の　山のはに　傾く齢　いかでかは　みかけ拜まむ　人のごと　いへば畏し　卯の花よ　雪とふりつみ　郭公　なきてとゞめよ　君がみ輿を

また更に難波ゐ中となりはてむ君がみ輿を還しまつらば

○ひろめ　昆布。
○紙のそゝけ　紙のみだれたもの反古。
○難波ゐ中　萬葉集三に「昔こそ難波田舍といはれけめ今は京と都びにけり」

○玉川の水　玉川高野にあり。

〔榊葉とりぐ〵に　榊葉を取りて　さいい〳〵にさかけている。

ある人の賀　松契遐年

限りなき千年はかねてしめつとも野べの小松をためしにはひけ

高野なる人の八十賀　寄菊祝

菊の花おいずしなずの影みえてくすりとなりぬ玉川の水

かむろの人八十八賀　寄松祝　家に老松ありとぞ

君により宿に年ふる松風の音さへとほくきこえきにけり

寄花祝

春くれば野にも山にも君が代の盛りを見せて花ぞさきける

花も皆君を嬉しき色に出でて山の奥までさく世なりけり

寄榊神祇

あしびきの山の榊葉とりぐ〵に里かぐらする月はきにけり

寄日祝

いづる日のいでずなりなむ時にこそ我が天皇(すめらぎ)のみよは盡きせめ

寄月祝

雲も皆をさまれる夜の月を見て君が光を空にしるかな

寄弓祝

我が國の弓末(ゆずゑ)は長しこれぞこの遠く治まるしるしなるべし

いにしへの梓のま弓ひかずして治まる世こそ樂しかりけれ

寄山祝　江州人の賀

君は世に長らの山に家居せよ千代にあふみの海もみゆべく

同じ題を福山人の七十賀に　蔀山の社かしこにあり

吹く風に君をあてじと蔀山おろしこめても千代守るらむ

寄都祝

神代よりうつし〳〵て定めけむ今の都は萬代のみや

寄名所祝　江州人の賀

もゝとせの泊りさだめよさゞ波のあふみのうみは湊八十あり

寄民祝

さゞれ石のならむ巖はものならず撫でて久しき民と知らずや

寄旅祝

よひ〳〵に露もかゝらぬ旅ねして草の枕の昔をぞおもふ

爲君祈世

君が代いゆたけき見れば千早振神のねがひも變らざりけり

師の病いえけるをよろこびて

いのること久しと聞きし言の葉の驗を君にみるぞうれしき

伊勢人八十賀

千はやぶる伊勢の宮川とし波の重なる數は神ぞ數へむ

赤穂正旭が賀　鶴

千年へて君がのるべき鳶たづの聲はるかにも聞えけるかな

神原某が有卦に入りたる祝

ひく綱のうけに入りたる君なれば世にしづむべき疑ひもなし

小川相達が父六十賀　梅

千代までと年をふる木の梅の花色もにほひも變らざりけり

大人六十賀　松有佳色

君がすむ宿の老松枝たれて手にとるばかり見ゆる千代かな

しきしまのうたの松原君故に千年ふりにし色の見ゆらむ

社頭榊

千代へたる杉におひたる榊葉は神やどり木のしるしなりけり

榊

○有卦に入る　陰陽家にて人の生年を干支に配して定めたる幸運の年まはりにあたること。

神代にか引き殘しけむかぐ山の峯のまさかき茂り合ひにけり

佐々木惟有父が六十の賀せむとてむ月の二十日餘り備後國田島といふ所に下るに

たらちねの千代を數へに行く人はいかに長閑けき旅路ならまし

ことしより田島の松のたしかにもみゆるは君が千年なりけり

友なる光傳杉本といふ家につかへてまめやかなりけるが今年の春家所あたへられて別に住ましめたりといふ喜びいひ遣はすとて

ふる雪をしのぎ〳〵てうめの花おのが春べと成りにけるかな

水石經幾年

千代へたる瀧の岩ほに動きなきみなさへしるきみ佛の影

鴻池蘆汀が中の島にありて七十賀するに

島々の中のしまにて百年のおいかくるてふかさぬひのしま

綠竹年久　大人七十賀

かねてより君が齡のこもらずばいかでか竹も千尋なるべき

鷹を好める人家をたかのやと名づけてあるに祝の心を乞ふに

松にさく花をもかけてはし鷹のとがへる宿ぞ久しかりける

〇鷹のとがへる　とがへるは鷹の羽の鳥屋にてぬけかはることゝ、松の花を十返りの花ともいふより兩方にかけた。

○我が師肥後守　浚樹享和二年從六位下長門介、天保十二年從五位下肥後守、同十四年卒年七十六。

○秋より外の名　小倉に小闇の意をこめていつた。

我が師肥後守まだ長門介なりける頃俄に宣下ありて位あげ給へりけるよろこび申しつかはすとて文のおくに

言の葉の道よりのぼる位山世にも稀なるあとや殘らむ

出羽人荒賀某が母の七十の賀

その昔きみがはぐろの山松は千代に色こそかはらざりけれ

三寶院准后の宮御なゝそぢの御賀　花契多春

いかばかりのどけかるらむと思ふかな花のところの萬代の春

宇津山

うつの山うつゝか夢か春の夜の月はかすみて花は散りつゝ

小倉山

久方の月おしてれり小倉山秋より外の名にこそありけれ

有乳山

ふる雪の埋むが上を埋みけりあらちの山の峯の白雲

小汐山

をしほ山松風寒しはつ雪のふらむ日近くなりにけらしな

還山

○しをりする　山に分け入る路にて木の枝を折りかけ置きて又の導とすることぞ。

春されば花のさかりに秋されば紅葉のときに鴈かへるやま

箱根山

みだれたる世をば治めて箱根山さし固めたる關の釘貫

後瀬山

今更にしをりするこそはかなけれ我がのちせ山たれか尋ねむ

大江山

老の坂のぼるにつけて思ふことおほ江の山となるぞ苦しき

葛城山

都より見し面かげはかはれども同じくも非のかづらきの山

磯間浦

神島やいそまの浦になく千鳥いたくな鳴きそ我も妻なし

明石浦

久方の月夜になれば明石がた蜑のたく火のかげぞすくなき

鹽竈浦

見渡せば春の霞の立ちこめてやくともしらぬ汐がまの浦

須磨浦

○櫻麻の　サクラアサの又はサクラノヲの、生の枕詞。
○あびき　網引。

○大井川　山城にある。

はりまぢの須磨の上野の初尾花浪かとのみや人のみるらむ

生浦

いせの海あさなぎしたり櫻麻の生の浦人あびき早せよ

飛鳥川

あすか川あすの命はしらねどもまづけふまでは流れきにけり

いにしへを思へば遠し飛鳥川いくたびかはる淵瀬なるらむ

鈴鹿川

鈴鹿川流れて末の世にはあれど濁らぬ水の音のさやけさ

大井川

花も皆流れ〳〵て大井川となせの瀧に夏はきにけり

長柄橋

津の國の長柄の橋も朽ちにけりなにを昔にかけて忍ばむ

備後國八幡山八勝のうち　鷹羽山晴嵐

むら消えの雪のしらふの鷹羽山けさうらゝかに春やたつらむ

龍王峯紅霞

わたつみの龍のはたてにもゆる火のかげも匂へる朝霞かな

鋒峯秋月

ほこの嶺雲のやきばもなかりけりとぎすましたる月の光に

障子嶽雪

ふる雪に障子が嶽は埋もれてまだ晝もかかぬ心地こそすれ

鼓岡

三芳野の妹背の山はしらねどもならびの岡もむつまじきかな

松島

我をとはきかぬものから松島のゆきて見まくのほしくもあるかな

住吉

住の江の長尾のさきの松風に遠き神代の聲傳ふなり

藤森

春だにも咲くとは見えぬ藤の森空しき名たつ松にかくらむ

益田池

なく涙おちてたまりて大和なる思ひ益田の池となりにき

我が師古今集の序講ぜられける時

開くるを待ちて我がゆく敷島の道にはさはる物なかりけり

〔開くるを待ちて〕師のよく導かるゝをいふ。

風

ふく風は春はやなぎの絲をより秋はもみぢの錦をぞたつ

大路にすてたる子

捨てられにけりとも知らず緑子のゑめる樣こそあはれなりけれ

佐々木菉其のあたりに捨てたる子ありしがゑめるさまこそといへる歌に

逢はずと語るに

やがて今春のむつきもあるものを此の霜月のしもにすてつや

琴

唐人のをすげぬ琴の異ざまにあらましよりは搔きならしてむ

琵琶

四つの緒はみつのいつゝにひきかけて滿ちたる月の影に調べむ

鏡

すがたのみ鏡の上に恥づるかな思ふ心のかげし見えねば

猪つなげる處

心のみみ山の奥に走れども世に繫がるゝ身をいかにせむ

青き扇に鯉ひとつをり

〇春のむつき　睦月と襁褓とをかけた。

〇唐人のをすげぬ琴　陶淵明が絃のない琴をひいた故事。

水無月のてる日もしらぬ青淵の底いかばかり涼しかるらむ

俱胝舉指

其の事とさして敎ふることもなし只これ〳〵をみよとなりけり

靈照女

玉鉾の道の上にてなすことは拾ふもおくも跡ぞ殘れる

墨著の櫻

墨染のくらまの山のうづ櫻おぼつかなくも匂ふ頃かな

砧うつ

かの里はほど遠からじ唐衣うつとは見れど音の聞えぬ

大原女川渡る

朝な〳〵たかのの川の水鏡見てこそいづれ花の都に

みづの上に龜二つ

萬代のかずは浮びて見ゆれどもそこの限りぞ知られざりける

老人若水くむ

あら玉の年の若水くみ〳〵て我が影いたく老いにけるかな

西王母

〔俱胝舉指　禪學の公案。天龍和尚一指を竪てて俱胝和尚を大悟せしめた、これより俱胝凡そ學者の參問するあれば唯一指を擧げて別の提唱をしなかつたといふ。

〔靈照女　宋の龐居士の女、竹大人を製して賣り父に仕ふ。籬賣り婦であらうといふ意味で俳人屢々詠ず。此の歌の意は龐居士傳に見える靈照女と丹霞禪師の問答をさすのだらう、「一日丹霞訪ニ居士一見ニ女子ニ取ニ菜。霞問ニ居士在否。女子放ニ下籃子一叉レ手而立。又問ニ居士在否。女子便提ニ籃子一去。時居士[illegible]常製ニ竹[illegible]籬一鬻レ之以供ニ朝夕一云々。」（佛祖歷代通載卷二十龐居士傳）

○西王母　仙女の名、又桃の名。列仙傳に「漢武帝の時西王母天より降り、武帝に蟠桃七箇を進む帝その核を留めんとす、母曰く此の桃は世にある桃に非ず三千年に一たび實るのみと。」

三千年になれるこのみを世の中の人はもゝとや思ひなすらむ

富永保が朱印の譜の上にかいつく印は唐土にも爰にも古く聞ゆれど官のは更なり私の印といへども只券證の分明ならむが爲なりけむかしこの宋といへる頃よりや詩文圖畫の上にも物し馴れて大小の定めもなくさまざまの形風流を盡して彩の一つのぐのやうに成りけらし

もろこしの吉野の山の花押手おしうつる世のしるしなりけり

壽老人

はるばると南をさしてとぶ鳥の歸らむ時や年はしられむ

扇の畫杜若

手にならす扇の上のかきつばたいづれか先に開きそめけむ

小まつ

限りなきちよにあふぎの小松原遠き野べまでなにもとむらむ

法師さみひく

青柳の目にみぬ春のおもひやりて絲の調べものどけかりけり

雪ふり家あり道見ゆ

まつ人のありとは見えて雪の中に道一筋ぞはらひはてたる

あうむ白きこと雪の如し

世の中にあうむは心なかりけりゆきかととへば雪とこたへて

足長蛸あまた

足引の山にはあらで渡つみのそこはかとなくむれてきにけり

あばらやの上に月たかし

見る人もなき古里の月かげは己がまゝにやよを渡るらむ

みこ

ねがふ事なるは疑ひなかりけり手にとる鈴もかみのまに／＼

あふみ蕪

大根には白きたゝむきたゝへたり妹が乳房を今や思はむ

不破の關の古瓦の圖に

年ふれどとゞまる物はとゞまりて猶關の戸の形見なりけり

小松根ながら二本

ひきすてし野べの小松は限りなき數に餘れる千年なりけり

鹿ひとりふしたり

一聲もなかでふしたるさを鹿は必ずくべき妻やまつらむ

○白きたゝむき　白き腕。

思ふ事色には出でて見えながらなびくともなきをみなへしかな

返魂香

たちかへる其の面かげのなかりせば空だき物となりや果てまし

風ふきたる薄のもとに狸をり

ふく風にくさの袂はかへれどもうたぬ鼓はこゑもきこえず

糺のせうぎに涼みしたるかた杯もたるをの子さしかゝりて酒待つ

あたゝめていざや其の酒あまりにも涼しくなりぬ鴨の河かぜ

菊かきたる扇に

仙人(やまびと)の千代ながらこそうつしけめ移ろふべくも見えぬ菊かな

風ふく野に鹿そむきてたてり

霜さそふ夜風を寒み高まとの野にたつ鹿もそむきてぞなく

賀茂の祭神人勅使に奏奉る

ちはやぶる神より君にあふひ草かけたる心千代もかはらじ

のり弓の的

うごきなき南の山の松の葉の千代の數こそはづれざりけれ

○高まとの野　大和國添上郡にある。

深山瀧あり雲ふかし

入りたたむ道もしられぬ奥山の雲のしづくやおつる瀧なみ

達磨の持ちたる鏡に女うつれり

梓弓こゝのかへりの春を經てひらけし花のおもかげぞこれ

野田冬嶺云おのれが親しく語らふ髮結のをの子明暮もちあるく櫛箱を畫がかせていやしき業なりといへども是れ天賦なり一筋に守りて他にはする心なからむとす其の意の贊の詞需めてよさらば壁にかけ置きて忘れざらむといふ

いだきもておかぬ心の光よりあらはれぬべき玉くしけかな

白藏主

やがて今もとの毛衣あらはれむ人目くらます墨ぞめのそで

水に月のうつりたるところ

水底にかげはさながらあり明の月の空こそしられざりけれ

ゆづる葉一枚

武夫のあづさの弓のゆづる葉はさながら春の印なりけり

末廣狂言の歌

○白藏主　能狂言「こんくわい」に出て來る狐、伯父に化けて獵師を說得せんとする趣向。

○武夫のあづさの弓の　ゆづる葉の序詞。

○時鳥の歌　畫にかける時鳥を歌うたもの。

○青砥左衛門　青砥藤綱滑川に落したる錢を拾はしむる畫。

みさむらひみ笠と歌ふ聲すなり宮城野ならぬ春日野にして

葵祭出町の橋渡る

ちはやぶる其の神山の時鳥けふは葵をかけつとや鳴く

雪ふりたる蘆にさゝぎをり

飛びかへりとまれど輕きみそさゝぎ蘆の葉末の雪もこぼれず

時鳥

聲はしてすがたは見えぬ時鳥すがたはみえて聲ぞきこえぬ

菊のもとに鷄

故里の鷄の牀にさきながらいやめづらしき白菊の花

按摩のまひのかた

わたつみの浪わけ衣をりかへしたちまふ袖に春風ぞ吹く

梅かける障子

鶯はつねにもこゝに來鳴かなむ野山の花は散りもこそすれ

青砥左衛門

なめり川ふかき心をたづぬればやがて我が身の寶なりけり

大原女

もみぢ葉をつま木にさして大原のあきを都の市にこそうれ

漁樵問答の圖

わたつみの底の思ひも深けれど山の心ぞ奥はしられぬ

花見たる男女醉ひたはれて櫻の枝かたげたる處

世の中の人の心の花ざかり山の櫻やいかゞ見るらむ

女すのこに立ちて外のかた見やりたる所

おりたちてまつ人もなき宿なれど日は夕陰になりにけるかな

・とくさより月の出でむとするところ

久方の月のうさぎも宿りけりそのはら山のとくさがくれに

鬼の念佛

佛とも鬼とも見えば見えななむ心は地獄極樂もなし

雪の中に茶の花さけり小鳥をり

玉のちり綠の塵にまじはりてちりやちりともなく小鳥かな

菊一本たてり

大澤の池の底なる種とりて此のひともともたれか植ゑけむ

立雛

○とくさ　木賊。

○釋奠　孔子及びその門人を祭る儀式。

○蟷螂　にはび。

巣ごもりのつるの雛の今年よりいく代かさねむおのが羽衣

同じかた三月と九月と物すべういひてよといふに

君が爲まづいづれより汲みそめむ菊のしたゞり桃の下露

若菜あり

雪ふかき野べにはゆかで市人のあしにかへたる若菜なりけり

釋奠

あふぐぞよ遠き昔の唐衣こゝのかさねの上にかへして

菊

あしびきの山路の菊は一重にて千代の外なる色なかりけり

里神樂

里神樂燎のけぶりたきあげよ雪げの雲のすゝたるゝまで

瓜に蟷螂をり

斂鎌もてむかふを見れば小車の輪に切りてとや思ふならむ

山里雪ふかし

雪降りて年のくれぬる山里は春より外にまつ人もなし

大菊きせわたしたる

○角の上に爭ふ　蝸牛角上の爭。莊子に出づ。世人の小事を爭ふことを諷していふ。

○みさへ上なくなる　神となれるをさす。

あまり世にひらけ〱て菊の花山路のあきも忘れはてけむ

蟲あまた行列をなして或は乘物にのり或は轡蟲にまたがり槍長刀のさまに草の花や穗やさゝげてゆく

角の上に爭ふ國も治まりて草のかげまでのどかなる世や

武夫の都なしける武藏野はすだく蟲さへかくこそありけれ

石見國なる社に傳へたりといふ柿本の像に

石川の貝にまじりししらたまは世々に拾ひて光をぞ見る

普く世に傳へたる姿なる

言の葉を天つ空までまつりあげてみさへ上なくなりし君かな

後のかたに遠き帆波など見えたる

言の葉の道をまもりの神さびて明石の浦もいく世へぬらむ

五月雨ふり田かへすところ

荒小田をかへしもあへずふる雨にまかせぬ水は先づ滿ちにけり

こなたの磯に松たてり淡路島時雨かゝれり

よの常のときはもあるを村時雨神すみ吉のまつをしらずや

牡丹

これやこの花のとみ草百重にもさきかさぬらむ花のとみ草

衣きたる猿

わびぬれば山にと人は思ふ世にいでてまじらふ何の心ぞ

土筆二本立てるもとに龜一つ

石龜をすゞりとなして相そへる筆のよはひも久しからまし

七社の神輿湖水に浮ぶ

我がやまはのりおくれじの心よりとくを爭ふ舟のともづな

端午の祝太刀の畫

太刀よ太刀これは五月の橘のとこ世といはふしるしなりけり

圓相のうちに竹

こと更に植ゑたるならぬ吳竹も見ゆれば窗の物にぞありける

浦のしほ貝 終

○世にいでてまじらふ　出でて交らふに、ましら(猿)をかけていふ。

○七社　山王七社。

○橘のとこ世　太刀からたちばなと言ひつゞけた。橘は常世の國より田道間守の持ち來つたものであることは垂仁天皇記にある。

亮々遺稿

木下幸文

○亮々　サヤ〳〵と讀む。

○有功　千種有功、チグサアリコト、歌人。一條良忠について歌を修め、後景樹などと交はり堂上風に新しさを加ふ。官は近衛權中將に進む、嘉永七年歿享年五十八。

亮々遺稿序

木下幸文が家集に、淺野讓が序文をとこへれど、口ごろ病めるからに、つばらに物して筆とるにたへず、さはれ端書にかふる一言をだにとくりかへし見るに、歌のさま萬葉集の直なるをもととし、いまの詞をもて思ふまゝにいひ出でたるが、世にこびぬ本性のほどもみえて、いさぎよくめでたうなむ、はたわがむげに若かりしときの口號（くちずさみ）をも加へたるに、ふとむねつぶれしかども、またさるべき契りにこそと、いとゞ昔のなつかしうおぼえければ

正三位有功

はなぞのにあそびし蝶の夢ならで昔は書のうへにこそ見れ

亮々遺稿

木下幸文

春之部

年内立春

年の内に春立ちにけり今年こそふたゝびきかめ鶯の聲

立春

冬がれの柳ゆるがしふく風のけさは春にもなりにけるかな

元日のあした鶯を聞きて

朝牀もいまだいでねばうぐひすは庭の梢に初聲ぞなく

けさの朝けまづ鶯のこゑ聞きつ今年の年はたのしかるべし

かめにさせる梅を

梅が香のあさ戸もりてや匂ひけむまぢかく來たる鶯のこゑ

垂雲軒のもとに春のほぎごとにかへていひやりける

○年の内に　古今集劈頭にも「年の内に春は來にけり……」

○けさの朝け　けさ朝開けに。

うらやまし梅の匂ひにつゝまれてうぐひすきかむ岡崎の里

早春鶯

山ずみの宿には春もしらじとやけさうぐひすの驚かすらむ

海邊早春

すみの江のあらゝ松原ふく風も長閑になりぬ春やたつらむ

浦早春

水しまの沖こそけさは霞むなれ春やもたひの浦に入るらむ

氷解

山かげの氷やけさはとけぬらむ久しくきかぬみづの音する

子日

世の人に子の日はいつと問ひ置きて小松ひきには出でむとぞ思ふ

奥山の岩根の松は我なれや子の日になれどひかれざるらむ

野子日

殊更に松引きうゑむ宿もなしいざ野邊ながら子の日をばせむ

曉霞

しのゝめの霞のうへに大比叡の山の高根はあらはれにけり

○すみの江　攝津國にあり。すみよしともいふ。

○子日　正月子の日野邊に出て小松をとりて千代を祝ふ遊び。

○聲にざりける　聲にぞありける

○籠の内かと　恰も籠の内にあるかの様に同じ所で啼いてゐる。

○朝附日　あさづく日、朝さしのぼる日影。

うち渡す浪路の末のいよの山いよ〳〵遠くかすむはるかな

都　霞

昨日まで山の端にのみ見し霞都をかけてたなびきにけり

鶯

朝毎に鳴くとはすれど鶯の聲のさかりはけふにぞありける

鶯はけふも庭には來たれどもまだ聲たてず春淺みかも

山ずみの心を春になすものは鳴くうぐひすの聲にざりける

うぐひすは所さらずぞ聞えける籠の内かともおもふばかりに

雪中鶯

沫雪はふりかゝれども鶯の聲のはなこそかくれざりけれ

雨中鶯

鶯はたゞこゝになけ又行きて宿る梢も同じしづくを

松　鶯

朝附日にほへる松の木の間より思ひもかけぬうぐひすの聲

曉　鶯

うぐひすの聲に起き出でて見つるかな梅の木の間の有明のつき

朝鶯

待ちてのみ聞きつるものを鶯にけふはわれこそおこされにけれ

山家鶯

山里の梅の花見に人はこでけふも日ぐらし鶯ぞ鳴く

人とはぬわが山里はうくひすのきなく心ものどけかるらむ

鶯のなくあしたこそ山里に人のこひしきはじめなりけれ

閑居鶯

鶯の聲のみまれに音づれて春の日ながしみやまべのさと

里鶯

せりつむと出でてきたれば鶯のはつ音きこゆるしらかはの里

鶯馴

ながために植ゑし竹とや思ふらむ園をはなれぬうぐひすの聲

鶯聲誘引來花下

鶯のこゑにひかれて行く道は花のかげにもなりにけるかな

鶯呼客

鶯の聲なかりせば山里の春にはいかにと誰かとはまし

○しらかはの里　京都郊外白河。

○鶯聲誘引來花下　鶯の聲にいざなはれて花の下に來る。

隔水聞鶯

舟もがな渡りてきかむ遠方のくぬぎが原のうぐひすのこゑ

殘鶯

粟田山木の間の花も殘らぬに猶きこえけるうぐひすの聲

梧月亭にて鶯を聞きて

春ごとにあまたへしかど鶯の今年ばかりのこゑはなかりき

鶯はわぎへのものになし果ててしばしなかねば怪しとぞ思ふ

青柳はとく絲かけようぐひすの外移りせばつなぎとむべく

起きよとはなかぬものから鶯の聲にはさめぬ夢なかりけり

我が宿は鶯なきておもしろしいざこむ人はあさのまにこよ

遠くなき近くなけどもうぐひすの猶我が宿ははなれざりけり

この頃は鶯の日まぜに鳴きければ

なれぬればあかれやすると鶯の一日かれては一日なくらむ

朝牀に鶯を聞きて

鶯のきてなく聲におこされし朝いの夢はをしけくもなし

若菜

〇粟田山　山城國、如意嶽日岡峠華頂山の總稱。

〇わぎへ　我が家の約。

我が門にわかなつむ子の聲聞きて思へばあすは七日なりけり

野邊見れば雪間おほくぞ成りにける若菜摘まむと思ふけふしも

むつき七日おもふ事ありて

七くさの數にもあらぬ思草つみていへにもくらすけふかな

松殘雪

海原はかすみわたれど住の江の松にはいまだ雪ぞ殘れる

春雪

あはた山あはと見しまに松の葉のあらはれわたる春の雪かな

むつき三日雪いとおもしろうふれり

あら玉の年の内にもふりしかど花とはけふの雪をこそみれ

餘寒月

春ながら夜の嵐のさえ／＼て去年にもかへる月のかげかな

餘寒

み山べは春のけしきもなかりけり笹の葉さやぎみ雪降りつゝ

春霞たちぬと見しを比良のねの雪は眞白にまたなりにけり

池餘寒

○雪間　雪の消えたる所。

○七くさ　芹、薺、ごぎやう、はこべら、佛の座、すゞな、すゞしろ。

○思草　思ひの種を草に寄せて言ふ。

○あはと見し　淡々しく見てをつた。

朝なく〳〵冰にかへる池水はいつまでふゆのこゝろなるらむ

二月餘寒

花をだに今はまつべき頃なるを又さえかへり雪のふるらむ

梅

枝見れば盛りはすぎず梅の花木づたふ鳥のちらすなるべし

梅花始開

鶯のまだ音せねばけふまでもしらですぎつる梅の初花

家梅始開

梅の花咲きぬる見ればわが宿の春はけふこそはじめなりけれ

梅風

梅が香をさそひそめてや大空の風の心も春になるらむ

雪中梅

鶯の木づたひこぼす雪間よりあらはれそむる梅の花かな

梅薰袖

あたらしく折りてもゆかじ梅の花袖はにほひになりぬるものを

木の下をたちはなれてぞ梅が香の袖にとまれる程は知られし

○ふる雪は　梅花の散るを雪と見なしたのである。

○梅の花咲かぬばかりに　我が宿に梅が咲かないで鄰の庭に咲いたばかりに鶯が我が宿に来ない。

○松風にたぐひて　松風に並び副うて。

○恨みざらなむ　恨まないで下さいよ。

白梅

鶯の木づたふごとにふる雪は梢のうめのちるにぞありける

若木梅

我が宿の若木のうめはわかけれど花はさかりに咲きにけるかな

鄰梅

梅の花咲かぬばかりに鶯もとなりのものとなりにけるかな

鄰家夜梅

梅の花やみににほへる宵の間に鄰のものと思はざりけり

故郷梅

梅だにも咲きのこらずばいづこをか昔の庭のあとと見てまし

梅交松芳

松風にたぐひて匂ふ梅の花千とせの香とぞいふべかりける

依梅待人

去年よりも咲きにし宿の梅なれど春たちてこそ人はまたるれ

梅散得客

つげやりし程にもこすて梅の花とくちりぬとは恨みざらなむ

○心もちるあらし　嵐に散る花を見ては客を待つ心も挫かれてしまつた。

○玉ほこの　道の枕詞、此の歌實感の浮ぶ歌である。

○柳辨春　柳、春を辨ふ。

鶯の心ぞねたき梅の花ちりてのちにや君につげけむ

　梅の花ある家にまらうど來る

鶯のなく我が宿の梅のはな君に見せたりなにかおもはむ

　打見るまゝを

うめの花見にこむ人をさりともと待ちし心もちるあらしかな

　ものへ行きける道にて

玉ほこの道にちりしく花を見てあふげば梅の木かげなりけり

　方清をいざなひて近きわたりあるくとて

いづ方とかたは定めず梅の花にほはむかたに遊びてはこむ

　柳

水鳥のかもの川上はるばるとけぶるはきしのやなぎなりけり

淺みどりまだはつはつの程こそは柳の絲のさかりなりけれ

青柳をあまた植ゑたる我が門はたゞ春風の宿とみゆらむ

春風は霞のころもぬはむとて柳の絲をよりによるらむ

　柳辨春

我がかどのやなぎの絲の上にこそまづ春風は見えそめにけれ

柳露

けさ見れば露のむすべる青柳をかぜのものとも思ひけるかな

雨中柳

青柳のなからましかば春雨をたれかこと〴〵玉にぬかまし

岸柳

流れくる水は雪消の色ながら岸の柳はもえそめにけり

堤柳

はにやすの池のつゝみの古柳うつるかげさへ老いにけるかな

河邊柳

遠く行く人を送りて休らへばつゝみのやなぎうちかすみつゝ

鄰家柳

風ふけば垣のこなたになびきけり鄰のにはのあをやぎの絲

門柳

誰が門としらぬものから青柳の靡くを見ればよる心かな

行路柳

いとはやく綱手なひきそ淀河の堤の柳見つゝゆくほど

○綱手　引舟の引綱。引舟に乘つて岸の柳を見つゝ行く時の心。

○はなだの絲　はなだ色の絲。

○わぎもこ　吾妹子。女を親み呼ぶ語。

庭の池を見出して

青柳の夜のまに長くなりぬると見ゆるは水のまさるなりけり

春の歌の中に

青やぎのはなだの絲の一盛り見すてていづちにしうぐひす

磯若草

打ちよする浪ものどけしわたつみの磯菜摘みてやけふは遊ばむ

早蕨

いまよりは人め見ゆべし山里の垣ねのわらびもえ出でにけり

岡早蕨

わぎもこがならびの岡の初蕨けふぞをりつる花のたよりに

樵路早蕨

柴人にをりもらされし山かげの道のさわらび老けにけるかな

春月幽

櫻花よるは見せじと思へばや月のひかりのおぼろなるらむ

深更春月

更けゆけば霞も晴れて梅の上にかげしらけたる春の夜の月

峯春月

かへりみる麓の花はくれ初めて峯ににほへる春の夜のつき

山家春月

たちこめて高嶺は見えぬ遠山のかすみの上ににほふ月かな

川春月

雪とのみ花はちりつゝ山里のにはおぼろなる春の夜の月

湖上春月

さし捨てしいかだの上ににほふかなあらしの山の櫻もる月

浦春月

さゞ浪の志賀のうら風寒からしかすみもはてぬ春の夜の月

春雨

ともし火のあかしの浦にてる月も春は朧に見えにけるかな

朝春雨

花をまつ心のみこそ急がるれつれ〴〵と降る雨のうちにも

旅行春雨

我が宿の垣ねの野邊も見えぬまでけさはかすみて春雨ぞふる

（[illegible]我が身のぬれて行く意。

○花まちてこそやおくれけむ　雁の仲間の花見るためにおくれたのであらう。

うぐひすは花に宿かる夕暮をそほふる雨にぬれて行くかな

歸雁稀

大かたは花まちてとやおくれけむけふ行く鴈の數の少なき

道かへてなかばは鴈のいにつらむ來し時よりも數の少なき

歸雁幽

聲さへも霞にきゆるものならば鴈の行方をいかでしらまし

歸雁遙

北山をさして行く鴈いかなればみやこの空をかへりみもせぬ

歸鴈成字

ことづけてやる玉づさを大空に廣げたりとも見ゆる鴈かな

曉歸鴈

歸る鴈鳴きゆく末も見るべきに有明の月の朧なるかな

浦歸鴈

松原を見つゝや鴈もかへるらむ明石のはまを過ぎがてにする

かりはなど休らふ心なかるらむ松原かすむ住の江の浦

むつき十四日鴈の鳴くを

故郷へゆくかゆかぬか知らねどものどけき空に鴈が音ぞする

雉

春雨のなごりけぶれる松原のおくにきこゆる雉の聲かな

雲雀

思ふ事ありとは見えぬ雲雀かな長き春日をなきくらせども

呼子鳥

花ちりてのちはとはれぬ山里のならひもしらぬ呼子鳥かな
來る人もなきみ山邊の春の日を鳴きくらしたる呼子鳥かな

櫻

世の中の人みなめづる櫻ばないかにうれしき心なるらむ

尋花

はるかにも鶯の聲きこゆなりたづぬる花のあたりなるらむ
ゆきて見むこれや花ある寺ならむ松原ごしに鐘聞ゆなり

遇樵夫問花

柴人の教へざりせばつゞらをりのぼりて奥の花を見ましや

初花

○呼子鳥　はゝどり。かんこどり。
○山里のならひもしらぬ　花散りて後は呼べども人の來ぬ習ひをしらぬ。

いつしかと待ちし櫻の花なれど咲きぬる見ればおどろかれけり

見花

我が宿の一もとざくらひとりのみ見つゝ暮しぬながき春日を

いかにして春のながき日を暮すやと花なき里の人にとはばや

靜見花

うつせみの憂世の外に見る花は心もちらぬものにざりける

獨見花

すがの根の長き春日の暮るゝまでひとりも見つる山櫻かな

遠見花

をしほ山むらく見ゆる白雪は松の木の間の花やさくらむ

花盛

かくばかりまたせくて櫻花などかさかりの短かるらむ

あすといはば花の盛りは過ぎぬべしけふを過さずとはば訪はなむ

誰が園も花は盛りになりぬべし飛びかふ蝶のいとまなげなる

花滿山

みよし野にきてこそ見つれ櫻花まことと雲かと思ふけしきは

○うつせみの　世の枕詞。
○憂世の外に　俗事を絶ちての意である。
○すがの根の　長き、亂る、などの枕詞。
○をしほ山　小鹽山、大原山の一名。
○あすといはば　古今集にも「今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」
○とはば訪はなむ　來てくれるなら來てくれよ。
○きてこそ見つれ　外にては見られぬをいふ。

○あく代ありや　飽く時もあるか

翫花

櫻花折りてかざすも惜しからず昔し遊べるけふとし思へば
さくら花あく代ありやと試みに千とせの春をながらへて見む
我ながらしられぬものは櫻花めづるこゝろのかぎりなりけり
霞立つ長き春日を家にして暮すは花のあればなりけり

馴花

思ふらむ花の心はしらねどもなれて暮さぬ春のなきかな
我こそはあかずもあらめかくばかりなるゝを花のいかに思はむ
なれ〳〵て春のあまたに成りぬれば花も心はおかじとぞ思ふ

花下忘歸

花のかげ入相の鐘はきこゆれど歸る心はなほつかぬかな

花未飽

年々に咲きてちるまで見れどあかぬ花はいかなる種にかあるらむ
皆人のあくてふ事をしらぬかなあやしきものはさくらなりけり

折花

又も見にきぬべき程の道ならば惜しき花をば手折らざらまし

○かはほり　蝙蝠。

○ありきの山　木の生えてゐる山

○墨染の　夕、暗きなどの枕詞。

人のため折りし櫻の枝なれどまづはながめにさしてこそみれ

依花待人

足びきの片山かげの我が宿も人の待たるゝ花さきにけり

夕　花

かはほりのとびかふ影も靜まりて月になりゆく花のうへかな

雨中花

鶯もけふはきなかで春雨のしづくぞ花のえだつたひたる

櫻花うつろはむとぞ思ひしに雨こそ花の色はそへけれ

雨後花

雨晴れて露おもげなる花の上にうつる夕日の影ののどけさ

山　花

吹く風も心ありきの山ならば花のさかりもひさしかるらむ

坂　花

櫻花めがけてのぼる坂みちはさかしき事も思はざりけり

谷　花

墨染のくらまの谷のたに底に白く見ゆるは櫻なりけり

○みなわ　水の泡沫。

○おひてふけ　追手、順風吹けと。

瀧花

散りうくと見えしは瀧のみなわにて岩もと櫻猶さかりなり

岡花

やすらひし花のあたりを見かへれば霞かゝりぬ岡のべの里

松間花

・粟田山松の葉しのぎ立つ雲はまじる櫻のよそめなりけり

松の色はとく暮れはてて嵐山櫻ばかりぞおぼろなりける

島花

風をいたみ舟しよらずば渡つみの沖つ小島の花を見ましや

舟中花

磯山の花見つゝ行く舟路にはおひてふけとも思はざりけり

鄰家花

うちつどひとよむ聲こそ聞ゆなれけふや鄰の花見なるらむ

羇旅花

草枕旅は春こそ樂しけれきのふもけふも花のしたぶし

惜花

雪とのみふりにふれども櫻花をしむ心は埋まざりけり

たぐひなき色にさけばや櫻花はなのさかりの短かるらむ

風前花

嵐山風にまかせてちる花はゐぜきもえこそとゞめざりけれ

坐久落花多

庭しろくなるまで花は散りにけり暫しばかりのまとゐと思へど

曉庭落花

春の夜の朧づく夜に散る花はあけてぞ庭の雪と見えける

花ざくら

鶯の聲のにほひやしみつらむ色にも見ゆるはなざくらかな

絲櫻

我がやどのしだり櫻の木のもとはながき日くらす所なりけり

殘花薫風

遲さくらのころもしるく墨染のくらまのおくに風かをるなり

花參差

さま〴〵に花の梢は見ゆれどもあかぬ匂ひは一つなりけり

○ゐぜき　堰、用水をせきとめたる所。

○暫しばかりの　僅かの間と思ひしに思はず永居せしなり。

○花參差　花しんしたり、花の入り交りたること。

花 袂

たちがてに休らふ心しりつらむ袂にはなのちりかゝりたる

寄花鐘

くれたらば今宵は花の下ぶしぞ入相の鐘つかばつかなむ

寄花祝

年々にいや咲きまさるには櫻やどのさかりを見するなりけり

花の本に立ちて「うときも人は」などいひけむ古ことおぼえて

我がやどの櫻の本にきても見ようき世の中の春は春かは

何がしのもとにて

おもしろきこのすまひかな葛城も生駒も庭の花ごしにして

醫王寺にて

かぎりなき青海原を麓にてはなのなみたつ山寺のには

泉勝院の花の本にて

いかにせむ夕風寒くなるまゝに花の色香ぞいやまさりける

嵐山にて

麓なる人のとよみを鶯の聲にかへてもはなを見るかな

○うときも人は　新古今集巻二「とめこかし梅盛りなる我が宿をうときも人は折にこそよれ」

（山のかひ）山の峽、山と山との間。

◯さゞれ　さゞれ石の略。

◯もゝちどり　もろ／＼の鳥。古今集一にも「もゝち鳥さへづる春を」

山のかひさしおろしくる柴舟を軒端の杉のこのまにぞ見る

夜をこめて花をとはずば鶯のおき出づる聲をいかで聞かまし

水の上に流れぬ雪と見えつるはさゞれにたまる櫻なりけり

よるをさへかけても人のつどふかな花の心やひまなかるらむ

花の歌の中に

咲く花のあたりまでこそかたからめいざ踏み出でて足こゝろみむ

藤井俊のりいできて明日なむ嵐山の花見に出でたつなどいひて歸りたるあとにて

君によりけふは都にわくるかなよし野へのみもやりし心を

花の盛りむなしく雨風にて過ぎぬる事を思ひて

たがふ事あるは習ひを花盛りかならずしげき雨風やなに

そこの花かしこの花と徒らにいひてくらしつあたら彌生を

殘るらむ花をも見ずぞなりぬべき今はと思ふ心たゆみに

野遊

日ぐらしに遊ばむとてはこしかどもまだ風寒し春日野の原

もゝちどり囀りかはす春の野の霞のなかにけふはくらしつ

桃花

まよひけむ昔もかくと思ふまで桃さく谷のおくぞしられぬ

梨花

よの中に遠き山邊のいほにこそうき事なしの花は咲きけれ

堇菜

小山田のあぜの細道せばければふまぬ人なき坪すみれかな

夕堇菜

つみすてゝ歸らむとする春の野の菫の花に夕日さすなり

河蛙

櫻花ちりて流るゝみ吉野のなつみの河に蛙なくなり

躑躅

けふ見れば池の中島くれなゐにつゝみはてたる岩つゝじかな

なつかしと誰か見さらむ我妹子が赤もの色につゝじの花

岸山吹

きしもせに咲きみだれたる山吹のかげをながるゝ木舟川かな

藤

○まよひけむ昔　桃花の奥に入りて桃源に至りたるをいふ。

○赤もの色に　赤裳の色に似たる丹つゝじの花。

藤浪の花さきかゝる春をこそ松のさかりといふべかりけれ
時雨にもつれなき松と思ひしを藤の花には色變りけり
ふぢなみの花咲く見てや鷺と山ほとゝぎすたちかはるらむ
藤浪の陰に立ちよるうなゐ子はかづくあまとも見えにけるかな

折藤花

ほとゝぎすきなかむまでは散らさじと思ひし藤を誰かをりけむ

松上藤

昔よりかゝりてさける藤なればおのが花とや松はおもはむ

池上藤

住の江の岸の松原藤さけばうすむらさきの浪ぞこえける

水鳥のすむ池の上の松がえに藤のはなこそさきかゝりけれ

瀧下藤

瀧の上に咲きたる藤をむらさきの浪かもちると思ひけるかな

橋下藤花

をはり田のいただの橋は朽ちぬれど今もかゝれる藤浪の花

暮春藤

〇うなゐ子　童子。

〇をはり田のいただの橋　萬葉十一「小墾田の坂田の橋のくづれなば……」を坂を板と誤讀したのである。小墾田は推古天皇皇居の跡、坂田はその所にて金剛寺のある地

夏にしもかゝらむ藤の花なればうべしなひこそ長く見えけれ

○しなひこそ長く　曲り垂れたるが長く。

藤浪のちりてかゝれる岩はしは春の渡りし跡にやあるらむ

うら葉吹く風に夏をば見せながら猶さかりなる藤浪の花

山家春興

山里は春のあそびのはてぞなきすそ野の菫みねのさわらび

春夜

折りかざしかへる櫻の花の上ににほひそめたるはるの夜の月

春夜樹

よゐなれば人も見にこぬ我が宿の櫻がうへに月照りわたる

春夜酌酒

杯のいらぬうちにも明けにけりをしきは春の夜にこそ有りけれ

○杯のいらぬうちに　宴の終らぬここに有明の月の殘れることをかねていふ。

蝶

花といふはなの盛りになりぬればいとまなげにも見ゆる蝶かな

春旅

枕邊に花はちりつゝ嵐やま世におもしろきこの旅寐かな

春述懐

○春の名だてなりけり　春といふ名を立てるばかりでその實がない

○かねて　早くも。

○草枕　旅の枕詞。

花鳥の色にも音にもうきたたぬ我が身は春の名だてなりけり

春思往事

見る人のかはりゆく世を思ふには花のかげにも涙おつなり

惜春

花をだに見ずて暮れぬる今年こそ春のをしさのかぎりなりけれ

暮春

春はまだ殘れるものを鶯のかねてなかずもなりにけるかな

春の色すみれにのみぞ殘りける片山畑の麥のなかみち

山吹の花こきみだし降る雨のうちにや春はくれていぬらむ

花ちりて青葉になれる園のうちは鳥の聲さへかはりけるかな

人はこず春ははてぬる山里のけふよりのちをいかに暮さむ

我が宿の一重やまぶきこきみだしけふを限りのはるさめぞ降る

惜暮春

いづかたにとまる春とは思はねど櫻のちらぬ里をたづねむ

羇中暮春

春もはやくれぬときけば草枕たびの日數ぞ驚かれぬる

暮春雨

をやみせずふりくらしたる雨の中に覺束なくもいぬる春かな

暮春鶯

鶯もはるのわかれや惜しむらむゆふぐれかけて聲のきこゆる

三月盡

鶯の聲一しきり聞えけり今や別れて春はいぬらむ

けふしまれ鳴くうぐひすはわが如く春の別れや悲しかるらむ

惜三月盡

さもこそは今日に限れる春ならめ花鳥をだに留めやはせぬ

三月盡鐘

遠山の霞のうちにきこゆなり春のかぎりのいりあひのかね

三月盡夕

けふのみと鳴きてをしみし鶯の聲もきこえずなりにけるかな

三月盡夜

散りにける花の上だに見えななむ今宵ばかりのはるの夜の夢

三月盡祝

○けふしまれ　今日しもあれ。

○見えななむ　見えてくれればいいが。なむは希望。

松が枝にかゝれる藤の末長くありてもけふの春を惜しまむ

夏之部

首夏

けふといへば衣更せぬ野山まであらたまりても見え渡るかな

首夏風

うち見るも涼しかりけり夏山の青葉が上をわたるあさかぜ

首夏月

時鳥鳴くべき時となりにけり若葉が上に月もさしつゝ

首夏夕

竹の葉のわかばの色は夏なれどゆふかぜ寒きあめのあとかな

首夏山

春はまだ遠くやゆかぬ打ちわたす猪名のむら山薄かすみせり

首夏川

こゝかしこ岸根のいばら花咲きて夏になりぬる川ぞひのみち

新樹

○打ちわたす　長く並んで居る。

あはた山なべて青葉になりぬれば松の緑は色なかりけり

夏くれば青葉がくれに流れつゝ涼しさまさるきよみづの瀧

新樹露

夏の夜もすゞしかりけりしらかしの若葉の露にやどる月影

雨すぎし森のかげこそ涼しけれ楢のひろ葉の露こぼれつゝ

雨後新樹

村雨のふりて過ぎぬる山見れば夏のけしきにはやなりにけり

卯花

卯の花の雪かと見ゆるあたりには吹く風さへぞ涼しかりける

卯花似月

うの花の咲けるかきねは久方のあめに障らぬ月ぞさしける

卯花雪

枝たわにふりたる雪の面影を夏しも見せてさける卯の花

玉川卯の花さけるところ

うの花は垣根もたわに咲きにけり夏きにけらしたまがはの里

郭公

○色なかりけり　松の緑のけおされたるをいふ。

○我は誰に語らむ　獨り侘住居せる心。

○心いられ　じれつたく思ふ事。

昔人の聞きつと語る郭公きくとも我は誰に語らむ

首夏郭公

夏はきぬいざ時鳥聞きがてら思ひや立たむ志賀の山ごえ

雨中待郭公

むら雨のそほふる空のくれ行けばいとゞまたるゝ時鳥かな

人傳郭公

うの花は早もさかぬか郭公初音聞きつと人の告げたる

月前郭公

卯の花の垣根たづねてほとゝぎす今宵はきなけ月もさやけし

郭公未遍

山里になきつときくぞ郭公心いられのはじめなりける

時鳥なく山路を女車ゆくといふことを

ほとゝぎすおなじ心とゆるしてやしのび車のうへに鳴くらむ

空曇りたる日

今よりはくもるも嬉し足びきの山ほとゝぎす鳴かむと思へば

早苗

川舟にのせてさ苗をはこぶなり伏見の澤田けふや植うらむ

きのふこば賤が田歌もきくべきにけふは蛙の聲のみぞする

牡丹

けさ見れば夜の小雨にそぼぬれていとゞにほへる深み草かな

五月四日おき出でたるに竹の葉の露いとをかしかりければ

何のあやめなき我が宿は竹の葉の露こそさつきの玉もぬきける

端午

おしなべてさつきはおのが時なれど今日こそなかめ山時鳥

菖蒲ふく事だにしらぬ我が宿は今日なりながらいつかとぞ思ふ

菖蒲

ひく人もなき古池のあやめぐさ蛙のみこそねをくらべけれ

すゞしくも生ひしげりたる菖蒲かなふりにし池の汀ともなく

盧橘

我が宿のはな橘はさきにけりいた井のみづにかげをうつして

古郷橘

苔のうへにひとりみだれて散りにけり主なきやどのにはの橘

○きのふこば　田植の過ぎたのを詠んだのである。

○深み草　牡丹の古名。

○何のあやめなき　何の模様もない殺風景な。

○ねをくらべる　あやめの根を引きて根合することは古くから行はれた。此處は、蛙がその音をくらべるたけということうたのである。

○いた井　板もて圍うた井。

楝

ふりきたる雨をしのぐと立ちよればあふちの花の木陰なりけり

五月雨

さみだれは鄰の庭のやり水も音とよむまでなりにけるかな

打ちわたすあはたの山のかひ毎に雲たちのぼるさみだれの頃

五月雨のふり暮したる山里は水鶏ならではとふものもなし

ほとゝぎす雨をしのがば我が岡のはりの林のかげをかさばや

おしなべてふるさみだれと思へども獨りある我ぞ暮しわびぬる

池の面にうかぶと見えし浮草の庭にたゞよふさみだれの頃

何となく人戀しきはほとゝぎす鳴く五月雨の夕なりけり

加茂川にわたすかり橋絶えはてて久しくなりぬ五月雨のころ

けふ見れば雲居の山もなかりけり猶さみだれは限りあらじな

さみだれの雫にぬれて我くれば栗のはなちるやまかげの道

五月雨久

五月雨は松もわびしと思ふらむしのぶ草こそ生ひしげりけれ

わびしとて今幾日しもあらなくに五月の空は雨にまかせむ

○はりの林　榛の木の林。

○あらなくに　なくはぬの延言、あらぬに。

○島わ　島のまはり。

○月の心のいそがざるらむ　月の昇ること遲きをいふ。

五月雨晴

さみだれはけふ珍らしく晴れにけり軒のしのぶに日影見えつゝ

川五月雨

よしの川岩かど見えずなりにけり五月の雨のはれまなければ

溪五月雨

五月雨のくものそこより谷川の音おそろしく聞えけるかな

旅泊五月雨

一夜だに明かしかねたる舟のうちに幾日かねつる五月雨の頃

水鶏

水ちかき宿にぬる夜はよもすがら枕の下に水鶏をぞきく

古寺水鶏

水はかれ橋はこぼれし山寺のいけの島わにくひな鳴くなり

人すまぬ野寺の垣ねよゐゆけば水鶏なくなり草かげにして

夏夜待月

夏の夜はさも短きをいかなれば月の心のいそがざるらむ

夏月

○さもこそ　げに。

我がやどの一むら薄つゆ繁みなつの外なる月やどりけり
おもふどち端居ながらにあかすかな夏は月夜にますものぞなき

夏月涼

夏の夜の月は水にもあらなくに木々の木の葉のぬれて見ゆらむ
宵のまの蚊火のけぶりはきえ盡きて涼しき月ぞすみ渡りぬる
荻の葉のつゆに宿れる月みれば蟲もなくべき心地こそすれ

月忘夏

さもこそは夏なき月のかげならめ眞砂が上は雪と見ゆらむ

樹間夏月

木のまより出でてこのまに隠れけり我が山里のなつのよの月

竹間夏月

竹しげく生ひたる宿ぞ夏のよの月と風とは涼しかりける

卯月ばかり松榮窩にて

久方の空ゆく月を窓にいれてこよひぞ夏のはつまとゐする

忠明の許にて

すむ月も螢もあれどこの宿は水のおとこそすゞしかりけれ

本覺寺にのぼりて

きのふこそ花をば見しか山寺のふぢの若葉に月ぞうつろふ

小竹園をとぶらひて月いとおもしろければ

月影はかたぶくとしも思はぬに木がくれおほくなりにけるかな

今はとて入りはしつれど閨の戸は猶さしかねつ夏の夜の月

瞿麥

いざ行きてあすは見てこむ鴨川のつゝみの宿のなでしこの花

茜さす朝日匂へるとこなつの花の露こそすゞしかりけれ

牀夏の花のあたりをさらずして蝴蝶とふたりけふは暮しつ

露わけて誰か折らましやま里のちがやまじりの撫子の花

よろづ代もちらでにほはむ仙人の宿る岩ほの牀なつのはな

瞿麥露

露はおきてこてふはねたる牀夏のけさの花園見む人もがな

閑庭瞿麥

殊さらにおほしもたてぬ撫子の咲きてまじれるあさぢふの宿

丸太町なる某が家のなでし子を斧木と見にゆきてよめる

○茜さす　日の枕詞。
○とこなつ　野生の瞿麥の異稱。

○撫子の夕ばえことに　撫子が夕映にことに美しく。

○月くさ　露草の古名。

○照射　ともし、浦のしほ貝一四八頁註參照。

○棹鹿　小男鹿。

飛びちりてあそぶ蝴蝶もゆふぐれは此の花園にみなかへるらむ

かかるほどに千種殿花見にとておはしたり物がたりなどしたまふ間に中しいづ

撫子の夕ばえことに見ゆめるは君が光のそふにやあるらむ

かの君

言の葉の露の玉さへかず〳〵に匂ふ園生の花ぞえならぬ

鄰なる撫子を見て

袖をだにかさまほしきは夏の日のてる日盛りのなでしこの花

夏草

賤の男がかりつかねたる夏草の中にまじれる月くさのはな

野夏草

この野邊の淺ぢは高くなりにけり菫摘みしはきのふと思ふに

照射

さみだれの雨間も見えぬ夏山に星のみゆるはともしなりけり

山々にともしさすなり棹鹿の賴む木のもといづこなるらむ

螢

あすはしもさ苗植ゑむとせきいれし水田の上にほたる飛ぶなり

我が宿のむぐらが下のわすれ水よるはほたるの尋ねてぞくる

牀夏のはなに置きぬるしら露をすがるほたるの影に見るかな

深夜螢

小夜ふけて螢は草に宿れどもねたる影とは見えぬなりけり

雨後螢

夕立は木末のよそにふり過ぎてほたる流るゝにはたづみかな

螢來窗

小夜ふけぬ今はささむと思ふ時まどのもとにもくる螢かな

せざいに螢とぶ

螢とぶ影にて見ればわがやどのをぎは高くもなりにけるかな

嵐山にて

ほたるとび蛙もなきて大井河また夏の夜もおもしろきかな

螢とぶけしきをしらで大井河月なき夜とも思ひけるかな

嵐山まつの葉わけてとびまがふ螢ぞ夏の花にはありける

ちる浪も螢のかげに見ゆやとて瀧のもとまで我はきにけり

○わすれ水　野中などにて人に知られず流れる水。

○せざい　せんざい。前栽の事。

あらし山麓をこむる川ぎりのうちにほたるの影ぞ見えゆく

夕顔

水よりも涼しきものは河づらの垣根にさけるゆふがほの花

垣夕顔

住の江の浦のとまやの垣根には波とぞ見ゆる夕がほのはな

蚊遣火

今のまを蚊遣のけぶり焚きたてよ空行く月の雲にいりたる

更けゆかば月も出でなむよひの間にはやたきたてよ賤が蚊遣火

蓮

夕されば蓮の浮葉に風たちて夏こそなけれおほくらの池

見るうちに玉ちるばかりなりにけり音のみしつる蓮葉のあめ

おもしろくふれる雨かな蓮葉の上の玉ともまろびあひつゝ

鳴神の音もこほれて落つるかと見るまでふれるはちす葉の雨

夕立の置きていにつる露の玉まき隠してもしばし散らすな

くやしくも朝いしつるか蓮葉にたまれる露も見てましものを

とぶ魚の音なかりせば蓮葉の下の水をば誰かしらまし

○おほくらの池　巨椋の池、伏見町の南にある、おぐらの池ともいふ。

○まき隠す　玉を集めて巻き隠す

○朝い　朝ね。

今よりの夕月かげにいかばかり涼しかるらむ池のはちす葉

大くらの池の蓮の花さかりいくらのさぎと見えわたるらむ

いかばかり涼しき池の心よりかかるはちすの花はさくらむ

常ならぬ世をもしれとや蓮の花咲くより早くちりて見ゆらむ

荷露似珠

いますぎし一村雨は蓮葉のうへのたまともなりにけるかな

池蓮

てらしたる池のほとりの燈火によるさへ見ゆる蓮葉の露

圓通寺の池のほとりにて

池水は雨に濁りてはちす葉の露ばかりこそきらめきにけれ

移山亭の池の邊にて

月影はとくもこのまを離れなむはちすの上の玉の數見む

池もせにたちかさなれる蓮葉のひまもとめても宿る月かな

夕立

俄にも峯は雲にぞかくれける夕立すらしかづらきのやま

竹の葉に玉ゐるばかりそゝぎつゝやがても過ぎし雨の涼しさ

○いくらのさぎ　蓮花を鷺に見なした。

○荷露　はすの露。

○まきむくの檜原　大和の城上郡卷向山の檜原。萬葉集「卷向の檜原も未だくもらねば云々」

○はり原　榛の木の原。

夕立は今ふりくらしまきむくの檜原がうへに雲きほふなり

遠夕立

夕立はいまぞそなたに歸るらむかきくもりたるあたご山かな

旅夕立

見るがうちにあふみの方にかゝりけり北山出でしゆふ立の雲

蟬

夕だちはしばしなふりそ山越えてふもとの里に我いたるまで

我が宿のまへのはり原夕月になるまでたえぬ蟬の聲かな

秋風はたちぬときけど鳴く蟬の聲はきのふに變らざりけり

雨後蟬

秋の上は小雨のなごりきらめきて秋おもほゆる蜩のこゑ

朝蟬

ほのぐと明けはなれたる夏山の梢に蟬の聲ぞきこゆる

蟬聲夏深

秋風のふかばたゆべきものとしも思ひなされぬせみの聲かな

馬上蟬聲

のりて行く駒もつかるゝ夏山にひとりたゆまぬ蟬のこゑかな

扇

あかねさす晝のみならずぬば玉のよるも扇は休めかねつゝ

閨中扇風

更けゆけばいとゞ涼しくなりにけり扇のかぜや閨にみちぬる

泉避暑

松かげを流るゝ淸水音もよしいざこゝにして夏を暮さむ

松の下に泉ながれたり

松陰にすゞみてぞ知るやり水は夏を流せる名なりけりとは

納涼

ぬば玉の夜はふけぬとも歸らめや月さへ出でて涼しきものを

わがためのすゞみ所となりにけり片山川のすぎのしたみち

夕河の涼しき風は大ひえの山のうへより吹きてきにけり

久かたの月の中なるならねども桂のかげはすゞしかりけり

しゞみ川このおばしまはゆふべ／＼涼しさひろふ所なりけり

納涼風

○夏を流せる名　やり水のやるは夏をやることときていふ。

○涼しきひろふ　蜆を拾ふ所でなく涼しさをひろふ所である。

楢の葉のそよぐ夕風たちにけり涼みにことは誰にいはまし

夕納涼

夕月のかげも木のまに見え初めてすゞしくなりぬ川づらの里

樹陰納涼

やり水の音の涼しき夕やみにほたる飛びくる木がくれのいほ

麓納涼

足引の片山かげのあふち原涼しきかぜの吹かぬまぞなき

湖納涼

あふみの海こぎ出でて見れば神風のいぶき嵐は夏もさむけし

船納涼

をとめらがうたへる中をさし分けて川上とほくゆくは誰が舟

家々納涼

をちこちに門さしこむる音すなり涼みする夜は更けやしぬらむ

樹陰避暑

夕さればは山が裾のむらかしのしげみに來ても風を待つかな

脩竹不受暑

○涼みにこ　涼みに來よ。

○神風の　伊勢の枕詞。いに通じていぶきに冠する。

○は山　端山。麓の山。
○むらかし　草樹。

呉竹のはやしがくれのうれしきは夏のほかにて暮すなりけり

夏夜待風

いざ今宵閨の板戸はささでねむしのびに通ふ風もこそあれ

水風如秋

夕風に瀧の白玉ちりまがふこのたかどのは夏なかりけり

苦熱

何事もたゞうみはつる夏の日にすゝむるものは睡りなりけり

鈴

風になる鈴のひゞきは夏の夜の月まつほどの友とこそなれ

夏曉雲

夏の夜ははや明けぬらしみよしのの青根が峯に雲るたなびく

水邊夏夕

舟よりもまたゆかしとや思ふらむこのおばしまの燈火のかげ

夏夕山

み吉野のきさ山かげを夏行けば瀧の上よりひぐらしぞ鳴く

夏風

○おばしま　欄干。

○あらがねの　土の枕詞。

○ゐなのさゝはら　後拾遺集に「有馬山ゐなのさゝはら風ふけば…」とある如く、有馬山の近くにある。

今もはや穂にいでぬべきけしきかな夕風わたるしのゝを薄

わたつみの沖つしほ風吹きあぐるこの磯山は夏なかりけり

夏地儀

そゝぎたる水や嬉しきあらがねの土の下にも蚯蚓なくなり

夏山

山里に宿しめおかむほとゝぎす鳴きのさかりはきても住むべく

五月雨の雨にきるといふかさの山あらはれ初めぬ雲の絶間に

夏野

分けゆけば螢は袖にみだれつゝ夜風すゞしきゐなのさゝはら

夏田

少女らがうたふ聲さへ聞かざりきいつのま植ゑし山田なるらむ

夏岡露

しげりあふ木々の若葉の露おちてあした涼しき岡ごえの道

きて見ればやまと撫子花咲きてしら露すゞし岡のくさむら

夏瀧

布引の瀧のしらきぬたちとりて夏のころもに著る由もがな

○夏祓　浦のしほ貝一五九頁註參照。

○いぐし　神を祭る時幣などをかくる榊の類。

夏木

うちしげる青葉が中に吹く風の見ゆる梢ややなぎなるらむ

夏松

大方は風のひゞきもかれはてゝ夏こそ松は寂しかりけれ

夏竹

いつはあれど竹は夏よし夏はまた朝こそ竹は涼しかりけれ

貴賤夏祓

憂き事は宮も藁屋も變らねばけふのみそぎをせぬ人ぞなき

六月祓

皆人の罪をながせるけふなれどたゞすの川の水は濁らず

水よりも涼しきものははらへして歸る心のうちにざりける

みそぎ川たつるいぐしの數しらぬ罪はけふこそ祓へ捨てけれ

みそぎ川はらへてながす麻の葉の上にぞ見ゆるあきの初風

秋之部

初秋雲

○たなはた　棚機神。

○はふり子　神主。

○見すててや　見すてて出て行かれようか。
○月草　露草。

秋たてば月のみならず久方の雲のけしきもかはりけるかな

初秋風

たなばたの心やいかに動くらむかぢの葉わたる秋の初風

社頭早秋

はふり子が清むる庭の朝じめりしるくも見ゆるけさの秋かな

早秋蟲

夕月のかげは木の間にもり初めてあさぢが庭に蟲ぞなくなる

初秋のうた

秋風はまだ身にしむとなけれども蟲の音そひぬ有明の月

文月ばかり梧月亭にて

人とはぬ宿のさまこそあはれなれ月の光を燈火にして

梧月亭をいづる日ものにかきつけたる

見すててや今日はいでてむ秋萩に月草まじり咲けるかきねを
かへり來て我見むまでは散りぬべし此の柴垣のあきはぎの花
ひるは花よるは蟲の音山里の秋はさかりになりぬるものを
桐の葉の落ちかさなれるゆふべ／＼照りまさるらむ月をしぞ思ふ

こゝに來て月みむひとは思ひ出でよ秋風寒きたびにある身を

文月十四日今宵月おもしろきに訪ひ來る人もなしやゝ更くるまでひとりながめて

照る月はをり〳〵雲もかゝりけりさやかなりける蟲の聲かな

まだしらぬ哀れさへこそ添ひにけれ獨りぞ月は見るべかりける

ふりすてゝ又この秋もわかれなむ我が山かげのすゞむしの聲

こむ秋は見じと思へば人しれず心ぞをしき山かげの月

雲もなくはれたる月をひとり見てしばしすみける我が心かな

庭草は露のひかりになりはてゝ人しづまりぬ山かげの月

人のもとへいひやりける

諸共にすゞみし岸のやなぎかげ秋風たちぬ思ひいづや君

殘暑

荻の葉のそよぐ音だに聞えぬを秋きたりとは何をいふらむ

新涼

秋風のたちて後こそなつ衣うすきものとは思ひしりぬれ

七夕

○此の秋もわかれなむ　此の歌と次の歌は、作者に今の居を移す心ありて詠じたと見られる。

ゆふぐれの空にまよへるむら雲はつま待つ星の心なるらむ

家毎にこよひ照らせる燈火は天のかはらにかげや見ゆらむ

水邊七夕

河づらの里につらなるともしびも今宵は星の手向とぞみる

織女別

久方の天の川橋とりはなしはたやひと年よそになげかむ

荻

風よりもわびしきものは荻の葉に雨の音するゆふべなりけり

荻告秋

わが宿のものなりながら荻の葉の音こそ秋のつかひなりけれ

荻風

物思ふ心からなるねざめをば荻ふく風にかこちけるかな

籬荻

我が宿のまがきの荻にのこりけり四面(よも)にしづまる秋の小夜風

荻近枕

聞きすててねむと思へば敷たへの枕をさらぬ荻のおとかな

○はたやひと年　亦もや一年、別れて歎くのか。

○籬荻　まがきのをぎ。

○敷たへの　枕の枕詞。

○露わけて　我が露を分けて行くこと。

萩

おく山のしげきが中の萩が花よる鳴く鹿のかくしづまかも

秋されば萩の花がきゆひたてて野守が庵は心ありけり

野萩

露わけてぬれぬあしたもなかりけり緒野のこ萩咲き初めしより

水邊萩

村雨に波の上には見えねども萩の露こそまなくこぼるれ

萩を

昨日にも色はかはるとなけれどもまばらになりぬ秋萩の花

萩の歌の中に

土にふす庭の秋萩かきおこし見れば花こそ咲きそめにけれ

女郎花

大方の花にもおける露なれどをみなへしには涙とぞ見る

野外薄

よし川山すそ野の薄打ちなびく時こそ人はむれてきにけれ

薄似袖

〇秋の風にはおほせざらなむ　已がみだれし様を見せらるゝ如く苦しき故刈萱は細はさず作さずにおいたがいい。

〇はた織　今言ふきり〴〵す。

刈萱

あれはてしみかきが原の秋風に袖ふるものはすゝきなりけり

野蘭

みだるゝは已がさまなる刈萱を秋の風にはおほせざらなむ

草花

秋風のたちそめしより藤袴さきてにほはぬ野邊のなきかな

秋山の麓の里をゆきめぐり折りあつめたる八千草の花

秋花

萩はちり菊はまだしきころなれど猶このそのゝ花は絶えせず

夕まぐれ尾花が穂浪ふく風は音するよりも身にぞしみける

はた織の聲かれ〴〵になる野べは花の錦もつゞかざりけり

草花早

きのふ見し夏野のはらのわか薄はつ〳〵穂にも出でにけるかな

草花衰

野邊見れば秋はいたくもたけぬらししらけて見ゆる花薄かな

月草

我が宿のかきをめぐれる蓼のはの中にまじれるつきくさの花

白妙のそでにもあらばうつしてむ雨にぬれたる月草のはな

蓼

故郷を秋きてみれば水かれし池のみぎはに蓼のはなさく

槿

朝にけにいや咲きまさる朝顔の花ははかなきものとしもみず

垣もぜにさく朝顔のひと盛りはかなき事も忘れてぞみる

あさ手洗ふたらひの水にうつりけり垣ほにさける朝顔の花

籬下槿

故郷のあれし垣根をきてみればむぐらにまじる朝顔のはな

鄰槿

あし垣のよそに見えつる朝顔はけさ我が宿にさきこえにけり

朝のほど蓼園にかへりたるに朝顔ふた花さきたりければ

おぼつかな誰にとはまし朝顔はきのふやさきしけふや初花

朝顔を

咲きぬればやがてもしぼむ朝顔は待つまぞ花のさかりなりける

○うつしてむ　月草の花をこり衣にすりつけて染め著かせたい。

○朝にけに　けは常の意か、いつも、朝毎に。

○花の下紐ときはてぬまに　朝顔の未だ十分開かないうちに。

○白露はおくとも見えぬ　月光にかゞやいてゐるので白露のありとも見えぬのである。

○淺ぢふ　茅の疎に生ひたる所。

今こむといひつる人を待つほどに日影かゝりぬ朝顔のはな

庭鳥のこゑはあれどもこの頃のめざまし草はあさがほの花

嬉しくもおきて見つるか朝顔の花の下紐ときはてぬまに

朝顔のしぼめる花と見えつるはまだ咲き出でぬ程にぞありける

露

八千ぐさに花のにほへる秋の野はおく白つゆも心まどはむ

草露映月

白露はおくとも見えぬ秋の野の尾花が上に月ぞ宿れる

曉露

有明の月のひかりに見えわたる野原の露のかぎりなきかな

蟲の音は猶よるなれど淺ぢふの露のひかりは明けそめにけり

夕露

あさぢ原たち隱したる夕霧につゆの光はあまりけるかな

蟲

萩のはな咲きみだれたる山川のきしねにすだく蟲のこゑかな

久方のつきおもしろみ山里のむしの音聞きに我はきにけり

鳴きそむる今より悲しきりぎりす寐覺の友とならむと思へば

秋風の身にしみまさる宵毎にしげくなりゆく蟲の聲かな

山寺のねよとの鐘もうちはてゝ後こそ蟲の音はすみにけれ

さやけさはいづれかいづれ山河の瀧つせの音すゞ蟲のこゑ

月前蟲

月影は松より西になりぬれど鳴く蟲の音は隱れざりけり

よもすがら月みる友となるものは垣根の蟲の聲にぞありける

雨中蟲

松むしの聲のかぎりを盡すとも雨ふるよひを誰かとはまし

夕蟲

夕されば荻の下葉をふくかぜに蟲の音さへもみだれけるかな

野外蟲

ゆふべよりきこゆる野邊の蟲の音も月出でてこそ清くなりけれ

池邊蟲

月かげはをぐらき池の中島の奥まですめるむしの聲かな

旅宿蟲

○奥まですめる　澄めると住めるとをかける。

きり〳〵す鳴きよる聲ぞあはれなる獨り寢られぬたびの夜床に

日ぐらし

日ぐらしの聲よわりゆく山里の夕の風は身にぞしみける

鹿

夕月夜あはたの山はきりこめて鹿の音遠しながさきの里

小鷹すゑ今はと歸る栗栖野(くるすの)の夕霧がくれをじかなくなり

かへるさは志賀の山ごえ暮れはててきらゝの峯に鹿ぞ鳴くなる

夜鹿

あし引の山のをのへに鳴く鹿も獨りぬればやこゑのかなしき

鹿聲遙

ふけゆけば聞えきにけり衣手の田上山(たなかみやま)のさをしかのこゑ

鹿聲兩方

秋風のさむく吹く夜は山邊より野べより鹿の聲ぞきこゆる

山鹿

おく山のおくのあはれをよそまでも知らするものはさを鹿の聲

谷鹿

○まねくすゝきの恨み　折角招いてゐる薄が恨みに思ふ

小夜ふけて音すみわたる谷河のをちに聞ゆるさをしかの聲

田家鹿

宵の間とたゆみてねたる程なれやかりほ近くもさを鹿のなく

鹿爭交花

萩にのみむつれて見ゆるさを鹿はまねくすゝきの恨みなるらむ

秋夕

殊さらに寂しきものは荻の葉の風もおとせぬゆふべなりけり

秋夕雨

軒端まで立ちおほひたる夕霧はやがて雨にもなりにけるかな

旅秋夕

ゆふされば野にも山にもたつ霧のはれず物思ふ旅の空かな

稻妻

打ちわたす山田の原のひとつ庵よるさへ見ゆるいなづまの影

待初鴈

秋くれば雲居の鴈ぞおもほゆる誰が玉章を待つとなけれど

霧中鴈來

朝霧のはれぬ空行く鴈がねはよるの道とやなほ思ふらむ

月前鴈來

ひとりのみ我は月みる秋のよに友よびつれて渡るかりがね

月前曉鴈

横雲のたなびけりとも見ゆるかなありあけの月に渡る鴈がね

鴈おつる所

鴈がねはま近くなりぬ足引の山のふもと田さして落つらむ

霧

すむ人はいかにいぶせく思ふらむ霧にこもれる秋の山里

河霧

わけのぼる道だに見えぬ朝霧の中にとゞろく木曾のやま河

ぬば玉のよどの河霧ふかけれど舟ひく聲はまがはざりけり

關霧

鈴鹿山關屋も見えぬ霧のうちに朝たつ駒の音ぞきこゆる

渡霧

淀河のつゝみも見えぬ夕霧に舟よぶ聲の聞えけるかな

水郷霧

鵙のなくつゝみの梢ほの見えてしらみかゝれるよどの川霧

田上霧

我が門の小田のはしり穂ほの見えて今ぞ朝霧はれそめにける

田家霧

たちこむる夜霧の内に見ゆるかな小田守る庵のともしびの影

駒迎

今もかも駒むかふらんむ逢坂の山邊を月はたちのぼりけり

月

あまりにもあかき影かな久方の月は夜をや忘れたりけむ

桐の葉はまばらになりていさら井の水影さむき秋の夜の月

翫月

櫻さく野山にあそぶ春はあれどあかぬは秋の月夜なりけり

惜月

今ぞしる小鹽の山は秋のよの月の入りぬる名にこそありけれ

有明月

○駒迎　桂園一枝一四三頁の註參照。

○いさら井　水の少なき井。

おきぢはら露のひかりになりはてて有明の月は影しらみけり

月前風

月もやゝかたぶく頃になりぬれば吹くとはなしに風ぞ身にしむ

月前雲

はなれぬと見し村雲を吹きかけて風こそ月のくまはなしけれ

○月のくま　月の光の曇りに出合ふこと。

月前露

そよとだに風は音せぬ梂の葉の月に光るや露にはあるらむ

うちさやぐ音静まりて竹の葉の露にぞ月の影はたまれる

山月

みる／＼も山の端たかくなりにけり待たれしよりは早き月かな

閑山月

かくばかり月もすみける山里を友なしとのみ思ひけるかな

林月

松杉のこのましのぎて照る月の影おもしろき山の下いほ

水邊月

山河をてらせる月のあかければ夜もさでさす人ぞ見えける

○さで　さで網、魚をすくひとる具、萬葉集一「下つ瀬にさでさしわたし云々」

月照瀧水

おちたぎつ瀧の岩ねにちる玉のかずを見せたる秋のよの月

濱月

立ちならぶ松より外のかげもなし濱のしらすのあきの夜の月

磯月

汐みてば磯もとゆすりよる波にかけみだれちる秋の夜の月

尾路にて島月といふ事を

はる〲とうたの島輪にやく鹽の煙も見ゆる秋の夜の月

古寺月

おもひいでば後も心ぞすみぬべき初瀬の寺の秋のよの月

水郷月

ふけゆけば月すみわたりわたの邊の大江の岸に秋の風吹く

里月

ふけゆけば川音すみてこもりくの初瀬の里の月ぞさやけき

山家月

山里にこざらましかばかくばかり蟲の音すめる月をみましや

○磯もとゆすり　磯の根を搖り動かして。

○こもりくの　初瀬の枕詞、萬葉集一「隱口の初瀨の山は眞木立つ荒山道を云々」

閑居月

人とはぬ庭の苔路を行きかへりこよひもひとり月を見るかな

古宅月

かくばかり荒れても見ゆる故郷に住み殘りたる秋の夜の月

園月

村雨のふりたる園の山株の上ににほへる秋の夜の月

我が宿のはぎの花園つゆしげみよるは月こそさかりなりけれ

明月照古松

月ふけて四面に風なき夜半なれどさすがに松の聲はありけり

月前筏

ひるだにもあやふく見ゆる山河を月のひかりにさす筏かな

月下旅行

月ゆゑによる行く道をしらずして急ぐ旅とや人は見るらむ

旅月

何ばかり遠くへだてし家路とて月をしみれば思ひいづらむ

月の歌の中に

いでて見むと思ひし月は山の端に早く出でてぞわれを待ちける

すむ月をあはれと思ふは我のみと思へばよそに笛の音ぞする

はつき十二日今宵月いとあかしみな人と藤井寺にのぼるあるじのあはざりければ

月夜よし来とまでこそはいはざらめ訪ふを空しくあはぬ君かな

八月十五日夕つかたより俄にこゝちそこなひて月をも見ずして

此の夕いかにと思ひし村雲は月のほかにもかゝりけるかな

長月十三夜あかしにて

都人ふるさと人もしらじかじ今宵の月をこゝに見むとは

ゆくさくさ見つるあはぢの島なれど今宵は更に珍らしきかな

わが世にてふたゝびあはむ景色かはよく見て行かむ淡路島山

野分

野分だつ庭のさまこそ哀れなれちらぬ木の葉も枝にしをれて

曉擣衣

里人のうちもたゆまぬ砧にはまけてぞ秋の夜も明けにける

雞擣衣

○ゆくさくさ　往くさ来さ。

○打明かしけれ　打は接頭語。

○きせ綿　眞綿を菊の花にかぶせたもの、此の綿にて顔を拭ひ身を撫でて老を忘れ齢を延ばすといふ

○なほしもふゝめるは　未だ蕾んでゐるのは。

あし垣のまぢかき宿のきぬたゆゑ我もねでこそ打明かしけれ

江邊鶉

みしま江の蘆かり小舟さしすてて歸る夕にうづら鳴くなり

葛風

たえ〴〵に水のながるゝ谷河の岸根の葛葉かぜになみよる

九月九日

きせ綿に露とるよりは菊の花たゞさかづきにうけて飲みてむ

かざしの菊

けふかざす菊のなほしもふゝめるは千世遙かなる驗なりけり

菊

長月の長く咲くとも菊の花めでのさかりは今日にさりける

菊初開

なが月のけふを待ちける菊の花遲しとのみも思ひけるかな

濱菊

舟よせて見ばこそわかめきの國のしらゝの濱の白ぎくの花

閑庭菊

菊の花うつろふ見れば人しれぬ宿にも霜は尋ねきにけり

移山亭の菊のもとにて酒のみして

きくの花さきたる園に夢を見ばいかにねたしと蝶の思はむ

紅　葉

そむるかと見るより先に一葉づゝちるは櫻の紅葉なりけり

さぬきにて思紅葉といふことを

いざゆきて早も見てこむ此の雨に錦おるらむあやのまつやま

紅葉淺深

さほ山のはゝそが中に色こくも見ゆるは何の紅葉なるらむ

山　紅　葉

たちのぼる河霧あかく見ゆるまで小倉の山は紅葉しにけり

河　紅　葉

山川の底のさやけきかぎりをばうつる紅葉の色にこそしれ

庭　紅　葉

我が宿の櫻もみぢは染めたるを春見し友はとはずぞありける

暮秋紅葉

○はゝそ　楢の古名

けふくるゝ秋ともしらずもみぢ葉の色そめまして ふる時雨かな

ものへゆきて

なほざりに思ひてきつる山里の道はみながら紅葉なりけり

をんなどもの紅葉ひろふところ

茸かると出でし少女らもみぢ葉のちる木の下に日や暮すらむ

月前秋風

曉になりやしぬらむ久方の月かたぶきて風ぞ身にしむ

秋風擣松

鹿の音はまだきかねども高砂の松こそあきの聲たてにけれ

秋雨

ふる雨をわびて鳴く夜やきり〴〵す聲寒くなる始めなるらむ

秋夜長

幾度とねざめの數をかぞへてぞ夜の長さをば知るべかりける

秋野

夕風の身にしむ野邊を分けくればこほろぎ鳴きてはぎが花ちる

秋色

○あはた山　山城國如意岳、日岡峠華頂山の總稱。

野邊みれば千草の花ぞにほひけるいづれを秋の色といはまし

秋聲

しぐるれど色もかはらぬ山松のいかでか秋の聲はたつらむ

秋興

秋山のもみぢを見ると分け入りてしかなく里にひと夜ねにけり

來む秋は萩女郎花うゑそへてまがきの中をあきの野にせむ

秋眺望

しら浪のたちめぐらせるわたつみの沖つ島山紅葉しにけり

秋の山を望む

ゆふされば鹿の鳴くなるあはた山峯にも尾にも霧ぞたちける

秋旅

草まくら野にも山にも見し月のあはれをいつか家に語らむ

よもすがら鳴く蟲の音をあるじにてしらぬ野原に旅寢せしかな

秋のうたの中に

鴫の聲やみてくれゆく木の間より夕月さしてあらしたつなり

月影のさし出でてこそ山もとの里のかぎりは顯はれにけれ

○道のながて　遠き路。
○あたらしの月の光　惜しき月の光。
○獨り見ば　此の隈なく照れる月を獨り見たのではそのかひもなかつたであらう。
○今宵はと　もしあきらめて寢てしまつたら此のさやけき月を見なかつたであらう。

鳴きつゞく道のながての蟲の音にをり〳〵まじる水の音かな
今宵とてとひくる人もなき宿にあなあたらしの月の光や
物思ふ事のしげさはあかつきの蟲の聲にもおとらざりけり
まつ蟲の聲もつゞかずなりにけりいかに夜長き今宵なるらむ
秋山のみねのあらしも落ちそひて高くきこゆる水の音かな
獨り見ばくまなきかひもなからまし友こそ月の光なりけれ
秋草の花折りもたぬ人もなしいづれの野邊の歸さなるらむ

人々とよみける實景百首の中に

夜もすがらそぼふる雨のやまぬかな明けばまづ見む萩の上の露
久かたの月のさかりの近づけばならひ顔にも曇る空かな
染めもあへぬ木の葉ぞまだき散りまがふ村雨さそふ風にまじりて
暮れそめていとゞさやかに見ゆるかな雨ふりかゝる萩の上の露
今宵はと思ひ捨ててもねましかば更けてさやけき月を見ましや
雨によりとくさしこめし閨の戸を又押しあけて月を見るかな
浮雲の心は猶もしられねばたゞ今の間の月をこそ見め
萩が花ちりそめにけり村雨はぬらすばかりと思ひしものを

秋風にはぎの上葉のかへれるを蝶のゐるかと思ひけるかな
曇りぬといひても月は見すてじむ蟲の鳴く音をいかにかもせむ
蓮葉のつゆの光も身にしみて秋さむくなる雨のおとかな
ふけて後はれし月かな秋の夜の長くぞものは待つべかりける
はるゝ夜はわれとさはりて明かしけり月に契りのなき今年かな
庭の面のはちすのうへは暗くして松にさしたる月の影かな
いづこぞや鳴く山鳩の聲はして夜はまだふかし有明の月
立ちかへりまた見む秋も遠ければ一夜は寐なむはゝそばの本
秋霧のはやくも思ひ立ちにしを何にたゞよふこゝろなるらむ
かにかくに思へばくるし秋の田の唯ひたぶるに思ひ立ちてむ
一夜々々のこりすくなき此の頃の月や我が身のわかれなるらむ
故郷にをしきわかれやなかりけむ鴈は早くも渡りきにけり
このたびのわかれにしりぬ蟲の音のよわり果てたる我が心をば
時過ぎしはちすにあたる雨の音のほと〳〵ゆかずなりぬべきかな
思ひたつ難波堀江のみをつくし驗なくてはあはじとぞ思ふ

○庭の面の歌　明暗の對照が面白い。

○秋霧の歌　次のかにかくにの歌と共に述懐である。

さほ山のはゝそ吹きまく木枯のおとより秋はくれてゆくらむ

殘秋

野も山もみながら枯れて露霜のさむき朝けに鴈がねぞする

九月盡

とゞまらぬ秋の心やしりつらむ招きたえたる花すゝきかな

九月盡曉

ゆく秋はけふを限りと夕霧の立ちいでてしばしながめけるかな

庭鳥の鳴くまでいねずなりにけり今宵ばかりの秋ををしみて

閏九月盡

重ねても悲しきものは長月の二つある年のけふにぞありける

冬之部

山家初冬

柿の葉のおちてたまれる山里は時雨の音のたかくもあるかな

海邊初冬

霰うつあらゝ松原かぜあれて冬めきわたるすみの江のうら

時雨

しぐれの雨ふり初めしより岡のべのかしの下道乾くまもなし

深夜時雨

限りなきあはれをしれと小夜中に人しづめてもふる時雨かな

水郷時雨

苫舟のうへには月のさしながら時雨ふるなりひらかたの里

寐覺時雨

靜かなる寐覺ならずば松風にまじるしぐれをいかで知らまし

落葉

夜嵐はふきたゆみたる曉のには寂しくもちる木の葉かな

水もなくあせたる庭の古池にあたら紅葉ぞちりたまりける

白菊の色かはりぬと見えつるは紅葉のちりてかゝるなりけり

柞ちる片山かげをよるゆけばぬれぬ雨こそふりかゝりけれ

しもべわらはのちり敷きたる紅葉はきよするを

おのづから拂ふ嵐もあるものを何手もたゆく紅葉かくらむ

禁庭殘菊

○柞　はゝそ、樹の古名。

きくの花うつろひにけり百敷のみ垣のうちも霜やおくらむ

霜

月かげに枯野の尾花ほの〴〵と見ゆるや霜の結ぶなるらむ

曉霜

ほの〴〵と明けゆく庭の松の葉の霜吹きみだる木がらしのかぜ

夕霜

風寒みくれゆく岡の椎の葉のうへにぞ霜の色は見えける

寒草

枯れはつる草の原こそかなしけれきのふ花見し所とおもへば

月照寒草

やたの野の淺ぢおしなみ置く霜の上にてりたる冬のよの月

原寒草

秋萩の花にしかなく時すぎてあさしも寒しかすが野のはら

江寒蘆

冬ふかき湊入江のかぢ枕蘆のさわぎに夢もむすばず

水鄉寒蘆

○かぢ枕　楫を枕とする舟旅。

あしの葉の枯葉をわたる風の音に寐覺悲しきみしま江の里

池氷

更け行けばともねのをしも音をぞ鳴く池の氷やとぢ增るらむ

湖氷

小夜千鳥なきてあかしし朝妻の山陰見ればこほりしにけり

古渡寒氷

千鳥なくやすの川との朝氷あさふむこまの音のさやけさ

井氷

我ひとりくむ山の井の朝こほりとぢ初めしより解くる日もなし

石間氷

夏だにも寒しといひし奥山のいはがね清水こほりゐにけり

冬月

霜さゆる山田の原の稻ぐきのうへにこほれる冬の夜の月

高ねより木のまとほりて谷川の氷を照らす冬の夜の月

宵のまゝ霜置きたりと見ゆるまで庭にさしたる冬の夜の月

冬月西

○朝妻山　琵琶湖畔にある。

○あかくむ　閼伽、佛に手向くる水を汲む。

こがらしの風にみ雪はちりながらいとゞ冱えゆく冬のよの月

月影はそらにこほれる曉のあかくむ袖はいかにさゆらむ

閑庭冬月

やり水はこほりにむせぶ冬の夜の庭すごきまでてれる月影

寒山月

水の上にうつれる松の影さむしあらしの山の冬の夜の月

椎柴霜深

ときはなる椎柴の葉の上にこそ寒きかぎりの霜はおきけれ

河千鳥

やなぎちる夕風さむみ淀河のきしかたつきて千鳥なくなり

湊千鳥

みなと風吹きしづまれる小夜中にわが舟ちかくちどり鳴くなり

磯千鳥

ぬば玉のよのふけゆけば波風のあら井のいそに千鳥なくなり

わたつみの沖つ汐風さむからし磯山もとにちどりなくなり

潟千鳥

○あぎさ　小鴨に似たる鳥。

夕汐のみちぬ先とやちぎりけむ干潟にきても千どり妻よぶ

水鳥

鳥にむれ波にうかべるをし鳥は紅葉ののちのにしきなりけり

廣澤の池さむけれやみづ鳥はきぬがさ山のかげになくらむ

水の上に浮べるよりもあし鴨の渡る羽音ぞ寒けかりける

渡つみの沖の洲崎と見えつるはおりゐる鴨の續くなりけり

島山の一むらきりて見えつるは渡るあぎさの遠目なりけり

江水鳥

夕されば蘆の葉みだりおく霜にかもがね寒しみしま江の里

湖上水鳥

夜をこめてうきねの鴨ぞさわぐなる朝妻舟は出でやしぬらむ

鴨

ふけゆけば氷の上に月さえて鴨がね高し廣澤のいけ

人の家に水鳥あり

中島のもみぢの後のひとさかり鴨つくいけを人に見せばや

網代雪

○ひを　氷魚、琵琶湖宇治川に産し、秋より冬にかけて捕る。

○笹並の　さゝなみの、ひらの枕詞。

かゞり火の影しらみゆく曙にはつ雪ふれり宇治のあじろ木

網代の上に翁をり

網代木にひをのみまつとせし程に我が年さへもよりにけるかな

霰

笹並のひら山おろし吹きあれてあられよこぎる瀬田の長はし

木枯にふきのこされしならかしの上にみだれてちる霰かな

風霰晴紛々

にはかにも窗うちたゝく夜嵐に竹をあまりてちるあられかな

曉霰

打ちしきる霰のおとに驚きて見ればしらめる閨のひまかな

篠霰

我がやどの庭のさゝ原小夜ふけてさわくをきけば霰なりけり

竹霰

小夜更けて竹のはたゝくあられには雀やゆめを先づさますらむ

たちつゞく竹の林にかぜあれて霰みだるゝ嵯峨のやまざと

小夜更けて竹のはやしにふる霰ものおそろしき音ぞきこゆる

霙

竹の葉のさわぐ嵐にみぞれふり山里さむくなりにけるかな

雪

朝戸あけて驚けとてやぬば玉の夜のまに雪の降り積るらむ

竹むらの雪は深くやなりぬらむつぎて聞ゆる下折のこゑ

山家待雪

あやにくに今年は雪の遲きかな新山ずみの心しらずて

山家雪

しら雪の積りはてたる山里は人をば待たず春をこそまて

淺雪

待つ人につげもやらむと思ふまにかつきえ渡る庭の雪かな

初雪はけさふりそめぬ我が宿のいさゝむら竹なびくばかりに

深雪

しづの女が都にかよふ道絶えてゆきにこもれる大はらのさと

積雪

山里のゆきは高くもなりにけりとふ人なしに年やくれなむ

○新山ずみ　初めて山家住居をせるもの。

○いさゝ　いさゝかなる。

○ふゞきをぞ今日は　夏には夕涼によく來る此の岡に今日は吹雪を避けたることよ。

薄暮雪

玉水のおとこそ軒にきこゆなれ雨にやなりし夕暮のゆき

夜雪

村すゞめ鳴く聲せずば竹のはによる降る雪を何にしらまし

深夜雪

宵のまのあかきは雪の光にて今こそのぼれ山の端の月

嶺雪

雲にのみかくれて見えし伊吹ねは此の頃雪にあらはれにけり

さゞなみの比良の遠山雪ふればみやこの物となりにけるかな

谷雪

春をまつ外のことこそなかりけれ雪の底なる谷のしたいほ

岡雪

ふゞきをぞ今日はよきける夕すゞみきつゝならしの岡の松陰

琴笛をとりて遊べるかぐら岡あな面しろの雪のあしたや

關雪

あふ坂の關のいはかど雪高しこゝろしてゆけ今朝のたび人

○棚なし小舟　船棚の無い小舟。

○やま山　摩耶山。和田岬も共に攝津にある。

○山田のそほづ年老いにけり　山田の案山子は頭が白くなつてゐることをいふ。

瀧雪

布引のたきのしら絲梢までかけて見えしは雪にざりける

海上雪

かきくれて晴れたる跡の海みれば島山しろく雪ぞふりける

湖雪

すはの海氷のはしに雪ふりてさらにも跡のたえにけるかな

浦雪

初雪のふれる浦々見つゝゆく棚なし小舟誰かのるらむ

崎雪

あづまやのまや山おろしさえ〳〵て和田の岬に雪降りにけり

田雪

雪ふれるあしたに見れば足引の山田のそほづ年おいにけり

名所雪

はれやらぬ雲の中より見ゆるかなあたごの山のみねの白雪

都雪

みやこだにかくふる雪を北山のおくの里人いかにわぶらむ

禁中雪

九重の玉しく庭にふるときは雪の心もまばゆかるらむ

古寺雪

はつせ山うきよの外の心地して雪のうちにも七日こもりぬ

雪中友

待つ人を今か〳〵と思ふまに雪は深くもなりにけるかな

雪中待人

けさのまをきても見よかし我が門の柳のえだにふれる白ゆき

竹雪

まだきより雀の聲ぞさわぐなる竹のよごめに雪やふるらむ

松雪

けさ見れば池はなみなく氷るてみぎはの松にふれるしら雪

朝日さしはやはだらにぞなりにける粟田の山の松の白雪

常磐なるまつにはあれど白雪のふるにはあへず老いにけるかな

けふばかり花とも見むと思ひしをくづれ初めたる松の雪かな

疇中雪

あさぶすまきそのみさかを越えなづみ雪の底なる旅寝せしかな

寄雪旅

橇にのるこしの山路はしらねども我が馬なづむ雪ぞくるしき

雪のふりたるあした

常よりもすゞめの聲のとくするは雪に塒やうづもれぬらむ

こむ人ははやもきて見よ我が宿の松のしら雪おちはてぬまに

狩場雪

かり人は猶一よりときほふなり暮るゝもわかぬ雪の光に

野鷹狩

放ちたる鷹のゆくへも見えぬまで雪かき暮すくるす野の原

野に狩したる

狩にきてたゞにはいなじいなみ野の薄押しなみ雪はふるとも

炭竈

おく山に時雨の雲やいやたつと見しは炭やくけぶりなりけり

降る雪をしのぎてもたつ煙にぞ炭やく里のいそぎをば知る

遠炭竈

○あさぶすま　麻衾、きの枕詞。

○いやたつ　彌立つ。いよ〳〵立つ。

()まがひ果てまし　炭やく頃と思はなかつたならば炭がまの煙を雲とまちがへてしまつたであらう。

此の頃とおもはざりせば炭がまのけぶりは雲にまがひ果てまし

埋火

埋火のあたりは冬も春なればかたらひ草もしげるなりけり

おこせどもおこり兼ねたる埋火はすみつき難き世を思へとか

爐火少

うづみ火の消えぬる後にねざめして明くるをのみも待ちわたるかな

夜爐火

埋火はふたゝび灰となりぬれど猶冬の夜は明けずもあるかな

爐邊閑談

うづみ火の下の心もうちとけて語る友こそたのしかりけれ

早梅勻

梅の花にほはざりせば山里はちかづく春をなにに知らまし

折早梅

梅の花たゞ一枝をたをるとてみながら雪を落しけるかな

雪中早梅

さけりとて見もわき難き雪の内に人だのめなる梅が香ぞする

木枯

大方は明けしつまりて我が山のまつにのこれる木がらしのかぜ

霜月

神な月しぐれの雨に染めかへてにほひし菊もかれはてにけり

豊明節會

よそながら思ひこそやれ雲の上に今宵かへさむ少女子が袖

（今宵かへさむ少女子が袖　五節の舞姫を想ふの意である。）

冬野

時雨にも雪にもならで晴れにけりかさめの山のみねのしら雲

冬日

晴るゝかと見ればしぐるゝ山の端の雲のうちにも日は入りにけり

冬星

置きわたす野路の霜さへ見ゆるかな冱えわたりたるほしの光に

冬雨

さむしとて出でて見たれば久方の雨には雪もまじらざりけり

冬朝

いたくのみさえ透る夜は朝牀となりてぞやすきいは寝られける

○ちはらかや原　茅原萱原。

鳴きたつる鴫の羽かぜに霜ちりて行く袖さむし櫨のしたみち

冬夕

しぐれつるちはらかや原露みえて夕日さむけき岡越のみち

山風のさえ渡りても暮れにけり今宵はゆきにならむとすらむ

冬山

吉川山まつのあらしに雪ちりてきのふ遊びし所ともなし

冬磯

墨染の夕になればともの浦のありその千鳥鳴きつれてゆく

冬川

もみぢ葉は流れ盡きたる冬河の水の色こそ寒けかりけれ

冬井

たゝきてもしばしは汲みし山の井の冰り果てたる年の暮かな

冬山家

足引のみやまの奥の冬ごもりとひくる人ぞとふにはありける

歳暮

ふりぬとてをしむべき身にあらねども猶悲しきは年の暮かな

としどしに年は變れどけふの日を惜しむ心はかはらざりけり

歳暮急

春をまつ事のしげきにまぎれつゝ年は惜しますなりにけるかな

山家歳暮

年木こり急ぐけしきに山里は春のちかづく程をしるらむ

歳暮松

家毎にたて渡したる松みればあすをもまたで春はきぬらむ

除夜

惜しむべき年の一夜を時もりのいそぎて春になすつゞみかな

しはす晦日いさゝけなる事もしはてのちけふの心をよめる

山里はのどけきものとけふぞしる世の人皆の急ぐさまみて

たらちねの母の病もいゆときく思ふ事なきとしの暮かな

大空の心は我に似たればやけふともいはず長閑けかるらむ

長閑にもけふの一日を暮すこそ世にわび人のとり所なれ

松たてぬ宿とな人はおとしめそのどけき事は誰かまさらむ

我が如くけふをもしらぬ人もあれな年の終りのほぎみき酌まむ

○松たてぬ宿と　松も立てない宿と見下すなよ。
○ほぎみき　祝の酒。

うつせみの憂世の人はいとまなしたにの鶯やとひてもこむ
このひと夜早くあけなむ皆人のはつよろこびの聲を聞くべく

しはす晦の日あすは四十といふ齢になりぬべき事を思ひて

けふまではさすがによそに思ひつる老といふ物にあすやなりなむ
我またぬ老のたぐひて來る春を嬉しきものに何おもひけむ

戀之部

戀

世の中に何の思ひはありといへど身さへ燃ゆるは戀にざりける
旅にして朝よひさらぬ面影はあひ見む後や身をはなるべき
戀しぬといふ名は今に立ちぬべし何かいとはむ人目ひとごと
こひによりにごらむ名をも厭ひしは人しれぬまの心なりけり
人めはたもらむの心今はなしうつゝなきかな戀のみだれは
今ははや思ひ絶えてもありなましこゝろのくせぞ怪しかりける
さみだれの雨ふる池のひしづるの亂れて戀のしげきこの頃
雪とけぬ春のみ谷のうぐひすのこもりて物をおもふ頃かな

○老といふ物　四十を初老といふ

○人めはたもらむの心　人目にかからぬ様にとつゝしむ心。

○心のくせぞ怪しかりける　思ひ切らんとして思ひ切れぬ心のくせを怪しと見たること。

よと共に面影さらぬ戀なれば夢もうつゝもわかぬなりけり

人言をいとふこゝろも今はなしいざ打ちこえむはゞかりの關

戀の山またもいらむと思ひきやこりぬは人のこゝろなりけり

月草のつゆばかりみし人にさへまづつくものは心なりけり

つひにかく頼む心のおくて田をかりの契りとなにおもひけむ

思

後の世をかけて悲しくあるものは思ひにしづむ此の身なりけり

我も思ひ人も思はむ中だにも戀は苦しきものにやはあらぬ

あやにくに思ひのみます心かなつらき氣色を見るにつけつゝ

思はずとおもはばさてもあるべきをまけじ心のつきにけるかな

同じ名に流れはすれど思川わが深きにはいかゞくらべむ

この世にてならむ戀とも思はねど思ひやまぬは心なりけり

春雨のうちふる野邊の若草のもえのみまさる我がおもひかな

年月をこりもつくさぬなげきかないかにやふかき物思ひの山

戀の歌の中に

別れなば思ひややむと思ひしは思ひのほどを知らぬなりけり

○はゞかりの關　陸奥にありしといふ關、後拾遺十九「やすらはで思ひ立ちにし東路にありけるものをはゞかりの關」

○つひにかく頼む心　かくも熱心になる道をなぜ假の契りなどというのだらう。

○思川　思ひ歎くことのたえまなきを川水の止まらぬに譬へていふ

しるやいかにみ谷がくれの鶯のしたごもりしてやみし心を

大かたは人もかくやと思ふこそはかなき戀の心なりけれ

戀の海いかにあれたる名殘とてけふまでさわぐ心なるらむ

かくばかり終日しげき人めにもまぎれず物をおもふ頃かな

さかしらに人をば何にいさめけむ戀はかくこそ苦しかりけれ

初戀

しをりなき戀の山路にいり初めて先づまどひける我がこゝろかな

たらちねの母や知るらむ人しれずこの頃思ふ我がしたごゝろ

春たちて鳴くうぐひすの初聲のうひ〳〵しかる戀もするかな

いかにして戀のこゝろを知りつらむ怪しきものは涙なりけり

いひ出でむすべも知らねばこもりぬの下にのみして歎く頃かな

言出戀

あし曳の山下水のしたにのみしのびし戀をもらしつるかな

いはずしてつひにやまむと思ひしはまだしき戀の心なりけり

忍戀

人こふる思ひの上にくるしきは見えじとしのぶ心なりけり

○こもりぬ　草などに隱れて見えぬ沼、下の枕詞にも用ゐる。萬葉集「こもりぬの下ゆ戀ひあまり白波のいちじろくいでぬ人の知るべく」

○見えじとしのぶ　表に顯はすまいと忍ぶ。

今更に言にはいでじ陸奥のしのぶのやまの露ときゆとも

いかばかりうき名はをしきものなれや命にかへて猶忍ぶらむ

下にのみ戀ひつゝわたるとしつきの心はいかに人にかたらむ

春淺みこほりかさなる谷河の打ちいでぬ戀はくるしかりけり

戀ひ死なむ時ちかづきぬ此の世にはしられでやまむ契りなるらむ

秋山の小松が下のしのすゝき忍びていもに戀ふるころかな

しのぶ山分けそめしより我が袖はしげきが露にぬれぬ日ぞなき

さ夜ふけて人靜かなるのちにこそ忍ぶる戀のねはなかれけれ

足曳の山ほとゝぎす忍びつゝなくとも人にしらせてしかな

住の江の浦にかりつるなのりそのなのりそ人に我がさゝめ言

みちのくのしのぶの山の下露はわが人しれぬなみだなりけり

隱れぬの下にのみなく我が涙いつかは人にあはれといはれむ

忍久戀

しのびても過しきにける年月をひとりかぞへて歎きつるかな

忍涙戀

墨染の夕になれば人しれず袂にたまるわがなみだかな

○しのぶ山　岩代國信夫郡にある

○秋山の小松が下のしのすゝき　しのびてを言ひ出す緣語。

○なのりそ　海藻。萬葉三「みさごゐる磯囘に生ふるなのりその名はのらしてよ親はしるとも」

日に添へて戀のやつれのしるからばつゝむ涙もかひやなからむ

忍びつゝ年月わたるこゝろをもしらぬは袖のなみだなりけり

忍經年戀

年をへてけふまでつらき人はあらじ悔しく何に忍びそめけむ

共忍戀

諸共に死なまほしくぞ思ほゆる生きて此の世にひとまなければ

人よりも先にいはじとせし程に忍びがたくもなりにけるかな

聞戀

音にのみ聞きつる人のいかなれば面影にさへ立ちわたるらむ

奥山のしげきが中に鳴く鳥の聲はきけども見るよしのなき

音のみに聞きても人をこふるかなはかなきものは心なりけり

傳聞戀

いつのまにいかに契りし人なれば聞くよりやがて戀しかるらむ

見戀

音にのみ聞きししら川しらずしてあらましものを見初めつるかな

千早振神のみまへのみしめ繩みしこそ戀のはじめなりけれ

○ひとまなければ　人目がうるさいから。

〔みしめ繩〕一二三句、みしの序詞。

初見戀

いかならむ契りなればか渡つ海のみるよりさきに袖のぬるらむ

時々見戀

妹とわが宿の中垣ひまをあらみ折々見れどことはかはさず

白地戀

我ながらあまりはかなき心かないづれのひまに思ひ初めけむ

夏草にすがるほたるの影ばかり見し人故にこがれわびつゝ

未通詞戀

夏の野のしのの小薄いつしかもほに出でて人にかくと知らせむ

不見書戀

言つても絶えて聞えずなりぬれば天とぶ鴈の音にのみぞ鳴く

空しくてたび〳〵歸る玉章のつかひにくくもなりにけるかな

被返書戀

手に觸れてやりつとだにも聞かませば返さむよりは嬉しからまし

見書増戀

みるからに戀しさまさる玉章をなぐさむ物と思ひけるかな

○白地戀　あからさまなる戀。

○手に觸れてやりつ　手に取つて破つた。

尋戀

かくれにし月のゆくへをとひかねて心の闇にまどふ頃かな

祈戀

千早振神もたすけぬ我が身とはつれなき戀によりてこそしれ

天地の神のゆるさぬ我が戀をわりなく人にうらみつるかな

祈久戀

みしめ繩かけて久しき月日をばさすがに神もあはれとおもはむ

かくまでに驗みえぬは神といへど戀の心はしらぬなるらむ

かくてのみやみねと神も思ふらむ祈るかひなき年ぞ經にける

神だにもうけぬ月日は經にけれどならぬ戀とは定め兼ねつゝ

契戀

諸ともに後せの山はかけたれど解けむとけじは心なりけり

君にわが契りし心たがはめや父はいふとも母はいふとも

かはらむ後の心はいかゞせむ契る言の葉けふはたのまむ

たのめどもおほつかなきは松山の波の心を知らぬなりけり

世の中にたのみがたきは後瀬山後とたのめし契りなりけり

（後瀬山　後に逢ふ時。

○おほつかなしや松山の浪　相手の作り心を疑ふ事、古今集に「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ」

はかなくも行末かけて契るかなあすの心もしらぬ身にして

契久戀

ちぎり置く年月あまた越えぬればおぼつかなしや松山の浪

契夕戀

まぎれても來むといひつる黑染の夕とゞろきの時は來にけり

憑戀

霞立つ春日ならねど契りおくけふのくるゝは遲くもあるかな

不逢戀

何事もかはりのみ行く世の中に人を賴むぞかなしかりける

いとせめて苦しき心しらせばやさすがに死ねと人は思はじ

うぢ河の早瀨を下す柴舟のしばしといひし時もすぎたり

中々にあはでやみなむと思ひしはせまらぬ時の心なりけり

いかばかり世は長閑なるものとてか猶までとのみ人のいふらむ

いつまでと命もしらぬ世の中に逢ふを待つこそ悲しかりけれ

來不留戀

來だのめとはいふなとつ稻妻の影ばかり人のみゆらむ

○今宵となりてさはりなむとや　今宵となつて障りがあるといふのか。

○こゝらの恨み　多くの恨み。

偽戀

君こそはしらせ果てつれ大方に思ひてすぎしいつはりの世を

待戀

たのめつる時過ぎぬれば來ぬものになしても人を待ち渡るかな

連夜待戀

棚機にまさる月日を待たせつゝ今宵となりて障りなむとや

この月もまた月夜にぞなりにけるたのめし人は影も見えずて

忍待戀

忍びつゝ人待つ宵はあやにくにねよとの鐘の遲くもあるかな

逢戀

後さらにまさる思ひはありなめどまづ嬉しきはあふ夜なりけり

逢ふよりも先にとけぬる心かなこゝらの恨みいづちゆきけむ

初逢戀

あひ見れどまだ打ちとけぬ心かなあすよりのちも物や思はむ

忍逢戀

山陰の松に生ひぬるしのぶ草人しれずこそあひ見そめつれ

祈逢戀

神をさへ恨みつるかな三輪山の杉のしるしはありけるものを

逢増戀

逢ひ見ての後ながからむと思ひきや戀はくるしきものにぞありける

適逢戀

思ふ事いひにくくこそなりにけれあまりに疎き年の經ぬれば

語戀

まちえたる人まのかひぞなかりける語らふ事の數を殘れば

別戀

何事もなるれば馴るゝ習はしの外なるものは別れなりけり

たぐひつゝある身ともがな曉のあかぬ別れをよそにおもはむ

物は皆なれゆくものをあかつきの別れのみこそ變らざりけれ

なれも又つまとは寢らむ庭つ鳥などあかつきを急ぎ初めけむ

淺茅生になく蟲の音の亂れても悲しきものは別れなりけり

たのまれぬ後の事をも契るこそ別るゝときの心なりけれ

深夜別戀

○まちえたる人ま　待ちて漸く得たる人の居ない間。

○たぐひつゝある身ともがな　常に添うてゐる身となりたいものだ

世に忍ぶ戀のくるしさ鳥がねを待ちてわかるゝ一夜だになし

後朝戀

おき別れ歸る道には出でしかどいくべくもあらぬ今朝の心か

なきそほち歸る道には東雲の霧のまぎれぞ嬉しかりける

逢ひ見しもわかれしも皆夢にしてけさの心ぞあやしかりける

別れこしけさの黒髪亂れつゝ思ふとだにもいかで知らせむ

むら鳥の立ちわかれこしあしたこそ更にも物は悲しかりけれ

逢不遇戀

ありしにも増りてねたくあるものは逢ひ見て後のつらさなりけり

あら磯によする白浪立ちかへりふたゝび人をこふるころかな

名立戀

有りて世にいはるゝ事はいかゞせむなき名の立つぞわびしかりける

歎無名戀

名とり河わたるとなしにいかなれば浪の濡衣我はきぬらむ

顯後悔戀

水底にいりぬるにほの顯はれて後こそこひはくやしかりけれ

○水底にいりぬるにほ　にほは鳰又かいつむり、戀の深瀬に入りたる身をたとふ。

顯變戀

今更に厭ふ浮名はなきものをつゝむといふや變るなるらむ

增戀

きのふよりけふはます田の池水の深き心をいかでしらせむ

增思戀

大方にやみなましかばやみなまし今更いかゞせむすべのなき

切戀

命にもいまはかへぬる戀なれば何の浮名をさらにいとはむ

いかにして告げもやらましけふまでは猶戀ひ死なでありとばかりを

被厭戀

厭ふとて人の心はいかにせむ憂きに死にせぬ身こそにくけれ

變戀

夏ひきの手引の絲のいとはれて今更世には經なむものかは

枯れ果つる人の心にくらぶれば冬野は霜もおかぬなりけり

あともなく人は忘れし世の中にいつまで我が身ものおもふらむ

俄變戀

○大方にやみなましかば　大方にしてやめたならばやめられたであつたらうに。

○冬野は霜もおかぬなりけり　霜おかぬに非ず人の心の冷たきことを強くいはむためにしかいふ。

いつはりの世をば早くも知りしかど君獨りをばたのみけるかな

負戀

天地の神のちからも及ばぬはつれなき人のこゝろなりけり

稀戀

何とかやえがたき法にたとへてし花思ほゆる君にもあるかな

あはれとやすぐる月日も思ふらむまれなる中にくだく心を

一とせに一たびにほふ花よりもいや珍らしき君にもあるかな

久戀

思ふ事ならの都のならずして戀する身こそふりはてにけれ

新玉の年はひさしくなりぬれど物忘れせでこひわたるかな

つれもなき心もさすが替るやと年月をこそまち渡りけれ

遠戀

久方の雲居の鴈の行きかひをたのむ中ともなりにけるかな

近戀

垣まみに見つゝ月日は過ぐれども思ふとだにもいふ由のなさ

舊戀

○ならの都の　ならずの序詞で、ふりにかゝる。
○新玉の年　新玉のは年の枕詞で、こゝでは新年の意ではない。

紅のいかにしみける心とてむかしの人の戀しかるらむ

隔河戀人

事もなく駒打ちわたすほどなれど君が淺せにさはりてぞふる

忘戀

玉鉾の道にも人に逢ひてしが我はしるやと問ひこゝろみむ

被忘恨戀

忘れ草君があたりに生ひしより身は住の江のうらみてぞふる

恨戀

戀ひ死なむいのちぞ今は急がるゝ恨みなひとにとめじと思へば

立ちかへり我が身をうしと思ふこそ人のつらさの限りなりけれ

今更ににくくも人のなりぬるかあやしきものは心なりけり

打ち出でていふにはるけむものならば人に恨みはとゞめざらまし

大方の人をばかくも思はめやうらみぞ戀のかぎりなりける

久恨戀

葛の葉のうらみ〳〵のはて〳〵は遂に契りもかれぬべらなり

恨不來戀

○打ち出でていふにはるけむ　口に出して言へば胸の晴るゝものならば。

小夜中のかね聞くまでになりにけり又やこよひも我をはかりし

無過彼恨戀

つらきをも忍びてあれば葛の葉のかへりて人に恨みられつゝ

絶　戀

恨みのみあまたつもりし中なれど絶えての後はかなしかりけり

欲絶戀

中々に忘れず顔のおとづれは聞かぬつらさに勝るなりけり

朝　戀

夜もすがら思ひあかして朝髪の亂るゝこゝろ人は知らずや

夏別戀

枕だにとらで別れし夏のよは夢ともえこそ定めかねつれ

秋　戀

秋風はをぎの上葉をおとづれて先づひとりねを驚かすかな

秋きてぞ鹿もなくなる空蟬のひとの戀にやかはらざるらむ

秋別戀

あき風の音の悲しきこのごろを君に別れてひとりかもねむ

○ひとりかもねむ　獨り寝る事かよ。

冬忍戀

冬山のから木が中にうぐひすのしたに鳴きつゝ戀ひわたるかな

みかり野の鳥の落草霜枯れてかくれかねたる戀もするかな

冬不逢戀

をし鳥のおもひかはせる中にだに氷の關はありとこそ聞け

冬恨戀

かれ〴〵のわが中にこそ殘りけれ霜より後の葛のうらみは

歳暮戀

人なみに春まつ業はいそげども心の中は君をのみこそ

旅戀

さゝ枕旅のかりねと思ひしを忘れぬふしの殘りけるかな

恥身戀

もとよりも思ひ知りぬる身の程を戀によりてもなげく頃かな

恨身夢

つれなきも憂き身からなる戀なれば我をおきては誰を恨みむ

思ふこと誰はかなふと聞かねども憂き身のみこそ悲しかりけれ

○冬山のから木　から木、枯木に同じ。

○覺めての戀　さめて後のやるせない心。

夢後戀

ぬば玉の夢にも見ばと思ひしは覺めての戀をしらぬなりけり

あやにくの夢にもあるか忘れても有りにし人を思はしめつゝ

人しれず思ひし人を夢に見てさめてのこゝろ誰かしるらむ

戀煙

冬されば峯に炭やくゆふけぶりいちじろく立つ我が浮名かな

○今來の山　大和國吉野郡にある紀「いまきなるをむれが上に雲だにもしるくし立たば何か歎かむ」

戀山

立ちかへり今來の山は我がせこが我をいつはる名にこそありけれ

○こはたの里　宇治の木幡の里。

戀里

忘れじといひてしものを山科のこはたの里のこはいかに君

影ばかり見ゆめる君は久かたの月の桂の里にすむらむ

戀鏡

とる度に音のみなかるゝ鏡かなうつらぬ人の影をこひつゝ

戀筆

いとせめてやる方のなき折々は筆のすさびの外なかりけり

戀涙

宵々にぬれて乾かぬわが袖は戀のしげ木のしづくなりけり

戀　命

終にはと頼みわたれる年月を今は命の待たじとやする

物ごしに見たる

山の端の松の葉ごしの三日月のほのかなりつる人ぞ戀しき

おもひやす

たのみなき人をあふみのやす河のやすばかりにも戀ひ渡るかな

怪しくもやすとや人は思ふらむしたの心のめにし見えねば

ふみたがへ

思ふ其の人の宿をばとひよらむふみ違へつといひはなしつゝ

文かへす

中々にとりても棄てばすてななむ遣りし玉章かへすべしやは

いひながらあはぬ

なか〳〵にねたき心のそふものは逢はむといひてあはぬなりけり

門さしたる

今宵はとたのめし人の思ひきや門さしこめてあらむものとは

○やす河　野洲河。瘦すの序詞としてゐる。

○したの心　底の心、内心。

かたみ

見るたびに袖こそぬるれ玉手箱涙をさへやこめておきけむ

昔おこせたる文

あともなく忘れし人の玉章の今ものこるぞ悲しかりける

なき名

うつせ貝空しき戀に年を經て名高のうらの名こそたかけれ

知らずともあらがひ兼ねつにくからぬ心からなるなき名と思へば

人の娘に名たちたる

山守のもりたる花ををらずしてありしあひだに名は立ちにけり

親のこと人にあはせたる

狩人のとりてあはする鷹すらも思はぬ空にすゝむものかは

こと人を思ふ

はま千鳥さもこそ我にあと絶えめこと浦にさへ通ふべしやは

寄月戀

山のはに契らぬ月は出でにけり何にいさよふ今宵なるらむ

寄雨戀

○うつせ貝　海底にある肉の脱けたる貝。
○名高のうら　紀伊國にある。

○こぬ人のかごとの雨　來ぬかこつけを言うてゐる内は未だしもよいがかこつけをも言はなくなつては一入つらいとの意。

こぬ人のかごとの雨は中々にはれての後や袖ぬらすらむ

寄雪戀

けぬが上にいや降り積るしら雪のとけぬは戀の恨みなりけり

寄煙戀

しほがまの浦の苫やにたつ煙たつともよしや君によりては

寄山戀

よの人のかくのみ惑ふ戀の山いかなる神のつくりおきけむ

寄關戀

心だにつねに通はば關守のうちぬる程のひまなからめや

なぞも又ゆるさぬ中となりぬらむ一たびこえし逢坂のせき

寄江戀

古河の入江にたてるみをつくし驗なくても年ぞ經にける

いせの海をのの古江のふるされて蘆のねにのみなかれけるかな

寄瀧戀

瀧のごと落つるなみだの音あらば世に我が戀はとゞろきぞせむ

寄河戀

○足引の片山川の　一二三句わかれての序詞。

○かけてのみ戀ひわたれ　唯心に掛けてだけをつて戀ひ慕へよ。

○こひぢ　泥と戀路とを掛ける。

○こもりぬ　四七一頁註參照。
○ぬなは　蓴菜。

足引の片山川の川またのわかれて後ぞ人はこひしき

寄湊戀

大船のよするみなとの波よりもさわぐは戀の心なりけり

寄浦戀

いかでかく名高の浦となりにけむ波のよるのみ通ひしものを

寄門戀

今ははや人のけはひもなきものをいつまで門に立ちまたすらむ

寄簾戀

かけてのみ戀ひわたれとや玉垂のをすの隙より人の見ゆらむ

寄菖蒲戀

あやめ草ねたくぞ人に引かれける同じこひぢに生ふるものから

寄藻戀

山河に生ふる玉もの下にのみいつまで我は思ひみだれむ

寄沼繩戀

こもりぬに生ふるぬなはの人しれずたゞよひてのみ年をふるかな

寄柱戀

雲の上の人とてなどか戀ひざらむ月の桂も折るといふものを

寄鳥戀

春の野に鳴くやひばりの雲がくれ見えぬ人をも戀ふる頃かな

今もくる雲居のかりはありけれどわが爲かくる玉章のなき

春の野にあがるひばりの空にのみなりもゆくかな戀の心は

夕ぐれの空鳴きわたるかさゝぎは物思ふはしとなりにけるかな

寄獸戀

大野らに野がひすてたる荒駒のあらき心をとりぞかねつる

重荷ひく牛に增りて苦しきは戀のなげきを積む身なりけり

千里ゆく駒のしるしもなきものは人の心の遠きなりけり

寄蛛戀

たのみさへ絶えぬる宵にさゝがにの蛛のいかなるふるまひぞこは

寄玉戀

年を經てしられぬ事を歎くかなその唐人の玉ならなくに

昔きくその唐人の玉ならで知られぬ戀のなげきをぞする

寄鏡戀

○蛛のいかなるふるまひ　蛛のふるまひにて待人の來るを知るといふ故事があり、允恭紀に「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蛛の振舞かねてしるしも」

○唐人の玉　七曲の穴ある玉を送つて絲を通してよと云つた唐人の難題をといた蟻通明神の故事、枕草子にある。

増鏡かたみがてらにとゞめしはつらき心を見よとなりけり

衰へしかゞみの影はつれもなき人の心の見ゆるなりけり

寄櫛戀

玉櫛のなぐしはあれどかひなきは戀の亂れを解かぬなりけり

寄本結戀

ゆひそむる初本結のはつかにもかゝり初めぬるわがこゝろかな

寄紐戀

かくしのみ賴みわたらば下紐のとけぬ心はあらじとぞ思ふ

寄琴戀

物おもひ慰むやとてかき鳴らす琴の音にさへ人ぞこひしき

寄鼓戀

さりともと賴むこゝろも打絶えぬあかつき告ぐる時のつゞみに

寄弓戀

ひきも見でいかゞ知るべき梓ゆみ人の心のよらむ寄らじは

寄絲戀

をとめ子が針につけたる白絲のつきてもみまくほしき君かな

○ひきも見でいかゞ知るべき　萬葉一「水　かる信濃の眞弓引かずして弦はぐる業を知るといはなくに」と趣似てゐる。

寄綱戀

淀河を上る小ぶねのひき綱のたゆむまもなし戀の心は

寄斧戀

杣人のとる斧のえのくつばかり久しき年をこひわたるかな

寄淚戀

君によりいくらの年をなきつらむ盡きせぬものは淚なりけり

寄夢恨

さもこそは現に人のつらからめ夢にもねたき事のみゆらむ

雜之部

雲浮野水

飛ぶ鳥のかげは絶えたる夕ぐれの野澤の水に浮ぶしら雲

雨

あしたより空打ちくもり村雨のけふもこぼるゝ袂のうへかな

そほふりて雨はやむべし足曳の山邊を見れば雲もつゞかず

浦風に雨よこぎりてはし立の松のなかばは隱れけるかな

山風や今あま雲をはらふらむ軒の松むらしづくおつなり

朝たちてわがこえくれば雨まじり竹葉みだるゝ山科のさと

夜あらしの竹の葉わたる音すなり雨晴れがたになりやしぬらむ

村雨は降るよりさきにはれしかど猶流れける庭たづみかな

しとゞにも雨のふる日を山里にひとり籠りてくらしぬるかな

草枕ねやもりあかす夜の雨にあらそふものは涙なりけり

こもりくの初瀬の山に旅寝して檜はらの雨をきく今宵かな

雑の雨といふことを

雨のあしなびきて見ゆる雲間より懸け渡したる虹のはしかな

夜雨

いとゞしく寝て明かせとや音をこふるよるしも雨のふるらむ

心のみすみわたりつゝ久方の雨のふる夜は寝られざりけり

いひしらずわびしきものは久方の雨降るよひのあけぬなりけり

何となく打ちしめりたるけしきにて音せぬ宵の雨をしるかな

海邊雨

あめの日は寂しかりけりわたつみの沖つ島山くもに隠れて

○こもりくの　初瀬の枕詞。

○何となく打ちしめりたる　此のあたりの歌静かな雨の日の情調をしのぶによい。

鹽屋煙

浦風やあらく吹くらむもしほやく苫やの煙たちものぼらず

朝

露置きし若葉の上に風ふきて夏はあしたぞ凉しかりける

何となく物嬉しくもあるものはおきいづる朝の心なりけり

夕

思ふ事ありもあらずも墨染の夕の空はかなしかりけり

墨染の夕のやまの山松は見えずなるまでながめつるかな

薄暮嵐

もみぢ葉のちりかふ色も見えぬまで吹きくらしたる夕嵐かな

ある夕暮

笹の葉にわたる嵐を忘れつゝ荻ある宿と思ひけるかな

野も山も皆くれはてて夕風のかなしき音ぞそらにのこれる

松風

夕ぐれは暫しやみつる松風の音また軒にひゞきつるかな

夕やみ

○こゞしき　険しき

宵々に月は遅くもなりゆくか梅のさかりのあたら頃しも
夕やみの庭のさまこそ寂しけれたゞやり水の音ばかりして

夜

とにかくに明かすすべなき此の宵は物思ひをやなぐさめにせむ

山

ひたすらに心すむとはなけれども憂世には似ぬ山のおくかな
よしの山深きこゝろはしらずともいざ一春は花にくらさむ
世の中はうるさきものと知りしかどさらば山にも入らむとはせず
寐覺するまくらの下に聞ゆなり高野のやまの谷のまつかぜ
かくばかり巖こゞしき奥山に春秋しらで誰かすむらむ

澗水

ゆく／＼も心すめるは谷水のおとの聞ゆる山路なりけり

野

鹿もあらばすゑてもこまし秋草の花おもしろき春日野の原
春秋の野邊のけしきは異なれど同じ心をやりにこそくれ
うつらかる人だに見えぬ深草の冬の野邊こそ寂しかりけれ

かれたてる萩の古枝に霜置きて朝かぜ寒しくだら野のはら

舟岡のすそ野の原に風吹けば尾花が波ぞたちかへりける

しなが鳥ゐなのふし原ふしがてに嵐の音を聞くこよひかな

河

足引の山した河にさでさして鮎子とるべき夏はきにけり

月の中の名におへればや桂河ながるゝ水のさやけかるらむ

磯波

あら磯のさし出でてみゆる高岩の上に浪かく潮みつらしも

海邊

わたつみの海邊の宿は世と共になみより外の音なかりけり

寄水雜

流れくる音のさやけき山水をかけひにとりてすむ人やたれ

橋

橋はあれどかちわたりせむいさゝ河いさごも淸し水もさやけし

山路曉

夜をこめて出ではしつれど鈴鹿山關こえぬまに明けはてにけり

○しなが鳥　ゐなの枕詞。
○ゐな　有馬山のあたりにある。
○ふし原　柴原。
○さで　さで網。

細徑

夏深みしげる草葉に小山田のかりほの道はなくなりにけり

鷄鳴過關路

夜ふかくも出でにけるかな逢坂の關屋にきてぞ鳥もなきける

關路

これやこの昔のせきの跡ならむ岩かど高きあふ坂のやま

驛路鈴聲

逢坂の關の岩かどいま越えてくる駒ならし鈴の音する

水鄉

淀河をよ舟にのりて我くればともしび見ゆるひらかたの里

○ひらかたの里　攝津枚方の里。

漁村

ほす網に夕日のかげはかゝりつゝかたへ暮れゆく海づらの里

名所瀧

世と共に雨と聞えて落ちくればふるの瀧とはいふにやあるらむ

名所市

はりまなる飾磨の市のしかすがに棄てはてがたき此の世なりけり

古渡舟

夏されば筑波少女がとるといふ桑名のわたりけふぞわがよる

社頭夕風

ゆふかけて我越えくれば手向山もみぢ散らしてあらしたつなり

社頭水

鏡にもまさりて清くあるものはみたらし河のながれなりけり

瑞籬

夏山の青葉が中に見ゆるかないなりの山のあけの玉がき

古寺

あか棚のしきみの枯葉打ちみだしゆふべかなしき山風ぞふく

山寺夜坐

嵐だにおとせぬ夜の山寺にきても心をすましけるかな

くる人のけはひだにせぬ山寺は夜をもる犬のこゑも聞えず

晩寺僧歸

山かぜに吹かれて歸る墨ぞめの袖さむげにも見えわたるかな

故鄕

○あか棚　佛に供物などを供へる棚。

○やまがつ　山賤。

故郷の庭あれまさる年毎に咲きますものは菫なりけり

我をしも昔すみける主人とは庭の草木はしらずやあるらむ

住み捨てしむかしの宿をきて見ればとなりにだにも人音のせぬ

故郷雨

板間もる雨の音こそかなしけれむかしの事も思ひいでつゝ

山家

紅葉みに入りくる人は多けれど我が柴の戸はとふ人もなし

うき事の聞えぬ山はありながら入りて住む人なき世なりけり

雪ふらばひたふる道は絶えぬべし木の葉かきわけとふ人もがな

こゝろみに暫しといりし奥山はおもひの外にすみつきにけり

山里はこゝろやすくぞ思ほゆる鄰といふもやまがつにして

山家雨

足曳のやました庵の雨の日はまつふく風のおとも聞えず

山家夜

夕されはふくろふの鳴く山陰に馴るれば馴れて年ぞへにける

山家送年

さびしさもなれぬる山の奥なれど憂世の友はいまも忘れず
花もみちとひくる人も年々にうとくなりゆく山のおくかな

山家水

松風もふかぬ時あり山ずみのうれしき友は谷水のおと

山家路

久しくもうき世にいでずありしまに我が通ひ路はあれ果てにけり
ありとても誰かはとはむ山里の道ふりかくすけさの雪かな

山家鳥

山里の庭にきて鳴くかし鳥のかしましき世はこゝも變らず

山家鳥馴

名もしらぬみ山の鳥の聲すらもなつかしきまで馴れにけるかな

山家人稀

何ばかり深き山にもあらねども猶くる人はまれにざりける

山家夢

すてし世の事のみ夢に見ゆるかなしたの心はいとはざるらむ

田家雲

○かし鳥　かけすの一名。

○とぢながらにも　柴扉は閉ぢたるまゝでも月日は過ぎるのである。

小山田の鳴子の音のひまぞなき時雨のくもは空にきほひて

閑居

世はなれてすめる宿には久方の月ばかりこそさし入りにけれ

鶯のきつゝ鳴くなる聲のみぞわが隱家のはるにはありける

何ばかり憂世遠くはなけれども長閑なりける此のすまひかな

閑居友

朝夕にこと問ひかはす友なくばさすがに山は寂しからまし

盡日掩柴扉

とふ人もなき山かげの柴の戸はとぢながらにも明けくるゝかな

かきほ

秋ちかく見ゆる垣ほのけしきかなやゝ朝顔もたちのぼりつゝ

松歷年

さだまれる數になしつゝ千歲をも松は久しと思はざるらむ

世の中にあまた年をば經にけれど松はうきをも知らず顏なる

嶺松

朝夕にたちもはなれぬ白雲は高ねの松の友にやあるらむ

山松はなほくれかねて見ゆるかな入日のあとの雲のひかりに

松の上に夕ゐる雲のうごくかな嵐やみねを今わたるらむ

暮山松

むらさきの雲をかけても暮れにけり入日のあとの嶺のまつ原

竹

むら雀こゑしづまりて暮れわたる竹の林に嵐たつなり

山館竹

鶯のなく竹むらを我がやどのものとなしても住む人はたれ

窓竹

さ夜更けて又むら雨はふりくらむ竹の葉風ぞまどたゝくなる

去年のなつ一もとうゑし呉竹は窓くらきまでしげりけるかな

蓬生

遁れても猶世にあれば事しげしいかで蓬が奧をたづねむ

苔

春雨のふりてはれぬるあしたこそこけの緑のさかりなりけれ

路苔

(一)松の上に夕ゐる雲の歌　動靜の對照興ある歌である。

草の葉はみな霜がれに成りはてて苔のみ青き山かげのみち

江菅

ゆふされば涼しかりけり湊江の岩もと小菅風に亂れて

猿

夕附日いりてをぐらき秋やまのひはらが奥にましら鳴くなり

梢猿

ゆふまぐれましら友よぶあき山の梢をみれば雲かゝりけり

川邊鳥

ところ〲水は流るゝ山川のいさごの上に遊ぶ鳥なに

瀬戸鳥歸

夕されば谷の戸うづむ白雲のうちにこゑして鳥かへるなり

羣鶴向月飛

月影は霜にしらけし明方の雲居とよみてたづなきわたる

名所鶴

夕さればたづがね高し大とものみつの浦風さむくふくらし

蘆間鶴

○谷の戸　谷の入口。

○大とものみつ　大伴は枕詞、御津は難波の御津。

たづがねのあまた聞ゆる住の江の蘆邊や千世の所なるらむ

鷄

ぬるまなき夏の夜なれど庭鳥はあかつき起きを忘れざりけり

曉鷄

わが宿の松にぞ月はかゝりけるうべこそ鷄は鳴きはじめけれ

朝たちて舟まつ岸にきこゆなりみづ野の里の庭とりのこゑ

庭鳥のこゑも亂れてきこゆなり有明の月は今しらむらむ

蟹

汐みてば入江のあしまくゞりつゝ隱るゝ蟹のあなう世の中

うなゐ子が蟹の子のいと小さきを硯の蓋にのせて翫びけるを

かきのせて硯のふたに置く時はたゞ水入のかめとこそみれ

漁舟

今もかも網おろすらむあま小舟船ばたたゝく音の聞ゆる

蓑

ふる雨は蓑とほるまでなりにけり今はやどらむ日は暮れずとも

燈

○ぬるまなき　寐る間なき。

ともし火のうつる影こそ動くなれ水底よりや風はふくらむ

闇のひましらみて後の燈火のあるかひもなき身をいかにせむ

曉燈

ともし火の影守りつゝあかつきの寢覺の牀にもの思ふかな

閑居燈

今はとてかゝげすてても寐ねつらむともしび暗き窗の内かな

鐘

木がくれてこゝにも寺やありつらむ近くも響く鐘の音かな

晚鐘

ゆふづく日入りにし山のあなたより聞ゆるかねの音のはるけさ

古寺鐘

波の音にうちまじりても聞えけり石山でらの入あひのかね

弓

ともすれば世にぞひかるゝたつか弓たつ事かたき我が心かな

ふる弓のつる絕えにける我なれやひく人なくて年の經ぬらむ

笛音

○今はとて云々　燈暗き閑居を外より見て歌つたのである。

○たつか弓　手束弓、弓といふに同じ、たつの緣語。

さ夜更けて月かげ高くなるまゝにいとゞすみぬる笛の聲かな

書

のこし置く聖(ひじり)の文は有りながら誠の道はしる人ぞなき

くるとあくと何に心を慰めむ文といふ物のなき世なりせば

靜讀古人書

ふる文のなからましかば今よりの秋の長夜を誰とかたらむ

歌のこと論ひけるついでに

天地の心ぞやがてひだたくみ何のことばのよきをもとめむ

柿本人麿

石見の海沖つ深みる深くともかづかざらめや思ひ入りなば

山邊赤人

天雲のたかくたふとき君が名はふじの下にも立ちがたきかな

參議篁

おきの海波たち返る身なれどもしばし憂世のさがは遁れず

喜撰法師

曉の雲間の月のかすかなる光よりこそあらはれにけれ

○おきの海　篁は才學抜羣にして帝の寵愛があつたが遣唐使の事より罪せられ隱岐に流され後又召し返された。

○曉の雲　古今集序に喜撰を評して「詞かすかにして始終確かならず いはば秋の月を見るに曉の雲にあへるが如し。」

○祇王、佛　淸盛の愛せる白拍子この事は平家物語卷一に詳しい。

○實方中將　實方、試樂の時遲れてかざしの花を賜はらず吳竹の枝を折つてかざしとし後の例となつたこと十訓抄卷の一に見える

源右大將

みつ汐のひるが小島のこもり菅顯はれにけり時のきぬれば

祇王

立ちかはる人のこゝろのあら波にこの世離れしあまのつり舟

佛

女郎花同じさが野の秋風をかねて知るこそあはれなりけれ

齋藤別當

錦著ていなむといひし故郷はやがてもしでの山にぞありける

實方中將

とりあへず折りてかざしし吳竹の世々のためしと成りにけるかな

弘基入道

吳竹の子を思ふふしの一つこそ遁れし世にも遁れざりけれ

兼好法師

誰が世にならびの岡の櫻花いろをも香をもしれる心は

浦島子

わたつみの神の少女にたづさはりあるだに家は戀しかりきや

樵夫

薪こる賤ともならば世の中のうきをおふには猶まさらまし
よの中をこりとこりにし果てなれや妻木とりつゝ山にすむ人

漁夫

海の上を浮きてへにける我が世をばなるゝ鷗ぞしらば知らなむ
妻子をものせて住むかな蜑小舟青海原をわがさとにして
大方もうきたる世とは思へども釣するあまのわざぞ悲しき

漁火

月はあれど又すて難きけしきかなこの夕やみのいさり火の影
かくばかり浪風あらき沖邊にもほの見え渡るいさりびの影

友

難波江のたゞ／＼しくも思ひしは友を得ぬ間の心なりけり
世の中をさけけむ人も津の國のなにはのみつの友はありてふ
敷島の同じ道ふむ人なれば知るもしらぬも親しかりけり

江戸なる阿元法師のもとへかへり言するついでに

うなしほに浮けるくらげの骨をなみ漂ひてのみ我が世すぎなむ

○みつの友　歳寒の三友松竹梅、或は白樂天の詩より詩琴酒をもいふ。

○うなしほに　海潮に。

○玉鉾の　みちの枕詞。

行路友

玉鉾のみち遠しともおほえぬは語らひ草をつめばなりけり

かり衣すそ野のをざゝかりそめの道にも友は嬉しかりけり

淺野讓が都に遊ぶとてむ月六日出で立ちけるに

霞だにまだしかりける初春のいつのまにかは思ひたちけむ

かたみにと思ひしあすの若菜をも獨りやつみて君をしのばむ

眺望

霞たつ春のうなばら見渡せばいとゞ果てこそ知られざりけれ

渡つみの島山くらくなるまでに同じところに見ゆる釣舟

朝眺望

朝びらき漕ぎ出でてゆく船見れば追手の風をほこりがほなる

湖眺望

ゆく船は片帆になりぬさゞ波のひら山風やふきかはるらむ

沖べより吹きくる波はからさきの松の音にもなりにけるかな

見るがまゝを

おきつ舟行くとは更に見えねども松のあなたに成りにけるかな

春秋野遊

春はきて菫つみにし野邊にまた月ゆゑ秋もひと夜ねにけり

述懷

やせ畠に作れる瓜の日をいたみなりたつべくもなき我がみかな

かくばかり厭はれ果てし世の中につれなくてふるわれや何なり

つらしとも憂しとも人を思はめやわが心さへ頼まれぬ世に

あやしくも變りもゆくか折々にいづれを己が心といはむ

よの中の人の心のくまみ河わたり見てこそ知るべかりけれ

世の中は苦しと思へばくるしきにいでや樂しと思ひくらさむ

述懷多

面白く野邊に遊べる駒みればほだしはおのが心なりけり

獨述懷

いかなれば我が身ひとつのゆゑにより思ふ心の千種なるらむ

人毎にかなしといへばよの中の悲しき人ぞしられざりける

寄雲述懷

雲だにも歸る山べはあるものを旅にたゞよふわれや何なり

寄月述懷

みちかけは月の上にもあるものを何とこしへに樂しかるべき

寄山述懷

かにかくにかしこきものは筑波ねのしげき人言ある世なりけり

述懷の歌の中に

かたつぶり汝だに家はもたりけりいつまで旅にふる身なるらむ

まどはずば誠のみちは知らじかし愚かなるこそ嬉しかりけれ

世の中の恥といふものを捨ててこそ安き道には入るべかりけれ

陸にてもすまるゝものと思ひしは魚の心のまよひなりけり

懷舊

數々のなき人しのぶはてくは我が身のあるぞ怪しかりける

閑居懷舊

つくぐと世にへし事を思ふかな柴の庵のよるのねざめに

夢中懷舊

夢ばかり嬉しきものはなかりけり昔の人にあふと思へば

羇旅

○むろの泊　播磨室津。盛衰記「高砂や尾上の松もすぎければ室の泊につきたまふ。」

まつ人はある身ならねど草枕旅といふ名ぞかなしかりける

大方も寐ざめがちなる秋のよを草のまくらに明かすころかな

旅

山がつがほたくゆらする宿にさへ旅の一夜はあかしけるかな

かちよりもゆかましものを風待つとむろの泊に日數經にけり

旅も今一日ふたひになる時ぞいよ／＼家はこひしかりける

旅宿雨

山風のさわぎしよりもねられぬは雨ふる夜半の旅寢なりけり

旅宿

寒き夜をふすまなくても明かしけり悲しき物は旅にぞありける

山旅

越えはててけふはと思ふ行末にまた見えわたるつゞらをりかな

羇中山

足引の山の高ねにくる毎に家のかたこそまづ見られけれ

羇中浦

みちのくのちかの浦には寐たれども遠き都は夢もかよはず

羇旅關

松風に夢もやぶれて悲しきは不破の關屋の旅ねなりけり

羇中衣

なくばかり妹は戀しくなりにけり旅の衣のまよへる見れば

羇中鳥

み山路を夜だちに立ちて我がくれば有明の月にからすなくなり
聞きなれぬ鳥さへ鳴きてきそ山の長きたびこそこゝろ細けれ

名所旅

都いでていつかと思ひし東路のさやの中山けふぞこえける

羇中思都

いとゞしく都の事の戀しきは月すむよはの旅寢なりけり
草枕あらしの寒くなるなべに都のゆめそ見えまさりける
都人もみちかざして遊ぶらむ時を旅にもすごしけるかな

曉旅

にはとりの聲をちこちに聞えつゝ曉だちの夜はあけにけり
さ夜深くたちぬと思ふを有明の月はうすくもなりにけるかな

○さやの中山　遠江國にある。西行の歌に「年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけりさ夜の中山」

○寒くなるなべに　寒くなるにつれて。

旅泊

雲まよふまや山風おろすなりわが舟はてむ和田のみさきに

旅泊波

大伴のみつの浦なみ音高くなりも行くかな夜のふけゆけば

旅泊夢

波風のひゞきの灘のうきねにも見ゆればみゆる故郷の夢

口なしの泊にて

繪にかけば筆も及ばず言にいへばげに口なしの泊なりけり

口なしの泊のけしき筆をなみこゝろにのみも染めてゆくかな

海路

はりまがた須磨の松原はる〲と白浪こしに見て渡るかな

風をなみ終日（ひねもす）こぎに漕ぎたれど淡路島根はなほぞ離れぬ

故郷へかへらむとしける時

時鳥聲のさかりを殘してもこの岡ざきを別れゆくかな

夢

うば玉の夢は浮世の外なれやなぐさむ事もかつは見えつゝ

○岡ざき　京都の岡崎。

うつせみのうつゝの夢の悲しきは驚くことを知らぬなりけり
昔こそまづは見えけれ夢路には遠きや近くなりかはるらむ

深更夢覺

うば玉の夜はまだふかき曉に寐ざめて物を思ひけるかな

曉寐覺

庭鳥のこゑはしきりに聞ゆれどしらみかねたる闇のひまかな

往事如夢

立ちかへり思へばかなし空蟬のうき世の事はみなゆめにして
しかりとてけふを現と思はねど昨日の夢ぞはかなかりける

無常

風わたる小篠が上の白露を此のよの中にたとへてぞ見る
露はなほ草の上にも置くものをうきたる此の身何にたとへむ
つゆを見てはかなきものと思ふこそ我を悟らぬ心なりけれ
早くよりはかなき世とは知りつれど思ひしまぬは心なりけり
思ひしむ心もなくてすぐすかな哀れはかなき世とはしる〳〵
見も聞きもならはずばこそ世の中のはかなき事をよそに思はめ

○見も聞きも　物を知るは悲しみを知ることをうたつた。

水の上の沫とこの身をおもひせば消えなむ事は歎かざらまし
消えぬまの露のいのちを頼みつゝいくらばかりの物思ふらむ
聲絶えてのちも見えける空蟬のからさへあはれ果てはとまらず
松竹のうへさへなべて悲しきはちとせの後を思ふなりけり

寄菊無常

ちよといふ菊の上には置きたれど露はこの世を忘れざりけり
菊の花つひにうつろふ色みれば久しきはても悲しかりけり

哀傷

空蟬の世はかくこそと見る每に先つ我が身こそかなしかりけれ

追悼

いつのまに數多の月日過ぎぬらむありと聞きしは昨日と思ふに

佛光寺の御殿より勸進し給へる開祖五百五十回忌追悼五百五十首の中寄雨懷舊

皆人のむかしを戀ふるなみだこそ御法の場のあめとふりけれ

塚村濟翁追悼ひと〴〵打見る所を十の題にわかちてかなしみの心をいふ

松風

○空蟬の　世の枕詞。

雨とのみ聞ゆる松のひゞきにも先つ降るものはなみだなりけり

胡蝶

庭にとぶ胡蝶をみても思ふかな花にしみにし人の心を

萩

大かたの宿にみるだに秋萩のしたばの色はかなしきものを

尾花

花すゝき招く心はしらねども昔戀しき目にぞつきぬる

はなち鳥

君まさぬやどの池水きてみればあはれ鴨すら友なしにして

かし

かしの實の落つるおとにも寐覺めけむ昔の人を思ひこそやれ

紀氏忌日とて法樂の心ばへにて題松の風をきく

かげ高き千年の松にふくかぜは昔のひとの聲かとぞきく

寄旅無常

音にきくそのわたり河君がゆく道にありとは思はざりしを

對菊懷昔

（紀氏　紀貫之。

（わたり河　三途の川。

秋毎にめでこし人のなければや今年は遲きしらぎくの花

無常を題にて人のよませたる

はかなしと誰か思ひし夢は猶むかしの見ゆることもありけり

神祇

千早振神のみ國と定まれる此の大みくに動きあらめや

大君のみ世つきせめや天地の神のみたまのあらむ限りは

我が身さへ尊くこそは思ほゆれ神のみ國におひぬと思へば

誰にかも問ひてしらまし久方の天つ神代のみちのまことを

大くら谷なる柿本の大御神に詣でて

いはみのや高津の山の松風のこゝに通ひて吹くかとぞきく

あかしがた沖つ汐路のはるかにも遠き昔のことをしぞ思ふ

釋教

たのもしきちかひの舟に乗りぬれば心にかゝるなみ風もなし

棹さしてをしふる縁はあるものを猶やしつまむ生死の海

如是相

そめわくる露の心はしらねども千くさに見ゆる秋の野の花

○高津の山　石見にある。萬葉二「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」

如是性

梅にほひ柳なびけどはる風のもとのこゝろは見る由のなき

如是作

空蟬のこのよの中に悲しきは釣するあまのしわざなりけり

如是報

さきの世に定まれる世を知らずしてけふの上をも歎きつるかな

聲聞界

わけそむる麓のちりの積りつゝつひに高根の月やみるらむ

餓鬼

津の國のなには堀江のほり／＼て沈まむ果てぞ悲しかりける

地獄界

めに見えぬ心のほのほ時となく燃えて苦しき身をいかにせむ

祝言

春花のさかり久しき大君のこのおほみ國いつにくらべむ

民草のしげりまさるは大君のみよかぎりなきしるしなりけり

我がやどの竹の林のかげしげみきるるすゞめも千代となくなり

殊更にたのしと人のいはぬこそ樂しきみよのかぎりなりけれ

寄天祝

久方のあまつ大空あふぐにもあまれる君が世にこそありけれ

寄日祝

玉くしげあくれば空に出づる日のいやあきらけき君がみ世かな
ひさ方の天つ大ぞらてらす日のあまねくもあるか君が惠みは
久方のあまつ日かげのくもりなく照りかゞやける君がみよかな

寄神祝

神風のいすゞの川のさゞらなみまなくぞいのる君が千年を

寄社頭祝

宮ばしらかげをうつせる鴨川の流れは世々につきじとぞ思ふ
いそのかみふるの社の新しく幾たびかはる君が世ならむ

寄都祝

うち日さす都の大路ゆく人のかぎりも知らぬ君がみよかな

寄郡祝

近江なるやすの郡は大君のみよしろしめす名にこそありけれ

〔註〕さゞら波　さゞ波に同じ、聞なくの緣語。

寄道祝

敷島のみちの昔にたちかへるみよに逢ふこそ嬉しかりけれ

寄榊祝

神の世に神のとりけむ榊葉の今も榮ゆるあめのかぐやま

寄竹祝

千尋ある陰になみゐて呉竹の嬉しきふしをうたふ春かな

寄弓祝

えぞ人のまろ木の眞弓なほき世に今こそかへれしき島の道

慶賀

秋の田の千町のいな葉打ちなびき今年もよしとうたふ聲する

松平越中守殿の五十の賀とて人のよませたる

みちのくの岩木の山の岩木まで君は千代もと思ふべらなる

杖

いはひつゝけふきる竹の杖こそは嬉しきふしの始めなりけれ

仙家

君すめばこゝも蓬が島なるを遙かにのみも思ひけるかな

（蓬が島）蓬萊山。

鶯千春友

鶯のなくはつ聲をもゝかへり千返り君はきかむとすらむ

初　鶯

うぐひすの初聲たかく聞ゆなり千年を祝ふけふのまとゐに

憐　月

昔よりめでのみ來ぬる月なれど猶あく秋はあらじとぞ思ふ

對松爭齡

いはくらの山松がえはうごきなき君が千年のしるしなりけり

祝

萬代をへなむものとや兼てより松と竹との陰はしめけむ

長田何がしが別業の松に鶴の子うみけるにほぎ歌よみてとあるに

萬代をふべき宿こそたのしけれ鶴のかひ子のかへるへるも

何がしが女ぎみむかへけるよろこびに

いかばかりのどけき春の宿ならむ今年はたつも諸聲にして

人の父をの子うませたる歡びの心を

ちよの影また重なれる男山いかにさかゆくしるしなるらむ

（鶴のかひ子　鶴の卵。

山田紳子をみな子生みて文月七日なゝ夜なるをほぎて

けふに逢ふ君が七夜に天の川河せのたづも千世やよぶらむ

何がしの家に子うまれたりよろこびいふとてたにざくに父君のみ心はさこそ

ひな鶴の千代のはつ聲きく時は誰もとびたつ心地こそすれ

子うみたる家にむつきつかはす

思へども千代は包みてやられねば嬉しき色を見するきぬなり

赤穗なる前川某がもとによろこび事あり其の故は長ければいはず其のいはひ歌

赤穗のやなはの前川かはらすも榮えむ後の秋ぞたのしき

八束穗のたりほの稻のいやたりに嬉しき年を君ぞつむべき

幸逢太平代

亂れたる昔をみする書なくば世はかくのみと思ひはてまし

○八束穗　たけ長き穗。

畫賛之部

山水のかたに

すむ人は誰にかあるらむ世の中の塵といふ物は知らず顏なる

山水のかた隱者めきたる人橋の上ゆくわらは琴抱きてしたがへり

松かげの苔のむしろは琴とりて我が遊ぶべきところなりけり

橋の上を行く人夕立にあへり

我が宿のまへの棚はし夕立の雨にきほひてくる人やたれ

雨中の山水のかた

夕立のふりも過ぎねばやま河のおとはまさりて聞えけるかな

海の邊の家舟さす人あり

うみづらの家には夏もなきものを何殊さらに小舟さすらむ

杉の上に月あり

片山の杉のはあらし身にしみてかたわれ月のかゝりけるかな

海の邊の松

風の音波のひゞきもはげしきはあら磯松のあたりなりけり

松の上に月ある所

松風にうき世のちりを掃はせてのどかにすめる宿の月かな

朝日出でたる所

○かたわれ月　弓張月に同じ。

〔朝つく日　朝日。〕

〔虎溪三笑の圖　桂園一枝九一頁に註參照。〕

〔深み草　牡丹の古名。〕

朝つく日出づるところの山松はいつとはなしに目なれけるかな

筏くだす所

のどかなる景色に見ゆるいかだしは春の心にのれるなりけり

松のもとに波たてり

春ふかき入江の松のかげなれど波は白くも見えわたるかな

竹の上に月あり

有明の月いでてこそくれ竹の葉風の音はすゞしかりけれ

松の上に鷹のゐるかた

かくながら世をば經ぬとも鷹人の手にはあらじと思ひ顔なる

虎溪三笑の圖(かた)

ゆくりなく橋はわたれど山水の清きこゝろは忘れざりけり

とまり船のかた遠く帆ひとつふたつ見えたり

けふも叉くだる帆かげの見ゆるかな我が追手とはいつかなるらむ

松のもとに牡丹咲きたり

松かげに咲きてにほへる深み草千とせをとめる花とこそ見れ

淡路島のかた

あはぢ潟日はかたぶきて夕汐にながせる船の帆かけ涼しも

松の上に月出でたり

松の上にかゝれる月の鏡には千代の影こそうつるべらなれ

山水のかた橋の上にむかひたてる人あり

何事を語りあふとは知らねども塵ははなれし景色なりけり

鴉歸るところ月あり

くれぬまとおのが塒やいそぐらむとく夕月になりぬるものを

富士

神代よりふりおける雪の今までに消えぬは富士の高嶺なりけり

ふじのねの見ゆる所は數多あれど名さへゆかしきみほの松原

天雲のたゞよふ見ずばふじのねの高き限りを何にしらまし

富士の山の麓に船はしりたる

富士の嶺の雪ばかりかは行く舟も松の景色も夏なかりけり

富士の山霞かゝれり

時しらぬ高嶺の雪のおぼろにも見ゆるや春の霞なるらむ

ふじの山の夏のかた

○望の夜　十五夜。

○時しらぬ　富士を形容する詞。

富士のねの殊に白くも見ゆるかな望の夜ふりし雪にやあるらむ

日の出の心ばへにや富士をあかくかきたるに

くれなゐの色ににほへるふじのねを誰白妙の物といひけむ

ふじのかた武藏野薄いとしげく生ひたる

ふじの嶺の雪より寒し武藏野のすゝきが上をわたるあき風

富士のすそ野薄あり

時しらぬふじの裾野の花薄穂にいづる見れば秋にざりける

富士のかた空に鶴とぶ

田子の浦むれとぶ鶴をふじのねの雪のちるかと思ひけるかな

富士の山麓の山々紅葉あり鷹とぶ

紅葉する山にかり鳴く秋なれどいよ〳〵白し富士の高嶺は

ふじのすそに櫻あるかた

春がすみたなびき隠すふじの嶺の裾野の雪は櫻なりけり

福壽草のもとに犬の子ある所

犬の子の尾ぶりを見てもしるきかな待ちよろこべる春の心は

籠に若菜つみたるかた

かたみにも餘りて見ゆる若菜かなこはたが摘める千歳なるらむ

雪中梅

いちじろき香をば知らずて梅の花ふり隠しつと雪や思はむ

梅に朝日さしたるかた

梅が枝にかゝる朝日はうぐひすの聲の外なる匂ひなりけり

梅に雀止れり

鶯やいかにねたしと思ふらむおのが羽風に花をちらさば

柳の上に月あり

よるも猶風になびける青柳の上に霞める月のかげかな

花さきたる所月おぼろなり

さ夜ふけて嵐の山をきてみれば花こそ月のひかりなりけれ

八重櫻のかた

限りなき春のにほひをひと花にとりかさねたる八重ざくらかな

〻をすのもとに花ちる

櫻花ひとりもちるか玉だれのをす卷きあげてみる人をなみ

ほらの貝に櫻をりそへたる

○かたみ　籠をいふ。

○すゞかけ衣　山伏の服の上に被ふ衣。

山ぶしのすゞかけ衣うつくしきはなの匂ひにしみやしぬらむ

春の野のかた

すみれ咲く春の野べにて日はたけぬ山の櫻はあすや尋ねむ

春の野すみれ咲きたる所ひばりあり

野遊びの人のたえ間も大空に雲雀の聲はやすまざりけり

歸る雁花ちる

散る花をつばさにかけて行く雁はつとにと思ふ心なるらむ

藤さきたる所蝶鳥あり

ながくのみ咲き殘らなむ藤の花春はこてふの夢となるとも

時鳥

時鳥なくを待ちてや山のはに入りのこりけむ有明の月

大宮人の時鳥聞きたる

鳴きすてて過ぎにけるかな時鳥こゝろとまらむ宿のあたりを

瀧落ちたる所を時鳥とびゆくかた

岩とよむ音にまぎれて過ぎぬめりみ山をいづるあたら初こゑ

撫子

撫子の花のさまこそあはれなれたが垣根とはしらぬ物から

四條納涼のかた

大日枝の夜嵐いまやおろすらむ動きそめたる燈火のかげ

秋の野のかた

さを鹿はいづれを妻とさだむらむ萩をみなへし今さかりなり

秋の野鶉あり

白妙の誰ころも手にうつすらむ鶉なく野のつき草のはな

萩

朝露の置きわたしたるほどなれやいろこく見ゆる秋萩のはな

萩にこがらめあるかた

葉がくれにきゐる小鳥を知らずして露にたわめる枝かとぞみし

白萩

置くとしも花には見えぬ白露をかはる下葉の色にこそしれ

あしのもとに鴈たてり

蘆の葉のかげに隠れてあさるかなおくれし友や知らで過ぐらむ

鴈のうち見かへりたる

○つき草　露草の古名。

○こがらめ　小雀。

○置くとしも　花にては知れなかつた露を下葉の色づくによりて知ること。

聲高く蘆べのかりぞよばふなるおくれし友や近づきぬらむ

秋山に鹿たてり麓に薄あり

小男鹿はまねく薄にめもかけでつらき妻のみ戀ひわたるらむ

菊

とこしへにちる事しらぬ花なれば千世を植ゑたる心地こそすれ

さもこそは散る事しらぬ花ならめ移ろふとだに見る時のなき

菊の花いろ／＼有るところ

菊の花色は千ぐさに見ゆれども千歳のみこそ變らざりけれ

菊の花咲きたる上に月あり

照りまさる月のひかりは晝なれど露こそ見ゆれしら菊のはな

黄菊の上に黄蝶とぶ所

やどりせし花の露にや濡れつらむおなじ色にも見ゆる蝶かな

山川きく咲きたる所龜あり

菊の露つもりてなれる淵にこそうべ萬代の龜はすみけれ

月の前の菊

くれそめてくれぬ光は久方の月のかげそふ白菊のはな

翁もみぢの折枝をもちてゆくかた

秋山は今ぞさかりと龍田姫誰につげやるつかひなるらむ

山の紅葉時雨ふる

かくばかり色こく見ゆるもみぢ葉を猶あかずとや打ちしぐるらむ

月の前に時雨ふり紅葉ちる

神な月しぐれをさそふ木枯のかぜにきほひてちる紅葉かな

雪中山水のかた

ふる雪は晴れて月夜になりにけりほの見えわたる沖つ島やま

嵐やま雪のけしきをけふ見れば松さへ花になりにけるかな

水仙

神無月しぐれの雨のふる時を盛りにさける花もありけり

雪中水仙

山里の垣ねのゆき間ふみわけて梅よりほかの花をみしかな

寒菊

空蟬の人めかれぬる山里ににほへる菊のあはれなるかな

しとゞ鳴く片山ざとの霜のうちをおのが時とも匂ふきくかな

○龍田姫　秋を司る女神、春を司るを佐保姫。

○しとゞ　小鳥の名、あをじ、くろじなどの類がある。

雪の中にをしふたつあるかた

諸共に思ひかはせるおもひ羽に雪も氷もとほらざりけり

をしのつがひある所

うつくしき妻と竝びてぬる鳥も物思ひ羽はあるよなりけり

から蘆にそに鳥をり

我が宿の池のむらあしかぜならで動くは鳥のきゐるなりけり

あぢさゐ

散りやすき物とぞ見ゆる空蟬のよひらに咲けるあぢさゐの花

ゆづる葉

新玉の年のはじめにとればかも千代譲る葉と人はいふらむ

竹のこ

これやこの千尋ある竹の種ならむ先づよの常の心地こそせね

小竹のかた

水莖の岡の玉さゝいさゝかの風にも千世の音ぞきこゆる

釣垂れたる所

つり絲に吹く川かぜをわすれては魚のひくかと思ひけるかな

○よひら　曾、六帖「茜さす晝はこちたしあぢさゐの花のよひらにあひ見てしかな」

○水莖の岡　近江の名所、萬葉十「鴈がねの寒く鳴きしゆ水莖の岡の葛葉は色づきにけり」

後赤壁のかた

大空にたづの一聲おとづれてねぶらむとする夜は明けにけり

如意拂子かきたるかた

いかにしてくみしるものぞ水莖のながれの外の法のこゝろは

蓬萊山のかた

かくばかりとり集めたる萬代の數の外をば誰かしるらむ

波の音松のひゞきものどかなりよもぎが島の春のはつかぜ

竹

とこしへに見れどもあかず吳竹は誠に千世のすがたなりけり

鶴

千代よりもならはまほしく覺ゆるはのどけき鶴の心なりけり

千鶴のかた

あしたづの遊ぶ野澤は遠けれど千世の數をばよむ人ぞよむ

朝日につるのかた

大空のたづのよはひを朝附日さして千とせと誰かさだめし

松のもとに鶴たてり

○後赤壁　蘇東坡の後赤壁の賦に道士鶴と化したのを夢みたる所がある。

松かげを千歳の宿とさだめつゝ長閑にふたり住まむとや思ふ

松原の上に鶴のまひたるかた

松も皆千世をばもたり己が世をゆづるとのみは思はざるらむ

龜

龜のすむあたりはことに見ゆるかないはほの苔も水の緑も

よろづ代を負ひもて龜の出でつるは誰にと思ふこゝろなるらむ

竹ある岩根に龜數多あり

何人の宿にかあらむかくばかり萬代の數あまた見ゆるは

三夕のかた

身にしみてあはれなりけり津の國の難波のみつの秋の夕暮

琵琶行のかたかけるに

船の内すみ渡りぬる景色かな波さへよりて聞くにやあるらむ

福神たはらをもたげむとしたるかた

いと重く見えにけるかな萬世のいくらばかりかこもりたるらむ

萬歳の繪に

よろづ代を打ちあげて歌ふ聲きけばまづ心こそ春めきにけれ

○三夕　秋の夕暮をよんだ三つの有名な歌。定家、西行、寂蓮の歌

○琵琶行　白樂天潯陽江にて舟中琵琶を聞いて作つた詩。

老人まとゐて酒のむかた瓶に梅の花あり

梅の花ゑみさかえても見ゆるかな千代の始めのまとゐなるらむ

瀧のもとにて仙人棊を圍みたるかた

落ちたぎつ瀧のしらいとくり返し長き日あかぬ山のおくかな

さる引のかた

世の中は何かましらのさかしらに振舞へりとも唯同じこと

鳥さしのかた

此の世にておほくの罪をもち棹は終に我が身をさすにやあるらむ

三番叟のかた

世の中になるは瀧の水ならずともよし鈴の音のさやけき心もたりとならば

美人玉章を見たるかた小町の心ばへなりとて人の賛をこへるに

水莖のあとに心はなぐさまで身のうき草やおひそはるらむ

醜女鏡に向ひたるかた

ます鏡まさしき影はうつすとも我がこゝろから花とみゆらむ

をどりのかた

月はたけぬつゞみの音もしどろなり今や明けなむあたら此の夜の

○三番叟　翁三番叟次第の謡の中に「なるは瀧の水瀧の水日はてるともたえずとうたりありうどうどう……」の句がある。

○たわやめのゑまひ　女の笑みを花と見ていふ。

柏戯のかた

思ふ事なけにもあるか世の中は只かくてこそあらまほしけれ

海法師

渡つみの底に遁れてありとても波のさわぎは變らざるべし

大原女

折りそへし櫻をみればみやこ人馬にくらおく時はきにけり

しづの女がかづける柴の束の間もやすき心はなき世なりけり

すげなしと人こそ見らめ賤の女も思ふ心はあらざらめやは

たわやめの繪

春風も知らざる花はたわやめのゑまひにこもる匂ひなりけり

花柳おほかるさとは春風のこゝろもそらに迷ふべらなり

幽靈のかた

かぎりある命と共にきえもせでいつまでもゆる思ひなるらむ

雛祭のかた

花のかげうかべてのめる杯に先づもゝとせの見えもするかな

かみ雛

いでや此のけふのかざしに咲く花の百とはいはじ千世とこそいはめ

競馬

つなとりてひかふる駒の一いばえかちは心に先づぞのりける

朱買臣

今のまに咲くべき花の心をもしらぬ妻木ぞあはれなりける

司馬相　題柱のかた

橋柱たてし誓言うべしこそ末通りけれますらをにして

衣通姫

さゝがにの蛛の絲すぢかけてのみ忍ぶも遠しいにしへのこと

蜆子えびをくひたるかた

底ひなきみのりの海にさすさでのさてこそ罪は救ふべらなれ

常磐三人の子をぐしたるかた

呉竹の子はしるらめや白雪のみだれて思ふしたの心を

武藏坊辨慶

橋柱ふとしきその名河なみのひゞき渡りぬいまの世までに

桃青翁のかた

○朱買臣　苦學した時、妻は去つてしまつた。後太守となつて鄕に歸るに及び元の妻愧ぢて縊つたといふ。

○橋柱たてし誓言　相如昇僊橋を渡る時橋柱に、大車肥馬に乘らずば還り渡らじと書きつけその後思ひの如くなつたと、唐物語に見える。

○衣通姫　帝をこひ奉つて作つた歌「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蛛の振舞かねてしるしも」

○桃青翁　松尾芭蕉。

○三光鳥　深山に棲む鳥、其の聲日月星といふが如しと。

君を思ふ心に先づぞうかびぬる象潟のあめ松しまの月

佐野源左衛門鉢の木たきたるかた

花の木をたきし煙やかすみつゝやがて我が身の春となるらむ

獼猴の月をとるかた

およびなきねがひは誰も同じ世をよそにや見まし水底の月

龍

雲をおこす龍の力はもちながらつひに潜める人もこそあれ

三光鳥

五月雨の頃にしもくる鳥なれば月日ほしとはうべもなきけり

いせえび

かすむらむいせの海邊の景色まで思ひやらるゝけさの春かな

なまこ

ものいはむ物ならませば問ひてましかくても思ふ事はありやと

河豚

中々に魚のこゝろは世の人のくちのはをこそ恐るべらなれ

愚かにもわきていふかな世の中は只かくのみもかしこきものを

組題百首

歳中立春

いその上ふるとしながら立つ春は山の霞も知らぬなりけり

山霞

春のくるかたと思ひて見渡せば音羽のやまに霞たなびく

春雪

いつしかもえむと思ふ我が宿の柳がうれに雪はふりつゝ

朝鶯

竹の葉に朝日のかげのほのめけばねぐら起きいでて鶯ぞなく

澤若菜

朝日さす山さはみづの薄氷(うすらひ)の下にあをむは根芹なりけり

餘寒

朝まだき竹の葉さやぐ音すなりはるの嵐やさえかへるらむ

行路柳

我が門にしだりやなぎを植ゑしより道ゆく人ぞたちとまりける

○朝まだき竹の葉さやぐの歌　餘寒のわびしさの迫るをうたつたもの。

梅薫風

水の上を吹きくる風ぞにほひけるかつらの里の梅や咲くらむ

春雨

春さめのふりくらしぬる山かげは鶯の音もきこえざりけり

若草

かた岡の雪まに見ゆる淺みどりいづれの草か萌えはじむらむ

春月

山里の梅のはやしにてる月のかげはおぼろになりにけるかな

歸雁

思ひたつ雲居かりがねきく時はわが心さへあくかれにけり

初花

わが待ちし初ざくら花はるさめの雨にまじりて咲きそめにけり

見花

わぎもこに似てはさかねど見る度に思ひのみます花櫻かな

翫花

櫻花をりてかざしにしたれども猶まだ飽かずいかにかもせむ

惜花

わがさかり過ぎぬと思へば櫻花ちるを見るさへ悲しかりけり

落花

池水に降りてたまれるしら雪とみゆるは花のちれるなりけり

籬山吹

移し植ゑし山吹の花ちりにきとゐでの蛙にいかで告げまし

松藤

大よどの松にかゝれる藤のはな浦わの波やよりてをるらむ

暮春

鶯のこゑばかりこそ聞えけれ花ちりはてしみやまべの里

首夏

うぐひすはいまも鳴けども山里の青葉の陰は夏めきにけり

待郭公

藤なみの花のさかりは過ぎぬれどまだほとゝぎす一聲もせず

聞時鳥

わぎもこに別れて來れば時鳥ありあけの月に鳴きわたるなり

○ゐでの蛙　井手は山城にある。新古今一「足引の山吹の花散りにけり井出の蛙は今やなくらむ」

早苗

時鳥なきそめにけりしら鳥の鳥羽田の早苗いまやとるらむ

渓五月雨

さみだれは日数久しくなりにけり谷のしばはし水こゆるまで

夏草

かた岡のすゝきが原をきてみれば秋まち兼ねて蟲ぞなきける

夏月

夏川のながれて早き水の上にしばしとまれる有明のつき

水邊螢

あし引の片山かげのはり原のしたゆく水に螢とぶなり

夕立

夕立はけふもふるべし鳴神のおとはのかたに雲ゐたちくも

六月祓

皆人ははらへしにけりうき事は我ばかりにも積らざるらし

早秋

神風のいせの濱をぎふく風の音は秋にもなりにけるかな

○はり原　榛の木の原。

○神風の　いせの枕詞、萬葉四「神風のいせの濱荻をりふせて旅ねやすらむあらき濱邊に」

乞巧奠

獨りある身のうちつけに悲しきはたなばた祭こよひなりけり

荻風

曉にねざめてきけば秋かぜの荻の葉ならす音のさやけさ

萩露

消えぬよりまづぞかなしき秋風の吹くゆふぐれのはぎの上の露

秋夕

夕日かげ尾花が袖にかくろひて秋風たちぬ岡のべのさと

初雁

朝霧のうへにみえたる秋山のみねこえてくる初かりのこゑ

秋田

きのふかも細谷川をせき入れてうゑし山田は穗に出でにけり

夜鹿

此のよひはもの思ひけらし曉になるまで鹿のこゑぞきこゆる

曉蟲

有明の月のかげすむ秋の野に聲のかぎりを蟲ぞなくなる

○乞巧奠　きこうてん、七夕祭をいふ。

山月

山の端の雲に光はさしながら出でがてにする秋のよの月

湖月

かゞみ山かげなる海に月てればよるさへ見ゆるさゞら浪かな

野月

いなみ野の淺茅が上にてる月を袖にかたしきねし今宵かな

渡月

久かたの月あかき夜は安河のわたりする人絶えずもあるかな

庭月

庭の面はまだ暗けれど池水の底にぞ月は顯はれにける

關霧

朝霧のまよひにこえぬふはの山關屋の跡も見てましものを

閨擣衣

から衣うつや砧の音きけば秋の夜長きもの思ひぞつく

重陽宴

白菊のつゆをたゝへてのむ酒は千世の影こそ浮ぶべらなれ

杜紅葉

初しぐれ降りそめぬれば山城のこがの森こそ思ひやらるれ

河紅葉

大井河ゐせぎの水のくれなゐに見ゆるは山の紅葉なりけり

九月盡

ゆく秋を今はとおくる嵐にぞ木々の紅葉はちりみだれける

初冬時雨

初しぐれ過ぎにけらしもみわ山の杉の青葉のぬれたるみれば

落葉

冬のあらし吹きたちぬればきぬ笠の山の紅葉は散りはてにけり

寒草

きのふかも我がきぬすりし高圓の野邊のはぎ原霜がれにけり

淺雪

けさふりし雪淺ければ我が庭の玉ざゝの葉も隱れざりけり

積雪

あすといはば下折れぬべみ夜のほどろ出でて拂ひつ竹の上の雪

○夜のほどろ　夜のほど。

池　氷

我が宿の池のまつかぜさえ〳〵てけさは汀にこほりゐにけり

豐明節會

雲の上の豐のあかりは今ならし有明の月に笛の音ぞする

冬　月

身にしみて忘れむものか千鳥鳴くいなの川原の冬の夜の月

潟千鳥

吾妹子とねてのあさかの潟みれば千鳥ぞあさるおのがどちゐて

歳　暮

あら玉の年はくれぬと足引の山にも野にもゆきはふりつゝ

寄月戀

久方の天つ雲ゐをゆく月のはるけき戀もわれはするかな

寄雲戀

夕されば愛宕の山にゐる雲のたゞにやむべき戀ならなくに

寄雨戀

かさとりの山もかひなくあるものは戀の涙の雨にざりける

〇あさかの潟　朝香の浦。攝津にある。萬葉集二「夕さらば潮みち來なむ住の吉の淺香の浦に玉もかりてな」

○こりずま　性懲りもなくと須磨の浦とをかけていふ。

○烏鵲の往きあひの橋　牽牛織女の會する時鵲のわたしてくれる橋

寄風戀

身にしみて戀のまされる秋風は妹が肌にや觸れてきつらむ

寄煙戀

つらけれど猶こりずまの浦にたく蜑の藻汐の燃えつゝぞふる

寄關戀

逢坂の關は戸ざさぬ世なれども猶人めにはさはりけるかな

寄瀧戀

山川の瀧ははやくもおもほえず戀のなみだぞ落ちまさりける

寄原戀

思ひ出でてきてもみよかし我が宿は淺茅がはらとなりにしものを

寄橋戀

しのぶれば道ゆきがたし烏鵲（かさゝぎ）の往きあひの橋を我にかさなむ

寄湊戀

風まつと湊にかゝる大船のいつとも知らぬ戀もするかな

寄木戀

千早ぶるかみのいがきの榊だに手ふれぬ先に祟るものかは

○いにしへの潮干の玉　火遠理命の海神よりえた玉。これを出せば潮が干るといふ（古事記上）。

寄草戀

深めても思へるものを根なし草ねなきことゝや人のきくらむ

寄蟲戀

秋の野にはたおる蟲の聲きけば別れしいもぞ戀しかりける

寄鳥戀

かりがねのきこゆる宵の秋風にとほき人をもしのびつるかな

寄獸戀

から國にありてふ虎はまだ知らずたけきは君が心なりけり

寄玉戀

いにしへの潮干の玉もえてしがな涙の海にいれこゝろみむ

寄鏡戀

なぞもかく疎まるゝやとます鏡影に向ひて音をのみぞなく

寄枕戀

わぎもこが玉手はまかず敷たへの木枕まきてぬる夜ぞ多き

寄衣戀

くれなゐに衣はそめむわが涙色かはるとも知られざるべく

寄弓戀

歳をへてひきみるこゝろしらま弓知らず顏にも人のつれなき

曉鷄

にはとりの聲は雲にもかよへばや先づ天の戸の明けわたるらむ

夜燈

ともし火を獨りかゝげて終夜おもふ心をしるひとぞなき

峯松

かすが山みねの松原かぜふけば遠きむかしの聲ぞきこゆる

里竹

あし引の遠山里のたかむらは雲のおりゐぬ時なかりけり

磯巖

わたつみのありその巖打ちさらし波はよれども苔は生ひにけり

島鶴

ゆふ汐のみちぬる時は島松のうへにぞたづの聲は聞ゆる

岡笹

水ぐきの岡の笹生をわけくればあしたの露に袖はさぬれぬ

〇しらま弓　白木の眞弓、知らずの縁語。

〇さぬれぬ　さは接頭語。

江蘆

みしま江の蘆の葉高く成りにけり行きかふ舟もみえぬばかりに

浦舟

淡路島ゆふ日かげりぬともしびの明石の浦に舟はとゞめむ

杣山

高しまのみほの杣山たかければ雲居に斧の音ぞきこゆる

岸苔

神なびのみむろの岸のさがり苔幾世ばかりか生ひしげるらむ

山家水

流れくるかけひの水の音きけば先づ世にかはる大はらのさと

山家嵐

巻向の檜原の奥にすむ庵はあめと嵐を何にわくらむ

田家雨

足引の山田のかりほ霧こめて小雨そほふるくれのさびしさ

旅行

たび衣まよへる見れば故郷をいでし日數のおもほゆるかな

○巻向の檜原　大和國巻向山の檜原。

旅宿

すゞか山麓のさとにねたるよは馬の音にぞ目はさめにける

旅泊

から琴のとまりに船はよせしかど波は變らぬ音のみぞする

海眺望

ともの浦のありそ漕ぎ出でて見渡せば雲居隠れに伊豫の島みゆ

寄社祝

ときはなるかへの社は君が世の千世祈るべきところなりけり

寄日祝

朝づく日豐さかのぼることのごとわが大君は榮えましませ

貧窮百首

今年さへかくてくれぬと故郷の空をあふぎてなげきつるかな

かにかくに疎くぞ人の成りにける貧しきばかり悲しきはなし

わが門も松たてましをよの中の人なみ〳〵の春をむかへば

けふなれどしめだにはへずある事は春こぬ宿のしるしなりけり

○かへ　栢、このてがしは。

○貧窮百首　當時にありては出色の歌といふべきである。生活に即したる、又題材のとらへ方の新しさに見るべきものがある。

○さかしらに貧しき　清貧などゝ言うてゐても年末となればすべなき心。

○柊　ひゝらぎ、その葉のとげとげしさに人のかど〳〵しさを思ふ

いかにして我はあるぞと故郷に思ひ出づらむ母しかなしも

さかしらに貧しきよしといひしかど今日としなればこゝらすべなし

かたちはも山のましらとなりぬれど人にしあれば心悲しも

大丈夫のをのこさびすと打ちあげてなかぬ心ぞまこと悲しき

人のいふ富は思はず世の中にいとかくばかりやつれずもがな

年くるゝ空のゆき霜ふりこほりとけぬ我がむね知る人もなし

久方の天つ雲居を飛ぶたづのたづきもしらぬ身のゆくへかな

足曳の山つゞらをりおり〳〵ていかになるべき身の行方かも

から衣妻だにあらばかかるとき語り合ひても慰めてまし

けふといへば門にさしたる柊のあなかど〳〵しよの人のさが

天地にあふるばかりの黄金もが世の人皆をあきたらはさむ

聞くならくならくの底に入りぬべしこゝらの鬼のわれを責むるは

もゝへ山重なる山もこえつべし此の年のさか越えぞわづらふ

わたつみの底にかづけるあまよりも長き歎きは我のみぞする

久かたの天つ空とぶ鳥にもが雲にいりてもけふをのがれむ

ことしさへぬふ妹をなみ唐衣かたもまよひぬ袖もまよひぬ

○いさらゐ　水の少しある井。

○二へ帶みへにゆふべく　切なる思ひに身のやせ細るをいふ。下の「ゆるぶべしやは」にもかゝる。

○古の人の飲みけむかすゆ酒　萬葉集九貧窮問答の歌の中に「糟湯酒打ち啜ろひて……」

今はとて垢つき衣脱がめどもあらため著べき新衣もなし

いさらゐの水はすめれどわが衣あらひてきせむ妹がなきかな

奥山のおくに生ひたるゆづる葉も世に出て春に逢といふものを

あし曳の片山邊なるしぶ柹のうまくなりなむ時をこそまて

何事もなるといふなる新玉のとしの三とせは過ぎにけらずや

うば玉のかぐろき髮も思ひにはあへずしらくる物にぞありける

物思へば時なきものをしらかみは老のものとも思ひけるかな

何をかもいふと思ひし物思ひの花黑かみの中にまじりて咲きにけるかな

二へ帶みへにゆふべくなりぬとも我がした心ゆるぶべしやは

古の人の飲みけむかすゆ酒われもすゝらむ此の夜寒しも

浪よする入江の蘆のしたにのみ朽ちはてぬべき我が世かなしも

たわやめのおよびにかくる白玉のあなあはれともいふ人のなき

思ふ事わが書きつけし故郷の橋のはしらは朽ちやしぬらむ

かくしのみわびむと知らば故郷のきびの山田も作りてましを

ふる里のきびの小山田うちかへし悔しき事の多くもあるかな

いそのかみふるの社のみしめ繩心ばかりはくたささらなむ

○ちゝわくに　さやかく、面倒に。

○うき事も嬉しき事も　貧しい人のみ知りうる境涯。

○いにしへの賢き人も　孔子陳蔡の厄など其の例が多い。

渡つみの千里の沖をゆく舟もはつべき湊なしといはなくに

まがり木に交る直木のちゝわくに人はいふとも我はわれなり

久かたの雨もる宿の板びさしいたくもよにはあはぬ我かな

あま人の鹽やくわざは習はねどからき限りをことし知りぬる

思ふ事なりて暮れぬる歳ならばいとかくのみは歎かざらまし

思ふこといつかも成りてけふの日の悲しきことを語りいでまし

おもふ事かくのみ違ふ世の中は我が身のあだとなれるなるべし

思ふ事はやもならなむけふの日の嬉しき人にむくいせむ爲

うき事も嬉しきことも知らざらむあはれ此の世にとみたれる人

まどしきも嬉しかりけりかくまでに人の心のくまをしらめや

終にはと思ふ心のなかりせばけふの悔しさいきてあられめや

いにしへの賢き人も市中にたしなめられしためしあらずや

玉ほこの大路とよもし行く人も靜かになりぬ夜はふけぬらし

うば玉の夜はしづまりぬ此の年はいまかみやこを出で立ちぬらし

新しき歳とはいへどわが宿はこれぞしるしといふ事もなし

けふといへばやがて長閑に思ひしは心一つのなしにぞありける

我が宿に何のよろこびうるさく門さしこめてなしといはばや

門さして人を入れじとせしほどに春さへもこずなりにけるかな

來やしけむこずやなりけむ我が宿におぼつかなきはけさの初春

けふといへばこといみをさへせしものをあな淺ましの宿の景色や

さゞ浪の比良の高嶺の雪みれば我がごとけふをしらず顏なる

かきくもり霞ふりしく空みればわれより外も春なかりけり

かも川の岸のつかさの古柳ふりぬともよし春にあひては

少女らが春の遊びにつくまりのつく〴〵我はものぞ悲しき

玉ぼこの大路行きかふ人みればけふよりやがて春めきにけり

立ちかへる年やわらはむこりずまに今年はとのみたのむ心を

まさきくて春には逢ひぬとばかりをたよりもがなや言づてやらむ

まきながすにふの杣川にぶくして世に立つよりも死ぬる勝れり

はりまなる飾磨の河のしかすがに思ひも捨てぬ此の世なりけり

こまうどに帶をとられし人よりも辛き悔をば我のみぞする

こぼれたるいただの橋も何ならず渡り難きは此の世なりけり

橋をかくる水にもあらなくに思ふ心のゆきかぬるかな

○岸のつかさ　岸の高き處。

○にふの杣川　丹生河、大和國吉野にある。

○こまうどに帶をとられし人　催馬樂石川に依る「石川のこまうどに帶をとられてからき悔いする云云」

○いただの橋　四〇九頁をはり田のいただの橋の註參照。

○かゝづらひ　關係、ひきかゝり。
○なごし　なぎてあり、おだやかな。
○すまの浦に藻汐たれけむ人　在原行平のこと。古今集十八「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻汐たれつゝわぶと答へよ」

沈むかと見れば浮べる鳰鳥は人のうへをも見するなりけり
春きぬとふるさとさして行く鴈は思ふ心のなりやしつらむ
世の中をいたくなわびそ白雪のふりにし木にも花はさきけり
きの海のゆらのと中にたつ浪のかしこきものは世にこそありけれ
鷲のゐる澤田の沼のしりくさのしりう言のみしげき世の中
よの中の人の賢き口のはは虎てふ神もおづといふなり
とにかくに言の葉しげしよの中はたゞ口なしの泊ならなむ
音にきく耳なし山にやどもがなことしげき時ゆきてすまばや
世の中の人言のはにくらぶれば難波の蘆はしげりまけけり
足曳の山のしたはふ青つゞらかゝづらひある世にもふるかな
渡つみは人の心に似たるかななごしと思へばはや浪ぞたつ
故郷のきびのうみなるあぢかたのかた〳〵物を思ふこの頃
人をのみたのむの鴈は我が如く打ちわびてこそ音をばなくらめ
すまの浦に藻汐たれけむ人はしも我にまさりてわびやしつらむ
春なれば先づうちかへす山畑のはたやことしも物をおもはむ
いせの海のをふの浦なしなりならず今年を待ちて事は果さむ

我が宿の向ひの山に有りたてる松ひとりのみひでたちにけりあはれその松
此の川の島のありそに有りたてる杉いやすぎに過ぎもいぬるかあたら月日の
よろづ世と歌ふ聲こそ聞ゆなれよの中春になりぞしぬらし
我が宿のよもにぞ春はきにけらし酒うたげする聲とよむなり
わが待ちし時はきぬとや春駒のいさみつれたるみやこ少女ら
ねの日するけふにはあへど人しれぬ心の松はひく人もなし
こぞはけふ出でて摘みにししら川の其の初わか菜もえやしぬらむ
若菜つむ春べになれば故郷の垣根わたりはめにぞ見えける
鶯もおもふ心のあるならし春にはなれどまだ音のせぬ
わび人の宿にしあれば梅の花春ともしらずふゝみたりけり
むらさきのなたかの浦のうら波に心はよりぬ世の人なれば
津の國の生田の川のいきの世にうれしきよをば見る由もがな
空蟬のあすをもしらぬ命もてかたきことをも思ひけるかな
我が命今しばしかせよみにます親のみことにまたすつとなし
世の中は皆いひとよのよひたくみたがふと思ふぞ違はざりける
梟のねなきはかへつ今年だに我をにくむな世のなかのひと

○なたかの浦　紀伊國。
○我が命今しばし　あの世に在す親に土産とすべき功もない故今しばし壽命をあたへよ。
○いひとよのよひたくみ　梟の宵工。計畫は立派に立つれどもその場に臨みて實行する能はざる譬。

こはいにしつごもりの日より此ゝ三日の日のありさまをかいつめたる歌
やゝ數おほう成りぬれば月頃のおもひ草をさへつみ加へてもゝちの數に
はなせるなりけり彼のかすゆ酒のことをすゝらひて貧窮百首などや名づ
けてむ

文化五年むつき三日の夜　いさらゐのもとのかたゐ翁

長歌部

曉とく寐覺めたるにおはや怪しき聲こそすれといふをよく聞けば時鳥な
りけり此の里にはいと思ひかけざりつればめづらしなども世の常なりさ
てよみける長歌

春過ぎて　夏にしなれば　うば玉の　やすきいもねず　よもすがら　まちあ
かしては　卯のはなの　さける山路に　たちばなの　匂へる里に　おもふど
ち　あくがれあるき　先づききし　人をにくしと　わが聞かぬ　ことをねた
しと　皆人の　戀する鳥の　あしびきの　山ほとゝぎす　この里は　山を淺
みか　木のくれの　陰ともしみか　卯月より　さ月をかけて　一聲も　きく
年をなみ　ひたふるに　なかぬ國とて　里人も　思かけねば　待つことも

忘れてあるに　あやしきや　此の曉に　眞玉なす　さやけき聲を　一聲は　わぎへの上に　二聲は　峯のはやしに　いちじろく　なのりて過ぎぬ　こゝにしも　住みたる鳥ぞ　今よりは　心ゆるすな　さし櫛の　曉毎に　鳴きもこそすれ

反歌

むかしより鳴きはすらめど時鳥今こそ世にはあらはれにけれ
しのゝめと明くる雲間のいちじろくなきもしつるかやま時鳥
空耳となしやはてまし時鳥たゞひと聲にやみなましかば
なきものにたれも定めし時鳥わが語るともうたがひやせむ
いつはりとよしいはばいへ時鳥ききしまことを我は語らむ
これのみは人あらがふな時鳥いもも聞きたり我も聞きたり
ほとゝぎすけさ鳴く聲を聞きしより此の山住ぞ樂しかりける
わびてすむ我をあはれと時鳥けだしみやこの來鳴きけむかも
やすくても有りつるものを今宵よりうまいせられずなりぬべきかな

小野久誠がかりにうつろへる難波小はしのやどりに額に物すとてよませたる長うた

（一）わぎへ　我が家。

○これのみは人あらがふな　時鳥が實際鳴いた鳴かぬと論ずるなよ

（押してる　なにはの枕詞）
○へつ方　邊つ方。
○さずき　假に構へたる牀。
○さにづらふ　少女の枕詞。

押してるや　なにはの國に　川橋も　さはにあれども　大川の　川門をひろみ　行く水も　さやけきなべに　夏されば　夕すゞみすと　へつ方には　さずき置きなべ　沖邊には　小舟うけすゑ　沖にへに　ともす火かげは　螢より　星より繁し　みやびをの　たはれ男は　さにづらふ　少女らのせて　鼓うち　琴かきならし　夕づゝの　かゆきかくゆき　水鳥の　遊びうかれぬそを見ると　家は多けど　住の江の　粉濱にあまが　拾ふちふ　蜆小川とこの川の　行きあひに渡す　蘆がちる　難波小橋の　橋づめの　これの高どの　けふよりは　わがせの家ぞ　朝さらば　こゝに遊びて　終日に　紐ときくらし　夕さらば　こゝにつどひて　よもすがら　酒のみあかし　空蟬の命のばへむ　憂へなく　夏なき殿ぞ　これの高樓

反歌

あかぬ事なきすまひかなふりさけてひむがし見れば生駒葛城

衣手のさむくなるまで吹きくるは高ま處の風にしあるべし

讃岐國本山の里なる河田青野を訪ふ長歌

玉もよし　さぬきの國　眞金ふく　きびの國は　眞向ひの　國にはあれど
海をしも　へだててあれば　あま雲の　よそのみ聞きて　年月を　過したり

○御酒かむや　もたひの枕詞。
○もたひの浦　備中淺口郡にあつた舟つきば。
○ころ舟　小櫓を用ゐて漕ぐ舟、早舟。
○たまあへる友　心のよくあへる友。
○城のほさかり　城の穗を離れて

けり　しかすがに　時のきぬれば　此の秋の　紅葉の時に　面白き　所も見むと　名ぐはしき　里もとはむと　水鳥の　思ひ立ち出て　御酒かむや　もたひの浦の　ころ舟に　眞かぢとりかけ　たゞ渡り　渡りきぬれど　見るごとに　みし人をなみ　逢ふ每に　しる人をなみ　いひさくる　よしのなければ　草枕　旅の心をいぶせみと　歎かひあまり　夏草の　青野の君は　露霜の　ふりにし時に　打日さす　都の内に　家さへに　雙ばひをりて　朝にけに　遊びたはれし　たまあへる　友にしあれば　そのかみの　事も語らひけふの日の　さまをも見むと　高松の　城のほさかり　はる〳〵と　野邊ゆき過ぎて　其の門を　敲き音なひ　名のりつゝ　われたちまてば　あるじはも　つまづきはしり　ひたとりに　吾が手とりつゝ　よみの人　かへりしごとく　なつかしみ　思へるなべに　只ふたり　語りふけりて　秋の日の　暮るゝもしらに　秋の夜の　更くるもしらに　ねぶるとも　また覺えねば　此の宿の　門田のをちに　たづむらは　友よびとよめ　鴈がねは　こゝ鳴きわたる　明けぬこの夜は

反歌

水鳥のかもの川波たちわかれひさしき友にあへるけふかな

○田づら　田面。

○ともしくもあらず　久し振りに友と語る故に鶴の鳴く音も珍らしくない。

たづが音に鳴かね交り聞ェけり田づらの里に旅ねしつれば

行きかへり空に鳴くなる鶴がねのともしくもあらず君と語れば

亮々遺稿　終

泊酒舍集

清水濱臣

夫歌者心之華也故發於情性出於自然而後可以感神明動人心萬葉古今集等所載是也後世作者不乏其人然或志高而才短或才富而志鄙其所吟詠務發新奇屈曲情性而爭其巧譬諸剪綵之花麗則有之而不見其韵致何況感神明動人心乎清水濱臣師平春海以善歌聞于世有年矣一時作者推之爲宗師余始覩其所唫咏而未知其爲人後及見其人觀其志不毫違其所吟詠所謂發於情性出於自然者歟於是屢延而相見未幾化爲異物余深惜之門人掇其諸咏將以傳之不朽請序於余所以有此序也時己丑菊月望後三日容安軒主人識

河三千敬書

○發二於情性一出二於自然一 心を種として自然に歌ふ。
○譬レ諸 これをたとふれば。
○剪綵之花麗則有レ之而不レ見二其韵致一 造花は美しいけれど其の風趣がない。
○濱臣師二平春海一 清水濱臣は村田春海を師とし、春海は賀茂眞淵の高弟である。
○不二毫違一其所二吟詠一 人物と歌とが少しも違はない。
○未レ幾化爲二異物一 幾ばくもなく歿した。
○己丑菊月 文政十二年九月。

○織錦齋　ニシゴリノヤ、村田春海をいふ。

○しみゝに　しみらにひまなく、繁く。

○おきなくなりて後　織錦齋翁歿後。

あはれ大なるかも、うつせみのよの中に有る人、たかきも卑しきも、おいたるも若きも、なべて歌よむといふ許りなるきはは、我が大人の古こと學びの道にすぐれていそしかりし事をしれり。うし氏は清水、名は濱臣、よび名を玄長といひて、江戸上野の岡のふもと、不忍池の汀にをかしき家作りし、みづからさゞ浪のやとなむおほせたりける。まだいと若かりしころ織錦齋の翁につきて、古こと學びに深くこゝろを入れられしより、文づくゑのほとりさらず、ひるはしみゝにまどのもとに星の光をむかへ、よるはすがらにともし火の影しらみ行くまでつとめあかして、いさゝかもおこたりなくとひ學ばれし事はたとせあまり、終にをゝしくみやびたるいにしへ人のやまとたましひを、さながらうまくおのが心とはせられにけり。おきなくなりて後は、よの中のふることまなびするともがら、おほくこのうしにつきしたがひぬ。おのれもはじめて大人の教へをうけしより、ことばの園にあさり文の林をたどるといへども、もとよりさえつたなきが上に、ものうき心くせのともすれば立ちそひて、おこたりがちにのみあかし暮ししを、今よりは六年前の秋、

うしやまひにわづらひて、八月十七日といふに五十にもたらぬよはひにしてはかなくなられしかば、我がどちのうへは更にもいはず、天の下のことのは人誰かは歎きをしまざりし。然るにこたび光房等まし心にあひはかりて、年頃うしのよみおかれし歌ども、撰りとゝのへ梓にゑるとて、ことのよし卷の端にしるしてよとあれど、おのれなまさかしらにものしり顔して、筆とらむはよその見るめも苦しく、かつはなき大人のおもてぶせならむとかへさひすまへど、いかにもゆるさざれば、拙きことのはにくだくだしく書きしるしぬ。

文政十二年秋九月

源　政　醇

眞　澄　書

〇かへさひすまへど　返し事へど

〇源政醇　播磨國林田藩侯建部氏

故翁はよはひまだいそぢに一つたらでみまかられしかば、としごろの言の葉どももほうごのやうにて有りしを、やまひやう〳〵重りぬるはじめ、たゞしゐかむの心おはして、かたへにおほせて筆とらせられしかど、ほどもなくつひにむなしきあとのなみだにかきくれて、しばしとさしおかれにけり。さて後おほえず月日うつりてむとせの春秋も過ぎぬるを、同じ心にたすけなすともどちはかりて、こたびまづみじかうた八卷をついでなしをへつ。こゝに下總國關宿をしらす久世のかうのとの、播磨國林田をしらす建部のかうのとの二君たちは、おきなありし世にめされてまうのぼりしみたちの中に、とりわき御かへり見をかうぶりて、なきあとまでも御めぐみの露ふかきにより、かしこけれどおまへにさゝげて、たかき御さだめをもうかゞひ、御はし書をさへ申し給はりて　かく板にはゑらせたるなり。此の外長歌文詞消息のたぐひ、また近き國々見ありかれし旅路のくちずさび、京のぼりの道すがら、かしこにての歌、さらでもおのづからにもれたるなどは、つぎ〳〵にぞ集めものすべき。いでやからやまとたらひたゐ御はしことばどもに、事みなつき

〇久世のかう　下總國關宿藩侯老中職をつとむ。

にたるを、おのれさらに何をかそへいはむ、たゞ眞清水のたえずさゞれ石の世々をかさねて流れつたはらむ事を、思ふよしのひとことをしりへに書きつくるになむ。

文政十二年長月

清水光房

○たひらの宮　平安城。

泊洦舍集巻一

清水濱臣

春歌

年内立春

行くとしのいそぎをよそに人心のどけかれとや春はたつらむ

立春

さらでだにのどけき春を君が代のたひらの宮にむかへつるかな

都立春

みやこぢに春たつけふは小車のさきおふ聲ものどけかりけり

處々立春

花鳥のおのづからなる暦にや野守山守はるをしるらむ

元日

花鳥の色をもねをも待たずしてはや春めくか今朝の心は

○すみだ河をわたりて　業平すみだ河をわたる時「名にしおはばいざこととはむ都鳥……」の歌あり

元日のあした

けさにあけて思へばあやしきのふまでなにをいそぎし我が身なりけむ

こぞ雪ふらでむ月たつあした降りければ

まち〳〵てけさ見そむるぞめづらしき冬と春との初ゆきの空

元日試筆

はるの來て筆の林をわけみれど又めづらしきことの葉もなし

元日宴

けふたまふ初豐みきをはじめにて今年もあはむ百のうたげに

元日のあしたすみだ河をわたりて

舟長よいざこととはむすみだ河われより先に春やわたれる

春のはじめによめる歌ども

秩父嶺に玉のよこ山かすみあひてむさし野ひろく春はきにけり

なにとなくいふことの葉も春めくは心のたねや花もよひする

池の水岡べのかすみ春の色をまだきも見する我が軒端かな

御代あらたまりたる春の始めに

のどけしといふもかしこし大君の新御代しらす春にやはあらぬ

（又の年　翌年。

）春生人意中　春は人の意中に生ず。

（天の眞名井　天にある井、古事記に「天の眞名井にふりすゝぎてさがみにかみて……」

あらたに家つくりける又の年のはるのはじめに

さゞ浪の霞をよするけさみればわが池殿にはるは來にけり

春風春水一時來

今朝みればこちふく風もさゞ浪ももろ心にや春をまちけむ

春生人意中

世の人の心より先づたつ春を花鶯になにもとめけむ

山家初春

鶯のかすみにむせぶ聲寒しうしろの岡に雪ものこりて

初春雨

ひさかたの天の眞名井の氷さへとけしやけさの春雨の空

初春見鶴

はつはるの耳あらためにに先づきかむあしたのどけきあしたづの聲

初春祝道

おほ君のはるのひかりに雪消えて世々にひらくる千代の古道

早春

朝げたく煙にぎはふかまどより民の軒端やかすみそむらむ

田家早春

はるかけてのこれる雪にしるきかな年ゆたかなる秋のたのみも

名所早春

おほえ山いほへかすみて丹波路やいく野のするにはる風ぞふく

早春山

いつしかと霞みそめけり東人の先づ目にちかきをつくばの山

早春河

宇治河やはやくも春の色みえてかすみかゝれる瀬々の網代木

早春松

はるのきてみどり色そふ山松のそのひとしほや霞なるらむ

早春待花

なにを世にまつ身ならねど春といへば花に心のいそがるゝかな

梅柳あらそふ春をよそにしてさかぬ櫻にめをつくるかな

早春興

卯杖つきかゆつゑとりて玉だれのをすの内外に遊ぶ春かな

早春述懐

○いほへかすみ　五百重霞みて。

○卯杖　正月上の卯の日に兵衛府より奉りし杖、五色の絲にてまく。○かゆ杖　正月十五日に粥を煮たる木を削りて造りし杖、之れにて子無き女を打てば妊娠するといふ。

○みを　水脈。

○春の心もいとなきは　長閑けからぬをいふ。

此のはるも野山の花にあくがれむ雀の林はよしわけずとも

早春祝

松によせ若菜につけて此の頃は一日も千代といはぬ日ぞなき

む月はじめすみだ河のほとりにせうえうして

すみだ川みをふく風ものどかにてこぎゆく舟の跡ぞかすめる

はるのうたとて

のどかなる春の心もいとなきは花鶯のすさびなりけり

春色浮水

のどけしといひこそいでね池水のこゝろにはるの色はうかべり

海上春望

こゝろゆくはてもなみぢを見わたせば霞をのせて歸る釣舟

子日

ふるくさににひ草まじる野べに出でて老もわかきもひく小松かな

子の日すと松ひく友のことの葉は君も千代へよ我も千代へむ

中の子もおと子もひかむ初子より松の葉ごとに千代をかぞへし

かつしかのさとに子の日して二本ひき來れる松をつとめてひとりときは

子君に奉るとて

きのふわが諸手にひきし姫小松千代のなかばを君にとてこそ

正月十日長枝が家に子の日すとてはじめてとぶらひてよめる

子の日すと庭の小松に袖かけて千代のちぎりを結ぶけふかな

冰解

みぎはよりみぎはの冰とけはてて此のごろひろし池のさゞなみ

春風解冰

はるかぜのあづまのひえを吹きこせば冰のこらぬしのばずの池

若菜

きのふさへ今日さへつめど春淺き野澤の小芹袖にたまらず

若菜知春

大原や野べのみゆきの跡とめてわかなつむなり雲のうへ人

野若菜

ふりはへてたれにつめとか野べにおふるすゞなも春の色になるらむ

春ごとにわか菜つみにとなれくれば野守もわれをとがめざりけり

澤若菜

○あづまのひえ　東叡山上野をいふ。

○ふりはへて　ことさらに。

春淺き野澤の氷うちとけて芹つむばかりなりにけるかな

雪きゆる野澤の水のふかぜりはつまぬさきより浪ぞあらへる

海邊若菜

磯菜つむいちしの海人の袂さへ春の色にはもれぬなりけり

霞

すみがまの煙とだえて小野山に今朝立ちわたるはる霞かな

朝日さすとほ山まゆのうす霞ほのかに見する春の色かな

筑波山ちゝぶかひがねおしこめてかすみも廣しむさし野のはら

霞添山色

うすがすみ下染めいそぐ山のはをいつか色どる櫻なるらむ

連峯霞

三つ山もひとつ霞にむつびあひて妻あらそひもみえぬ春かな

野外朝霞

よひの雨に丘邊のみゆき消えはててあしたのどけく霞むのべかな

關路霞

あふ坂の杉村とほくかすむ日ぞ關の小河に氷ながるゝ

○いちしの海人　伊勢の一志の浦の海人。新古今集「今日さてや磯菜つむらむ伊勢島や一志の浦の蜑のをとめ子」

○三つ山も一つ霞に　三つ山は香具山、畝火山耳梨山をいふ、三山妻爭ひの言は卷一に見える。

○久邇の宮　恭仁宮、聖武天皇の皇居、山城國相樂郡。

○妹がうむ　苧といひてをつの緣語。
○をつの浦　桑名郡尾津鄉の浦。

浦霞

ひとつ色にすまもあかしも霞みつゝ春はへだてぬおのが浦々

湖上霞

春風にとくるこほりの跡とめて霞ぞわたるすはの海づら

孤島霞

ふたつなき春のながめか住の江の沖に霞める淡路島山

橋邊霞

澤田川淺瀬たどらで高橋の霞をわくる久邇の宮人

曙霞

あけほのや八十瀬の浪のほの〴〵と霞いさよふ宇治の川づら

霞隔山家

山がつの閑ひかこはぬまばら垣春は霞ぞゆひつゞけける

霞隔水鄕

舟よばふまきの島人こゑはして八十瀬かすめり宇治の河づら

霞隔松

妹がうむをつの浦松うら〳〵とかすみかゝれりをつの浦松

〇鶯の聲はさらでも　花なくとも
鶯の聲は趣あるのにその上に。

舊巣鶯

世の中の花に心やちらざらむ雪のふるすに籠るうぐひす

春來鶯遲

よのなかに梅さきてとや思ふらむ春をいそがぬ谷の鶯

谷鶯

谷の名の霞のそらに鶯の雪よりすだつ聲をきくかな

閑居鶯

なれもしか人來(ひとく)といとふ聲するはおく山住みの心をやしる

春鶯呼客

うぐひすの人くとつぐる聲をしもいとふとのみは何おもひけむ

梅開鶯

風さそふおのがねぐらの梅が香を翅にしめて鶯のなく

花開鶯

鶯のこゑはさらでもあやなるを花の錦につゝまれてなく

雪朝聞鶯

ねざめても雪にものうき朝牀にわれをいさめて鶯のなく

梅近聞鶯

梅が香の枕たづぬる明けがたはかならず窗にきなくうぐひす

春情在鶯

花になく初うぐひすの聲は先づことのは人の心にぞしむ

鶯辭老

ふるされし宮のうぐひす春くれて人もすさめぬねをも鳴くかな

殘雪

かすみてはいとゞそれかとまがふかな去年だに花と見えしみ雪の

山殘雪

つくば山は山のみゆきかすむなり鳥羽のあふみや氷とくらむ

田家殘雪

うづもれしこその稻ぐきみえそめて苗代いそぐ雪のした水

雪消松條

朝日さすをかべの松の雪しづれ一木々々に春をみせつゝ

山家春雪

けぬがうへにふれども松の雪あさし都はけふや春雨の空

○ことのは人・歌人。

○鳥羽のあふみ　筑波の淡海。常陸國眞壁郡の南部にある大寶沼をいふ。

○雪しづれ　雪の枝より落ちること。

○梅つがは　山城國葛野郡梅津村の南を流れた河をいふのであらう。

餘寒

風さそふのきばの梅のにほはずば春ともしらじ埋火のもと

二月餘寒

おもほえず春もなかばになりにけり筑波嶺おろし猶さむけきに

深溪餘寒

かけはしや春猶わたる人もなし谷よりのぼる風のさむさに

梅

花はたゞ櫻といへど春くれば先づ梅が香にそむこゝろかな

鶯はなきもなかずも咲きそめて先づ春みする園の梅がえ

尋梅

うめの花咲きにけらしな鶯のしるべする野の春の朝風

河邊梅

梅つがは春の船人昔より名にながれたる花やみるらむ

夕梅

雨はるゝ夕の園の梅が枝に月まつほどの露ぞにほへる

梅花夜香

こぬ人のたもとおぼゆる梅が香を枕にやどすよはの春風

月前梅

花の色は月にゆづりて木のもとに梅が香かすむ春のよはかな

月やどる軒端の梅のうす霞かゝるゆふべを人のとへかし

梅村聞笛

ふく笛もはるの鶯ねにたてて心ありがほの梅のやどかな

梅花薫風

春風にうめが香通ふをすの內は空だき物もたのまざりけり

梅花風靜

梅が香をかとふばかりの春風や立ちよる袖をまちてふくらむ

若木梅

たのみあれや去年よりことし今年よりこむ春まさむ梅の色香は

梅有遲速

南ちり北さくほどを日ならべて見れどもあかぬ梅ばやしかな

南北梅花

日影さすかたよりみばや梅の花雪の下枝はけふならずとも

○空だき物　何處よりとも知られぬ樣に香を薫らする薫物。

○梅が香をかとふ　梅が香をかよはすこと。

○南北梅花　本朝文粹に「南枝北枝之梅開落已異」

梅の花を折りて人のもとへやるとて
君が爲たをるもくやし梅の花とはれて見せむ立枝なりしを

梅花開
む月たつけさより春の色見せて一花にほふ軒のうめがえ

梅開露暖
よひの雨にひもとく梅の梢よりこぼれてにほふ朝日かげかな

梅盛
難波江や浦吹く風も此の頃はたゞ梅が香のにほひなりけり

梅喚鶯
をちこちの友鶯もつどふなる園生の梅をあるじにはして

憐梅
春たちて先づ一月は梅といはむ櫻といはじ先づひと月は

梅夕微雨
梅が枝にふる春雨はおとせねどちる露かをる窓のあけぼの

葛飾里なる櫻見に行きて
かつしかや里のをちこち梅さけば豐島國人數むれて行く

葛飾里　下總にある。
豐島　さゝき、武藏國豐島郡。

○かをれる雪　梅花をいふ。

○柳先花綠　柳花に先だちて綠なり。

○東岸西岸柳遲速不同　五八四頁の南枝北枝梅開花已異と對をなして本朝文粹にある。

紅梅盛

おくるゝも思ふ心ありくれなゐのこぞめの梅の色を見るには

月夜に梅の花を折りてと人のいひければをるとて

おぼろよの月にたをれる梅の花にほひを袖にわれはかすめむ

月夜に梅の花のちるをみて

霞よりかをれる雪の袖にちりて月さむからぬ梅のこのもと

青柳風靜

露ながらなびく柳のいとにこそあるかなきかの風はみえけれ

柳先花綠

花さかば見はやす人もあらじとや春を柳のいそぐなるらむ

東岸西岸柳遲速不同

河岸になびく柳の絲さへも春くるかたに心よるらむ

柳開黃鳥路

鶯のこゑもながれて六田川ひとすぢかすむやなぎ陰かな

水邊柳

日にそへてぬるむ小河の水煙岸のやなぎにかすみあひにけり

○山のさきのたをり　山のたわ、頂上のたわみて見ゆる所。

○ことわりに云々　月の初めはかよみ一樣臨にされる趣をいふ。

故郷柳

いにしへの春おもほゆる柳原こゝや御かきのあたりなるらむ

早蕨

はる山のさきのたをりを行く人の花をばおきて折る蕨かな

樵路早蕨

これも又あすのまうけと柴人はかけぢのわらび折りやそふらむ

春月

咲く花に春はひかりをゆづりおきてかすむ月かげ思ふ心あり

あはれてふこともなべてに見ゆるかな櫻にかすむおぼろよの月

刀禰川や霞に濁る浪の上にやどるか月のかげもくもりて

梅の花ちりかふ庭に露ふけて芝生にかをる春のよの月

江上春月

鴈のゐる入江のあしのほのぐと霞のそこに匂ふ月かげ

霞に月のくもれるをみて

ことわりにかすむばかりとみし月のおぼろになりぬ二月の空

春曙

春はたゞ高嶺につゞく花の色の有明の月にほのしらむころ

昔より世々にかはらぬ心とて春はあけぼのと人のいふらむ

江上春曙

霞しくあらゝ松原ほの〴〵と月もほそ江のあけがたの空

河春曙

松浦川七瀬のこほりうちとけて霞ながるゝ春のあけぼの

崎春曙

わがおもふ人にみせばやたちばなの小島が崎の春のあけぼの

閑庭春曙

心しる人をもまたじひとり見る月と花とのあけぼのの空

名所春曙

伊勢の海や霞をそめて出づる日の潮瀬ににほふ春のあけぼの

花や雲雲や花ともみえわかず霞みてあくるみよしのの山

春雨

あをみゆく小草のみかは日をふればいつか木の芽も春雨の空

すみれ咲きすゞな花散る春の雨に心ある人や野路をわくらむ

〇あら、松原　疎なる松原、紀に「遠方いあら、松原まつはらにわたりゆきて」

〇いつか木の芽も春雨　張る、春をかける、春雨に芽が出るのである。

館中春雨

四方山の梢かすむと見るがうちに軒端しめりておつる玉水

庵春雨

はるさめの日かずほどふる草の庵にかれゆくものは人めなりけり

○日數程ふる　ふるに經ると古きをかけ、かれに枯れと離れとをかける。

社頭春雨

吹く風をのどけかれとの花しづめ神やうけけむはるさめの空

春雨夜靜

くれぬまの霞や雨となりにけむ夜深き鐘の聲のしめれる

雨中春庭

春雨にしめる芒路の垣つたひ人まちがほに梅もかをれる

遠見春駒

はるのよの月毛の駒やあさるらむ霞みてわかぬ野路の遠方

きさらぎばかり山里人のもとへ

けふも又馬にくらおきて山ざとの便りをまつと春日くらしつ

きさらぎ末つかた山ざと人をとふ

さく花に又もたちよる柴垣は子の日にとひしやどりなりけり

○皆ゆふかけて　ゆふに、木綿四手をかけることゝ夕かけてことを兼れり。

○諸矢　甲矢乙矢を合はせていふ

○今日はなやきそ春日野の原　古今集に「春日野は今日はな燒きそ若草の妻も籠れりわれも籠れり」

初午稲荷まうで

杉が枝を折るもをらぬも稲荷山皆ゆふかけて歸るけふかな

ねがふことなりもならずも瓜生坂むれつゝのぼるけふのもろ人

賭弓

引きつれてかへる袂ぞいさましき諸矢しつらむ雲の上人

春日祭

二月やけふもろ人のさしてゆく三笠の山はにぎはひにけり

なかのはる

いつしかとさくらにめをもつくるかな春一月は梅にくらして

雲雀

若くさにこもるひばりの聲すなり今日はなやきそ春日野の原

たび人の露わけ衣春の野を霞につれてたつひばりかな

夕雲雀

ひばりおつるかたのの小野の夕ぐれに月は外山をさしのぼるなり

歸雁

春霞やへたちかくせ鴈がねのかへる雲路のするまどふがに

○常世國　遠い國、絶域。

○呼子鳥　郭公鳥、かんこどり。

歸鴈離々

夕まぐれ後れさきだち行く鴈もおなじ常世にかへるなるらむ

八重霞たなびく空を鴈がねのいく一つらにかへりゆくらむ

曉天歸鴈

花のみか霞める空に殘るよの月もみすてゝかへる鴈がね

暮天歸鴈

ゆふからすねぐらさだむる空くれて猶こゑのこる春の鴈がね

闇夜歸鴈

故郷の子をおもふとやかへる鴈心のやみにたどりゆくらむ

河上歸鴈

川のおもにかすかきつれて行くかりの影は水てに見ゆるなりけり

呼子鳥何方

山彦のひゞきにつれてこたふればひだり右にもよぶ子鳥なく

雉

さくら咲くかた山畑のあけぼのに二聲なきてたつ雉子かな

野遊

あすも又すみれつまましいざけふは雲雀の牀に相やどりして

曲水宴

なにしあふ桃のさかづきとりどりに言葉の花もさきかはしつゝ

やよひ三日かはらけとりて

けふごとの桃の杯もゝかへりうかべてのまむ相思ふどち

桃

櫻には品おくれたる花ながら名もなつかしき園のひめ桃

花

なべて世の花は花にて花ならず櫻を花の花とめづれば

ひととせをさながら春になしはてて百代あそばむ花陰もがな

此の世には心とめじと思へども花やほだしとならむとすらむ

日の本の春の光に咲きそめてもろこし遠く匂ふ花かな

待花

さくほどを心もとなくおもふこそ花にうかるゝはじめなりけれ

獨待花

花かとてとひ合はすべき人もなし我をはかるな嶺の白雲

○曲水宴　ごくすゐのえん。上巳の日御前にて詩を作り宴を賜はる

○さくほどを　花に捕へられた人の情。

○日にけに　日に〳〵。

○春ごとに思ひしよりも　雅人の心境。

朝尋花

さくと見し夢路の花のおもかげをうつゝにたどるけさの山ぶみ

山寒花遲

花さかむこずゑもみえず袖さゆるあらしの山の二月の空

遙見山花

雲ならむ雲にあらじのあらそひも日にけに花の色になりゆく

隔波見花

池ひろみ浪よりをちの岸櫻よせくる影はたゞこゝもとに

すみだ川なみのあなたに立つ浪は堤の花を風やふくらむ

終日見花

朝附日にほふ山路をわけ〳〵て花よりのぼる月をみるかな

夜花

ひるみれど飽かぬさくらの花盛り七夜くもるな春のよの月

花盛

春ごとに思ひしよりもうれしきは花のさかりにあへるなりけり

山花盛

初瀨山花の半ばに風すぎて鐘のおとかをる春の夕ぐれ

山花開似錦

秋山のもみぢもあやに見えしかど花の錦にしく色ぞなき

林中花

三輪山のしげきがもとをわけみても只めにつくは櫻なりけり

遠山花

五百重山をごしの櫻さきしより花にうもるゝ松のむら立

雨後花

心うくおもひしよひの雨はれてにほふや花の露のあけぼの

名所花

夢のわたよするを舟やかをるらむ象山さくらあらし吹くなり

花非一樹

みそめてし花やねたしと思ふらむ四方の梢にちらす心を

花有喜色

物思ひなしといひてし昔より花見てうさやわすれなれけむ

對花思昔

○をごしの櫻　峯を越して咲ける櫻。

○夢のわた　吉野川の一部の名。象山もその近くにある。

○みそめてしの歌　多くの花の艶を競ふ樣を歌つたもの。

かはりゆく三十は早き人の世にありし昔の花さくらかな

花をふみて惜しみし春を數ふればわれも老木となりにけるかな

花下言志

いたづらに四十の春を過しきぬいつも若木のはなごゝろにて

花下思故郷

みよしののよしのの櫻よくみてむふるさと人の待ちとはむため

花の宴する所にまらうど來あひたり

君も舞へわれもうたはむ咲く花の醉ひをすゝむる今日にやはあらぬ

林田君染井のさとなるみそのふの花見たまふ御供に侍りて

おほかたはうつろふ中に君まつと盛りをのこす花もありけり

玉河の櫻見に行きて

百木さき千本つゞきて玉河の花のみなかみえこそつくさね

もろこしの桃のみなもとおもほえて櫻につゞく多摩の川上

家にふみよむべきよし人々に契りおきたる日花見にとあながちにさそはれて立ちいづとてふづくゑのもとにかきおきける

契りおきてよそにうかるゝおこたりも花には許せみやびをのとも

○林田君　林田ぎみとよむ、林田藩侯。

○桃のみなもと　武陵桃源の仙郷をいふ。

花のもとにあそびて

花のもとにをがめをするゐて思ふどち春の心をくみてあそばむ

落　花

うら〳〵とひかりのどけき春の日にあまぎる雪はさくらなりけり

池　落　花

けふとはむ人をまつとや庭櫻ながれぬ水のうへに散りけむ

故鄕落花

散る花をかづく浪間の鳥もゐず島のみやゐのはるの暮れがた

松間落花

たちならぶ松や耻づらむ散ればこそいとゞ櫻の心たかさよ

庭　落　花

木のもとに花の盛りは殘りけり嵐の後の庭のあけぼの

名所落花

雲と見しよしのの櫻ちりにけりきさの小河によするしら浪

山河に花のせかれたるをみて

おくれても物すさまじく見えぬかな散る花かゝる春のあじろ木

○あまぎる雪　空もくもるばかり降る雪。

○きさの小河　吉野山中の象山を流るゝ川。

○小山田にすだく云々　田園の情趣見るが如く歌つてある。

惜落花

けふのみの鐘のおとかは山櫻あすの入相もまちてちれかし

野亭菫

なつかしみ野守が庵に一夜とて春の日数をつむすみれかな

田蛙

小山田にすだく蛙の聲のうちにこさめ降りきぬ春のゆふ暮

躑躅紅

くれなゐのこぞめの梅もひざくらもたぐふ色なきにつゝじの花

岩上躑躅

をちこちの岩ねつゞきに咲きみちて山路にぎはす花つゝじかな

暮春躑躅

夏もやゝちかの島人岡の名のつゝじの花をあくまでやみる

山吹の花を折りて人のもとへやるとて

ひと枝の色にあかずば山吹の八重咲く庭をとへとこそおもへ

藤懸松

山松にこゝろ高くもかゝるかななみ〴〵ならぬ藤なみの花

暮春藤

春の日に匂ひそめてや藤浪の心ながさを夏にみすらむ

はるのとく過ぐるを

おもへ人長き春日とたのむよりなかく早く過ぐるならひを

暮春

散りのこる花のあたりを尋ねても春はとまらぬ物にや有るらむ

花鳥の色音を惜しむ心こそ暮れ行く春をおくるなりけれ

暮春月

あはれかくかすめる空も今いくか有明の月に花のちりかふ

暮春雲

ちりのこる梢とみてやなぐさまむ花より後の嶺のしら雲

暮春雨

櫻ちり卯の花さかぬ此の頃の雨は七日もふらばふらなむ

兼思三月盡

きのふ散りけふちる花を惜しむまに春もいつしか暮れむとすらむ

春朝天

○春朝天の歌　悠揚なるしらべ掬すべきものがある。

おほ空は花のにほひにおほはれて昨日も今日も朝ぐもりせり

春山

春山におもひいらずば花鳥の深き色音をいかでしらまし

春田

朝ぼらけとほ山もとを見わたせば霞をかへす小田のますらを

いざ子ども水口まつりとくせなむ蒔きしたなゐの色青みぬる

春曙

一夜あけし枕の山にいとはやも春をきかする朝がらすかな

春筆

とる筆のつたなき身には水ぐきの花咲く夢を春だにもみず

○水口まつり　苗代を作りて始めて苗代水を引く時水口に幣を立てて行ふ祝祭。

○とる筆の歌　感慨多かるべき春すらよき吟詠もなきとの意。

〇二藍　べに花と青花との間色。

〇孟夏の旬　まうかのしゆん、古昔四月一日に臣下に御酒を賜ひ政をきこしめされたる公事、孟冬の旬は冬の首にある。

泊洦舍集卷二

夏歌

首夏

山のはも霞のころも脱ぎかへてけさより雲のしらかさねせり

首夏夕

いつしかと霞もはれてきのふ今日さやかに夏を三日月のかげ

更衣

夏のきてひとへになれる衣手をいかで二藍の色にそむらむ

孟夏旬

今朝たまふ扇の風にさす竹のおほ宮人の袖かへるみゆ

送春如昨日

いつしかと梢みどりになりにけり面影にのみ花を残して

尋餘花

山陰は夏もや花の残るらむ春猶きえぬ雪のならひに

○いつきの宮　伊勢大神宮。夏は何日來をかけた。

○諸葉草　ふたは葵、賀茂葵、賀茂神社の祭に用ゐる。

新樹風

みづえさすかつらの大木陰すゞし夏はいつきの宮の朝かぜ

雨中新樹

みづえさす森のかしは木陰もよし雫も涼しむらさめの空

水邊新樹

さらぬだにすゞしくしげる夏山のみどりを水にうつしてぞみる

卯花

山吹のちりしかたへの卯木垣(うつぎがき)春と夏とのへだてをぞみる

卯花似雪

庭のおもも夏きにけりと白妙の卯の花がさねしたる袖がき

雪と見し卯の花垣はほとゝぎすこゑせぬほどの空めなりけり

賀茂祭

君をいはひ神をまつると諸葉草けふしもかくる賀茂の氏人

灌佛

御佛の御身にあむする龍の水はやくすゞしき夏をみせけり

みほとけに天飛ぶ龍のそゝぎけむためしをくむやけふのまし水

待郭公

此の頃はあふ人ごとにほとゝぎす君やいかにと問ひとはれつゝ

ふくるよの枕過ぎゆく村雨に今や鳴くらむ初ほとゝぎす

尋郭公

はつねきく人もあるらむほとゝぎすわが尋ね行く跡をたづねて

遠尋郭公

聞きつとも誰いはくらの山つゞきたづねぞ侘ぶるはつほとゝぎす

尋聞郭公

月かげの清瀧くればほとゝぎすこゑも高雄のおくになくなり

はじめてほとゝぎすを聞く人のもとへ

ねざめして君もやきける郭公夢にはあらじ今朝の一聲

山にほとゝぎすのなくを聞きて

おほつかなそれかあらぬかほとゝぎすこのくれ山の夕月の空

首夏郭公

藤浪の花ちる庭の池水に初音うかぶるほとゝぎすかな

深夜郭公

○月かげの清瀧　清、高、何れも掛詞を以て名所をいひ出してある

ほとゝぎすまだしのびねのほどとてや人をしづめて後になくらむ

月前郭公

月まちて鳴くひとこゑにほとゝぎす忍びしほどの心をぞしる

雨中郭公

むらさめの此の夕ぐれはかならずと思ひしことよ初ほとゝぎす

杜間郭公

初聲をぬさにたむけて神のますもりの杉間を行くほとゝぎす

山寺郭公

法の師のあかつきおきの袖の上に月を殘して行くほとゝぎす

河郭公

郭公こゝをせに鳴け夏箕川ころも五月の中よどにして

郭公頻

たづねてもきかで過ぎしを郭公この朝夕は耳のまぞなき

郭公留客

歸るにはしかずと鳥はねになけどかけて家路をいふ人のなき

郭公催老

○郭公こゝをせに鳴け　處もよし頃もよし郭公よ聲の限り鳴け。

○歸るにはしかず　不如歸、蜀帝旅に逝きてほとゝぎすとなり不如歸と鳴いたといふ。

五月雨ははれての後も郭公ふりゆくこゑぞ空にのこれる

早苗

いざこどもいはひて植ゑよ住の江の岸の上田は神のみとしろ

島つ田へ若苗つみてこぐ船は千町つくらむさくら人かも

端午述懐

中の重の駒のあしなみいつかわが人におくれぬことのありけむ

菖蒲

我が閨のつまに見はやすあやめ草たがよどのより引きてきにけむ

節後菖蒲

けふよりは又こむ年のあやめ草かけていつかと待ちわたらまし

閑庭橘

たち花はこけぢの露にかをれどもかげふむ人のなき住かかな

初五月雨

とゝのへて葺きし軒端のあやめ草はやさみだれて見ゆるけさかな

朝五月雨

朝戸やる軒端のあふち露くらしけふもやはれぬ五月雨の空

○神のみとしろ　神の御稲を作る料の田。

○朝戸やる　朝、戸をあけること。

○うめるは夏のながめ　梅と倦めるとをかけ長雨と眺めとをかける
○檜のつまで　つまでは杣人の木作りして角立ちたる材。
○雨降の嶽　相模の大山をいふ。
○ゆはた　しぼり染め。
○うはも　上裳　裳の上に著る著。

連日五月雨

けさ見えし雲閒の日影又もくれて昨日にかへるさみだれの空

五月雨久

日をふればおつる木の實の名もしるくうめるは夏のながめなりけり

河五月雨

さみだれはいづみの川の瀬を廣みひかぬにくだる檜のつまでかな

五月雨欲晴

五月雨もかぎりありとやさがみなる雨降(あふり)の嶽を雲のわかるゝ

ねぶ

花の色はゆはたとみえて青摺りのうはもにかよふ名さへなつかし

水鶏

やり水にながるゝ月のかげとめて夜ごゑ涼しくなく水鶏かな

月前水鶏

月見むとあくる板戸をわれかとてたゝく水鶏のをやみぬるかな

夏月

花さかむ秋まちどほに見ゆるかな菊の若葉にやどる月かげ

雨後夏月

夕立のひとむら過ぐる玉ざゝに露もくもらぬ月をみるかな

依月夏涼

ゆふ立にひるのあつさは流れゆきて月を殘せるにはたづみかな

岡夏草

月みればすゞしき夏のよはなるを風をもまたじ水もむすばじ

かのをかに草かるをのこ心せよいまか咲くらむさゆりなでしこ

瞿麥

とこ夏に盛りを見せて七草のかずにも洩れぬ花ぞこのはな

咲きまじるからのやまとの花の露いづれをかけてあはれとはみむ

照射

よる鹿をまつのほぐしは盡きぬ間に月こそしらめよこ雲の空

螢

いさゝ川浪のよるしる螢こそながれてきえぬ光なりけれ

すゞしさやまちとる夏の夕風になにを螢のひとりもゆらむ

故鄉螢

〇からのやまとの花　唐撫子と大和撫子。

〇照射　ともし、獵人が夏の頃火串に松を燃して、鹿の寄るを待ちて射る事。

○人にはちすの花　はちすに恥ぢずをかける。

○中島にいつかれいます　辨天神の面貌もかくやと思はるゝ様にさける蓮の花。

○朝め涼しき　朝起きたる時に見る様の涼しい。

玉しきの昔の庭の跡みせて今もあれ野にとぶほたるかな

水邊螢

くれゆけばあしの葉わたる河風にみぎは離れて飛ぶほたるかな

蓮

我も又心にごさでいにしへの人にはちすの花をめでまし

不忍池のはちすを

中島にいつかれいますひめ神のみおもかなして咲くはちすかな

池のおもに吹きこそかをれ蓮さく花の上野のをかごえの風

夏のあした池のおもを見やるとて

山のはにのぼる日かげは夏ながら朝め涼しき露の蓮葉

うきくさ舟にてとる

うきくさに心をよせてさす舟はさそふ水にもまかせぬるかな

夏山をこゆとて

夏しらぬ陰も有りけり大比叡やよがはにかよふ松のした道

氷室

長坂と名におふことは春をへて夏もひむろのあればなりけり

こめおけば夏もきえせぬ冰室かなみの養ひもかくぞもるべき

冰室風

ひむろ山こほりとばかり思ひしを冬のあらしも誰かこめけむ

行路夕立

草の上の露もおそろし稲妻の道しるべするゆふだちの空

野夕立

みさむらひみかさとまをすほどもなく夕立はれぬ宮城野の原

城外夕立

入日をば大内山に残しおきて賀茂河わたるゆふだちのあめ

遠樹蟬

をちかたのしげきがもとに鳴く蟬のこゑ吹きおくる夏の夕風

雨後蟬

ゆふだちのはれての後も鳴く蟬のしぐれをのこす森のした陰

松下泉

松風のあつさを掃ふ岩かげに涼しさそへて行く清水かな

納涼

○みさむらひみかさとまをすの歌　本歌古今集二十東歌「みさむらひみかさと申せ宮城野の木の下露はあめにまされり」

風ふけば松に秋あるこゝちして夏はなぎさのいほぞすゞしき

家々納涼

夕すゞみ心へだてもなか垣にひるの暑さをかたりあひつゝ

水邊納涼

岩こえてちる浪淸き瀧つせのあたりは秋の風もまたれず

河邊納涼

あつさをもあらひながすや夏衣さらしな河の浪の夕かぜ

井邊納涼

ひさごもて汲むやせかゐの水さむみかくながらこそ夏は遊ばめ

松下納涼

いくそたび岩もる淸水結びあげつ月まつ風を袖に吹かせて

みな月ばかり山ざとにまかりて

山かげやいさゝ小河をとめくれば夏にしられぬやどもありけり

庭に井ほらすとて

夏はたゞ庭ゐの淸水はしらせて名におふやどと人にいはれむ

扇不離手

○ひさごもてくむや　神樂歌「大原やせかゐの淸水ひさごもて鳥はたくごゝ遊びてをくめ」

○いさゝ小河　いさゝは接頭語。

○なにおふやどと　淸水の姓なればかくいふ。

よもすがら手ならす閨の扇にはおき別れたるあかつきもなし

夏神樂

浪のおとにきねがつゞみをうちそへて川瀬すゞしき夏かぐらかな

草むらにむかひて秋をまつ

なにとなくおきそふ露もあはれなり花野の秋や近くなるらむ

夏祓

あつさをも瀬織つ姫やもち出でて大海の原にながしすつらむ

うきことのかへらぬ水にみそぎして心さへこそすゞしかりけれ

つくだじまなる住吉の御社にみそぎして

すゞしさになにはおもはずはらへせむこゝもあづまの住吉のみや

阿波のかうのとのゝなりどころに深川の濱邊にみそぎして

みそぎする夕日のくだち秋見えて八潮路遠く浪のよせくる

社頭夏祓

けふのみや杜のみしめをよそに見てあさちの繩にたれもよるらむ

夏朝天

出づる日のかげさしそめぬほどよりも今日のあつさぞ空にしらるゝ

○きねがつゞみ　きねは巫女、禰宜をいふ。

○瀬織つ姫　罪穢を祓ひたまふ神おほまがつびの神ともいふ。

○つくだじま　江戸佃島。

○夕日のくだち　夕日の傾くこと祝詞に「六月晦日夕日の降ちの大祓に」

夏夜

ほたるかは水鶏もすゞし月もよし夏はよるとぞうべもいひける

夏藻

あまの子が玉もかり船こぐ見えて夕すゞしき夏のうみづら

夏動物

日ざかりはゆききもなつの門の外になれていこはぬ蟻のかよひぢ

夏舟

すゞむとてみ山のおくもとめしかど身にしむ風は舟路なりけり

○うべもいひける　よくもいつたものだ。

○み山のおくも　山の奥に行かむとも思つたが。

泊洦舍集卷三

秋歌

河邊立秋

みそぎ河きのふの夏の跡とへばいぐしにそよぐ秋のはつかぜ

社頭立秋

秋になるしるしをみせて初風もみゆたて笹のそよとこそふけ

初秋

夕露のたゞならずおく袂より身に吹きとほす秋のはつ風

露にほふ花のの宮の夕月夜小柴がもとに秋はきにけり

初秋風

なにとなく梢かなしき聲きけば秋は風よりかよふなりけり

一葉ちるゆふべもまたで身にしむは桐の窗ふく秋のはつかぜ

初秋露

朝まだき草葉に結ぶ白露に秋のあはれを見そめつるかな

（）いぐし　齋串、玉幣などかける榊小竹など。

（）みゆたて笹の　御湯立は巫女神前にて熱湯を竹葉に浸して身に浴み、神掛りとなりて御託宣を得る式。此の句はそよ〱の縁語。

○うきもののかつ　荻吹く秋の初風はうきものではあるが又珍らしい。

初秋月

草も木もしらぬもみぢの初しほを月の桂の色にみるかな

初秋荻

うきもののかつめづらしき夕かな軒端のをぎの秋のはつかぜ

秋來水邊

一葉散るきしの柳の下水にはやくもうかぶ秋のいろかな

秋色浮水

みそぎせしあと川柳一葉ちり二葉流れて秋かぜぞふく

早涼

うちつけに袂すゞしき朝戸出は初秋かぜやよはに吹きけむ

秋のはじめ山ざと人のもとへといふ事を

今よりのゆふべやわきていかならむ都もおなじあはれなれども

おなじ題にてある人の「我が袖も露けき秋のきのふけふ山ざといかにさびしかるらむ」とあるかへし

七夕

苔深き山路の秋を尋ねみよみやこの袖の露はつゆかは

銀河(あまのかは)わたりわたらず昔よりかけていひつぐかさゝぎの橋

兼待七夕

たなばたの心や空にあくがれむ天の河原に秋たちしより

待七夕

なゝかへり天の河浪たちてゐて待ちわぶらむか今日のわたり瀬

乞巧奠

雲ゐより雲ゐにかよふひかりかな星祭する庭のともし火

棚機にものかせるところ

あやもなき詞をかしてたなばたの心たくみにかへむとぞ思ふ

殘暑

罪とがははらへ捨てしをみそぎ川あつさよいかで流さざりけむ

折々はとらでも夏はへしものを扇はなたぬきのふけふかな

相撲節會

とりどりに花も光をあらそふや左のあふひ右のゆふがほ

荻告秋

秋ぞとは身にしむ風におぼえしをうたてそよともつぐる荻かな

○かさゝぎの橋　七夕の夜牽牛と織女との會合の時鵲が翅を竝べて銀河に橋をかけるといふ。

○乞巧奠　きこうてん、七夕の星祭、女子の手工に巧ならむ事を乞ふ意。

○待ちとりて　風の來るを待ちて

○ゆはたと見えて　しぼり染めの様に見えて。

幽棲荻風

待ちとりて軒端の荻のこたへずば風だにとはぬすみかならまし

萩

さをしかのこゑほのかなる朝霧に匂ふやをのの秋萩の花

萩露

露原や秋ゆく人の袖をみよいづらは萩の色ににほはぬ

依萩巡路

ちらさじと萩の中道いくすぢに心を分けてたどるたび人

萩移水

よる浪のあやをみだせるせゝらぎにうつるも萩のにしきなりけり

萩に朝がほのかゝれる

錦おる萩だにあるを朝がほのゆはたと見えて色をそへぬる

女郎花をうゑて

わが物と思ひしむれどをみなへしありし野べをや下にこふらむ

路薄

旅人の朝ゆくをのの秋風にをばなかたよる露のほそ道

屏風の絵に八月すゝきおほかる野

露原やちもとの尾花ほに出でて秋はさかりとみゆる頃かな

槿花

露のまの命をもちて松垣になど這ひかゝるあさがほの花

をとめ子がその朝がほのなつかしき笑まひおほゆる花の色かな

朝顔の花を見て

この花のさかりとなれば誰もみなとく朝露のおき出でてみる

七くさをわかちてなでしこを

七草のいづれはあれどところせき籬にみべき花はなでしこ

蘭

秋風にほころびそめてほどもなくひとのに匂ふふぢばかまかな

蘭香薫枕

藤袴秋の枕ににほふよは思ひぞいづる春のうめが香

かるかや

うきにのみならひが岡のかるかやのみだれ心ぞつかねかねつる

ふづきすゑつかたある人のもとをとひけるに庭にわれもかうの花のおも

○露のまの命　槿花一日の榮。

○七草　秋の七草、萬葉集卷八に「はぎが花を花葛花なでしこの花女郎花又藤袴朝顔の花」

○かるかや　かるかやに託して亂れ心の收めがたきを詠む。

○われもかう　我も斯くと掛ける

○あだもの　はかなき物、露の命、露の世露の身。

○はたおりめ　こはろぎの古名、りよ〳〵と鳴く。

しろく咲きたるをみて

われもかう庭を花野につくりおきて心ある宿といはれてしがな

草花未遍

ほに出でてまねく尾花も見えなくにまだきなまめく女郎花かな

翫草花

さきさかぬ野邊の七くさいくかありてかき數ふべくならむとすらむ

閑中草花

見るからに千ぐさにうつる心かないづれを秋の花とをらまし

秋野忘歸

さく花をかぞふる外のわざもなし世をあきはてし露のやどりは

百くさの花に心をそめをれば月とむしとに野はなりにけり

露を

月花のひかりもわれにそふものを何あだものといひは消つべき

寐覺蟲

身におはぬ錦きたりと見し夢のさむる枕にはたおりめ鳴く

月前蟲

月かげの野べのにしきを照らす夜ははたおる蟲の聲もしきれり

野蟲

露しげきをのの篠原秋ふけて淺茅になるゝむしの聲かな

水路聞蟲

むしのねの聞きながされぬ岸陰を心してさせ秋のふな人

寺閑聞蟲

しづけさは寺おこなひのかねのおとに蟲の音まじる秋の夕暮

秋の野にあそびて蟲のなくを聞きて

草の綵も花の錦も色なれば心をそめて蟲やなくらむ

朝鹿

明けゆけばをののうす霧たえ〲にのこるも寂しさをしかの聲

雨中鹿

小萩山秋風さむくふる雨にぬれてつまとふさを鹿のこゑ

鹿聲雨方

枕よりあとより鹿の聲すなりあかつきさむし牀の山かぜ

鹿聲幽

○はたおる蟲　今のきり〲す、ぎいすちよと鳴く、古きり〲すといつたのは今のこほろぎである

○つまとふさをしか　妻を呼ぶさを鹿。

○枕よりあとより　前より後より。

○野べやゆく　鹿の行方を想ひやるのである。

○をすの外　小簾の外。

野べやゆく山べやかよふ風につれ霧にまぎるゝさをしかの聲

旅宿鹿

たびねする麓のいほの鹿の音にあすの山路のあはれをぞきく

山路聞鹿

しかのねぞ一こゑごとに遠ざかるふもとの里や近づきぬらむ

山居聞鹿

しかのねも枕の下にきこゆなり雲をかたしく峯のいほりは

秋の夜月あかし林のもとに鹿たてり

秋ふかみ身にぞしみけるもみぢ原月の霜ふむさをしかの聲

小鷹狩

たかの名のつみもわすれて村雀すだくかり田にかりくらすかな

曉秋風

むしの音は淺茅が露に消えはてて夜半のあらしぞ松にのこれる

をすの外に初鴈がねの聲過ぎて秋かぜ寒しあけぐれの空

秋夕

ゆふべ〱袖にあらしの露ふけば秋のこゝろぞちゞにくだくる

なにとなく物ぞかなしきわび人の袖の秋しる露のゆふぐれ

河邊秋夕

釣のいとに吹く夕かぜのすゑみえて入日さびしき秋の河つら

旅秋夕

薄霧のたてるあなたに入日落ちて里とひわぶる野路の旅人

山館秋夕

心あらむ人はとひみよをしか鳴くをかべのいほのゆふ月のそら

寺秋夕

法の師のあなうら結ぶ牀の上にもみぢかつちる秋の夕暮

秋田

賤のをは門田の稻穗とり〴〵にとしある秋をかたりあひつゝ

八月田づらのいほにて

秋まちてかれるわさほを賤のをは折もはつきにかけてほすらむ

稻かけほしたり

入日さすくろの稻つか夕かけて落穗たづぬるかし鳥のこゑ

閑居秋雨

○法の師のあなうら結ぶ　足裏結ぶ、即ち跏坐すること。

○折もはつきに　はつきに葉月とはつきを掛ける、はつき又八手ともいふ物をかけて干す物。

○かし鳥　かけすの一名。

こほろぎの鳴く昔しめりてふくるよの軒端さびしき雨そゝぎかな

秋夜

月をめでむしを尋ねて秋もなほ短しとおもふよはは有りけり

月

あくまでも月見よとてや秋のよを長くはむかし定めおきけむ

十四夜月

山のはのなくばと何かかこちけむ野べとてつひにいらぬ月かは

十五夜月

もちといへどあな頼みがた十日あまりよよしとこそは先づこよひみめ

おほ空になべて雲なきこよひかないづくの秋も月はすむらむ

居待月

まどゐして月まつ人のことの葉はたゞ山のはの雲はれよかし

九月十三夜

七草の花のさかりの月影を二たび菊のそのにみるかな

靜見月

かげやどす淺茅が上の夕露に心のちらぬ月をみるかな

○山のはのなくば　伊勢物語に「あかなくにまだきも月のかくるゝか山の端逃げて入れずもあらなむ」

○十日あまりよよし　十日餘り四に夜良しと續けた。

○居待月　陰曆十八日の夜の月。

名所月

玉河の瀬浪ひかると見しほどに月おし照れりむさしのの原

都月

さよふかくゆききのちりをしづめてぞ都大路の月は見るべき

陌頭月

八街（やちまた）にひかりをわけて橘のかげおもしろくにほふ月かな

野月

おほえ山浮雲はらふ秋風にいく野の末もてらす月影

嶺上月明

待ちもあへず月さしのぼる嶺の名のをぐらは山のとかげなりけり

山中月

みねのいほに待ちつゝをれば谷ごしのとやまの松をのぼる月影

海人歌月

月かげの清きなぎさを伊勢のあまの玉や拾はむとうたひてぞ行く

山家月

山ざとも月にとはるゝよはばかり都におとるこゝちこそせね

〇山のとかげ　常陸、いつも日かげのさゝざる所。

○浮べる雲に　空行く雲に蔽はるる月は、世上の浮雲にかゝはらぬ身を羨むなのであらう。

閑居月

世間のうかべる雲にあはぬ身をうらやましとや月もみるらむ

幽居見月

かきこもるむぐらがおくの秋の庭はらはぬ露に月やどりけり

月幽栖友

なくむしの聲の外なる友もあれや林がくれを月のとひくる

閑山曉月

ねざめして見ればさびしなをしか鳴く谷の軒端におつる月かな

荒屋月

かげもらぬかたもなきまで荒れにけり果てはすみかを月にゆづらむ

對月言志

かくしつゝ千五百の秋もおもふどち訪ひとはれてぞ月は見るべき

月前閑談

おもふどち心を月にすますよは言葉殘りてかげぞしらめる

古寺殘月

鐘のおとに檜原が雲をさそはせて泊瀬のおくに殘る月影

夕雁

月かげのさすやをかべの松風にかり鳴きわたる秋のゆふぐれ

雲間雁

かつ隠れかつ顯はれて天津鴈いくむら雲をわけてきつらむ

霧

すみだ河舟よぶ聲もうづもれて浮霧ふかし秋の夕浪

霧底筏

秋ふかき杣山河の夕ぐれはいかだに霧をたゝむなりけり

鴫

夕まぐれ野澤の秋をとひみれば物さびしきの羽音のみして

風前擣衣

つちのおとをそれかとばかり誘ひきて軒端の松に風をやむなり

名所擣衣

河内女が絲くるわざのいとまあれや衣うつなり高安のさと

里擣衣

三日月の入間の里のさよきぬたあるかなきかに聲たゆみ行く

○物さびしきの羽音　しきに鳴き兼ねた。

○入間の里　武蔵國にある。

〔山深く秋のあはれ〕古今集にも同じ趣を詠じて「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき」

山家擣衣

たがいほぞよをうぢ山の秋風に鹿の音たぐふよはの砧は

暮秋擣衣

ころもうつおとぞ野里にしきるなるはたおる蟲の聲はよわりて

菊花待開

花さかばとひくる人もありぬべしいざませゆはむ庭のしらぎく

白　菊

うつろふもさかりといへど菊の花たゞ白妙のほどぞ色なる

紅　葉

山深く秋のあはれをたづぬれば鹿の鳴く音にもみぢ散りつゝ

尋紅葉

たづねわびかへる山路の夕暮に紅葉かざしてゆく人やたれ

爭尋紅葉

おくれじとわけいる山の初もみぢ先づ一枝はたれかをるらむ

新霜染楓葉

きのふまで露につれなくみし木々はけさの霜をやまつとなりけむ

紅葉淺

昨日今日露に色づくもみぢばは今いくか有りて霜にてるらむ

林葉漸變

入日さすかた山林色づきて時雨まつまのほどもなつかし

紅葉未遍

秋山を我はといひしいにしへも紅葉はかくやむらごなりけむ

紅葉滿山

薄く濃きもみぢの色に遠近の山べのあきはいまさかりなり

月前紅葉

秋深きかた山林わけくれてもみぢにうつろ月を見るかな

樹陰紅葉

ときは木を何かはえなき陰とみむさてぞもみぢも色はそふなる

紅葉欲散

もみぢ葉は風まつばかりなりにけり時雨よ空にこゝろしてふれ

神の社のあたりをすぎける時いがきのうちのもみぢをみて

ひさかたの桂の宮を秋とへばひるも紅葉のかげはてりけり

○秋山を我はといひしいにしへ　萬葉集一、額田王の歌に「……秋山の木の葉を見ては黄葉をばとりてぞ思ぶ青きをば置きてぞ歎く其處し樂し秋山吾は」

海晏寺の紅葉さかりなる頃木陰にむれゐてみわたせば近き海ばらのにけよきにうかべる舟どものたゞこゝもとによるとみなされて

みやびをも釣する舟も磯山のもみぢのもとにこがれこそよれ

幽栖暮秋

月にうらみ蟲にかこちていつしかと露のやどりに秋もくれけり

暮秋蟲

ひくまのにおもひとまりて行く秋のいそぐにつれぬくつわ蟲かな

秋ふかき露野のをかや下折りてかれ〴〵殘るむしのこゑかな

暮秋眺望

見わたせば根白高かやうらがれて秋かぜ寒し刀禰の川づら

暮秋懷

もみぢ散り時雨降るまでながめきぬ荻の葉風を身にしめしより

終夜惜秋

をしむまに明け行く鐘の身にしむはよはにや露の霜となるらむ

九月のうちに冬立ちける曉に月をみて

冬來ぬとおもふ葉は軒におとなへど猶有明の月ぞ秋なる

○海晏寺　東京品川にある、北條時賴の創立。

○ひくまの　引馬野、參河國にある萬葉一「引馬野ニ匂フ榛原……」

○刀禰の川　利根川。

○冬立つ　立冬の季節に入る。

九月盡

けふのみと秋を見はつる夕暮にいやはかなにも散るもみぢかな

閑居樂秋水

もみぢちる山下庵の垣清水うき世の秋をへだててぞすむ

秋河

影うつす入日の色もくれなゐに穗たで花さく秋の川づら

秋水

朝夕になれて結びしやり水のあたりうとくもなりにけるかな

秋香

藤袴うつろふ後も菊咲きてにほひかれせぬ秋の野らかな

秋懷

此の秋のわきても憂きはいたゞきにおかざりし霜のおけばなりけり

秋祝

八束穗のたりほのみしねとりどりに秋をよろこぶ天の益人

○みしね　稻。
○天の益人　人民、青人草。

○つらゝゐにけり　氷が張つた。

○まつがさね　かさねの色目、表は萌黄にして裏は紫。

泊洦舍集巻四

冬歌

初冬

行く秋の露にわかれし袖を又時雨にぬらす冬はきにけり

田家初冬

筑波山木がらしさむみ尾花ちるしづくの田ゐはつらゝゐにけり

十月更衣

こむ春の花の袂をまつがさねうらめづらしく今日よりぞたつ

時雨

色もなく見はてしよもの梢をもなほ降りすてぬ村時雨かな

さびしさは秋より後の山里や落葉がうへに時雨ふりつゝ

朝時雨

夜あらしに木々のもみぢや散りはてしけさは時雨の峯にさびしき

寐覺時雨

我が身よにふりゆくほどをおもひねの寐覺の牀をとふ時雨かな

山時雨

雪はまだ遠山のはのむら時雨いくかめぐりてふりかはるらむ

嶺時雨

おすまたでけふや麓にしぐるらむ雪となるべき嶺のうき雲

山路時雨

ふるとみしかけぢの雲はそれならで思はぬ嶺ぞ風にしぐるゝ

山家時雨

ふりはへてとふ人もなし山里はしぐれの雲のゆききのみして

時雨晴陰

けふばかり晴れぬとみしを神無月ならひにもれぬむらしぐれかな

道行く人時雨にあへり

旅人のみのしろ衣きればはれ脱けばふりくる神無月かな

落葉

吹く風の鞭をおほする夕ぐれは木の葉の駒ぞ足をはやむる

靜所落葉

○かけぢ　懸路、石山の路。

○ふりはへて　わざ〳〵。

○みのしろ衣　蓑の代りに著る衣

○木の葉の駒　風を鞭にたとへ木の葉を駒にたとへた。

われのみとわくる落葉の霜のうへにはやくをじかの跡はありけり
かし鳥の聲ふきさらふ木枯に苦路さびしくちるもみぢかな

葉落水面紅

ちらでたゞ影をうつせるほどだにも水はもみぢの色にながれき

松間落葉

時雨にはつれなくみえし山松をそむるは風のもみぢなりけり

名所落葉

明日香風ふけど吹かねどかづらきや外山のもみちきのふ今日ちる

山落葉

みるがうちにわたる時雨の雨はれてのこる木の葉ぞ山めぐりする

關落葉

朝風におろすこのはの錦きて關屋を出づるたびすがたかな

山野落葉

もみち葉にのこれる秋をさそふかなをのへの時雨野べのこがらし

落葉深

わけ見れど苦路のみどり色もなし落葉をうづむおち葉のみして

○かし鳥　かけす。

○わけ見れど苦路の　落葉滿地の趣。

殘菊夾路

秋わけし菊の中道あれにけり霜をかさねて花はにほへど

神無月ばかり木村定至がもとをとひそめて殘菊帶霜といふことを人々とともに

今よりはかはらよもぎのかはらずて霜のまがきもかれずとひこむ

初霜

けさのあさけ初霜白しうべしこそよのまの鐘のこゑはさえけれ

山家朝霜

こりつみし椎のこやてに霜置きて朝戸出寒き谷陰のいほ

風從北來

隅田川きしのうすらひ結ぶらむ筑波ねおろしきのふけふ吹く

冰

冬深き谷間の小河いかばかり冰の底もこほりゐぬらむ

山寒水結冰

山の名のあらしをいたみふもと川岩こす浪やこほりそむらむ

池冰

○かはらよもぎ　菊の異名。
○かれず　枯れずと離れずとをかける。

○うすらひ　薄氷。

○うすらひにうつす姿　之れも亦旅路の景致何となく樂しみがある

○月寒きの歌　女郞花を擬人化していふ。

ゆく浪もはては氷れとせき入れてながさぬ水ぞ先づこほりける

あしまよりむすびそめてや池水の浪ものこらず氷りはつらむ

河氷

河のおもにうかべる舟のゆるがぬはこほりや浪をつなぐなるらむ

氷筏をとづ

杣河のこほりの牀のいかだしは朝日のさすにまかせてやみる

氷爲旅鏡

うすらひにうつす姿もかげ寒し朝河わたる冬のたびぢは

嵐吹寒草

秋だにも野分は花にあらかりきましてかれふの霜をふく聲

月照寒草

月寒きかれふのをのの女郞花霜をいたゞくかげやはづらむ

霜むすぶ一むらすゝき月影のすごき庭ともなりにけるかな

江寒蘆

朝夕の霜に下葉は折れふしてちる花寒し難波江のあし

蘆花如雪

わすれては雪かとばかりみしま江やあしの花ちる浪のあけほの

寒松

もみぢ葉のかりのにほひは散りはててまことの色とのこる松かな

寒樹交松

しもと原のこるもみぢの色もなし雪まつ風のおとばかりして

冬朝松

夜のほどの時雨や松にこほるらむけさは嵐の枝にさわがぬ

霜白き松の上葉の朝附日さすがに影ぞあたゝかげなる

枯野朝

風さむみ尾花ちる野の朝霜にはや跡つけて行くはたが子ぞ

枯野の草を

しげかりし蟲の音さへにかれはてて一もと薄人もすさめず

冬野やくところ

春の日にもえむ野べをば待たずしてなどやくとのみたつるけぶりぞ

冬武藏野に旅人たてり

多摩河のわたり瀬けさやこほるらむ秩父嶺白しむさしのの原

○しもと原　しもとは若き木立の枝の茂きもの。

○朝附日　あさづく日朝さしのぼる日影。

十月滋賀の山越する人に

あはれいかに志賀おろし寒からむもみぢの錦たちかさぬとも

冬月

大ひえやをひえのふもと雲晴れて松の梢にこほる月かげ

社頭冬月

冰とはいかで見ゆらむ僞りをたゞすの河にさゆる月かげ

山家冬月

小野山や炭やく煙峯に消えて谷ののきばにこほる月影

寒月照松

冬枯の外山にすごき月かげも松にはしばし見ゆるべかりけり

寒月照梅

さゆるよの月にはあけぬ閨のとも梅さきしよりさされざりけり

霰似玉

天少女かざしの玉の緒や絶えし霰ちるなり雲の袖より

寒閨霰

とけてねぬ袖の涙にあらそひて夜風を寒み霰たばしる

○志賀おろし　脱字があるらしい。

○たゞすの河　賀茂の社頭の河。

○寒閨　獨りぬる牀。

〇あさて小衾　麻布をもて作れる衾。
〇ふすまばかり　衾と臥す間とをかけたり。
〇しほぢ待ちとる　月影を潮路と待ちとる。
〇あぢむら　あぢ鴨の羣。
〇絲ひを　細き氷魚。

衾

身をしればしく物なしと思ふかな重ねなれたるあさて小衾

寒夜衾

いくかさね著そへども猶寒き夜はふすまばかりやしばしわすれむ

名所千鳥

夕浪のかけて昔をしのぶとやあふみの海にちどりしばなく

風あらき波の立ちゐに大淀のうらみがほなるさよ千鳥かな

月前千鳥

さしのぼる影をしほぢに待ちとりて夕浪千鳥月になくなり

水鳥多

みなと江やあしまのこほり月さえてあぢむらさわぎ千鳥しばなく

千鳥近馴

冬深きみぎはのいほのあはれさは枕のもとにかもぞはねきる

網代

田上（たなかみ）や河風さむみあじろ人浪のよるさへひをや待つらむ

絲ひをのみだれてかゝるあじろ見にたえずよりくる都人かな

〇冬淺き池の渚云々　初雪の閑寂評すべし。

〇ふりはへて　わざ〳〵。

〇よもぎが庭に跡つけし　客が來り庭に跡をつけた。

閑庭待雪

はらはねば霜にあれゆく荏生をはや降りかくせ庭の初雪

閑居待雪

しづけさに又しづけさをそへてみむ初雪かゝれ軒の松がえ

初雪

冬淺き池のみぎはに降る雪をあしの枯葉に見そめつるかな

神無月木の葉まじりにちる雪は積らずながらめづらしきかな

淺雪

難波がた浦風さむしあしの葉に薄雪なびくあけぼののそら

雪後朝

ふりつみし雪は夜のまに晴れにけり朝日こぼるゝのきの玉水

庭雪積

ほどもなく跡たえはつる庭の雪に人やとふとも待たれけるかな

雪中客來

ふりはへてよもぎが庭に跡つけし心ふかさぞ雪にまされる

山家雪

とふ人は花の頃だにうとかりき思ひやたえむ雪の山ざと

山雪

よな〳〵の霜をかさねておほ鳥の羽がひの山に雪ふりにけり

野外雪

うすゆきのふるから小野のをかや原色なき色もめづらしきかな

樵路雪

柴人はになふつま木を橇につみて中々やすき雪の山道

河雪

野も山も皆しろたへにうづもれて一すぢくろし雪の中川

水のおもにつもらぬ雪もつもるらしさわぎし浪のみえずなり行く

島雪

まれにきて見るぞうれしき難波がた田みのの島の雪のあけぼの

湖雪

風はやみ矢ばせのゆきき舟たえて雪をわたすやせたの長橋

關路雪

みこしぢや跡もあらちの關ながらつもれる雪ぞ人をとゞむる

○おほ鳥の　枕詞。
○羽がひの山　大和にある。萬葉十「春日なる羽易の山よ……」
○田みのの島　攝津西成郡の海濱古今集十七「雨により田みのの島を今日行けば……」
○あらちの關　愛發の關、越前の國敦賀郡愛發村にある。

神社雪

たき捨てしきねが庭火のあとしるし神のみまへの雪の村消え

道行く人の松の雪見たる

きて見ればいたゞく雪もおもしろし暫しかげかせ和田の笠松

山里の雪のあしたしとみあぐる女あり

しとみあぐるよそめもやさし山のはの鏡とみゆる雪のひかりに

雪のあした上野のをかを見やりて

おもしろくうづみうづまぬ池山の雪ははれてぞ見るべかりける

島このむ人に見せばや雪はるゝをかべの松よ池のみぎはよ

雪いみじうふれるあした晁樹がもとをとひて

きのふけふやさかつもれる大雪を腰になづみてわれはきにけり

雪ふりつみて尺にあまれること三度におよべりし年に

いくそとせふるき翁にとひきけどかかるみ雪はいまだみずといふ

雪をたもとに

めづらしき道の行手の初雪を袂にいかでわれははらはむ

雪中遊興

○きね　巫女、禰宜。

○和田の笠松　攝津國和田にある松の名木。

○やさかつもれる　八尺、多くつもつた。

○いくそとせ　何十年。

すみだ河雪おもしろき舟の道を醉ひにのりてもさしのぼるかな

雪中遠情

月花のたびになれみし海山を窗のゆきにも思ひやるかな

雪中鳥

名に高き雪のみ山もおもほえて鳴くねさむけき鳥のから聲

雪中獸

雪深きみ山のおくにすむ熊も春まつ陰やかねてしむらむ

鷹狩

かり人の手にもかへらずあら鷹の野風をはやみ風ながれして

あらたかのさか羽のみだれかきならし今一よりときそひてぞ狩る

連日鷹狩

きのふよりけふはかり子の足よわし思へば鷹ぞつかれざりける

炭竈

おく山のすみやく翁こと問はむあはれいくよをなげきこりぬと

冬夜難曙

よひのまに炭さしそへし埋火はしらめどしらむ空ともなし

○かり子　狩子、勢子。

○冬夜難曙　埋火は消えたけれど夜の未だ明けないのを詠んだ。

埋火

今よりは北ふく風に窗とぢてはひかくるべきうづみ火のもと

山家爐火

かくしつゝ身は山かげに埋火のよにあらはれぬ心ともなし

神樂

からかみの神の御前にいつよりか倭(やまと)をごとはしらべそめけむ

はふりこがかくる長ゆふ昔より今に絶えせぬ神あそびかな

夜神樂

人長(にんぢやう)がかくるまぞゆふ長きよを霜のおくまで遊びつるかな

佛名

法のしやこと果てぬらむかへなしのみきをすゝむる雲の上人

ひと年の夢うちさむる曉に三世のほとけの御名をきくかな

佛名おこなふ家

かへなしのみきこそなけれ法のしに心づくしの綿はかづけむ

荷前使

朝まだき荷前の荷の緒引きつれてつかひにたゝす雲の上人

○倭をごと　東琴、琴の一種で六絃のもの。

○人長　神樂の舞人の長。

○佛名　十二月十九日より三ケ夜行はるゝ禁中の公事。
○かへなしのみき　攝津柏梨の莊にて製造する甘醴酒。

○綿はかづけむ　佛名の夜導師に綿をかづけることゝ柏梨の勸杯とは古くよりの例。
○荷前使　のざきの使、古、年の暮に十陵八墓へ幣帛を奉らせらる事。

冬至

天津日の南にいたるけふよりや北ふく風ものどにふくらむ

冬至梅

雪のうちに下ゑむ梅や天地の春をもよほすしるし見すらむ

年内鶯

雪のうちにすだつうぐひすなれも又春に心のいそがれやする

歳暮

春秋を何に過して月花にことじもあかぬ我が身なるらむ

あづさ弓いるが如くに行く年はやといふまさへあらぬなりけり

身につもる年をばとしとなけけども心おそさぞありしまゝなる

ことしはと思ひしものをいたづらになすことなくて又もくれぬる

しかすがに老の數にはまじらねど若きが中はいとはれぞゆく

歳暮近

家々にきぬもてくばるわざみれば年のとぢめやほどなかるらむ

くれぬとて松きる賤がをのの音のほと〳〵しくもなれる年かな

年のくれに

○やといふまさへ　「や」は、おやと歎くにいふ言葉、それを「あづさ弓いる」にかけてゐる。後拾遺「思ひいづる時もあらじと思へどもやといふにこそおどろかれぬれ」

○しかすがに老の云々　老い行く人の心境を穿ち得たものである。

歳暮雪

雪をのみつもるといひてとし／＼に身のふりまさることはおぼえず

降る雪に跡をしつくる物ならば年のゆくへやたづねても見む

歳暮衣

かた／＼に春のまうけの衣くばり色もよしある梅がさねかな

歳暮炭竈

春をいそぐ炭積車かずそひて煙すくなくなる山路かな

山家歳暮

都へと運ぶとし木におもふかなうき世の春はこりはてし身ぞ

閑居歳暮

世の人をおくりむかへぬすみかにも年はかへりて春はきぬめり

歳暮言志

月花にことしもくれぬいざや又言葉の國にはるをむかへむ

よのわざにあはれまぎれぬ宿もがな年のいそぎをよそに語らむ

春巳卜鄰

○梅がさね　かさねの色目、表は濃き紅、裏は紅梅なるもの。

○春巳卜鄰　春巳に鄰を卜す事、き近く來るをいふ。

はしりでに梅の花さきぬ我が宿の垣ね近くや春はきぬらむ

依花待春

いたづらに過ぎ行くとしも惜しけれど暮れずば花の春にあはめや

送年筆硯中

一とせをなにに暮れぬとかぞふれば筆とるわざの外なかりけり

としのくれに雪高くふれるあした四方のかすみそめたるを

しかすがに春をちかみか昨日今日雪げのなごり空にかすめる

年のくれに文づくゑの塵はらふとて

ことし又ふみ見る窓にくれ竹のえたるふしなき身をなげくかな

三十一になりけるとしのくれに

とをはたといひても有りしを三十餘りひとへにをしき年の暮かな

ものへゆきける人をまちてしはすのつごもりに

かへりこぬ人の心としら雪のまつにかゝりて年をくらせる

冬山家

さびしさをまさきのかづらくるとあくと軒に落葉のおとばかりして

○まさきのかづら　常葉なる蔓草或は一種のつる草ともいふ、くるの縁なり。

小野山冬

炭木こる道やうもれし小野山に煙たえたる雪のあけぼの

冬野朝

朝風にかれふの薄をれふしてふするの牀に月ぞのこれる

冬祝

東人の荷前の荷の緒世々かけてゆひかためたるおほい島國

○ふするの牀　臥猪の牀、枯草をかき集めたる所、猪の牀とするものである。

泊洦舍集卷五

戀歌

初戀

きのふまで露のかけても知らざりし袂よりこそ戀はおぼゆれ

我ながらあやしく袖の露けきや戀といふもののならひなるらむ

人しれぬ心をたねにおひそめてまだ戀ぐさの二葉なるかな

戀のうたよみけるなかに

涙をば露とも人にいひてましやつれゆく身よなにかこたむ

不言戀

ひとことに千々の思ひは盡きせじをなになか〱に洩らしそむべき

互忍戀

もろともにつれなし顔はつくれどもかよふ心はあさゆふにして

久戀

○繼橋　柱を立て板をつぎてかけ渡したる橋。眞間の繼橋、淀の繼

○慰むるかたもあらまし　誠は慰むるかたなきこと。

○きぬ〴〵　後朝。

○白地戀　あからさまなる戀。

慰むるかたもあらまし來ぬよはも憂さをかたりて待つ身なりせば

待空戀

こむといひてこぬに馴れたるよはも猶枕はやすくとられざりけり

逢戀

春深き閨しづかなる雨のよにわがおもふ人とむつがたりして

我が袖に人の涙ものごふまで思ひかはすやさよの手まくら

別戀

きぬ〴〵のわかれの牀に下紐をゆふつけどりよこゝろして鳴け

顯戀

こりずまにみるめをかれば浪ゆする磯松がねと身はなりにけり

白地戀

曉がやをかりそめぶしのさゝ枕かけてわするな露のちぎりも

歸無書戀

いそぎにし人の心のうき橋にふみ見ぬほどをあやぶまれつゝ

片戀

○蒙示現戀　示現を蒙る戀。

○ゐでの下帶　昔男が井手にて女に帶をやりしが年經て又あへりといふ故事。

いかばかりうれしからまし我が思ふこゝろを人の心なりせば

占戀

とけてあふしるしを見せてうれしくも山菅うらのむすぼゝれつゝ

依戀祈身戀

長かれといのるにはあらず逢ふまでの命をかくる杜のしめ繩

蒙示現戀

貴船河玉ちるばかり有りしよの昔もかくやうれしかりけむ

祈逢戀

うれしさにうきせかはれる貴船川はやくはいかで祈らざりけむ

契戀

めぐりあひて又ときかはすこともあらむゐでの下帶長くわするな

變約戀

わが僞にきのふたのめし僞りはよそのまことと今日やなりけむ

疑戀

色みえぬ人の心の花うるしぬるかたよそにありやしぬらむ

思煩戀

いなせともいひはなちなば池水の深きなげきにわれは沈まじ

見形厭戀

岩橋の神にあえたるうき身には人にかくべき一言もなし

過不逢戀

かさねつる袖のなごりを今はたゞかたしく牀にしきしのびつゝ

不惜名戀

あひおもはぬ中に立つ名も有るものを君もをしむな我もいとはじ

不謂被恨戀

我が心露もよそには散らさぬをなどてまくずに風さわぐらむ

逢後恨戀

うき人をうしとも何かかこつべき知られずしらぬ昔なりせば

等思兩人戀

月も見む花もたをらむ朝夕に春と秋とのあらそひもなく

思三人戀

花をとひ月をたづぬる外に又ゆき見まほしきかたも有りけり

乍臥無實戀

○いなせ　否と諾と。

○岩橋の神　役の小角山神に命じて岩橋を架けたる時、葛城の一言主神は姿の醜きを恥ぢて夜のみ出でたりといふ故事。

○不謂被恨戀　謂らざるに恨みらるゝ戀。

○ふしわづらひて　臥しわづらひて。なよ竹の節にかけてゐる。

をるべくもあらぬ心のなよ竹にふしわづらひてよをとほすかな

乍隨不逢戀

いな舟とたゞいひさしし一言にこがれわたりて月もへにけり

音信日巳疎

さりともとなほ頼まれしをり〳〵のことの葉さへやかれむとすらむ

戀官仕妨

咲く花の色に心をそむるかなみのなり出でむこともわすれて

絶後悔戀

さがなさをこらさむとてぞ背きにし思へばつひのよすがなりしを

夢中握君手

心まで春になりけり若草を手につむとみし夢のなごりは

夢後戀

うつりがもとまらぬ袖にしたふかなさむるまくらの夢の面影

春夜戀

おもかげのかすめる月にかこつかなありしやうつゝ春の夜の夢

夏戀

さなへとる田子の袂もよそならず戀にこゝろのさみだれの頃

秋恨戀

かくばかり袂に露をやどさめや人の心にあきし立たずば

冬戀

あふことのなみだのつらくうち解けていつかむすばむ春のよの夢

老後戀

などてかくこひにわが身はほだされて老の心のこまかへるらむ

閑居戀

よもぎふのもとの契りをわすれずば筧の水のおとづれはせよ

山家戀

うつぼ木にあまたの年を住みわびぬかりそめぶしの人をまつとて

戀思

われながらわれぞあやしき一つなき心を千々になどくだくらむ

戀瀧

むねにせく涙の瀧の音無しをところの名とも思ひけるかな

さふのおもひ

○山家戀　宇津保物語仲忠の母を思って詠じた。

○音無し　音無しの瀧。山城國愛宕郡にある。

思はじと思ふものからまかせぬはこゝろの外の心なりけり

しらぬ人

くもりよの月にかこちてあかすかな見もせぬ人を空にこひつゝ

としへていふ

つれなさのまゝの繼はしかけてなど年をあまたに戀ひわたるらむ

はじめてあへる

うれしさをこよひつゝまむ爲とてや涙に袖はくちのこりけむ

あひおもふ

下紐のとけぬと妹がかたらふは我もはなひし夕なりけり

人にしらるる

とき衣のあらはれそめし袖の色をおしひたすらに猶つゝむかな

ものがたり

あひおもへばむつがたりして中々に枕とりあへぬよはも有りけり

かへりごとにみゝずがきしておこせければ

ふみかよふ跡だに今はたえねとやよまれぬもじの關はすゑけむ

いかでとおもへど色に出でがたきを人なに

○まゝの繼橋　下總國眞間の丘陵にありしといふ。萬葉集十四「足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼はし止まず通はむ」

○はなひし夕　嚔をしたる夕、俗に人が我を思へば嚔をするといふ

○むつがたり　睦語り。

○みゝずがき　拙く書くこと。

○もじの關　豐前國門司。

せきかねて涙玉なす瀧河のいはでくだくるわがこゝろかな

身よりあまれる人をおもひかけて

人心高まの山の雲なれや思ひかくれどよそにのみして

みやづかへする女をおもひかけて

よそにのみみかきが原につむ芹の下にもえても年をふるかな

ほそどのに立ちよるよしもながはしを心にかけて戀ひわたるかな

人の娘のいとをさなかりけるをおもひかけてふみつかはすとて

玉章をみつとばかりはいらへてよまだ難波津はたどりえずとも

人の娘に名たちて

君が爲いとはぬ名をもいとふかなにげなき中と人や見るとて

おもひかけたる女のねたるを見て

たれにあふ夢ぞとおもふゆかしさにいとゞねたくも思ほゆるかな

としごろつれなかりける女にからうじてあひそめたるあした

きぬ／″＼のとりあつめてぞねをばなくうれしき夢とつらきうつゝと

月あかき夜立ちよりけるにをんな逃げて入りければつかはしける

人心などてつきなく入りぬらむ山のはつかにかげをみせつゝ

○みかきが原　禁中の御垣の邊。見るをかけた。

○ほそどの　宮殿などの廊下。

○難波津をたどる　文字を書くこと、手習に王仁の詠ぜしといふ難波津にさくや此の花の歌を書きしより出づ。

女のもとにて枕にかきつく

しるといへばなれをぞ頼むわれならぬ人にゆるすな春のよの夢

おもへどもおもはぬとのみ人のうらみければ

わたつみのそこにふかめて思ふ身を猶山のゐのあさしとやみる

女をひかへて侍りけるになさけなく入りにければつとめてつかはしける

はかなくもけさはのこれる移り香か引きもとゞめぬ袖のなごりに

をんなのもとにまかりていたづらにねてかへるとて

こよひはとかけて契りし丸木橋まろねさせてもかへしつるかな

おやのせいしける所にいくを聞きてびんなきことといひければ

よしや其のおやはさくともかくてのみ結びはすてじやはら手枕

すみけるをとこよかれたりと聞きし頃女に

いざやわれ舟さしよせむ丹生の河ことかよはしし人はたゆとか

山ざとに侍りける頃初雪のあした女のもとへ

いもとわれと寢ての朝けの雪ならばいかにそとものをかしからまし

いたづらぶしを

しげ絲のいたづらぶしをなげくかな心のすぢの解くるまもなく

○山のゐ　山中に水のたまりて自然に井戸の狀をなすもの。

○よかれたり　夜離れたり。通ふことの絕えたること。

○しげ絲　三河國。碧海郡。

○いたづらぶし　獨り寢ること。

寄月戀

いむとてもむかはでのみや明かすべきおもふあたりの空の月かげ

寄雲戀

空にのみたのむる人のことのはになどうき雲のまよひそめけむ

寄水戀

かけひより筧にうくる山水のよそにもらさぬ中としもがな

寄火戀

人心うがはにともす篝火のあふ瀬もなみに浮きしづみつゝ

寄石戀

おく山の千引の石もなにならし戀の重荷に思ひくらべば

寄原戀

やまと路に何たづねけむ露深き眞袖が原は我が身なりけり

寄川待戀

あふことのかた野のさとに妹をおきてまちこそわたれ天の河原に

寄瀧戀

瀧河の瀬々の岩浪われのみやふかき思ひに身をくだくべき

○うがは　鵜川。憂にかけてゐる。

○かたののさと、天の川原　何れも河内國にありて古來詠歌に表はるゝ所である。

○くめの岩はし　役の小角が山神に命じて岩橋を架けさせた時、葛城の一言主神はその貌の醜いのを恥ぢて夜々出て働いたといふ故事がある。

○ふるきの皮衣　黒貂の皮衣、古くより用ゐられ、うつほ物語などにも見える。

○常陸帯　昔鹿島の祭に想ふ男女の名を記して供へ巫覡の結びて頒つをうけて婚を卜定した。

寄橋憑戀

神の名にかけて契りし一言をたのみわたるやくめの岩橋

寄千鳥戀

ちどりにもかへぬわが身のあふことは浪の立居になどながるらむ

寄獸戀

あはでのみ臥猪のとこのとことはに獨りかるもの思ひみだれぬ

寄衣戀

わすられて年をふるきの皮衣なれそめしよを今ぞうらむる

寄帶戀

いたづらに解けしばかりを常陸帶のかごとがましき名にはたてつゝ

とけがたくみゆる心の下のおびはかけて誰にかむすびおきけむ

寄絲戀

としをへて戀ふるもくるし人心しらきのくみのいとはるゝ身に

寄革戀

むねにのみ思ひはみちのやへだゝみよを重ねてもしきしのぶかな

寄鏡戀

ひも鏡われて契りし中なればふたゝび結ぶをりもありなむ

寄櫛戀

朝夕にさしておもへば櫛のはのひまなく妹ぞ戀しかりける

寄箏戀

おとづれのなかのほそ緖の一筋にはては絕えなむことをしぞおもふ

寄木戀

よそにのみわが思ふ人はやどり木のねもみぬ中にとしをふるかな

寄花戀

我ならぬ人もやをるとあくよなき花の木陰はたちうかりけり

寄菅戀

難波女をけふかりそめにみしま菅いつふしなれてなびきあふべき

寄海人戀

うき戀をしがのあまめがくゝつこに思ひ入りたるかひもなきかな

寄催馬樂戀

其の駒にあさくらおきてあふみぢを妹が門までたどり來にけり

人心はなだの帶の中絕えて今はくいする身とぞなりぬる

○ひも鏡　氷面鏡、氷の異稱。

○やどり木のねもみぬ　寄生木の根を見ぬことより寢もせぬことをいふ。

○くゝつこ　藁にてあみたる袋、漁父は貝などを入るゝに供す。

○催馬樂　さいばら、雅樂の一種。

○はなだの帶　催馬樂石川に「石川のこまうどに帶をとられてからき悔する、いかなるいかなる帶ぞはなだの帶の中はたえたる、かやるかやる中はたえたる」

（軒端の荻　源氏物語空蟬の卷に光君空蟬の室に忍びしも空蟬逃げたれは、代りに一夜の契りを結びし女。

源氏物語によせて戀の歌よみける中に遇不逢戀

一度とむすびもあへずかれにけり軒端の荻の露の契りは

泊洦舎集巻六

雜歌上

天

千早振神代のまゝのおほ空に今も月日のかげはかはらず

日

あふぎても畏きものは天照らすひるめの神の御かげなりけり

野風

しばしとて風がくれせむ野木もなしたのむ小笠はよそにふかれて

曙雲

よひの雨のなごりいかにと見出せば横雲とほく明けはなれゆく

山雲

片山のをくきを出づる浮雲の心なくして世をもへなばや

山路雲

立田路をこえて生駒の山つゞきあしとき雲よわれをともなへ

○ひるめの神　おほひるめむちのみこと、天照大神の御名。

○をくき　小岫、岫に同じ山の洞ある處。

○塵につく　後について行く、後塵を拜す。

○あげまき　總角。小兒の髮の結ひ樣より小兒をさす。

二子山ふりさけ見つゝ越えくれば神のみさかに雲たちのぼる

窗雨晴

ばせを葉にむらさめ過ぎて山窗の夕日さびしき槇のした庵

雨中訪友

ふりはへてとひこざりせば雨もよにさはらぬ心いかでみえまし

塵

いにしへの跡したはしくたどるかな塵につくべき我が身ならねど

曉

庭のおもはまだしらまぬを山のはに曉いそぐむらがらすかな

あかつきのねざめ安けきわが身かな星をいたゞく人もある世に

閑曉

有明の月は軒端にかたぶきて四方に聲なきしのゝめの空

曉更寐覺

あかつきの鐘にめさめてつく〴〵とあらましごとをかきぞ數ふる

幽夕

入日さす片山おろし吹きくれて落椎拾ふあげまきもなし

ひとすぢの煙さびしく暮れ行くや谷の軒端の薄月のそら

夕幽思

ましら鳴く奥山ざとの夕ぐれは思ひしよりも寂しかりけり

地儀

あしに踏むつちもかしこし二神の國うみましいにしへ思へば

道

ひらけてもうばらからたち拂はずば又うづもれむ野中古道

東海寺なる縣居翁のおくつきのもとのまどゐに當座道

昔より道はあれども分け捨てし千代の古道君ぞひらける

山路

あしふめば小石おちくるつゞらをり山路はつゑぞ命なりける

山ゆくはあやしきものか心ざすかたをうしろに幾度かして

橋

たが世にかいかにたくみて橋つくりやすくは人をわたしそめけむ

石

住む人の心のかどもあらはれてかずおもしろき庭のたていし

○二神　諾册二神。

○千代の古道君ぞひらける　眞淵が古學を唱道せることをいふ。

海邊興

晴れわたる見るめのみかは磯菜つみ濱かひ拾ふわざもあかれず

海の面風ふき浪たつ

しまきふく沖のなごろの高ければむやひかねたるみなと舟かな

夕陽映島

おきつ浪かくてや人のおほせけむ夕日いろどるゑ島てふ名は

船中見島

住のえの浦こぎはなれ行く舟のまほにむかへる淡路しま山

山中瀧

右になし左になして越えくれば瀧のおとさへ山めぐりする

溫泉

いく藥おふる山にはおのづからしるしをみゆもわき出でにけり

名所井

萬代にたえぬ龜ゐの眞淸水はとみの緒河のながれなりけり

女石ゐに水くむ

いにしへを思ひつゝゐに見るかげのうつりもかはる我が姿かな

○しまきふく　吹き卷く風の起ること。
○なごろ　海の烈しき風浪。

水

庭中にかくるかけひの山清水苦きるおとぞかすかなりける

深夜水聲

よひのまはありとも知らぬいさゝ水ふくる枕にいはたゝくなり

晴後遠水

雨降山ふもとにはれて行く水のすゑとほじろき相摸川かな

溪水

此の谷に通ふほそ水行きめぐりいづれの山のおびとなるらむ

浪

世のなかの人のこゝろのあだなみも淺き瀬よりぞ立ちはじめける

巖浪

あら磯のゆついはむらに打ちよせてくだくる浪の音のかしこさ

禁中

軒にたつうつほ柱や天の下をおほひもらさぬ例なるらむ

城

鳥が啼く吾嬬大城のみさかえをつどひてあふぐよもの國人

〇ゆついはむら　五百つ岩群の義多くの岩石。

〇うつほ柱　殿上の前に在り、御殿の屋根のつまく\〵のゆき合にて雨水のもる處なき故に、柱を穴にして其の内より雨水の落ちるやうにしたものである。

舊都

いにしへのよしのの宮の跡とへばすゞ吹くかぜぞ身にはしみける

島の宮まがりの池も埋もれぬさたのをかべやいづくなるらむ

故宅泉

いにしへをくむにも袖はぬるゝかな誰がすみ捨てし庭ゐなるらむ

仙家

仙人や今も住むらむ白雲の八重かさなれるみよしのの奥

閑居水

ちりつもる朽葉が下の埋れ水あるかなきかの世にもすむかな

閑居草

わが庭をわれだにふまず成りゆくかむぐらよもぎに所えさせて

やへ葎とぢはてたりし柴の戸にうたてもくずの這ひかゝるかな

閑居手習

文机のもとより世をばそむきしを猶うとまれぬ四つの友かな

幽居有餘樂

絲竹のよのたのしみに引きかへて心をすます苔清水かな

〇島の宮　輕島豐明宮、應神天皇の皇居。
〇まがりの池　島の宮にあつた池共に大和國高市郡白橿原大輕の邊にある。

〇四つの友　筆墨紙硯をいふ。

○しもと原　枝茂く若き木立の原

○雲居の寺　雲居寺、京都今の高臺寺のある處にあつたといふ。謠曲自然居士に「かやうに候者は東山雲居寺のあたりにすまひ仕るものにて候。」

○六つのちまた　六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

○五つのさはり　女人五つの障礙即ち梵天王、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛身の五者となるを得ざること。

○あゆひ　足結。足に結ひつけたもの、今の脚絆の類。

林幽不逢人

あらし吹く片山陰のしもと原をじかの跡をゆくこのはかな

寺

法の師に心の月をたづねよと雲居を寺の名にはおひけむ

東海寺なる縣居翁のおくつきのもとのつどひに當座、寺

わたつみのうしほの音にひゞきあひて松風高し磯のおほ寺

こは此の寺山門の額潮音閣とあるを思ひてなり

古寺燈

萬代にきえぬひかりやあふぐらむ高野の山の法のともし火

をんなども山寺にまうでたるところ

ねがはくは六つのちまたに迷はすな五つのさはりある身なりとも

夕旅

やどるべき里はふもとに見えながらたどる山路に日はくれにけり

驛中河

けふも又あゆひぬらしつ名もしらぬ小河の淺瀨あまたわたりて

旅泊夢

（よき人のよしといひけむ山　吉野山、萬葉集一に「良き人の良しとよく見てよしといひし芳野よく見よよき人よく見つ」）

名所山

百津舟入りぬる磯の浪まくら見らくすくなきよはの夢かな

富士山

よき人のよしといひけむ山の名を今も仰げやみやびをのとも

箱根山

神代より雪にみがける高嶺をばいひけがすべき言の葉もなし

あしがらの關の古道あらためてゆききやすけき箱根山かな

三河國の名所を人のよませけるに、花園山

ほそ川のながれの末もにほふまで咲くやさくらの花園の山

人見岡

こゝぞ世のさが野にありと聞きわたる人見のをかよ心してゆけ

玉河

衣うつおとにこたへて袖の上の露もくだくる玉河のさと

山風のおとも高野の松かげにひかりをかくす多摩川の水

木曾路川

立ちのぼる木曾のかけぢの浮雲をまなくもわたす川おろしかな

桂　里

月の輪に近きあたりのさとなればうべも桂の名にはおひけむ

林田君播磨國へかへらせ給ふをりにきこえまゐらせて

行く君をわれはとゞめじ民草のまちなびくらむいなみくにばら

括嚢公子の伊豫へかへらせ給ふをりにかの國の地名によせてきこえまゐらするうた

東路をけふ立ちましてにぎたつに君が御舟はいつかはつらむ

西村嘉卿が越前にゆくをおくるとて其の國の名所どもに寄せて

矢　田　野

思ひやるほどもはるけし梓弓矢田の大野にたびねせむ君

鹽　津　山

家人もこふらむものを鹽津山こえゆく駒はこゝろしてのれ

いつはた

別れ路に駒ひきとめて語らはむいつはた君にあはむとおもへば

西原晁樹がつくしへかへるをおくりて

こむ春にあひ見むことはちかながら思へばとほき旅路なりけり

○いなみくにばら　播磨國に印南野がある。それによつて播磨國をいふ。

○にぎたつ　伊豫國熟田津。萬葉集に屢々見える。

○いつはた　越前國にあり、新古今集に「忘れなむ世にも越路のかへる山いつはた人にあはむとすらむ」

○ちかながら　近くありながら。後撰集に「時鳥來る垣根はちかながら云々」

二月二十日ばかり智苗法師が都へかへるをおくりて

ゆく〳〵も木曾路の櫻君ぞみむ心にいはへ風のはふりこ

卯月ばかり上柳孝思が木曾路をへて都へのぼるをおくるとて

よしや君よしのの春におくるともきそぢの櫻夏もわけ見よ

中村ちせ子が故郷へかへるをおくりて

ふるさとへよしや心はいそぐとも追風まち出よ荒き舟路を

昌順法師が都へのぼるをおくりて

よしや身は空行く雲にまかすとも心の月はとはにすませよ

豐前國へかへる人をおくりて

よそにのみきくの濱風西ふかば心をつてよきくのはま風

青木從がこしのふるさとへ歸るをおくりて

鵜坂川うさかたらはむ友もあらじひなの長路をひとり行く君

わかれては又あふこともかたかひのかはらずとだにおとづれはせよ

畑時倚が上野國へゆくをおくるとて萬葉集上野國歌の中より九つの名所をとり出でてそれを題にてよみてやれるうた

碓氷山

〇心をつてよ　心を傳へよ。

〇萬葉集上野國歌　萬葉集巻十四東歌にある。

こえずともうすひの山の麓路を行くらむ日には手向よくせよ

横野

いかばかり心ゆくらむむらさきの根はふよこのの春のたびぢは

新田山

山の名におへるにひたをかへすぐ又こむ春と契りおかばや

多胡嶺

家人のよせ綱はへて待つらむを多胡のねもごろ我はとゞめじ

伊香保

ふかぬ日もふく日もまたむいかほ風いかにとのみのおとづれはせよ

佐成千尋が近江へかへるをおくりて

河の名のやすくはかけてちぎれどもいつかは又もあふみなるらむ

押山安富がおほやけごとにさされて越後國にゆくをおくりて

心してゆけや我がせこみこしぢは秋より雪のふるとこそきけ

おなじ人のおなじ事にて大和路に旅だつ時

おほやけのよさしの旅ぞはやゆきてはや歸りませわれはとゞめじ

播磨人長治祐義こゝもとに旅ゐせしが故郷に歸る時鹽竈松島の名どころ

○よせ綱はへて　物を引き寄せるをいふ。萬葉集に「多胡の嶺に寄綱はへて寄すれども云々」

○ふかぬ日もふく日も　萬葉集に「伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど吾が戀のみし時なかりけり」

○よさしの旅　君命を帶びたる旅

○すぎが枝　過ぎと杉とをかける

をも見むとて陸奥へ出で立つをおくりて

よそにのみこがれわたるを鹽竈のうらやましくもおもひ立つかな

遣唐使餞といふ事を

すべらぎのおほき光をかゞやかせ日の入るくににつかひする君

山家

山水の清きあたりは中々にうき世の人のすみつかぬかな

わがやどは嶺の松風おとづれて枕にかよふ谷川の水

山家雨

軒端うつひとむらさめのすぎが枝に二たびふるは雫なりけり

山家夜雨

ねざめては枕しづけきよるの雨をのがれし山のかひにこそきけ

山家夢

やまざとは心をあはす友もなしたれにむかひて夢がたりせむ

山家垣

あれぬとも秋まつほどはゆひかへじ葛はひかゝるにはの松がき

山家待人

山ざとや友まつかげの苔むしろあらしははらひ露け玉しく

山家送年

世のうさをきかでも年のへぬるかな谷の清水に耳なれしより

田　家

かりのよと思へばこそはすみなるれ山田もる身の露のやどりも

田家水

賤がやは鄰へだてもなかりけり苗代水を中垣にして

水草隱橋

みくますげ繁りにけりな細河のくれのまろはし跡みえぬまで

河　藻

宇治河のはやくのよよりめでそめてすが〳〵しくも見ゆるすがもか

竹

若竹や猶たけのこのすゑかけていくよの霜もしのぐべらなり

霜深き竹の林のおくにこそ世におもしろき陰はありけれ

松

色も色姿もすがたうべしこそ諸木の公と人にいはるれ

〇くれのまろはし　榑の丸橋、丸木橋。

〇すがも　菅藻であらう、又は渦藻か。萬葉集「宇治川に生ふるすがもを川はやみとらで來にけりつとにせましを」

〇うべしこそ　げにさもあるべし

〇木の公　松の字を分けて木の公となるよりいふ。

名所松

唐崎の一木の松も千代へてはもゝえに杖をつきにけるかな

和泉路や日根の松原ひねもすに行きくらしてもあかぬ陰かな

榊

おのづから神のみむろのいち榊いちじるしくもみゆる色かな

なにとなく其の香も清き榊葉はうべこそ神の庭木なりけれ

桐

秋かぜもまだ耳なれぬ庭の面に桐の落葉の一聲ぞする

栗

秋深きおく山路のなぐさめはくち葉かきわけ拾ふおちぐり

桑

こかひする時きにけりと賤の女がくろの若桑つまぬ日もなし

鶴

雲の上の思ひは絶えて澤陰にうき身をはつるねこそなかるれ

佛法僧

ひとこゑに三つの寶となく鳥をきくや二荒の山中にして

○神のみむろ　神社。
○いち榊　ひさかき。
○くろの若桑　くろは田畑の畔。
○三つの寶　佛法僧をいふ。

○龍もくやむ　易に言ふ「亢龍悔あり」と。尊貴を極めた人は愼まざれば危きことありとの意。

○そに鳥　かはせみをいふ。古事記に「そに鳥の青き御衣をまつぶさにとり装ひ……」

○ひさご　神功皇后三韓征伐祈願の時神の託宣に「……我が御魂を船の上に坐さして、眞木の灰を瓠に入れ亦箸と比羅傳とをさはに作りて皆々大海にちらしてうけて度りますべし」と。

鱸

世の中の富に心のつりたれてすゞきのなます誰もおもはず

龍

おもへ人うへなき雲にのぼりては天飛ぶ龍もくやむならひを

猪

はしりゐのかへりみせぬを心にて君につかへよますらをのとも

犬

ふる雨に軒端もとむるゐぬの子の聲ものがなしたそがれの宿

鼠

事たらばなにかもとめむ行く河のながれにあけるねずみならねど

古事記中に出でたる草木鳥獸をよめる歌の中に蘇邇杼理

そに鳥はうるはし鳥か行く水の緑のあやをみけしにはきて

おなじく匏

おほ海にさはにうかべしひさごもて神の心もくみやしりけむ

酒

美酒（つまざけ）にわれ醉ひにけりかしらゐひ手ゐひ足ゐひわれゐひにけり

〇鳥の跡　文字をいふ、事物紀源に「蒼頡鳥の跡を觀、因りて遂に滋し之れを字と謂ふ」

書

かりそめの鳥の跡よりあととめて書きもつくさぬかずとなりけむ

百千卷千卷のふみもたづぬれば我が身ひとつのをしへなりけり

詩

なにかそのからことのはもつみ見なば倭心にたねのかはらむ

言の葉

昔より世の人ごとにつみくれどことの葉ぐさぞいやしげりゆく

言の葉の花をからずばいかでかは心の色を人に見ゆべき

硯

幾度か墨すりさして見る石のおもてけがしに筆もとられず

机

書みるとむかふつくゑの上にこそ心の塵もはらはれにけれ

おりたちて心をよせむつくゑ島硯の海にあさりする身は

弓

ますらをがとるやあら木の白眞弓引きてたゆまぬ心とをしれ

香

○さゝめ　細草をあみて蓑又は席とすること。

○なやらふ　追儺すること。

いたづらにぬぎおく袴は重なりてかさぬる袖もなきちぎりかな

杖

いつまでかつゑつく人をよそに見てわれは老いずと思ふなるらむ

蹴鞠

百しきの雲ゐの庭のまりあそび思ひあがれるみやびなりけり

雙六

つれ〴〵を飽かぬすさびにすぐろくのいちはの馬にのる心かな

蓑

物皆のよそひ花やぐ今もなほ神代のすがたのこすみのかな

露わけて野べのさゝめをかる賤はみのためにとや袖ぬらすらむ

雨おもるさゝめのみのに風たちて夕暮いそぐ野路の旅人

鼓

年くれてなやらふ夜半のふりつゞみ舊りし昔のためしとぞ聞く

鬘

うなゐらがすさびにかくる稻かづら落穗ひろひしかへさなるらむ

もとゆひ

○世の中をうし　牛と憂しとをかけて憂き世とかこちながらなほ俗事を脱するをえざる心を詠んだ。

むらさきの初もとゆひを初めにて幾よの霜かむすびこむらむ

すだれ

ともすれば人の心のあしすだれすきまうかゞふ世のならひかな

ひとり

まつよひの袂にしむるたきもののひとりうき身をこがしてよとや

かなへ

わかす湯の音にはたてじ丸がなへかどなき人と世にはいはれて

いかり

舟人の命をかくるいかり繩いかに心の浪もさわがむ

車

世の中をうしと見つゝも小車のわれとはなどて繫がれぬらむ

あや

今の世にいかで織りえむくれ人のあやにあやしき傳へあらずば

管絃

ひとつ聲に絲と竹とのきこゆるや六つのしらべのあへばなるらむ

船中管絃

浪の音に秋のしらべはあるものをものの音のみとなに思ひけむ

舞

つたへこぬ昔忍ばゆたつゝまひ立ちつゝゐつゝ昔しのばゆ

二見浦春朝眺望

天地の二見の浦を出づる日に神代のはるぞあふがれにける

湖邊眺望

くれそむる布施の湖しづかにて入日のこれり垂姫の崎

述懐

思ふ事いはでとのみもかこたじな我にともなふ人もこそあれ

後の世に殘さむ名こそかたからめかくてはやまじ數ならずとも

さま〳〵に有りふる人の世の中を思へばやすきわが身なりけり

獨述懐

ふみ見れどなほたど〳〵し分けまよふ千代の古道ともなしにして

寄風述懐

もとよりも家につたへぬ風なれば吹きのこすべきことの葉もなし

寄巖述懐

○たつゝまひ　殊舞、上古の舞の一。立ちつ居つして舞ふといふ意から此の名がある。紀に殊舞、タツツマヒ。」

○布施の湖、垂姫の崎　越中に在り萬葉十八に大伴家持がこゝに遊んだ歌があまたある。

○思ふ事いはで　伊勢物語に「思ふ事いはでぞただに止みぬべき我とひとしき人しなければ」といへるを反して歌ふ。

○もとよりも家に傳へぬ　清水濱臣の家代々醫を業とす。

）ならの葉のかげ　奈良朝時代。古今集十八「神無月時雨降りおけるならの葉の名におふ宮の古ごとぞこれ」

心をばうはなだらなる苔なして下にいばらのかどぞありたきど

寄水述懐

眞清水の名にあふばかりあらねども汲みしる人をまつ身なりけり

世につるゝ人の心のにごり水ひとりすむともかひやなからむ

寄舟述懐

人の世はつながぬ舟ぞしかりとて浮きてのみやは住みわたるべき

懐　舊

おろかさの今の心にくらぶればかしこかりける我がむかしかな

懐舊非一

なにかそのうきふしのみをかぞふべき嬉しきこともありし昔を

手ををれば百千の事を見つ聞きつ四十にたらぬ我が身なれども

寄硯懐舊

筆とれと敎へしおやのことの葉をなどて硯のうみわたりけむ

披書知昔

ふることをふみの林にわけみればたゞならの葉の陰ぞゆかしき

夢

○なつにわかるゝ夢　むつの夢、列子に六夢をあぐ。正夢、噩夢、思夢、寤夢、喜夢、懼夢。
○庚申守　庚申の日に三猿の像をかけて庚申青面を祭る當夜寝れば三尸蟲が禍をなして命を短くすといふ。
○鳩の杖　内裏にて御賀ありし時鳩杖を奉らし行る事がある。或は臣下算賀の時に宮中より賜ふこともある。今は八十以上の元老には宮中より優待の思召にて賜ふと言ふことである。
○靫　ゆき、矢を盛る器。
○おもとじ　母刀自。母。

なにかそのむつにわかるゝ夢もあらむ心ひとつに思ひさまさば

庚申守夜

あくるまで枕はとらじまどろまば身のおこたりや空にしられむ

地獄のかたかきたるを見て

六つの道にうき身をわけて苦しむもひとつ心のまよひなりけり

老人

ひたひよりよせくる浪をなげく間にいつか頭(かしら)の雪もつもれり

いのち長き人

老の坂やすくやこえし鳩の杖家に國にとつきならしつゝ

丈夫

靫かくる作のたけなやをさまれる御代にたゆまぬ守りなるらむ

大かたは人にむかひて爭はずことよくするぞ丈夫(ますらを)にはある

うなゐ

うなゐ子が引くや小弓のすさびより心つよさのすゑを見すらむ

わかい子

おもとじのちぶさはなれぬほどよりも皆おひ先はしろくぞ有りける

めおやなきちご

あはれなりちぶさはなれしみどり子のおももとむとて面きらひする

大路に捨てたる子

なさけある人の心をたのみてや子を思ふみちにおもひすてけむ

やもめ

住みすてて年ふる庭のやり水にかげをならぶる人もなきかな

遊女

こがれよる人に枕をかはしまの繫がぬ舟ぞわが身なりける

遊女見月

舟さして入江の月にうたふかなよるべもなみに身をまかせつゝ

遊女對鏡

こよひ又たが手枕にたわつけむむかふ鏡のかげもやさしな

さふる子

さふるこが道行きぶりの花ゑみに誰も心を色になすらむ

法師

世におほふたぐひにもあらぬ法の身はかくてみ山にくちなしの袖

○おも　母。

○たわ　枕に壓されて髮に撓みたる所の出來たる事。

○さふるこ　遊女。

○世におほふ　法をもて萬民におほふ樣に守る。

○くちなしの袖　世に朽ちてしまふことをかける、くちなしの袖は黄色の僧衣をいふ。

琵琶法師

めにもみぬをすのうちとの緒あはせにいつ許されてひかれ入りけむ

法師の舟にてこぎ出でたる所

此の岸をこぎはなるゝはいかばかりのりえし人の舟出なるらむ

法師の色このむをにくみて

木のはしといはるゝ身にていかなれば色なる花に心そむらむ

尼

墨染にかへしたもとのうれしさは心の色も身をぞはなれし

樵夫

つま木こる身こそ安けれ朝夕に谷のかけ道ふみなづめども

牧童

春は花秋はもみぢも折りそへつなげきをのみやこる身なるべき

あげまきがせたりの牛に尻かけて山のそは道笛ふきのぼる

漁父

釣竿の一ふしうたやむらきみの世をうみわたるすさびなるらむ

蜑女

○此の岸　此の岸をはなれて極樂の彼岸に達することを思ふ。
○のりえし　乘り得しと法得しことをかける。
○木のはしといはるゝ身　法師の羨しからぬ事、枕草紙にいふ、徒然草にも亦これを引用してある。

○そは道　岨道、嶮しい道。

○むらきみ　村長。

からきよにしほたれてのみ過す身をあはれとだにもうらむ人のなき

原上行人

たび人や野中の清水むすぶらし見えし小笠の草にかくるゝ

遊士越關

家人のそのおもかげや變るらむわがくろ髪もしらかはの關

父子有親

はぐゝむもしたふもおなじ心には何事をかはおもひへだてむ

交友

まことある人の心のあつごほりやすくはとけぬ中もたのもし

野酌

さしなべにをがめとりそへまどゐしてをのゝくゝたち摘みはやすなり

聖德太子

千萬の道のおやなる豐敏(とよと)みこ法のをしへにかぎるべしやは

孔子

日のもとにあふげど高しからくにのおほきひじりの道の光は

王昭君

○さしなべ　注口のある鍋銚子。
○くゝたち　菘の薹。
○豐敏みこ　正しくは豐聰耳皇子、聖德太子の御名。
○王昭君　漢元帝の宮女で匈奴に嫁せしめられた。

よつの緒に長き契りを引きかへて都をよそにわかれゆくかな

陵園妾

春をうらみ秋をかこつと年をへて柳のかみぞ霜とかはれる

枕つくつまやさびしくながむれば松のとほそにありあけの月

詠史

君がため海人の男狭磯やあはび玉命にかけてかづきえにけむ

夢に見し人をうつゝに尋ねえてからもやまとも世をばをさめき

佐保路よりふりくる雨とみし夢のさむれば袖の涙なりけり

日本紀竟宴分史得天日槍

久かたの天のひほこのもちこせるなゝの寶は神のものさね

おなじふみ推古天皇の巻よみける日河邊臣がたけきいさをめでて竟宴になづらへて人々と共によめる

おほ君のみことのをのにいざきらむこだまかしこき舟木なりとも

竹取物語竟宴分得時帝

おほ空にむねの思ひをこがすかな月の都の人をこふとて

源氏物語竟宴に紅梅右大臣をえて

〇陵園妾　白居易の詩に知らる。序に憐幽閉也とあり、後宮の美人の君寵を失へるを哀むものである。

〇海人の男狭磯　允恭紀十四年の條に見ゆ、阿波國の海人天皇のために赤石の海底に眞珠を採り獲たれど命が絶えた。

〇夢に見し人　唐にては殷の高宗の傳説。我が國にては後醍醐帝の笠置山に於ける時の話。

〇佐保路より…　垂仁天皇と佐保姫の話古事記に詳かである。

〇天の日ほこ　書紀垂仁天皇三年の條古事記應神天皇の條にありて七寶は古事記には八種とある。

〇河邊臣　推古紀二十六年の條にあり。河邊臣天皇の命に依り雷神の木を伐りて舟を造る。

〇月の都の人　竹取物語の赫耶姫は本、月の都の人、罪ありて一時人界にあつたのである。

〇紅梅右大臣　源氏物語紅梅の巻に詳し、柏木の弟である。後妻の連れ娘によき婿とらせむとする話がある。

みそのふの梅のさかりをいたづらになさじと急ぐおやごゝろかな

おなじく螢兵部卿宮

おもひあまり心の色をみえしかなはかなき蟲のかげをたのみて

おなじく六條御息所

人心ときはの色のかはらずばなにかさかきのいみにこもらむ

おなじく弘徽殿大后

桐壺のなごりわすれぬねたさをもすまのうらみに思ひはるけぬ

おなじく右馬頭

つゝまずももらす雨夜のむつがたり我ぞくもりなく品はさだめし

さごろも大將の心を

たちかへりわたらぬ袖をぬらすかな思ひかけてし賀茂の河浪

○螢兵部卿宮　宮が玉鬘をこひし時源氏が螢を放つたので、玉かづらの容姿ほの見えて思ひのまさることこ螢の卷にある。

○六條御息所　源氏初期の情人、源氏の薄情をうらみて齋院に心つよくゐらるゝ方、榊の卷薄雲の卷に見ゆ。

○弘徽殿大后　桐壺帝の后、源氏の母桐壺更衣は此方より壓迫された。

○右馬頭　帚木の卷に源氏をとりまいて二三の人々が雨の夜女の品定めをする話。

○さごろも　狹衣大將は源氏の君を戀ひ慕ひ、源氏の君齋院となりたまへどなほ忘るゝをえなかつた。

泊洦舍集卷七

雜歌中

白河少將殿にめされて源氏物語講じける時ろくの白がねたまはりければ

花さかぬすゑのの小草をりにあひてめぐみの露のかゝるけふかな

西條君の母君の御前ゆるされてまうのぼりしをり聞え奉りける

うれしくも玉章ならで初鴈のこゑゆるされしけふにあひぬる

六月十一日例の人々つどひて不忍池中島に歌よみかはすよし聞き給ひて汀子君より「吹くかぜのおとに聞きてもしのばれぬしのぶがをかの池のさゞ浪」といひおこせ給ひければ

おとにこそ聞きてゆかしくしのばるれなになみ〳〵の池のさゞ浪

おなじ君の御念珠のふくさに書き付けてまゐらせける歌

玉のををくり返しつゝ百とせに八とせのかずを手にならしませ

植村君のみそのふに橘うゑられたるがことしはじめて實なりければ

ことしより年きりなせそとこよものかくの木の實のかくて幾度

○白河少將　松平樂翁公。

○百とせに八とせ　念珠の珠の數普通百八箇とす。

○かくの木の實　橘の實、垂仁天皇の御代田道間守初めて持ち來る「時じくのかくの木の實をもち參上りて侍ふ」

林川君に歌のことをしへ聞えそめまゐらせける時「ぬば玉のやみぢをたどるおのが身にほかげ待ちえしこゝちこそすれ」とよみて給へる御返し

言の葉の道のしるべに松とりていざ立ちはしり御さきおはまし

おなじ君の北方に古抄本の古今集を奉るとて筥のふたに書き付けける

いにしへも今もよろづの言の葉は心をたねのほかなかりけり

静一尼がもたる本はさみのうらに書き付けける歌

ことの葉のそのふにあそぶ心あらばふみのはやしを先づはわけみよ

藤川貞賢がさやまきにゑりつくべき歌をと乞へるに

霜とのみなにみなしけむ秋の水の一すぢこほるこゝちこそすれ

河島蓮阿がもたる重硯のふたに書きつく

諸人の言葉の玉をかづき出でむ硯の海ぞちりにけがすな

三河國豊河村三明寺の竹にてきりたる花入に豊河といふ名をおほせて

浪の花とはにさかせよ梓弓引くとよかはのながれてのよも

あふくま川の埋木にてつくれる硯のふたに

言の葉の花さく春を待ちつけて世にあふくまの底の埋木

下野の奈須野の森の古枝にて作れるたび硯に書き付けてある人に贈る

○松とりて　たいまつとりて。

○心をたね　古今集序文の初「やまと歌は人の心を種として云々」

○さきへし　脱字があるらしい。或は「さきにし」か。

○賀茂河の流れ　眞淵の學派をさす。

あたらしき言葉の花もさきへし古枝の萩の秋をかさねて

筆筒に書き付けたる歌

こととはに筆の林のしげらずばいかで詞のはなは咲くべき

讃岐人源春野庭の池水のもとに松を五もとうゑて五葉堂と名づけて其の歌こへるに

うつす水うつる松がえへだてなくともにときはの深みどりかな

あがたゐの翁の梅のうた書かれたるもののはしにそへたる歌

散りのこる言葉の花の一ひらもなべてよに似ぬにほひとぞみる

おなじ大人の書かれたるもののおくに本間游清が歌ひとつとこへば

賀茂河の流れをくまむ人どちは此の水ぐきもおほらかにみな

金子春徑が卷物てうじて物かきてとこふまゝに文長歌などかきて浪のもくづと名づけてその箱のふたのうらにしるしつく

とし月につもるなぎさの浪のもくづをだにとかきぞあつめし

風鈴のうたよみてよと人のこふまゝに

きけばかつあはれなりけり吹く風のすゞろに物をおもふともなく

月あかき夜曉がた高く笛ふきかはして

かりそめのはしゐながらに笛竹のよをふかしても月を見るかな

すみだ川のさくらやう／＼散り方なる頃芳宜園翁の石濱のいほりをとへるに何がしの刀自の物の音しらべあはせてうたふ聲のいとにほひやかにてかいなでのをとめども立ちならぶべくもあらずおぼえければ

咲く花はうつりもゆくを鶯のこゑのにほひぞふりせざりける

吉田雨岡が白檀をおこせて歌こへるに

いにしへのことに作りし朽木にも立ちまさるべきけぶりなりけり

濱野すめ子が老い行くまゝに歌も思ふがごとはえよまれぬとてうちすてたるをいかでなほよみ給へなどすゝむるついでに筆のかたちにつくりたる蠟燭をつかはすとて

くれぬとて見さししふみの窗の内にひかりをそへよ筆のともし火

七月もちの夜靜一尼が葛飾の閑屋をとひて　閑屋書庵の名にてしづやとよべり

なか／＼につくらぬ夜ぞおもしろき月かげにのみところえさせて

吉井清がもとをとひしに埋火にたきものくゆらせ釜に湯たぎらせなどをかしきあるじまうけなるにあすのほど杉田の梅を尋ねむあらましなるよ

○芳宜園翁　はぎその翁、橘千蔭の號。村田春海と共に眞淵の高弟。

○あるじまうけ　馳走の支度。

○杉山の梅　武藏國久良岐郡にある梅の名所。

○水手　文字の書き様、水の流れの様に書きなしたもの。
○すはま　すはまの臺。

○これしても招きなるゝや　これは琵琶の撥をいふ。源氏物語橋姫の巻に、宇治の大君の詞「扇ならでこれしても月は招きつべかりけり。」とある。

しかたりいでて

埋火の空だきものもおもひ出でむ明日やたびぢに梅をたづねし

大藏氏の家に妻のすみ子があるじしてよませける歌のむしろに

唐やまと言の葉草をつむ爲とかねてやおへるおほ藏の名は

家ゐつくりかふとてしばしがほど近きあたりにかりずまひしたるに五月のすゑつかたいとあつさたへがたかりければ

處せきかりほの庵の夏ずまひあせだにいるゝかたのなきかな

此のいほに又のとし丘鳳法師がすまへるをとひて庭に大いなる椎の一木あり

なれしわが去年のやどりの椎がもと又しばしばも君をとひ見む

家に花月を左右にわかちて扇合しけるに月かたにて空色の扇の地紙に月を白く出して歌は水手に書きて桐のあふぎなりしたるすはまにのせたり

さゝら浪あるかなきかにしづまりて月もゆるがぬ池のおもかな

又白地の扇を月と見せてかさなりたる山がたの扇かけにかけ歌をば琵琶のばちにかきてそへつすべて橋姫の巻の心をおもへり

これしても招きなるゝやともすれば雲にかさなる山のはの月

〇奈良の御代より　秋の七草は奈良の御代より歌はれてゐる。萬葉卷八山上憶良の歌「萩が花尾花葛花撫子の花女郎花また藤袴朝顏の花」

〇ふぢな　蒲公英の古稱。

畫

うつしゑのすさびならずば言のはの及ばぬくまをいかでつくさむ

薄くこく色どる筆に遠近のけぢめを見するわざぞあやしき

　薩州榮翁君のあつめ給ふ名所畫賛歌に、關淸水

夏の日はわきてもるともあらなくに關の淸水ぞひとをとゞむる

　春の七草の繪に

春の野のひとつ緣をつみわけて誰七草の種はさだめし

　秋の七草の繪に

ことの葉も奈良の御代よりにほひきて千とせかれせぬ秋の七くさ

　福壽草のゑに

初はるのことぶき草にうゑおきて榮えむやどの見るものにせよ

　をばながするゑに月出でたるところ

七くさのいづれはあれど月はたゞ尾花が末に見ゆるぞめでたき

　白河少將殿のおほせごとにて蒲公英の繪に

山振(やまぶき)の色にかよひてさく花にたれかふぢなの名をばおほせし

　水仙のゑに

あはれなり色なき冬の霜がれもあやめにかよふ花の一もと

　　からすあふぎの繪に

これも又花かすなれや淺がらすあふぎ見るべきにほひならねど

　　ひるがほの畫に

朝がほに花の姿はかよへども露のひる間をいのちにぞさく

　　竹にひるがほの咲きかゝりたる畫に

日ざかりをおのが時とて咲く花のゆふぐれ竹になどかゝるらむ

　　罌粟の花の繪に

なつかしくひらけし花に昔よりなどてこと葉の露はかゝらぬ

　　わたの花かけるに

唐人の昔つたへし綿のたねたえてふたゝびしげる御代かな

　　都近き名所の櫻山吹かへでしのぶ葵などはりこめたる扇に

うちひさすみやこにちかき春秋を千里のをちにあふぎてぞみる

　　矢瀬のしのぶをすきこめたる扇に

人しれずたれをしのぶの草なればたゞやせにのみ名はたちにけむ

　　繪に松櫻ならびたてり

○うちひさす　宮、都の枕詞。

○たゞやせにのみ　痩せと矢瀬とをかけたり。

千とせともかぎらでたてる松がえに散ることしらぬ梅もまじれり

松竹梅のゑに

霜がれの庭にのこりてむつましき三つのとも木や春をまつらむ

佐成千尋がこふによりて左近の櫻かけるゑに

日のもとの春のひかりとさくら花うべも御はしのもとに植ゑけむ

右近の橘かけるゑに

遠きよのかをりをこゝに傳へきて近きまもりにたてるたち花

木槿の繪に

あすまでとたのむいのちの花ならばたれかまがへむ朝がほの名も

茶山花のゑに

其のいろをつら〱椿つら〱に見れば似てにぬ花のすがたや

柿のゑに

言の葉に心をそむるこのみには先づ陰あふぐかきのもとかな

瀧のもとに郭公とぶかた

落ち瀧津岩もとゆするひゞきにも鳴く音まぎれぬほとゝぎすかな

磯松に鶴のむれとぶかた

○つら〱椿　萬葉一に「巨勢山のつら〱椿つら〱に見つゝ偲はな巨勢の春野を」

○かきのもと　歌聖柿本人麿をさす。

あしたづに千代くらべして年高き磯まつ風も聲あはすなり

海のほとりに鶴のむれゐるかた

いほへ浪千へなみ寄するなぎさには萬代ふべき鶴もすみけり

蜃氣樓のかたに

朝なぎにうかべるおきの殿づくりこや聞きわたるわたつみの市

あしまのかにの畫に

よこさまにいつかなりゆく人心あしまの蟹のあしとしろ〱

蟷螂の畫に

おろかなる蟲とは口にいひながらたれも心に斧をとるらむ

さるの木の實とりはめるかたに

ともすればなりはひわぶるよの人に心ましらのこのみとりはむ

をざゝがもとにとらふしたるかた

をざゝ原すゑもそよがずふす虎のいぶきの嵐おとたえてより

飛騨國吉城郡高原郷舟津町村なる藤橋の繪に

底しれぬふちのよりをの橋つくり思ひよりけむほどのかしこさ

かくれみのかくれかさの畫に

○蟷螂の畫　蟷螂が前脚をあげて車に向ひたる故事。力にもなき反抗を諷した。

○心ましらの　猿の人よりまさりたるをいふ。

○亥のこもち　十月上の亥の日亥の刻にゐの子餅を食ふ、萬病を祓ふといふ。

○南極老人　壽老人。

しかりとてあめのしたをばのがれぬを何にうきみのかくれ笠きむ

世俗十二月屏風ゑに五月のぼりたてたるところ

大旗に小はたたて添へいつかかくけふの例(ためし)にいはひそめけむ

ひゝなのゑに

うちむれてかしづきかはす少女子が心なまめくひな遊びかな

くす玉の繪に

千代かけて見る物にせむ絲にぬくさ月の玉のながきみやびを

女官の亥のこのもちひもて出でたるかた

はつ冬のはつゐのもちひはつかにもすけば萬の病いゆといふ

美人の繪に

うつろふは花のならひとしりながら色にはそまぬ人のなきかな

背面美人のゑに

などてかくうしろ手ばかりみる人をひたおもむけに慕ふなるらむ

深き山に法師のゐたるかた

のがれ入るみやまの奥のすみかさへ猶うしとこそ思ひなりぬれ

南極老人のかたに

天てるやみなみの星の幸魂（さきみたま）みたまのふゆをあふがな〳〵

おなじかたに鶴龜をそへたるゑに

つるかめもなれつかふらむ人のよを長くとまもる神のみまへに

大黒天のかたかけるゑに

大穴貴神（おほなむちのかみ）の昔はしらねどもたからのおやと今はあふけり

四睡のかた書けるに

いかなればひとつ心にみる夢のさむればかはるすがたなるらむ

白樂天のかたに

なき人の文を黄金といひなしし言葉を又も玉とこそきけ

長恨歌のかたに

むかひても心なぐさむよしぞなき柳のまゆよ花のおもわよ

李白が酒壺を枕としてねたるかたに

おほみことかしこかれども酒つぼのかたへ離れば生けりともあらじ

阿蘭陀人のゑに

から人といふが中にも舟かぢをほさずまゐくる西のえみしや

武内宿禰の皇子いだかへたるかた

○幸魂　人に幸を與へる神のみたま。

○みたまのふゆ　恩頼、皇靈の稜威。

○大穴貴神　大國主神の一名。

○四睡　豐干和尚と寒山と拾得と虎と一與に睡れる圖、畫題の一。

○なき人の文を黄金と云々　白樂天その友元稹の遺稿を集めて之れに題して曰く「遺文三十軸。軸々金玉聲。龍門原上土。埋骨不埋名。」

○むかひても心なぐさむ云々　長恨歌中に「歸來池苑皆依舊、太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉、對此如何不涙垂。」

○李白　唐の詩人で酒豪。杜甫の飮中八仙歌「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙。」

皇孫（すめみま）のみたねはぐゝむ爲にとてをとこさびする老人あはれ

六歌仙をわかちて人のよませける時喜撰法師を

宇治川のながれてよにもあふぐかな都のたつみたゞひとことを

小町が老いさらぼひて杖にすがれるかたに

霜がれし姿やくやむ女郎花はなのさかりを人にをらせで

生田川の繪に其の女の心を

人心いづれ淵瀨としら浪のよるべなぎさに身をそしづむる

なこその關に花さけり義家朝臣の馬とゞめて見給ふかたに

道もせに今もにほふものゝふの言の葉とめしせきの春風

辨慶のかたかける大津繪に

たけき名は世々にながれつ墨染の衣の河に身はしづみても

小督仲國のゑに

あふことのかたをり戸なるかくれがにたれ琴の手を尋ねきぬらむ

神崎遊女のゑに

あだにのみ見ゆる櫻の花の中にほとけの種もまじりけるかな

女のわらはの牡丹燈たづさへたるかた

○六歌仙　業平、遍昭、喜撰、黒主、康秀、小町。

○喜撰の歌　「我が庵は都のたつみしかぞすむ世を宇治山と人はいふなり」

○生田川　昔少女、二人の壯士に戀されて生田川に身を沈めた話、大和物語にある。

○小督仲國　仲國勅命をうけて小督局が彈じ琴の音によりて得たる話、平家物語にある。

○神崎遊女　後拾遺和歌集二十に遊女宮木、書寫山のひじり結緣供養せるに參會せること見ゆ。

するつひにこゝらの人やまよはさむ今より戀の道しるべして

三河萬歳の圖に

春來ては先づそことぶくとこわかに萬代ませと舞ひうたひつゝ

泊洦舍集卷八

雜歌下

千歳庭の翁君のかくれ給へるをかなしみ奉りて親済公子の御もとにきこえ奉る

年ひさにみかげを仰ぐわれなればこのした露に袖ぞぬれける

なき君の残すかたみは外ならず御身やすらけくたもちたまはね

夏のはじめ八重子君のかくれ給へるをかなしみまゐらせて

君が名にかけてたのみし八重櫻夏にはあへず散りはてにけり

七月ばかり丸岡君の母君の御一めぐりに

はかなしと見てし千草も去年かれてことし又さく秋にあふものな

翠園のあるじ君の身まかり給へる時に

松がえに千代をちぎりしみそのふのみどり色なき跡ぞかなしき

如是居士みまかりけるをりに

一すぢになにかなげかむ六つの道ふみまよふべき君にしあらねば

○残すかたみは外ならず　先君かたみは御子なるあなたである。

○六つの道云々　六つの道を迷ふこともなく正しく極樂に行くべき身である者。六道は、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

○浪の上に藥もこめし　秦始皇帝が海中に徐福を遣はし不死の藥を求めし事をいふ。

○みなしご草　ふなはら草、白薇のこと。

○あるを見ても　その人の居るを見たるもそは夢であつた。

おなじ人の七回忌に六字の名號をわかちて置字うたよめるになの字をえて

なき人をあらましかばのことのはも積りにけりな七のはる秋

彬が本のあるじみまかりて後家につどひて梅の花のちりたりけるを見てといふことを

梅の花散りしく庭の跡とひてのこるこのみをあはれとぞみる

うめの花よもにかをりしあとの庭とふ袖ごとに春雨ぞふる

同じ人の三回忌追悼會當座に、藥

浪の上に藥もとめしすべらぎもみいのちは限りありとこそ聞け

おなじ人の妻たへ子がなくなりける時子なるみゆきがもとにいひやりける

をみなへしを花につれてかれし野にみなしご草をあはれとぞみる

中村勝輔が身まかれるをかなしみて秋夢といふ題をまうけて人々と共に歌よむとて

あるを見てもかなしき秋のよもすがらなき人たどる夢ぞはかなき

おなじ人の一周忌に、寄草花懷舊

○遠つあふみ、いなさ細江　引佐細江は遠江國濱名湖の一支灣、萬葉十四「遠つ江伊奈佐細江の澪標吾を頼めて淺ましものを」

○さらぬ命　逃れがたき命。

去年ゆきてことしかへらぬわが友を花野の秋にたづねわびつゝ

植村正路が身まかりける時追悼會當座に、山

近くわが軒端になれし青山を今かれやまと見るがかなしさ

西念寺上人の追悼會、秋無常

物ごとに涙もよほすつまなれや風ふくもみぢ雲かゝる月

遠江の國人内山眞龍がなくなれるをかなしむとき秋哀傷といふことを

遠つあふみいなさ細江に澄む月のかげまどはしてなげく秋かな

小田原人熊澤以齋はおのが心しりの歌人なるがかりそめにむつびかはしてはや十年あまりになりぬ境をへだてたればとしごとにとひ見ることこそなけれ雁の行きかひは春秋かれずかたみにおとづれけり去年の秋箱根の出湯あみにゆくとて道のたよりにとひものして二日三日がほどあしをとゞめかたらひしに昔にかはらぬいとすくやかなりければ「老いぬくすりや家に傳へし」などよみておくりしをおいの身のたのみがたくて此の秋はなき人のかずに入りぬとつたへ聞くにことわりのよはひとはいへどいとかなしくて

いく藥家につたへし君なれどさらぬ命やまかせざりけむ

○芳宜園翁の一めぐり　加藤千蔭は文化五年九月歿。

○村田翁の一周忌　村田春海文化八年二月歿。

○我が身のやくと　燒くに役をかけな、身に過ぎたる事なれど故人の業をつがむものと云々。

○爪おと　撿校琴に巧なりしをいふ。

としごとの野分にたへし翁草などこの秋の露にかれけむ

芳宜園翁の一めぐりに紅葉送秋といふことを題にて手むくる歌

わかれにし去年の秋かぜ身にしみてもみぢかつちる長月の空

村田翁の一周忌に、春月

諸人の涙にかすむ月かげをわが袖のみとなにおもひけむ

おなじ時の當座、煙

思ひあれば春の海邊のもくづ火の煙もよそに眺めかねつゝ

同じ翁の十三回忌に、古宅鶯

言の葉のにほひかはらぬ園生とや昔おぼえてうぐひすの鳴く

おなじく當座、しほがま

おふけなく我が身のやくとしほたれて昔をくむに袖ぬらすかな

正木千幹が一周忌に、夏懐舊

なげくまにはや一とせはたち花の露ちる庭ぞさびしかりける

鴨田撿校が一週忌に懐舊の心を

爪おとの絶えてひと年經しかどもよもにひゞきしことをしぞ思ふ

角井茂臣が一周忌に、春懐舊

一とせをいつかふる木の梅の花いざや手折らむけふのたむけに

山田安信が一周忌に、秋懷舊

もろくみし去年の跡とふ袖のうへに殘れる露を吹くあらしかな

いさ子が一周忌に、寄風懷舊

よそにきく身にさへしみて吹くかぜの空にかなしき夕まぐれかな

同じ人の十三回忌、秋懷舊

たれも皆昔の秋を音のはにかけつゝちらす袖の露かな

ある人の一周忌に、枕上聞蟲

一とせをふるき枕の下にこそ君こほろぎも音をつくしけれ

雨岡が身まかりて三とせのわざに埋火のもとにむかしをしのぶといふことを

埋火に炭さしそへておきゐつゝ昔がたりに明かすよはかな

おなじ人の十三回忌に雪の日昔をしのぶといふことを

雪をにる窗のすさびに思ふどちふることとしのぶむつ語りせむ

ある人の七回忌に、春懷舊

あわ雪の消えにし跡をたどるまに年もはやつむはるの七草

○雪をにる　雪を煮てお茶を立てる。

(一)はやまの時雨　端山、麓の山の時雨、はや時の間の意を掛けていふ。

ある人の七周忌に落葉によせて昔をしのぶ

七とせははやまの時雨めぐりきてもろく見はてし木の葉をぞ思ふ

(一)ある人の十七周忌、秋懐舊

十年あまり七草の花手折りもて露のあととふ野べの夕ぐれ

政かたの父の五回忌に、雑釋敎

のこしおく法のともし火なかりせば暗き道をばいかでたどらむ

平景員が二十七回忌に、秋懐舊

ぬしかれて言葉の園はとしふれど朽ちぬ紅葉をかたみとぞみる

縣居翁の五十回のわざすとて人々をともなひて東海寺なる少林院にまうでて歌よみけるに鐘禮といふことを題にて

村しぐれあふぐに袖ぞぬれにけるならの落葉をひろふこのみは

千とせふる後もたえせじ神無月時雨につるゝけふの山ぶみ

ある人の年回に、夏懐舊

ほとゝぎすなみだくらべむ五月雨のふりにし人をしきしのぶころ

ある人の手向に、泉にむかひて昔をしのぶ

さゝぐみにたもとぬらせば有りし世を思ひいづみも聲むせぶなり

いとむつまじかりける友におくれて年へてのちよめる

ねのみこそ今もなかるれことの緒の絶えてひさしき昔ながらに

人の年回のわざするに

なき人の昔がたりをとひきけばしるも知らぬも涙おちけり

堤喜之が母のなくなりける時冬哀傷といふことを

あはれいかになげきこるらむ炭竈のけぶりはかなくとだえてしより

岡正武が娘の二つにてなくなりけるをりに

たなそこにいつける玉をくやしくも君くだきしかあたら其の玉

誰がおひ誰がいだきて死出の山三つせの川もこえ渡るらむ

千勢子が孫娘のなくなりけるをかなしみて

おやの親の心をくみてなげくかな子の子の上もかなしけれども

花なりしそののなでしこ思ひきや秋をもまたで枯れぬべしとは

大島斐成が重服になりたるをとふとて

ひとへだにかなしきものを藤衣かさねてしぼる袖やいかなる

四月すゑつかた光房が妹の身まかれるをとぶらひて

色そふをいつかと思ひしあやめぐささ月も待たでかれ果てぬとか

○なげきこるらむ　歎きこるらむと、なげ木、樵るらむとを掛けていふ。

○たなそこにいつける玉　掌中に大切にせる玉。

○重服　父母の喪を重服といひその他を軽服といふ。

○藤衣　喪服。

妻におくれてほどもなく母の身まかりければ

うす墨の袖の涙をほしもあへず色こくさへぞ染めかさねぬる

妻のなくなりけるをりに

もろともに千代へて後にわがきせむ藤のころもと思ひしものを

松子がなくなりたる時人々のとひくるたびにおもひつゞけける

とふ人もとはるゝ我も言のはにおほくはまじる涙なりけり

松と名をおほせたるもかひなき事をくいて

名にかけて千とせとまでは思はねどおひ先いのる小松なりしを

さかさまに薄墨衣われはきて心のやみにまどふころかな

人みなに見するもやさしとはるべき身にて跡とふけふの言の葉

信臣が身まかりける時

わけそむる老の山口日は入りぬ迷ふやみぢの末いかにせむ

同じ時したしき人々まねきてかなしみ歌よめるに寄繪といふ題にて此の日信臣がかける山水の繪をかべにかけたり

はかなさは筆にのこせる山水のおとをも立てずかげもとゞめず

おなじをり埴生田修平がもとよりせうそこして弟のなくなりけるよしい

○心のやみ　後撰集十五「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」

○せうそこ　消息。

○まち〳〵しこよひの月　此の歌は弱りはてし姿をよく表はした。

○西へゆく　西方淨土に往生する義。

○わしの高嶺　鷲の山、釋迦が法華經をときたる所。

ひおこせたるかへりごとに

おもひしりぬ思ひしるらむ人をとひ人にとはるゝ涙くらべは

世の中常ならずといふことを

春秋のうつろふ色をなげくまにあはれ我が世やつきむとすらむ

やまひやう〳〵おもくなれるほど人のもとよりとぶらひおこせたるかへりごと書かせける中に

死出の山高嶺に瀧のおと聞きてふもとにたどるわれぞ悲しき

いとよわくなりて後の葉月十五夜月いとさやかなりけるにふしながら見て

まち〳〵しこよひの月のさやけさを心くもりて見るがくるしさ

かくて一日おきてぞ身まかられける

釋教

いくすぢとわかれし法のみなかみも雪のみ山のしづくなりけり

これも又日の入る國のよの中をゝさむる道ときけばたふとし

寄月釋教

西へゆく月に心をたぐへつゝわしの高嶺をおもひやるかな

○みてぐら　神に捧ぐる物。

○北野なる一夜の松　千本松ともいふ、菅公太宰府に薨去の夜今の京都北野神社の東北の地に一夜に數千株の松生ひたりといふ傳說

○しとぎ　神前に供ふる卵形の餅。

○ひらで　昔柏の葉を十枚合はせ竹の針にてさして盤の如くせる食器。

○百とりの机もの　多くの物をのせし机。

如渡得船

かのきしもさしていそがじ渡舟はや乗りえたるわが身と思へば

神祇

千萬の神はませども大己貴少彦名のかみぞわがかみ

天のした治まれる世はことわきて神に捧ぐるみてぐらもなし

伊勢

天のしたよゝのしづめと神路山内外の宮るいつきそめけむ

社頭松

千代をへてきくもかしこし北野なる一夜の松のおひしはじめは

昔より世々の言の葉しげれどもいやめづらしき住のえの松

社頭杉

しめはへて手をだにふるなはふりこが神憑板(かみよりいた)になさむあや杉

いやしき人神まつりするところ

しとぎもるならのひらでを百とりの机ものとや神もうくらむ

不忍池の中島のつどひに、社頭祝言

千代かけてかげもくもらじ姫神の見そなはすらむ池のかゞみは

二荒山御社に奉る歌とて人のすゝ　けるに、寄松祝

ふたら山嶺のとこ松ところ　てみどり色こく神さびにけり

山松のひかげのかづら千代かけてかはらぬ色をあふぎみるかな

阿波の國人倉橋還童百歳賀に

七十を人はいへどもいにしへにまことまれなる年はもゝとせ

ある人の百年賀に

ことしよりはたとせ過ぎて君を父上のよはひと我はいははむ

片岡淨有八十八の賀によみてやれる翁は酒いたくこのむぬしなり

千とせ飲み萬代ゑひてよとともに老を忘れよ酒このむをぢ

薩州老公の八十御賀に松契千年といふことを

君が代を千代といはへば高千穗の嶺の松風さゝとふくなり

美濃國人の八十賀に

ながらへていつぬき河のいつも〱うれしき瀬々にあひわたらなむ

人の八十のいはひに

ちとせ山こえむもしるしもの〻ふの八十宇治川をけふぞわたれる

菅沼定準が七十賀屛風に、なやらふ雪ふる

○七十を人はいへど　七十古來稀なりといふ。

○いつぬき河　美濃國絲貫川、本巣郡にあり、萬葉「君が代は幾萬代か重ぬべきいつぬき川の鶴の毛衣」

○ちとせ山　愛宕山の西麓の別峯

○なやらふ　鬼やらひをする、追儺。

くる老はなやらふ聲にやらはなむよはひは雪とともにつむとも

秋ぬひ子が祖母の七十の賀に

けふは先づ千とせといひてよろづよは八十の秋のことぐさにせむ

村田翁の六十の賀に風靜花芳といふことを

吹くかぜものどけき御代の春にあひて花のにほひぞよもに滿ちぬる

おなじむしろに興遊未央といふ題を

あかなくに秋も紅葉のまどゐせむ花のむしろに今日はくらして

賀茂季鷹が六十賀に欲全百年壽といふことを

いはふとも千代萬代は言の葉ぞまこと經ぬべきとしは百とせ

或人の六十賀に心靜延壽といふことを

世間(よのなか)の常なき風もさそはじな心のちりをしづめえし身は

ある人の六十一賀に大和名所によせて

若がへる姿のいけの水かゞみ老の浪よるかげぞうつらぬ

白河少將殿五十の御賀に

人といふ人のいははむ君なれば千代よろづよの數もしられず

伊豆國熊坂村なる菊池氏の三たりのおきなのとし高きをいはひてそのく

○姿のいけ　大和國生駒郡にある池。千載集「戀をのみ姿の池に水草はすまでやみなむ名こそをしけれ」

○さとわ　里曲、人里の聚落をなしたる内。

○男さびして　男らしくなつて。

にの名所によせて人々によませたるにおのれも

修禅寺

ちよふべき人も住みけりしづけさを心にしむる寺のあたりは

益山

まし山のちかきさとわにすまへばやうべもよはひの高くなるらむ

坂内忠恭が子のはかまぎを祝ひて

今よりは男さびして竹の馬鳩のくるまにこゝろひかるな

森田豊香がまごうませたるをことぶきて

ひとしほの色ますのみか此の春はおいせぬ松に孫枝さしてけり

静一尼が孫女のよすがさだまりたるをいはひていひつかはす

老松もうれしとや見るまち〳〵てねぐらさだめし千代のとも鶴

はじめて女子うませたるに松といふ名おほすとて

名にしおはば松のみどりを心にて千代のよはひにあえよとぞ思ふ

かへ女が七つのいはひごとすとて柏葉不知冬といふことを

幾千代を松にならひて枝かはすかへの若木も霜をよそなる

豊香が新宅の賀に、庭上松

わが宿の庭の若松わかがへり千代もさかえよ萬代もへよ

鈴木安寛が年頃の家ゐふりたるをしつらひあらためてうたげする時のよろこび歌

やり水の千代もすむべく竹垣をゆひかためたる此のやどりかな

家ゐつくりあらためてうたげせし時に

かくしつゝ千代もかたらへ語らはむわが室ほぎのけふの諸人

同じ時人々と共に池水久澄といふことを

はしりでに池どのたてて幾秋も月をやどさむさゞなみの上に

惠舟尼のもとより新室ほぎと　とふのすがごもをおこせたるよろこびに

うちしきてわが待ちをらばみやびたる心の友やとふのすがごも

人の子うませたる七夜にむつきつかはすとていふことを

千とせまでたちもかさねよひな鶴に祝ひてきするけふの毛衣

同じ題にて光房「白妙の袖もてなでよ小松原雪かゝるまで木　かかるべく」と有るかへし

老松となりての後もしら雲のかかるめぐみを仰がざらめや

千とせのためし

○はしりで　走出、門口。

○とふのすがごも　編目を十筋に編みたる菅薦。

八千とせのためしに植ゑて老の世もしら玉つばきにほへとぞおもふ

人の賀に、寄松祝

千とせへむ君がかざしと百枝さす松に十かへりの花もさくらむ

人の賀に、松契多春

ちぎりおきて百枝の松の百かへり花咲くはるによろづよもあへ

人の賀に、寄竹祝

うゑ竹の千尋の陰に庵しめてよのなが人とひとにいはれよ

人の賀に、鶴遐年友

きくがごとまこと千とせのよはひ經ば君をともなへ天のつるむら

人の賀に、鶴全千年壽

松竹も千とせといへど君がためよはひゆづるをためしとはみむ

人の賀に、龜契萬年

よろづよになれこそ君をともなはめたづも千とせをかぎるとか聞く

寄天祝

おほ空にとはにかはらぬ月も日もわきてくもらずみゆる御代かな

寄地祝

○八千とせのためし　莊子に「上古大椿あり、八千歲を以て春と爲し八千歲を以て秋と爲す。」

○よのなが人　長壽の人、よに竹のよをかけていふ。

山河もよりてつかふる君が代は神のむかしやかためおきけむ

寄山祝

東照神のしきます二荒山あふげはいよゝたかしかしこし

寄花祝

思ふことなくてむかへばいとゞしく咲み榮えてもみゆる花かな

寄神祝

君が代を祝はば神をいのるべし天津日つぎのたえぬかぎりは

神の代に神のうましし神國は千萬神や今もまもらむ

寄道祝

よもの海ののどかなればや浪風も七つの道にみつぎたつらむ

朝夕に都おほ路のたてぬきを行きかふ人や君が代のかず

古言の道のからたちかりそけて昔にかへる今ぞうれしき

時まちて昔にかへる言の葉の道のからたち又もおほすな

貴賤祝言

にしきとて麻とて袖にへだてあらじつゝむにあまる君が恵みは

樂未央

○山河もよりてつかふる　萬葉一にも「山川も依りて仕ふる神の御代かも」

○七つの道　東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海。

○からたち又もおほすな　枳殻を成長させるな。道の障りとなるものを放つておくな。

○草のかきは　一片の葉、祝詞式に「草のかきはをも言やめて」

○小角　小角笛、昔戰に用ゐしもの。

○筑紫をおほふ楠の大木　景行紀十八年の條にあり。

かずめぐるゐひのすゝみは知らねども先づ一つきにゆく心かな

世治文事興

水くきの花もさきけりむさしのに草のかきはもことやめしより

幸逢太平代

絲竹のしらべにのみも耳なれて小角（くだ）のおときかぬ身こそやすけれ

をさまれる御代に御代にてしづけさに生まれあひたる我ぞ嬉しき

高

いくそつゐおひたてりけむ出づる日に筑紫をおほふ楠の大木は

深

たれこゝに心のそこをすますらむ横河（よかは）のおくの谷のしたいほ

左

懐かしき小蝶の舞の袖もあれどとりわきてこそ我はおほゆれ

後

そのまゝにとりもなほさぬ朝手髪枕のたわを人やとがめむ

少

竹馬にともなひなれし昔人かぞふばかりに今はなりにき

清

池水のにごりにしまぬ蓮葉の露にやどれるなつの夜の月

濁

かしこしと昔仰せし酒の名をなにかおろかに思ひおとさむ

近

隔てなき心のともの中らひは昨日もとひつ今日もとはれつ

親

かたらはむふしもあらねど行きかふや相おもふどちの心なるらむ

西

あたご山秋に入る日のすゑはれて夕ぐれすゞし三日月の空

北

おほ空にうごかぬ七の星のかげたゞさす下やとこよなるらむ

青

みわたせば若葉の外の色もなし花より後のみよしののやま

黄

ことくさは露もまじらでをみなへし色の限りをにほふのべかな

○かしこしと昔仰せし　萬葉集三に「酒の名を聖と仰せし古の大き聖のことのよろしさ」

○うごかぬ七の星　北斗七星は動く、動かぬは北極星であるから混同したのである。

赤

もみぢ葉の陰をながれて行く水の色にこがるゝあけのそほ舟

白

秋ふかき入江の月のかげすみて花につゞくまののうら浪

黑

夕まぐれさとよりかへる法の師のころもに通ふすみぞめの空

四十二の物あらそひの題にて歌よみけるにみるめと潮と

おもへ人しほなき海のおもてには見るめもおひぬためしとぞきく

花ともみぢといづれをか思ふと人のとへりければ

花のうへにたつことかたき色ながら思ひおとさむ紅葉ともなし

花と月といづれをかと人のいへりければ

いづれともわきてはえこそ花といはば月ともとかむ君ぞとおもへば

雜體

物名

しもつけ

○そほ舟　赤色にぬりたる舟。

○いづれとも　えこその下に言はめ解かめなどの語を入れて解すればよい。

○かゆ杖　正月十五日粥をたきたる木を削りて作れる杖、これで子無き妻の後を打つ習ひがある。男を生まむことを祝してするのである。

○あをつゞら　青かづら。
○やぶれあを　破れ襖。

かくしらつけじさしるさにうたれじとすまふもをかしけふのかゆ杖

　つぼすみれ
なつごろも三つよつふたつぼすみればかりのこまだらの天の香久山

　ひともときく
われのみや思ひわぶべき身のうさは人もときくをなぐさめにして

　あをつゞら
むらさめの道に借りたるやぶれあをつゞらせてこそ明日はかへさめ

　かきのから
もみぢする庭のまがきのからにしき秋の色をやこゝにこめたる

　からすかひ
河浪の早き淵瀬に鵜川たてさもやすからずかひのぼるかな

　つゝみやき
けふも又木のした露にそほちつゝみやきが原をわけたどるかな

　しきし　たにさく
敷島のやまとにはあらぬ國にだにさくらの花よ今はめづといふ

　すゞりばこ

とりもたすすりはこづけにゆひそへし重荷にたへで馬やつかれむ

こしかたな

秋の野をわれより先にたれかこしかたなびきする道のをすゝき

ときのふだ

ひとりしてみれば寂しなわぎもこときのふたどりし花の下道

ほそをとこ

人もこぬ松のとぼそをとこしへにたゝくは嶺のあらしなりけり

はを始めるを果てにて花のうた

花といふ花に心をそめ見れどさくらぞ色のかぎりなりける

なをはじめつをはてにて郭公の歌

なくこゑは雲のうへなるほとゝぎすいくよ枕のしたにまたれつ

あをはじめきをはてにて月の歌

あはれいかに千草の露にやどるらむ一木の松をさしのぼる月

ふをはじめゆをはてにて雪のうた

ふけしよのしぐれはいつか音やみてけさ雪しろしをちの山まゆ

こをはじめひをはてにて恨みのうた

○すり　籠、旅行用とする竹細工の匣。

○ときのふだ　古昔禁中にて時毎にかけてしるしとせし札。

こぬ人をまつのあらしの窗過ぎて涙にくらきねやのともし火

家に八代集よみはてて竟宴の歌よみけるに集の名どもを折句にてよめる
頃は神無月のはじめになむ　古今集

ことのはのきこえそめけむ昔より知らずいくよをふるにか有るらむ

後撰集

こひしさのせめてこがるゝむねの火のしめらで袖にふるなみだかな

拾遺集

霜雪のふかさしらせてゐせきもる清水のおとも冬ごもりせり

後拾遺集　旋頭歌

こぬ人を下にまちつゝ更くる夜どこにゐあかしてしのぶもはかなふるされし身の

金葉集　同

君がいへにむかふをかべの枝の松かせ簫竹のしらべにさへぞ吹きかよひぬる

詞花集

千載集　旋頭歌

しば人のくるだにまれの我がやどはしかなく嶺のふもとなりけり

○ことのはの　一句二句三句四句五句の頭字をとればこきむしふさなる。

○ふるされし身　疎まれし身。

○しば人　柴かる人。

せきかねてむせぶ涙よさもあらばあれいつまでも知られじものをふかくつゝみて

新古今集

しらぬよの昔の人もことのはを聞き見るごとにむつゝじきかな

觀濤公子の御もとにて後撰集よみはてゝ竟宴ありけるにごせむしふといふ五文字を句のかしらにおきて

ことの葉もせきくるむねにむせばれてしのびがたなの深き思ひや

又句のすゑにおきて

わたのそこおきつしほ風あらからむ磯浪たかしふな子友よふ

木名十

水かゞみ見ればはかなしたれゆゑにすゞろ思ひをつくすわれぞは

櫻　朱櫻　梨　柚　槐　椶櫚　樅　檜　楠　楓

旋頭歌

古事記中草木鳥獸をよめる歌の中に葦芽

天地のひらけぬときゆきざしふゝめるあしかびのうれ葉のさかえ見する今日かも

おなじくはやぶさ

○むつまじきかな　古人をむつまじく思ふのである。

○天地のひらけぬ　天地開闢の時から萌ゆる兆を含める葦芽の若葉の萌える如く榮えゆく今の御代であるかな。

(一)はやぶさ　應神帝の皇子にはやぶさ別命と大さゝぎの命とありて後に相爭ひ給ふ。

(一)讃酒歌　萬葉集卷三にある。

(一)物いふよりは　讃酒歌中「賢しみと物いふよりは酒のみて醉ひなきするしまさりたるらし」

(一)千束のさとの市　淺草千束町の市。

はやぶさのはやき心も思ひたゆまば草陰をとめてさゝきのかくれもやせむ

家に縣居翁の美酒歌かかれたるを得たるよろこびに人々をつどへて歌よむとて大伴卿の讃酒歌の中なる句をぬきいでて題となしてよめる歌、ものいふよりは

おもふどちたなそこうちあげてあそぶ今日かもさかしらに物いふよりはのみてくらさむ

世俗十二月屛風繪に淺草市にぎはふところ

君が代を千束のさとの市はたえせじ萬たびとしと春とはゆきかひぬとも

泊泊舍集　終

橘守部歌集

○二柱の大御神のみことおほせ　諾冊二神の唱和「あなにやし愛をとめを、あなにやし愛をとこを」

○今のをつゝに　今の現に、たゞ今。

○むくさかに　めでたく、賑々しく。

○阿閉橘　あへたちばな、九年母の古名。

○したべの使　黃泉國の使。

二柱の大御神の、みことあげのむかしがたりは、今更にあげつらはむもいとかしこし。久方の天飛ぶ鳥、あらがねの土はふ蟲の、花紅葉のをりにあひて鳴きかはすををかしと聞き、岩うつ波、松吹く風の音も、絲竹の調べとあやしび、渚にきよる藻屑、みねこゆる鴈のつらをも、みちのく紙にかきなす文かと見渡さるゝも、みな耳まどひ目まどへるものならし。さしもまどへる心のまにま、ふつにうたひ出づるなむ歌なりける。千盤振神無月しぐれふりおける、奈良の葉の名におふ宮のふること、今のをつゝにむくさかにさかゆきて、えぞしらぬ津輕のおく、しらぬひのつくしのそきなるあまをとめさへも、言葉の花を色どり、歌のあやをたくみにおりなせるなむなか／＼内日刺大宮人も、ほと／＼けおされつべき。しかある中に、實さへ花さへかぐはしき阿閉橘の守部翁よ、世は橿原の宮より三千とせの後にあれいでて、神代のあたりをさからず、身はひとつ庵のふづくゑのもとを離れずして、學びのひろさは天地の中をだにせばしとす。よみいづる歌のたけ、かきなすふみのしらべ、くすしきかも、妙なるかも、かくしたゝかなる老翁なるを、あはれし

たべの使や黄泉の國邊に誘ひけむ、かれいきの限りかきすてし歌も辭もいとさはなるがなかを、うみの子なる冬照、をしへ子を集へて物さとすいとまいとまに、家の名におふ椎が本つ葉かきつめて、こたび櫻木にゑらせつ。そのまごゝろよ、そのいそしみよ、いはむかたなし、かかる歌をしも、吾妻を琴にしらべあはせて、うたひあげなば、天地にますちふ大御神たちも、あなおもしろとこそ聞しめしたまはめ。御代の號を嘉永といふ七とせさつきのやかの日、文おへるあやしき龜井戸の里に世をのがれたる源朝臣暐しるす。

○吾妻を琴　あづまごと、和琴。

○文おへるあやしき龜　禹王の時龜負圖出洛水といふ事を思ひよせた。萬葉一「圖負へるあやしき龜もあらた代と」

橘守部家集

橘 冬照 選

春歌

立春

天地のわかれ初めてしおもかげに霞みて今朝やはるのたつらむ

日の本つ大き皇國の光よりもろこし人も春をしるらむ

花鳥の色ねは深く立ちこめて霞ひとへの春はきにけり

立春天

天のとのほそめに明けしあはひこそ去年とことしの境なるらめ

社頭立春

かしまがた朱の玉がき明けそめて高天の原に霞たな引く

元日

きのふせしみそぎもしるし荒玉の年の始めの今朝の心は

○きのふせしみそぎ　歳末の禊をいふ。

おなじ日

むつきたつけふとて遠つ祖の世の太刀とりはきて君ををろがむ

初春の歌よめる中に

門松に吹く朝かぜや人ごゝろ春にうごかすはじめなるらし

花洛初春

たゝな付く青垣山は霞みあひて内つみくにの春ぞゆたけき

早春氷

たちかへる春のよどみもかつ見せてとくれば結ぶうすごほりかな

白馬節會

引きいづるうまのつかさの袖の色の青きもけふの例とぞみる

海邊子日

ねの日とてことさらにせぬ海人の子は綱手に磯の松を曳くらむ

子日祝

行末のはるかにみゆる小松原ちよの子の日はいさこゝにせな

山霞漸催

さだかにも霞む姿は見えねども山のはごとに遠ざかりゆく

○たゝな付く　かさなり附く。萬葉集一「……登り立ち國見をすれば疊なつく青垣山……」

○白馬節會　あをうまのせちゑ。陰暦正月七日左右の馬寮よりあをうま二十一疋を庭中に引きわたすを天皇御覽ぜられて其の後にある節會。

○大伴のみつ　難波の御津。
○二名のしま　四國をいふ。
○青ふし垣　青葉の柴にて編みたる垣根。

山霞

高千穂やあもりましけむ神の代を思へばとほく霞棚引く

雲霧のたちもおよばぬふじのねの雪をつゝみてたつ霞かな

連峯霞

足柄も薄氷の嶽も遠ざきて吾嬬を廣うなす霞かな

海上霞

わたの原ゆたにかすめる眉かきに神のみおもも今朝ぞたりゆく

大作のみつのうら浪うら／＼と二名のしまにかすみたなびく

うら／＼とかすむを見ればわだつみのそこつ宮にも春やたつらむ

霞隔行舟

ゆく船は見るまさかりにかくろひぬ青ふし垣かおきの霞は

野霞

むらさきのねはふ横のの春霞空もゆかりの色にいづらむ

松上霞

うつの崎古木の松をあはれそとたれか霞の衣きせけむ

若菜

すゞろにも春の野の邊にうかれきて先づ手すさびに若菜をぞ摘む

雨中若菜

はるさめにみのしろ衣打ちきつゝ心とぬれて若菜をぞつむ

老摘若菜

春毎に摘むわが身こそおいにけれ年は若菜にあえずやあるらむ

田家若菜

あし曳の山田の老翁(おぢ)もこゝろをば春にかへしてわかな摘むらむ

鶯告春

うぐひすの谷よりいづる聲きけばまことの春はけふぞたちける

隔霞聞鶯

梅柳そこともみえぬ春の野にひとりかすまぬうぐひすのこゑ

鶯呼客

うぐひすの聲をしるべにとふ人はなきやむまでのなさけなるらむ

野鶯

いくすぢも野道はあれどうぐひすの聲するかたに添ひてこそゆけ

野亭鶯

○みのしろ衣　蓑の代りに著る衣

○あえずやあるらむ　あやかりはしないのだらう。

梅かをる春の野守が垣根にはしめおくさまにうぐひすの鳴く

春雪を

春の夜のやみはあやなき梢にもさすがしばしは白き雪かな

殘雪

凝りしける去年のみ雪に降りそひてことしの雪もつれなかりけり

谷川の冰も雪にとぢられてなみの花さへおそき春かな

梅

賤のをが野ひる摘みてしたもとまで梅が香こそは隔てざりけれ

霞中梅

木のもとに近よるまゝにはれぞゆく霞と見しやにほひなるらむ

梅風

吹くたびに香のうすくなるものならばいかに惜しまむ梅のしたかぜ

曉梅

空だきのうすくなりゆく明ぼのに軒ばの梅の香こそきほへれ

隣梅

あたりまでうれしくにほふ梅の花みたびもとめてかへしとなりに

○春の夜の　古今和歌集一「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」

○空だきの　何處ともしれぬ樣に香を薫らせること。

故郷梅

みやここそ遠くへだつれ飛鳥かぜいたづらならぬ梅が香ぞする

いにしへの高津の宮の梅が香になにはゐ中といふもあたらし

梅花浮水

やり水をながれてわたる花の香にとなりの梅の散るをこそまて

杉田の里なる梅林のかたに

梅の花香ににほはずばわたつみのそぐへの浪のおすかとも見む

柳

雨中柳

かぜなくてなびく柳はうらゝなる春のこゝろの動くなるらし

軒ばよりたるゝ柳も打ちそひて淺みどりなる春雨ぞふる

水郷柳

玉藻かるむかしのまゝのながれ江におもかげうかぶ岸の青柳

名所柳

處女子がはなりの髮をゆふ川のやなぎも春は玉かづらせり

翠柳誰家

○なにはゐ中　萬葉三「昔こそ難波田舍といはれけめ今は京と都びにけり」

○杉田の里なる梅林　武藏國久良岐郡杉田村。

○そぐへ　そきへに同じ、遠くの方。

○はなりの髮　垂髮、ふりわけ髮。

ぬしやたれ植ゑてのがれし心さへ木高く見ゆる五本やなぎ

古柳

旅人のわかるゝ道の古やなぎつみからされて年ぞへにけむ

若草

新草はまだ萌ゆとしも見えねども薄くなりゆくこぞの古草

海邊若草

神の世にもえてのぼりしあしかびの殘るねざしや角ぐみぬらむ

岡早蕨

くかだちのむかしおぼえて甘橿（あまかし）の岡のさわらび手につむもうし

原早蕨

むらさきは灰さすものぞ初わらびをぎのやけ原分けてもとめむ

山春月

花鳥の色音くれゆくをのへよりにほひていづる月の影かな

あらし山櫻ふき卷く夕ぐれにかぜよりかすむ春の夜の月

春月朧々

くもりなば思ひたえても寢なましを霞むと見せて晴れぬ月かな

○もえてのぼりしあしかび　古事記上に「葦牙の如、萠騰る物」といへるを想へるものである。

○甘橿の岡　大和國高市郡飛鳥村にある。允恭天皇此の岡に盟神探湯して氏姓の混亂を正し給うたことが紀に見える。

〔霰うつ〕萬葉一「霰うつあられ松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも」

〔細どの〕宮殿の廊下。

海邊春月

霰うつあられ松原おぼろ夜の月おもしろしあられ松ばら

春曙

櫻花にほふ梢はいろそひて月はまくらに薄くなりゆく

禁中春曙

おぼろよの月の光も細どのにおもかげのこる明ぼののそら

春雨

よそめには霞にまがふ春雨もつもれば軒に露ぞこぼるゝ

霞中春雨

そでにしもたまらぬ雨や中空のかすみのきぬをもりて降るらむ

山館春雨

くれがたき峯のいほりのかたそばにしづくも長く春雨のふる

歸雁

天つ空霞がくれにかへるかり數はたらでと惜しむばかりに

遙見歸雁

久かたの雲ゐはるかにかへる鴈おもひやるこそ別れなりけれ

はる／＼と霞にきえて行く鴈も見送るためにはしばし見えつゝ

旅宿歸鴈

ふるさとの夢も戀しきさ夜中にうらやましくも歸るかりがね

野外春駒

若草のもゆる春野のはなれ駒なが心のみあれてみゆらむ

櫻花さきちる野邊の春のこま雪にいるかとあやまたれけり

雲雀

空たかくおもひあがれる雲雀かなひくき梢の鳥もある世に

雲雀落

大ぞらに聲をのこして咲く花の雲におちいる夕ひばりかな

花

春くれば花になりゆく人ごゝろくみて櫻も咲きにほふらむ

待花

常よりも日ながなりけり山櫻ふゝめる花のさくな待つまは

咲きそめば散るをなげかむ山ざくら待つまや花の盛りならまし

久待花

いたづらに過ぐる月日をさくら花待つまの數と思はましかば

曙山花

有明の月はかたぶく高嶺よりいろあらはるゝ山櫻かな

霞中花

山のはは霞ににげてうら〱とにほふ空より花の香ぞする

見花忘歸

あかじとてけふも櫻にやどからば家なる妹や花をうらみむ

雨中見花

春雨に色ます花のしづくには袂ぬらすもうれしかりけり

花見にまかりけるに雨の降り出てければかへらむとてよめる

われこそは袖がさきてもかへりなめ櫻は雨にひとりぬれなむ

○袖がさ、袖を被きて笠に代ふること。

墨田川の花ざかりなるころ堤をみわたして

不二の雪筑波の雪もさきこめて吾嬬を花になす櫻かな

山花漸盛

朝ごとにたちのぼりゆくしら雲はふもとより咲く櫻なるらし

花のさかりなるころ

うら〳〵とてる日のかげもおぼろにて櫻にくもる春ののどけさ

ある人南殿の櫻の花をすきいれたるあふぎにうたこひければ

久かたの雲の上なるさくら花手にさへとりてけふ見つるかな

依花厭風

さく花にあらしの風のたえぬこそのどかなる代のものおもひなれ

折花

櫻花ひと枝よぢてはなつ手にならぬ枝さへ散らしつるかな

花下興

うたおもひ言おもひしてなか〳〵に花にはうとく成りにけるかな

花留客

たちよりてしばしといひし櫻花月まつまでになりにけるかな

山花

初瀬山みねのさくらのさかりには檜原ぞ雲の晴間なりける

山路花

いそげども櫻つゞきの山道にいりてかはれるわが心かな

深山花

〇檜原ぞ雲の晴間　雲は咲きつゞきたる櫻花をいふ。

○ゆきずり　物に袖を摩りて行くこと、觸れて行きすぐること。

○名にながれたる　名にあらはれたる。

くまわしの友むつれするゆきずりに枝ながらちる山櫻かな

麓花

ふもとにて日はくれにけりよしの山これよりおくは旅ねして見む

羈中花

野邊山べさとをあまたに分けきつゝ花のさかりもながき旅かな

島花

櫻花さきにけらしもあはぢ島あはと見るまでかゝる夕なみ

河上花

さくら花咲きぬる春はしら雲の中をながるゝ山川の水

よしの川くだす筏にうきねして名にながれたる花を見るかな

山家花

わが山のさくら咲きけりいざ子ども谷のかけ橋とりはなたなむ

惜落花

をしからぬわが身はけふも殘りゐてちりゆく花のうさを見るかな

曉落花

朝ぼらけ有明の月にあまぎりて雪よりしろく花ぞふりける

名所落花

櫻花ちるを見しよりあらし山つらき處とおもひけるかな

花麻

山つみのまつるみつぎの櫻花かへす手向やぬさとちるらむ

寄花述懷

谷そこに沈める花の影みれば我が友えたるこゝちこそすれ

野遊

すみれさく紫野ゆきしめ野ゆき遊べどあかぬ春の色かな

連日野遊

里遠き野守がやどの翁にも又來ますやと問はれぬるかな

遊絲

うら〳〵とのどけき空にあそぶいとや隙ゆく駒の手つななるらむ

遲日

うみをなす永き春日はひるいしておきての後も猶ぞ久しき

三月三日

ひさかたの天もゑふてふもゝの花かざしてけふは酒みづきせむ

○山つみ　山祇、山の神。

○紫野ゆきしめ野ゆき　萬葉集一「赤根さす紫野行き標野ゆき野守は見ずや君が袖振る」

○遊絲　いとゆふ、かげろふ。

○隙ゆく駒　光陰。莊子「人生天地之間若白駒之過隙。」

○酒みづき　正體なく酒に醉ふこと。

曲水宴

引きわたす岩間の水にさかづきの浮きたるわざもすさびとぞなる

燕

すゝたれしやどをもおのが古巣とてあはれ今年もとぶ燕かな

簾外燕

懸けすてて住む人もなき玉だれの晝のとのゐは燕なりけり

野菫

むさしのの草はみながらむらさきに春は菫の花ぞにほへる

故郷菫

處女子が袖のゆかりの藤原にすみれ咲くとも摘む人もなし

蛙

うき草の枕ながらに鳴くかはづさそふ水にや身をまかすらむ

ふるあめにうかびていづる水の沫のうたかた〳〵となく蛙かな

田蛙

あら田うつ眞鍬のあとのたまり水すみなれがほに蛙なくなり

なはしろの水口まつるゆふしでもなびくばかりに鳴くかはづかな

○曲水宴　三月上巳の節に禁中で行はれた事。流水に杯をうかべ其の流れ去らぬ中に詩を作る遊び。

○うたかた〳〵　うたかた（水泡）と蛙の鳴聲のかた〳〵とをかけてつゞけていふ。

○ゆふしで　本綿の四手。

○ゆたね　苗代にまく種子。

○みとしろ　神に供する稲を作る田。

○安川　天の安河、高天原にある。

苗代

ゆたねまくあらきの小田はことしより御代の恵みにおひはじむらむ

山田苗代

山高みうへなる小田を餘り來てつぎ／＼わたるなはしろの水

のがれきて心をすます山水をひきこそにごせ苗代のころ

社頭苗代

皇神のみとしろ小田のなはしろに降る春雨や安川の水

岡躑躅

なみたてる松にくれゆくをかごえの道のへてらす丹つゝじの花

行路躑躅

わけみよとつゝじや咲けるくれなゐのすそ引く道を中にのこして

山吹帶露

おけばたり散ればなびきて朝じめり露のうごかす山ぶきの花

河山吹

山ぶきのうつれるかげを折るものは下枝にかゝるさ波なりけり

藤

紫のちすぢのいとの藤かづらたがあげまきに結びたれけむ

あれたる軒に藤の花さけり

咲く藤の花のゆかりにつながれてかたぶきのこる軒のつまかな

松上藤

松が枝の梢のふぢの咲きしより池のさゞ波たたぬ日もなし

瀧邊藤

紫にいろを分けずば藤の花たきよりかゝる浪かとも見む

社頭藤

玉がきの朱をうばひて紫ににほへる藤も神はとがめじ

暮春

花ちりてたつことやすくなりゆけばたのむ陰なく春はくるらむ

をしみこし花てふ花におくれきてけふ又春にわかれぬるかな

海邊暮春

難波がた霞にしづむみをつくし春は深くもなりにけるかな

暮春雲

おし曳の峯のしら雲いまよりは花のよそめに立たずもあらなむ

○朱をうばふ紫　論語陽貨篇「惡紫之奪朱。」

○春衣　やがて夏近き心を詠ず。

○かへすがへす　田を耕すこととくり返すこととをかける。

春海

春の海はのどけかりけり伊勢の海人がおきつ浪あひのわかめ刈るみゆ

春野

あを雲のおりゐる果てもひとつにて緑につゞくむさしのの原

春衣

あし引の野山の花になれ衣これだに身にはそはずなるらむ

春祝

春浅み君がたのもにたつ民もかへすがへすぞ世を祝ふらむ

夏歌

首夏

ほとゝぎす鳴かぬかぎりはわが心夏にはえこそうつらざりけれ

山家首夏

草ふかみいりてもとはぬ山里にたどるたどるや夏はきぬらむ

更衣

ぬぎなむと思ひつゝなほ著なれけり春の衣を惜しむともなく

あかなくに櫻たづねし山分のころもへずして夏はきにけり

山家餘花

山ざとは春と夏とやわかざらむ木のめも花も今さかりなり

賞餘花

あかなくに折らむとすれば櫻花はるのかたみの無くなるもうし

新樹

ふりにたる御世の手ぶりもならのはの楉枝さしそふ夏は來にけり

新樹風

ときは木の梢をあまたさわぎきて若葉によわる風のおとかな

新樹妨月

日をさふる影とたのめば若くぬ木月にはうとくなりもゆくかな

卯花

咲きつゞく卯の花垣を行き過ぎてにはかに暮れしこゝちこそすれ

卯花似雪

さくほどは雪かとみてしうの花のちるは消えゆくこゝちこそすれ

河邊卯花

○山分の衣　山路を分け行く時に著る衣。

○楉枝　若き木立の茂きをいふ。

ゆく水はほかにながれてしろ妙のうの花かこふ玉川のさと

里卯花

咲きつゞくこの一さとは卯の花のちるをばやみと思ひなすらむ

灌佛

けふごとに佛にそゝぐひや水は守屋ならじの涙なるらむ

賀茂祭

にぬり矢のむかしをかけて皇神もけふとる弓にこゝろひくらむ

もろともにかざすもうれし日の影に向ふ葵と月のかつらと

競馬

世の中になにかさのみはくらべ馬勝たむとするもくるしかりなむ

新竹

枕つくつまやののきのわかよ竹ことしの夏の陰にはやなれ

郭鳥

まだきよりきかまほしきか時鳥さすが待ちえぬ夏もなけれど

百千鳥なくねふりゆくころしもあれ珍らしくとふほとゝぎすかな

待郭鳥

○守屋　物部守屋。

○日の影に向ふ葵　葵は說文に「葵傾レ葉向レ日不レ令レ照ニ其根一。」とある。賀茂祭に用ゐる葵は二葉葵である。

○松かへり　衰ひにかけていふ。萬葉集九「松反しひにてあれや三栗の月日すぎて來ず待つと言へや使者」

○きぬ〴〵のわかれ　男女會ひたる翌朝のわかれ。

久待時鳥

松かへりしひにてあれやあし引の山ほとゝぎす未だきなかず

人傳郭公

このごろは關へもいらずほとゝぎす待つにもとこの塵つもりけり

いかにして人は聞きけむ時鳥まつにはわれもおとらじものを

初聲をのもり山守いひつぎてみやこに運ぶほとゝぎすかな

初聞郭公

聞きつとて人にかたらばほとゝぎすあたら初音のふりもこそゆけ

あし引の山ほとゝぎす聞きつやとことしの夏はとふ人もがな

曉更時鳥

きぬ〴〵のわかれにかへてうれしきは有明の月になく郭公

月前郭公

月あかし卯の花しろしほとゝぎす鳴きてさわたる聲もさやけし

旅宿時鳥

松が根にまくらかるよのほとゝぎすあひやどるともしらでなくらむ

故郷郭公

いとせめてむかし語らへならの葉の名におふ宮のもとほとゝぎす

早苗

このごろは小田のさなへにいそがれて宿守るをぢもいとなかりけり

水郷早苗

此の里は田子の板舟棹さしてうら葉もみえぬ早苗とるなり

曳菖蒲

けふといへば引手あまたのあやめ草のこるまこもや我が身なるらむ

閨菖蒲

しき妙のをどこのつまのあやめ草移香さへぞこくにほひぬる

池菖蒲

しほみてばいりぬる池のあやめぐさ水のひくをば待ちてこそひけ

江菖蒲

おなじ江に生ふるあやめもひき〳〵にしなわかれたる妻となるらむ

橘

ぬし知らぬ花たちばなの袖のかをたれによそへて昔しのばむ

橘薫袖

○ならの葉の名におほ宮　奈良をいふ。古今集十八に「神無月時雨降りおけるならの葉の名におふ宮の古ことぞこれ」とあり。

○いとなかりし　忙しし。

○しき妙の　牀の枕詞。

殿守が朝きよめする衣手にうつすともなくかをるたちばな

袖ふれしきのふは今日のむかしぞと花橘やおどろかすらむ

年おいたる人のもとに藥玉をつかはすとて

くすりねる五月の玉にぬくいとのながきを君がよはひともがな

五月雨久

さみだれのながきそゝぎに東屋の軒のした石なかやくぼまむ

降るものとならはしはてて五月雨を晴れよとだにもいはずなりにき

山五月雨

あま雲の八重かきくれて五月雨のあふりの嶽ははるゝ日もなし

江五月雨

さみだれになにはの蘆は水こえて入江の小舟さはるともなし

旅泊五月雨

さみだれにむやへる舟のつな朽ちてなか引くものは日數なりけり

故郷五月雨

船はてしなには高津のあせにしも昔にかへるさみだれの頃

夜水鶏

○あふりの嶽　相模國大山、雨降岳。

○昔にかへるさみだれの頃　五月雨に水増して船の出入せら昔のおもかげ見ゆる。

くひなにや又はかられむ関のとをささで夜ふかき風をまたずば

月前水鶏

まだよひに明けぬと告ぐる聲するはくひなや月にはかられぬらむ

幽栖水鶏

住む數になしてくひなやたゝくらむ隠れはてつとおもふ庵を

夏月

あはれしる身にはあらねどはしるして夏は人まね月をみるかな

夏月明

月きよみ秋かとぞおもふ明けやすきならひばかりは夏の夜にして

雨後夏月

夕立のあめのなごりのにはたづみながるゝ水に月やどりけり

瀧邊夏月

たきつせに玉ちる月の影みればそゝがぬ身さへ涼しかりけり

愛瞿麥

二葉より生したてゝし撫子はおもひなしさへ花にそふめり

夏草

○思ひなしさへ　本より美しき上に、吾がそだてしものと思へば更に美しく見える。

夏野行く牡鹿の角の束のまもしけりにけりな薄高かや

野夏草

もの〻ふのむかしの夢の跡とへばたゞ夏草ぞ結ぼほれける

夏くれば野邊といふ名もうづもれて草の葉山となりにけるかな

夜川篝

久方の月なきよひも桂川ひかりをはなと散らすかゞり火

曉鵜舟

あかつきにかへるうぶねも有明の月はつれなきものと見るらむ

照射

なりはずの音せぬ世には幸弓をたけきわざとてともしさすらむ

もののあはれ知らでともしにたつ賤も木の下露に袖はぬるらむ

嶺照射

さつ人のゆづきが嶽の木のまよりともしのほかげ見えかくれけり

夕螢

夕まぐれ遣水てらすほたるにぞ月もしばしは待たれざりける

曉更螢

○夏野行く牡鹿の角　萬葉集四に「夏野行く牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや」

○もの〻ふのむかしの夢　奥の細道に「夏草やつはもの共が夢の跡」

○照射　ともし、獵人が夏の頃火串に松を燃して鹿の寄るを待ちて射るをいふ。

うかひらがかゞり火盡きし明方にたえぬ光やはたるなるらむ

腐草化爲螢といふことを

身に餘るおもひをみせてとぶ螢たが戀草のくちてなりけむ

螢火透簾

釣殿のしたゆく水にとぶ螢をすにほのめくかげの涼しさ

蚊遣火

さしやかむ小屋のしきやのいぶせきに蚊遣をよるの主とや燒く

遠村蚊遣火

夏ふかきもりのあなたのひとさとは蚊遣たてても人にしらるゝ

浦蚊遣火

夕しほに浦のこづみのよる〱はほさでそのまゝかやり燒くらむ

池上蓮

はちす葉を吹きうらがへす夕かぜに池の外なる浪ぞたちける

荷葉似玉

蓮葉のまきばにつゝむ白露は手ににぎりたる玉とこそみれ

氷室

○さしやかむ小屋　萬葉十三「さし燒かむ小屋の醜屋」賤が家を形容せるのである。

○こづみ　木屑の寄り集まれるもの。

大王は神にしませば消えやすき氷も夏のけふを待ちけむ

山氷室

時じくに消えせぬ不二のみ雪こそ空にしめたるひむろなるらし

夕立

夕立ははやはれにけり久かたのてる日の影にあめをのこして

野夕立

ほどちかき有間すが笠とりもあへず夕立すなりゐなのさゝ原

蟬

もぬけてはもとの殼をばわが身ともしらでや蟬のよそに鳴くらむ

風渡蟬聲遠といふことを

石川やせみの小かはの遠くよりなくねながるゝ風の涼しさ

樹陰蟬

こと問ひし神世おぼえて松陰のいはほもひゞく蟬のこゑかな

扇

ひさかたの月より通ふこゝちして扇の風ぞいとゞすゞしき

堀田一知ぬしより紅葉を透きいれたるあふぎに歌かきてよとありけるに

○大王は神にの歌　古、陰暦六月一日氷室の氷を禁中へ献ぜしよりかくいふ。

○ゐなのさゝ原　有馬山の近くにあるをいふ。

下にとれば涼しかりけり透きいれし紅葉や秋の風さそふらむ

松下泉

松陰にあつさわするゝ苔清水さむくなるをば限りにぞたつ

納涼

のきならぶ鄰つからの門すゞみおもはず夜をも更かしつるかな

月前納涼

くれぬまになすべきことはなしはてて涼みがてらに月をみるかな

柳陰納涼

さゞれ浪いはこすきしの柳陰かぜさへ枝につなぎおきけむ

水岸如秋

松風のおとも秋なる住のえの岸による浪よるぞ涼しき

河夏祓

うき事は淵にぞみそぐ飛鳥川あすはうれしきよにかはれとて

貴賤夏祓

ゆく水も上中下の世を分けてよきもあしきもみそぎをぞする

祓麻

（一）飛鳥川　古今集十八「世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬になる」

みな人の罪てふつみを負ひてゆくぬさはいかなる世にかしづまむ

夏山

夕こりの雲の高嶺はくづれおちてひとりみ空にのこるふじのね

夏川

朝川に水のけぶりのうきたつはよひの篝のなごりなるらむ

夏水

いはねより落つるたるみのみづからもさも涼しげに苔そゝぎけり

夏木

行く先も遠き夏野のひとつ松日にはいく度人やどすらむ

夏車

汗あゆる牛の車にたつ塵を身よりもえ出づるけぶりとぞみる

秋歌

立秋

秋きぬと動くにしるし玉だれのをすのたれすのたれ告げねども

海邊立秋

○たるみ　垂水の意、瀧。

○汗あゆ　汗滴り落つ。

〇神風のいせの濱をぎ　神風はいせの枕詞。萬葉四「神風の伊勢の濱荻をりふせて旅寝やすらむ荒き濱邊に」

〇烏鵲成橋　淮南子に、七月七日の夜烏鵲塡河成橋以度織女とある。

〇草のかきは　一片の葉、祝詞式「草のかきはをも言やめて」

神かせのいせの濱をぎ打ちそよぎ常世の浪に秋そたちける

初秋風

山松の枝もならさぬ君が代におどろくものは秋の初かせ

初秋蟲

秋來ぬとしらずがほなる山松にはやうらがるゝせみの聲かな

七夕

天の川ながれてたえぬ逢瀬こそ思へばふかき契りなりけれ

あまの川年に一夜のあふせゆゑ千名の五百名を世にぞながせる

烏鵲成橋

久方の天のうきはし中絶えてのちかさゝぎやわたしそめけむ

七夕別

しら玉のいほつつどひを七夕は涙にぬきて今やわかれむ

八日のあした

ひこぼしも心ひかれて今朝はさぞ牛のあゆみの行きがてぬらむ

萩

おほかたの草のかきははことやめてをぎ一もとに聲ぞのこれる

秋風吹萩

秋かぜにこたふる萩の音きけばそよ〱我もものぞかなしき

葛

いづれにかおもひかくらむ眞葛原はふ木あまたに這ひかゝりつゝ

萩

春日野の若紫のはぎが花露やしのぶのみだれならまし

名所萩

分けゆけばかざしとなりぬ宮城野のこ萩が花はもとあらにして

野徑萩

後に來む人をおもへば秋の野のこはぎが花に袖もすられず

女郎花

おもへども猶うとまれぬをみなへし花のこゝろの秋によれれば

風前女郎花

をみなへし吹きこえてくる秋かぜは人のこゝろにわきてしむらむ

故鄕女郎花

宮姫のふみならしけむ藤原におもかげ殘るをみなへしかな

㈠藤原　持統天武二朝の宮ありし處。藤原宮を詠ぜしもので萬葉一にある。

○萩すゝきかねて植ゑずは　萩すすきに月をやどして喜んだ。

薄露

われこそとおもひし野邊の初をばないつしか露にむすばれにける

野外薄

物部のとものを廣きむさしのにたちなびきたるはた薄かな

刈萱

つまるべき花も咲かねばかるかやの身をなきものとみだれそめけむ

蘭

たちぬはぬ衣きし人の藤ばかまほころびながら香ににほふらむ

朝貌

月草のうつろひ易き色にさく朝がほさへもはかなかりけり

戸外朝貌

ちるかとてあくるもくるし朝がほの花のとぢたる庭のしをり戸

月前草花

萩すゝきかねて植ゑずばあたら夜の月をむなしき庭にやどさむ

草花非一

見る人のこゝろ〳〵にめでよとや千種に花の色を分けけむ

野徑草花

いかにして秋野はゆかむ赤駒のあがきに花のちらまくをしも

曉露

たらちねの母のいさめも時過ぎてあかつき露ぞ袖におぼゆる

風前露

かぜふけば先づうちなびく淺ぢふにいかでおくらむ露のしら玉

閑庭露

秋の野におくしら露は吹く風にこぼるゝをりをさかりといはまし

淺ぢはら拂はでとざす草の戸よ露をかなしぶ人にみせばや

秋風

よみさしてまどろむふみのおこたりを吹きおどろかす秋のはつ風

野外秋風

ものゝ部のむかしのかばね草むして春野が原に秋かぜのふく

尋蟲

秋の野に聲とめくれば露になく蟲の音さへも散らしつるかな

旅人のあゆひの小鈴おちにきと行手にたどる蟲の聲かな

○旅人のあゆひの小鈴　允恭記に「宮人の脚結の小鈴落ちにきと宮人とよむ里人もゆめ」とあれど此處はたゞ鈴蟲をいひ出さんために言ふ。

○をばなあしげ　尾花あしげといひ、鈴蟲といひ、背馬に鈴かけていふ。

野外蟲

秋の野は行きもやられず草むらに鳴く蟲の音をふむこゝちして

蟲爲夜友

あきの野のをばなあしげの鈴むしに聲ふりかはすくつわむしかな

荒屋聞蟲

思ふこと語るとなしにきりぐ〳〵す秋の夜わぶるともとこそなれ

はひかゝるむぐらの露に壁くちてぬる夜もおちずこほろぎの鳴く

小鷹狩

朝がりに鳥ふみたつるますらをも花野の露のちるはをしまむ

いちはやき風流士いまはすり衣みだれていづるかすがののはら

夜鹿

うらやまし夜ふかくしかの鳴きやむはこがれし妻にゆきやあふらむ

深夜鹿

さよ深く妻やわかれしふすま路を引手の山にをじか鳴くなり

山路鹿

二人ゆけど行き過ぎがたきみ山路をひとり越ゆればさをしかの鳴く

田家鹿

あし曳の山田のをぢがおふ聲はなくしかよりも寂しかりけり

山鹿

筑波山ありしかゞひの跡とめて妻とふしかの今もなくなり

秋望

むさしのの薄高かや吹くかぜにほなみぞよする富士のしら山

にほ鳥のかつしか早稲の中分けて穂浪にうかぶ刀禰の川ふね

田家秋興

豐作の秋のたりほを刈りいれて心のゆるむ新なめまつり

秋夕

おもふ事なくてながめむ世の人に秋の夕のこゝろとはばや

をぎの葉に秋かぜふきし夕よりこぼれなれたる袖の露かな

山家秋夕

いつはあれどいつくはあれど山のおくの秋くれがたのあきの夕ぐれ

田家秋夕

金門田のゆふべのしぎのもゝ羽がきかきあつめたる秋のあはれさ

○筑波山ありしかゞひ　かゞひは嬥合「男女相會して唱歌すること」。筑波山にかゞひしたことは萬葉集九の長歌に見える。

○にほ鳥のかつしか早稲　にほ鳥は枕詞、葛飾は下總國にある。萬葉集十四「鳰鳥の葛飾早稲を新嘗すともその愛しきを外に立てめやも」

○金門田　家の門の前なる田を言ふ。

○をしね　小稲、稲といふに同じ。

○いかし穂　大きな穂。

○橘の小門のあはき原　伊邪那岐大神、黄泉國より還りまして禊祓したまひ、多くの神々を生みませる處。

秋田

をやまだのくろのはりの木おもほえず秋はいな穂のおもにもちけり

秋田風

千町田のをしねかたよる秋かぜにほの〴〵御代のさかえをぞみる

秋田稲

いかし穂の年ありげなる此の秋はからぬほどよりたのみありけり

月

照る月のあかでかたぶくかげ見てもをしまれぬ身ぞあはれなりける

橘の小門のあはきがなみ間よりあれし神世の月の影かも

待月

夕づく日のこれる空に先づ出でて月もやくるゝかげをまつらむ

八月十五夜月の宴しける時よめる

空は晴れ友は問ひきてもち月のかけたる事もなきこよひかな

大やしまてらしてあまる月影をこまもろこしもこよひめづらむ

十五夜くもりける空をみて

天つ空一むらしろき浮雲やこよひの月のゆくへなるらむ

山月

かくるゝやいかにと見しを不二の嶺のあたりは月も高くゆくらむ

野月

八千種の露もはてなきむさしのにあまるは月の光なりけり

野径月

玉とてる野路の露原かげわけて月の中ゆく野ぢの露原

原上月

下毛（しもつけ）や二荒嶺（ふたらね）おろしさよ更けて月影すごきなすのしの原

松間月

よひにみしむかひの松の影高くなれるは月のくだつなりけり

一木づゝ梢はなるゝ月をみて松をうごくとおもひけるかな

海上見月

更けぬとて小舟かへさばわたの原ひとりや月のあとにのこらむ

湖上月

秋かぜに夕ぎりはれてあふみの海白ゆふ花に月わたるみゆ

野宿月

○くだつ　傾く。

○白ゆふ花　波を白木綿花と見なして言ふ。

〇浪間の月に底づゝを　住吉神社の祭神は、底筒男命、中筒男命、上筒男命の三柱である。

東路はゆく先ごとにやどはあれど月みむためと野べにねにけり

禁中月

みがきなす玉のいらかのあたりには月さへ近くよりて照るらむ

社頭月

住のえの浪間の月にそこづゝを神をむかしをおもひいづらむ

月契千秋

天地とともにねざしてちいほ秋月のかつらの色もかはらじ

寄月祝

月きよみしほのひがたにとぶたづの千世の数さへさやにみえけり

初雁

かきたえておとせぬ人のうへをさへ思ひつらぬる初かりのこゑ

曉更初雁

よをこめて雁はきにけり明けてだに見ぬ玉づさの心ちのみして

遠近初雁

待ちえても又まちえでもやど過ぎぬたのむ雲居の末の初かり

雲端初雁

雪をいそぐ越路の雲のそなたより寒さをつれて鴈はきにけり

山家鴈

霧ふかき峯の庵の軒ばとも知らでやかりのなき渡るらむ

きりふかきあした

くらげなすたゞよひし世とおもふまで天地こめてたつさぎりかな

行路霧

ゆく先は川となるべしきりのうちにながるゝ水の音ぞ聞ゆる

海邊霧

海人の子があごとゝのふる聲せずばたゞ朝霧のうみとみなまし

擣衣

眞萩ちる野づらのさとの秋風にはや花すりの衣うつなり

閑夜擣衣

稀に來し人はかへりてさよ衣た殘る音こそさびしかりけれ

海邊擣衣

我がせこを都にやりて松しまやあまも夜寒のころも打つなり

河邊擣衣

○くらげなす　古事記の初めを想ひていへるのである。

○あご　網を引く人。

玉島の此の川上にころもうつおとや見し子が家ゐなるらむ

田家擣衣

みしねつくきねの音さへとりまぜて田ゐのわらやに衣うつなり

野亭鶏

しめおける人の垣ねのうちをさへ野と住みなして鶉なくなり

故郷鶉

橘の島の宮居の放鳥あらびしあとに鳴くうづらかな

秋日過古戰場といふを題にてよめる中

いたやぐし負ひしたけをがくやしさはなけどもつきぬ蟲の聲かな

高館の野邊の高がや吹く風にしの矢みだれしむかしをぞおもふ

菊に竹をさしてゆひつけたるかたに

おいぬとてくづほれなせそ翁草杖つきて後花は咲きけり

籬菊

しら菊の花咲く秋はあれにける庭のまがきもゆはむとぞ思ふ

菊有新花

人の手につくればば菊もつくられて根ざしも知らぬ花の咲くらむ

○橘の島の宮居　天武天皇の皇子日並知尊の住み給へる宮、萬葉集二「島の宮勾の池の放鳥荒びな行きそ君坐さずとも」

○いたやぐし　重傷を受けたる矢

○高館　安倍頼時の柵營、藤原氏三代も此の處による。

秋　夜

月よよし蟲の音かなしをり〳〵は砧のおともうちそはりつゝ

あきの夜ねざめして

去年よりもねざめぞまさるとしのはに秋のよ長くなりやしぬらむ

紅　葉

かなしともあはれとも見し秋の日のつもりて木々の色に出でにけむ

山皆紅葉

ふもとより尾上に續くもみぢばのたえまや賤が住みかなるらむ

橋　紅　葉

もみぢ葉に心をそめて丸木橋わたりて後ぞあやふかりける

谷　紅　葉

吹きおろす峯のあらしのはこびきて紅葉は谷ぞさかりなりける

山中紅葉

夏木立あをばにせばく見し山も紅葉に廣くなりにけるかな

故郷紅葉

見る人もなきふるさとの紅葉ばはひるまもよるの錦なりけり

（一）蟲の音かなし　蟲の音が可憐である。

田家紅葉

しづのをがいながらほせる垣紅葉いろに心はかけずや有るらし

暮秋紅葉

行く秋の道のほだしとなりもせで心よわくも散るもみぢかな

山暮秋

霧たちてさびしくなれる山道をひとりや秋のくれていぬらむ

暮秋衣

月草の花田の袖もうつろひぬ秋のかたみになにをしのばむ

九月盡

さらぬだに短きものをはしきると一日たらはで秋のくれ行く

ある時はありのすさびにうき秋といひしも今日ぞくやしかりける

秋雲

久方の天の香具山しろたへに雲の衣は秋ぞほすらむ

秋山

鹿はなき紅葉は色に出でそめぬ秋こそ山に住むべかりけれ

秋野

○いながら　稲殻。

○一日たらはで　九月の二十九日なるをいふ。

○ある時はありのすさび　六帖に「ある時はありのすさびに語らはでこひしきものと別れてぞ知る」

○久方の歌　萬葉集一に「春すぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山」

宮城野のもとあらのこはぎ散りしよりいろなき露に秋風の吹く

秋庭

秋の野と庭はなれどもしかすがに心をまではおらさざりけり

冬歌

初冬

とこよものあへ橘のてれる實をたのむいろとて冬はきぬらむ

閑居冬來

さしておく柴のあみ戸をおしあけて冬きにけりと吹くあらしかな

十月更衣

かもの羽の青摺衣とりかさねむなみる袖は冬にふさはし

風前時雨

一むらの雲はかなたに吹きはれて風よりしばし降るしぐれかな

枕上時雨

ふることを思ふねざめの枕にはしぐれて後もまたぞしぐるゝ

田家時雨

○宮城野のもとあらのこはぎ　古今集十四に「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」

○とこよもの　橘の傳來については垂仁紀景行紀にある。萬葉集十八にも「橘の成れるその實はひた照りにいや見がほしくみ雪ふる冬に到れば霜おけれども其の葉も枯れず」

○青摺衣　古事記上「そに鳥の青き御衣をまつぶさに取り裝ひ沖つ鳥胸見る時」

〇むしぶすまなごやが下　軟かな寢具の下、萬葉四「蒸衾和やが下に臥せれども妹とし寢ねば肌し寒しも」

とりいれぬしづが門田の稻がきは時雨さへにかけてほすらむ

落葉風

さそひこし峯のあらしは吹き過ぎておのがむき／＼ちる木のはかな

霜埋落葉

朝かぜの吹きうらかへす紅葉ばの一葉は霜のたえまなりけり

社頭落葉

みむろ山峯のもみぢのちる頃はにしきにあける神なびのもり

夜霜

むしぶすまなごやが下もしたさえぬおいを尋ねて霜やおくらむ

河邊霜

水おちてあらはれいでし山川の石にふりたる霜のさむけさ

氷

あしかものたのむ夜牀の玉藻さへなびきもあへず氷りそめけり

池上氷

池の面に氷のかくるかけはしは春のわたるやかぎりなるらむ

湖氷

しがの浦こほりてのちも辛崎の松にのこれる波のおとかな
あやふしと思ひもかけずすはの海氷の橋もわたりなれては

寒草

袖ふれぬ人もあはれと見るまでに霜をいたゞくをみなへしかな

野寒草

おく霜に穗蓼ふるからふるされて冬野にからくなに殘るらむ

水邊寒草

時ならぬ草ももえけり朝霜のけぶる出湯のわたるあたりは

寒蘆

冬來てぞ鄰のちかくなりぬらむ蘆にへだてしこやのあたりは
浪の音はきしの氷にしづまりてあしの枯葉に浦かぜぞふく

寒樹

むつましきねやの枕となりもせでいはねの霜にさゆる山つげ

冬月

埋火のけぶりにくゆる夕月の霞むかげにも春ぞおぼゆる

寒夜冬月

○山つげ　黃楊の木、櫛その他の器を作る。

○しほざゐ　潮の滿ち來る時浪の騷々しくのたつこと。

○いは牀と　岩牀の如く。

嶺の雪石間の冰野邊の霜てりわたりきて月のさゆらむ

かぜまじり霰ふるよの板間よりもりかはる月の影もさむけし

海邊千鳥

しほざゐの玉ちる波にさわがれてしづ心なくとぶちどりかな

島千鳥

夕さればちどり鳴くなりちかの島ちかくや潮のみちてきつらむ

河千鳥

川かぜの寒き山川石ふみてわたりもあへず千鳥なくなり

風あるゝ富士のしば河しば〱もふゞきを花とちどりなくなり

水鳥

いは牀と川の冰こほる冬の夜はをしのこゝろもとけずや有るらむ

吹きはらふおち葉は水にさそはれてあらしに殘る川のむらどり

このごろはをしの夜牀もつらゝゐて流れあふせもあらじとぞおもふ

水鳥多

高嶺よりおつる姿も木の葉にてさながらうかぶ澤の水鳥

池水鳥

○輕の池　大和國高市郡。

○そぎたふく　薄くそぎたる板もて屋根を葺く。

輕の池のうらま行きめぐるをしかもも冰の中にせまりてぞなく

霰

天つ空雪げの雲はつゝめどもこぼれやすげに散るあられかな

風前霰

あま雲をはなれて後は吹くかぜの心とちらす玉あられかな

屋上霰

そぎたふく古屋の軒の玉あられくだくはよはの夢ばかりかは

山館霰

奥山の眞木の板戸を椎の實ののちうつものは霰なりけり

竹霰

くれ竹の高きうら葉をつたひきてねざゝにとまる玉霰かな

雪の降りけるあした人々もとに遣はしける

めづらしくけふ降る雪に跡つけてとはぬもつらし訪ふもつれなし

朝雪

世の中のなりかはるとやおどろかむ今朝うひにみる雪にしあらば

殘雪

○荷前　初穂の貢物。

つもるともいふはかりなきさゝら荻おしの枯葉も雪かくれなり

深雪

繼ぎてふる雪にまがきはうづもれて山のふもとのやどとこそなれ

行路雪

心から雪にうかるゝ野邊の道人やりならばいかゞうからむ

行くまゝにところかはれば珍らしみ雪ふみ分けて雪をみるかな

驛路雪

東人の荷前の箱にふりつもる雪もみつぎのおもになるらし

雪滿群山

淺間山名にたつみねのけぶりのみひとすぢ雪にうもれざりけり

名所雪

松島や千しまの松をたよりにて波の上にも雪つもりけり

田子の浦雪ばかりだにあかなくにかへり見すれば三穗の松原

田雪

見渡せばまた水かれぬ冬の田のあぜのうね〳〵雪つもりけり

庭雪

ふみ分くる跡よりつもる庭の面の雪も問ひくる人やまつらむ

雪中興

黒駒にしづぐらおきてはしりでの雪には老もわすれつるかな

鷹狩

とぶ鳥に鷹をあはするますらをは身に翅なきことやなげかむ

夕鷹狩

かりくらしかへる夕も弓張の月をそびらにおひてこそくれ

雪中鷹狩

宮人のかりの使のすり衣ゆきにしのぶのみだれてぞたつ

炭竈

うちけぶるあたりは雪も消ゆるかとよそめのどけき峯の炭がま

炭竈煙

此のごろはみやこの富士の峯にさへをのの炭やきけぶりそへけり

埋火

はかなきをおもひくらべし埋火の我より先に消えにけるかな

うづみ火のうづもれし世をかきおこす[illegible]

○はしりで　門口。

○うづみ火のうづもれし世　不遇に埋れてゐてもなほ希望を絕たざる心。

○そらだきの梅が香　香を空薫にせること。

○つく〲この歌　老翁の姿しのばるゝ歌である。

○うずの山かげ　うずにかけたる日陰のかづら、うずは挿頭をいふ、

○星をうたへる　神樂の星の歌をさす「あかぼしは明星はくはやここやなりにしかもこよひの月の云云」

そらだきの梅が香かをる埋火にやどの手がひのうぐひすもなく

山家爐火

つく〲と灰かきならすほだの火にほだされし世をおもひ出でつゝ

神樂

はふり子がうずの山かげかけてのみむかしをしのぶ神あそびかな

しき島の大和小琴のしらべには八十から神もなごまざらめや

月前神樂

月あかし庭火もしろし宮人の星をうたへる聲もさやけし

五節舞姫

をとめ子がかへすたもとの下風に人の心をひるがへすらむ

早梅

いつしかと春待つ人のこゝろをや思ひはかりて梅は咲くらむ

歳暮

世の中の人のいそぎにしづこゝろなくてや年のくれて行くらむ

あすありとおもふ心のあだ浪にひととせながら流しつるかな

行く年はくれの高機おりつめてひと日ふた日となりにけるかな

歳暮忙

おこたりのつもりてことの多かるを年のとがともかこつくれかな

閑中歳暮

世の中のいそぎにつれて人こねばなか〳〵年のくれぞしづけき

惜歳暮

あし曳のいはねこゞしきしはせ山せめても年のあまりあらばや

海邊歳暮

うちよする浦のしほ木を年木にとつみてや海人も春を待つらむ

待春

梓弓はるまちどほになりゆくや冬にはそむくこゝろなるらむ

除夜

時守がうつやつゞみの今ひとつのこるぞ年のとぢめなりける

冬風

冬くればそともの梢散りはてて軒ばぞ風のやどりとはなる

○ひと日ふた日　日と杼とをかける。

かしは木の葉守の神のうらさびてあれゆく山を見るぞさびしき

冬河

あらし吹く冬の山川水かれてあらはれいづるいしの寒けさ

冬色

あし曳の山橘のてれる實ぞ霜より後の庭の色なる

冬祝

冬ごもり草木はかれて松風の千代の聲のみ高き御世かな

わが君の御世長濱のはまちどり眞砂を數にやちよとぞなく

戀歌

戀

二柱神のみこともあなにやしえをとめをとのらししものを

ますらをと思へる我やたをやめの袂の上になみだこぼさむ

初戀

きのふまでをさな遊びをせし人のたはぶれにくくなりにけるかな

けふそむる初山あゐのすり衣のちの亂れはまだ知らねども

〇あなにやしえをとめを　あゝほんとに良い少女よ、諾册二神の唱和。古事記に見ゆる。

〇ますらをと思へる我や　萬葉集四に「丈夫と思へる吾をかくばかりみつれにみつれ片思ひをせむ」とあるに殆同じである。

言出戀

かくばかり戀ひこし君のけふよりはつらき人ともなりやしぬらむ

洩初戀

しぎ山のいはまにさはる谷水ももらして後はこゝろゆくらむ

聞戀

さく鈴の五十鈴の中の玉なれやおとのみ聞きて手にもとられず

見戀

見まほしとおもふ心や玉だれのをす吹きあぐる風となりけむ

三日月のほのかにみてし夕より人の眉根ぞおもかげにたつ

纔見戀

ほのみてし物見ぐるまの下すだれ下にかけつゝ戀ひやわたらむ

遣書戀

上毛（うへつけ）や多胡のいしぶみ書きつくしおもひ入野にたよりをぞまつ

通書戀

妻こふと音に鳴くしかの卷筆もなほいのちげを君につくさむ

わびぬれば手がひの猫のくびのをもふみつけかはすたよりとぞなる

〔さく鈴の　枕詞。

〔多胡のいしぶみ　上野國多胡郡にある碑、和銅四年の建立。〔入野　多胡郡にある野、萬葉十四「……多胡の入野の奥もかなしも」

見書戀

かくまでもいつ筆なれてかけるかと　。も心も先づぞおかるゝ

祈戀

ねぎかくる神のみむろのしらにぎてなびくを人の心ともがな

祈不逢戀

うき人やわれよりさきにわがことを聞くなと神にいのりおきけむ

いのりこし神さへ今はうき人のつらき心になりやしぬらむ

忍待戀

もし人のおしはかりにも知るやとて待つかはみせず待つがくるしさ

毎夕待戀

ことだまの八十のちまたの占まさにこじとのる夜も猶ぞまたるゝ

不堪待戀

待ちつけてうれしと人にかたるまで絶えせぬほどの命ともがな

不逢戀

末終にあはではてなばおなじ世にうまれしのみを契りとおもはむ

此の世にてつれなき人も戀ひ死なむ後のたのみのあらばこそあらめ

○占まさに　占ひ正しく、占の如く。萬葉集十一「ことだまの八十のちまたにゆふけとふ占正にのれ末にあはなよし」

○此の世にてつれなき人も　彼の世まではあてにならないからつれなき人をも此の世にて戀するのである。

不逢歸戀

あふ事をいなびの海のおきつ浪よせこし夜半もかひなきやなぞ

不來戀

なか〳〵に人の心のあだ波はよらぬにつけて袖ぞぬれける

小山田のいねとはかけて思はぬをなどかりにだに人のこざらむ

來不留戀

みこしぢのこしかひもなきかへる山とゞまらぬ名のつらくもあるかな

逢戀

涙川うきにたへたるかひありて嬉しきせにもなかれ逢ひにける

忍逢戀

行く水のふかく思へばにほ鳥のしたよりかよふ道もありけり

音羽山おとになたてそ人しれずけふ逢坂の關はみえぬと

兼厭曉戀

またれこしゆふべの鐘やあかつきのもの思ふべき初めなるらむ

歎別戀

さし櫛のこのあかつきのみだれ髪なでられてちるわが涙かな

○小山田のいね　稻と往ねとをかけていふ。

○かへる山　越前國にありて古來多く歌によまる。

月前別戀

山にして川となくなるをぞ鳥の月にも人をはかりけるかな

後朝戀

櫻麻のをふのした草ふみ分けしゆくさにまさるけさの露けさ

わぎも子がねてのあしたの亂れがみ解けずやものを思ひわたらむ

逢不遇戀

ことの音に吹きあはせてし笛の名のひとよぎりにて逢はずなれとや

名立戀

いかにして袖につゝまむおさへこし涙のほかに洩れしうき名を

人しれずかきかはしたる水ぐきのいかにもりてか名のながれけむ

歎無名戀

ちりひぢのかろき我が身もしかすがに空にたつ名のつゝましきかな

顯戀

いたづらにかり田のひつぢ穂にいでて後のたのみもあらずなりにき

依涙顯戀

色にだにそまらぬほどの袖ならば露にぬれつといはましものを

〇櫻麻の　をふの枕詞。
〇をふ　苧生、麻の生えたる所。萬葉集十一「櫻麻のをふの下草露しあれはあかしてい往け母は知るとも」
〇ゆくさ　行く時。
〇ひとよぎり　笛の一種。

切戀

誰がためにする戀なるぞわがたのむ身も惜しからず今はなりにき

悔戀

とりかへすものにもがもな人ごゝろうしと見る〳〵つくすまことを

久戀

年をへて末よわりゆく玉のをもあわをによりて人をまちみむ

舊戀

逢ひみしはむかしがたりとなる中もなほこと人のこゝちこそせね

思戀

かくながら終のけぶりとなりぬとも思ふあたりはたちも離れじ

六帖題をさぐりける時　おもひやす

うちむかふわが面影のおとろへて鏡に人のつらさをぞみる

おなじとき　くちかたむ

わたのそこおきつ玉藻の名をかへてゆめ名のりそよ一夜みしこと

相思戀

あはぬよもかたみに夢に通ひきて獨りねもせぬこゝちこそすれ

○あわを　緒の結び方、今明らかでない。伊勢「玉のををあわをによりて結べれは絶えての後もあはむとぞ思ふ」弱りたる身をも長らへて待ち見むの意。

○六帖題　古今和歌六帖第五に、「思ひ瘠す」と題して「戀すれは我が身は影となりにけりさりとて人に添はぬもの故」

うたがふもうらむも戀のむつがたり相思ふとはしれるものから

絕戀

おもひ出でてをり／＼こぼす涙こそわがものからのかたみなりけれ

絕後逢戀

待つにふけわかれにいそぐ鐘の音をうらみし世さへ今は戀しき

をだえせし梓の弓のうさゆづるつぎてこそよれもとの心に

雨中戀

あまづゝみ常する君はさみだれのふるにつけてぞこひしかりける

朝戀

をしからぬ身は朝露ときえもせで又もの思ふくれをまつかな

戀涙

たもとより袖よりつたふ涙にはさゝめのみのもたへじとぞおもふ

戀夢

よのまだにねてわすれむと思ひしに夢さへつらき人によるらむ

戀木

よそながらもゆるもはかな身におはぬ人のつま木におもひかけつゝ

○うさゆづる　懸け替への弓弦。

○あまづゝみ　雨籠り、雨にて家にこもること。萬葉四「雨づゝみ常せす君は久方の昨夜の雨に懲りにけむかも」

○さゝめのみの　さゝめといふ細草のみので。

寄雲戀

かきくらしおもひこりしくうき雲や涙のあめの種となるらむ

あし曳の山たち出づる横雲もねにわかれてやたゆたひぬらむ

寄霧戀

わがなげくおきその風にきりたちて妹があたりのめにもふれなむ

寄烟戀

不二の嶺のけぶりもたえつわが身のみいつまで燃ゆるおもひなるらむ

寄杣戀

をのとりて丹生の檜山にいる民も我にまさりてなげきこらめや

寄木戀

わが戀は深山の杣のふしをれ木すてられながら朽ちやしなまし

寄濱戀

あしがちるなにはの崎のならび濱いもとならびて住むよしもがな

寄橋戀

ありし世のまゝの繼橋つぎ〱にわたれといひてたえし人はも

たに川のひとつ棚はしおもほえずとりはなされてわたる瀬もなし

○おきその風　宣長の説に息嘯とあるの。なげく息の霧になるいふである。萬葉集に「大野山霧立ち渡る我が歎く息嘯の風に霧立ち渡る」

まゝの繼橋　下總國眞間の繼橋

寄花戀

つらからむ人の心のねざしより咲かせそめたるものおもひの花

うき戀に身はもがれ木の櫻花春にもあはでかれむとすらむ

寄帶戀

しづはたのさおりの帶のかたむすび解けても妻のあはずぞありける

寄枕戀

契りあらばならべても寢むこも枕たかきいやしきなぞへなくとも

寄琴戀

睦ましき中ともなれや六つのをの終にあづまと名をばよぶべく

寄絲戀

白妙の衣たちぬふ針はあれどあないとほしといはぬ日もなし

寄貝戀

やちほこの神をひやししきさ貝もおのがこがせる胸はさまさじ

寄蟲戀

をさな子の手遊にするかへる子のいけみ殺しみつれなかるらむ

○しづはた　倭文といふあや布をおる機。

○さおり　倭文の狹くおれるもの

○あづま　吾妻と東琴とをかけていふ、あづま琴又和琴ともいひて六絃である。

○やちほこの神をひやししきさ貝　古事記大國主神の物語、神火傷し給ひし時きさ貝姫とうむぎ姫となほしたる事。

〔雲もなくの歌　爽快なる氣分をいひあらはしえたり。

雜歌

天

朝日さすすめら御國のかたなこそあめの初めといふべかりけれ

ゆく末もくもりなき世は天の原あふぐ月日のかげにしるこも

日

神代より曇らぬやたのみかゞみにうつして仰ぐ日のみかけかな

晴

雲もなくなぎたる朝の空みれば人のこゝろも晴れわたりけり

雲

かぎりなき天路わたれる白雲のとゞまる果ていづこなるらむ

澗戸雲鎖

あさ夕に雲のとざせる谷のとは日かげのさすぞおくるなりける

夕煙

夕ぐれのとよはた雲はよこほりてまがひも果てず立つけぶりかな

山館雨

○ちぬま 血沼回、和泉國の海濱、萬葉集に「血沼回より雨ぞ降り來る四八津のあま網手綱はせり濡れはたへむかも」
○日笠の浦 播磨國にある。

おひしげるみ谷の杉のした庵はしづくにのみぞ雨をしりける

雨のうたよめる中に

ちぬまより雨にぬれきぬ天づたふ日笠の浦をさしてほさまし

山

こゝろなき岩木の山も春は花秋はもみぢの色ぞわすれぬ

不二山

天地のへだてをみせて大ぞらのみどりを分つふじのしら山

山路

つぶら石まろびやすかる山道はあとなる人ぞあやふかりける

谷

あし曳のおなしき谷もこゝろあれや呼べばこたふる聲かよふなり

水

あし引の山と川との中とりてこゝろかよはすたにのした水

飛瀧音清

久かたの雲の上より響きていはほにとほる瀧の音かな

國

朝日子のとよさかのぼる御國こそ日のいるくにの初めなりけれ

とつ國はあまたかはれどしきしまの大和しまねのうごく世やある

野徑

たえ／＼に見えぬる野邊の細道もゆけばさすがに跡はありけり

古戰場の歌よめる中に

みなと川みづくかばねはさらしても魂はよしのの宮まもりけむ

うしろより山風おちてやしまがた散るや紅葉の行方かなしも

こふのをかむかしの眞間のいはくえに悔いてかへらぬ跡を見るかな

鶴がをか松かぜふけていたやぐしおひしたのひの沛さびにけり

石

ひとかどもあらで年へしつぶら石かたくなどちの友となさばや

しほみてば水沫にうかぶ石なごも一つ／＼に思ひこそあれ

川

雨水にのきの下いしくぼみけりかたきわざとて思ひやまめや

海

よの中の塵にまじはるあくた川水の心はきよきものから

○こふのをか　下總國國府臺。里見氏と北條氏との古戰場。

○石なご　小さき石。

わたの原ひろきを見ればからやまとたゞ中島にすめるなりけり

湖

いづくにか舟はとゞめむあふみの海うらのさき／＼名どころにして

島

天地のなさぬ中にもあらざるを離れこじまと誰がへだてけむ

巖苔

常磐なるいはほの上にむすこけのあさき根さしも萬世やへむ

雫

大君の高くら山の高ねより落つるしづくやみめぐみのつゆ

舊都

御こゝろをよしのとなして眞木のたつあら山中に君はましけむ

故宮

民のとのけぶりにぎはふなにはがた高津の宮の跡はしるしも

すめろぎの初國めししかし原のかしこかりける宮どころはも

故郷

いにしへの玉のうてなの跡とめて賤がわらやを見るぞかなしき

○高津の宮　正しくは、難波高津宮、仁徳天皇の皇居。

○跡とめて　跡を尋ねて。

住みすてしかきねのうちはゆく人のこゝろ〴〵に道ぞつけける

閑居

うら山もうしとし聞けば市の中に心ひとつをかくしてぞすむ

ともし火にわが身のかげのそはるさへうしろめたしと見るいほりかな

閑居水

山かげの石のくぼみのたまり水ひとりすむにはことぞ足りぬる

にごさじと思ふばかりぞ苔淸水くみしる人はよしあらずとも

閑居燈

人しれずふみよむまどのともし火は消えての後ぞ世にひかるらむ

幽棲

あし曳のみたにのしたのうもれ水住むと知られぬみこそやすけれ

田家

おのがじゝ南おもてを門田にてうしろ安くもつむ稻城かな

田家風

小山田のひたのかけ繩つたひ來てなるこにさわぐ風のおとかな

田家水

○ひた　引板、鳴子。

なはしろにかけあらそひし山水も時すぎぬればひく人もなし

田家道

ほそくとも事こそたれれ賤のをが鄕へかよふはたの中道

山家

山ざともおなじ月日のしたなれどよの中かはるこゝちこそすれ

花もみちむかし尋ねし山ざとをつひの住みかとおもひかけきや

やま里にいらずはわれも都にてうき人數に今やならまし

山家雨

山高みあまぎる雲の軒とぢてもりこぬ雨も露けかりけり

山家水

住みはてむたづきだになき山里もたゞことたるは淸水なりけり

山家鄰

山一重へだつかなたの夕けぶりとなりと見るも心ほそしや

山家垣

都をばかへりみすれど山松に雲やかきねをゆひつゞくらむ

山家待人

○佛のあらか　佛殿。

○聞えくまでは　きこえ來るまでは。

山ざとの住みよかるにも世をいとふ同じこゝろの人ぞまたるゝ

手すさびに山のくりしひひろひ置きて思ふみやこの便りをぞまつ

古寺

山のおくもとめし人は出ではててのこる寺こそさびしかりけれ

古寺朝

こゝろすむ朝けのさまや高野山まつあかつきの遠きものから

寺をよめる中に

大八洲(おほやしま)くにつ御神はうらさびて佛のあらかなにみがくらむ

伊勢國なるゆかりある人の久しくありて家にかへりゆくときよみて遣はしける

行く人をやればすべなしとゞむれば待つらむ人のこゝろぐるしも

筑後國船曳大滋がものまなびにきて又の年かへりけるときに

ながらへてありまち渡るつくしべにとゞろかす名の聞えくまでは

法住寺單譽法師の西の國へ道のためにとて出でたちけるとき

摘みためし御法の花やいくさとの人のたもとに香をうつすらむ

旅

みやこ出でてはやわすられつ逢坂の關やうき世のへだてなるらむ

旅行

東路にうゑつゞけたる松ばやし待つらむ人をいつ越えてみむ

山旅

空にのみあふぎし雲をおもひきや夜はのふすまになしてきむとは
たび衣きのふこえたる山のはに別れてけふも遠ざかりつゝ

野旅

むさし野も人ざと近くなりにけりすゝきの中にみゆるともし火

旅情

こゝろゆくかたは忘れてうしとみし海山のみぞ目にのこりける

野外旅宿

行きくれぬ一木の陰も契りあれと野中の松のしたたのむなり
たびねして思へばすごしいにしへのもののふどもはこの地のした

旅宿夢

まくらとて草ひきむすぶ露の上にはかなき夢をたのみそめぬる

羇中山

雲霧をわくる山路はたに川の水のおとこそしるべなりけれ

羇中衣

野邊の露山ぢのしづく袖の雨たびの衣はほすときもなし

羇中涙

椎の葉にもるかれいひのほろ／＼と涙こぼれぬみやこおもへば

羇中濱

わぎも子にかけのよろしき夏草のあひねの濱に舟ははてなむ

蘿

深山木にかゝれる苔の名もしるく日かげにこそはおひしげりけれ

山松のすゝみおくるゝ枝とめて長くみじかくかゝるこけのを

蘆

大空にもえてのぼりしあしかびのなごりや國にねをとゞめけむ

竹

木にもよらず草にもつかずひとりたつ千尋の竹のこゝろたかさよ

竹風

大かたの世のこと知らぬくれ竹も風にはなびくならひありけり

〇椎の葉の歌　上の句は下句を言ひ出す序ではあるが、椎の葉に盛る云々で旅の意をあらはしてゐる。

〇蘆の歌　一本に「昔たれ草のたねをはまきにけむ刈れどかへせどつくる世もなし」とある。

〇竹の歌　八二六頁の反歌に同じ。

○住の江の　昔は海にありし松も年をへたので岸から離れてしまつた。

吹くかぜにさも爭はでそよさゝともてなしてやる竹のすなほさ

竹久綠

みそのふにちひろ生ひたるもゝよ竹もゝよよ經れども色はかはらじ

窗竹

まどちかく植ゑてぞなるゝくれ竹のなほき姿はならひえずとも

松

花もみちあだなるいろにあらそはぬ松のみどりぞとはにふりせぬ

嶺松

朝づく日むかひの山のみねの松雪につけても月につけても

澗松

峯こゆるあらしの音をよそにして枝やすけなるたにの松かな

名所松

住の江のきしかた遠くなりしよりなみに別れし浦の松かぜ

浦松

引くしほのあとにもしばし浪のおとを松にのこしてうら風ぞふく

庭松

○姉はの松　陸前國姉歯にありし名松。

○樒　むろ。正字は榁である。

よき木とてとふ人毎にほめつれば松にやどかるこゝちこそすれ

老松

ありし世のおやはらからやしのぶらしひとり姉はの松はとしへて

松經年

われみても久しといひし住の吉の松はそれより又ちとせへぬ

杉

ちはやぶる神のみむろの鉾杉はたちながらこそとりものにせめ

樒

行く船もかたのりすなり鞆のうらの磯まのむろの見えむかぎりは

桐

大王のみけしのあやにおりなれて桐の花こそたふとかりけれ

鶴

人よりはうらやむ千代もあしたづの心にはなほ飽かずやあるらむ

おのがよも末はるかなる雲の上にたち雙ふたづの聲のゆたけさ

浦鶴

はなたれし昔こひてやかまくらの浦のあたりに馴るゝあしたづ

蘆間鶴

難波がたみじかきあしのふしのまにながき世しめてあさるたづかな

鷲

ひとはねにちさとまでとや思ふらむつばさのし行くはひろくまわし

海邊鳥

梓弓ひく人もなきまとがたの湊のすどりなどさわぐらむ

都鳥

墨田川すむかひありて都鳥さかえゆく世に逢ひにけるかな

龍

天のはら雲まく龍にひかれてやそらに玉ちるおきつしら波

貝

身をつみてあはれとぞ思ふわかの浦に住むかひもなき磯のしたゞみ

蝸牛

おのが家おひもて移るかたつぶりあとに心ものこらざるらむ

龜

常磐なるいはほを友と住む龜やさゞれ石よりみなれそめけむ

○はひろくまわし　翼のひろく大きいくまわし。葉廣くまがしに云ひ寄せたのであらう。

○まとがたの湊　伊勢國多氣郡にある。

○したゞみ　きさごの貝。

ひまもなく鰭ふるいをのかた淵にをを引くかめのやすけなるかな

龜の背に子をおひたるかたに

萬代をかさねよとてや池のおもに子をさへおひて龜あそぶらむ

和琴

大やまと國の名におふ六つのをはわきてその手のおつまじきかな

簾

よのおりはかけてな入れそいよ簾いよ〳〵われはこゝにのがれむ

書

こりすまに又しもひらくいくさ書かなしきものの見まくほりして

述懷

ながらふるまは玉のをにつながれて憂きも歎きもはなれざるらむ

心なき身にもたま〳〵心あれやかなしき知るとうさをなげくと

世の人にあにおとらめや月花をあはれと思ふこゝろばかりは

あしの屋のこやのやへぶき隙もなみ思ふふしをもたてがてにする

寄世述懷

うしといへば憂くも思へどたのしきになせば樂しき世にもあるかな

世のへがたき事どもを坂本眞路がかたるを聞きて

こもりくの豐初瀨ぢのとこなめも世渡るよりはやすけかりなむ

もののおこたり易かるをなげきて

飛鳥川あすといひては流しやる月日にかくるしがらみぞなき

伊勢國なるうからの中に身をはふらかしける人のもとに道はしける

しづのをがあはふのかみら種からのいやしきものと世にないはれそ

無常

あずの上におふる小松を千代もとはおもへど明日もしらぬよの中

しづのをが田づらの道の中くぼみたまれる水のありはてぬよや

下毛國足利に佐野豐が一めぐりの忌に

をしやとてしたふ月日はとゞまらではや一年の遠ざかりぬる

おなじ國小俣山藤淸風が身まかりけるをいたくかなしみて

あはれ〳〵あはれ〳〵といへど〳〵いへどもつきぬ人のかなしさ

上毛國桐生なる棍子が母の身まかりける時

はゝき木のありとは見えてなきたまの面影のみをけふはとふらむ

みちのく棚倉石上久賢が身まかりけるとき

○こもりくの　初瀨の枕詞。萬葉集十一「隱口の豐初瀨路は常滑の恐き道ぞなか心ゆめ」

○かみら　韮。

○あず　崩れたる岸、がけ。

石の上ちよの古道もろともにふみ見むといひてとひし人はも

父の五十年の忌に

なき父もいかにあやしとおほすらむしらぬ翁のけふの手むけを

七月ばかりあひしれりける人の身まかりけるとき寄露哀傷といふことを

しら露のこぼるゝ秋の庭みれば涙ぐまざる草の葉もなし

神の社にゆふを奉りて

年をへてわがくろ髮もしらがづくゆふなすまでにまさきくもがな

社頭忍昔

しめくちてゆふだにかけぬいつがしのもとの心やわすれはてけむ

歌よむむしろにて祝歌よめる中に

ながらへていさこゝろみよ神代よりつきぬ言葉もかぎりありやと

井上正徳の君のめをむかへさせ給へるをほぎて

神のよに天のみはしらめぐらして家のいしずゑかためおきけむ

長命寺導師が衣の色のなほりけるをほぎて

あまたとしみのりに染めしまごゝろのいろや衣にあらはれぬらむ

中村祐良が前髮とりけるとき

○いつがし　嚴樫、神社の境内にある樫の木。

○前髮　額髮。これを剃り落して少年が一人前の大人となるのである。卽ち元服。

〇二名島　四國の一名。

〇御食國　御膳の料を奉る國の稱

けふよりは世にひとりたつ男山さかゆく末ぞひさしかるべき

土佐國日下吉村が八十の賀に

おいまさぬ神のみおもの二名島二度君がやそぢほぎてむ

よき人の七十の賀に杖をたてまつるとて

千代の坂つきもつかずも越ゆらめどころぶさぬがに杖たてまつる

證願寺唯乘上人の六十の賀に

をしまざる身はあやにくにながよ經て多くの人にしぬばれぬらむ

平戸の藏人許斐記氏が父の六十の賀に

ものゝふのたけ〴〵しかるよはひには竹やかへりてあえむとすらむ

露遊尼が五十の賀に

もろともに君も千代ませみちのくのあねはの松をはらからにして

寄世祝

御食國（みけつくに）安かれとおほす大王のおほみこゝろにかなふ御世かな

寄歌祝

いにしへのとよあし原の名をかへねことばの花のなかつみくにと

寄海祝

〇潮路のやほあひ　方々の潮路の集まり合ふ處。

〇ちがへしのいはほ　伊邪那岐命黄泉比良坂に千引石を塞ぎて伊邪那美命を追ひ返したのこ此の岩を道反大神こ申すこ古事記にある。

しほなわのつぎ〳〵こりてわたの原みなをす國となりぞゆかまし

君が世はおきつ潮路のやほあひのひかたとなりてかちわたるまで

寄河祝

あし曳の山より海にいる川の末ます〳〵にひろくさかえむ

寄巖祝

世のまがもせめくる老もちがへしのいはほぞ君がまもりなりける

寄松祝

おい松のもとに小松のおひそふは千とせの後の世繼なるらむ

幸遇太平世

君が代にあへるをおもへばいにしへに生まれざりしも嬉しかりけり

長歌

正月朔日朝日を海邊にをろがみにいでてよめる

今朝はしも　天つみそらに　うら〳〵と　霞たなびく　ほの〳〵と　かぎろひのぼる　千早ぶる　神世の昔　大ぞらに　あしかびのぼり　國土に　うきあぶらうき　天地の　分れそめしゆ　八百萬　年はふれども　いほよろづ

○今のをつゝに　今の現に、現今。

○おほどれる　亂れひろごれる。

代はかはれども　梓弓　今のをつゝに　春のたつ　あしたの空に　うきあぶら　たゞよひしごと　あしかびの　もえのぼるごと　わだの原　かすめるおきゆ　朝日影　のぼるをみれば　神代しおもほゆ

あしかびのもえのぼりてし神の世のなごり霞みて春のたつらむ

若草

人の子も　野邊の小草も　うらわかき　ほどははしけし　おひさきは　にはふやいかに　行末は　みのるやいかに　秋をへて　後にし見なば　おひ出でて　花だにさかず　花さきて　實のりもあへず　みるめなき　おどろになるも　かず／＼に　ありはあらめど　うら若み　まがれる枝も　おほどれるかづらもおひず　おしなべて　ひとつ二葉に　もえいづる　新若草は　わかき子に　おもひよそへて　ともにはしけし

おひさきに色よき花は咲かずともおどろになるなはしき新草

春日望山

春の日の　かすめる空に　天そゝり　雲ゐににほふ　不自の山　淺間山　いや高に　しら雪つもり　彌遠に　煙たたりて　五百重山　千重たゝなはるむら山を　おみとしたがへ　しき山を　奴となびけ　天傳ふ　日のたてぬき

に　とほじろく　春日のかすむ　布自の山　淺間山

村山もにふゝにゑみてまつろふをひきゐてたたす布二淺間やま

ものにうみける時ちかほとりなる野邊に花見にいでてたはぶれによめる

うた

たか垣の　うちはほら〲　あしがきの　外はすぶ〲と　黃泉國の　鼠は
いへど　ふせ庵の　内はすぶ〲　柴の戸の　外はほら〲と　み空には
霞たな引き　野のへには　かぎろひもえて　櫻花　にほへゐみれば　花をよ
み　こゝろひらけぬ　野をひろみ　思ひもはれぬ　よみ國の　鼠のことは
とまれかくまれ

春の野にひもときそめし花みればよれし心のをもとけにけり

櫻花をよめる

花ぐはし　櫻の花は　いはむすべ　せむすべしらに　くすはしく　妙なる花
の　のどかなる　花のきはみぞ　うら〲と　てれる春日に　この花の　さ
きてにほへる　下陰に　まどゐする日は　もの丶部も　太刀をわすれぬ　あ
らちをも　しもとをすてぬ　老人の　こゝろもわかえ　やみ人の　うれへも
のぞき　なきいさつ　乳子(ちご)もほゝゑみ　はらぐろき　めのともなごむ　法師

○黃泉國の鼠はいへど　大國主神根堅洲國に須佐能男命を訪ひ給ひし時の話。

○花ぐはし　櫻の枕詞。

○あらちを　荒くれ男。

も　西はねがはず　山伏も　來む世はまたず　から學び　するともがらの
ことあげも　しばしはやみぬ　うべしこそ　おぞの翁が　むすぼれし　心の
をろも　とはにとけたれ

咲きにほふ花見る時のこゝろこそ今も神世にかはらざるらめ

苗　代

青柳の　枝きりおろし　穗蓼の　根をかりはらひ　にひばりの　あらきの小
田に　しづのをが　蒔くやゆだねは　さし柳　めはるがごとく　八穗蓼の
ほたるが如く　蒔きそむる　春はめはり　かりあぐる　秋はほたりて　みつ
ぎもの　まださむ日まで　あしき水　あらき風に　あはしめず　守りまさへ
と　五十串(いぐし)たて　しめ引きはへし　あらき田の　苗代小川に　しづのをが
なほき心の　まことをぞ見る

ひとしろにたらぬばかりのなはしろも秋は千町におひしけるらむ

かきつばたをよめる

あら玉の　としの一とせ　咲きとさく　木草の花の　紫を　一つにすべて
かきつばた　こぞめの色の　あやにむかしも　すみれ花　にほふといへど
藤の花　にほふといへど、はなあやめ　にほふといへど　萩が花　にほふと

○心のをろ　心の緒と同じ。

○ゆだね　苗代にまく種子。

○まださむ日まで　獻上する日まで。

○五十串　いぐし、玉幣などかくる榊小竹などをいふ。

○あやにむかしも　ほんに可愛い

いへど　咲き匂ふ　數ならめやも　二あゐの　色にもあらず　あかね刺す　色にもあらず　こむらさき　おのづからなる　かきつはた　深くにほへる　そのいろの　あやにむかしも　うべなく　いにしへ人の　とり分きて　さぬにかきつけ　かきつけて　かきつけ花と　なづけけらしも

神祭

ちはやぶる　神の御國と　神まつる　卯月になれば　天地も　ぬさこそまだせ　さかきりし　うつ木もさきぬ　もえざりし　榊ももえぬ　その花の　おのづからなる　しらにぎて　をりてはまだし　青にぎて　とりてはたむけ　もの〻部の　八十のをとこも　をとめごも　來よりつどひて　宮ゐせす　神南備ごとに　夏たてば　にぎはひにけり　みしめ繩　なかきよかけて　引きたえぬ　神の國こそ　たふとかりけれ

天地のまつるみぬさと神垣に花もみづ枝もまゆふかくらむ

待郭公

ほと〻ぎす　なが鳴く聲を　ひろきけば　うさをまぎらせ　よろきけば　戀をまぎらせ　あしたには　友なしのばせ　夕には　なき人もはせ　はてくは　人をなかしむ　かくしあらば　もとな鳴きそと　なくことに　厭ひしも

○神南備　萬葉集古義は神々のしづまります地と說いてゐる。

○なき人もはせ　もはせは思はせ

○もとな　何故ともしらず、氣にかゝりて。

○ありのすさび　有るが故に勝手なことを思ふこと、いつも有ると思ふこと。

○最枝　古事記「花橘はほつえは鳥居からし下つ枝は人とり枯らし云々」

○しほなわのとゞまるかぎり　潮の沫の塗り留る限りの意。

のを　こりずまに　きかまくほしみ　ほとゝぎす　又もことしぞ　待ちそめにける

ほとゝぎす聞けばくるしと思ひしはありのすさびの心なりけり

庭にうゑたる橘を折りて人のもとに遣はすとて添へけるうた

うゑつれど　かをりだにせず　うつせれど　にほひだにせぬ　家の名に　むなしくおへる　橘の　花にはあれど　しかすがに　咲きにし日より　風吹けば　風にもかをり　雨ふれば　雨にもにほひ　朝にけに　みつゝあかねば　ほとゝぎす　またむよすがに　散らさじと　おもひしものを　最枝(ほつえ)は　鳥居からし　下枝は　人とりからし　中つ枝に　のこれる花を　あたらしみ　をりてまだせり　はしきやし　むかしをしのぶ　君がかざしに

海上夕立

わたの原　ふりさけみれば　しら雲の　むかぶすきはみ　しほなわの　とゞまるかぎり　庭もよく　はれたる海の　ときのまに　空かきくれて　あけしほを　おろしもあへず　ほすあみを　たぐりもあへず　おき見れば　鯨のしほか　邊をみれば　わにのいぶきか　みそらには　龍かもいまく　鳴神か　くづれおちぬと　その音の　聞きのかしこく　その雨の　見のおそろしき

○上つ瀬はあまり瀬はやし、伊邪那岐命橘小門にてみそぎし給ふ時の御言葉。

○朝羽ふる、夕はふる　萬葉集に、の柿本人丸の長歌の中にある句。

「うつたへに　ひとむきに、ひとへに。

青海原　かぜのなごりの　しら波を　おきにのこして　見し雲は　いつちいにけむ　夕立の　空さりげなく　夕日影　たゞさしわたる　海のおもてを

みそぎにまかりてよめる

夏くれば　麻の葉ながす　みそぎ川　この河のせも　上つ瀬は　あまり瀬はやし　下つ瀬は　あまりせ弱し　中つ瀬に　わがおりたてば　せおりつ姫瀬やきよめます　秋津ひめ　あきやむけます　吹きうつる　いぶきの如くかきふらす　みそでのごとく　朝羽ふる　風こそいぶけ　夕はふる　浪こそきよれ　そのかぜの　いぶくまに〳〵　その浪の　きよるまに〳〵　みそぎ川　そゝぐたもとの　あやにすゞしも

秋つ姫袖かもふらす夕羽ふる波よりかよふかぜの涼しさ

立秋

おそひくる　ものの音して　貝鐘の　ひゞきもそへず　くだ笛の　聲もまじへず　あなあやし　うかゞひみむと　枕太刀　こしにとりはき　手束弓　た握りもちて　うす暗き　まだ明けぐれに　閨戸いで　聞きつゝをれば　ふせくらむ　あだにもあらず　せめ來らむ　駒にもあらず　あづま屋の　軒の下荻　うちそよぎ　秋こそきつれ　うちつけに　風は身にしむ　うつたへに

露は身をさす　うべなく〳〵　身にこそしまめ　この風の　さえむまに〳〵
此の露の　しまむまに〳〵　鹿もねを　しのびぞあへぬ　むしも音を　しの
びぞあへぬ　山ごとに　いろづきぬべく　野邊ごとに　うらかれぬべく　も
のみなの　うつろふ秋の　閨戸まで　せめより來たる　今朝にしあれば

草も木も終にうつろふ秋なれば先づうちつけに身にもしまし

草花をよめる

秋の野に　咲きて匂へる　をみなへし　こはぎ　しが花の　妹に似たれば
しが色の　子らに似たれば　秋の花　ちくさにほへど　野邊の花　もゝ種さ
けど　家の妹に　こゝろみせむと　その花に　手だにもふれず　われはたを
りつ　をみなへし　こはぎ

稻葉の露を見てよめる

かぎろひの　夕かたまけて　にほ鳥の　かつしかがたの　千町田の　そひの
はり原　柳原　わけつゝくれば　穂に出でむ　ときを近みか　さ青なる　稻
葉おしなみ　白露の　玉のしみゝに　白玉の　露のあまたに　こき亂り　う
れよりちれば　もとはより　うらはにのぼる　その露の　おつるもあかず
その玉の　のぼるもあかず　われはもよ　露はあめより　ふりておく　もの

○しが花、しが色　その花その色。

○かぎろひの　夕の枕詞。
○夕かたまけて　夕方に向つて。
○にほ鳥の　かつしかの枕詞。

とのみこそ　おもひきてしか

此の夕いな葉をのぼる露みずぼふるものとのみ思ひはてまし

秋　祝

神（かむ）ろぎの　神の命の　神はかり　はかりたまひて　高ひかる　吾が日の皇子に　天地　月日とともに　とこしへに　よさしたまへる　千五百秋　瑞穂の國は　國の名の　みづほさかえて　をす國の　くにのはたてに　八束穂は　やつかにしなひ　いかしほは　いかしく實のる　わたのそこ　おきつみとしを　荷前にも　さはにまつれど　豐秋の　田ぢからおほみ　天の下　四方の御民の　門ごとに　よこ山のごと　むくさかに　つみたらはして　たてまたす　みつぎのあまり　新なめに　かみゆまはりし　新しぼり　くみてぞいはふ　長秋の　千五百の秋も　あかにほに　吾が大君は　きこしめさへと

やんごとなき君のおまへにて御庭の菊を見てよめる

みそのふの　いつ竹村の　いくみ竹　もとうちきり　たしみ竹　すゑかり切りて　七ふ垣　八ふがきくまし　なゝそもと　八十もと生す　いろ／＼のこの秋菊は　霜おかば　色こそあせめ　雪ふらば　花こそちらめ　その根さへ　かれうせめやも　年のはに　わか葉おひでて　いくみ竹　なゝよへぬと

○いかしほ　大きな穗。
○おきつみとし　稻の異名。
○田ぢから　田地の貢。
○むくさかに　賑々しく。
○たてまだす　獻上する。
○かみゆまはり　ゆまはりは、齋すること。
○新しぼり　新酒。
○あかにほに　赤土の如く顏の美しくなるまで。
○七ふ垣八ふがき　ふは物の編目結目をいふ。

○たしに匂はむ　たしかに匂はむ

○かりて　かて、糧。

○かれひ　餉、べんたう。

○ともしきろかも　羨ましき事よ

も　たしみ竹　やつよへぬとも　その枝は　いくみさかえむ　その花は　たしに匂はむ　君がかざしに

千世しぬし此のみ園ふに生ひそめて菊もおほくの秋をへぬらむ

海邊紅葉

うちわたす　秋の浦みを　おきさけて　漕ぎくるをぶね　へつきて　こぎくる小舟　とめて來し　われをばのせて　おもしろき　磯山紅葉　いそごとに　ゐても見せなむ　しま毎に　ゐてもみせなむ　ゐてゆかば　かりてはやらむ　のせいなば　かれひはやらむと　海人の子を　よべどまねけど　おきつかい　はねてぞすぐる　邊つかい　はねてぞすぐる　もみぢ葉に　こゝろはのれど　のりあへぬ　たなし小船　ともしきろかも

海人小船すぐる磯みのもみぢ葉に心をだにもいざのせてみむ

雨中九月盡

野邊みれば　野邊もうらがれ　山みれば　山もうらがれ　寂しかる　時のきはみに　雨まじり　風さへ吹くを　風まじり　雨さへふるを　たゞひとり　ぬれゆく秋は　さびしくぞ　おもひたつらむ　わびしくぞ　思ひこゆらむ　さびしくば　太刀はけましを　わびしくば　杖つけましを　雨つゝみ　かさ

もかさむを　風まもり　きぬもかさむを　今ははや　いづこをはかと　おひしかむ　すべなかりけり　もみぢ葉の　散りてかげなき　山のそき　野のそきひとり　くれ〴〵と　ぬれしほたれて　秋はいぬらむ

行く秋の人にありせば此の雨ををやめてたてといはましものを

時雨

あはつかに　ものぐるほしき　あだ人の　心なれやも　神無月　たゞにし日より　明けされば　うき雲迷ひ　夕されば　村雲きほひ　いかめしき　おとのみたてて　ふる雨も　ふりもはたさず　行く雲も　ゆきもつくさず　くもるかと　みればはれゆき　はるゝかと　みればくもりて　なにしかも　思ひ定めず　朝にけに　うちしぐるらむ　神無月　ものぐるほしき　世の中の人のこゝろに　にたるそらかな

はれくもり定めなき世の人心空にしりてやうちしぐるらむ

寒月

夕こりの　雲より出づる　夕月の　影をしみれば　むら雲の　つるぎの太刀の　八俣たる　をろちの神の　尻尾より　きらめき出でし　冰ばの　するどきが如　つむがりの　かしこきかごと　はだふれば　きれもいるべく　身を

○あはつかに　あは〳〵しきさま

○つむがり　劒の利きをほめていふ語。古事記「見そなはししかはつむがりの太刀あり。」

ふれば　さえとほるべき　冬の夜の　霜よの月の　かげのさむけさ
村雲のつるぎの太刀の冰ばの見る影さむき冬のよの月

水鳥

世の中の　つれなき人は　なが袖に　霜はおくとも　我が袖に　手だにな触
れそ　さむからば　さえてもしねと　さき竹の　そがひになりて　さゆるよ
の　獨りねぬるを　岩牀と　川の冰こほる　冬のよに　ふすをしがもは　わ
が尾には　霜はおくとも　ながをには　霜なふりそと　おく霜を　はねもて
はらひ　降る雪を　尾もて拂ひて　さむさをば　いとひみとひみ　おもひ羽
を　おもひかはして　なく聲を　つれなき人は　いかにきくらむ
水鳥の嬬おもひ羽をかさねてもつらゝの峯はなほやさえまし

海上雪

難波門を　こぎ出て見れば　青浪に　しろくうかべる　淡路島　いや二なら
び　あづき島　いや二ならび　おもしろき　島はと問へば　おのころじま
をたにさかりて　さけつしま　こちに離れて　ふりつもる　雪にさながら
しほなわの　おのれとこりし　神世しおもほゆ
神皇子(かむみこ)の數にもれにし淡島も雪はおなじく降りつもりけり

○そがひになりて　後向になつて

○あはぢ島いや二ならび　應神紀の御製中の句。

○神皇子の數にもれにし　諸冊二神國作りの條に「大八島を生みたまひき、是れも御子の例には入らず。」

〇やすみしし吾が大君　初めの四句、萬葉集一、人麿の長歌中にある句。
〇あともひたてて　引き連れて。
〇しゝじもの　鹿の如く。
〇いはひ　いは接頭語。這ひ。

詠野行幸歌

やすみしし　吾が大君　神ながら　神さびせすと　おほ御身に　靫(ゆき)とりおばし　大御手に　鷹すゑもたし　小鷹飼　大鷹がひに　つかへける　八十作のをの　ますらををあともひたてて　朝獵に　鶉ふみたて　夕かりに　きゞしふみたて　大御幸　久しく絶えし　さがの山　千代の古道　跡とめて　かりはのみのの　芹川に　いでますまにま　野遊にふす　雉も飛びえず　あしべゆく　鴨もとびえず　天かける　田鶴も大御手に　かしこみて　おちてしくれば　しゝじもの　いはひをろがみ　うづらなす　いはひをろがみ　大御とも　つかまへまつれる　ますらをの　すりかりぎぬも　遠近に　袖ひろがへる　きそひがり　あかずおほせば　いりし日も　出でてかへらひ　くれし日も　出でてあからひ　天地も　よりてつかふる　神ながら　かりはのみ野に　いでませりけり

久方の天行くたづも大御手にけふこそおちめ御稜威かしこみ

神樂

ひさ方の　天の岩屋戸　さしかため　こもりましけむ　神の世の　神のあそびを　神宮(かむみや)に　遠くつたへて　香具山の　いほつまさか木の　上つ枝に　眞

○中臣　中臣連祖天兒屋命。
○忌部　忌部祖布刀玉命。
○もちゆまはり　捧げる、ゆまはりは齋する義。
○猿女　猿女君祖天鈿女命。
○たぐさにゆはし　篠の葉を手にとるにほどよき程束ねて。
○本末を歌ひ　神樂には本歌末さ歌とあり、兩者を聯ねて一雙の曲とする。
○よち子　同じ年頃の子供。
○わくらはに　たま〳〵、稀に。

玉をつけ　中つ枝に　鏡をかけ　下つ枝に　にぎてをしでて　いかし鉾　中とりもたす　中臣は　太祝詞のり　忌部等は　もちゆまはり　猿女らは　わざをぎなして　山かげを　かづらにかづき　まさきをば　たすきにかかし　さゝ葉をば　たぐさにゆはし　弓はもよ　梓の弓　太刀はもよ　つるぎの太刀　いとらして　まひかなづれば　本末を　歌ひてわかち　ものの音を　ならしてあはす　宮人の　神の遊びに　岩屋戸の　ふるき手ぶりを　見るがたふとさ

いかしほこ神と君との中臣がもと末あはす聲のよろしさ

初戀

うなゐ子や　おなじめざしの　うら若き　わらはともどち　朝には　來いりつどひ　夕には　きよりまどゐて　手すさびに　おほふかた貝　一つふし　三つあふむくを　久方の　月とあらそひ　三つふさり　一つあふぐを　ぬばたまの　やみとあらがひ　あそびつる　よち子がともも　かたし貝　かたみにいつか　ふりわけの　髮をあぐれば　いわけなき　をさなあそびは　おのづから　せずこそなれれ　一つふす　月のゆふべも　三つふさる　闇のよごろも　むつびてし　中はさすがに　かきたえて　わすれずながら　わくらば

に　あひ見る時は　貝ならぬ　おもてのうへに　白妙の　袖をおほひて　はづかしと　おもふ心の　もろともに　そはるや戀の　はじめなるらむ
はづかしとおほふ小貝もうつぶしてけふより戀のやみを見すらむ

行路見戀

駒なべて　わがゆく道の　道の邊にたてる　梓弓まゆみ　もとへにも　こゝろはひけど　末へにも　心はひけど　いとりきて　手にもとられず　いきり來て　つらをもはかず　引くよしも　とるよしもなみ　ゆくさくさ　おきつつなげく　梓弓まゆみ
駒なべて行手にたてる梓弓こゝろはのれど引くよしのなき

祈難逢戀

おもへども　人はつれなく　こふれども　われはかよわく　いや日けに　身つれにみつれ　いきのをに　かけつゝもとな　年をへて　あふよしをなみ　くれなゐの　涙にぬれて　泣澤の　森になゝたび　惑ひ子の　社にやたび　ぬさむけて　のむしるしなく　つれなさの　いよゝますく　はげしくも　なりゆきぬるは　その神の　ねなきしねとか　此の神の　惑ひ死ねとか　しかもつれなき

○身つれにみつれ　身がやつれにやつれて。

○百とせにおい舌いでて　齒落ち舌出でゝ齒もやなくなること。萬葉集四「百歳に老舌出でてよゝむとも吾は厭はじ戀ひは益すとも」

○山鳥のをろのはつをに　萬葉集十四「山鳥のをろのはつをに鏡かけ唱ふべみこそなによそりけめ」

不逢戀

わたつみの　おきついはねに　こりしける　かき貝こそは　おのかじゝ　そがひになりて　こゞしいは　あふもなびくも　心には　まかせぬといへ　空蟬の　人なるわれや　なにしかも　そがひになりて　吾妹子に　あふもなびくも　心には　まかせざるらむ　そこゆゑに　浪のたちゐるに　こゞしいは　おもひくだけて　かき貝の　かひなき身をば　なげきてぞふる

おもへども岩にこりしくかき貝の逢ふ事かたき身をいかにせむ

無二相語戀

こひ〳〵て　あひ見るからは　妹とわれ　おもひたえめや　この里の　住みうくならば　山のおく　野のすゑ磯の　さきにだに　のがれてすまむ　そのときは　たれ人めなみ　庭におり　妹しかしがば　田にたたし　われ稲からむ　河にゆき　妹し濯がば　山にゆき　われ柴からむ　百とせに　おい舌いでて　よゝむとも　みづ齒ぐむとも　我をはも　妹もいとはず　妹なはも　われもいとはず　手束杖(たつかづゑ)　こしにたがねて　花さかば　花もとひさけ　月てらば　月をも見さけ　山鳥の　をろのはつをに　妹がため　われ鏡かけ　わがために　妹かゞみかけ　となへなむ　終の代までも　戀ひ〳〵て　逢ひ見

るからは　おもひたえめや

隔戀

をつくばの　二尾の嶺の　一尾には　男神ぞいます　ひとなには　女神ぞおはす　そのあはひ　谷を隔てて　雲霧の　はるけきものを　つれなくも　たかさけつらむ　つらけくも　誰かへだてし　神だにも　しかこそこふれ　うつせみも　かくのみならし　あひへだてゐて

つくば山うしはく神の命だに二尾へだてて戀ふとふものを

絶戀

黑駒の　うまやをたて　赤駒の　厩をたてて　草たえず　かひてしものを　水たえず　かひてしものを　くへこえて　あれゆく駒の　はなれごま　口とりとめ　おそぶらひ　綱引すれど　ひこづらひ　綱引すれど　つなよわみ　中たえにけり　おもひしものを

あれて行く駒のくちづな絶えてだに心にのりて猶ぞこひしき

等思兩人戀

たけばぬれ　たかねば長き　をとめ子が　ふり分髮の　ふたかたに　思ひみだれて　ひとかたに　よらむとおもへば　一かたの　あやにかなしく　一か

○うしはく　領す。主宰す。

○くへ　垣。

○おそぶらひ　あれこれと押して見る。

○ひこづらひ　あれこれと引いて見る。

○たけばぬれ　萬葉集二「たけばぬれたかねば長き妹が髮此の頃見ぬにかゝげつらむか」

たに　よらむとすれば　ひとかたの　いといとほしみ　はねかづら　中にまどひて　あげまきが　まくもとゞりの　つかねをの　ひとつ此の身を　をとめ子が　ふり分髪の　まふたつに　分くべきすべの　なきがかなしさ

處女子がふり分髪の二かたをおなじながさに戀ひてみだれむ

貧戀

いとのきて　短きものを　はしきると　いへるが如く　倭文(しづ)た卷　いやしきうへに　貧しかる　身はすべもなし　すまむてふ　家はまけいほ　ねなむてふ　牀はひたつち　しく藁の　思ひ亂れて　たまさかに　あひみる夜はは　わゝけたる　麻手小衾　はつれたる　かゝふのたもと　かくてだに　心しあはば　もろともに　落穗ひろひて　くものすの　かゝるかまどに　かそけくも　煙はたてむを　君だにも　みじかきものの　はしきるなゆめ

おもひ出でて戀しき時の涙さへかゝふの袖はせくよしのなき

寄琴戀

七つ緒の　小琴はあれど　やつをの　小琴はあれど　六つのをの　親魂あひて　さにづらふ　いものみことが　朝には　手にとりもたし　夕には　膝べによせて　かきひかす　あづま小琴の　玉ごとの　をにしもあれや　われも

〇はねかづら　萬葉集略解に、少女の髪の飾にするものであらうとある。

〇いとのきて短きものを　萬葉集五貧窮問答中にある句。短い物を更にきる、痛い疵に鹽をつけるが如き心。

〇牀はひたつち　直に、平地。

〇わゝけたる　破れたる。

〇かゝふのたもと　ぼろ〱の袂

〇さにづらふ　少女の枕詞。

ひかれむ

玉琴の下樋にだにもかくろひてしのび〳〵に引くよしもがな

詠不二山歌

天そゝる　不自の高ねは　なまよみの　甲斐の大國　うちよする　駿河小國の　二國を　ところふたげて　かげともは　時をたがはし　そともは　日のめもみせず　いたづらに　峯のみひいで　國のため　何そはよけき　百木もる　山としいふを　をてもにも　木ひとつおひず・このもにも　木ひとつおひず　玉にし　ものも出さず　こがねなす　ものもいださず　天地の　そきへの雪を　時じくに　高くおほひて　風ふけば　ふゞきをおろし　雨ふれば　水をあふらし　をり〳〵は　火もえおとたて　石まなこ　とほくふらせて　こち〳〵の　國をなやまし　こゝばくの　人をそこなひ　たなつもの　あらすたぐひの　ゆゝしかる　とがもおほきを　そのとがを　もとめもいでず　日の本の　やまとの國の　寶とも　なれる山ぞと　むかしより　たゝへしくるは　いはむすべ　せむすべしらに　きはまりて　たふとき山ぞ　不自の高ねは

天はのぼり地はくだちて國中にのこる柱やふじの神嶺

○詠不二山歌　皆人の歎稱する不二をあしざまにいふ守部の面目。
○なまよみの　甲斐國の枕詞。

○迦具つち神　火の神。

○さりよろふ　姿の整へる。
○天の益人　青人草。

詠淺間山歌

迦具つちの　神の火の氣の　萬代の　今も遺りて　火の燃ゆる　峯はあれども　湯の出づる　山はあれども　ひとり名の　けぶりと共に　世に高き　淺間のたけは　淺からぬ　ゆゑこそありけめ　不自のねは　おもひたえても　越の嶺は　もえずなりても　時じくに　けたぬけぶりし　ちはやぶる　神代のなごり　たふときろかも

　不二のねの霞のしたになるをりも煙にたかき淺間山かも

詠筑波山歌

天の下　四方の國に　青山は　さはにあれども　瑞山は　おほくあれども　高ねには　大樹はおひず　小峽には　しみ木はたたず　枯山と　さびつゝあろを　とりよろふ　筑波高嶺は　久かたの　天の益人　あれまさる　神の御靈と　おのづから　葉山しげ山　高嶺まで　いや陰しげく　をの上まで　いやいろふかし　こゝもへば　たふとき山ぞ　つくばの山は

　不自のねの時じく雪のめうつしにみどりも飽かぬをつくばの山

稱皇國作歌

日の出づる　すめら御國は　日のいる　八十から國を　やつこと　しもにな

びけて　大王と　かみにありたたす　うべしこそ　しが國々ゆ　おのづからあきと名づけて　くさ〴〵の　みつぎはまつれ　梓ゆみ　いま行末は　劒太刀　しがこゝろから　天照らす　日の大神の　御光の　いたるかぎりは　皇御孫の　これの御國に　みやつこと　うなねつきたり　大王と　なびきまる來む　ことわりの　ことのまに〳〵　天地の　初めの時ゆ　おのづから　そのやつこらが　國らには　くにのあるじを　さだめざりけむ

山上大夫が鎭懷石のうたに追擬へてよめる

掛巻も　あやに尊く　言はまくも　いともかしこき　たらし姫　神の尊　神ながら　三つのから國　うちきため　まつろへますと　かしこくも　たたせる時に　まゆごもり　みはらにませる　うつし御子　まもりまさむと　みこころを　鎭めまさむと　大御裳に　石とりつかし　大御身に　太刀とりはかし　大御手に　弓とりもたし　武内の　宿禰あともひ　大御船　よそひたまへば　すみの吉の　あら人神の　和魂は　御身に從ひ　荒魂は　御先にたたし　奇魂は　しりへをまもり　神風の　いぶくまに〳〵　波のむた　きなかぢとらす　栲衾　新羅の國に　すむやけく　みちびきましぬ　かしこしや　神のみいつに　こきしらは　おぢをのゝきて　しゝじもの　ひざをりふせ

○鎭懷石の歌　萬葉集五にある。鎭懷石は神功皇后三韓征伐にあたりもち給へる石、事は歌に詳かである。

○うちきため　打ち鞫め、しらべたゞして。

○波のむた　波と共に。
○栲衾　しらぎの枕詞。
○すむやけく　速かに。
○こきし　三韓の王。
○しゝじもの　鹿の如く。

犬白物　いはひしづまひ　ひむがしに　出づる日さらに　西にいで　ありなれ川の　さかさまに　流れて歸り　そこの石　あめにのぼりて　星となる　その代の極み　御馬飼の　奴となりて　つかへまつる　ことはたがへじ　そむかじと　こひのむまでに　ことむけて　かへらせたまひ　世の人の　いひつぐがねと　筑紫がた　怡土の縣の　海上の　こふの原に　ときおかす　二つの石は　二つなき　神のいさをに　萬代に　くちぬためしぞ　たらし姫　神の尊の　かたみにこれを

こふの原ふたつの石はふたつなき神のいさをのしるしなるらし

教喩世人歌

世の中に　神ぞしらせる　國地は　君ぞしらせる　その神に　むすばれ出でて　その君に　まつらふものと　天地の　はじめの時ゆ　皇神の　定めおきてし　神世より　あれ繼ぎ來ける　現身の　人のことごと　うけえたる　身よりはじめて　田つ物　きものをしもの　ひとさかの　土といへども　ひともひの　水といへども　大王の　ものならずやは　めしまさば　いのちをまだぜ　仰せあらば　身もたてまつれ　こも枕　高きいやしき　かしの實の　ひとつ心に　あきつ神　あが大王と　いたゞきて　仕へまつらね　大王は

○田つ物　たなつ物、稻。
○きものをしもの　着物食物。

○天地のそこひのうらに　天地の極みの中に。

○むかしへも　いにしへもに同じ
○東人の袖ふりきてふ箱根山　萬葉集二十「足柄の御坂に立して袖ふらばいへなる妹はさやに見もかも」

萬代の君　臣達は　萬代のおみ　つぎ／＼の　つかさ／＼も　その氏を　世
世にたもつを　皇神の　道とぞまをす　天地の　そこひのうらに　かくばか
り　正しき道の　またもあらめやも

いもあらふを見てたはぶれによめる

山畑に　うゑてしいもを　土ながら　根引にひきて　處女らが　籠にとりい
れ　川の邊に　あらふをみれば　よりつどふ　芋の子どもは　そひきつる
おやをもはなれ　なれ來つる　うからもさかり　根ざしより　わろくおひし
も　ともずれに　みがきなされて　よきいもと　みななりにけり　こをみれ
ば　人の子共も　おひたちて　やゝこゝろたたば　生ふしてし　父が手離れ
はぐゝみし　母が手さかり　世の中の　人にまじりて　もまれては　その身
をみがき　すられては　その身をみがき　ともずれに　すれて後こそ　よき
人となれ

よの中の人の子どもも芋の子のともずれにして身をみがかなむ

伊勢國へまかりける時箱根山にてよめる

むかしへも　旅に出でたつ　東人の　袖ふりきてふ　箱根山　神のみ坂は
うべしこそ　越えうかる坂　たゝなづく　此の山こえば　住みなれし　國も

へだたむ　ありなれし　家もさからむ　國にはも　ひとりの女あり　家には
も　ふたりの子あり　とりすがる　そのめにさかり　とゞこほる　その子を
おきて　鹿自もの　ひとり越えゆく　この山の　めやまたぐひて　二子山
ふたりもたるを　見るがともしさ

寄歌述懐

うたさちも　おのがさち〳〵　言さちも　おのがさち〳〵　われはもよ　心
おぞくて　いにしへを　とはむとすれど　いにしへを　問ひもあへずて　八
束鬚　おなさき過ぎぬ　くやしと　こゝは思へど　うれたしと　そこはおも
へど　しかすがに　うつてもあへず　きちかへむ　よしもあらねば　おのが
身を　うらみてやみぬ　かくばかり　おぞくをぢなき　心にも　猶くつほれ
ず　いにしへを　とはむとするも　おのがさち〳〵

○うたさちもおのがさち〳〵　古事記の「山さちも己がさち〳〵海さちもおのがさち〳〵」による。その意は歌も文章もそれ〴〵得手得手がある。
○八束鬚おなさき過ぎぬ　年老いて鬚の長くたれるをいふ。
○おぞくをぢなき　愚鈍懦弱。

詠竹

木にもよらず　草にもつかず　ねをことに　ひとりたたして　木草より　た
けたちまさる　百尋や　ちひろの竹は　かぎりなき　よをふしにこめ　はて
しなき　いろを葉にみせ　すなほなる　こゝろをしめて　おはれにも　雨に
おとなひ　かなしくも　かぜになびかひ　つれ〴〵と　さびしきをりの　心

だになぐさめにけり　世の人の　あとのみおひて　ゆく牛の　おそき我が身は　ひとりたつ　竹をこゝろの　友とたのまむ

木にもよらず草にもつかずひとりたつ千ひろの竹の心高さよ

寄松祝

高砂の　うらびの松の　下陰に　おちばかかせる　翁はや　いづこの人ぞおみなはや　いつの世人ぞ　うべなく〱　吾を問はすな　われこそは　ふの長人　いもこそは　國の遠人　わか草の　夫婦等もいさや　たまはゞき　とる手もゆらに　年を經て　この高砂　住の吉の　浦びの松と　相老の　翁にあえや　おみなにあえや

玉はゞき我がよもゆらげ高砂の後の翁と人のとふまでに

大御代ほがひの歌

そらみつ　大和國は　大王の　しきますなべに　安御世の　いかし御世のたりみよと　御代はさかえて　天さかる　鄙のすみ〲　赤駒の　はらばふ田ゐも　水鳥の　すだくみぬまも　繼々に　みやこなしつゝ　國のほは　人みちたらひ　やにはには　家並みしきて　公民の　とだる新巣の　たりすのすすの　八束たるまで　夕煙　立ちさかえけり　大和の國は

○高砂の松　謠曲高砂を思ひていふ。
○翁にあえや　翁にあやからう。
○玉はゞき　萬葉集「初春の初子の今日の玉はゞき手に取るからにゆらぐ玉の緒」
○しきますなべに　知ろしめすに連れて。
○いかし御世　盛んなる御世。
○國のほ　目立ちてよき國。
○やにはには　人里。應神記「ちはの葛野を見れば百千足る家庭も見ゆ國のほも見ゆ」
○とだる新巣の　古事記に「とだる天の新巣のすゝの八つか垂るまで」とある。炊煙の盛んに立ち登る形容。

高殿にのぼりて見ませ大王の御代は今こそにぎはひにけれ

わが父故守部が、學びのいとまく〵によみ出でられし歌ども、かきつゞりおきなばさはにありなましを、世の大人たちのつらに、うたの集にものせむ心もあらざりつれば、おほかたはかきとゞめおかれず、今のこれるをえらびて梓にのせむは、をこがましく、かつはおもてぶせにおもへど、七年の魂祭にそなへまほしくて、とみにゑらせつ。もとより世におしひろめむ心もあらざれば、いなとおもふ歌も、書きおかれしまゝにしるしつ。けだしたがへるふしども多かりなむ、見む人あやしとなおもほしたまひそ。

嘉永七年四月

橘　冬　照

○内日刺　都の枕詞。
○そきへの極み　遠くの果てまでも。

○御靈のふゆ　稜威、御恩。こゝでは、徳又は器量ともいふところ。

○山菅の　枕詞。
○蜑のまてがた　馬蛤潟は馬蛤貝を捕ふる干潟、海人の急ぎて貝を捕ふることより暇なきを特にいふ語。（後撰集一伊勢の海ふきのまてがた暇なみ云々）

梅の花、色をも香をもしる人こそはしるらめ。かくはしきわが橘の故大人のみいさをは、内日刺都方人は更にもいはず、天地のそきへの極み、御國の八十國くまもおちず、大木のみ蔭をたのまぬ人しもなかりけり。むぐら生の程なき門にこもらひ給ひしかど、花の都の某、心つくしのたれ、みこし路のかれ、みちのくのくれと、年月日にけにうちつどひつゝ、種々のことどもを問ひまつり、あるは玉梓の使にことづけて消息し、あるは人してなにくれとねぎ奉るも多かりき。かかる御いたつきのほどを、己のともがらの數へ申さむは、今さらめきてなか〳〵に人わらへなるべし。さていまの大人も、その御靈のふゆをいたゞきもたせ給ひて、同じ筋にいそしみつとめませるをしばしば問ひ奉るに　ともすれば故大人の此の世に蘇らせ給ひけむと、おほゆかれぬるばかりに、何わざにも滿ちたらひゆき給へるのみかは、たとしへなくまめなる御心もて、山菅のねもごろに人々をしもさとさせ給へれば、いよゝ橘の蔭ふむ人さはになり給ふもうべなるかな。蜑のまてがたみいとまなき中に、深谷の冰厚き深き御心より、おや君のいまそかりし時、早川晩稻田かり

初の御心すさびに、よみましし長歌短歌のかなたこなたに亂れためるを書き綴らせ給ひて、櫻木にゑらせて世に匂はせなむとおもほしたたせ給へるぞ、うれしくよろこばしき限りなりける。今ゆ後、色をも香をも知る人こそはと思へば、吾嬬の御民のたみことの葉ももだしがたくて、のたまはする隨意、かしこまりもおかずかくはものしつ。おふけなきわざならずや。

嘉永七年六月　　大江戸

中村正富

橘守部歌集終

柳園家集

海野遊翁

我が師柳園の翁つねに歌は調べの整ひをもて旨とすべし、調べ整はぬは歌にあらず、漢詩に韻字平仄てふもののあるも、調べを整へむ爲なりといへり。翁明暮古きよしの歌どもをとなへてつひにそのむねをさとり、其のおもむきを究め、懇に教へさとしければ、近きわたりはいふも更なり、遠き國々よりも慕ひ來りて、教へを受くる人々年にそひ月にまさり、よしあし定めてよとおこす歌傍に積れど些かも倦む事なく、晝は訪ひ來る人々をさとし、夜は曉に到るまで筆を加へ、専ら教へ導く事にのみ心を用ゐければ、教子のうちにも其のおもむきを得たるものの是れかれ出できにけり。されば常磐木の變ることなく青柳の絲長く世にありなばと思ひしを、幾程もなく身まかりければ、自ら選び置ける歌二巻、こたび古き教子等の柳園家集と名づけ、板に物せむとするに、是れがはしがきしてよとあながちにこひければ、否みがたくて、有りつるまゝを書き付くるになむ。

嘉永三年八月二十八日　雉軒しるす

柳園家集上

春之部

立春

きのふまで雪にこもりし山松もみどりにかへる春はきにけり

早春月

山のはの松より出づる月影のさえぬや霞むはじめなるらむ

早春鶯

けさみれば池のうすらひ打ちとけて汀の梅に鶯いなく

初春河

水上の梢ほのかにかすめどもまだ色寒し春の山河

元日試筆

明けてけさ春になりぬる心にはをしみし年ぞあやしかりける

春てへばことにもあるか唯一夜あけたるのみの心なれども

元日子日

○うすらひ　薄き氷。

○をしみし年　舊年の暮れ行くををしみたりし事。

○子日　正月子の日の遊び。

むつきたつ今日しも野べに出でつゝはねの日の松のさそふなりけり

松迎春新

春のくるすなはち毎にみれど〳〵あかぬは松のみどりなりけり

子日松

春の野におふる小松のちよはみな引く人毎の手にやこもらむ

正月後の子の日戸田氏壽ぬしより松にそへて「ふたゝびのけふの子の日に引く松やちよをかさねむ例なるべき」といひおこせ給へるかへし

千代のうへにちよを重ねて引く松は八千代榮えむためしとぞみる

夕霞

夕霞いくへ高嶺をこめつらむほのかになりぬ松のむら立

月前霞

朧にはみゆるものから春のよは霞ぞ月のにほひなりける

遠山霞

きのふまで見えこし雪は跡もなし霞やいくへ比良の遠山

山路霞

のぼりきてかへりみすれば松原も檜原もなべて霞みぬるかな

○みゆるものから　見ゆるものながら。

霞中瀧

八重霞かすみこめたる曙は瀧の音さへのどけかりけり

關路霞

夜をこめて霞みにけりな箱根山あくる關路もみえわかぬまで

江上霞

住の江の松のむら立霞む日は唯おもかげの心ちこそすれ

海邊霞

沖つ波なぎたるけさは浦松もかすみて遠くなりにけるかな

霞隔遠樹

一むらの霞のうちになりにけり今朝までみえし岑の松原

鶯

山松のかすむけしきも飽かなくにいづこなるらむ鶯の聲

梅の花植ゑしもしるく鶯の聲は軒端のものとなりぬる

鶯告春

鶯の聲をしきけば梅の花さかぬ軒端も春めきにけり

曉聞鶯

曉の春のねぶりを鶯のたゞ一聲にさましつるかな
有明の月影うすき梅が枝に匂ひそめけり鶯の聲

朝鶯

朝日影匂へる窓に鶯のかげこそうつれ今や啼くらむ

雨後の鶯

春雨のなごりの露にをは濡れて柳が枝に鶯の啼く
春雨の晴れゆく庭の花櫻いろさりぬとやうぐひすの啼く

竹籬聞鶯

我が宿の竹の籬は鶯のよをへて占むるねぐらなりけり

鶯爲友

鶯は心へだてぬ友なれや聲をしきけば先づこそゑまるゝ

鶯千春友

萬春千春百春聞きぬとも飽くべきものか鶯のこゑ

鶯有慶音

鶯の長閑けき聲は春ごとに人のよはひを延ぶるなりけり

鶯馴

○曉の春のねぶり　孟浩然の詩の「春眠不覺曉處々聞啼鳥」の趣。

○尾久　をぐ、東京郊外。

○おしあげの堤　押上、東京市本所區にあり。

此の頃はきなれに馴れて鶯のひと日も庭に啼かぬ日ぞなき

山里にやどりてとく歸らむとするに鶯をききて

家づとに花は手折りもゆかましをこの曙の鶯のこゑ

尾久渡にて鶯をききて

はし鷹を尾久のわたしに舟待てばをだいが原に鶯の啼く

若菜

春の野の寒き雪まを尋ねてもつむべき物はわか菜なりけり

おしあげの堤のみ雪むらぎえぬいざ打ちむれてわかな摘みてむ

春も春若なもわかなかはらねどめづらしきかな野邊のけしきの

雪中若菜

ふる雪を寒しとだにも思はぬは若菜つむ野の心なりけり

餘寒月

よひ〳〵にさえても月のみゆるかないつか朧にかげのなるべき

湖水餘寒

さえわたる春の嵐に立ちかへりさゞ波こほるしがのから崎

殘雪似花

山の端にのこれる雪を朝な〳〵花とみするは霞なりけり

春　水

あさな〳〵山は霞に消えゆくをいつまでとけぬ谷の氷ぞ

春　雪

軒端より落つるしづくの絶えせぬは降る沫雪やあわときゆらむ

春　瀧

たきの音のまさるにしるし山のはの霞の中の雪やきゆらむ

梅　薫　風

梅の花かをるとなしにかをるかな吹くとはなしに風やふくらむ

依風知梅

春風のかをらざりせば立ちかへりかやが軒端の梅をみましや

梅花遠薫

遠かたのかすむ垣ねや梅ならむ吹きくる風の匂ひぬるかな

夕　梅

かへりみるたびに梢の暮れそひてほのかになりぬ梅の林は

夜　梅

吹く風に軒端の梅のかをる夜は散るもおもはで嬉しかりけり

毎年愛梅

いつみても見てもあかぬは梅の花年にいろかや添ひにそふらむ

梅花盛

行きかへりかへりみれども梅の花たゞ白雪のかをるなりけり

山家梅

春さむみ出でてみぬまに山里の垣ねの梅はほころびにけり

鶯は日毎にとへど山里のかきほの梅は見る人もなし

梅交松

此のごろは松の嵐もやはらぎぬ枝さしかはす梅のかをりに

春さむき心ならひに山松の木のまの梅も雪かとぞみる

梅有遲速

ときおそき庭の梅こそ嬉しけれおくれ先だち來む人のため

梅有喜色

打ちつけに嬉しくもあるか梅の花ほゝゑむみれば我もゑまれて

梅迎客

〇來る人なしや　青柳の絲といひて繰るにかけてゐる。

めづらしく日毎に人のとひくるは梅の薫や道しるべする

ものへまかりける道にて梅のちりしけるをみて

梅の花ちれる垣ねを長閑なる日かげに消えぬ雪とみしかな

柳

青柳のなびかざりせば長閑なる風の心を何にしらまし

青柳風靜

知らじかし柳のもとにこぬ人は今日吹く風の空にありとも

水邊柳

朝霞はるゝをみれば川ぞひの柳が枝に春風ぞふく

野徑柳

行く先もおとも柳のこのもかのも絲にかすむ春の野べかな

山家柳

青柳のいとはみどりになりぬれど來る人なしや春の山里

夕野遊

夕月のかげ踏む野べのつぼすみれいざ露ながらつみて歸らむ

春海

うら〳〵と春の海邊はかすめども磯こす波の音ぞかくれぬ

山居春

春くれず垣根のわらびをり〳〵にみゆる人めぞ嬉しかりける

春山田

小山田の末は霞に消えはててほのかになりぬ畔のはり原

暮山春望

初瀨山檜原わかれぬ夕ぐれも入相の鐘はかすまざりけり

野坂里春

浦風のなぐるもしるくあし北の野坂の里はかすみこめけり

春鳥

夕がらす霞のうちになりにけり三つ四つふたつ行くとみしまに

くれずまた雨にやならむ夕霞かすむ梢にはとの聲する

春夕

夕烏かへる翅やしめるらむ小さめそほ降るはるの山ばた

夕烏さわぐにしるし一村の霞のうちやはやしなるらむ

春月

餘りにも朧に月のみゆるかなかすみ吹きとけ岑の松風
春の月かすみて山は見えねども出づるや松のあたりなるらむ

霞中月

八重霞かすみてくるゝ山のはに匂ひ出でたる春の夜の月
八重霞一重は晴れよ春の夜のおぼろは月のならひなりとも

深夜春月

花は花柳は柳みゆれどもふけておぼろに月のなりぬる

山家春月

山里の庭の松風をさまりて朧になりぬ岑の月影
山里の松のこのまの夕月夜見るく かげの霞みぬるかな

夕春雨

昔もせでふる春雨を此のゆふべ軒の葱の露に見るかな
山畑の麥の青葉もうちしめりゆふべ長閑けき春の雨かな

雨降る日山里にまかりて

うちかすみそぼふる雨の寂しきにきゞす啼くなり春の山里

花

○夕春雨　情調共におだやかなる遊翁の面目があらはれてゐる。

○なげき 歎きと木とをかけて言ふ。

櫻故身を山賤になしはてて春はあらしのなげきをぞこる

よしの山花の梢のかさなりて八重たつ雲とみゆるなりけり

山櫻さき初めてこそ白雲に立ちまさりぬる色はみえけれ

かはらじな知るもしらぬも木のもとに花みるほどの心ばかりは

待花

打ちしめりふる春雨のうれしきは花まつ頃の心なりけり

山のはのかすみそめにし朝よりいつかと花をいはぬ日ぞなき

尋花

かへりみるふもとは遠くなりぬれど一樹も花のかげぞ過ぎこぬ

麓にてそれかとみしや雲ならむ峯にも花はにほはざりけり

栽花

何にわれ野山の花をうつし植ゑて風ふく毎に物おもふらむ

盛花

うき立たぬ人の心やなからまし山路の櫻雲とみるより

山のはの松をのこしてむらくにつもれる雲や櫻なるらむ

花盛開

ふもとまでおりゐる雲を花ぞとは吹きくる風にしられぬるかな

舟中見花

舟人よやよ船いそげ川上の堤のさくら風にちるなり

終日見花

行きかへり同じ所にきたるかないざこの花のかげにくらさむ

山がらすねぐらあらそふ頃までもかへさわすれて花を見しかな

花下送日

年毎に日毎にかげになれ〳〵てくらす心は花ぞしるらむ

夢見花

覺めてだに夢のこゝちのせられぬは今手折りつる櫻なりけり

家づとに折りてかへると思ひしは夢の山路のさくらなりけり

思家花

玉鉾の道行くほども風吹けば家なる花をおもひこそやれ

花爲春友

年毎に花も友とや思ふらむ陰にくらさぬ春しなければ

毎年愛花

○外山　とやま、奧山に對して端なる山をいふ。

年毎にくる春毎に山べ行き野行き里行き花にくらして

風靜花芳

花の枝もうごかぬほどの春風を先づ知らするは薫なりけり

依花忘老

年毎に春は老をも忘れけり二月彌生花にあそびて

月前花

立ちよれば花のあたりはさやけきをいかで朧に月のみゆらむ

をのうへに出ではなれたる月みれば雲は外山の櫻なりけり

花隔月

花の上にとく顯はれよ木のまより光もりくる山の端の月

春の夜の月をへだつる白雲は尾上にさける櫻なりけり

山のはの花の雲まをもりかねて朧にかすむ春の夜の月

山家花

櫻花さけるをみれば山賤のあばらまがきもたゞならぬかな

社頭櫻

一むらの杉のおくなる古社神さびけりな花のけしきに

さゝら波　さゞ波。

池上花

池水の底につもれる白雪は汀の花のうつるなりけり

池水にうつろふ花をさゝら波立ちくるたびに散るかとぞ見る

名所花

すみだ川汀に舟をのりすてて今日も堤の花にくらしつ

夕花

今はとてたれか山路をくだるべき此の夕暮の花を見捨てて

山中夕花

くだるべき麓の道は遠けれど夕の花の陰ぞ立ちうき

霞中花

さだかには見えぬものから山の端のかすみぞ花の匂ひなりける

此の朝け尾上は霞こめたれどたえ〴〵花の色は見えけり

花似雲

山高み夕ゐる雲の白雲の上なる雲や櫻なるらむ

花雲

日にそへて花や盛りになりぬらむ立ちこそまされ峯の白雲

花色

雲と見え雪とまがへど雲ならず雪にもあらぬ花の色かな

花宴

菅の根の永き春日をはる日とも思はでみるは櫻なりけり

花爲作會媒

年々に見る花なれどいとゞしくあはれにも有るかけふの夕は

打ちむれてけふとはれむと思ひきや花咲く春はこれぞうれしき

花有喜色

見る人の誰も忍まぬはなかりけり嬉しき色や花に籠れる

上野の櫻やゝ色づきぬとききて

花さかばひさごたづさへ不忍の池の上のに飲みて遊ばむ

三月ばかり櫻に雪の降りかゝりけるを

思ひきや櫻が枝に雪ふりてまがひし花をうつむべしとは

傳通院の櫻を見て

くる人のたれあふぎ見ておどろかぬ此の大櫻たぐひなけれ ば

惜花

〔菅の根の〕ながきの枕詞。

〔傳通院〕東京市小石川區にある名刹。

吹く風にみだるゝ花をみる時は心もみには添はぬなりけり

花欲散

ちりぬべき櫻が枝に風ふけば惜しむ心ぞ先づはみだるゝ

惜花不拂庭

けふよりは拂はじ庭におりたたじ苔路もみえず花のちれれば

落花

昨日まで雲とみえしを山櫻木陰の雪とけふはなりぬる

櫻花昨日はちるもみざりしを苔路かつ〴〵雪になりぬる

故鄕落花

故鄕のあさぢが庭の櫻花ちるを惜しみにくる人もなし

本隆尼君の御もとよりみそのの花の枝にそへて「君にこそ見せまほしけれ櫻花むぐらの宿の咲きの盛りを」といひおこせ給へるかへし

櫻花咲きの盛りのおもかげも此の一枝にうかびぬるかな

彌生ばかり松平忠寶ぬしのもとにまかりて花みける折「菅のねの長き春日を諸ともに花みて遊ぶけふのたのしさ」といひ出でたまひけるかへし

此の花のかげばかりなる陰はあらじいざ此のかげに見つゝくらさむ

弥生末つかた嵐いとはげしかりければ花やいかになどおもひて

さらぬだにうつろひがたの花の枝にあな心なのけふの嵐や

歸　鴈

一とせは花にをとまれ歸る鴈あはれ知らぬになかもこそすれ

歸鴈知春

とゞまらぬ心もあはれ歸る鴈かすむをおのが時と定めて

月前歸鴈

打ちむれていそぐをみれば鴈金は朧月夜もおもはざりけり

雲間歸鴈

山のはに棚引きわたる白雲のあなたに成りぬ歸るかりがね

霞中歸鴈

立ちわたる霞のうちをゆく鴈は聲ばかりこそ人にしらるれ

山路歸鴈

もろともに越ゆとみてしを歸る鴈岑よりをちに聲のなりぬる

水郷歸鴈

玉島や霞のみをに影消えて川上遠くかへるかりがね

○うつろひがたの　うつろひかけてゐる。

羇中歸鴈

打ちむれてかへるをみれば鴈金も我が故郷へいそぐなりけり

雲雀

はるかにも揚りぬるかな夕ひばりかの山本の松をはなれて

野雲雀

夕ひばり野末はるかに落ちぞくる聲の限りを空につくして

あふぎみぬ人こそなけれ春の野はあがるひばりに心とられて

かへりみる跡の芝生に入りにけり今あがりぬる野べの雲雀は

雉子

きゞすなく聲ばかりして山畑の末は霞にわかれざりけり

立ちこむる岡べの松の陰なれや霞のうちにきゞす啼くなり

山路雉子

岩つゝじ匂ふ山路をけさくれば谷に響きてきゞす啼くなり

夜半呼子鳥

晝だにもとふ人まれの宿なるをたれ呼子鳥月に啼くらむ

夕蛙

夕霞かすみてくるゝ山本の細谷川にかはづ啼くなり

苗代蛙

苗代の水や心にかなふらむくるゝ田の面に蛙なくなり

雨中蛙

春雨に板井の水やぬるむらむ蛙の聲のよはに聞ゆる

雨中菫

春雨のそほふる庭をけさみれば垣ねの菫花咲きにけり

躑躅

はる〴〵と匂ふつゝじをめにかけて思はず過ぐる岡のまつ原

菜花

山がつが門田のをちの鈴菜畑はりの木の間に今盛りなり

牡丹の花にそへて黒川盛之のおこせたる「君がため手折りておくるけつか草はつかとのみはかぎらざらなむ」といへるかへし

我が爲にをれる心の深み草さればやあかぬ色も匂ひも

蝶

すゞなばた花咲きしより明けくれにむれくる蝶の數ぞしられぬ

○板井　板をもて圍ひたる井戸。

○深み草　牡丹の古名。

山吹

谷川の岩瀬の水のさやかにもうつりて匂ふ山吹の花

我が宿の八重山吹の盛りにはひとへにとはむ人ぞまたるゝ

盛りにもなりにけるかな我が宿の一重山吹一日みぬまに

松上藤

松が枝にさけるを見れば藤波もちよに心をかくるなりけり

常磐なる色をたよりに藤の花千世松が枝に匂ひ初めけむ

池上藤

さゝら波をりにをれども池水の庭にやつれぬ藤波のはな

惜春

花は早ねに歸りにき鶯よなれだにのこれ春のかたみに

暮春月

今幾日朧に影のかすむらむ彌生の末の有明の月

暮春花

八重一重ひとへは散りて葉隱れの八重に櫻も移ろひにけり

暮春落花

をしめども枝にとまらで散る花の殘りなくこそ春も成りぬれ

やよひの末にほとゝぎすを聞きて

めづらしな彌生の空の郭公まだ初音とも思ひかけぬを

暮春聞郭公

くれて行く春やうらみむほとゝぎす啼く一聲にかはるこゝろを

○山の端の歌　首夏の情趣掬することができる。

夏之部

首夏

山の端のわか葉にかゝる白雲の色さへ夏に成りにけるかな

鶯の若葉隱れに啼くなるは過ぎにし春や今も戀しき

をしみつる春も忘れて郭公まつ心にぞ今朝は成りぬる

なかねども若葉の山は郭公今やとおもふけしきなるかな

卯月朔日郭公を聞きて

夏きぬと聞きしばかりのけふなれば郭公とも思はざりしを

首夏郭公

珍らしとたれきかざらむ郭公若葉の山の今の一聲

更衣

今も猶春ぞ戀しき夏衣かふるにかはる心ならねば

尋餘花

分けきてもきても若葉の外ぞなきとはばや暖に残る花はと

未忘春花

面影の花をも風よさそはなむちらぬ限りは春ぞ戀しき

新樹

山松の色のみどりに色わきて薄みどりにもしげる頃かな

新樹成陰

打ちむれて花に遊びし山路とも若葉にわかぬ頃はきにけり
見し花の陰ともえこそおもほえねそよぐ若葉に面がはりして

新樹月涼

よるなれば若葉の色はわかねども梢もりくる月の涼しさ
打ちそよぐ庭のわかばをもる月の涼しくも有るかくるゝ夜毎に

新樹風

打ちそよぎそよぐけしきはしるけれど若葉は風の音ぞ聞えぬ

〇冬籠らざる　冬を經なかつた。

朝な〳〵わか葉の梢どもみやるもいとたのし

葉がくれにやゝみのり行く梅のみの色も緑にみゆる頃かな

垣卯花

夕闇のよ頃を月になすものは八重うの花の垣ねなりけり

閑庭卯花

うの花の雪にかくるゝ我が庵は冬籠らざるこゝちこそすれ

水邊卯花

うの花の陰より出づるましみづは雪のしづくのこゝちこそすれ

うの花の咲き初めしより玉川は汀ばかりぞ月夜なりける

郭公

郭公啼きもやすると此の頃は山邊のみこそおもひやらるれ

聞きつやとあひてかたれば郭公この曙と人もいふなり

けふこそはまことの初音郭公まだ聞きつとも人のいはねば

あふ人も人もかたりぬ郭公去年も此の頃はつね聞きつと

郭公啼きて過ぎにし山のはは跡の青葉の色もなつかし

有明の月の行方の村雲にきほひても鳴くほとゝぎすかな

二聲ときかずば告げじほとゝぎすいつはり人になりもこそすれ

ほとゝぎす啼きつと人のいふなれど老の耳にはおよばざりけり

卯月ばかり甲斐の國人横手保民とぶらひきたりければよめる

めづらしき君にとはれて郭公啼くねもけふはおもはざりけり

待郭公

月影のしらむを見れば郭公今宵もきかで明けぬべきかな

雨そゝぐ夕の空のうき雲に一聲なのれ山ほとゝぎす

初郭公

嬉しきはこよひの初音ほとゝぎす待ちもあへぬる啼くとおもへば

人々とともにものへまかる道にて郭公の啼きけるをたれもきかずといへりければ

かたへなる人もきかねば郭公こは我が爲のはつねなりけり

聞郭公

しのばずの池のさゞ波立ちかへりなくや上野の山ほとゝぎす

黒川盛之青山の里に住みける頃せうそこのついでに

白雲の上野の岡のほとゝぎすほのかなる音を聞かぬ日もなし

○青山の里　東京市赤坂區青山。

水枝さす若葉の色の青山はしげくやなかむ山ほとゝぎす

夕郭公

今宵はと待つをしりてや郭公またくれあへぬ空に鳴くらむ

寐覺郭公

ねざめして夜毎にきけば郭公老を嬉しと思ひなりぬる

郭公驚夢

珍らしと聞く一聲にほとゝぎす夢の名殘も忘れぬるかな

月前郭公

月影のとにさやかに成りにけり山時鳥聲もをしまで

雲外郭公

郭公聲のほのかに聞ゆるはたゞよふ雲のいづこ成るらむ

山家郭公

山にても山郭公つれなきを都の人や待ちにまつらむ

都にて雲ゐに聞きし時鳥今は軒ばになかぬ日ぞなき

雲とづる軒ばの山の時鳥聲ばかりこそけさはきこゆれ

浦郭公

船中郭公

浦わこぐあまもきくらむ時鳥磯山松の陰に啼くなり

名所郭公

過ぎぬるか淀のわたりの郭公舟さしとめてかへりみるまに

社頭郭公

みめぐりの堤をくれば時鳥いなりの森の上に啼くなり

千早振神田のもりに夕かけて山時鳥啼かぬ日ぞなき

橘薫風

吹く風に花橘のかをるよは槇の板戸もさされざりけり

雨中盧橘

風ふけば雨の雫の落ちそひてかをるも涼し軒の立花

雨ふれば庭の橘打ちしめり落つるしづくも香にや匂はむ

樗

あふち原薄むらさきに成りにけり道行く人やかへりみるらむ

夕早苗

植ゑさして賤や今はとかへるらむ澤田の面に月はうつりぬ

○みめぐりの堤　隅田河畔にある

岡邊早苗

岡ごえの松のかげより見渡せばくるゝ田の面に早苗とるなり

五月雨雲

山のはにかさなる雲の晴れせぬやさみだれ初むるはじめなるらむ

晴れゆけどゆけど雲こそ殘りけれいく重の雲ぞ五月雨の雲

五月雨の雲うすらぎて珍らしく遠山の端のけさはみえぬる

水鷄

くひな啼く聲ぞほのかに聞ゆなるたそがれ時の雨の晴れまに

水鷄何方

水鷄啼くかたこそわかね我が門か鄰か又はまたのとなりか

月前水鷄

村雨の晴れ行く庭の篠原に月ほのめきてくひな啼くなり

寐覺水鷄

ねざめしていふこと聞けば我が庵のうしろの澤にくひな啼くなり

山家水鷄

おろかにも來てはくひなのはかるかなたれ山里をよはに問ふべき

船中水鷄

近よらばくひなや又もおどろかむやよ船よすな河せこぎゆけ

漕ぎよする舟の音にやおどろきし過ぐれば跡にくひな啼くなり

照　射

螢とや星とやいはむ夏山の木のまにみゆる夜半のともしは

螢

よるなればそことわかねど螢とぶあたりや水の行方なるらむ

足引の山澤水をよるみればたゞ一むらの螢なりけり

窗前蟬

風わたる澤邊のまこも打ちなびき螢になりぬ窗のあたりは

窗近き庭の淸水や尋ぬらむ音するかたに螢飛ぶなり

軒にはふむぐらの露やとめくらむをり〳〵みゆる窗の螢は

橋邊螢

我が廬の前の小河の岩橋をやみに渡るは螢なりけり

水上螢

うき草にすがる螢のながるゝをしばし影かとおもひけるかな

○照射　夏秋の候、山中に火串をおき、鹿のこれを怪しみ見る時、火影の其の眼に映ずるをねらうて射殺すること。

○とめくらむ　尋ね來るであらう

夕やみのあやなき夜のまし水も螢はしりて尋ねきにけり

水清き山下澤の眞菅原くれて螢となりにけるかな

河のせはまだくれぬとも見えなくにあしべを出でて螢飛ぶなり

雨後蟬

むらさめの晴れにし跡は啼く蟬の聲さへ秋のこゝちこそすれ

風前夏草

風吹けば涼しき庭の夏草をいぶせきものと思ひけるかな

夏草藏水

夏草のしげみが下を行く水は音ばかりこそかくれざりけれ

瞿麥露

うすく濃く色こと〴〵に置く露の光も涼しなでしこの花

籬瞿麥

なつかしと誰かみざらむなでしこの花咲き初むる庭のま垣を

あらき風庭の籬やへだつらむ盛り久しきなでしこのはな

蓮

雨すぐる池の蓮葉打ちなびきかをるも涼し池のはちす葉

池蓮

蓮の花このもかのもにみえ初めて見る〳〵しらむ池の面かな

池の面は舟をうかべむかたぞなきなべて蓮の花し匂へば

所せき池の蓮の葉がくれによるさゞ波もかをるころかな

疎屋夕顔

賤がやとおもひおとさむけしきかは軒端にかゝる夕貌のはな

夕立

たへざりしけふの暑さを夕立のたゞ一雨にながしつるかな

夕立の過ぎにし跡は六月の空ともえこそおぼえざりけれ

夕立過

夕立の空さりげなく雨晴れて外山の松に入日さすなり

夕立雲

あらましき風にきほひて夕立の雲立ちおほひ雨はおちきぬ

河夕立

鈴鹿河八十瀬けぶりて夕立の雨のはげしくなりもゆくかな

路夕立

○あらましき　荒々しい。

夕立の雨けぶりくる松原はたのみし陰もかひなかりけり

くぬぎ原風になびきて荒川の堤路けぶる夕立の雨

行路夕立

いそぐともたれかは濡れぬ夕立の雨こぼれくるのちの松原

夏夕

いつしかと待ちし夕になりぬれどまだ堪へがたし月に涼まむ

夏浦夕

浦波に入日の影も消えはてて涼しくなりぬ磯の松原

よそめにも涼しかりけり海人の住む浦の磯やの夏の夕は

夏月涼

夏のよを涼しきものとおほゆるは空行く月の光なりけり

樹陰夏月

吹く風になびく水枝のひまもりて折々てらす月の涼しさ

江夏月

みしま江や夏のよ頃も月すめば蘆の青葉に霜は置きけり

浦夏月

あし火たく煙もみえて難波江や蒲わの月の影の涼しさ

更け行けばすまの浦波音すみて涼しくも有るか月のけしきの

夏月如秋

山の端を出で離れたる月みれば今宵も夏のこゝちこそせね

此の頃の更くる夜毎の月かけはたゞに秋とぞいふべかりける

夏　風

梢みなさやぎ立ちぬる音きけば吹きこぬ風も涼しかりけり

夏　山

嵐吹く松の木陰を行く程は秋の山路を過ぐるなりけり

夏　鳥

夕立の雨晴れそめて燕とぶ大路涼しくなりにけるかな

○夕立の雨晴れそめての歌　題材の新しい歌である。

六月(みなづき)の照る日の影や堪へざらむ木がくれてのみ雀なくなり

夏神祇

めづらしと神も聞くらむ子規やまだの原のすぎがてに啼く

氷　室

わけいれば袖こそさゆれ氷室山ふもとや夏のさかひなるらむ

〇手もひでなくに　手もひたさないのに。

〇いよす　伊豫國露峯に生ずる篠であんだ簾。

對泉忘夏

音のみも涼しき庭の眞清水を手に掬びてもくらしつるかな

清水ゆく岩まは夏の外なれや手もひでなくに先づぞ涼しき

おり立ちていさ結びてむ松がねをひたす泉の音の涼しさ

岩はしるいづみがもとの涼しさよ夏もながるゝこゝちのみして

深山泉

おく山の岩ねの清水涼しきは夏の外をや流れきぬらむ

松下泉

いざこゝに涼みくらさむ松もよし下かげもよし清水さへよし

納涼

思ふどち月みる夏のむしろには吹きくる風にしく物ぞなき

はしるすといよすかゝぐる袖の上におろしもくるか軒の松風

夕納涼

木々の葉に涼しとみつる夕風のやがて袂にそよぎぬるかな

家々納涼

みな月のあつき盛りは家毎にくるゝ夜毎に風や待つらむ

涼みせぬ宿はあらじなたかどのに門にはしるにこゝろ〳〵に

鄰にも今やいよすをかゝぐらむ涼しくなりぬ軒のまつ風

船納涼

涼しさのいづくはあれど打ちなびく柳のもとに船はよせてむ

こぎくれば夏はよそにぞ成りにける涼しき風に秋を覺えて

隅田川舟こそつどへこゝやさば涼しきせゞのかぎり成るらむ

夏衣かさねまほしく思ふまで河せこぎくる舟の涼しさ

樹陰納涼

響きくる松の嵐の涼しさよ吹きおちぬまも聲のたえねば

山陰流泉

家づとになさまほしきは夏しらぬ此の山陰の清水なりけり

晩風如秋

をぎの葉のそよぎ立ちぬる夕暮は俄に秋のこゝちこそすれ

草花先秋

秋たたば立たばと待ちし藤ばかま夏のうちよりほころびにけり

六月立秋

○こゝやさば　此の處がそれならば。

六月のてる日のかげはそれながら秋とおほゆる風の音かな

秋之部

立秋

萩が枝をけさそよがして吹く風の色にも秋のしられぬるかな

山家秋來

山里のむぐらにとづる我が門をいかに尋ねて秋はきぬらむ

風告秋

草にふれ木にふれわたる風の音けさはた悲し秋やきぬらむ

初秋風

いづくにも吹きはすらめど我が庵のよもぎが上のあきの初風

初秋憶月

秋はきぬしなとの神よまひはせむ月の盛りに雲なあらせそ

浦早秋

もしほくむすまの浦人けさよりや波の色にも秋をしるらむ

秋風

○しなとの神　風の神。
○まひはせむ　禮代として物を奉りませう。萬葉六「天にます月讀壯子まひはせむ今夜の長さ五百夜繼ぎこそ」

秋風の軒ばを過ぐる夕ぐれはつたのうごくも寂しかりけり

などてかく袖にふるゝも秋風はみにしむばかり寂しかるらむ

七夕

けふごとにかきて手向くる言のははさゝぐる竹のよゝに盡きせじ

露如珠

秋の野の花におきゐる朝露は色くさ〳〵の玉とこそみれ

秋夕露

ゆふべ〳〵草葉の露の寒けきや霜となるべき初めなるらむ

秋夕思

露おもる庭のすゝきをみても先づ秋の夕は物ぞかなしき

浦秋夕

浦風になびくしほやの煙さへめの打ちつけに秋は寂しな

荻風

此の朝々萩の上葉を吹く風にとまらぬ露の音の寂しさ

夕荻

きく人の袂に露ぞこぼれける荻の葉そよぐ秋の夕は

荻のはの音にねざむる曉は袂に露のこぼれぬるかな

故郷荻

來てみればおひ廣ごりぬ是れやさば有りし昔の軒の下荻

秋のかぜ荻をふく

吹くとしもわかぬばかりの秋風にかごとがましき荻の音かな

萩

おしなべて野べは盛りと見えながら散らぬかげなき秋萩の花

月前萩

よひのまにねたるをみれば秋萩は月のあはれも知らぬなりけり

萩花藏水

秋萩の花の下行くさゞれ水ありと聞えてみえぬ頃かな

鴈

きりこめて秋の山べはみえねどもおちくる鴈の聲ぞかくれぬ

初鴈

今朝來つる鴈の涙や是れならむ蓬が露の色の寒けさ

○をしね　稻。

ふもと田のをしね色づく秋風に峯打ち越えて鴈はきにけり

山のはの霧に匂へる夕月のほのかにみえて鴈はきにけり

曉初鴈

鴈のくる雲路やいかに寒からむ有明の月の影ぞみにしむ

朝聞鴈

朝まだき峯打ちこえてくる鴈の聲やゝ近くなりにけるかな

月前鴈

打ちなびき月にかゝれる横雲の晴れぬとみれば鴈ぞ啼くなる

山の端に月は出で來ぬ鴈は來ぬ思ふこと皆かなふよはかな

久方の月によこぎる初鴈は隈とみゆるも嬉しかりけり

湖上鴈

鴈がねの聲をつらねてきたるかな秋風寒きまのの入江に

打ちわたすしがの唐崎霧晴れて松より上に鴈は來にけり

鹿聲遙

秋山を夕越えくれば霧ふかき谷のあなたにをじか啼くなり

夕鹿

夕くれば秋のあはれやたへざらむ峯にも尾にも鹿ぞ啼くなる

月夜聞鹿

秋のよの月にをじかの聲きけば物おもはでも涙おちけり

風前鹿

吹きまよふ嵐やよそにさそふらむ遙かになりぬさをしかの聲

毎夜聞鹿

鹿の聲夜毎に遠くなりぬるは山亦山の妻やこふらむ

鹿聲驚夢

さをしかの妻とふ聲におどろきし夢の名殘は涙なりけり

山家聞鹿

我が庵のうしろの山になりにけり谷に聞きてしさをしかの聲

野分

村雲の薄きかたのみ星みえてあれ恐ろしの夜はの野分や

蟲

散りしける庭の柳のはがくれに鳴くこほろぎの聲の寒けさ

鈴蟲の聲のまに／＼とめゆかばかへさの道や遠くなりなむ

枕邊蟲

寐覺めてもさめてもおなじ蟲のねをいくよ枕の下に聞くらむ

野外虫

武藏野の尾花を月の出つるよりさやかに蟲の聲もなりぬる

置く露のともにしげくぞ成りにけるくれ行くのべの蟲の聲々

野をひろみ草むら每に置く露の數よりしげき蟲の聲かな

叢近聞蟲

蓬生によるなく蟲の聲きけば荒れたる庭ぞ秋は嬉しき

水邊蟲

むしの聲一夜々々にかれ行くは池の汀や夜寒なるらむ

蟲聲非一

秋の野の花のいろ〳〵くれ果てて顯はれ初めつむしの聲々

夜むしの聲をききて

秋風の寒くうち吹く宵每に鳴くこほろぎの聲のあはれさ

駒迎

霧の中にいなゝく聲の聞ゆるは關路近くや駒のきぬらむ

○駒迎　古八月諸國より馬を京へ牽き參りて獻ずるを逢坂まで出で迎へたる公事。

月

月清み庭の眞砂にこほろぎの出でゐて鳴くも見ゆるよはかな

いつのまに月の雲ゐになりぬらむ今か岡べの松は出でしを

長月の有明の月におきゐるは草葉の露と我となりけり

夕出月

くれもあへず外山の空ぞしらみける今やこのまに月は出づらむ

深夜月

見る人もあらじと思ふさよ中に月は光をつくすなりけり

山月

たゞよひし雲は麓にしづまりて獨りさやけき山のはのつき

月出山

山のはを出ではなれたる月みれば今宵も晝にかはらざりけり

山路月

越え果ててかへりみすれば秋山のもみぢのかげに月は出でぬる

故郷月

荒れはてて年ふる里の草村に露をやどりと月は澄みけり

是れや此の昔すみにし庵の跡かなしや鄰月にとはばや
蟲の聲つゆのみしげき故郷の淺ぢが庭も月はすみけり

閑居月

我のみとおもひ入りにし蓬生の露をたよりに月も澄みけり

松間月

我が宿の軒端の松のこのまより今こそみゆれ山のはの月
月は今あらはれそめつ我が庵の軒に横たふ松のこのまに

更科月

よそにてはよも更科と思ひしを田毎に月のやどりぬるかな

月照瀧水

山分けて落ちくる瀧の音さへに澄みこそまされ月のよごろは

月光似氷

和田の原遙かにてらす月みれば冰りながらに波ぞたちける

江月

ほの〴〵と沖ゆく舟も顯はれて月すみの江の名こそしるけれ

湖上月

すはの海神や忘れて渡るらむ氷とみゆる秋のよの月

會友見月

月故のよはの圓ゐに醉ひふして更くるをしらぬ人もありけり

あくるまで今夜は月よ照らさなむくもらば歸る人もこそあれ

月下言志

いつのまに老と我がみはなりぬらむかはらぬ月の影をみる〳〵

世々の人見つゝめでけむ言のはも心にうかぶ月のよはかな

月前風

松にふくよはの秋風みにしみてさやかになりぬ峯の月かげ

月前雲

久方の月のあたりの浮雲は人の心にかゝるなりけり

月前竹風

風ふけばたえず雨ふる竹なれど葉分けの月の影ぞくもらぬ

吹く風にそよぐ軒ばの呉竹は月よにそゝぐ時雨なりけり

月前鷄

窗のとの月にしらむを明けぬとや八聲の鳥のよはに啼くらむ

○月よ照らさなむ　なむは願望の意である。

○雨ふる竹　竹に風のあたる音を雨ふることいひなしたのである。

○八聲の鳥　鷄。

月はまだあくるけしきも見えなくにいつと定めてとりは啼くらむ

月前幽情

さびしとやねやの枕の思ふらむ月におきゐてぬる夜なければ

月似昔

みる人は年へて老となりぬるを月ぞ昔の秋にかはらぬ

惜月

山のはにかたぶく見ればおきゐつゝをしむも月は知らぬなりけり

秋深月明

長月の有明月夜影すみてさむくも秋はなりにけるかな

山霧

八重こむる山路の霧の末晴れてあらはれそむる松の村だち

河上霧

絶え〴〵に河瀬の霧やなりぬらむこのもかのもに舟のみゆるは

秋雲

大空にたゞよふ秋の白雲のなどみにしみて寂しかるらむ

秋山路

○はひりの柳　はひり口の柳。

秋山のしめぢたづぬとこしものを紅葉の陰にけふもくれぬる

秋里

此の頃はしぐれぬ日こそなかりけれ秋更けわたる秋しのの里

秋木

秋はこれいかなる時ぞ松のはの常磐の色も寂しかりけり

山家秋

秋ふかみ時雨わたりて山里ははひりの柳ちらぬ日もなし

眞柴こる賤も道にやまよふらむ夕霧たちぬ秋の山里

田家秋

はひりにも軒にも稻を刈りあげて年豐かにもみゆる秋かな

小山田の門田の稻もかりあげつくろより通ふ道もなきまで

秋鐘

何となく寂しくもあるか山のはの紅葉にひゞく入相のかね

秋眺望

入日さすかやが軒ばの山柿の色さへさびし秋のゆふべは

秋遠情

みちのくのえぞがちしまの果てまでも今宵の月はくもりあらじな

かきくらし時雨るゝ毎に秋霧の立田の山を思ひこそやれ

秋日易暮

我が庵の蔦の紅葉に夕日影さすほどもなく暮れにけるかな

秋日時雨

うき雲の時雨れてはるゝ度毎にながめもやるか秋の山べを

折にふれたる

秋のくる則ちごとにかはらぬは寂しとおもふ心なりけり

おもふどちかたるとすれど寂しきは秋の夕の心なりけり

きりぐ〜す鳴く聲さむくなりにけり淺茅が上に霜やおくらむ

月よには露のみ見えて萩が花盛りもえこそわかれざりけれ

擣衣

立ちこむる霧のあなたに聞ゆるは山本なれや衣うつ聲

聞擣衣

衣うつ音にぞしるき秋しのや外山の里も夜寒なるらむ

○則ちごとに　その時ごとに。

よもすがら月におきゐて衣うつ曉は心の有りげなるかな

終夜擣衣

寐覺めてもさめても音の聞ゆるはよすがら曉や衣打つらむ

連夜擣衣

里毎によ毎に衣打つなるはよ寒や同じ心なるらむ

擣衣到曉

ほの〴〵と有明の月のしらむまでたが里なれや衣うつ聲

しげかりし宵のきぬたのたえ〴〵に曉かけてうつはたが里

海邊擣衣

衣うつきぬたの音の浦波にひゞくも寒し秋のよな〳〵

名所擣衣

昨日今日秋風寒くなりぬとやあすかの里に衣うつらむ

ちはやぶるうぢの川風さよ更けて水上遠く衣うつなり

いにしへのこゝや都ときてみれば衣うつなりならの里人

故鄕擣衣

衣うつ音をしきけば故郷の荒れたる宿も人は住みけり

たれすみて衣うつらむ故郷の淺ぢが原の霧のまがきに

菊

いづれとも思ひぞわかぬ菊の花いろ〱ごとに心うつりて

菊の花匂へるそのに飛ぶ蝶は香を尋ねてやしたひきぬらむ

折菊

いかにせむ香をなつかしみ菊の花たをらば枝の露やこぼれむ

翫菊

菊の花醉ひのすさびにいざさらば一枝ゆるせ折りてかざさむ

露ながらいざ一枝とおもへどもこぼれやせまし白菊の花

籬菊如雪

白菊のさける籬のあやしきは秋より雪のつもるなりけり

山家菊

菊の花盛りになれど山里は都を遠み人のとひこぬ

河邊菊

底澄みてながるゝ秋の山川にうつるも清き白菊のはな

○千入　色濃く染められたるをいふ。

紅葉

おしなべて千入になりぬ秋山はこえ行く人の袖もてるまで

思ふどちむれてきつれど秋山の紅葉の陰は寂しかりけり

都人かざして歸るもみぢ葉に秋の山べを思ひこそやれ

青き枝うすき梢もなかりけり今日や紅葉の盛りなるらむ

尋紅葉

時雨れゆく雲にかくれて見えねどもかの山のはや紅葉ぢ初めけむ

林葉初紅

かのみゆる一村ばやし色づきぬよはの時雨やいかにそめけむ

紅葉色猶淺

かきくらし時雨るとすれど來てみればまだ色薄し岑の紅葉ば

紅葉深

もずの鳴く片山林日にそへて色のふかくもなりにけるかな

折紅葉

いざけふは折りてかざさむもみぢ葉の千入をまたば散りもこそすれ

庭紅葉

我が宿の庭の垣ねのはじ紅葉色こくなりぬひと日〳〵に

池邊紅葉

かきくらし時雨るゝ度に池水の影のもみぢも色やそふらむ

紅葉映水

谷川の岩もとかへで染めしより下行く水も千入なりけり

山路紅葉

いざさらば山路くだらむ夕霧に紅葉は今ぞかくれ果てたる

松杉の色のみもとの緑にてもみぢにけりな秋の山路は

露染秋山

秋山の梢かつ〴〵色づくは時雨れぬ先に露やそめけむ

松間紅葉

わけ入りてかへりみすれば山松のたえまはなべて紅葉なりけり

雨後紅葉

村しぐれ今か山路を過ぎぬらむ木々の紅葉のぬれて色こき

行路紅葉

朝霧のはるゝ山ぢを分けくればおどろくばかり紅葉しにけり

○かつ〴〵　わづかに。

旅り紅葉

いつ行きて都の人に語らまし紅葉のかげに一夜ねにきと

山家秋深

山里は冬に先だつ木枯に庭のもみぢのちらぬ日ぞなき

秋ははやかぞふばかりぞ都人鹿の音ききにこむといひしを

時雨れつゝ紅葉ちりしく山里はまだきに冬のこゝちこそすれ

暮秋月

我が宿のきくの垣ねにおく霜はよな長月のはかるなりけり

暮秋露

蟲の聲いつよりかれて淺茅生におく白露の寒けかるらむ

暮秋雨

秋深みけふもいくたびしぐれけむ庭の紅葉のかわくまぞなき

暮秋鐘

ひゞきくる音も寂しな山寺の紅葉の奥の入相のかね

暮秋蟲

さまぐ\に聞えし蟲の聲々の一よく\にかるゝ頃かな

秋ふかみ葉末いろづく淺茅生のはやかれ〴〵に蟲も鳴くなり
むしの聲くるゝ夜每にかれゆくは草ばの露や霜となるらむ

暮秋里

秋ふかみ更くるよ每に寐覺して里の名しるく思ふ頃かな

九月盡

暮れはつる秋の行方はしらねども紅葉はあすに殘るべきかな

冬之部

初冬

落ちつもる木の葉の下にきり〴〵す嵐をわぶる冬はきにけり

初冬朝

木枯も音せぬけさは山のはの紅葉も秋にかはらざりけり

初冬夜

みにぞしむ峯の木枯巫えくれてあらはれ初むる星の光は

時雨

かきくらし時雨るとみればかつ晴れて外山の松に入日さすなり

山風の吹きゆくかたにさそはれていく度通るしぐれなるらむ

月前時雨

こぼれくる時雨の雨は照る月のかつらの露を風やさそへる

關路時雨

清見潟關吹きこゆる潮風にいくよ時雨の浦づたひする

獨閑時雨

時雨れくる音につけても寂しきはひとり世にふる庵なりけり

旅中時雨

けふも亦いく度ぬれぬ旅衣しぐれみ晴れみさだめなくして

十月紅葉

神無月嵐にもれてもみぢばの殘るや秋のかたみなるらむ

紅葉殘枝

木枯のいかによきたる枝ならむ一むらみゆる峯のもみぢば

夕木枯

さらでだに寒き夕を木枯のいかにせよとか吹きにふくらむ

夕落葉

○しぐれみ晴れみ　しぐれたり晴れたり。

○よきたる　避けたる。

夕嵐ちらす紅葉を惜しむまに色みえぬまで暮れにけるかな

落葉滿水

ちりつもるこの葉に水はみえねども流るゝ音はかくれざりけり

寒樹嵐

はらふべき木のはも今はなきものを何を嵐のふきに吹くらむ

寒松

朝日さす岑の松原霜消えてみどりにかへる色もさむけし

はてはては雪にやならむ松の聲昨日にけふは寒さまさりぬ

田家霜

小山田のわらやが軒のけぶれるは朝日に霜のとくるなりけり

霜夜月西

霜の上に霜をかさぬと見ゆるかな小笹が原のよはの月影

寒夜月

手にもしみ袖にもしみてわびしきは霜夜の月の光なりけり

關冬月

逢坂の關の淸水や氷るらむ杉間の月の影ぞたへうき

○霜の上に霜をかさぬ　霜夜の月のさえにさえていやしろき景致。

海冬月

千鳥啼く聲だに寒き海原に氷りて出づる冬のよの月

山水初冰

岩づたふみ山がくれのさゞれ水たえ〴〵こほる冬は來にけり

閑居冬夕

夕日影俄に消えて柴のとにあられ亂るゝ音の寒けさ

冬夜

鴈が啼く聲待ちつけて嬉しきは冬のよ頃のこゝろなりけり

冬筵

思ふどち雪みて遊ぶむしろには寒さをさけにしく物ぞなき

水鳥

堀江川舟の行ききのしげければなれても鴨のあさるなるかな

千鳥

湊江や枯れたつあしに霜降りてさむきよな〳〵ちどり啼くなり

磯山の松に吹きしく汐かぜをつばさにしめて千鳥啼くなり

遠千鳥

○寒さをさけに　避けこ酒こをかけていふ。

濱千鳥聲のはるかになりぬるは波のいくへを遠ざかりけむ
はるかにも聲のするかな浦千鳥磯山風のさむき夕に

曉天千鳥

有明の月影しらむ濱松に數あらはれてちどり啼くなり

薄暮千鳥

いさり火の影みえそめて暮れ渡る汐路はるかに千鳥啼くなり

名所千鳥

箱崎の松の葉しろく霜降りて明けゆく波にちどり啼くなり
　ちどりなくなり
さよ更けて千鳥啼くなり明石潟さとの汐風いかにさゆらむ

山路霙

柴人やましば樵りさしいそぐらむ山路かきくれみぞれ降りきぬ

鷹狩

御狩人御鷹手にすゑ急ぐまにはや夕月のかげはさしきぬ
みかりのはとだちも見えず暮れにけり今一よりと思ふそのまに

山家雪

○とだち　狩場の水草の地など鳥の集まる様にしなし置く處。

○ふりはへて　わざ〳〵。

都にて待ちよろこびし初雪は寒さをわぶる初めなりけり

船中雪

かきくらし降りくる雪に隅田川おくれし舟はみえぞわかれぬ

依雪客來

ふりはへてとへる心を初雪の淺くはいかゞ思ひなすべき

雪中鳥

田もあぜもわかぬばかりの大雪におり立ちかねて雁ぞ啼くなる

雪朝

大空のみどりにはるゝけさみればいよ〳〵寒き雪の色かな

炭竈

をの山の雪げの雲にかさなりて炭燒くけぶり立たぬ日ぞなき

向爐火

霜雪に雨に風に寒きよも忘れて向ふねやの埋火

軒端なる梅も柳もしらざらむ此の埋火のはるのこゝろは

歲暮梅

我が如く心に春やいそぐらむ軒ばの梅はほころびにけり

鶯にしらせてしがな梅の花年のうちより匂ひそめつと

歳暮市

千早振神田の市にみしめうる聲もいとなき年のくれかな

都歳暮

年くるゝけしきも殊にみゆるかなゆきかひしげき都大路は

雪中除夜

くれはつる年の今宵の行きかひに都大路は雪もつもらじ

戀部

戀

唯ひとめみしをたねにて思草いつ心にはしげりそめけむ
めにみえぬ胸の煙のかひなきは燃ゆとも人のしらぬなりけり
岩木こそつらきもうきも知らざらめあな心なの君がしわざや
まどろまば夢にも人のみえましを物思ふみはいこそねられね
こぬものと思ひ定むる夕暮もさすがに空はながめられけり
つれなしと思ひしる〳〵戀しきはあはれいかなる契りなるらむ

○みるめ　海松布と見る目とをかける。

つれなきもうきも忘れて戀しきはいかにしみぬる心なるらむ

つれもなき人の心の秋かぜにみだるゝ露は涙なりけり

あまのかる浦におふてふ何とかやそよ其のみるめ我も得まほし

いかにせむいかにかせまし難面(つれな)さをいはぬもくやしいふもかひなし

忍戀

かくばかり忍ぶとするにこぼるゝは心をしらぬ涙なりけり

不逢戀

夏草のしげき人めにことよせてかりにも今はとはずなりぬる

五月雨の雲間もりくる月影のまれにも人にあはぬころかな

不忘戀

忘れぬをわするゝ人も有るものを忘るゝ人をなぞや忘れぬ

悔戀

山の井の淺き心とみてしより涙のみこそさしぐまれけれ

疑戀

今までにたのめし事のたがはずば何うたがはむ人の心を

在所不知戀

つらしとも憂しともいはむかたぞなき住む里をだにそこと知らねば

見書增戀

なほざりにかきすさびけむ玉章と思ふものから戀しきやなぞ

見返事無字戀

跡もなきしら玉章は開きみてけふも涙にかきくれよとや

濱千鳥跡なきにこそ知られけれいはむかたなき人のつらさは

夕戀

夕暮を物おもはしき時ぞとはうき人よりぞ習ひそめつる

夜戀

白露のよるはすがらにおきゐつゝ物思ふみといかでなりけむ

よひのまは待つに心もなぐさみぬ更けてぞ戀はくるしかりける

不逢夜戀

かへりにし人は道にやながむらむねやにさしいる有明の月

依淚顯戀

何故にぬるゝ袖ぞといはれしやよに顯はるゝはじめなりけむ

名所戀

○音なしの瀧　山城國愛宕郡にある。詞花集「戀ひわびてひとりふせやに夜もすがら落つる涙や音無しの瀧」

○つらゝ　つらさと氷柱とをかけていふ。

我が身こそ淺間のたけよ世と共に人を思ひの絶えまなければ

戀枕

音なしの瀧とやいはむ戀ひ侘びて枕におつるよはの涙は

秋戀

いつとても寂しからずはあらねども君こぬよはの荻の上かぜ

たなばたはあふべき秋になりぬれど我が中川はわたるせもなし

身をつめばあはれとぞおもふ淺茅生にたれ松蟲ぞ聲の絶えぬは

冬戀

夜をかさねむすぶ氷のとけがたき人の心をいかにしらまし

あられふりさむき此の夜を君こずば獨りやねなむ衣かたしき

打ちとけてぬるよあらずば白雪のつもる思ひをいかにはるけむ

降りつもる雪をかごとに訪ひこぬはとけぬ心をみするなりけり

日にそへて君がつらゝのそひ行くは打ちとけじとの心なるらむ

つれなかりける人のもとへ

恨みつゝ戀ひつゝよをば過ぎねとやたのむる暮も人の音せぬ

山寺にこもりて日頃侍りて女のもとにいひつかはしける

山にても猶おもかげのはなれねば獨りはすまぬ心ちこそすれ

寄月戀

宵のまに山のは出でし月影の西になるまでとはぬ君かな

君くやとねやの妻戸を明けおきて待つよの空に月は出でさぬ

寄風戀

秋風の吹くにつけても悲しきは音せぬ人の心なりけり

寄水戀

つらき世にあはましよりは涙川ながるゝ水のありと消えばや

寄川戀

流れてと何たのみけむ涙川さばかり淺き人のこゝろを

寄海戀

いせの海の千尋の底にありときく其のみるめこそからまほしけれ

我が中は松浦の海もへだてぬをもろこしばかり遠くなりぬる

寄蟲戀

秋深み夜每にかるゝ蟲のねの絶え〳〵にのみなれる君かな

寄鳥戀

冬河のせゞに氷れゐるあしかものうきて物思ふ我や何なり

寄鶴戀

あしたづのひとり澤邊にねをぞ鳴く雲ゐに遠き人をこふとて

寄催馬樂戀

おもふてふことたがはずばよしや其のあし垣ま垣へだて有りとも

寄面影戀

面影のみをし離れぬ君なればつれなきものの逢はぬ日ぞなき

忘れてもあらましものをともすればなど俤に人のみゆらむ

寄名所戀

からさきの松にいくよか過しきぬ君にあふみの海はなくして

末終に君にあふみの海なくばみるめなきをも何か恨みむ

折にふれてよめる

瀧の川上なる畑におふる麥のほにあらはれていつか逢ひみむ

すみだ川堤のをちにほのみゆるをつくばのねに鳴かぬ日ぞなき

早川のさゞれもとらばとりぬべしあなとりがたの妹が心や

山川のいはせさばしるはやのこのこまかにものを思ふ頃かな

○寄催馬樂戀の歌　催馬樂の葦垣に「あしがきまがきかきわけてふこすおひこすとはれおひこすとはれ」

○ほにあらはれて　忍び〳〵で無く。おもてだつて。

○すみだ川　一句二句三句四句皆ねといはんための序詞。

○はや　はえ鰷。

さる澤のいけるかひなきみにしあれば我も玉もや行きてかづかむ
なかく〳〵にいすかのはしの行きちがひあはずばあはで物もおもはじ

柳園家集下

雜之部

○雜之部は實感を主とせるものと見え、上の卷の題詠の色彩濃く單調平板なるに比して稍まさつてゐる。

遠山雲

一むらの雲にかくれてわかねどもかの山のはやちゝぶなるらむ

箱根山明け行く岑の浮雲やよのまの雨のなごりなるらむ

瀧

高ねよりおちくる瀧は白雲のやへかさなれる心ちこそすれ

名所瀧

遙かにも落ちくる瀧か那智の山其の水上は雲にかくれて

舟中眺望

いつのまに舟より跡に成りぬらむほのかにみえし磯の松原

河水流清

かくばかり水底ふかき谷河の底のさゞれのいかでみゆらむ

海

あま小舟今や浦わにかへるらむ沖つ白波高くなりきぬ

海邊眺望

海人のやくもしほの煙よこほれて嵐になりぬ磯のまつ原

海眺望

沖つ舟湊さしてやいりくらむ今こそそれとまほにみえけれ

行路橋

かへりみて思ひわたすもあやふきをいかで過ぎけむ谷のかけ橋

閑居

世とともに人は音せぬ宿なれば松の嵐ぬぞ友となりる

山家

山陰や筧の水の一筋におもひ捨てたる世こそ安けれ

山家暮嵐

けふも亦夕山おろしおろしきぬ軒ばの松もたわむばかりに

山家送年

雲とづる山の下いほさびしさも馴るればなれて年ぞへにける

谷の水松の嵐も聞きなれて耳にさはらず年もへにけり

池上松久

池水の岸に年ふるそなれ松そなれていくよかげのみゆらむ

松影映池

千とせまで住むべき池の水なれば松もかげをややどし初めけむ

松不知年

なれて住むたづこそしらめ高砂の尾上にたてる松のよはひは

竹不改色

いつみても見てもかはらぬ呉竹の色こそ千代のしるしなりけれ

つゑ

いつのまに杖つくばかりなりぬらむ老は足ときものにざりける

かゞみ

我ならで人もあらぬを誰ならむかゞみの影にみゆる翁は

茶

宇治山のこのめを烹るにしくぞなき花のむしろも月のむしろも

旅宿嵐

嵐吹く山下庵にやどる夜はとけて夢をもむすばざりけり

旅宿夢

今日も又同じ山ぢとおどろきてさむれば夢に越えしなりけり

旅宿風

吹きかはるよはのおひてに湊舟とまりもあへずまほやあぐらむ

弘前君の馬のはなむけによみて奉る

君が世は末ひろさきに行きかへりかへりきませよ千代もかはらで

まち子が駿河國へ行く別れに

今よりは雲ゐに遠き不二のねを君があたりとみつゝ忍ばむ

妙玄寺義門法師が故郷の小濱へ歸らむとするにまたとはえこじなどいふに

おもひやれ又もあひみむ別れだに別れとなればをしき習ひを

播磨國曾根村社司陸奥守直継が故郷へかへらむとする別れに歌ひとつとこふに

家にても暑さたへうき六月に野越え山越え君は行くらむ

伊豫國松山人石井義郷よりせうそこおこせけるかへりごとせざりければ文の便りに「玉づさの行きかふみちはかはらじをおぼつかなくてすぐる

るころかな」と有りけるかへし

忘れぬと君やおもひに思ふらむこと繁くしてとはぬそのまも

富士

けぬが上にふりかさなりて神代よりいくへになりぬ不二の白雪

神祇

千早振神のみまへの榊葉に月の白ゆふかけぬよぞなき

冬神祇

霜ふれどふれどかはらぬ榊葉の常磐や神の心なるらむ

述懐

世の中をおもひわたせば何事も唯うたゝねの夢の浮橋

世を捨てて山へといふは人毎に心の奥の淺きなりけり

閑居述懐

さびしきも何かはとはむ椎が本もとより世をばのがれこしみぞ

寄花懐舊　西行上人六百五十回忌

願はくといひけむ君が言のはを花の陰にて忍ぶ春かな

本莊道貫君伏見におはするころ御歌どもみせにおこせ給へる中に母君の

〔願はくといひけむ〕山家集に「願はくは花の下にて春死なむその如月の望月の頃」

七とせの忌にあたらせ給ふとて「こしかたをしのぶるけふはなく蟬も我がみの外のものとやはみる」とありけるかたへにかいつけて參らせたる

はゝそ原ちりし昔の夕霧や猶このもとにかわかざるらむ

福島行途二月の朔日みまかりぬるよしまな子より知らせおこせけるにをとつひきたりけるをとおもふに

おどろきて淚もこそはなかりけれあまりといへば夢のよの中

三月二十七日あふみの國水口人池本鴨眠みまかりけるよし告げおこせければ

あはずして別れし人のかなしきは面影にだにみえぬなりけり

青木義處ぬしのもとより世つぎのはたちにあまれる男の子うしなへるよしいひて「うき事の多かる世にもさきだちしこの別れこそかなしかりけれ」といひおこせけるに打ちおどろかれてまな子幸和をうしなひしことなどおもひ出でられていとかなしさに

身をつめば君が上こそ悲しけれこは〳〵いかに夢のよの中

母君いまさしよには幸和まだみつばかりにていとかなしき物にしたまひしを此の年ごろ公に出でつかうまつり年いと若くてなり出づる度每にあ

○君まさばの歌　沈痛なる想出といふことが出來る。

はれ世にいませましかばとこゝろのうちにたゆる事なうしのびつるをこ
とし五月五日幸和十九にてみまかりしかば袂の露かわくまもあらぬに此
の神無月十九日は母君はや十七回忌にあたりたまへれば香たき花奉りな
どすとて

君まさばまさばとこそは思ひしかなきが嬉しき年もありけり

ある人なきちゝはゝのうたどもあつめてうたをこひけるに

木のもとに散り殘りたる言のははは朽ちせぬよゝの形見ならまし

村田芳樹尼みまかりけるころ其の子春路がもとにつかはしける

言のはを只ありしよの形見にてなき人こひむ君ぞ悲しき

村井因篤が身まかりけるころ兄の尙德がもとにいひつかはしける

いかならむ君が心よ餘所にだにその夢ごゝち今も覺めぬを

おなじ人の墓にまうでて花を手向くとて

君にけふたむくべしとはおもひきやしきみが露に袖をぬらして

おなじ人の一周の忌に

めぐりくる月日はもとの月日にて人は昔となるがかなしさ

折にふれたる

（紀朝臣　貫之。

軒端なる松のあらしのあやしきは心のちりを拂ふなりけり

朝日かゞやきたる空に龍の登れるところ

雲ゐまでのぼるを見ればおもひたつことの成らぬはあらぬなりけり

空に啼く鶴をききたる所

あしたづの過ぐる雲ゐは遠けれど聲のさやかに聞ゆなるかな

古松のかた

千世やへしちよや經さらむ知らねども年の高さはまづぞ見えける

紀朝臣梅をもたまへるかた

手折りけむ其の故郷の梅の花遠き世にさへかをりぬるかな

老木梅のかた

こけ蒸して年をふる木の梅なれどふりせぬものは匂ひなりけり

秋野のかた

秋の花いろことごとに匂へども寂しき色はひとつなりけり

馬にのりたる人秋の野を行く

秋の野は駒うちいれむかたぞなき尾花の波に道をへだてて

をかべに鹿のたてるかた

花すゝきほにあらはれてさを鹿の妻とふ頃ぞ秋は寂しき

水のほとりに紅葉あるかた

水底にうつるを見ればもみぢ葉のともに深くぞ秋はなりぬる

蔦のもみぢしたる所

つたかづらもみづる見ればいつしかと秋の色こそ深くなりぬれ

女どもの紅葉ひろへる所

手もたゆくなりぬべきかな山風のさそふ紅葉の限りなければ

すみ田川汀のあしうらがれて月のさしたるかた

隅田川汀のあしもうら枯れて月影さむくなりにけるかな

十二月人行きて梅を見る

鶯はしらでや谷にこもるらむ梅ほころぶる野べのけしきも

水鉢に金魚はなちたる所

水無月の照る日をよそにすむ魚の涼しき心みえもするかな

職人盡矢師の矢作げるかた

よそめにはすぐなるしのも曲りけり心もかくぞたむべかりける

遊　女

よの中のうきせにあひて沈む身をたれうかれめと名付けそめけむ

紀朝臣

歌のさまひとの心のひとことに顯はれけりな君がをしへは

○歌のさまひとの心の　古今集序の「やまと歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける」をさす。

松久友

いつみてもかはらぬ色の松をこそ千代の友とはいふべかりけれ

對松爭齡

明けくれに見つゝしふれば軒端なる松も友とやわれをみるらむ

水石歷幾年

世とともに流れ〳〵て山河のいはねの清水いく世へぬらむ

足引の山の岩ねの岩清水ともにいくよとしる人のなき

春祝

春の野に生ふる小松のちよを皆君がよはひの數に引かばや

月前祝

山のはの松より出づる月影やちよもかはらぬ光なるらむ

冬祝

君が代を永井の浦の友千鳥ともにちよとや鳴きかはすらむ

寄梅祝

いく春もかはらで匂へ梅の花くる年毎に折りてかざさむ

寄鶴祝

此の宿にちよをゆづるの聲なれや雲ゐ遙かに聞えわたるは

寄龜祝

萬代を心のまゝに住みぬべき龜のたぐひの君とこそみれ

旋頭歌

鶯

鶯の初こゑすなり園の梢にうめ柳いづれなるらむそのの梢に

香をとめて日ごとに軒にきなく鶯梅の花ちりなむのちも來なけ鶯

明けくれに日毎にたのし庭の鶯青柳に梅にうつりて鳴かぬ日もなし

花

いざさらばひさご携へ山路あそばむ花盛りみつゝ飲みつゝ山路あそばむ

依花待友

おもへども人しとはねば庭の櫻を我ひとりあはれといひてけふも暮しつ

○香をとめて　香を尋ねて。

静見花

しのばずの池の上野の花のしら雲けふみればさかりになりぬ花のしら雲

海邊春月

青柳の枝もうごかぬ春の此の日を花みつゝあそぶもうれし春のこの日を

山路雉

けひの海にはよしとてやあまの出でけむほの〴〵と霞む月夜に楫の音する

暮春聞郭公

初わらび折るおもしろき春の山ぢにきゞすさへしば〳〵なきぬ春の山ぢに

谷新樹

ほとゝぎす啼きてすぐるは夢かあらぬか彌生山まだ花ちりて程もへなくに

薪こる音はすれども若葉しげりて谷底にありとも見えずましばこる人

いくへともわかぬ若葉の陰となりにき谷川のした行くし水音はきこえて

見おろせど軒端もみえず谷の下庵おひしげりしげる若葉の陰にかくれて

うつぎ

花ちりて若葉になりぬ夏の山べは時鳥啼きもやすると待たるばかりに

垣卯花

○けひの海　敦賀の浦の別名。

雪とみえて月とまがへば垣のうの花いつなかは花とはみまし垣のうのはな

薄暮卯花

月夜よし夜よしといひて庭のうの花くれはてば人にやみせむ庭のうのはな

待郭公

郭公一聲なけや更けぬそのまに夕月の入りはてぬまに更けぬそのまに

郭公今やとみゆるくものさまかな薄墨のゆふべの空に月も匂ひて

待客聞郭公

郭公道に聞きつと來てやかたらむ待つ人はわが山よりとおもひ知らずて

樗誰家

あふちかも何そもをちのかやが軒ばに紫の雲こそかゝれかやが軒端に

曳菖蒲

あやめ艸ひけば沼江の水もかをりぬおりたちて濡らすもすそも袖も薫りぬ

連夜鵜河

大ゐ川う船の篝しげくなりにき明日のよは又もやそはむこのもかのもに

瀧下螢

落ちたぎちたぎつせごとに螢亂れて暮れゆけば涼しくも有るかほたる亂れて

水上夏月

さらでだに夕涼しき庭のいづみにいつしかと月こそ宿れ庭のいづみに

深山泉

山深くなりぬるまゝに松の嵐も岩つたふ清水もさむきこゝちこそすれ

水風涼

よしの川岩きり通したぎちゆく水夕さればいよ〳〵涼したぎちゆく水

草花先秋

八千草の花のいろ〳〵秋はあらめどめづらしな夏の末野のを花くず花

草花

花すゝきまねくかたのに我はきにけり露わけて衣手ぬれて我は来にけり

月

秋のよを長しといふは月をみぬ人月みればたちまち更けぬ飽かぬそのまに

山のはにいまこそ月のかげはほのめけ今かわが軒端の松のこのまもりこむ

月宿松

沖つ波立ちはなれてや月のいでぬる濱まつの松のこのまに影のさしくる

松間月

○いそぶり　磯邊に寄する波。

やみなりし岑の松ばらこのまあかりぬやう〳〵に月さし出でてこのまあかりぬ

月前鴈

雲晴れて月にふこたふ鴈の一つら聲なくばくもとや見ましかりの一つら

雨中鹿

こえくれば尾上に鹿の聲ぞきこゆる村雨のふるをわびしとつまやこふらむ

磯紅葉

いそぶりの寄するいそわの磯のもみぢばいそぎいざ磯に舟よせいそぎおりみむ

時雨

しぐるゝか山路の夕日消えもあへぬを一むらの雲こそなびけみねのまつ原

行路時雨

むらしぐれはれまを松の陰やたのまむ見るがうちに山路のすゑは日かけさしきぬ

十月紅葉

あま小舟はつせの山の岑のもみぢば冬さればこがれぞまさる峯のもみぢば

紅葉殘枝

かつ〳〵も殘るは嬉し庭のもみぢ葉木枯のをやむまもなく吹きにふきしを

寒菊

霜しろきくちばの庭に朝日匂ひて冬菊のさけるもあはれ朝日にほひて

寒松

木枯はふけどもふけど霜は置けども雪ふれどつもれど松はいろの常なる

ときはともときはに松の榮え行くかな霜雪にあへどもあへど色もかはらで

海冬月

海人のすむ磯のとまやのひさしましろに霜降りて更けゆくよはに月さてりたる

千鳥

明石がたせとむらがりて渡る千鳥のみをまゝに舟よりをちに聲のなりぬる

雪中客來

白雪のふりはへきたる友ぞ嬉しき諸共にいささは飲みて醉ひてかたらむ

社頭雪

神垣のさかきもたわにふれる白雪おもしろと神や見るらむ降れるしら雪

閑居雪

よしさらばつもりにつもれ庭の白雪ふみ分けてとひ來む人もあらぬ庵そ

雪與歳深

年くれぬくれぬと思ひすぐす其のまに白雪もともに深くぞ今はなりぬる

冬旅

いざけふもいそぎて行かむくれぬ其のまに冬の日の落ちはてぬまに暮れぬそのまに

向燈火

埋火にさしむかひゐて思ふ友どちかきくつし語るもたのしくるゝ夜毎に

早梅

梅の花とくほころびて匂ひそめにきかぞふればまだ春とほき庭のかきねに

山家嵐

軒の雲晴れぬとみれば峯の松原いつしかと嵐になりぬみねのまつ原

暮山雲

夕まぐれかへるきこりの聲はすれども棚曳きて雲こそかくせ山のかけみち

望走帆

眞帆上げて今か出でしを沖の波まに絶え〴〵にほのかになりぬ沖の波まに

茄子の圖

いつのまにかくなりにけむ思ふそのこと一口だになすびなくしてわれはすゞすを

今様

早春

をつくばのねを見わたせば　いまだ春ともしら雪の　かすみのうちにあらはれて　すみだ川原は風寒し

年内早梅

うめのさけるは春ながら　雲のけしきぞはるならぬ　ことわりなれやうぐひすの　谷よりいでてきなかぬこと

柳に鶯のかた

柳が枝にうぐひすの　うちとけてなく聲きけば　かきねの雪のむら消えものこるかたこそなかりけれ

静の今様まひたるかた

しづのをだまきくりかへし　昔を今とうたひけむ　そのよのさまは知らねども　おもひやるこそあはれなれ

長歌

春到管絃中

としあけぬ　春はきたりぬ　やまの端は　霞やたたむ　河のせは　水やぬるまむ　かきならす　玉琴の音に　ふきならす　笛の其のねに　山見ねど　山のけしきも　河みねど　河のけしきも　おのづから　うかびにけりな　長閑なる　その絲竹の　春のしらべに

春鶯呼客

鶯の　宿は此のたに　其の谷の　鄰をしめて　つくりたる　庵のうれしさ　たのしさは　春もまだきに　其の鳥の　谷より出でて　此のいほの　軒端の梅に　朝となく　夕とわかず　咲きしより　口毎になけば　ききつたへ　いひ傳へつゝ　都人　はたぐ\とひく　年毎に　春としいへば　初音ききにと

反歌

鶯の宿を鄰の宿なれば春はかならず人にとはれつ

○あかつきをおぼえぬ　孟浩然の詩「春眠不レ覺レ曉。處處聞二啼鳥一。夜來風雨聲。花落知多少。」

依風知梅

あかつきを　おぼえぬころの　春のその　ねぶりもしらぬ　老が身は　あけぬとつぐる　かねよりも　かねて寐覺めて　いつしかと　しらむを待つに　朝がらす　啼きてわたれば　嬉しやと　あさどあくるに　おもほえず　梅かをりきぬ　ながむれど　見れどかきにも　のきばにも　いまだ咲かぬを　はる風の　たがやどよりか　さそひきぬらむ

河邊花

咲きつゞく　河邊のさくら　咲きみだれ　亂るゝころは　明けくれに　舟こそこぞれ　朝夕に　人こそつどへ　みな人は　舟路遊べど　いざわれは　かちより行きて　咲きにさく　堤の櫻　ながめつゝ　みつゝめでつゝ　かけにあそばむ

花處々

梓弓　やよひのそらは　うら〳〵と　霞たな引き　のも山も　なべてあはれを　山ゆけば　雲とみるまで　野べゆけば　雪とみるまで　たゞ一日　ふつかのほどに　のも山も　花咲きにけり　いかでみを　わくるよしもが　山邊ゆき　野べゆき花を　みつゝ遊ばむ

○おこたりて　病やゝ癒えて。

天保十とせのやよひばかりやまひの牀にふせりてあかしくらすによもの花やゝ盛りなるよしいへば道行く人のあしおと聞くにもはらだたしくて

よめる長歌みじかうた

長閑なる　春の日頃を　人ごとに　おもひ立ちつゝ　とぶ鳥の　あすかの山の　やまざくら　昨日にけふは　まさりぬと　みてやめづらむ　行く水の　隅田川原の　さくら花　堤ゆきかひ　たのしとや　みつゝ遊ばむ　しかばかり　人はたのしむ　一とせに　まれとも稀の　うらゝけき　春のやよひの　いとゞしく　をしともをしき　此のごろの　花の日数を　いたづらに　ねてし暮せば　うつゝには　面影うかび　まどろめば　夢にぞみゆる　いかにせむ　いかにかせまし　おこたりて　わがみにゆかば　いづかたも　花ちりはてて　おほかたは　若葉やささむ　うたてこの　病のやつこ　我にしも　花をみせぬは　何のあたぞも

反歌

花をのみおもひくらせば鶯の啼くねも耳にいらぬなりけり

春海

沖みれば　霞わたりぬ　へたみれば　白波よせく　淺みどり　霞をわけて

○つらゝに　連なりて、竝びて。

しらなみの　たてるゆふべの　入日さす　浦よりをちに　あ引きする　海士の其の舟　つりたるゝ　あまのその舟　いつのまに　霞そひつゝ　いつのまに　夕日かげろひ　やう〳〵に　沖よりくれて　見えずなりけむ

反　歌

波のうへにつらゝにみえしあま小舟又いさり火にあらはれにけり

春　興

はるの野は　道ぞゆかれぬ　右ひだり　すみれ花咲き　初わらび　おひまじりけり　すみれ草　つまむとすれば　行くさきに　雲雀啼きたち　はつわらび　折らむとすれば　こし跡に　鶯なきて　おもしろみ　聞きすてがたみ　道ぞゆかれぬ

暮春鶯

梅さくら　そよぐ若葉の　葉隱れに　きゐる鶯　昨日かも　まつ咲く軒の　梅が枝に　きつゝなきしを　あはれその　梅もちり過ぎ　いまははや　櫻もちりぬ　鶯よ　やようぐひすよ　なれだにも　木傳ひなきて　今さらに　谷へな行きそ　春はくるとも

首夏風

折にふれ　めづるはこゝろ　時につけ　かはるは心　こゝろこそ　定めもあらぬ　三月山（やよひやま）　花咲くころは　花故に　いとひし風を　夏たちて　しけりあへれば　ふきわたる　色を涼しみ　めづらしと　待ちこそむかへ　そよぐ若葉に

反歌

吹く風やいかに嬉しとおもふらむ若葉にかはる人の心を

送春如昨日

あら玉の　としたちかへり　はるきぬと　いひしは昨日　おもふどち　若なつみにと　春の野に　出でしも昨日　鶯の　うめのほつえに　はつ聲を　なきしも昨日　梅ちりて　櫻咲きつぎ　その陰に　ゑひしも昨日　馬なべて　野行き山行き　たはれしは　あはれ昨日を　ほとゝぎす　聞きがてら　おそざくら　それもみがてら　おもふどち　又打ちむれて　けふくれば　わかばになりぬ　おしなべて　みどりになりぬ　野路も山路も

新樹

むつきたち　咲きしその梅　さしつぎて　匂ひしさくら　おそくとく　花こそさけれ　いつしかと　二月（きさらぎ）やよひ　その花の　さきの盛りも　夢のごと

○ほつえ　上方の枝、秀つ枝の義。
○馬なべて　馬をならべて。

あとなくすぎて　みつ枝さし　若葉になりぬ　梅さくら　ひとつになりぬ　あはれこのごろ

反歌

梅櫻ちりていくかになりぬらむ若葉がくれにみへ結びぬ

卯花

うの花は　あやしきものぞ　時ならず　雪をふらしめ　闇のよに　月をてらさせ　その雪も　垣ねばかりぞ　その月も　とをは照らさず　あやしとも　あやしきものは　かきのうの花

追夜待郭公

むらさめの　そゝぐその夜も　月かけの　清きその夜も　よもすがら　おきゐあかして　よひとなく　曉となく　かくばかり　待つなるものを　ほとゝぎす　などかつれなき　むらさめの　ふりはへとひて　月かけの　さやかにをなけ　よをかさね　まちこし心　空にしりなば

遠山郭公

しら雲の　うきたつ山の　なつ山の　青葉の山を　此のあさけ　はるかにみれば　しらくもの　うきたつ中に　ほとゝぎす　まじりやしつる　あまたた

○さやかにをなけ「を」は歎辭。

びなくとはすれど　なく聲の　きこえはくれど　それとみえぬは

閑居郭公

おひしげる　青葉がくれに　ありとだに　わかぬばかりの　人しれぬ　いほにしあれば　卯の花の　咲きもあへぬに　おそざくら　ちりもあへぬに　ほとゝぎす　まづこそきなけ　しのび〳〵に

早苗

ほとゝぎす　きなくさ月の　さみだれの　雲まみえそめ　あさ日かげ　田づらにさせば　めづらしく　嬉しとや思ふ　をちこちに　苗かはこばせ　ゆひやとひ　おのれもになひ　あぜごとに　つかねおければ　しづをらは　をとめがともと　をとめらは　しづをがともと　歌うたひ　すげの小笠き　打ちむれて　きほひぞ植うる　このもかのもに

瀧五月雨

けふいくか　はれせぬ雲ぞ　いつまでか　ふる五月雨ぞ　あしびきの　山下たぎつ　岩なみの　音もとゞろに　とゞろきて　みなわさかまき　行くもおそろし

反歌

○むやひ　舫、舟をつなぐこと。

八重とづる山のあま雲いつ晴れていつか朝日の影はみるべき

旅舟五月雨

むやひして　日頃しふれば　いざけふは　はれもはれずも　つなでとき　舟出せましと　眞帆あげて　湊いづれは　おひかぜよ　いよ〱吹きぬ　さみだれは　雲はれ初めぬ　けふしこそ　心にのりて　舟はやりてめ

螢

そらはまだ　暮れもあへぬに　をちこちの　河せ　まこも　おひしける　あしのはがくれ　ひとつみえ　ふたつあらはれ　時のまに　くれ行くまゝに　河せみな　螢になれば　里の子の　おくれ先だち　うちきほひ　きほひ出できて　とびちがふ　螢たかると　さゝばもち　うちは手に持ち　いり亂れ　亂れぞあそぶ　河邊傳ひに

水路夏月

みな月の　照る日をさくと　たへがたき　暑さをよくと　おもふどち　舟こぎくれば　すみだ川　清き河瀨の　みなかみの　堤のかげの　しらひげの　もりのこのまに　やゝ〱に　あらはれ初めて　波のへに　やどれる月の　かげの涼しさ

反歌

久方の月の都はしらねども隅田川原は秋風ぞふく

夏筵

我が宿の　そともにしける　ならのはの　其の下かげの　かげをふみ　むしろひろげて　こゝにしく　ところはなしと　ほこらしく　人よびつどへ　このゆふべ　まどゐをすれば　みな月の　照る日のなごり　たれも皆　忘られはてつ　秋風の　しのびくに　吹きし落つれば

反歌

ならのはのそよぐばかりも涼しきを袂に風の落ちぬまぞなき

對泉忘夏

おひしげる　松の木陰の　いはがねを　傳ふま清水　その水の　いはばしる音　打ちさらし　さらし行く音　明暮に　涼しくもあるか　松の木陰は

立秋

ふもぎふは　いつとわかねど　秋のくる　けふのゆふべよ　などてかく　寂しかるらむ　ほに出でぬ　まがきの薄　つゆおかぬ　苔のかよひ路　みるごとに　あはれぞまさる　秋のくるより

○金韻　秋のおもむき。

金韻忽生殘暑盡

我がやどの　軒の下荻　うちそよぎ　そよぎたてれば　袂にも　涼しきかもよ　にはかにも　はだ寒しもよ　秋かぜは　いかなる風ぞ　土さけて　照り渡りぬる　みな月の　暑さのなごり　時のまに　はや消えはてぬ　吹きもあへぬに

感思在秋天

晴れぬれば　いつもみどりを　などてかく　同じみどりの　空の色の　秋としいへば　身にしみて　さびしかるらむ　みるからに　悲しかるらむ　ものおもふ　われとはなしに　しら雲の　なびくをみても　とぶ鳥の　すぐるをみても　ともすれば　涙おちけり　あやしとも　あやしきものは　秋のけしきぞ

秋日郊行

くる人の　たれめでざらむ　眞葛はふ　野べのけしきよ　もゝ草の　花咲くのべよ　わけくれど　くれどもゝ草　ゆきゆけど　ゆけどやち草　たをるとも　手折りもつきじ　かざすとも　かさしもあへじ　秋の野は　今こそさかり　千艸もゝ艸

反歌

花みつゝ野邊にくれなば色々の蟲の聲をも聞きてかへらむ

田家蟲

あぜづたひ　つたふ細道　くろづたひ　すぐるかよひ路　むら／＼に　薄はに出で　さびしきは　門田の秋ぞ　しづけきは　田中の庵ぞ　たえ／＼に　薄霧なびき　やゝ／＼に　暮れ渡る頃　垣根にも　くろにも蟲の　遠近に　やゝ啼き立ちて　しら露の　おくての稻の　ほの／＼と　霧に匂へる　月かげの　さやかに聲の　なりも行くかな

反歌

暮れはてゝ月になり行く小山田は蟲の聲さへすみ渡りけり

旅宿聞鹿

ねざめても　さめてもすごき　足びきの　山のあらしに　たぐひくる　鹿の啼く音は　草枕　たびねの牀に　露をしも　さぞひやすらめ　きく度に　ぬれこそまされ　袖もしとゞに

初鴈

やたの野の　淺ぢ色づき　あらち山　みねの薄霧　たえ／＼に　棚引きき

○あらち山　愛發山、敦賀郡愛發村と近江の國との界にあり。愛發關あり。

れて　秋風の　寒き夕に　かりがねの　來たるも寂し　つばさ亂れて

反歌

あらち山峯とびこゆるかりがねの羽風に霧や晴れわたるらむ

霧中初鴈

山の端も　わかぬばかりに　ふもと川も　みえぬばかりに　夕ぎりの　八重立ちこめて　そことだに　わかれぬものを　いかにして　鴈はきぬらむ　山こえて　ふもとの小田に　聲の落ちくる

富山君の月見のつどひに明月如晝といふ事をよめる

しら雲の　上野の岳の　木のまより　月ほの見えて　やゝ〳〵に　かけさしくれば　しのばずの　池の遠こち　さゞ波の　よるともみえず　中島の　神の宮居も　あらはれて　さやけくも有るか　みゆるけしきの

擣衣幽

秋風の　寒き夕の　花すゝき　まねく野末の　その遠の　山もとなれや　その遠の　ふせ廬なれや　きえ殘る　霧のあなたに　たえ〴〵に　有るかなきかに　衣うつ　音こそすなれ　やゝ〳〵に　みる〳〵くるゝ　秋の野末に

凌雲院にまかりける時前栽の菊を見て

もがのもに　きくといふ　菊を植ゑなべ　いつしかと　待ちけむ君よ　いかばかり　うれしかるらむ　いかにこは　たのしからまし　やゝ〳〵に　ほころび初めて　白妙に　から紅に　さま〴〵に　匂ふ此の菊　長月の　長き盛りを　あけくれに　みるともあかじ　にほふ此のきく

暮秋

野も山も　しぐれ〳〵て　山みれば　梢いろづき　のべみれば　下草うつろひ　日にそへて　寒くしなれば　廬ちかく　啼く蟲の音も　かれ〴〵に　いつしかなりて　長月と　名におふ月も　手を折りて　かぞふるばかり　いまはなりぬる

河上落葉

しば人の　わたる柴橋　しば〳〵に　木がらし渡り　しば〳〵に　木の葉ちれれば　ゆく水の　音ばかりして　木がらしの　わたるたび〳〵　谷川は　埋もれはてぬ　この葉みだれて

寒庭霜

庭みれば　眞萩いろさり　池みれば　鴨ぞむれゐる　いつのまに　眞萩はか

れぬ　いつのまに　鳴はきぬらむ　きのふかも　おもふ友どち　花みつゝ
まどゐはせしを　けさみれば　置く霜白し　庭の萩原

連日雪

雪ふりぬ　雪ふりつみぬ　をとつひも　きのふもけふも　野も山も　わかぬ
ばかりの　大雪に　道こそなけれ　越ならば　橇にやのらむ　をとつひも
昨日も今日も　はれまなければ

寄郭公戀

物おもふ　宿とやしらぬ　聲きけば　こひしきものを　あやにくに　我が軒
ちかく　たえまなく　鳴きてすぐれば　たちばなの　香やなつかしき　よし
やその　香はとめくとも　我にさは　聲なきかせそ　ほとゝぎす　聲きく毎
に　戀のまされば

聲きけば戀の増るを郭公いかにせよとか啼きわたるらむ

弘化二年二月二十八日こたびあらたに作らせ給へる大城のみとのにうつら
せ給ふをほぎ奉りてよめる

國々の　山といふ山　はやしてふ　林をつくし　いしをさへ　きりに切り出
し　舟路より　かちより運び　天のした　千萬人の　あけたてば　大城への

○たり日　よき日。

ほり　くれゆけば　大城をくだり　明暮に　いこふことなく　土はこび　土
置きならし　石みがき　石すゑ渡し　たくみらは　きほひのゝしり　おのが
じゝ　むなぎ組みたて　おのがじゝ　木を切りけづり　すみ縄の　たゞ一筋
に　たゆみなく　いそぎにいそぎ　たてわたす　それの大殿　みがきなす
その大みとの　きさらぎの　末の八日を　此の月の　よき日とさだめ　此の
月の　たり日とえらび　ひととせも　いまだへなくに　殿づくり　つくり渡
して　我がきみの　移ろひますを　きくがたふとさ

戸塚忠榮ぬしの庭につゞきて錦社といふ名所ありそれをよみてよとこは
れければ

たちよりし　誰めでざらむ　かけとひて　誰かみざらむ　神無月　時雨もま
たで　この森の　もみづるみれば　朝なさな　露や染めけむ　夕しもや　ま
だき置きつる　うべもげに　にしきにも有るか　名におへるごと

石井義卿が家の眺望いとおもしろしとてそを書かせて是れに歌ひとつと
ておこせければそのかたをみつゝおしあてによめる

伊豫の國　その松山の　君がすむ　家のみ渡し　まぢかきは　なぐりの社
石手川　まつのむら立　そのまつの　色の常磐に　さかえつゝ　千代にみる

べく　ながむべき　やどのそのさま　絵にかける　それだに有るを　雲のぼる　をちの山々　田神山　それにならびて　見え渡る　山やとび山　やまつづき　つゞくくま山　いよのねの　けしきいかにぞ　うらやまし　近くあらせば　をり〳〵に　我もとひつゝ　諸ともに　歌よまましを　まどゐして　あそびてましを　君がすむ　さとは松山　海山を　へだてて遠し　あはれその里

江邊問船子

いり江こぐ　やよや舟人　こぎかへり　こゝにをなせぬ　やよこゝに　とくを舟よせ　我のせて　こぎてを出でね　かのみゆる　島わのあたり　夕なぎに　みだれ出でたる　海士小舟　網引釣する　見てかへりこむ

只将琴作伴

つれ〴〵の　こゝろをやると　たておける　玉のを琴を　とらすれば　あした夕に　夜さへに　まづとり出でて　かきならし　ならす度々　軒端なる　松のあらしの　吹き落ちて　通ふもあはれ　玉のを琴に

反歌

たておける玉のをごとをしらぶるは軒端の松の嵐なりけり

○さゝめ　[illegible]草、又は席とする。

蓑

さくら花　咲きにさく頃　もみぢばの　照りにてる頃　春雨に　時雨にとり著　年を經て　とり著ならしし　これぞこの　雪のふるみの　雪みにと　野行き里行き　夏はまた　初ほとゝぎす　尋ねにと　水枝さしそふ　若葉山むらさめそゝぐ　折にさへきつ

反　歌

五月雨にさゝめの蓑はくだしにき又やとりきむ雪のふる蓑

富山君富山へかへり給ふ御別れによみてまゐらせける

ひととせは　いるやの如し　とし月は　只つかのまぞ　しかばかり　常はみじかく　いとゞしく　早き月日を　ほとゝぎす　なくやさ月に　今はとて君したちなば　立ちかへり　おはせむ頃を　いつしかと　のび折りかぞへとし月の　すぐるおそしと　待ちかわたらむ

佐倉君みつになり給へるひめ君をうしなひ給へるをとぶらひ參らすとて

常なきは　あはれよの常　はかなきは　あはれ世のさま　よのつねと　思ひはなせど　よのさまと　思ひはすれど　うつゝとも　おもひなされず　夢とのみ　たどられぬるを　あはれ君　そのいわけなき　そのさまの　面影うか

びうつゝとも　夢ともわかず　すゞろにや　悲しかるらむ　すゞろにや
袖しぼるらむ　あした夕に

弟北窗みまかりけるころよめる

北まどに　ふ机をすゑ　ふづくゑに　書(ふみ)おきならべ　をしへ子に　ふみよみ
をしへ　をしへ子に　ふみとさとし　明けくれに　ありこし昔は　なに事
を　いかに思ひて　をしへ子に　讀みもをしへず　をしへ子に　説きもさと
さず　よはひまだ　三十あまりを　長月の　二日といふに　旅だちて　いそ
ぎいにけむ　しでの山ぢへ

反うた

君まさで空しく殘る北窗ぞたゞありしよの形見なりける

幸和が一めぐりの忌に去年をしのぶあまりによめる

あはれ〳〵　夢とは此の世　うつゝとも　えぞ思ほえね　つれもなく　おも
ひ出でじと　明けくれに　おもへどおもひ　わすれむと　おもへばうかび
面かげの　めにしたえねば　夢のごと　まぼろしのごと　ともすれば　かた
へにありて　ありし世に　語らひしさま　ものいひて　ゑみしそのさま　い
けるよの如

○こがねにもたまにもまさる　萬葉集に「銀も黄金も玉も何せむにまされる寶子に如かめやも」

反歌

たへわびてとなふるみなの数々にこぼるゝものは涙なりけり

清水濱臣の十七回忌に秋懐舊といふ心をよめる

あはれ君　おはせし世には　しのばずの　池の汀の　さゞ波と　名におへる
やの　高どのに　月をあはれみ　思ふどち　まどゐをしつゝ　さかづきを
まづとり出でて　詠めつゝ　みつゝのみつゝ　遊びつゝ　ありけむものと
おもふにも　涙ぞ落つる　しのぶにも　物ぞかなしき　よの中の　常なきこ
とは　よの中の　常とおもへど　こよひしも　法のむしろに　まどゐして
月をしみれば　君ぞこひしき

反歌

君まさず池のさゞ波より〳〵にとはましものをなきが悲しさ

清水謙光男の子まうけたるを祝ひていひつかはしける

高さごの　尾上におふる　まつにこそ　君はあえけめ　ちよもたる　君はこ
もたり　二葉より　岩ねにおひて　うごきなく　ちよにねざせる　若松の
君は子もたり　よのなかに　寶はあれど　こがねにも　たまにもまさる　家
のつぎ　世のつぎえたり　なゝくさの　たからに増る　君は子もたり

反　歌

千世もたる君は子もたり家のつぎよのつぎえたり榮えつきなむ

谷村可順が母八十賀によめる

四十より　五十六十と　ひとごとに　いはふはあれど　なゝそぢは　世に稀なりと　むかしより　いひつぎくるを　そのよはひ　君は過して　まれとこく　齡のうへに　いま十とせ　やすくたもちて　よの人の　うらやみ願ふ　八十てふ　よはひみてれば　百とせと　只今ぞかし　いまよりは　千とせ萬代　かぎりなく　榮えにさかえ　君はましませ

鶴雲居にあそぶ

朝まだき　みどりの空に　白雲の　なびくをみれば　しらつるの　二むらみむら　まなづるの　よむら五むら　啼きつれて　むれわたりきて　大空を　かなたこなたへ　ゆきめぐり　めぐり遊びて　しら鶴の　啼きつれゆけば　まなづるの　行きかさなりて　啼きかはし　跡より跡に　つぎ／＼に　雲ゐはるかに　なりにけるかな

反　歌

啼きかはしむれ行くたづは大空に千世を重ねてみするなりけり

我が師姓は滋野名は幸典俗稱海野源兵衛、後に世をのがれて頭おろし遊翁と改めらる、庭に古き柳一もとあるにより柳園とよべり、歳六十にしてみまかり給ひぬ。人となり心正しくして世に諂はず、常に歌よむことを好みて上れるよの高きすがたを尊み、くだれる世の花やかなるさまに心をよせず、ただ眞心よりよみ出づるをむねとして、明暮ふるき世々の歌どもをとなへて、其のおもむきをえられたるのみならず、詞のはたらきてにをはのとゝのひくはしうおはしければ、天言活用圖五十音口訣などあらはし給へり。此の集のはし書に、歌はしらべのとゝのひをむねとすべし、しらべとゝのはぬは歌にあらずと大人のいはれしを、佐倉侍從君のしるさせ給へるごとく、歌は言葉の連なりゆくひゞきより、その趣のおのづからあらはれて聞ゆるものなればなり。古今集の序に、うたとのみ思ひてそのさましらぬなるべしとある、そのさまといへるもしらべなることをさとるべし。近き頃いにしへ學びさかりにひらけて、長歌もいにしへぶりによまむとて耳遠き上つ代の詞をもちゐる中に、ちかき世の言葉などもまじるはいかでか調べのとゝのふことあらむ、

心は今にして詞のみ古めかしくよむをいにしへぶりと思ふはひがごとなり。こはしひて古のさまに歌を作れるにておのづからよめるにあらず。萬葉集の歌はそのよのことばもて思ふ事を有りのまゝによめるなれば、そのさまならひよまむには今よめる歌の詞もて思ふことありのまゝによむべきなり。ことばは世々の移りゆくに隨ひかはるもあれど、たゞ古も今もかはらぬはしらべなれば、古きよのすなほにみやびやかなるすがたにならひ、詞のうるはしきを選びてよむべし。大人のよみ給ひける長うたは後のよのさまに思ふべけれど、かくよめるはかへりていにしへの歌のさまなり、ひらき見む人よく／＼味ひてさとり辨ふべし。年頃大人のよみ給へりし歌どもいと多かれど、みづからえらびおかれたる歌二卷あり、そを板にゑらせつるになむ。これらのことども、人々とはかりて專らものしつるは檢校履信一なり。

嘉永三年八月　藤原謙光識

柳園家集終

昭和十三年九月一日印刷
昭和十三年九月五日發行

（非賣品）

校註國歌大系
第十八卷

編輯者　中山泰昌

發行者　東京市神田區錦町一丁目五番地　小川菊松

印刷者　東京市板橋區志村町五番地　河合勝夫

印刷所　東京市板橋區志村町五番地　凸版印刷株式會社板橋工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目五番地　株式會社誠文堂新光社
電話神田　自二一二六番　至二一二九番
振替東京四五三四〇番

昭和四年八月十二日印刷・昭和四年八月十五日發行